

古
文
書

凡 例

- 一、本誌は、国分市に関する古文書類のうちから抜粹収録した。
- 一、資料の標題は原則として原資料に従った。ただし、標題がないものは編者が適宜標題を付した。
- 一、資料を読みやすくするため適宜句読点を付したが、編集の都合により一部を白文のままとした。
- 一、平仮名・片仮名は原資料どおりとし、変体仮名は平仮名に改めた。
- 一、「こ」「し」「け」「氏」等の合わせ字は、「こと」「こと」「トキ」「トモ」等に改めた。
- 一、明らかに誤字・脱字と思われるものは、右横の（ ）に漢字を入れ、疑義のある場合は（ママ）を付した。
- 一、漢字は原則として常用漢字を用いたが、棟札・固有名詞等は原本のままとした。
- 一、助詞の「而・江・茂・与・者」（て・え・も・と・は）は小文字の漢字で表し、ゝ（より）・ゞ（しめ）はそのままとした。
- 一、汚損・虫食いなどにより判読できない文字は□・「」で示した。
- 一、朱書きは『』で示した。
- 一、文書等に押された印は 印とした。

一 大隅国分寺再造碑文

大隅国分寺僧寺跡といわれる遺跡が、国分市中央一丁目にある。ここには平安末期の康治元年（一一四二）銘の六重石造層塔が立ち、国の重要文化財の指定を受けている。この層塔脇に、二基の石碑が立っている。

その一基は、六観音の石仏を彫り、まわりに国分寺再興の碑文を彫っている。石碑は永禄五年（一五六二）建立で、碑文は、清水きよみづの楞巖寺りょうがんじ十三世住僧近沢和尚の作である。これが本資料一の碑文である。

もう一基の石碑は、上部に石仏を彫り下面に碑文を彫ったものである。天正十年（一五八二）大願主洵脇讀岐守入道浄月斎の銘をもつ国分寺再造立の石碑である。これが、資料の二の碑文である。

大隅国分寺跡六観音石碑（左側面より背面・右側面へ）

再興 扶桑国西海路隅州

国分寺観音大士是以称正像者也同

堂宇之脇從古有六観音像紛碎中絶
歳久矣依之隣里信男信女豈堪視其
廃乎諸檀越励再造之志彫刻石像六
躰□之仰□依此善修国家豊饒
施主如意快樂常安常樂何疑有之
愿作草語長篇以聊述感應之情焉

百億毫光成妙術圍般变化現慈容
池邊楊柳枝交緑洞裡桃花簇々紅
塊雨霏々鋪瑞慶條風飄々布祥豊
碧杉鬱々普門境紫竹肅々圍室宮
所有罪障扶所有圓遍教往説圓遍
尚斯帝德幾千歳檀越庶民樂莫□
東北補陀岩窟聳西南弘誓海以深
大悲千眼思量外靈驗最明一念也

大願主 近澤叟當海

洵脇安純

浄行禪門

各々三十餘人

峇永祿五年壬戌仲春彼岸吉日作者誌

堂司比丘永匯敬白

国分寺再造立の碑

謹奉造立 大日本国西海道

隅州国分寺者古佛之靈地権

化之開基也然從伽藍草創以

来星霜歲久矣夫昔者大門鐘

樓七堂雖有之無于今依地趣

本堂亦朽故梁棟傾矣嗚呼有

觀音妙智力否爰藤氏安純企

再造立勘十方以遂本懷畢是

則天下太平国土豐饒家内安

穩徑路也 天正十年壬午二月日

大願主 洌脇讀岐入道淨月齊記之

碑の上部に觀音像がありその左側に

奉□□□觀音□□□の文字がある。

二 台明寺文書

二 台明寺文書

台明寺には、古代から中世・近世にかけての古文書が多数収蔵されており、「台明寺文書」と呼ばれている。

これらの古文書は、一部重要なものについては早く江戸時代藩記録所の手により、移管調査されており、残りのものについても廃仏毀釈の際、移送または廃棄されたものと思われ、現在は東京大学史料編纂所所蔵の島津家文書中に収められている。

特第二番箱（旧御番所二番箱）に二巻、他家箱に五巻、合わせて七巻がある。このうち平安時代のものが約二十通、鎌倉時代のものが約百三十通、計約百五十通で大半を占めている。これらは「島津家文書」一（『大日本古文書』家わけ第十六）および「鹿児島県史料」（薩藩旧記雑録前編）に採録されている。

なお、旧記雑録に収載されている台明寺文書は、ほとんど全部が伊地知季安の筆写によるものと考えられている。内容は青葉笛竹貢納に関する文書・台明寺の寺領保

護に関する文書・大隅正八幡宮執印行賢に関する文書・税所氏や武士集団との抗争に関する文書・田地寄進状・売券など、古代・中世の社会経済史料に富んでいる。

本資料編には、紙面の都合で旧記雑録収載の台明寺文書のうち、とくに本地域に関係の深いと思われるもの五十三通を抜粋して登載した。

台明寺の詳細については本誌上巻第一編第六章「大隅国と古代社寺」の項を参照されたい。

台明寺文書抄

鹿児島県史料旧記雑録より抜粋

台明寺文書抄目次

番号	古文書名	年号
1	大隅国司庁宣	長久二、十一(一〇四一)
2	大隅国符	〃四、八(一〇四三)
3	大隅国司庁宣	天喜三、七(一〇五五)
4	橘成友起請文	〃四、六(一〇五六)
5	宗岡重武田地売券	大治五、十二(一一三〇)
6	八幡正宮執印僧行賢寄進状	天承元、九(一一三一)
7	正宮執印僧行賢寄進状	康治元、九(一一四二)
8	大隅国留守所移案	平治元、七(一一五九)
9	大隅国台明寺住僧等解案	応保二、五(一一六二)
10	台明寺大衆等解	応保三、二(一一六三)
11	台明寺住僧等解案	嘉応元、十(一一六九)
12	台明寺住僧等解	承安三、十一(一一七三)
13	藏人所下文	建仁二、十(一二〇二)
14	権大進藤原某書状	建仁三、四(一二〇三)
15	島津忠久願文	建仁三、十(一二〇三)
16	藤原篤満田地売券	建暦元、七(一二一一)
17	沙弥正西田地寄進状	貞応元、九(一二二二)
18	僧寛明解状	嘉祿二、八(一二二六)
19	僧永範田地売券	寛喜三、十一(一二三一)
20	台明寺牒	仁治元、十(一二四〇)
21	肥後入道某書下	仁治二、九(一二四一)
22	定重料田寄進状	寛元元、九(一二四三)
23	郎弁発願文	宝治二、二(一二四八)
24	台明寺衆徒勸進疏	建長二、八(一二五〇)

番号	古文書名	年号
25	台明寺若衆申状	建長七、二(一二五五)
26	覚明寄進田畠注文	正嘉元、四(一二五七)
27	台明寺本文書惣目録	文永元、十二(一二六四)
28	台明寺雜掌申状	文永八、九(一二七一)
29	関東裁許状	文永九、十(一二七二)
30	博多石築地免除状	弘安十、七(一二八七)
31	大隅国国宣	正応四、四(一二九一)
32	少式盛経施行状	正応五、五(一二九二)
33	台明寺衆徒等注申状	永仁七、四(一二九九)
34	大隅守護北条時直書下	嘉元元、十二(一二〇三)
35	台明寺文書請取状	嘉元三、四(一二〇五)
36	藤原祐胤陳状	嘉元四、十(一二〇六)
37	僧快我寄進状	徳治三、二(一二〇八)
38	鎮西御教書	延慶四、六(一二一一)
39	台明寺雜掌申状	正和元、九(一二一二)
40	北条時直書下	正和元、十(一二一二)
41	僧増暹寄進状	正和二、十二(一二一三)
42	少式盛経施行状	正和六、二(一二一七)
43	藤原景綱請文	文保元、五(一二一七)
44	台明寺雜掌長慶重申状	文保元、九(一二一七)
45	台明寺雜掌重申状	元応元、七(一二一九)
46	大隅守重氏拳状	元応二、九(一二二〇)
47	台明寺料田相博状	元亨三、十一(一二三三)

二 台明寺文書

48	紀時秀讓狀	正中三、二 (一三二六)
49	鎮西御教書	正中三、三 (一三二六)
50	雜訴決斷所牒	建武元、九 (一三三四)
51	治部大輔某書下	延文二、三 (一三五七)
52	在家人々寄進狀	享德四、三 (一四五五)
53	島津忠勝願文	大永七、十二 (一五二七)

1 大隅国司庁宣 長久二、十一 (一〇四一)

廳宣 贈於郡司

可且加制止、且擲進其身、臺明寺山邊所在雜木伐運雜人等事、

右、得彼寺住僧解狀偈、謹檢案内、當山是修行者建立、不獲定之壇越、然而靈驗無喻、祈禱有感、如此之聞遍滿遠近、非無其驗、隨即爲公家御願寺、勤修法華三昧、祈米每年立用公帳五十餘斛、然而深山之甚、依不被下合夕、住僧也少、荒廢尤多、借住無人之間、所在堂舍顛倒及數十年、不蒙公恩、敢不可修造、隨即相期公家造木之程、今月二日大風、一屋不遺、皆悉掃地顛倒又了、因之制置此山所在雜木、擬免件造事^{ママ}新之處、里邊雜人不隨制

止之旨、欲伐失矣、仍言上如件者、可停止之狀、所仰如件、宜承知之、依件行之、故宣、

長久二年十一月十二日

大介惟宗朝臣在御判

2 大隅国符 長久四、八 (一〇四三)

國符 贈於郡司

可任先符旨、重以制止、臺明寺^{ママ}傍示内山野狩獵雜人等事、

右、如聞者、件山國內第一之勝地、靈驗無比砌也、所住僧侶等致鎮護國家之祈、而間先、依彼山辭狀、件狩獵制符已明、而今愚暗雜人等、不憚制止、動致狩獵之計云々、佛法陵遲只在於斯、仍重所仰如件、宜承知之、任先符旨、早以停止、若不憚制止者、隨召進其身、將以糾決、符到奉行、

大介藤原朝臣在御判

長久四年八月十一日

3 大隅国司庁宣 天喜三、七（一〇五五）

廳宣 贈於郡司

可任代、廳宣旨、永停止臺明寺山四至内狩事、

右、件山、是佛法興隆之地也、因之代、宰吏、件狩永可停止之由所下知也、而如聞者、背彼起請之旨、近來有好狩輩之由傳言云々、仍重所仰如件、郡司宜承知、永以停止、若不憚制旨、猶有好狩輩者、且擲進其身、兼亦注姓名、可言上事由也、隨則現世重可召禁之、後生永斷佛種者也、故宣、

天喜三年七月廿五日

大介高橋朝臣 在御判

4 橘成友起請文 天喜四、六（一〇五六）

橘成友謹言

不可自今以後狩獵、臺明寺山禁制殺生塚、須波留加多

毛止の西訓木尾より内佐古狀、

右、禁制傍示之塚、元者是須波留加多毛止也、而今傍示之近、猶不可狩件訓木尾内之由、山内住僧所令制止給

也、隨制止旨、自今以後、不可狩獵件訓木尾内之狀、起

請如件、仍勒事狀、謹言、

天喜四年六月廿九日

橘成友 在判

5 宗岡重武田地売券 大治五、十二（一一三〇）

（外題）

「任本主并郡司等判、可令領掌也、（花押）」

宗岡重武謹言

沽渡相傳所領田地事

在

曾於郡二条二里廿七坪壹町 字墓町也、

右、件所領田壹町、依有要用之直、限永年所沽渡於成心房也、仍爲後日沙汰、沽券如件、

大治五年十二月廿八日

散位縣（花押）

檜 前（花押）

「郡判」

件二条二里廿七坪一丁本領主沽券明白也、仍加署了、

僧（花押）

6 八幡正宮執印僧行賢寄進狀 天承元、九（一一三

一）

八幡正宮執印僧行賢敬白

寄進臺明寺每年九月中旬三箇日夜不斷大念佛燈油佛聖

僧供祈、贈唵郡止上居取内万得領水田捌段内貳段者、

止上御供祈奉寄畢、殘陸段并畠地壹所字由久留園事、

四至限渡瀬者 但古渡瀬

副進調度文書伍通

右、十方淨土之中、尋往生因、西片念佛殊勝第一之行婆

婆穢濁貴賤、誰不願安養乎、于茲鎮西隅州有所部、号贈

唵郡、其中有靈窟、稱臺明寺、有別所、銘衆集院、有住

僧、名円臺房、興隆佛法、爲法界衆生、以每年九月中旬

之比、三箇日夜之間僧供祈等、勸進十方檀那、始修不斷

大念佛及十六个年、爲一番僧供之頭、每年聽聞之處、堂

僧十二口祈束帶、以自力構置、堂庄嚴爲鉢丁寧之條、隨

喜之至、淚難禁、值遇之志、尤切也、然則遙期未來際、

爲往生安養、件大念佛燈油佛聖僧供祈、限永年彼居取内

田畠、奉寄既畢、但其内宮前二段坪者、依爲止上御前之

砌、御供祈所分寄進也、所念無他、佛神照見、行賢敬
白、

天承元年九月十七日

正宮執院僧行賢敬白

「任寄文旨、早可爲臺明寺不斷念佛僧供祈田之、證判

大介中原朝臣在御判

大判官代藤原

大判官代惟宗在判

諸司檢校縣宿祢在判

稅所檢校建部在判

惣檢校

任用

目酒井

權大掾藤原

權大掾建部」

7 正宮執印僧行賢寄進狀 康治元、九（一一四二）

「任寄文之旨、可爲佛聖祈田之、

大介菅野朝臣在御判」

正宮執印僧行賢敬白

奉寄臺明寺衆集院阿弥陀堂每日佛聖祈万得領田玖段事
在贈於郡

一条三里九坪捌段字楠本

同条四里十九坪内壹段字久保山

右、行賢以去寛治元年親父惟宗朝臣在任之時、下向當
國、有事縁、時々參詣於彼寺矣、住僧等尋舊跡、致二

季彼岸

不斷經動之處、本自爲無依無怙之洞、只雖相憑十方檀那

之助成、豈以難遂將來哉、因茲、買得便宜水田、取國判

等、施入於彼供祈先畢、而於每日佛聖者、依無其祈田、

爲便宜之故、雖不足年中之相折、永以所施入件領田九段

也、仰乞、植善苗於身田、結雅果於心樹矣、仍奉寄如

件、

康治元年九月廿日

執印僧行賢敬白

8 大隅国留守所移案 平治元、七（一一五九）

國留守所移 臺明寺衙

欲被早任藏人所召物使解狀致沙汰、貢御青葉竹、令私

用故、不能調進子細狀、

副彼御使解狀一通

移、件 貢御笛竹、任先例、可切調進之由、所令下知

也、隨差副御使於國、祇承貢御所仁令參會之處、解狀如

此、如解狀者、住僧所行尤不穩便、且爲蒙府裁、且爲令

經奏聞、移送如件、以移、

平治元年七月十一日

目大中臣（花押）

權大掾檢前

權大掾紀

9 大隅国台明寺住僧等解案 応保二、五（一一六

二）

「任次第證文之旨、可下知之、（花押）」

大隅國臺明寺住僧等誠惶誠恐謹言 申請 大宰府裁事

請被殊蒙 鴻恩、任正八幡宮執印故行賢寄文狀、依代

代國判旨、停止當郡住人篤房謀略非理沙汰子細狀、副進

調度文書等案

右、謹檢案内、臺明寺無依無怙往古靈輿、山修山學聖

跡、精蘆草創以來、不知幾許、但 天智天皇御宇之時、被定篋竹貢御所後、逕四百餘歲根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇持天台教述、瑩四教三觀利劍、密也傳授眞言秘術、挹三密五瓶智水、宰府爲佛法、盍賜裁下哉、焉正八幡宮執印故行賢大德、爲紹隆佛法、買取篤房之祖父篤定并檜前篤季之田地、在當山勝至內、相副本券、當山每年二季彼岸之勤并燈油祈寄進貳町陸段田地、又以年來傳領戒勢之田、當山三箇日夜不斷常行三昧祈願壹所并田地陸段、同以寄進畢、其後七十餘箇年之間、敢無他沙汰、隨代代國司被加免判畢、國衙在廳郡司等皆悉所承知也、其旨見於調度文書等、而今篤房雖爲篤定末孫、不受繼郡司職、私訴阿多平權守忠景、以彼之武威、乍置相傳郡司、分領半郡事、僅及四五箇年之間、謀計之心甚、欲分取逕多年寺領田、於有限本券田地之頗廣、稱新開加作之由、今申成府判、始分取寺田、或押領四至有限寺田之條、非理沙汰也、誑惑之甚也、就中於彼岸田燈油田者、臺明寺勝至內也、他領田地全不相交、設雖加作新開、勝至內全不可有篤房之沙汰乎、而勝至內燈油田壹段

考、今年春既分取畢、兼又以之爲元起阿黨、住僧等不令切山木、不令刈野卉、於曠野所耕殖物等一一押取、不與山之本作人、京都仁波本寺叡岳、鎮西仁波本山內山、被崇國內、被祈郡內、雖然聖朝外朝國司郡司、全不令制止山野草木等乎、以之思之、篤房一人非例非法也、加之篤房違代代國判、背往古舊記、狩勝至內禁野、殺伽藍邊猪鹿之條、付冥付顯、有危有過者也、又去年篤房之所進府解狀偈、篤房先祖有指宿願、申請國司、以私田園寄進臺明寺云、是大無實也、大虛妄也、其旨見於故行賢寄文狀、以一推万、誑惑甚也、宰府依不令知案內、於彼解狀被成御外題賦、但御外題仁波但加付證文云、未敢定判御外題也、臺明寺公驗寄文證文明白也、篤房者、不帶一紙書狀、不取出可爲證文指本公驗、而於四至有限寺領田園押分取之條、實以罪科不輕乎、望請 鴻恩、且爲佛法、且任實正、令停止篤房之條條非法一一誑惑給者、捧恒例不退佛事之功、忝奉祈 府國安寧之由、靜念誦讀經勤行之心、高奉仰正理憲法之貴、以解、

應保二年五月十五日 臺明寺住僧等謹上

大法師「覺心」

大法師「弁海」

大法師「教意」

大法師「範耀」

大法師「長慶」

大法師「勝賀」

大法師「源豪」

大法師「源耀」

大法師「頼暹」

大法師「遍覺」

「在口裏」
「臺明寺住僧解」
大符御外題「スル、」

「此原書、旧御番所御文書二番箱中二一巻アリ」

10 台明寺大衆等解 応保三、二（一一六三）

臺明寺大衆等解 申請 國裁事

請被殊蒙 恩裁、任府宣旨、賜國判、藏人所召物使笠

重實巧尤實、住僧等稱切穢貢御笛竹、依度度云煩寺

家、永停止彼非理沙汰子細狀、

右、謹檢舊記、當山者无緣孤獨靈窟、朝廷鎮護道場也、

爰天智天皇御宇之時、被定笛竹貢御所後、逕四百餘歲根

本大伽藍也、自往古以來、興隆佛法地、廣作佛事砌也、

然藏人所召物使笠重實、以永曆元年秋之比、爲奉切備笛

竹、參上當院時、巧誑惑謀計、稱切穢篋竹、云煩寺家之

處、既請神祭畢、其後猶以不懷心、申成府宣、令付當山

府使字五郎大夫、依令勘責過祈、住僧等可令停止彼御藏

重實非例濫行由、蒙府裁處也、望請、國衙宜承知、被停

止彼非法狼藉者、住僧等弥以恒例不退善根、必奉祈聖朝

府國安隱泰平由、仍勅子細、以解、

應保三年二月十日 臺明寺住僧等上

大法師「弁海」

大法師「教印」

大法師「範耀」

大法師「勝賀」

大法師「源豪」

大法師「遍覺」

11 台明寺住僧等解案 嘉應元、十（一一六九）

「下 留守所」

件佛聖燈油新田貳町陸段檢田入部、永可令免

除之狀如件、大介中原朝臣（花押）

臺明寺住僧等解 申請 國裁事

請被殊蒙 鴻恩、永停止當山二季彼岸勤并燈油新田貳

町陸段每任檢田入部子細狀、

右、謹檢案内、臺明寺者、無依無怙往古靈堀、山修山學

聖跡、精蘆草創以來、不知幾許、但神武天皇御宇之時、

被定篋竹貢御所、根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇

持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也傳授真言秘術、挹三

密五瓶智水、惣者奉祈 聖朝外朝天長地久之由、別者奉

禱當國當任萬歲千秋之誇、而代代檢田使等、於不幾田

地、致勘益勘出、時時云煩住僧等之條、難堪之愁也、仍

且爲佛法、且爲祈禱、始自當御任、限永代令停止件檢田

入部給者、正理憲法之聞、遙施朝野山里焉、就中間傍例

尋舊跡、當郡止神御領田者、号居執而從昔以來、被停止

檢田入部、於彼社既有此事、於此寺何無免判乎、望請

鴻恩、且奉爲玉躰安穩、且奉爲壽命長遠、近者爲限世、遠者爲後世、令停止件檢田入部給者、捧恒例不退佛事之功、忝奉祈 府國安穩之由、靜念誦讀經動行之心、高奉仰 正理憲法之貴、以解、

嘉應元年十月九日

臺明寺住僧等謹上

大法師「春有」

大法師「行西」

大法師「良兼」

大法師「安源」

大法師「弁禪」

大法師「覺心」

大法師「教意」

大法師「勝賀」

大法師「源豪」

大法師「遍覺」

12 台明寺住僧等解 承安三、十一（一二七三）

「代、國判明白也者、早可停止件坪、檢田入勘

之狀如件、勘濟使散位藤原〔花押〕

臺明寺住僧等解 申請 國裁事

請被且依代代國判、且賜當任御判、備後代證文、停止

當山二季彼岸田并燈油析田當坪坪檢田使等入勘子細

狀、副進代、御判等

右、謹檢案内、當山者、是無依無怙往古靈堀、山修山學

聖跡、精蘆草創以來、不知幾許、但神武天皇御宇之時、

被定篋竹貢御所、根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇

持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也傳授眞言秘術、悒三

密五瓶智水、惣者奉祈聖朝外朝天長地久之由、別者奉禱

當州代代國吏千秋万才之誇、而代代檢田使等、於不幾田

地、致勘益勘出、時時云煩住僧^{等之}條、難堪之愁也、仍

且爲佛法、且爲祈禱、代代國吏御^判明白也、因之、限永

代令停止件坪坪入勘給者、正理憲法之間、遙施朝野山里

焉、就中間傍例尋舊跡、當郡止神御領田者、号居執而從

昔以來、被停止檢田入部、^{彼脱力}於社既有此事、於此寺何無免

判乎、望請 鴻恩、且奉爲玉躰安穩、且奉爲壽命長遠、

近者爲現世、遠者爲後世、令停止件檢田入部給者、捧恒

例不退佛事之功、忝奉祈 府國安穩之由、靜念誦讀經勤

行之心、奉仰 正理憲法之貴、以解、

承安三年十一月十五日

大法師「安覺」

大法師「春有」

大法師「良兼」

大法師「弁禪」

大法師「辨勝」

大法師「辨海」

大法師「勝賀」

大法師「源豪」

大法師「源耀」

大法師「遍覺」

13 藏人所下文 建仁二、十（一二〇二）

藏人所下 大隅國臺明寺住僧等

可令早在廳官人相共、致掃除生長貢御笛竹事、

右、笛竹使到着之時、在廳官人相共致掃除、可令生長之

二 台明寺文書

由、所被仰下也、仍所仰如件、寺僧等宜承知、更勿緩怠、故下、

建仁二年壬十月 日

出納右衛門少志中原（花押） 奉

「此文書二通共、旧御番所御文書二番箱中、臺明寺文書ノ一卷ニ正文在リ」

14 權大進藤原某書狀 建仁三、四（一二〇三）

當國 貢御笛竹被切之間、爲藏人所御使、殊致其煩之由、自當寺依令訴申給、可令停止新儀非法之由、被成下藏人所御下文候畢、於自今以後者、存其旨、可令致沙汰給之狀如件、

建仁三年四月七日

權大進藤原（花押）

臺明寺大衆御中

15 島津忠久願文 建仁三、十（一二〇三）

奉立 大願事

可造立衆集院本堂壹宇 參閱四面事

右、件本堂壹宇、可奉造立之由、大願志者、左衛門尉惟宗忠久上洛間、爲無事安穩泰平、所奉立也、仍今度下向之時、早可令造進之狀如件、

建仁三年十月十九日

16 藤原篤滿田地売券 建暦元、七（一二一一）

「六丈十一段小袖一錢一貫
とうない衛門殿」

藤原篤滿うりわたしたてまつる田の事

合肆段 三反たれかこ 一反こかいもと

右件田、篤滿かせんそさうてんのしりやう也、よてようくあるによて、^{（ママ）}そなたうまんさうくしをちやうしして、又ほんそやくにいたるまで、ほんみやうにつけて、ゐやうねんおかきて、うりわたしたてまつるところ也、よてそうもん如件、

建暦元年七月廿七日

藤原（花押）

17 沙弥正西田地寄進狀 貞応元、九（一二二二）

「進狀案貞応元九月十一」

（奉寄進案之）

明寺衆集院阿弥陀堂種種御勤内毎年二月常樂會

僧供新田肆段事

在小川院二条六里垣本肆段

右、件坪奉寄進之志者、正西既及八旬之餘算〔死期幾年之日月、然則所欣者六八弘誓之弥陀浄土、來而迎我、所憑者五百大願之釋迦本誓、勸而送我、二佛迎送、化儀是廣、豈正西一身漏彼利益哉、爰以正念存生之時、擬没後追善之營、放寄私領肆段之水田、欲濯輪廻四惡罪垢、倩以子息者纔一生之報謝也、至于孫子難訪、佛陀者是永代之導師也、生生世世有憑、因茲、爲後生菩提、奉寄進之矣、抑彼新田若有風虫旱水之損亡之時、加大衆恩顧之内檢、無下作之煩、并濟僧供新米者、願主望尤可足者歟、仍奉寄狀如件、

貞應元年九月 日

散位大中臣用房在判

沙弥正西在判

18 僧覺明解狀 嘉祿二、八（一二二六）

僧覺明謹辭

進相博水田參段事

右、件水田者、覺明私領也、然臺明寺彼岸田字車田以件倉原田參段一色不輪免、限永年所相博也、但依有類地、本證文者不相副之處也、仍相博之狀如件、

嘉祿二年八月廿五日

僧覺明在判

19 僧永範田地売券 寛喜三、十一（一二三一）

僧永範謹辭

奉沽渡字山下田并倉原内壹段事
「肆段（花押）」

四至 東限城峯 南限城中路
西限川良 北限川

右、件於經田者、雖相傳所領也、依有要用、直物限永年、相禪房所奉沽渡實也、但於万雜公事本役臨時雜役者、併本名留了、仍爲後日沙汰、證文狀如件、

寛喜參年十一月十七日

（文中前出花押二同シ）
僧（花押）

20 台明寺牒 仁治元、十（一二四〇）

大隅國臺明寺牒 當國衛

欲被早任牒送旨、且爲不審、且加御存知、爲守護代左

衛門尉、違背御式目并遠江守殿御下文狀、被致沙汰

間、當山依巨安堵、有限聖朝府國御願御勤、擬及闕如

子細狀、

副進

遠江守殿御下文案

送守護所牒狀案

牒、件事子細、去九月廿八日送守護所牒狀明白也、仍爲

御覽進之、抑當山者、自本無緣孤獨之砌、青葉笛竹貢御

所也、但至貢御竹者、去建保六年五月廿六日、爲龍敗、

一竹不殘損失畢、雖經年序、更不出生之間、天福年中之

比、篠許竹一本出生、爲其根源、每年生加、既大小竹廿

本許見在也、帝德至貴在斯綺、尤以國解可被經官奏歟、

蓋此寺者、爲禦鬼氣、於國衙丑寅之方、建置鎮護國家道

場之後、聖朝府國御祈禱、式日恒例佛神事、于今無退

轉、所謂年別勤六月會三十講、碩德諍雌雄、霜月會十講

師、明匠鮮弁花、加之、修正三ヶ日・二月常樂會・四月

佛生會・日吉祭・一座三間論義講・七月三ヶ日夜不斷供

花勤・九月大念佛・二季彼岸不斷經論義講・每□十度

講演廿三日、十五、十八、廿四、卅、山王講、將軍家并遠江守殿御祈禱、長日二帙

轉讀大般若經并觀音經三卷、此外細々勤不違記錄、然今

爲守護御代官、違御式目背御下文、數使令乱入山内、無

誤衆徒等被譴責之間、付使者雖申子細、不承引、以御文

又牒狀雖雖申、不被取上、動自身令登山、無左右可苛責

之由、以卿公西遊被申之時、衆徒等迷子細、溺悲淚、爰

御願勤修禪侶、企離山趣臥雲之路、青年長老宿德、失東

西、徘徊悲歎之衢、夫佛法依王法弘之、王法依佛法持

之、一山滅亡無疑殆、誰人可勤仕御願哉、誠一天率土莫

靡皇澤之恩恤、七道諸國奉仰閔東之御威、違背旁御制、

依被致理不盡沙汰、朝家鎮護御願之寺、大將軍家御祈之

砌、成荒廢之地、事不可不申、尤垂衙察、爲後日、可候

御斟酌歟、仍爲被加御存知、牒送狀如件、以解、

仁治元年十月三日

宮主清玄法師

預 清源法師

大法師

專當應範法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

「在口裏」
「臺明寺牒 當国衙」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一卷アリ」

21 肥後入道某書下 仁治二、九（一二四一）

大隅國臺明寺守護所使入部事

右、件寺僧等、致 將軍家長日御祈禱之由、依令言上、
被奉免守護所使入部於彼寺之天福御下知之狀云、謀叛・
殺害・刃傷人・夜討・強盜之輩出來之時、大衆相共糺定

犯否、實犯爲顯然之時者、可召渡其身於守護所、雖然、

於不令同意之親類并住所者、不可有其煩、此外盜犯人等

者、任先例、可致其沙汰云々、而守護代左衛門尉定重背

（北条朝時）

御下知、去年令乱入數輩之使、致狼藉之由、寺僧等企參

上、令言上之間、任天福御下知之旨、可成与下知狀之

由、所被仰下也、早止守護所使入部、任先御下知之旨、

可致其沙汰、但於不同意之親類以下妻子田宅資財等者、

可爲佛事用途物、此条且憑直主道場之妙文、成等正覺之

金言、每年二季彼岸讀誦法華經一百部、至于盡未來際、

爲被訪法蓮後世菩提、御下知之上、殊致歸依、所奉免如

件、守護代宜承知、敢勿違失矣、

仁治二年九月十一日

（肥後入道）
沙弥（花押）

「在口裏」
「肥後入道副下知狀」

『姬木文書云、正嘉元年十一月十三日、肥後藤内右衛門殿
施行云々』

22 定重料田寄進狀 寛元元、九（一二四三）

大隅國臺明寺新田

奉寄進 新田坪々事

在曾野郡

堀切陸段

阿弥陀講田

須加尾陸段

三昧田

倉原參段

彼岸田

懸熊肆段

八講田

桑東郷

一条七里廿九—玖段地蔵講田

竹原田六段燈油田

右、件析田、本領主御家人重代相傳所領也、雖然、依有

要用歟、他人沽却之間、大略其跡已無足、茲以自將軍

(被)

家彼付賣買之田、可令勤行御家人所役之由、依被仰下、

(マ)

雖下令下知、件寺依爲閑東御祈禱所、如本奉寄進之狀如

件、

寛元元年九月 日

書生僧在判

惣官大藏

押領使代僧在判

(定重)
守護代左衛門尉在判

「口裏二」

「□護代定重當山新田御家人役奉免狀案」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一卷アリ」

23 郎弁発願文 宝治二、二(一二四八)

山王御寶殿

奉造立供養七社御本地并使者三所御本地事

一大□權現御本地釋迦牟尼如來像一躰

一地主權現御本地藥師如來像一躰

一聖眞子權現御本地阿弥陀如來像一躰

一八王子權現御本地千手觀世音菩薩像一躰

一客人權現御本地十一面觀世音菩薩像一躰

一十禪師權現御本地地藏菩薩像一躰

一三所權現御本地普賢菩薩像一躰

一早尾宮御本地不動尊像一躰

一大行事宮御本地多門天王像一躰

一王子宮御本地大聖文殊師利菩薩像一躰

右、件造立供養七社御本地并使者三所佛菩薩、依瓢録如

件、此則爲師匠覺明現當二世悉地成就并父母二親頓證菩

提也、仍爲後代、注文如件、

寶治貳年歲次春二月十八日丙申造立願主僧朗弁

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一巻アリ」

24 台明寺衆徒勸進疏 建長二、八（一二五〇）

勸進臺明寺衆

殊以万人結縁助成之力

（欲被力）

令造立壹間四面本御堂狀

夫以、臺明寺者天下無雙之靈嶺、人間第一之梵宮也、斯地爲躰、四方山峙、春花秋林之嶺、疑曝紅錦繡之色、中央河廻、碧浪清流之水、省瑩淨瑠璃之光、山容水態、視聽之興、國中最卓爾、蓋相當勝地之中心、建立壹間四面本御堂、東方向也、本尊阿弥陀三尊、御堂丑寅方奉崇地

主權現、惣社相對御寶前、青葉二葉笛竹森然而多生、爰

煙葉々暗之暮、群雀爭宿音嗽々、風枝々戰之春、歌罵遷

喬轉歴々循竹、此有寶池、々有蓮、水浮千秋之彰花、放

四色之光、宛謬八功德兆之餘流、東方大臺明案千手觀世

音菩薩、靈驗靈德無比類、利生利益揭焉也、御前有五葉

松樹、久影一千尋榮、本堂西方曼陀羅堂、本堂南方食

堂、就中奉安置大聖文殊、北方毗沙門堂、就中壹間四面

本堂建立事、無縁起無日記云々、故老相傳云、天智天皇

御宇青葉二葉笛竹貢御所自被定置以後、五百八十九歲歟、多送星霜經涼燠之間、道場歲舊、破壞日新、棟蔓穿而雨灑紺頂、白毫之粧難乾、墻壁破而風寒、幡蓋瓔珞之影不靜、衆徒各皆思之、眼前不覺淚下、是以仰万人結縁助成之力、旁奉令造立壹間四面本御堂、雖爲一紙半錢、所望也、微鹿積而成山、雖爲寸鐵尺木、所願也、垂露滴而成海、只所志至、所力堪也、昔義之女一衣依奉施佛、忽得富貴長者之身、舍衛貧如挑（女力）一燈、早轉女見證、佛子各擎一塵浮雲之貯、令奉施十号滿月之尊、必依爲廣大善根之思、定可遂往生淨土之望、敬白、

建長二年八月九日

勸進衆徒等敬白

源壽大法師（花押）

永海大法師（花押）

朗弁大法師（花押）

重慶大法師（花押）

安榮大法師（花押）

行円大法師（花押）

永榮大法師（花押）

覺嚴大法師（花押）

亮範大法師（花押）

覺西大法師（花押）

『自建長二年逆數至天智帝元年則為五百八十九年、拠此、元和六年住僧來精有、白鳳元年帝所創編旨云、恐妄偽也、果是則非帝年号、乃弟天武即位之年号也』

25 臺明寺若衆申狀 建長七、二（一二五五）

臺明寺若衆等謹言上 申請 衆裁事

請被 殊且爲佛法興隆、且爲山内繁昌、停止以山内坊

舍并園等、相讓里弟子縁者子細狀、

右、謹考先規、自如來在世之當初、至于末法澆季之時節、師資之相承無絶、累代之教法尚存、雖然、當山爲鉢、忘諸寺之通例、拋師弟之芳契、或号在家弟子、讓与相傳之坊室、或稱親類兄弟、付属重代之佛經、松門蘭若之地忽成聚落、經行座禪之床速變民烟、以當時推將來、無一字坊室、皆成在俗之居者歟、縱志住山禪徒稀雖有之、無其居所、空辞教山之月、徒交他郷之塵、山門衰

弊、何事如此、僧侶退散、偏含此恨、但在家居住之縁者、皆是有德、故致奉公之節、隨逐給仕之弟子者、貧道故朝暮拜顔許也、依忠与不忠不同、雖有恩与不恩別、弃恩入無爲之後、所憑只是師範^{（厚力）}之原德也、恨忘晨惜之承仕、何空被弃置哉、早遂僉議、欲停止此旨、就中、以佛法傳持之地、令讓与在家人者、冥神慮更難測、顯徧先師遺訓、尤可恐、至可歎、望請恩裁、且爲佛法興隆、且爲後輩扶持、自今已後、以山内坊舍園等、寺中之住侶互令付属者、一山繁昌、相傳遙致盡未來際、四院同心、給仕永繼日夜朝暮、仍録事趣、言上如件、以解、

建長七年二月 日 若衆等

「解狀之旨、尤有其理、仍加署之、

別當覺西大法師（花押）

別當覺麦大法師（花押）

別當永榮大法師（花押）

（別當説力）
僧行円大法師（花押）

別當兼學頭安榮大法師（花押）

別當重慶大法師（花押）

僧朗弁大法師（花押）

僧永海大法師（花押）

僧覺秀大法師（花押）

僧覺弁大法師（花押）

「在口裏」
「以山内坊地不可讓里人 通僉儀狀案文」

畠地

曾野郡石原秦入道領内藺伍ヶ所 證文七通

右、注進如件、

正嘉元年四月廿三日

僧安榮在判

僧朗弁在判

僧順覺在判

26 覺明寄進田畠注文 正嘉元、四（一二五七）

注進 自故理性房覺明被進町殿田畠事

合

曾野郡重枝名鴉牟多田柒段 在證文十一通

同郡重富迫田陸段 證文一通

同名萱尾迫貳段 證文一通

上小川村餅田伍段 證文三通

得丸名加治屋新田壹町町内北伍段 證文三通

但至南五段者、自本無證文上、本領主有申旨、

曾野郡重枝名倉原田肆段 證文一通

同名止上牟多田陸段 證文一通

同名萱尾迫牟多田伍段 證文一通

曾野郡重武名垂門田伍段 但證文者、依為類券、案文有之、

27 台明寺本文書惣目錄 文永元、十二（一二六四）

註進

臺明寺公驗文書等目錄事

一念佛田

一卷九通 在行賢御寄進狀

一通 罰停止狀

一通 蘭免判

一通 索馬免（牽力）

一 彼岸田

一卷十七通

一卷三通 大府宣

二 台明寺文書

- | | |
|--|---|
| <p>一 住僧解狀、在外題、</p> <p>六通 彼岸田并燈油田、每任檢田入口申免判狀、在外題、</p> <p>一通 彼岸田并燈油田勘返田所當米申免判狀、在外題、</p> <p>一通 依篤房張行捧殿下住僧解狀</p> <p>一通 永耀狀</p> <p>一卷三通内 <small>一通寛西申
二通衆徒申狀、在外題、</small></p> <p>一通 倉原田相博</p> <p>一 燈油田</p> <p>二通 免判</p> <p>一 日吉田</p> <p>一卷五通 国可并行賢御寄進狀</p> <p>一人、怠狀</p> <p>十五通 在宮返牒一通</p> <p>一 佛聖田 一通</p> <p>一 地藏講田 二通</p> <p>一 十五日田</p> <p>三通 <small>奉寄狀
在国免</small> 四通 <small>相善房寄進狀
小山田小縁</small></p> <p>一 常樂會田 一通 奉寄狀</p> | <p>一 衆集院三昧田</p> <p>一卷四通 真乘房狀 二通 相善房狀</p> <p>一 立義田 一通 奉寄狀 一通 公事免除狀</p> <p>一 臺葉御房忌日田 <small>溝副
五月廿日</small></p> <p>一通 奉寄狀</p> <p>一 長壽々々忌日田 <small>(房)
堀切
九月四日</small></p> <p>二通</p> <p>一 宗房并法阿忌日田 <small>橋口八段
宗房十二月十五日 法阿十二月五日</small></p> <p>一通 在廳加署</p> <p>一 相善房忌日田 <small>北迫
十一月十一日</small></p> <p>一卷六通 寄進狀等</p> <p>一 賢者々々忌日田 <small>青木
十二月一日</small> 八通</p> <p>一 造花田 <small>刑口寺前
九月一日</small> 二通</p> <p>一 理性御房忌日田 <small>崎田
正月八日</small> 三通</p> <p>一 一乘坊法眼々々忌日田 四月廿四日 二通</p> <p>一 白土田 <small>温田、但臺葉御房忌日
拳狀一通、永兼狀也、</small></p> <p>一 加治屋土佐公忌日田 <small>樋渡</small> 一通 寄進狀</p> <p>一 眞鏡房忌日田 萩原</p> |
|--|---|

五通内

二通正文但彼正文ハ地上、座許有之、三通案文

一 仙城房忌日田

一通 西阿施入狀

一 円臺御房日記

一通

一 田中入道殿忌日田

中俣 二通 御文寄進狀

一 立義米寄進狀

二通

一 六月會米奉寄狀

一通

一 修正米寄進狀

成壽之施入、一通

一 當山傍示文

三通

一 學頭田寄進狀

若衆解狀

一 當山坊地不可讓里弟子事

解狀、在外題、

一 罪科人親類妻子間僉義狀

一通

一 山王御跡日記

二通 座首施入一通 (主力)

一 千与次郎沙汰文

一通

一 山内狩停止事

一卷七通 序宣

一 薪竹起請

一通

一 雜僉義狀一卷

受戒次第 雙六 新田事等正文

一 他妻密懷免一通

并禪然房沙汰事

一 諸新田名移并檢田雜事等免判

一 先守護代右近尉免判二通

解狀一通、在外題、

一 當守護所代免判

一通 新田等御家人役免、在同消息、

一 宮公文所消息

在臺明寺西光寺不審事、

一 當山無盡米預所日記

一通

一 大衆白堂狀

一通

一 藤内兵衛殿消息

一通

一 笛竹切間狼籍事

一通

一 溫鍋施入狀

一通 行賢御施入、

一 立義問者支配狀

一通

一 雜文書一結

一 閑東御下知狀

四通

右、文永元年十二月僉義偶、自往古以降、當山公驗等納

一箱、雖置一所、或恐炎上、或憚落失、書分案文、今納

置兩所、若正文紛失之時者、捧此案文申請方々御与判、

可備後代之證驗狀如件、

文永元年十二月廿四日

僧 行円(花押)

別當兼學頭安榮(花押)

別當 重慶 (花押)

僧 朗弁 (花押)

別當 覺秀 (花押)

僧 源順 (花押)

別當 慶幸 (花押)

別當 順覺 (花押)

阿闍梨 幸秀 (花押)

僧 慶範 (花押)

僧 有慶 (花押)

僧 良覺 (花押)

以後追加狀

一 成壽房忌日新田寄進狀案文 一通

一 円意房每年十一月五日大堂供僧膳寄進狀案文

一 成心房忌日新田寄進狀案文 一通

一 彼岸田石本北國僧供^(注)住文狀案文 一通

一 備前房忌日新田寄進狀案文 一通

一 静意房忌日新田寄進文書等、温田楠本三反^{副注文十六通}

二 通 佐官永祐新入田去狀

二 通 當山雜掌參上時藤内左衛門尉殿下知

一通 忌日田綾氏女寄進狀 字宗曾利三段

28 台明寺雜掌申狀 文永八、九 (一二七二)

將軍家御祈所大隅國臺明寺雜掌謹言上

欲早任

^(北条朝時)

遠江入道殿天福仁治御教書狀、令停止守護使

入部、於當寺謀叛殺害刃傷人夜討強盜五箇条外、任先

例、可爲衆裁由、申賜御教書狀、備向後龜鏡子細事、

右、當寺者、是自、^(賴朝)右大將家御時以來、令讀誦般若法華

之妙文、以奉致、関東御祈禱於長日、被停止守護使入部

之上、重犯五箇条之外、任先例、可致沙汰之由、御教書

狀嚴重也者、早任彼天福仁治之嘉例、謀叛殺害刃傷人夜

討強盜五箇条之外、任先例、可爲衆裁之由、申賜御下知

狀、備向後龜鏡、弥欲抽御祈禱之忠、仍乍恐粗言上如

件、以解、

文永八年九月 日 雜掌等上

「口裏」案文

臺明寺雜掌解^{重犯五箇条外、}文永八年九月日、可爲山門沙汰由事」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一巻アリ」

29 関東裁許状 文永九、十（一二七二）

正八幡宮雜掌法橋永圓并神官所司等申大隅國曾於郡重枝・重富名・桑東郷松永名以下講經免事

右、當國御家人税所介義——祐字有憚爲惣領仁之上、帶本主狀之間、於沽却田地者、可宛給之由依申之、文永七年被成御教書之處、正八幡宮被管之輩令申子細者、可尋究之、

於関東御成敗之地者、被御家人并凡下輩分、可令沙汰付義——由被載之間、彼所々者、爲社家進止之處、寄事於御教書、押妨神領之条、無其謂之旨、社家訴之、爰承久・寶治安堵御下文并本主遺狀義——雖帶之、就彼狀難及神領之妨歟、如社家所進建久・嘉禎・建長御下知者、可爲社家成敗云々、然者至有限神領者、可爲社家進止之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永九年十月廿五日

30 博多石築地免除状 弘安十、七（一二八七）

當山新田石築地役事、賜御申狀候之間、令執申候之處、御外題如此候、令進覽之候、恐々謹言、

弘安十年七月廿五日 守護代僧唯道判

謹上 臺明寺衆徒御中

「在口裏」
「博多石築地免除状」

31 大隅国国宣 正応四、四（一二九二）

在御判

當國臺明寺衆徒等申寺領田畠事、或有國免之地、或有寄進之所、無縁之寺、以如此之地利、支佛聖燈油、奉祈天長地久之處、動切宛非分之課役、令煩寺僧等之間、長日不退之勤、其妨出來云々、事實者、尤不便之次第也、早任先例并證文道理、可有其沙汰之田、依國宣、執達如件、

正應四年四月十三日 散位重眞奉

大隅國臺明寺々僧等中

「口裏」
「國宣案」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一巻アリ」

相模守平朝臣^(貞時)(花押)

32 少式盛經施行狀 正応五、五(一二九二)

當國臺明寺衆徒申刃傷狼籍由事、去年三月十六日關東御教書^{副論旨以下御狀具書}、案文如此、如交名注文者、祐範弟子道印爲

狼籍人云、任被仰下旨、爲致沙汰、相具彼仁、可被上府候、仍執達如件、

正應五年五月十九日 ^(少式盛經)筑後守在判

臺明寺少輔御房

^{「在口裏」}
「到來正応五」

臺 少輔 筑後守盛經

33 台明寺衆徒等注申狀 永仁七。四(一二九九)

依買得御沙汰、當山新田分稅所介篤秀代阿闍梨行秀申狀

案加一見候處、条々^(不力)實相違之間、粗令注申事子細候、

一彼申狀云、被停止當國臺明寺衆徒等濫妨狼籍、篤秀重

代相傳所領内質券沽却田地等事云、

此條狼藉者、其色目何事乎、不審也、凡者篤秀掠籠事於

關東御事書、守護御代官賀嶋四郎左衛門尉季村在國之

時、可被打渡當山往古新田等之由捧申狀、頻雖訴申、件

新田等者、爲嚴重佛聖燈油田之上、爲 正八幡宮御神

領、文永・正應兩度賜 關東御下知御教書等、令安堵田

地等也、隨御事書無相違之由、載于請文狀、陳之早、仍

所申有其謂欺之間、季村終以不打渡^(之)上府早、爰聞、二

月之此爲篤秀、同新田恒次名内下河津留五段、付于作

人、致謹責、取所當米早、此条乍致訴訟、無御成敗已

前、猥責取所當米之間、衆徒等雖含愁鬱、社家御沙汰最

中之上者、謹奉待上裁之處、返致濫妨狼藉之由、訴申之

条、行秀不實爲顯然者乎、

一同狀云、質券沽却田地等云、

此篠、當山新田等中、質券地無之、此又不實也、尤可有

尋御沙汰歟、

一同狀云、彼所々者、篤秀先祖相傳所領内、爲質券沽却

地之間、篤秀令知行之處、乍号 關東御願所、衆徒背御

德政、致濫妨云、

此條奸謀申狀也、其故者、如先段申、季村在國之時、篤

秀雖致訴訟、不遂其節、季村上府之上者、爲當時新田無

相違之處、篤秀令知行之由、訴申之条存外次第也、以前

条々、行秀不實申狀大略如斯、抑當山是自、天智天皇御

字以來、被置定青葉鳳笛貢御所、自右大將家御代以後

者、奉致 將軍家御祈禱之間、以上件新田等備佛聖燈

油、奉祈 公家武家御運子細、云杜家所進申狀、云守護

所進請文、具言上先早、不違羅縷、仍行秀不實申詞、粗

勘錄如件、

「即正安元年也」

永仁七年卯月廿一日

將軍家御祈禱所大隅國臺明寺衆徒等

34 大隅守護北条時直書下 嘉元元、十二（一三〇）

三）

將軍家御祈禱所大隅國臺明寺衆徒等申河俣掾入道禪心以

下輩乱入寺内、致狩獵狼藉由事、今月廿一日御教書如

此、可停止禪心以下甲乙人狩獵入乱狼藉云々、早任被仰

下之旨、可停止狼籍之旨、可令相觸之狀如件、

嘉元、年十二月廿三日

時直在判

「此正文、旧御番所御文書中二番箱臺明寺文書一卷中二在リ」

35 台明寺文書請取狀 嘉元三、四（一三〇五）

當山寄進新田等、牟花町田參段、花牟礼田貳段半事、

右、件田地等證文等内、牟花町田證文貳通花牟礼田證文

拾壹通内正文四通并案文六通御寄進狀慥給候畢、仍請取之狀如件、

嘉元三年卯月廿日

別當阿闍利兼能在判

別當律師玄慶在判

別當法眼長順在判

別當助明在判

別當兼學頭法橋在判

「コウラ」
「覺靜房新田寄進請取案文」

36 藤原祐胤陳狀 嘉元四、十（一三〇六）

大隅國御家人藤原祐胤謹弁申

爲臺明寺衆徒等構種々今案、破御致齋、令苟新田、致

狼藉由、無跡形不實濫訴条、無謂子細事、

件於新田近邊山野等者、祐胤爲相傳之間、令新開、自往

二 台明寺文書

古無知行相違之處、衆徒等自去年始、彼新開成違乱、致
苅田狼藉之間、欲訴申之處、自科難遁之間、遮致新田違
乱苅田狼藉之旨訴申之条、希代所行也、且僧侶法不實之
条、尤戒一段也、冥照覽難測者哉、所詮、成新田違乱、
不致苅田狼藉之上者、且任無誤實、被催止不實濫訴、且
衆徒等成彼新開違乱、破御致齋及苅田狼藉之条、所伏之
上者、早任先規例、爲被行其咎、粗披陳言上如件、

嘉元四年十月 日

37 僧快我寄進狀 德治三、二（一三〇八）
奉寄進

衆集院阿弥陀如來

水田肆段 在曾野郡智能名内堤田

副進 本證文陸通

右、件水田者、快我相傳之田地也、而爲没後忌日新田、
限永代、所令寄進也、爰情思事情、生死海深、難到涅槃
岸、煩惱山高、無晴菩提月、然間受如來之加被、欲脫輪
廻之苦、所以、昔龍女者捧寶珠於釋尊、唱成道於南方、

今快我者施新田於弥陀、望往生於西方、於戲、所憑者六
八弘誓、誠說爭無其實、所期者九品來迎、引攝有何疑
貽、仍奉寄之狀如件、

德治三年二月^{彼岸}三日廿六日

僧快我在判

『押紙有之』

『清水』

大明寺」

38 鎮西御教書 延慶四、六（一三一）

大隅國臺明寺雜掌申、異國降伏御祈禱卷數事、解狀
副具、如此、爲関東御祈禱所之条、無異儀之上者、可被

執進彼卷數候、仍執達如件、

延慶四年六月二日

（政類）
前上總介御判

上野^{時也}前司殿

『正和元年十月二日、此名ノ口
裏ニ中島殿御教書安トアリ』

『口裏ニ』
「御下知案文」

39 台明寺雜掌申狀 正和 元、九（一三一二）
將軍家御祈禱所大隅國臺明寺雜掌敷建謹言上

同國稅所介篤胤代忠秀乍請取陳狀、爲訴人無音上者、
欲被弃置濫訴沾田物由事、

副進

一通押書狀先進^々、

右、忠秀爲訴人乍爲當參、請取陳狀之後、迄于十余ケ日
無音之上者、任定法、爲被弃損彼逆訴、言上如件、

正和元年九月 日

「臺明寺雜掌申狀、正和元九七

（花押）

（花押）

40 北条時直書下 正和元十（一二一二）

大隅國臺明寺雜掌敷建申下部次郎判官代牛太郎以下
輩、得六郎兵衛尉惟村語、乱入當寺領止上村、致追捕狼
藉由事、解狀^{副具}如此、事實者、太不隱便、早可令停止
彼輩乱入狼藉、若又有子細者、可被注進交名人等之狀如
件、

正和元年十月二日

（時直）野
前上總介御判

守護代

「在口裏」
「中嶋殿御教書案、可停止止上村守護使乱入之事」

41 僧增暹寄進狀 正和二、十二（一二一三）

奉寄進 臺明寺本堂

在上小河田下五段但能榮經田也、

右、件田地者、自先師永覺阿闍梨所被讓与也、而增暹
今沈病床、余命無憑之間、爲先師永覺阿闍梨忌日追善之
僧膳新米、以彼田地、所奉寄進貴山也、自今以後者、爲
衆徒御計、無他妨可有御知行、仍寄進之狀如件、

正和二季十二月廿一日

僧增暹在判

「口裏」
「於閑阿闍梨永覺忌日田寄進狀等」

42 少式盛經施行狀 正和六、二（一二一七）

大隅國正八幡宮修理事、去年十月廿一日閑東御教書同
御事書今月十四日到來、案文如此、早任被仰下之旨、三
月中可被終其功候、仍執達如件、

『当文保元年』
正和六年二月十五日

(盛經)
大宰少貳(花押)

臺明寺院主御房

「右ノ原書ハ、旧御番所御文書二番箱中ニ一巻アリ」

43 藤原景綱請文 文保元、五(一三一七)

大隅國臺明寺衆徒等申當國目代甲斐阿闍梨盛範致狼籍
由事、去三月廿五日御教書并御施行、謹下預候畢、

抑爲彼衆徒等、今年正月廿八日、企夜討令刃傷國衙公

人六郎檢校以下數輩之由、盛範依捧訴狀、去三月十九

日、被尋下衆徒等候畢、隨而件刃傷事、具官加治木郡司

入道覺譽所令注申候也、而如被副下候衆徒等解狀者、盛

範當年正月廿八日、追捕寺領止上村百姓住宅、乱入當寺

一和尚榮範坊内、与耻辱於兒童云々、綽若同篇候者、盛

範既爲訴人、令申子細候之間、可令參決之由、先日相觸

衆徒等候畢、可爲何様候乎、以此旨、可有御披露候、恐

惶謹言、

文保元年五月七日

左衛門尉藤原景綱(裏花押)
請文

「口裏」
守護代景綱請文

「此二通ノ原書ハ、旧御番所御文書二番箱ニ一巻アリ」

44 台明寺雜掌長慶重申狀 文保元、九(一三一七)

(端裏書)
大明寺雜掌 [] 文保元年季

関東御祈禱所大隅國臺明寺雜掌長慶重言上

欲早被經嚴蜜御沙汰、且被鎮當國守護御代官安東四

郎左衛門尉景綱代惟村以下在廳御家人等狼籍、且停

止盛範惡行、被糺返損物、寺領止上村百姓等住宅、

致追捕狼藉事、

副進

一通 御教書案

右、於巨細者、具載本解狀畢、但、如守護御代官景綱請

文者、盛範依捧訴狀、去三月十九日、被尋下衆徒等候畢

云々、此條國衙正稅物之濟否、更非守護方御沙汰、何可

捧訴狀哉、而尋下衆徒等之由、被申之条、無謂次第也、

就中、申成公方御教書、付進守護御方時、曾不及異儀、

乍被請取之、景綱令引汲敵方盛範、捧訴狀之由、載請文

之条、今案参差之沙汰、尤可足賢察哉、同狀云、綺若同

篇候者、盛範既爲訴人、令申子細候云、此條當山雜掌守護使惟村狼籍事、捧訴狀於守護御代官之時、盛範爲訴人之由、敢不支申之、乍請取彼狀、無其沙汰、送日數之後、盛範爲訴人、令申子細之旨、載請文之条、眼前引汲也、且盛範惟村等致狼籍之間、就于訴申、被成御教書之處、以彼阿黨、爲扶代官惟村、不尋下在國、贊^(替)于盛範等、捧非據請文之条、希代珍事也、彼狼籍事、根源起自正稅物之上、訴申在國守護御代官惟村於之間、所務狼籍共以不能守護方御沙汰哉、然早重被成下御教書、被召上盛範以下与力人等、被行所當罪科、至損物者、任員數、不日可糺返之旨、爲蒙御成敗、重言上如件、

文保元年九月 日

『裏ニアリ』(花押)

(付札)
「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中二一卷アリ」

45 台明寺雜掌重申狀 元応元、七(一三一九)

大隅國臺明寺雜掌澄海重言上

當國目代、官甲斐阿闌梨盛範追捕當寺領止上村百姓等住宅、致打擲以下狼籍間、就訴申、雖被成下御教

書、顧無理至于兩年不及陳狀、剩不受取本解狀由、掠申間、重雖書上彼狀、尚以無音上者、被經急速御沙汰、欲被行其身於重科子細事、

右、盛範乍爲當參、恐自科、不終御沙汰之篇、難澁至極之上者、被經急速御沙汰、於件追捕物者、任員數被糺返、至打擲以下之咎者、任定法、爲被行重科、重言上如件、

元應元年潤七月 日

(端裏書)

「臺明寺雜掌申狀 元應元後七廿日」

(裏花押)

46 大隅守重氏拳狀 元応二、九(一三二〇)

當國臺明寺衆徒等、去正和六年正月廿八日夜、對國衙公人等、致種、狼藉候事、就和与之儀、止訴訟候旨、其子細以雜掌令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元應二年九月十六日

大隅守重氏

在裏判

進上 御奉行所

47 台明寺料田相博狀 元亨三、十一（一二三三）

相博

臺明寺新田大隅國曾野郡重留名内垣本田貳段与同郡用

松名内萩峰貳段号大卒都婆事

右、垣本者、爲正八幡宮之經田、萩峰者、爲公田、而相懸垣本田之所役於萩峰、相付萩峰之諸公事於垣本田、互依爲便田、所令相博也、向後相互不可有改變之儀、但或令相違彼田、或背此役儀者、萩峰田如元自稅所殿可令知行也、仍爲後代、相博之狀如件、

元亨三年十一月十五日

書生學頭忠禪在判

政所權律師惠弁在判

48 紀時秀讓狀 正中三、二（一二三六）

散位紀時秀跡

与讓犬王丸得分

一大神一丁 重留之宮留也、但止上神田、

一むくひさき七段 宮留名

一まつなかのとへしけ中口町六段

一ひめきのなか田三段

一ひたゝれ田三段

山野分

一大鳥居園内しんかい一段小 一中津河内立岩迫一所

一井丸園内くゑわたり一段 一ひめきのかみ すきか莊園
ほりまちあり

一西園岩殿たうりやう也、

右、任淨円讓狀、可令知行狀如件、

正 嘉暦元年二当ル 中三年二月十六日

散位時秀在判

所人入阿在判

「ロウラ」
「向佐太郎大夫讓与犬王丸狀」

49 鎮西御教書 正中三、三（一二三六）

大隅國正八幡宮雜掌尚円并神官所司等申、兼意以下輩破損神王面・御鉾、致殺害刃傷放火由事、今年正月廿九日関東御教書如此、早任被仰下之旨、爲處流刑、不日可召進兼意・永壽・慶喜・慶円・能兼・兼幸・永譽・覺増・覺榮・増範・貞兼之狀如件、

正中三年三月八日 （英時）
修理亮御判

守護代

「ロウラ」
「鎮西御施行案」
「清水大明寺」

50 雜訴決斷所牒 建武元、九（一三三四）

雜訴決斷所牒 大隅國臺明寺

可令早任先例、停止寺内甲乙人乱入狼藉及狩獵、莊嚴

笛竹、抽御祈禱精誠事、

牒、任久安六年藏人所外題、建仁二年同所下文并天福以

來武家度、下知狀等、停止寺内甲乙人乱入狼藉及狩獵、

莊嚴笛竹、可抽御祈禱之精誠之狀、牒送如件、以牒、

建武元年九月十日

左少史兼左衛門權少尉高橋朝臣（花押）
（後卷）

中納言兼侍從藤原朝臣（花押） 前筑後守藤原朝臣（花押）
（九条公明） （小田貞知）

從二位藤原朝臣 左衛門權少尉中原朝臣（花押）
（四條隆資） （近衛職政）

正三位藤原朝臣（花押） 左衛門權佐兼少納言侍從伊賀

守藤原朝臣
（岡崎範國）

左少弁藤原朝臣
（高倉光守）

「此正文、旧御番所御文書二番箱中臺明寺文書之一卷中二在リ」

51 治部大輔某書下 延文二、三（一三五七）

凶徒退治事、急速可遂其功也、此時分殊以可被抽祈禱

精誠之狀如件、

延文二年三月廿九日 治部大輔（花押）

臺明寺衆徒御中

52 在家人々寄進狀 享德四、三（一四五五）

大隅國臺明寺

山王御寶前奉寄進錢六貫文以湯田三反・土器田一反、无

程儀出來候て相違候お、當守護代本田國親六貫文錢弁申

候て、案度申候事実也、仍寄進之狀如件

享德二年卯歲三月六日
（當乙亥）

「在家人々寄進狀」

「ロウラニ
「臺明寺寄進狀」

東郷郡司義秀云々、三月廿二日

53 島津忠勝願文 大永七、十二（一五二七）

「字欠歟」 慎敬白

正八幡宮依炎上 藤原朝臣忠勝

奉寄進鵝眼一万疋其願文曰

夫以神者依人之敬增威、人者依神之德添運矣、先蹤指掌者乎、抑正八幡宮者、非日域神祇廟三神之苗裔矣、異朝陳之、大王之息女、稟日天子之陽氣、妊娠誕育大王、有觀覽是斯異形異相、而非可續天子之位者、奉乘虛船放捨空海、居諸數趨轉、仁王四十三代元明天王之御宇、和同元年着岸之^{戸須}隅州桑原之庄、則來下八流之幡、圍繞前後、号曰八幡、而後出現天弃石、於此鏤不思議之肝文、其頌文云、昔於靈鷲山說妙法華經、今在正宮中示現大菩薩乎、依此文奉名正宮云云、粵去大永三年癸未不圖兵革驚起、然則守護方當方既逮義絕、然處敵方卒猛兵、此家欲爲對治於愚領規野之条、家來之士卒少、懸合、相當之禦矢射處仁、守護方運命聊傾乎、打死虜數百人、得忽軍利之勇於戰場、播既名譽之勢於萬方、從來來諸篇任心衆人開悅眉事、是併冥見加被之瑞、家運倍增之瑞矣、然處迄于大永七年丁亥十一月廿八日、正八幡宮之炎上觸傳聞處、即驚愕仰天、嗚呼言語道斷以外之大災矣、所

詮、社家籌策之先札、弓箭長支者、足輕以下亂入壇所、神殿出火歟、然者至其時者、爲社家非被崩寶殿乎、文章揭焉也、退倩思之、神職神官之身而、義兵爲宗鉾、爲業計知、是背神慮歟、所以者何、或寄田代欲爲崇敬菩薩、或於有大望自訴者、假令爲何雖爲義爲絃用之欲、爲自他安全之的據、數々度雖致裁許、終無承引、刺拌讎敵之心、書札不能返答、凡神明佛陀者於豕光自樂之於真都趣、凌得大悲之化、心不倦忍苦堪勞、接強剛難化之機、欲至一實中道之覺臺^(覺力)、兼國家安寧万人快樂之擁護、無懈掛忘至誓自由之非道、豈不令刑罰乎、就中八幡大菩薩之御託、或咄銅焰、或雖爲食鐵丸、心汗心濁之族可捨給見、是世流布之神勅眼前之境、於此豈可不驚乎、可不慎乎、然處被官群兵等社家亂入、終日鬪戰之時、聲震大地、兵火之煙雲覆半天、雖然社頭堅固無橫^災之条、万吉々々、幸甚々々而已、掛處經數日、從壇處之民屋起猛火、鉾焰遷玉殿利那破滅之成灰燼、言表意外之災藥、以凡慮難測、以愚言難述、予寶社之歎滅亡、神慮之慨虛無、雖爲輕薄微少志、所之用却^(却)一万疋致寄進、偏抽丹心

者歟、所詮、於向後從何家再興有企者、可爲一分之助

願書之大跡如件、

成、萬一於我家今度一亂、尚、得勝利於官祿增進者、必

藤原朝臣忠勝判

可勵造社之功、是所謂微塵成泰山、涓滴滿巨海濫觴歟、

大永七年丁亥十二月二日

仰願者神慮廣大之廻於眸丹、祈渴仰之哀、於志武運、於

及子孫万葉安全、於蒙國家万品給、再拜々々敬白、

願書之大跡如件、
藤原朝臣忠勝判

大永七年丁亥十二月二日

慎敬白

正八幡宮依炎上、藤原朝臣忠勝奉寄進鵝眼一萬上、其^(正力)

願文曰、

夫以神者依人之敬增威、人者依神之德添運云々、然處迄

于大永七年丁亥十一月廿八日、正八幡宮之炎上觸傳聞

處、即驚愕仰天、嗚呼言語道斷以外の大災矣、所詮、社

家籌策之先札、弓箭長支者、足輕以下亂入壇所、神殿出

火歟、然者至其時者、爲社家非崩寶殿乎、文章揭焉也、

退情思之、神職神官之身而、義兵爲宗鉾楯、爲業計知、

是背神慮歟云々、敬白、

三 止上神社関係

「止上権現宮」は、享保二十一年（一七三六）三月から始められた止上権現宮修甫のための遷宮の次第と、神宝諸道具・祭神供など詳細に記録したものである。これを記録したのは乗林寺三十七世深亮房覚遍で、当時の住僧であった。

現在、鹿児島県歴史資料センター黎明館に保存されている原本は、元文四年（一七三九）に川越清左衛門實明によって書き写されたものである。

なお、止上神社には多くの貴重な資料が残されているが、これらの中の萬覚書から二十編余を抜粋した。

（表紙）

享保二十一年丙辰三月十四日同五月七日より
号元文元年写

止上権現宮

遷宮規式品
神宝諸道具
祭神供次第

別當乗林寺住僧

深亮房覚遍

止上大権現宮

止上大権現宮内外遷宮行列規式之次第

享保二十一年丙辰三月始より御修補有之候ニ付同十四

日之夜半御飯殿江外遷宮有之候ニ付而者、先御飯殿を

清メ祓畢テ結界之作法有、次二本社并両善神王御飯殿

江外遷宮有之候ニ付觀式之行列如是御座候由但御飯殿

之浜床并土地ニ荒こも敷之内遷宮之節茂如斯御座候、

同四月十一日之夜半内遷宮

一、長刀

神幸ノ結界而先ニ行く

池田長拾郎



一、 榊木葉

幣志べを付た鈴を持つ

二 内侍



一、 灑水さみず

神幸ノ道を清めそそぐ

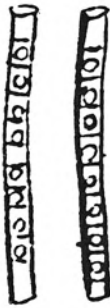
座主房覚遍



楽人

一、 笛ふえ

岡留勘七
岡留権兵衛



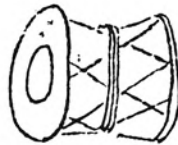
一、 手拍子てびょうし

岡留甚兵衛



一、 大鼓たいこ

岡留周八



一、 白幣しろへい

岡留寛右衛門



三 止上神社関係

一、絹幣きぬへい



谷口彦左衛門

一、御神幣みかみへい



岡留権之助

一、御劔みけん



谷口亮左衛門

一、宝劔ほうけん



高橋長右衛門

一、鉾ほこ



但鉾ニ熊手あり

左 池田長助

一、鉾



右同熊手有

右 岡留千右衛門

一、鉾



但鉾に長刀あり

左 岡留勘右衛門

一、鉾



右 岡留兵右衛門

一、鉾



左 岡留助左衛門

一、鉾



右 源左衛門

一、御鏡

鉾七本之内志本八大破
神璽宝劍
内侍取鏡

正 一内侍



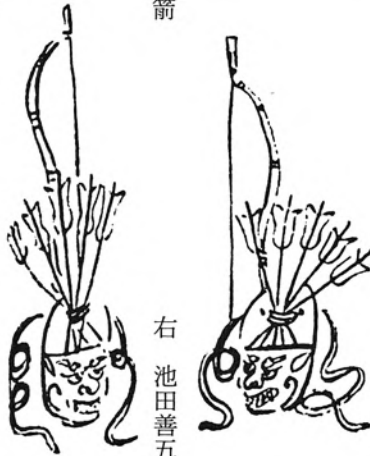
一、弓箭

左 有村庄兵衛

一、弓箭

右 池田善五郎

一、御輿



一南正神輿
二東神輿
三西神輿
四御簾

左 谷口美濃

右 岡留甚左衛門

前正殿守役

甚四郎

若宮

後權殿守役

次右衛門

御輿守役

右正殿守ハ御輿前ニ奉守

助次郎

權殿守ハ御輿頭ヲ奉守之

右四座之御輿ハ白衣ヲ以テ覆ヲ之御輿之上ニハ神蓋を差

掛ケ候処ニ往古神蓋朽損故今ハ蓋ヲ不差掛天蓋之事也右

神輿覆衣ハ此節相調候而大般若本尊箱ニ納置候

但二ツ壺ツハさや

一、太刀

左 岡留權四郎



一、大刀



右 甚八

一、御冠

頭取 上原弥太右衛門

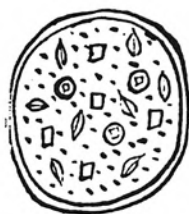


一、御履



一、散供散米

甚兵衛



一供奉

神職各々御供衆

右、本社宝殿四座之神輿奉移、次ニ眷属神等を奉

移也、

一師子駒 但シ濱床之師子駒大小四駄

一師子駒 但 濱床之御簾之若宮之御前二駄

一飯綱大明神 但厨子入り木像立ツ

一神箱 但鷹神靈并神幸祭之王之面六ツ、一之王子白色

面、二之王子赤色之面、三之王子白色、四之王

子赤色面、五之王子黑色之面、六ツ王子黄色之

面、二之王子赤色之面ハ額ニ大小之角有而、か

ミの毛ハ不動之かミ之とし、六ツ共ニ鼻高

く、冠り一ツ天冠、太刀但木、六ツ之将束入

り、しん之太刀之崎さやしりの金物ハかり有、

長櫃ためぬり、ふちきちやうめん黒ぬり、

一幣箱但三所金物惣金薄ミかき、二本之名之幣串壹ツ但

長サ五尺三寸、黒ぬりニ四所金薄ミかき金へり

卷式本そへたる幣串一ツ五尺三寸、黒ぬりの幣

串三本但長サ五尺三寸、長箱ためぬりニふちき

ちやう黒ぬり、

大般若
一本尊箱但内箱しん黒ぬり、外江ノ箱木色ぬり、般若十

六善神王絵入り、但地衣ニ金泥書表具金襴、右

箱之内ニ文明十八年丙午十一月廿六日、願主快

悟と見へたり、右表具ニ茂如此有之、享保四年

己亥三月吉日、吉田表具并外江之箱作也、

大般若櫃但櫃六ツ、六百巻入り、建徳二年より宝徳四年

までの書品、應安八年乙卯十二月十八日ノ三ツ

櫃朽ル故、享保八年癸卯九月十一日櫃六ツニ作

改ル也、

一鑓箱但四ツ、一ツハ竹皮籠ニ入りおけかわ胴なり、甲

桃さねニしころ有、壹ツハ箱ニ入り甲なし、壹

ツハきちやうめんの箱ニ入り筋甲あり、立物桑

形ニ利劔鉄柄三、右桑形三、右ジンチやう金劔

ハ鉄柄より刃さきまで壹尺九寸、四領共ニ大破

なり、

一神具箱しんぐ 御饗金椀廿一、十一ハ往古之椀、十ヲハ新金

椀、金皿十三、高サ壹寸一部、差渡二寸貳部、

止上薬師御器貳ツ、差渡五寸五部、高サ貳寸貳

部、止上御器九ツ、差渡シ五寸五部、高サ貳寸

貳部、御器之底二十一共に彫付あり、其内九ツ

ハ止上与ほり付あり、貳ツハ止上薬師与ほり付

有、

一幡箱はた但八流之幡并神盖が之小幡入り、皆朽損スル、龍頭

九ツ入、御幸祭ノ馬具入り、

一幕箱まく但貳頭入り 一蠟燭臺ろうそくだい但鉄

一六角燈爐とうろ但木 一金幣箱へい但貳ツ、金幣貳振入り

一唐金花瓶からがねのくわびん但龍頭ニ輪有、差渡貳寸七部、大往古之道具

也、高サ壹尺三寸六部、口ノ差渡四寸六部、底

ノ差渡六寸四部、胴之廻り貳尺四寸三部、左右

ニ龍頭有之、

一 鉾七本但神幸祭鉾也、壱本ハ大破、

一 長刀但壱振、直ク長刀、ほの長サ壱尺八寸八部、往昔

之名作物也、さや朱ぬり唐草、柄朽損也、菊鐙

有、十二間鐙、

一 獅子頭あひら但貳腰、左腰ハ阿、右腰ハ呬

桑ノ木弓三張あり、

一 王面但大小三拾九面、壱ツハ清水之守公神ノ松木、昔

シ止上より飛掛り故、于今面掛ケ松と云、其御

面守公神之濱床ニ有、又右濱床ニ止上六所之神

輿御鎮座あり、

一 鏡かぐみ但神鏡之御鏡内侍所也、差渡六寸八部、表ニ福貴

長命之文字あり、

一 御酒瓶但六ツ、往古之焼物也、高サ六寸八部、

一 薬飯鉢但焼物ニ□きて差渡壱尺、底ニ女唐子之絵有、

一 鈴但九ツ、貳ツハ大破、七ツ全、

一 鷹絵貳幅但箱入

一 札之判木但貳ツ、壱ツハ大般若真經之判木、壱ツハ法

花千部之判木、

一 三十番神絵板但三十枚、皆朽損ル、

一 三十六歌仙絵板但三十六枚皆朽損シ、長サ壱尺五寸□

部、廣サ九寸三部、永祿六年癸亥卯月十三日、

一 棟札但三十枚余、朽ル棟札之写シ書ハ乗林寺文書箱ニ

入り、

一 箭箱但鞭壱ツ、墓目ニかりまたの矢十筋、

一 八目ノ鐙かふらや矢十筋、此内七筋之鴈股かりまた同柄いの目

有、三筋ハ同柄かりまたのさきを切りて有、皆

墓目朽損ル故、七筋之墓目此節作改、三筋之墓

目ハ往古之墓目也、往古の矢から黒ぬり朽ル

故、此度新敷替也、

一 矢柄式所金薄ミかきの矢十筋、鴈股十ヲ此節作

改ル、

右十筋之矢、清水之瀬戸口源助朗秀并其嫡子吉

兵衛秀連親子ニ而造調て寄進也、鴈股ハ国分岩

田孫七作、乗林寺覺遍寄附也、羽ハ鷲の羽也、

一 鴈股二いの目ノ矢七筋矢から朽ル故、此度新敷

造替也、

一□の舌の矢五筋矢から朽故、此節作替也、

一かりまた二いの目なしの矢八筋矢から朽ル故、

此度作替也、

右三十筋ハ清水高山雪兵衛、其嫡子高山治右衛門、造調而寄進也、

右矢箱此節造調、上村安右衛門殿、愛甲源助殿、大

工濱田権左衛門并其子権右衛門作ル、

一鞭ぶち 但矢箱二入、長サ三尺式寸、黒ぬり二所金物あ

り、上崎三角釵形、しんくの唐糸うちの緒、此

節加治木之住市来新五兵衛寄進也、右鞭ハ、□

一弓籠手但神ノ箱二入、おも衣うら細布之皮ニ緒式所ニ

付、忝人分有、鎚流馬やふらめノ時ノ弓籠手也、

右鞭・鎚矢其外ノ矢・簾・鉾・長刀・王ノ面・馬具

等ハ、上古大隅国之本主隼人對治之時、止上権現宮

ニ化鷹而對治玉ふと云云、其敵心為領隼人對治ノ神

幸祭有、其道具に今現在せり、鷹神魂止上宮自現之

鷹像有、但木像、毎月七夕ニ紙ノ御衣ヲ着せ替奉

る、神箱に鎮座シ給ふ、早仁之城ハ国分之新城也、

簾三流・戸帳三流衣、但公儀より召替候由、

濱床はまゆかノ疊六帖、但公儀より召替之由、

一右止上権現宮御寶殿戸帳三流・御簾三流并將衣□(虫)

濱床之疊六帖、公儀より御召替由、為後年如斯、

正保四年丁亥十二月、乗林寺頼盛、

一止上権現御宝前替物、一戸帳廿一尋但ねりきぬ 右ハ御前三間分

一簾三間但法鉢六ツ、但御前すなら□むく、一疊六

帖但表備後へり上布、

右ハ此中漏クさり申候条、此度御替被成被下候様

ニ下々奉頼候、以上、申(虫)□月廿八日、正祝子上原

形部左衛門印判、暖川越俊兵衛印判、寺社御奉行所

御使衆、

一戸帳三流、宝永六年己丑年盗人取候ニ付、同七年

庚寅十月召替、

一濱床ノ疊六帖但備後表布白へり、享保五年庚子三

月召替之由、

一粥箸かゆはし但正月廿四日打植祭ニ用ル也、

一中像但木像損朽ル、正月廿四之打植祭ノ木牛也、長サ三尺式寸有、牛面有、今ハ用之也、牛面長サ壹尺、

一高坏たかつ但往昔之高坏、

一本膳鏡板差渡壹尺貳寸五部廿一膳高サ壹尺四部

一二膳差渡壹尺壹寸廿一膳高サ壹尺四部

一三膳差渡壹尺五部廿一膳高サ壹尺四部

惣合五拾餘膳之高坏揃ル、

一高坏但新之坏廿一膳差渡壹尺、高サ壹尺□部

一平丸盆拾枚差渡壹尺

一瓶子但大靱瓶子二ツ高サ八寸八部

一物柄もちえ但木ノ器物也、御饗を成すため之物也、是を以御

供ノ御食ヲ計也、

一定香箱但香箱之ふたニ六観音之梵字をほりすかし而

有、奉寄進止上御神前定香呂箱、明應五年丙辰

六月十五日、領主竹内圖書助、右御供所ニ有而

朽ル也、

一定香箱 止上宮御本地堂藥師如来御佛前定香呂、于時

永祿十年丁卯三月廿一日、筆者座主權少僧都海存、施主四拾四人之名字有、

右箱ハ今ハ乗林寺ニあり、

一鰐口但差渡六寸五部

南郷光照寺於十一面御宝前奉掛鰐口、為現世安

穩、後生善處、十一面ノ梵字あり、

右鰐口ハ止上宮拜殿ニ掛りて有之、

一鰐口但差渡六寸

大隅国曾於郡止上宮御本堂乗林寺藥師如来鰐

口、天文四年乙未廿八日敬白、わに口ノ表書

ニ、本願山下六郎兵衛尉・九郎左衛門尉・小三

郎、

一六字名号板札但長サ壹尺九寸四部、横三寸三部高サ四部、六字ハ額ほりニ而脇書ハやけんほり、

遊行十六代他阿弥佛、永享三年丙寅十二月廿

日、右板札止上宮神殿ニ奉納也、

一神鏡但七角七祭ノかゝみ、差渡六寸六部、表二人形式

ツ、靄亀松竹之絵有、乗林寺持佛堂ニ昔ゆ有、

一法華経但織品紙、長ケ八寸七部、横四寸四部、右品大

破也、八卷、文安三年丙寅二月廿三日、願主^(長)
^(宗)□、右法花經今ハ乗林寺ニ有之、

一飯臺但長サ式尺寸七部、横七寸七部、高サ七寸九部、十式枚、御祭之節人口ノ饗ヲ上ニ置候由、

大般若轉読之時般若机ニ成候、

奉寄進大般若机十二、天正十五年二月吉日、藤

原篤辰、

一中央机但高サ式尺六寸、長サ四尺七寸五部、横七寸七部、拜殿ニ有之、享保十六年辛亥十一月十

□日□之、

一大鞍但釘張り大鞍、差渡七尺八寸式部大鞍、寛文五年

戊辰文月吉祥日、

一止上宮御供料之文書^{但紙長サ七部、横七部、紙式枚次之文書}^{七部ノ紙式枚次之文書}□

天承元年九月七日ノ書付也、乗林寺文書箱ニ入

り、但写、

一守護七社御社參之次第書^{但紙長サ七部、横七部、紙式枚次之文書}^{七部ノ紙式枚次之文書}□

右書ハ乗林寺文書箱ニ入、但写、

一止上宮御幸祭入目日記写^{但右日記ハ大宮司所、又野口祠官ハ□所此兩所ニ有之候、朽損}

シ、

右日記乗林寺文書箱ニ入、慶長十六年十二月吉

日、

一止上宮社領拾三町七反但町目録紛失ニ付右目録□

一止上宮知行目録、高三拾七石式斗五升五合

慶長十九年八月五日、止上御神領与有之書有、

右寄進御目録ハ寛文十年庚戌四月廿三日、止上

由來書ニハ大宮司格護与見得たり、今ハ改□社

人之所ニ有之候、^(異筆)今ハ別當乗林寺ノ文書箱ニ入

置テ有之

一右御目録名寄帳^{但清水北辰神社之社人谷口美濃所ニ格護也、}

慶長十九年八月五日、右目録并名寄帳ノ写書、

乗林寺ニ有之、

一止上由來書但紙四枚次、寛文十年庚戌七月廿五日ノ文

書也、右文書乗林寺文書箱ニ入り、

一神具箱但木地ノ饗椀九ツ、木皿大小百四拾入り、御笠

衣二十疋入り、享保十四年己酉十二月吉祥日、

神具箱式ツ作改也、金碗金皿入ル箱朽ル、

一鷹ノ絵板三枚但壹枚ハ天文十三年十二月吉日、女大施

主敬白、壹枚ハ弘治三年六月吉日、女大施主敬

白、壹枚ハ明曆三年酉文月吉日

一三重塔額但往古ノ錢ヲ以宝塔を打付、其中ニ弥陀・藥

師・觀音ノ繪有之、

一机 但廣サ壹尺八寸貳部、横九寸五部、巾八部、四□

ノ角、其間八所金物有、四方木口朱塗り、机ノ

高サ壹尺□黒ぬりニ、小めん朱塗り、文明

九年丁酉閏三月廿七日、止上御宝前机壹面と書

付有、右机乗林寺持佛堂ニ昔より有之、

一三十三燈但大小松ノ形也、二ツ共ニ鉄大破、大ハ三尺

五寸五部、小ハ貳尺壹寸六部

一金燈爐但貳ツ、鉄大破損ル、

一求聞持之板札但廣サ四寸四部、長サ貳尺五寸八部、

右札ノ上ニ月輪ニ蓮花、其上ニ虚空藏ノ梵字タ

ラク字ヲ書、奉修虚空藏求聞持法第三座、御息

災處与有、脇書正八幡宮於金□山ニ奉為護持、

藤原義久公御祈念三座同時修之、慶長六年辛丑

五月大吉祥日、瑜伽行者権大僧都盛遍敬白与

有、

右求聞持之御札ハ、慶長六年ニ 太守龍伯公止上

神社江奉納被遊候由、

一兵書但箱ニ入、御簾若宮ノ神輿ノ内ニ入、卷品長サ三

寸、

一灌頂卷、拾壹枚次書、康正三年三月十五日書也、

一武略最勝護秘傳、四枚次書一卷、

一惣印、四枚半次書壹卷、

一兵法相傳具足ノ事、廿一枚半次書一卷、

一武略最勝穗露卷、十一枚半次書一卷、正長元年十

一日吉日ノ書也、

一勝軍陰形法、三枚半次書一卷、

一摩利支天供、二枚半次書、正長元年戊辰十月廿八

日ノ御事也、

一幡ノ圖書、一枚、

一題号不知書、三枚次一卷、

一 黃石公三略書、六枚次書、康正三年乙丑三月十三

日ノ書也、

一 兵法秘術一卷、二枚半次、應永廿七年八月吉日書

也、

一 武略最勝三略秘府、二枚次書一卷、

一 都藍卷、二枚次、上卷・中卷・下卷ノ合品書也、

一行法檀ノ圖、壹枚有、

一 題号不知書、七枚次一卷、

一 八幡御寶号、壹枚、長祿三年己卯彼岸中日快悟与

有、

一 張良千年將軍ノ八陳、二枚半次、康長三年乙丑三

月十五日書也、

一 黃石公三略書、六枚半次書壹卷、

一日月大事之次第、壹枚、

一 題号不知書、壹枚

一 神供相傳秘事、三枚次、文安五年戊辰五月六日書

也、

右兵書ハ快悟座主より被納置候由、

一 宝殿之内諸道具等、

一 櫃ノさす貫但二ツ珠、長サ弍尺計、

宝殿外殿一 獅子駒但二鉢、阿吽、大キ海存座主、永祿五年壬戌十

一月十七日、作者深堅快重・同秀堅助、細工人

高橋善左衛門秀次、地頭三原遠江守藤原重秋、

一 守木但弍ツ、長六尺餘、木口差渡四寸計、神興ヲ奉守

木也、

右本社宝殿四座之神輿奉移、次春属神并神宝諸道具

等移畢テ、神職之社人奠供ニ并立、神供之御饗を手

次ニ奉上テ、神樂ヲ奏シ神慮ヲ奉冷涼テ、次ニ神供

ノ御饗并御酒を下シ而、神職之社人各々戴候由、

但神職之社人ハ遷宮終与神飾舞被仕候、別當ハ宝

殿ノ内ニおいて本供行法仕候而薬師法、

右内外遷宮ノ□、氏子之人々神幸ノ節、神庭ニ平□仕

る事神妙ニ存候由、

御修甫寺社御檢者

上村安右衛門殿

檢者

愛甲源助殿

外遷宮立合検司

所暖役

塩川次郎右衛門

丙辰四月十一日ノ内遷宮ノ時も右同人

横目役

塩川有右衛門

同四月十一日ノ内遷宮ノ時ハ横目役ハ

細山田喜右衛門

営膳見廻

本田源兵衛

右同役

本田金兵衛

外遷宮ノ参宮人下知役

高橋與左衛門

右同

池田源七

楽所

池田長十郎

大宮司

岡留清左衛門

權主取

岡留甚右衛門

頭取

上原弥太右衛門

別當

乗林寺覚遍

享保貳拾壹年丙辰三月十四日宮代官

一遷宮ノ節、宝殿ノ御仮殿を神幸道左右ニ注連ヲ引お

ろし、内外遷宮共ニ如是御座候由、

一遷宮神幸ノ道、宝殿ノ御假殿迄荒□も敷キ、

一遷宮神幸ノ道左右八所、幡代ノ幣白を立ル也、往古

幡朽損テ有之、幡竿ノ龍頭相保箱ニ入テ有之、神盖

朽損シ空輪計現在せり、

一遷宮立合之暖衆・横目衆ニハ、頭取之社人ニ而一汁

一菜ノ煮物一ツ、菜壹ツ、茶つけ進上候由、

一寺社奉行所ノ相渡候書付

覚

銀七拾九匁七分

曾於郡社人頭取

上原左京

右者其元止上權現宮社頭修甫申付候間、遷宮料之儀

各次書ニ而申出候間、本社并兩善神王、内外遷宮

料、本地堂入佛發遣櫃壱通入目料とシテ相渡候間、

座主坊社人中諸遷宮堅固ニ相調候様ニ可被申渡候、

以上、

寅ノ 十一月廿四日 寺社奉行所印

曾於郡暖中

右書付ハ元禄十一年戊寅十一月廿四日

一享保四年己亥十一月初より御修甫有之候ニ付、十二月

十六日之夜半御飯殿江御遷宮有之、御修甫成就終テ、

同五年庚子ノ三月十五日之夜半、本社宝殿江内遷宮有

之候由、其節遷宮料七拾九匁七分相渡申候、

一享保十年乙巳九月、寺社御奉行所々遷宮料之儀減方被

仰渡候ニ付、三拾九匁五分ニ御減シ被成候由、

一享保四年己亥十一月ヨリ御修甫有之候ニ付、同五年庚

子二月八日ニ御本地堂發遣有之、同十一日ニ入佛有

之、

一享保十六年辛亥十月、御本地堂葺替有之候ニ付、同十

四日ニ御本地堂發遣候、同十二月廿一日に入佛有之

候、

一享保十六年辛亥十一月朔日ニ入佛發遣料、寺社御奉行

所々相渡候、

覚

錢壹貫三百三拾貳文 銀ニシテ拾四文

右者其許止上権現本地堂入佛發遣料とシテ、右員數所

衆中逆瀬川清兵衛江相渡候間、入佛發遣相濟次第、其

首尾可被申出候、以上、

亥十一月朔日

寺社奉行所印

曾於郡

暖中

一享保二十一年丙辰三月初々御修甫有之候ニ付、同十四

日之夜半外遷宮有之、同四月十一日ノ夜半内遷宮有之

候、辰三月十二日ニ銀三拾九匁五分、錢ニシテ三貫貳

百八拾八文、本社并両善神王内外遷宮料とシテ、寺社

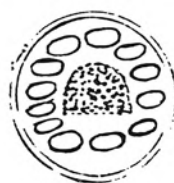
御奉行所々相渡候、

御本地殿藥師如来日月光十二神大持七千葉□又毘沙門

天大黒天宝頭廬尊者

右御本地堂江御祭ノ前ノ夜片甑之御供

餅十二奉上候由是往古より乃旧式也



釜神三宝光神



右釜神ニ者御祭ノ前ノ夜餅二重奉上候

由

釜神興津彦神

釜神興津姫神

三 止上神社関係

大神軻遇突知神

かまノかみながみの おやなればあまのかまやのちよのよをへ
釜 神皆神々乃親成は天乃釜屋の千代乃世を経る

止上権現宮備所右御祭之節備所より繰出揃之事

榊葉



奥山や外山おりの榊葉を一枝かけて神に請せん

榊葉にいふしへ付て誰が世に神の世也と祝福あけん

本社宝殿

大殿神輿陽神 但御饗膳大戸ノ口より奉上ケ候由

本社宝殿

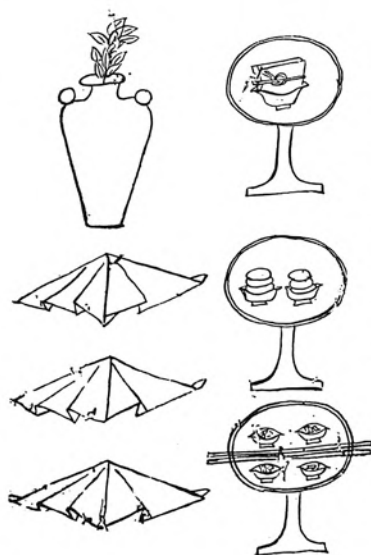
大殿神樂陰神 但御饗膳大戸ノ口より奉上ケ候由



本社宝殿

東殿神輿法鉢

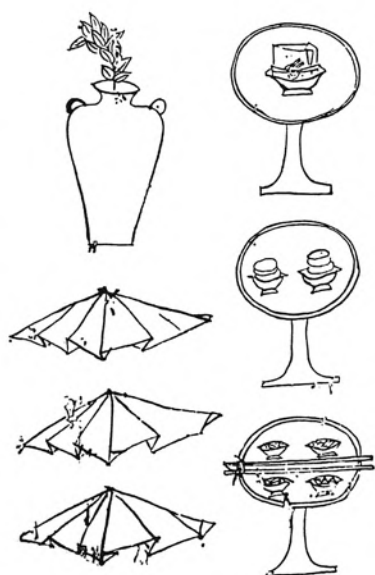
但御饗膳東脇戸より奉上候由



本社宝殿

東殿神輿男鉢

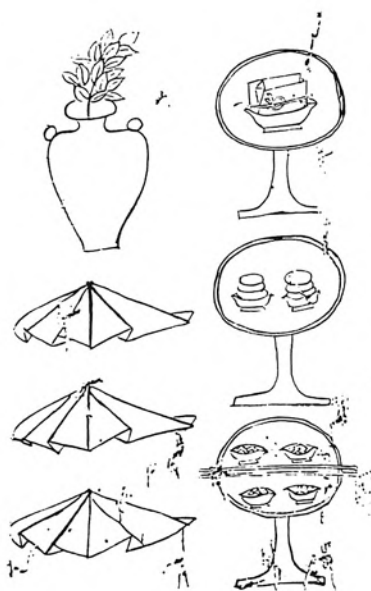
但御饗膳東脇戸より奉上候由



本社宝殿

西殿神輿男神

但御饗膳西脇戸より奉上ケ候由

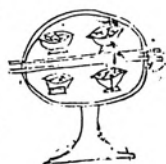


三 止上神社関係

本社宝殿

西殿神輿女神

但御饗西脇戸より奉上候由



本社宝殿

御簾若宮饗二膳

但御饗太戸ノ口より奉上ケ候由



若宮神社饗二膳

早風神社饗二膳



両社左善神王



両社右善神王



本地堂薬師



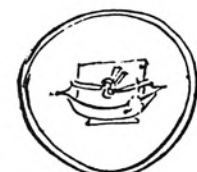
幣之饗三膳



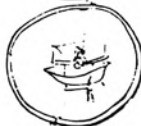
三の社七座并石鉢



入口之饗三十膳



王之饗六膳



神供之御饗調御備所二置棚司役神□御膳を清め祓仕候由



俱御備所之御棚□棚司神を祭へし

へ 穢する□□□乃内の清ければ神もろともに身をそき

三字不明

よむる

へ火をもらひ水を清むるみつしも乃風にまかせてはな

れてそおく

一 止上権現御祭之事

正月元日、同月三日、同月六日、同月七日、同月十

四日、同月十五日、同月廿二日、同月廿三日、同月

廿四日、同月廿五日、二月彼岸、三月三日、五月五

日、六月廿九日、夏越、七月七夕、八月八朔、同月

十五夜、同月彼岸、九月初九日、同月中九日、同月

乙九日、十月初亥日、同月後亥日、十一月廿八日冬

籠十二月廿五日煤下

二十五ヶ度頃古来祭祀有之候

右御祭日、永禄七年甲子六月廿九日先座主善門坊海

存被書付置候

一 権現之祭日十一月廿八日并正月元日ニ御酒鈴壺対霜

月朔日志めおろしに鈴壺対祭紙幣紙壺束程座主役正月
七日之祭正祝子役なり、正月廿三日之祭大宮司役也
右之通権現宮大祭ハ如此御座候由

寛久十年庚戌七月廿三日之書付ニ詳なり

止上権現服忌量

天文九年谷口弥四郎□□□ニ而
止上服忌量を書留

一 父方之祖父祖母伯父叔母忌廿日服九十日

七十五日

一 父母忌五十五服向り月

一 兄弟子ハ忌廿日服四十日

一 荒膚あら百日 一 孕女生月ニ成候可不参

一 子父男ハ七日女十日一 産而四十日いむべし

一 鹿完七十五日 一 猪完三十五日

一 蚪蛤はまぐり雉子鳥七十五日

一 兎うさぎたぬき三七日魚三日小鳥七日かもしゝ三十五日

一 炙治三日 一 間觸三日

一 女月水ハ八日 一 大蒜ひろ七日

一 世間之他入七拾五日

一 赤火腹あかひ七十五日

天文九年

一 権現宮御祭之御膳御皿の盛物御汁葉

昆布 大根 串柿 九年母 苔 山芋 蕪 ところ

ろ おやし 草薺せり

右御皿ハ野里山海之寶物を盛候、但七品五品三品皆共ニ切

りて御皿にもり候、高坏之御膳壺ツニ四組之皿、壺尺

式寸之御箸ヲ置、但栗ノ木・椎ノ木を用へし、御菓御皿一ツ

に白餅三ツツ、盛て、御皿式ツニ餅六ツもり候、高坏

之御膳壺ツニ御皿二組ニ仕候、御饗但壺舁山盛の飯、

菅盛とて飯の□高立ての紙半切紙を横に引廻シ包む、

其上を茅を以て引廻シ結候なり、是を山之饗といふなり、

高坏之御膳に菅盛の山之饗壺ツ置候、

御酒瓶之口ニハ榊木の皮をさし候也、

一 幣切之大事

手にとりしちをハなにといふやらん

文殊の利劔ふそうくりかし

この竹ハたかまかはらにおゆるたけ

神代のやうにたつとてさきけ

このかミは紙に成ても神なれハ

へいになりても神のすかたよ

此いたわはんの板とハたれかいふそ

あくまをはらふあくたら板

一 幣を建る時之歌

へい立る爰もたかまかはらなれば

あつまりたまへ四方よもの神く

一 鳥居を通ル時之歌

神のます鳥居をいれはこの身より

日月宮殿みやとのやすらかにすむ

一 鰐口打時之歌

うちならすかねのひゝきにゆめさめて

あうんの二字を聞そ嬉うれしき

一 神前之鈴ヲ振ならす歌

ふりならすすゝのひゝきにゆめさめて

神はあらたにいさみします

一 開固之歌 先鑰を取て唱る間に御戸を開て曰、

あけらるゝこかねあけらるゝ簾おしあけ見れはなにもなし

三 止上神社関係

神のみまへはあかき成るもの

一 御戸を押立唱曰

こかねミすおしたて見れはなにもなし

神のミまへハくらき成るもの

一 御戸を押開時之歌

ちわやふる玉の太戸をおしひらき

祓の聲を聞そうれしき

一 御簾を卷上ル時歌

ちわやふる玉のすたれをまきあけて

きねんの聲をきくそうれしき

一 神楽時之歌

ちわやふる神に祈をかけまつる

かたしけなくも祭のミかくら

一 棒御幣時之歌

おゝへいをかさりて神にさゝけれハ

祈るいのりてかなふミてくら

一 秘歌

ちわやふるかミのしき地に松うへて

世をおさめぬることそめ出度

やをたつのそなれにおけるあちわひを

いまそまいるいせのおんかみ

あちわひをさもめてたくもとゝのれて

今そまゐれる宇賀のひめかミ

一 酒開之時ノ歌

此家のいぬ亥のすミにわきいつる

いつミにあそべ萬代の神

一 木綿たすきノ歌

ちわやふるふかきちかひのいふたすき

かけてもむつの道にかへさし

ちわやふる□しめをしまんがいき□

くらからぬ世をてらす嬉しさ

東風吹はにおひを越よ梅のはな

あるしなしとて春なわすれそ

ちはやふるしめ地かはらにあらわれて

わかくさつめるちかひ成ける

道遠くはるかの空をへたつとも

おもひをこせよわれもわすれし

一門守左善神王歌曰

ちわやふる神のミかとのまもりツ、

悪魔アツマを拂ふ弓矢をそもつ

一門守右善神王歌曰

つけの弓蓬よもぎの矢にて拂ふには

あくまき神もおそれおそなす

榊葉にゆふしてつけてたれか世に

神のやしろといわひそめけん

千はやふる神の井かきの内に居て

ぎかくの聲を聞そうれしき

千はやふるむかしの神のおしへにて

八重のしほちをとをるへきかな

千はや振立舞あそふおいかせに

むかひかぬ神ハましまさすもの

千はやふるわか身ハ神やしろの社にて

いているいきはけ宮内宮

千はやふるわか身こゝろのきりくるを

はらへは空にす□る月かけ

すけしあらはまたわかこゝろき□もつる

雲のうへ成る乙女のすかたふちかける神

きわめてのきたなき(ママ)广里なけれハ

氏人のミつかききよし清し

日の本のくにのはしめを尋ぬるに

ほこのしつくやあしわらのさと

千わやふるほこのしつくのこりてしも

わかくさうめる島となりける

ちはやふるあまのさかほこなかりせは

たれわかくさのたねを作らん

一霧島神之歌

あをくさ□つミにかわりて燃のほる

けむりそ神のすかた成けり

止上遷宮入目

一金蘭壺尺四方

一中紙壺束式帖但旗用

一上紙二帖但御幣用

一鏡壺面

一大文字錢 御年之數

一公郷三膳但御膳用

三 止上神社関係

一 茶碗三ツ但御膳具用

一 土器十二但右同

一 中紙沓束但檀布施用

一 錢貳百文但檀布施用

一 布沓反但檀引用

一 錢沓實文但布施用

一 こも三拾枚

一 茅蓑六枚

但貳百八文此内祝子江入

一 道布四端

一 油三盃

一 能米沓表沓斗但佛供御酒祭御供案花米人供

一 大蠟三丁

右御先代之遷宮ニ略仕候而も、此分ハ無之候而不叶儀

ニ御座候、無祿之寺ニ御座候故、自分ニ仕り儀少_茂及

力不申候条、各々入目被仰付候様ニ奉頼候、以上、

止上宮座主

申十一月十日

安養寺

曾於郡住人

本田孝左衛門_{在書判}

寺社御奉行所

御使衆中

右遷宮入目帳ハ、享保二十一年丙辰四月十一日ニ内遷

宮有之候節、馬具入ル箱_ハ遷宮古帳見出候ニ付、書写

置候由、右古帳ハ、寛文八年戊申十一月吉祥日、止上
本社宝殿再興之時之古帳か与存候、

止上権現宮内外遷宮料帳

享保五年庚子三月十三日
止上宮遷宮録之内

銀七拾九匁七分

右御修補之節、本社并両善神王内外遷宮料_口入佛

揆遣一通入目料、御物_ハ相渡候、座主坊社人中申談

遷宮相調申候、

止上六社権現宮

一本社 御修甫之節、内外遷宮料銀七十九匁七分之内_ハ

相調申候、

一両善神王 御修甫之節、内外遷宮料銀七拾九匁七分_ハ

内_ハ相調申候、

一本地堂 御修甫之節、入佛揆遣右同、

止上権現宮内外遷宮品物

一真米六舁 御修甫成就之節、御假殿・御宝殿清_ノ穢

用、但身曾貴穢・六根淨穢・中臣穢三種穢、

一錢三百三拾三文

一荒薦三拾枚

一道布三端

一蠟燭四丁

一真米四舛但御修甫成就二 一錢百三十三文

一油貳盃

一御供米壹斗貳升但上白米

付清メ稜用

一御汁菜但山芋三束

御神鉢六座江壹升ツ、兩

一荒こも六枚

一蠟燭四挺

一御菓子但柿搗柑九年母間

度饗十二膳奉備用

一油半盃

一神供米四舛但上白米

一餅米壹斗貳舛但上白米

一御酒諸白但十貳盃

一御汁菜山芋壹束

御神鉢貳座江壹升ツ、

一中紙三束但幣白用

一棗但白米三舛

兩度御饗奉備候、

一人夫拾人

右品物拾四行、昨年中勤方調入具、但遷宮相濟、祝詞

神樂仕申候、

本社供養法品物

右社家中勤方品物十二行奉備、祝詞神樂仕申候、

一檀引壹端

一中紙壹束

本地堂入佛揆遣品物

一油半盃

一御供米壹舛但上白米

一檀引壹端

一中紙壹束

一佛布施錢百文

一土器三束

一油半盃

一御供米壹舛但上白米

一小豆五合

一人夫貳人

一佛布施錢百文

一土器壹束

右本社内遷宮座主勤方供物、御本地藥師法一座行仕候、外遷宮之時ハ供物無シに修法仕申候、但佛供二盃

二而供養法、次二觀音經六卷誦誦仕奉法樂候、

一人夫貳人

両善神王内外遷宮品物

右御本地堂入佛品物、藥師供養法一座仕候、揆遣之時ハ供物無之、佛供二重備て右供養法一座仕申候、

三 止上神社関係

右者享保四年亥冬御修補被仰付候節、遷宮仕候古帳紛失仕候故、古来より勤来り候通、右之品物ニ而相勤候、後來為見合如此二候、

享保五年庚子 止上權現宮別當兼林寺常住

三月十五日

覚遍

止上權現本社并両善神王内外遷宮諸入目覚帳

(この間二枚脱落)
一御参銭 三拾三文

一茶壺包 代弔八文

合銭弔貫五百五拾七文

右之通外遷宮ニ召仕候、後年為見合如斯書記置候、以上、

社頭取

享保廿一年丙辰三月十七日 上原弥太右衛門

尚常

覚

内遷宮用

一餅米三舁三合但シ 代銭百文

一茶米弔舁三合 代銭三拾七文

一参銭三十三文

一米弔升三合

代銭三十七文

一参銭三十三文

一御供米五升

代銭百四拾四文

一蠟燭貳丁

代銭百貳拾文

一御酒八盃

代銭百八拾文

一木綿弔端

代銭三百文

一味噌六百匁

代銭七拾貳文

右之通内遷宮ニ召仕候、後年為見合如斯書付置候、以上、

社頭取

享保二十一年丙辰四月十一日 上原弥太右衛門

尚常

一鐙箱但唐櫃一箇

黒塗り、内木色塗り、箱内のり横廣さ二尺弔寸

八部、妻ノ横ノ廣さ弔尺九寸五部、外高サ足ま

て貳尺貳寸四部、桐の木、

唐櫃一箇

右止上宮御寶物、正式御鐙唐櫃及破損候ニ付、此節

從善次郎殿被到寄進之候間、宜被御奉納候、仍如斯

二御座候、以上、

元文元辰八月廿一日

織田甚七在書判

市来新五兵衛在書判

市来茂兵衛在書判

老山四郎右衛門在書判

乗林寺

深亮御房

右之通、從 善次郎様市来新五兵衛御使二而、被遊御

寄進候由、為後年如斯書寫置候畢、

元文元年丙辰

止上神社頭取

八月二十三日

上原弥太右衛門

止上神社別當

乗林寺

深亮房覺遍

唐櫃一箇但黒塗り

右者止上宮正式御燈櫃及破損候故、此節、善次郎様

被遊御寄進候二付、止上別當深亮房より御奉納可被成

旨、加治木御近習衆より添書有之候条、御神殿江奉

納可被仕置候、仍如斯二候、以上、

元文元年丙辰

噺

九月廿一日

五十嵐長左衛門治澄

塩川次郎右衛門満明

本田与左衛門親安

後藤五右衛門章常

止上社頭取

上原弥太右衛門殿

各神職社家中

右此一巻、止上別當乗林寺深亮房覺遍書改置被成候二

付、為寄進書寫之奉納候、尤本書一巻乗林寺江格護被成

候、此一巻無紛失様ニ社家衆中格護可被成候、以上、

元文四年己未

書者

三月吉日

川越清左衛門

實明（花押）

止上社頭取

上原肥前殿

止上神社萬覚書より抜粋

覚

鳥目拾貫四百五拾文

曾於郡

止上権現宮

銀ニシテ百式拾五匁四分三厘

一舞殿

五敷
三間
七間

修補葺替

一長廳

四敷
七間

右同

一本地堂

六敷
三間

右同

右ハ訴訟依申出、此節為修補葺替料右員數可相渡候間致受用、堅固ニ可相調候、先規之外廣目候儀令禁止候条、如前々之相調、成就之首尾當座江申出候様ニ可被申渡候、以上、

寶永四年亥二月十六日

寺社奉行所④

相良權太夫殿

留守居

右之通被仰渡候間被致承知、修甫葺替成就之首尾、寺社奉行所江可被申出候、修甫銀之儀岡留掃部方江相渡候間、是又可被得其意候、以上、

相良權太夫留守居

亥二月十七日

相良彦次郎④

曾於郡

噉中

覚

末社并乘林寺修甫用とシテ、掘地ニシテ此節直御竿ニ付、願申出度望ニ付、見分方とシテ此方并山方役差越候上、地面等宜敷場所願申度申出趣申談候処ニ、来ル十五日、此方山方役も可差越候間、重久村庄や、名主出合有之候様ニ、御方も可被申出候、^(世)直御竿方掛役々衆御方

へ者、右之考を以手當いたし、不洩様申出可被置候、以上、

本田安左衛門

以上、

乗林寺^④

(寅)
才四月十六日

吉祥院様

其元止上權現本地堂此節修甫付、入佛發遣料先例之通相

渡候様、別當寺乗林寺より申出、各次書を以申出趣有之候

得共、此跡發遣料相渡候次口不相知候間相糺、此跡相渡

候年簡等早々可申出候、此旨申越候、以上、

正月十日

寺社奉行所

曾於郡

郷士年寄

曾於郡

御唎衆中

三月吉日

浅谷長四郎

右長四郎智筆者

五十嵐諸右衛門

覚

錫杖立 唐口 一鉢

右者、貴院持佛堂江御預置申候間、使之者江御渡可被下

候、拙僧事も今日敷根蓮持院江入院仕候二付、如此御座

候、扱先日者段々忝奉存候、後日御面上旁御禮可申上候

右真米四石、施主九人より、此節為寄進差上候、左候て
借付方之儀は、右七組ニ相分ケ、利足米拂方之儀、右帳
内ニ被相糺候通り、七組氏子中より被申談候、且右之通
り被申出候條、後年右帳内之通り於相滯者、神主方より其
沙汰尤存候、以上、

時唎當番

享保九年甲辰

四月六日

塩川助兵衛

詢伴（花押）

右條々可相守之、於有違犯之輩者、可被處嚴科旨所被

仰出也、

天和二年五月 日

噯

後藤五右衛門

同

細山田諸右衛門

覚 写

御厩出役衆

町田次郎左衛門殿

大根占城之元村段門百姓

平藏

「御高札式目」

定

一 忠孝をはけまし、夫婦兄弟諸親類にむつましく、召仕之者に至まて憐愍をくハふへし、若不忠不孝之者あらは可為重罪事、

一 萬事おこたりいたすへからず、屋作・衣服・飲食等に及まて儉約を可相守事、

一 人賣買堅令停止之、并年季に召仕下人男女共に十ヶ年を限へし、其定を過ハ可為罪科事、

附、譜代之家人又者其所に住来輩、他所江相越在付、妻子をも令所持、其上科なき者を不可呼返事、

右、春山野御牧馬狼喰殺候ニ付、右様防除方祭とシテ右平藏江、御厩出役衆相付被差越候、入具、棚高サ三尺三寸、荒こも三尺方、藁こも三枚、入水ニ付祭方有之筈候、

酉三月廿四日被仰渡写

「右一件ニ付、極月廿八日比ヨリ戌正月初迄、一七日祈禱有之候得共、狼出る事不得止事、祈禱中ノ場ニも出、弓ニ中リ、其上只今ニ至リ毎夜程出候事、」

「右一件、此帳ニ留置ハ誤リ、然共消不除

山寺燈

貞昌判
慶長十九年八月五日

山寺に 生そふ松の 木の間より

景靜なる 法の燈

右遠州日坂郷

伊達方村住人

生年九才方救

享和元酉年林鐘十日二詠

「右、享和二年戊二月十四日、寺社方出役衆松田宝左衛門殿

御廻勤之節、念佛寺へ臺明寺可雲房同道二而罷出候処、右歌

念仏寺和尚より御見せ候付、写置候、」

写

知行目録

隅州曾於郡重久村之内

知行目録

隅州曾於郡重久村之内

高三拾壺石式斗五升九合免浮

右之知行、止上為神領被成寄附早、宜有領地、向後御神

事・軍役無緩可被相勤者也、

伊勢兵部少輔

貞昌判

三原諸右衛門尉

重種判

比志嶋紀伊守

国貞判

町田勝兵衛尉

久幸判

止上御神領

写

知行目録

隅州曾於郡重久村之内

高式拾三石者 浮免

右之知行、應此中之公役高被宛行者也、

比志嶋紀伊守

慶長十九年八月五日

伊勢兵部少輔

貞昌判

三 止上神社關係

三原諸右衛門尉

重種判

町田勝兵衛尉

久幸

春口善三郎殿

「右春口子孫奠之今文書自分預置、寛文之比迄春口外記ト云人此邊江居住ス、永野田之内萩ノ渡瀬ノ邊ニ居住為致様子、已後断絶ス、」

一寶曆十三^{癸未年}、高老石ニ付出米八舁^合、賦米^合舁^合二而候^二、其上重ミ^合舁^合五合被仰渡、出物藏江上納也、

一享保十年^{乙巳}四月、大御支配持留、御竿奉行福崎五郎左衛門殿、筆者徳尾武左衛門殿、所噺清藤五右衛門、郡見廻小川千七、筆者五十嵐長左衛門・小城庄左衛門・川南休右衛門

一享保九年^{甲辰}四月、屋敷竿方津留伊兵衛殿、筆者有馬庄兵衛殿、外城筆者三人、蒔見式人、竿役式人被差

越、所内筆者五十嵐長左衛門・川南休右衛門 川越五

左衛門三人罷出候、噺清藤五右衛門、郡見廻川越五郎

右衛門、與頭老^人、田口村終リニ而相詰候、

一寛延二^{己巳}四月、大御支配後、再見御竿奉行相良次兵

殿、大御支配同前惣御竿、

一寶曆五^{乙亥}四月、右再見竿之節、新持留初而竿入有

之、右地方ニ又々竿入、御奉行木村四郎左衛門殿、

一寶曆十四年^{甲申}正月、五ヶ村新持留願御竿入、奉行四

元八右衛門殿御越被成候、

一慶長十年^{乙巳}、平田越前事ハ平田太郎左衛門事ニ而

候、

蒙御勘氣鹿兒島居住不罷成、夫々国分宮内正八幡敷地

沢右近兵衛ヲ頼罷移咎候^二、平田之一族御誅罰ニ

付、越前事ハ宮内ニ而切腹也、五十嵐長左衛門事ハ平

田越前ニ相付宮内ニ居住仕居候^二、越前^{切腹}被仰

付、同年曾於郡内松永^江居之由、

一十聲寺家直シノ事

(右者ケ)

念佛寺内ニ有之、念佛寺七代良心大和尚御隱居所

二而、其後僧十代彼地ニ有、十一代弟子圓重、寛文六年丙午、今ノ地ニ引直シ被置候、

一田口村田地硫磺水ニ而不熟ニ付、鉢池水新溝調享保十二丁末十二月ノ取付、檢者米良喜右衛門殿・川崎新石衛門殿・桑畑藤右衛門殿、

一同田地用水硫磺水荒冷水之故、中途江溜池有之候ハ、水和ニ相成、田方毛上熟可致、前之郡奉行永江勘左衛門殿御見立、寶曆十二壬午年相調被成候、

散米呪文

天下 和銅 天真 社心 珍寶 圓滿 五穀 最上

社頭 繁栄 氏子 繁栄

右、渡部右京傳

享和二年戊戌無月七日

一清水外城建年号可相糺、天正年間之御地頭税所越前守久心、其比居地頭ニ而、曾於群衆中被召列、清水へ罷移候由、

一隅州横川土上原藤左衛門殿家糺之事、古來國分ニ而御奉公仕候事、

一上原奉前兵衛嫡子上原形部左衛門嫡子上原奉前兵衛、

此代ニ横川地頭上原大藏太夫殿ニ而、同名之由成ヲ以

親子四人移被成候、

上原奉前兵衛殿

一月菴芳春居士 貞享二乙丑
十一月十三日

右同室

一葉山妙經大姉 元禄六酉
正月廿一日

上原形部左衛門

一雲山玄朝居士 元禄十五年午
七月九日

右同室

一明吞妙秋大姉 正徳二壬辰
十二月十七日

右四人迄ハ、宇田七左衛門殿覺之通

一□分小道江差越候処ニ、肥後喜平次殿御出被成、蛟嶋

喜左衛門殿江右糺方頼来、本法花宗ニ而國分中相糺候

処ニ未不相知、今日者自分家江委細□由、

金剛寺御文書写

今度國分江就被移御殿為祈願所、吉祥院知行之内貳拾石、新知八拾石、合百石被宛行訖、所中之諸役可為御免

許、京儀国役之事ハ可被相勤者也、仍状如件、

手形

山田越前入道

米拾六石者、大蓮院江可被相渡候、寛永七年、同八年兩

慶長十年季冬十四日

理安判

年之御扶持方取後候由、御佗被申上候二付、如斯候也、

伊集院下野入道

寛永十一年十一月廿四日

抱節判

兵部少輔印

金剛寺

左近將監印

「宝曆九年卯十一月廿六日焼失」

弹正大弼印

福屋五郎兵衛殿

延壽寺御文書写

「国府御地頭歟可訂」

覚

妙蓮様為 御位牌所、遠壽寺被立置候、後年不致破壊様

隅州曾於郡上小川村之内

二、貴所暖之從御蔵入、可被相調者也、

高五石者、但

浮免

寛永十一年十一月十四日

兵部少輔印

右之地、為新知令配分候、弥以蓮昌様御靈前之儀、無

左近少監印

平田久兵衛尉

弹正大弼印

慶長十二年九月廿四日

宗親判

福屋五郎兵衛殿

山田越前入道

理安

喜入大煩助^(歟)

久正判

遠壽寺

「右国府遠壽寺御文書写」

一 国分中之僧俗近年道学之心懸うすく、我慢之族有之由不可然候、向後本寺又者導師を輕し、修学等之志有者を妨に成、又者法會なと申なし、口事議論を企候僧於有之者相糺、急度可申付旨寺社奉行江申付置候、且又修学之志者堅固ニ雖有之、無福故難動段無紛僧者、志相遂候様ニ可令供養候、右之旨得其意、宗門法式を不乱如法相勤、早竟道儀不衰様ニ可接得也、

寶永二年十一月十五日 吉貴印

遠壽寺

「国分龍昌寺御文書写」

今度国分江就被移、御殿為新地建立、本地式拾石并當八拾石、合百石被宛行早、所中之諸役可為御免許、京儀国

役之時者可被相勤者也、仍状如件、

山田越前入道

慶長十年極月十四日

理安判

伊集院下野入道

抱節判

龍昌寺

「右国分龍昌寺御文書」

忠久尊君御入部承久三辛巳御供衆

貴嶋	西郷	有馬	岡邊	鳴海	山内	藤井	渡邊 ^(虫)	鎌田	忠久尊君御入部承久三辛巳御供衆
谷山	勢能	伊築瀬	海老原	中山	安楽	奈古屋	甲斐	田国総	
別府	白川	村上	立山	大井	安達	鉢屋	土井	鯨嶋	
野邊	町鼻	奈須	佐沢	井上	隅田	蓮野	岡崎	三浦	
三俣	豊嶋	入間川	愛郷	長尾	添崎	矢部	玉井	伊達	
大寺	白鞍	佐野	岩下	鳥取	横山	進藤	和田	佐武	
矢木	加藤	宇都上	蘭田	大石	市来崎	寺尾	葛木	神崎	
若松	難波			高橋	用藤	惟宗	森	雲野	
							塩尾	武石	

三 止上神社関係

藤沢 星屋^{ホシヤ} 科川^{シナカワ} 野間田 穂辻^{ホツシ} 魚沢 岩崎 成田
篠原 天階^{ハシ} 志田^{シタ} 臼井^{ウスイ} 美豆間^{ミヅマ} 宮崎^{ミヤザキ} 瀬下^{セノシタ} 大田
天明 熊谷 小野 川野 河崎 佐藤^(忠) 田子浦
大野 森崎^{イノマタ} 井俣^{ヘミ} 邊見^{ヘミ} 小坂^{コイタ} 安部^{アベ} 下山 鳴尾^{ナルツ}
久木崎 江田 釵持^{ユヅ} 弓削^{ユヅ} 宮原

右日吉山王宮社司渡邊右京家傳ノ書ニ有之、享和元酉
八月十日、於臺明寺良永法印与咄ノ門ニ書写候、

「隅州」國分

大平山國分寺文書

^{「足利六代義教公」}

相國寺普廣院之儀、京都依錯乱及退轉候、就其蔭涼軒下
國候、此節再興之馳走可被入、猶昭光可申也、

九月十五日 御判

為天下御立願、金泥心経列々、國分寺御奉納之勅使四辻
宰相中将殿御下向、其國御経被仰付候条、一遍近之候、
尔、御祈念尤肝要候、恐惶謹言、

七月四日

大膳太夫義祐判

右御文書本田作左衛門殿家ニ被傳候由

年号付ナシ、尤可相知事、可考、

寛政十二年申十月十八日、鮫島宗恒先生被安置候書ノ

内ヨリ書候、於清水弟子丸宅、

大膳太夫義祐、日州飢肥城主歟、時代不當、普廣院ハ嘉

吉年号、御家ハ九代忠国ニ相當ル、乍然諸書可見合、

右道中ヨリ義祐受取持来リ傳フ、

一天正十九年辛卯年、細川幽齋老御下向ニ而、大竿入有

之、寺社高勘落被仰付被召上候由、但勘落之儀、神社

并佛閣之間ニ而、段々文書相見、

一文祿三年^{「毀破ハ此時也」}甲午十月、薩摩・大隅・日向共ニ御檢地

有、薩州ニ而竿頭京衆黒川殿、大隅ニ而ハ中小路傳

^(忠) 日州諸縣郡ニ者竿頭大橋殿、^{「日州表ハ白井三郎右衛門・大橋基右衛門トアリ」} 屯手ニ京衆筆者勘

者六十人宛之由候、御国^(忠)も御檢地奉行三人被仰付

候、御檢地^(忠)り竿米壺石高壺石ニ究候、元和六年^{庚申}

寺社高被召上候、

桑原郡宮内

正八幡宮

大永七年十一月廿八日、新納・本田着陣之節、社内ノ
小舎ヨリ火起リ炎上スト云云、天文廿年九月十九日、
造立ノ事ニ付 綸旨ヲ 日新公頂戴、永祿三年十二月
十三日、社頭再興成而遷宮ト云云、

國府

慶長九年甲辰極月、 龍伯公此地江移玉フ、新城山下
ニ御屋敷構有之、

新城

往古隼人城ト云、清水本城ニ對シテ、本清水ノ内也、
天文十七年、本田叛逆ニ依テ、伊集院忠朗奉テ攻之、
五月廿二日ヨリ同廿四日迄攻落之、御城ヲ柁山善久ニ
預玉フ、

濱之市
富隅

文祿四年乙未十月、 義久公此地江移玉フ、

一曾於郡

一清水

一國府

一敷根

一福山

一日當山

一踊

一溝邊

一加治木

一帖佐

一山田

一蒲生

一吉田

一庄内表

右諸所衆中、在郷以勤、曾於郡止上權現之宮可有再興由
候間、心落次第可入奉加二者也、

「寛永十二年乙亥也、本書ニツ折横紙、御判摺テ難写ニ付此通」

乙亥十月十一日

「中納言家久公御家老職、三原左衛門重饒、後重庸」

覚

左衛門佐

三 止上神社関係

「鎌田出雲守政統、後治部少輔」

出雲守印

「山田民部少輔有栄入道昌嚴」

民部少輔印

「川上式部少輔久国後左近将監因幡守」

左近将監印

「嶋津彈正大輔久慶」

彈正大輔印

○御役格覺并御賦覺

○御家老

五拾人賦、万石以上六拾人賦、

○御側詰

三拾五人賦り、江戸詰之節月番兩人

試り、

○若年寄

三拾人賦

○大目附

貳拾五人賦

○大番頭

貳拾三人賦

○寺社奉行

貳拾三人賦

○勘定奉行

貳拾三人賦

○御小姓與番頭

貳拾貳人賦

一當番頭

一御側御用人

拾八人賦

一御用人

右同

一町奉行

拾七人賦

一御側役

拾五人賦

一御隱居御側役

一江戸御留主居

拾五人賦

一京都御留主居

右同

一大坂御留主居

右同

一御納戸奉行

拾四人賦

一御納戸奉行

同格

一物頭

拾四人賦

一御鍵奉行

一御鉄炮奉行

右同

一御船奉行

拾貳人賦

一御使番 一御近所廻り

一御小納戸頭取

拾壹人賦

一御廣敷御用人

拾人賦

○教授・御近所廻

拾人賦

○御祐筆頭

拾人賦

○小十人頭 御役格直觸二而候、

○御作事奉行	同賦	一郡奉行	同
○御普請奉行	同	一金山奉行	同
○御記録奉行	同	一御細工奉行	同
○長崎御付人	同	一屋久嶋奉行	同
○高奉行	同	一宗門改役	同
○物奉行	同	一御鳥見頭	同
○道奉行	同	一御鷹匠頭	以上六人賦
○御馬預り	同	一御同朋頭	八人賦
○御小姓頭取	同	一御茶道頭	六人賦
○御側目附	以上拾人賦	一御作事奉行見習	
●御小納戸	六人賦	一唐船改	五人賦
●御抱守 御小納戸格		一寺社方取次	
一御供目附	同	一御勘定方小頭	
一御目附表	同	一御庭奉行	
一御祐筆 御近習通	同	一磯奉行	
一御二男・三男御抱守	同	一御畔奉行	
一御廣敷番之頭	同	一御鳥預頭取	
一山奉行	同	一御膳所	以上五人賦

御代官 御臺所役 四人賦

謹敬

奉懸御願文事

三重一字塔、可有再建立者也、

右祈精意趣者、藤原 貴久實言承、奉掛上處也、依之

大檀那武運長久 國家安全 万民快樂、蒙神護誠以無

疑乎、

抑當社大菩薩元旨者、清淨法身毘盧舍那(ミナ)圓滿尊 和光

同塵、為國家擁護現正宮、双位天地日域扶桑鎮守、殊者

當家守御定、哀憐利生新初後無怠、只不如至精誠薩埵威

光者、異日月星宿光明哉、仰乞上者有頂天下建輪際〔此字本書落字改書之也〕、梵

天帝釈四大天王、總地類哀憐師檀懇倉、建立成就祈精納

受給而已

天正四年辛酉文月吉日

佛子照皆在判

此願文、〔加賀國〇関東富樫介子ナリ、国主ノ御子也ト説アリ、実正ヲ不知〕日秀上人奉建立大隅正八幡宮、内殿納之給本書

ヲ以書寫、甚了房覺遍、享保第三戊正月十一日、於潮音

院覺阿會下刻地藏序書之也、右寫有之候間、自分又々書
寫早、

寛政十二載申二月九日

尚寿謹拜書

屈指檢古考、享保二年マテ創五百八十七年ニ成、

享保五庚子正月八日、臺明寺御文書内ニ止上宮御供料田

相見得タリ書之寫、止上宮別當乘林寺僧覺遍誌之者也、

他日為考書之、

承安三年十一月十五日ノ文ニ詳也、文治三年四月十一日

ノ文書ニ止上号居執グイトト見ヘタリ、其外止上ノ由緒文書之

内ニ詳也、止上居執ト云ハ、今ニ重久村之内ニ字アリアサナヲ

リト、

中原朝臣ハ一字高ク書テ有之、其外ノ文書ニハ国司代中

原朝臣トアリ、此人ハ其時之守護代歟也、

寛政拾貳庚申中春初九日

藤原刑部左衛門欽拜書之、

〇守護社參之次第

薩摩惣廟開聞、大隅止上大権現、日向惣五社大明神号妻

宮、一番開聞、二番新田、三番大隅止上大権現（税所城、麓也）

四番正宮、五番霧島、六番妻宮、七番島津稻荷大明神、

忠久公以来、此七社二八何連モ毎年十貫・太刀一・馬一

疋宛先規進上候、

右書付、一乘院先師書付被置、同先師覺山御書付、瑞應

院先師快義代ニ被遣也、一乘院先師者頼盛也、

右書附御用之由承候故、書付致進上候、以上、

開聞神社酒作司

市來主作

享保十二年丙午五月十九日

○隅州国府祈願所

本尊千手観音

一五峯山龍護院金剛寺、寺地御免地、寺領五十三石、門

山覺遍法印、

正壽院 佛眼院 蓮花院 普賢院 喜福院 醫王院寺

地御免地、坊中六ヶ寺、新城五社大明神座主坊寺地・

稻荷ノ座主坊二ヶ寺共御免地、大乘院直末寺、右二ヶ

坊寺地金剛寺ヨリ格護、祭主清水北辰神司谷口氏

代々、

○曾於郡祈願所

本尊両阿弥陀佛 不動

一金峯山橘木寺吉祥院

寺領十石、開山信遍法印、

○敷根祈願所

本尊愛染

一福如山常高寺蓮持院

寺領壹石、開山明濟法印

○福山祈願所

本尊不動

一石上山平等院不動寺

寺領壹石、開山觀能法印

○踊祈願所

本尊正観音

一慈峯山長久寺真福院

寺領老石、開山忠實法印

○清水觀音堂主

本尊千手

一菊銘山真珠院清水寺

寺領無、開山賴譽法印

○曾於郡止上宮別當

一尾牟礼山錫杖院乘林寺

社領寺領無、中興覺惠房亮春

右七ヶ寺與中ニ而候、

享保十七壬子二月廿一日ノ書見出シ、書寫置候、尚壽

謹書、

○正宮御傳記写

大隅国

正八幡御寶前

東廳一灯施主

善法寺留守從五位下行紀朝臣景親在書判

西廳一灯施主

權政所兼國分寺別當三位佐馬頭息長宿祢

道隆在書判

御甕八箇

一甕施主 前正興禪寺形山西堂

一甕旦那 安木助左衛門尉時盛

一甕旦那 湯淺十郎左衛門尉重盈

御鉢 一箇

銚子 四箇

鰐口 一口

磬 一掛

御油旦那六十貫文 三角石見守平道賢

六十貫文 満五郎檢校

一甕旦那 谷口満四郎檢校

御寶前下灯明多々不知其数、然廳東西往古以来既斷絶

矣、

紀景親公・息長道隆公依有再造之志、兩灯不日成矣、

然則為永代連統、御油旦方兩人平氏道賢・満五郎檢校

奉拝進油錢百二拾貫文於殿守所、請取如件、仍神威所

致也、祭器御甕八箇・三甕所記如件、其外神物等以十方
旦那扶助畢功矣、

永祿十二年己巳八月時正吉辰

本願主

伊東怡益公

三角道賀上人

寺井丁虎

大工太夫國秀

右深亮法印書写被置候ヲ見出、又々書写ス、

寛政十二年庚申中春十一日 尚寿拜書、

○正八幡宮

當社本地垂跡精進契

註進 穢氣不浄社例杯不制之事

一本宮御寶殿一字三所御座

東 本地觀世音、垂跡俗躰、

中 本地釋迦如來 垂跡法躰

西 本地阿弥陀如來 垂跡女躰

一同若宮寶殿一字四所御座

本地 普賢 文殊
地藏 龍樹 垂跡童男童女

御身云云異說多之

同 武内本地 十一面觀音
異本毘沙門 垂跡大明神

同 早風本地馬頭觀音 垂跡隼人ヲ打給フ御鉾ナリ、

雨社 本地大日如來 異本正觀音

左右善神王 多門
持國

左右桑幡本地馬鳴菩薩 左二字
右一字

大菩薩諸社本地垂跡多之、末代神官等輒雖不能註進
之、當社所定震旦國陳大王之孫日天子所持故、此朝号
日本國、即扁舟流著之始、大隅國本住人隼人追却降伏
之後為鎮敵心、每季御放生會騎兵宇佐宮ニハ百六十
人、當社ニハ二百人今在之、依号大隅國正八幡宮云
云、

同石躰社 本社ヨリ丑寅之角、天承二天、始テ奉見顯

之石上八幡之銘字金色云云、

四所別宮 始良庄 荒田庄 栗野院 蒲生院

同以後、鹿屋 恒見若宮

吉田院善神王 加治木若宮善神王 祢寢若宮 山上若宮 薩摩方列之善神王

此外村々鎮守荒神等、委不及註進之、

右正宮殿守賴音所持之書也、賴音ノ父賴実、嫡男賴昌ト云、山伏ナリ、本書年号天文之比不詳、本書二次目相離候由、委深亮法印書記置候、

御家御戰城地覺 福山廻城之拔書

一 忠將公御戰死之場ハ廻氏代々居城ニ而、城主廻兵部少甫久元・育目長子次郎四郎ハ幼稚ニ而、肝付省釣其費ニ乘、永祿四年五月十四日、廻之城ヲ掠領、肝付治部左衛門ニ与之、同年六月廿三日、貴久公 義久公大軍ヲ率シ御発向被遊、大塚ヲ御本陣ニ構、右馬頭忠將ハ馬立ニ被陣取、諸卒ヲして竹原山ヲ守しめ給ふ、然処伊地知周防守重興、祢寢右近太夫兼長、省釣ニ致徒党廻ニ来リ加勢仕候、同七月十二日、肝付賊徒急ニ竹原山陣ヲ攻、味方難儀ニ相聞得候付、右馬頭忠將馬立陣ハ竹原山江馳向候、於途中敵ノ大勢忠將ヲ取囲相戰

候、忠昌之家老町田加賀守忠林ヲ始、相健兵一途ニ死ヲ相守奮戰仕候へ共、小勢難遁忠將終ニ戰死ニ而、一所ニ七拾余人伏屍候、忠將戰死之場ハ福山馬立坂、当分石塔有之、一町廿間計ニ而候、当分道路ハ北ノ畠ニ而御座候、左候而大塚御陣之勢馳向敵致合戰候ニ付、逆徒等敗北ニ而恒吉ニ□退去仕候、

吉水山光明院念佛寺現住二十世

洞雲院其阿惠海謹記

「右由緒、寛政七年卯御記録所ハ被差出候留帳より、自分为納得留置候、但拔書、」

寛政十年午十月十九日

上原氏欽拜書

霧嶋山由緒

大日本國開闢最初靈跡 霧嶋山十號

一 磯取盧嶋 一 霧嶋 一 高千穂峰

一 穗觸峯 一 襲峯 一 高原峯

一 最初峯 一 大浪池又名嶽池 一 □ 峯

一 毘遮斷廬峯

一 六宮大權現

正殿 四座

第一 天津彦々火瓊々杵尊
地人第三

同第四 天津彦火火出見尊

第三 彦波瀲武鸕鷁茅葺不合尊

第四 神日本磐余彥命 神武天皇亦名野皇子

第五 日少宮一座 ヒノカミヤ 四神相殿

國常立命 高皇產靈命 伊弉諾尊 天照大神

第六 山王 廿一社 七社相殿

大己貴命 國狹槌尊 惶根尊 神皇產靈尊

伊弉册尊 素戔烏尊 正哉吾勝尊

當山開基之事

古記云、人王三十代欽明天皇御宇有慶胤者、開基斯山建
立於神殿、其后神火洪發二而山盡燒失、然後曆于幾塞燠

矣、茲二性空上人登于當嶺而再興云々、以性空為開山不
呼慶胤名、自性空迄于道惠台家二十一代云々、

人王六十二代村上天皇御宇天慶年^{第三}己酉、性空攀陟^{ホリ}此峯四

ヶ年宇茲神殿及僧坊等造畢、開基宇當山至於道惠二十一

代凡二百六十年歟、然文曆元年十二月神火偉發テ神殿并

寺家咸值丙丁災燒失神代之靈寶大緣起宣命等者也、絕跡

退轉スルコト二百六十年、于茲蓋從文曆年中至文明年中

云々、

一中興開基之事

□當山二百六十載之間退轉而斷神供人烟、維時文明十

六年^{甲辰歲}、真言密宗徒兼慶法印忝蒙于大檀那三州大

守嶋津奥州 忠昌公之新命中興、兼慶自發大願持念絕

頂、無別從者、但橋本氏隨侍ス、今ノ社司橋元氏は

也、願滿尋求往古之社跡ヲ寶殿再興、御本社奉崇四神

并御本地六觀音尊客、右脇者日少宮御本地阿弥陀、左

脇者山王御本地葉師如來、自往昔御本地ト兼垂跡ト安

置社内ニ故、以習合ヲ為神道之根元ト、恒例祭祠相勤

衆僧與社衆卜、

一 神領五百四十四石九斗余、内七十石余坊舍并社司、其

外役高出申候、

太守義久公御寄進、慶長廿年三月十一日

一 香堂、称八曼荼羅堂、焚不断香火、古來傳云、性空從

神明稟續留當山云々、

一 御手洗川、建于水天社山際有清泉之湧、凡從三月末四

月佛生會已前出、至十一月下旬極月中流竭矣、

一 兩度川 水源花林蘭若東北山之半腹、五月上旬頃漸々

流出、歷旬日無一滴、更有數日洪涌出、至八九月流

涸、每年如斯、

一 稅所社、在稅所氏人祀焉矣、

人王五十九代宇多天皇第四王子篤房親王、正二位大納

言、人王六十一代朱雀院、天慶九年賜藤原姓、

一 野神六社大權現

所祭神六座、在田口村山野二、

天御中主尊 高皇產靈尊 天照大神 天萬桔幡千幡姫

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 玉依姫

一天子明神

所祭神三座、田口村二有、

蛭子命 天忍日命 天穗津大來目命

一 稻葉神社

所祭神三座、在田口村二、

木花開耶姫 倉稻魂命 猿田彦命

一 待世社

從本宮一里半、在田口村、待世二今作松瀬二、

六宮大權現

文曆元年甲午十二月二十八日、從絶頂神火差起一山燒

亡、御神跡并神代不断香火奉移待世二、其間二百六十

年、文明十六年甲辰、大檀那陸奥守忠昌公奉遷宮、往

古社跡其舊跡也

其五世篤如之代人王六十八代
後一條院御宇治安元年辛酉三月、下向

於大隅曾於郡、補任正八幡宮並霧嶋宮大宮司職、而辨

備神供調新嘗祭云々、

一十一面觀音畫像一幅

本宮御本地納社内

真如親王之震筆、當山不出靈像、當社寶物也、

一御本地堂 十一面觀音木像、大佛中興兼慶作、

六宮之御本地者六觀音也、當宮之御本地定十二面、性

空咸見故乎、脇士二十八部衆木像

一鎮守宮 安岡部大日如来、

一多寶塔 安五智如来像

一御假殿 天満天神荒神

一仁王門 金剛力士 中興兼慶作

口上

一官銀四枚

一同三拾五匁

ノ式百七匁

右者享和二年戊八月、官銀并願書差上申候処二、未御

許杖頂戴不任候間、何とそ被仰付被下候様御申上、奉

頼候、以上、

曾於郡止上宮社頭取

上原主膳

(寅)
才二月

諏方宮司御役所

御用聞衆中

書物

一家内三人 塩川善兵衛

一同三人 塩川喜助

一同三人 高橋七郎左衛門

一同四人 高橋次郎右衛門

一同三人 高橋清右衛門

一同七人 浅谷清右衛門

一同三人 上原伊膳

嘉永六年己未六月十五日

右之通申出候間、奉願候節二御免被仰付被下度奉存候、

以上、

巳十一月廿日

曾於郡噉

後藤五右衛門④

小川市助

本田兵左衛門

塩川助兵衛④

本田甚次殿

(包紙)
天保十二歲辛丑十一月十六日

上原伊膳

藤原尚恕

御證文

覚

国分

一畝^(灯)ちん 大津川 戈式文

加治木

一同焼酎 代戈八文

一同肴 代戈拾式文

重留

一同そば 代戈拾六文

吉野

一同味りん四ツ 代戈六文

帖佐

一同吊分ちん

(別府川カ)
表川 戈式文

新橋口

一同いもしやしる 代戈式拾四文

一同酒 式盃 代戈拾式文

鹿兒嶋

一同用不ろ 代戈十文

(表紙)

弘化五戊申年正月

年頭茶配帳

吉祥院

盛永代

受取

(印) 戈八百文④

三 止上神社關係

三月九日
一 茅拾貳わ
三月十九日
一 焼酎貳盃

代 貳 百文
代 貳 百文

留永門之源左衛門方

三月十三日
一 二寸釘百本

代 百文

一 同 四寸拾本

代 三 拾文

三月十三日
一 かわら

代 四 百文

高橋熊太郎

三月十三日
一 足付一薪

代 貳 百 三 拾 貳 文

桂四郎助方

三月十三日
一 焼酎拾貳盃

代 貳 六 百 文

一 同 六 盃

代 三 百 文

山下仲太郎

貳 貳 貳 百 三 拾 四 文

正 貳 拾 三 貳 百 六 文

内 七 貳 百 文 内 立 か へ

六 貳 百 六 文 の こ り

西二月廿九日
一 壺朱壺切レ

中村善助

三月二日
一 貳 朱 壺 切 レ
同
一 貳 朱 壺 切 レ

右 同 人
宮下市右衛門

右者、止上乘林寺薬師堂并茶之間修甫二付、私共立合諸
入目相記差上申候間、御吟味之上、證文被下度奉存候、
以上、

舊三月十三日

社頭取

上原式部

主取

山下市太郎

同

山下勘右衛門

同

高橋熊太郎

同

荒田三右衛門

同

浅谷三右衛門

同

浅谷清右衛門

普請見廻

塩川次五右衛門

當判

御郷士年寄衆中

上原肥前殿

證文

祭田神免地

田老坪 納米壹石八斗

外三斗下り

右者社頭役ニ而、為何余勢も無之、無高二而神職勤来り、無足者之故漸々差迫り、往々難續段訴被申出趣、役々致吟味、右人付其外書之通、此節々相下ケ、先々社頭取永作地ニ申渡候、右納米之内御定代致上納、先壹石御祭料ニ被致、殘米以前之通末社修甫料之ため、主取方江取納可被致、社頭取代合之節者、右地方次渡可有之候、為後日證文如斯候、以上、

明和二年

西七月十七日

噯

細山田十左衛門㊦

同

本田与左衛門㊦

同

川越甚左衛門㊦

同

細山田分右衛門㊦

止上社頭取

(上包)

天保十二歲辛丑十一月

上原伊膳

藤原尚恕

御證文

上原伊膳

右者別段之以

思召、此節被

召出、代々嫡々迄、曾於郡郷士社家被仰付候、二男以下是迄之通被仰付候旨、和泉殿々被仰渡候条、此旨可申渡候、

十一月 嶋 藏人

永作證文

重久村

古渡 下々田一間半 四間 六步

理右衛門

初式升

同所
下々田一間半
八十間四畦

同人

粗粍表壹斗七升

合粗粍表壹斗九升

高五斗六升貳合五夕

納米貳斗貳升五合㊦雜用込ル

右者重久村庄屋永作地ニ而、是迄支配仕来候処ニ、此度御檢地門割ニ付在中吟味之上、右地面上納残作得米止上御宮年中燈明用とシテ、御方江田坪相渡置候間、御方計ヲ以作得米可被召仕、後年支配相替候向茂、右地面御方可為永作候、以上、

文化三年寅

名主

源太郎㊦

十月 日

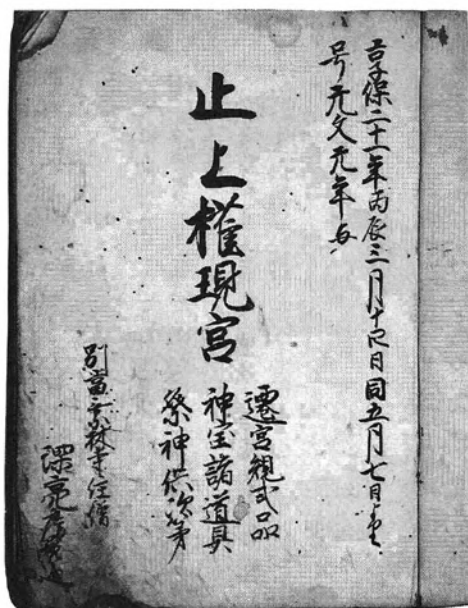
同

傳兵衛㊦

庄屋

獅子野理右衛門

上原主膳殿



『止上權現宮』(享保21年)

四 襲山郷寺社名所古城川筋調

「襲山郷寺社名所古城川筋調」は、襲山郷にあった神社・寺院・名所・旧跡などをまとめたものである。いつの時代に、だれによってまとめられたのかは定かでないが、大隅国一か寺の真言宗橘木寺や時衆念仏寺などの貴重な古文書も書き写されている。

原本の所在は不明であるが、複写したものの一部を重久道場口の馬場重俊氏が所蔵してこの度の掲載となった。当時、襲山郷であった霧島町と隼人町松永も含まれている。

真言宗大乘院末寺一所一ヶ寺祈願所

金峯山 吉祥院 橘木寺

本尊兩阿弥陀如来

一寺高拾石

一寺地御免地

但御竿不入、

一開山信遍法印

右開基之年簡相知不申候得共、往古ハ城内ニ建立候哉、其旧跡号橘木寺ト、白山妙理大權現鎮座ヨリ其南ノ方ニ五倫之石塔餘多有之、其内ニ弘安三年佛子淨顯ト有之、中古々寺并兩阿弥陀如来城下今地ニ引移之由申傳候、

鐘壺口

右ハ 貴久公 義久公永禄六癸亥年豊後御陳之節為御立願、右之兩阿弥陀并鐘一口被遊 御寄進候、其由緒書段々有之候処ニ、右寺十七代昌雄法印代ニ寺焼失仕候ニ付相知不申候、

鐘銘左ニ写

大隅國曾於郡金峯山吉祥院鐘事

右往古因由者雖為遊廻數中餘歲邦他郡相待奇持慈廣之賢土到來微妙不思議也可謂是於非情廢枯感杲理法尔自然道寔不可以言宣者歟

大檀英三州太守嶋津

貴久

藤原

義久

當寺住權大僧都融遍

舜慶

地頭藤氏重秋并

平田五郎丸

于時永祿六年癸亥

九月吉日

敬白

一 右兩阿弥陀如来古佛ニ而御座候故、當寺十二代之住持

快秀法印代、大乘院坊中護国院開山ヨリ彩色相調、護

国院江被致安置候処ニ、右寺本尊又ハ由緒之次第達

光久公様御貴聞、如本々之可相返旨御意ニ而、當寺十

八代之住持快秀代ニ右之本尊相請取于今安置有之、

一 豊後軍勢曾於郡豊後坂ニ打死仕候靈魂爲退治、一七日

阿弥陀如来供養行法融遍法印ニ被仰付相勤候、右依功

力ニ靈魂相治候ニ付、城野首ノ内畠方被成下之住侍

代々于今格護仕候、

一 住持代々

一 開山信遍

一 二世行遍

一 三世日印

一 四世朝遍

一 五世融遍

一 六世清辨

一 七世頼遍 吉祥院中興

一 八世覺遍 金剛寺開山

一 九世頼喜

一 十世宥尊

一 十一世真秀

一 十二世快秀

一 十三世快齊

一 十四世光壽

一 十五世寛阿

一 十六世頼喜

一 十七世昌雄

一 十八世快秀

- 一 十九世覺顯
 - 一 廿世慧朗
 - 一 廿一世覺端
 - 一 廿二世盛堅
 - 一 廿三世珪嚴
 - 一 廿四世珪嚴
 - 一 廿五世義逞
 - 一 廿六世盛慶
 - 一 廿七世盛臻
 - 一 廿八世盛意
 - 一 廿九世覺賀當代也
- 右開基之年曆并由緒之儀念佛寺被申出趣左ニ相写候、
- 曾於郡一所一々寺菩提所時衆宗相州藤沢山清淨光寺末寺
地頭飯屋本ノ方百拾五間程
 吉水山 光明院 念佛寺
- 一 境内四反五畦八步御竿不入御免地
- 一 弘安三年 太守嶋津下野守久經公為御菩提當寺被遊御
 開基堂塔御建立、弘安七年甲申四月廿一日御逝去、同
 年御位牌被遊御立候

寺領拾六町六反忠念佛寺領并未寺万徳寺領、尤当分ハ無御座候、右坪付別紙写相添差上申候、
 開山師阿弥陀佛 延元元丙子九月十一日寂

右開山之石塔ニ、應安元年戊申九月十一日當寺開山師
 阿智通和尚三十三回忌卜御座候、俗姓者税所氏、
 嘉曆年中ニ遊行上人廻国之砌開基、一ヶ国之本寺ニ被
 定候、

本堂 但寺社御方御檢者付

本尊阿弥陀如来立像・脇土觀音・勢至、運慶作、再興
 之年号應永三十年卜有之、其已後寛永之頃火災有之寺
 舎悉焼失、尊像臺座後光損御建立被仰付奉安置候、享
 保十七年子七月廿四日又々 御再興被遊候、茶堂・庫
 裡・大門・小門・鎮守宮・鐘樓堂自分修甫所、當寺住
 替之節者御證文を以被仰付、御礼ニ中紙進上仕候、嶋
 津御家第十四代主 勝久公御孫良久公、字ハ益房丸又
 三郎、永禄五年壬戌十二月十九日於日州廣原誕生、母者
 伊東義祐入道三位之家臣福永入道月甫之長女也、天正
 六戊寅 義久公率軍衆到日州之時、於曾於郡平等寺得
 見、於茲 義久公乎有出家之命、仍薙髮而為時衆、其

時大隅州曾於郡念佛寺十代之住持良心其阿和尚是也、

元和二年丙辰正月十五日遷化、

蓮佛房慶長十二年十月廿二日

右者當寺十代其阿良心和尚御母御石塔卜申伝候、

一忠久公 御位牌立

一忠時公 御位牌立

一久經公 御位牌立

一忠宗公 御位牌立

一貞久公 御位牌立

一久豊公 御位牌立

一大中様 御位牌立

一貫明様 御位牌立

右御位牌様誰様御立被遊、又者住持自分ニ奉安置

候

訳相知不申候、

當寺世代之次第

一開山師阿智通和尚

二世其阿秀伝

三世 了圓

四世 了雲

五世 月閑

六世 路玄

七世 路通

八世 了海

九世 廓圓

十世 良心和尚

十一世 惠徹

十二世 玄察

十三世 連宗

十四世 洪誉

十五世 貫底

十六世 一廓

十七世 秀道

十八世 一道

十九世 廓天

廿世 惠海

廿一世 悅道

廿二世 天順

廿三世 峯潭

一當寺事、古來々毎月正月十一日、正八幡宮於社殿 御

家御武運長久之御祈禱日中法事相勤来申候、

一毎年正月二日、止上六社権現宮江參詣右同断、

一鎮守宮ノ一字 但自分修甫所

右當寺鎮守ニ而、真跡者天満宮毎年十一月廿五日祭礼

仕来申候、祭り米等者無御座候、

山号之額 光久公御筆ニ而御寄進

應永三年嶋津陸奥守修理亮久豊公々御菩提所与被遊

御定、右往古御位牌之銘ニ

念佛寺殿義天忠公ト久豊公之御法名詳也

應永三十二年巳正月廿一日御逝去、同年御位牌御安

置被遊候、

當寺九代住持伊地知姓其阿和尚、肥後豊後陣僧被差

當、方々御仕合能何れも御手ニ參候、其忠賞として、

日州光壹寺、光照寺ハ念佛寺之末寺ニ被仰付候、并大

口專念寺右同断、尤当分本山直末寺ニ罷成申候

宮内正行寺計當寺末寺ニ而候、

妙音天 當寺末寺万徳寺鎮守

右萬徳寺儀破壊仕、妙音天當寺江安置仕置候、

伯圍様當寺江節々御佛詣之砌、住持御拝領物等茂為有

之由ニ候得共、其已後火災ニ而焼失仕候、

打敷壹枚 但羽二重 於加美様御寄進

右焼失仕候由申傳候、

一當寺十代其阿良心和尚代迄ハ寺領十六町六反相付申候

得共、一天下寺社地簡略ニ而不残被召上候、其後 龍

伯様大隅江被遊御座候時分、右之條其阿良心和尚被申

上、高左ニ御目錄之通慶長年簡ニ被仰付、其上本堂・

鎮守宮・客殿・茶堂・庫裡・鐘樓有之、其外家数餘多

御再興被遊候、

一龍伯様御所大隅江立候砌々、當寺十代之住持十一代迄

ハ毎月御月忌ニ被參候、其後 於加美様御月忌被遊候

ニ茂毎月參上仕相勤為申由ニ御座候、

在御判

一高二十石

隅州曾於郡田村之内

一同四拾石

横川 上之村之内

合六拾石

文祿五年十二月二日

伊集院右衛門入道

幸侃判

念佛寺

一高拾三石六斗三升五合

隅州桑原郡西光寺村之内
上之蘭屋敷

一同六石三斗六升五合

見次村之内

合貳拾石

慶長六年三月廿六日

山田越前入道

理安判

伊集院下野入道

抱節判

隅州桑原郡之内寺領目錄

一高貳拾石

見次村之内

一ヶ波籠屋敷

但名寄帳有、

慶長十二年五月十七日

平田久兵衛尉

宗親判

喜入大炊助

久正判

山田越前入道

理安判

隅州曾於郡重久村之内

一高三拾石

入水門

一同七拾石

右同村之内

浮免

合百石

慶長十九年八月五日

比志嶋紀伊守

國貞判

伊集院兵部少輔

貞昌判

三原諸右衛門尉

重種判

伊集院勝兵衛尉

久幸判

右古目錄御座候得共被召上、于今高三拾石被仰付置

候、右之通當寺由緒書二相見得申候得共、當分ハ曾於郡

之内ニ寺領高三拾石被仰付置候、當寺之儀者元和年簡ニ

及火災寺舍悉焼失仕、十一代惠徹代二本堂・客殿其外家

數餘多御建立被仰付、造立有之候由相見得申候、右火災

ニ而十一代惠徹代ニ書改置申候故如斯御座候、

吉水山額之裏書

邦君手書榜念佛寺記

維以蓋當三州啓闢之前浚凡後人道者皆欲以須菩提供遊佛國故為本覺無不帰念佛之結會是以名三世之昭 久經君祠宇直曰念佛寺當十四代師洪誓大德掛錫之日

邦君左近衛中將四位上源光久大岳公以繼明立人道之根自祇勤孝享之誠修敦厚之實以成身範欲啓迪兆民葬倫之暇撰治內寺刹之首者廟社之尊者手書其号各賜具領袖惟本山於尊例未及況誓謀縣令別府式部左衛門某嘗有請因申言之邦君倏然乘輿一揮吉水山三大字誠以

源光久書四小字恭視諸賜筆力道勁精神飛騰猶覺逾越繼命縣令使小臣伺誌其事于榜背臣拜命草數字再興 台覽此又所以顯其成功固其寺根鳴 邦君之德音垂無窮廷山主之榮遇及不朽而使後世無敢論其源流謾爭其威烈者以欲為百代不遷之宝符也

貞享元甲子六月十五日

茶之間棟札

奉造建茶堂一字上梁之文

竊以隅州贈於郡吉水山念佛寺者邦君左近衛中將從四位上源光久大岳尊公之手書山号榜背銘曰名 三世久經君祠宇直曰念佛寺云傳說云弘安七年甲申安置

久經公之尊牌絲旆為當郡菩提寺寄捨寺產十六町六段長享年三月

八月廿六日且夫國君勝久公之御孫 良久公字益房丸又三郎長享年三月

日目錄五年壬戌十二月十九日於日州廣原誕生母伊東義祐入道三位之家臣福永入道月甫之長女也

天正六稔戊寅 義久公率軍衆而到日州之時於都於郡平等

寺得見 義久公於茲平有出家之命仍薙髮而為時衆宗爾後

當寺第十代住持其阿良心大和尚是也元和二年丙辰正月十五日遷化享年五十五至享保十

載百十一年也然依天下簡落而文祿五稔丙申十二月二日寺領六十石

又慶長六年辛丑三月二十六日寺領二十石同十二歲丁未五

月十七日加增二十斛同十九年甲寅八月五日應知行返地而

寄附寺產百斛然當寺第十一世惠徹住職之時減御國中寺領

三箇二千今有殘高三十斛矣有寬永十一年甲戌七月二十五日興万治二年己亥四月十日兩度御支配取之目錄

抑方丈第屋歲序長遠梁棟傾斜柱根腐敗固茲貧道欲造替之

然短臂不及痒處是故造千宦家乞於杉樹即賜大廻一小廻三

十有一本更勸化當郡士庶之扶助每家出粳米一升都合四斛

二斗八升四合於中當寺檀越者隨喜捨志施青銅多小惣計錢

十七貫六百四十八文而享保十年九月吉日憑師匠始運斧斤
新復興桁長五間三尺梁四間茶堂畢

伏願上梁之後四時無一點災厲八節有万般祥福至祝至禱々々至祝

維持享保十稔己巳臘月如意日

當山第十九世等覺庵覺阿廓天欽言

前本立寺六葉洞雲院覺無廓龍作文書

當所暖役

細山田諸左衛門

小城 長左衛門

吉村 武左衛門

津曲 角兵衛

川口 善兵衛

匠師

勝目 源五

津曲 十右工門

岡富

權之助

木挽

千石工門

聖主天中天
迦陵頻伽声

大檀那大梵天王

△奉再興念佛寺客殿并大門一字

哀愍衆生者
我等今敬礼 大願主帝釈天王

念佛寺本堂中尊阿弥陀如来御長三尺余立像左右脇士觀立

(音九)

勢至兩尊御長一尺余立像三尊共同作運慶作夫吉水山光明

院念佛寺開基雖未詳弘安四年創草也云云開山師阿弥陀佛

始祖也延元元年九月十一日入寂也應安元年九月十一日三

十三年忌石塔詳也 御家三代久經公道仁義阿弥陀佛御逝

去時當寺住僧御引導師成依之客殿上間尊牌御安置在之御

家八代久豊公應永三十年御菩提所御定置被遊依之御尊牌

御安置在之御法名念佛寺殿義天忠公大禪伯由緒詳也遊行

元祖自一遍上人六代一鎮上人遊行廻國砌遊行上人止宿寺

舍也依之一鎮上人木像御影御長二尺五寸坐像本堂右脇安

置左脇元祖一遍上人御影御長一尺四寸立像安置也當寺事

中古迄清水郡田有之万德寺念佛寺寺領十六町六段長享三

年八月廿六日目錄于今在之万德寺本尊座像阿弥陀如来當

客殿棟札

寺客殿奉移有之処四十二世遊行上人持參被成候故本尊今無之万徳寺鎮守妙音天木像等身天女于今現在万徳寺昔郡田有之処今破壊亦當寺領知行三十斛有之其御目録在御家十四代 勝久公御孫又三郎良久出家當寺住職給十代良心和尚奉申御影座像本堂左脇安置有之其後當寺出火起寺舎悉焼失代々世牌實名依之不詳當寺塔中脇寺有之當寺者一國一箇寺大隅本寺享保十七子年遊行快存上人廻國之砌本堂弥陀三尊共從公儀再興彩色修甫被下延享四丁卯遊行賦存上人廻國之年客殿大門造替被仰付茶堂天井住居替修甫被下古客殿被下大庫裡臺所食座引直作建事免許被下寺舎普請成就畢偏鎮守天滿大自在天神使者御部類眷属神左右白狐赤狐稻荷大明神佛陀神明加護蒙心中所願成就之旨如件

伏願薩隅日三州大守吉貴公繼豐公宗信公御息災延命御武運長久御貴躰御安全御子孫繁昌國家安穩万民快樂五穀豐饒風雨須時佛陀神明加護一々心中諸願皆令満足故也仍再興如件

于時延享四年丁卯十月吉祥日

寺社奉行本田作左衛門殿寺社方取次桐野七郎左衛門殿普請儉者淺倉茂右工門殿調所佐次右工門殿所囃本田與左衛門細山田源七塩川次郎右工門小川仙七指目西田助之進五十嵐諸右工門普請見舞稻留喜左工門小川惣左工門大工大迫善右工門寺見舞川越清左工門

噌吰郡

吉水山光明院念佛寺現住二十世洞雲院其阿惠海謹記

一鐘樓堂一字并釣鐘

右古来有來候処、鐘樓堂及大破釣鐘破損仕候故、寛

政六甲寅霜月拙僧代釣鐘禱直、鐘樓堂再建仕申候、

右者此節寺家由緒宝物相糺可差出旨被仰渡段承知仕候、

當寺由緒書二右之通相見得申候故如斯御座候、以上、

念佛寺廿三世

寛政七年乙卯七月廿五日 峯潭 印

時衆宗相州藤沢山清淨光明寺末寺

地頭飯屋本々丑ノ方五町拾七間程

祢念山 常樂院 十聲寺

本尊 藥師如来

観音

寺高無御座候、

寺地者郷士屋敷借地、寺地無御座候、

開山念佛寺十代其阿良心和尚

右慶長年簡ニ念佛寺十代良心和尚御開基ニ而、往昔ハ念

佛寺塔司境内ニ有之、寺号ヲ称ス十聲庵ト、念佛寺十代

其阿良心建立、藤沢山直末寺之額直ニ御免許、其節称念

山常樂院十聲寺ト御改、寺院号ノ横物遊行上人御筆ニ而

拝領、是末世之什物開山其阿弥陀佛位牌良心和尚ノ事

也、元祖一遍上人尊筆之御名号 開山其阿良心和尚御寄

附、念佛寺十代和尚御俗生御當家 勝久公様御孫ニて被

成御座候由、

遊行上人御巡行之砌、一日右寺江御入日中之法事有之、

其節ハ諸普請并御餐応等御物被仰付候、外ニ由緒等無

御座庵寺ニて御座候、

住持代々

初住中興其阿圓重

但 念佛寺十一代和尚ノ弟子也、

二代 正圓 三代 龍水 四代 龍雲

五代 来阿 六代 覚澄 七代 讃阿

八代 雲栄 九代 真浮 十代 惠秀

十一代 俊倫 十二代 全應 十三代 聞浮

十四代 興全 十五代 峯雲

流八拾間程城内跡當分左之通御座候、

一大手口 田村口 岩戸口

但岩戸口掛橋有、石橋八間程、橋之上岩坂八間程、夫

ノ平地ニ而御座候、掛橋ハ三町程有之、たれの元与

申所ニ枳形与申傳ノ番所有之候、田村口・岩瀬戸坂

ニ而馬通用無之、人足者通用有之候、

一城内西山田口与申所ハ松永村へ出拔道有

一右同吉松与申所有之候、

但古屋敷困跡与相見得候場所ハヶ所有之由、近辺井川

四ツ有之候

一右同、東西与之間大谷水有之候、

一城内江犬之馬場与申所有之候、横拾五間程豎六拾間程

之馬場平地、

但是ハ中古々誤而、馬乗り馬場を犬山之馬場与唱候由

申傳候、

一右同、西之城与申所有之候、

但小唐竹山へ古屋敷跡拾四ヶ所有之、

近辺江井川七ツ有之候、白山権現社此所高山頂上ニ

鎮座、四方掛、

一両阿弥陀、前代此所へ建立有之候処ニ、今ハ城外へ造

立有之候、

右城外三方ハ郷士居住仕候、

右古城主者、仁王五十九代之帝 宇多天皇之末孫仁王七

十八代カ御一條院

拾四代鳥羽院御宇、正四位上中将民部卿篤如、永久四年

丙申春大隅国守護職承院宣下向、建於館于曾於郡居住数

百人有之税所也、然処ニ文明十五年之頃落城之由申伝

候、

右古城江永正十六年簡之頃、伊集院尾張守殿楯籠折節、

新納近江守殿同意ニ付人衆ヲ被籠、同十七年八月 忠兼

公様被遊御着陳候ニ付、十一月廿七日降参之由申伝来

候、右古城亥之方ニ当て六町程有之候、

税所介藤原祐義

右税所介祐義者、止上宮宝殿江奉納大般若經一部入り候

櫃三ツ共ニ奉施入、大般若經一部、應安八年乙卯十二月

十八日税所介藤原祐義ト般若櫃ニ書付有之候、

税所藤原敦重

右藤原敦重者文明四年壬辰三月十一日、止上之末社早風

神社再造立之棟札檀那藤原敦重ト有之由、棟札写有之

候、右棟札者虫付ニ而今ハ無御座候、

一税所藤原敦廣并二敦辰

右藤原敦廣并二敦辰ハ、文明十六年甲辰首夏五日止上

ノ末社若宮神社再造立之棟札□二大檀那□藤原敦廣并二□敦辰

ト有之候得共、虫付ニ而于今無之候、

□□村之内地頭飯屋ノ寄里三拾四町程

一御飯屋旧跡之事

右者天正年間之比 惟新様御飯屋与申伝候場所所有之、

右屋敷者今本飯屋門与申候、尤前代ハ本御飯屋与書記

為有之由申伝候得共、今者相見得不申候、同所へ 惟

新様御腰掛場与申伝旧跡有之候、右 飯屋ハ戌亥ニ当

て道を拾間程有之候、

重久村之内水野田江鎮座地頭飯屋本より辰ノ方式里程
七社大明神

清水郷土格護人

坂元七郎太

但尊号相知不申候

右弘治年曆之頃、清水郷土坂元氏之元祖坂元將監勸請

之由二而、代々于今格護仕来申候、

一門守善神王両社

一神供拾六膳但木地碗御供饗并泥餅二枚ツ、御酒桃子一雙并鈴一對奉備候、

一祭り日十一月中ノ丑ノ日、止上社家より祝詞御神楽内侍

舞有之候、

重久村之内録々迫地頭飯屋本より寅ノ方式拾五町程
一石塔二基

右建基之年曆相知不申候得共、往古税所氏此地江居城

之時分先祖墓之由、于今申伝候、

重久村之内入水江鎮座地頭飯屋本より丑寅ノ方巷里巷町程
一七社大明神

飯森門格護人 次右衛門

但尊号相知不申候、

右勸請之年曆相知不申候得共、右次右衛門先祖天正年

簡ニ久木本藤太左衛門建立之由申伝有之、天文年簡之

棟札有之候得共、虫付ニ而文字相分り不申、右次右衛

門代々格護仕来申候、

一備物神供拾壹膳饗并一御簍 一草蓆 一山芋 一蜜柑

一柿 一昆布奉備、

一祭り日十一月初丑日、止上社家より祝詞御神楽内侍舞有

之候、

重久村ノ内入水江鎮座地頭飯屋本より巷里巷町程
老神大明神

重久村百姓飯森門格護人 次右衛門

但尊号相知不申候、

右神社勸請之年曆相知不申候得共、七社之母神与唱来

申候、寛永十年癸酉二月再興之棟札ニ相見得為申

由申伝候、

一神供四膳奉備、祭り日十一月初丑ノ日、七社大明神参

り日同日ニ有之由候、

重久村之内入水へ鎮座地頭飯屋本より丑ノ方巷里巷町程
阿弥陀佛如来

重久村百姓飯森門格護人 源次郎

右阿弥陀開基之年曆相知不申候得共、

龍伯様国分 御居城之節、御牧内辺江雉子惣トシテ被

遊 御光越候砌、如何様之訳も御座候哉、雉子阿弥陀

与為被仰御事ニ而、今ニ雉子阿弥陀与申伝候得共、由

緒等無御座候、

重久村ノ内塔ノ原へ鎮座地頭飯屋本を寅方壹里貳町程
牧神妙見大明神

右勧請之年間相知不申候得共、尊号北辰妙見尊星王ト

奉申候、往古者春山野江鎮座ニ而御座候得共、元禄拾

六年御牧春山ノ塔ノ原江被召置候節被召移候ニ付、右

祭り御馬追之節当地祈願所吉祥院を于今祭り来申候、

麓岩戸永瀬氏園ノ山ニ鎮座地頭飯屋本を申ノ方六町廿八間程
熊野神社 格護人郷士 永瀬圓乗坊

右神名熊野三所大権現、尊号ハ伊弉冉尊奉申候、勧請

之年曆不詳候得共、右神社熊野新宮ニ而有之、延徳三

年辛亥二月八日神殿之御輿ノ内ニ奉納之絵板ニ、永瀬

氏元祖兼家勧請之由相見得申候、于今先祖代々格護仕

来申候、

一神供ハ御供饗 清案奉備、

一祭り日十一月廿三日、止上社家ノ祝詞御神案内待舞有

之候

城内ニ鎮座地頭飯屋本を申ノ方九間程
愛宕山大明神

但尊号ハ軻遇突知神

右神社貞享元年甲子祈願所吉祥院住僧昌雄法印勧請ニ

而有之由、

城内ニ鎮座地頭飯屋本を酉ノ方拾貳町拾三間程
白山妙理大権現 支配祈願所

吉祥院

右尊号ハ伊弉冉尊奉申候、橘木城守護神ニ而有之候、

一祭り日十一月廿八日、備物ハ幣白一本 一赤飯 一御

酒 一注連ヲロシ供物奉備法業有之由、

城内ニ鎮座地頭飯屋本を酉ノ方右同斷
橘木寺神社 支配 同 寺

右神名橘大明神 右神社石ノ禿倉ニ而有之候、

城内稲荷尾ニ鎮座地頭飯屋本を戌ノ方拾壹町程
稻荷大明神 支配 同 寺

但尊号ハ倉稻魂神石ノ禿倉

右三社勧請之年曆由緒等相知不申候得共、祈願所吉祥

院開山ノ代々祭り等仕来申候、

大窪村之内持川江鎮座地頭飯屋本を未ノ方貳里拾八町程
市来大明神 格護人 大窪村百姓持川門 善次郎

但尊号相知不申候、

右勧請之年曆相知不申候得共、右善左衛門先祖代々格

護仕来申候、

一御酒 一案 一御供 一花稻

右之通神前二備、十一月廿八日 霧嶋社家ノ祝詞御神

樂内侍舞有之由候、

大窪村江鎮座地頭飯屋本^ノ丑^ノ方^ノ壹里三拾町拾九間程

飯留^マ大明神

大窪村百姓中齒門
格護人

助 六

右勸請之年曆相知不申由緒等無御座候得共、右助六先

祖代々格護仕来申候、

一御酒 一棗 一御供 一花稻 一草薺 一いちのミ

一大根

右神前二備、十一月中ノ丑ノ日霧嶋社家^ノ祝詞御神樂

内侍舞有之由候

右神社
棟札写

聖主天中天

大壇那大梵天皇

迦陵頻伽聲

奉撰録飯富大明神社記

哀愍衆生者

大願主帝釋天皇

我等今敬礼

當社者襲峯霧嶋宮之攝社從宮下テ午未ニ去二里在大久保

村所祭神七厘天神命天香語山命

天櫛玉命天年良雲命天破法命稻飯命岐志爾保命泰モ伏原

惟右天孫天津彦出火瓊々杵尊初テ天降コス高千穗嶺ニ時

キ打テ財ヲ弘メ国ヲ列子舞ヲ供奉之御神也嗚呼久哉ナ遠

哉神書ニ曰ク天祖瓊々杵尊降跡以來一百七十九万二千五

百廿餘年云往昔ノ大縁糺宣命等文曆元年之神火ニ焼失ス

自是以前不詳矣於焉

御當家十二代嶋津陸奥守忠昌公帰シ仁ニ達德敬神ヲ信佛

興シ廢タル治ムト壞無化故文明十六年ニ本宮ヨリ諸末社

被遊再興矣其后勝久公國主ヲ退忠臣國乱シ將ニ滅シ因テ

茲寺神末繁榮依之三列諸士仰テ 貴久公ニ悉成ル臣于時

本田形部少輔爲使者曾於郡一所霧嶋可爲神領上意是永祿

八年二月五日也 同十九年正月廿五日地頭三原遠江使者

以大窪村高百廿九石八斗八舛三合六夕六御寄進 義久公

ヨリ豊後太友退治之御願有感応太友大軍滅亡ス天正四年

八月彼岸ヨリ飯富大明神ノ御祭始給フ義久公義弘公御崇

敬昌他時已ニ 及ヒニ洸季本宮社領高千八百七石當社已

准本宮修覆祭祀有之然后元和四年戊午八月社領及勘略ニ

今五百石ト咸行ス自リ爾以來漸于今衰微郷内氏子助勢ヲ

大宮司

以修甫祭奠相勤ム内ニ本宮江由來委故ニ今省略元文三年

中蘭門之助左衛門

申八月ヨリ寺社奉行所霧嶋山諸末社無殘本地垂跡由來祭

右は

数并備物社主委可申出旨被仰渡右公門達亦寛保元十月寺

長兵衛

社座取次伊東七兵衛殿御領内神社佛閣爲御改巡見仍諸末

社指圖并來由記大概右通相認致上納也然共當社棟札二旧

記由緒無載ト御本社由來記并

大窪村之内尾谷江鎮座地頭飯屋本子ノ方老里世四町程
一七社大明神
大窪村百姓尾谷之格護人
同所右社脇ニ鎮座
太郎左衛門

貴久公義久公義弘公家久公以御感狀ヲ撰録シ平誠神威佛

一七社大明神
同入

德相和メ應物之大權無有ルト終盡何ヲ冀ハ 大檀越□繼

豊公寶寿処等御子孫悠久國衛安全郷内男女息災延命百穀

充哇永榮至禱慎勿怠矣

本社主

永田猶右衛門重利

維時寛保元辛酉十一月十五日

カイ復
社主

税所弥三右衛門篤則

社頭取

橋本遠江守惟家亦宣

松本喜早太義時欽誌焉

川北村之内芭蕉田ニ鎮座地頭飯屋本子ノ方老里拾五町
程
樂・内侍舞有之由、

一七社大明神
川北村百姓芭蕉田門 甚五衛門
格護人

右勸請之年曆相知不申、右甚五衛門先祖代々于今格護

仕來り申候、

一御酒 一棗 一御供 一餅 一花稻

右神前ニ備、十一月申ノ丑ノ日霧嶋社家ニ祝詞御神樂

内侍舞有之由、

右神社

一棟札写

聖主天中天

迦陵頻伽聲

奉造立七人社一字

哀愍衆生者

我等今敬礼

大檀那大梵天王大願主諸結衆等小工高橋土佐守

于時永祿十年丁卯二月吉日當神主藤原兵衛尉兼尉兼祐大

工長瀬助左衛門尉

大願主帝尺天王大檀越藤原朝臣義久 鍛冶味技与次郎

方

大隅曾於郡

日本紀神代卷私記之釋曰ク農地者仁王四十三代日向有
襲郡元明天皇御治世和銅曰ク年癸戌日向大隅兩國二分
ツ今大隅曾於郡ト云云

襲峯霧嶋宮之攝社豐後多七社大明神渡本宮丁申ノ方ニ去リ
二里在芭蕉田村
所祭神七座 天鈿賣命天神魂命伊岐志途保命天石門別命天櫛

石窓神大山祇命田霧姫命探上古本迹之由意伏惟秦天津彦

國光日子火瓊々杵尊降アマタリマス トキツカヘマテイサヲシ 臨之時供 奉 有切之稱

ス御神達ト嗚呼遼トアリハルカナルカナ 遼 乎旧事本紀曰自天祖瓊々杵

尊襲高千穗峯天降神武天皇元年迄百七十九万二千四百七

十餘歲夫神武元年ヨリ以下文曆元ヨリ以前千九百三年坎

此間慶胤性空篤如等各師本社末社祭祀勤行而世々蓮續而

雖爲繫榮文曆元年十二月廿八日之掛回祿神殿佛閣人屋盡

炎燒惜哉悲哉神宝勅宣勅許大緣記等燒亡ス焉故自是以前

不詳矣時已及洗季征夷將軍賴朝公御息男忠久公日隅薩三

州領給忠久公十二代孫忠昌公帰仁達德敬神信佛興廃治壞

異他文明十六年二本宮及諸末社被遊再興矣然后勝久公國

爲主退忠臣國乱將滅目茲寺社末成榮三州ノ諸土勝久公ニ

进仰

貴久公悉成臣于時貴久公御願意云曾於郡一所霧嶋宮嶋可爲神

領城使本田形部少捕豐後大友爲退治大窪村ニ高御拜進城

使三原遠江此節當社七社社殿御再興有之則此棟札之表也

天正四年丙子八月彼岸七社大明神御祭始給感應有以所御代々御崇敬本宮神領高惣而千八百七石御寄附是故本社末社之祭奠嚴重色維時元和四戊午八月社領五百石二質扑ス御感状委ク有本宮焉簡略從厥以來漸々衰嶽ス今郷内氏子助力ヲ以修甫奉祭祀于時元文五年八月十日霧島宮并諸末社神跡垂跡由來御祭數備總社主人委ク可申上由ニ付右大厩達公聞次寛保元年十月伊東七兵衛殿御領内寺社爲改ト巡見之刻旧記通殿社指図遂披露己午今此棟札旧記傳語之文句無之仍某疎去ツヲ以撰錄而欲後葉流一札穢到其謬說刊之可也寛保二戊正月廿日松本喜早太義時謹誌社主永田喜右衛門重富大宮司源左衛門甚五郎

日州松永村森ニ鎮座地頭飯屋本々戊寅ノ間拾四町五拾貳間程

一天神社

一門守兩社善神王

右神名者天満大自在天神ト奉申候、尊号ハ菅神菅原右大臣道真公、右神社勸請之年間相知不申候得共、往古芦江殿ト言人之建立ト申伝有之候、又者爰元郷士川口

金右衛門先祖川口淡路守兼貞下向之節、国元々負下シ建立ト申伝、子孫代々神社格護仕來候、尤由緒書有之候処ニ、先祖川口藏右衛門代自火差起焼失仕候ニ付、何れ欤実否相知不申候、

一御祭り日十月廿五日祭礼ニ而、松永中神酒差上申候、
(十一月廿五日)

右御祭り之神供廿五膳、其内二膳高盆饗イツ立盛御柴串柿金柑棗 神酒一雙奉備、祝詞御神樂内侍舞有之候、

一右神社参り口ニ御本地十一面觀音ノ尊像有之、但座像、社山之大石ニ切付天神御本地ト彫り付有之、社山之西ニ立岩ニ諸尊之佛像切付有之、右社山四方大石立岩其頂上ニ神社鎮座ニ而有之候、

一右天神社鰐口之銘ニ、奉寄進松永天満大自在天神御宝前鰐口勸進之施主各為息災安全也、天文二十四年乙卯九月四日、裏ニ大和国吉野郡天洞山無宮慶仁敬白ト有之候、

一天文四年乙未九月廿二日造立之棟札ニ、右本願聖信濃白山寺往圓海大宮司河口源六兼吉、筆者吉祥院權少僧

都行遍下有之候、爰大檀那本田紀伊守藤原董親当郡寺奉行花棚中務丞^(尉カ)下有之候棟札有之候処二、虫付二而今者無之候得共写書有之候、

同所片平二鎮座地頭飯屋本^ム亥ノ方式拾七町拾貳間程

一老神神社

一門守善神王兩社 木座像 御長サ八寸

右神名老神大明神、尊号ハ相知不申候、

祭り日十一月中ノ酉ノ日神供十二膳竹木饗案神酒奉備候祝詞御神楽内侍舞有之候、右神社勧請之年号由緒等相知不申候、

同所花山鎮座地頭飯屋本^ム亥ノ方式拾八町拾貳間程

一芦江神社

一門守善神王兩社

右神名芦江大明神与奉申候、尊号ハ瓊々杵尊与申傳候、右神社者中古（正徳年間）及焼失、尊躰迄御焼ケ被成候付御姿相知不申由候、勧請之由緒書并創建之棟札等有之候処二焼捨リ今ハ無之候得共、上古芦江氏之某霧島山江日参有之候処二、老後日参難成候二付此地

江霧島山六所大権現ヲ奉勧請候由、古老之者とも申傳來候、

祭り日二月初酉日・九月中九日・十一月中酉日、神供二十膳饗并御案山芋草薺御前御奉備、祝詞御神楽内侍舞有之候、右神社格護人武安屋敷之源右衛門二而御座候、

一右芦江大明神社鰐口之銘二、奉施人永享十三年辛酉月十八日、願主善光薩州祁答院大村大聖寺ト有之候、裏ニ文明十七年乙巳十月廿四日有之候、

同村竹山鎮座地頭飯屋本^ム亥ノ方式拾八町拾貳間程

一熊野神社

一門守善神王兩社

右社名者熊野三所大権現ト奉申候、尊号者伊弉冉尊事勧請鎮座之年間由緒等相知不申候、

祭り日十一月中ノ亥ノ日御供饗并

同村山田鎮座地頭飯屋^ム亥ノ方式拾七町貳拾七間程

一北辰神社

一門守善神王兩社

右神名者北辰大明神与奉申候、尊号ハ北斗北辰尊星王、勧請之年号相知不申候、由緒申傳等も無之候、右神社格護人山田屋敷之源右衛門、右五社社司者止上六社大権現社頭殿上原家と相勤来申候処ニ、上原四郎左衛門成清弟上原宮太夫清憐權祝子職被仰候、天文年間之頃右宮太夫江社職配分仕、岡留ト相改、代々社職岡留甚太夫相勤申候、

同村長松軒ニ鎮座地頭飯屋本と子ノ方疋里拾貳町程

一大日神社

右神名大日天照皇両大明神宮ト奉申候、御神跡者三鉾ニて有之候、往古霧島山大日奉勧請候、右三鉾并石跡霧島と流出給ふニおりて本山江奉帰候処ニ、又々此地へ流付給ふ、御神託者此地へ鎮座乞給ふト有之候ニ付、長松軒屋敷内江奉勧請候由申傳候、勸受之年間相知不申候、

祭り日十月中ノ亥ノ日、鏡之餅一重棗奉備候、祭り社人ハ国分宮内正宮石体権現之社家有田氏先例祭り来候由、右神社格護人長松軒屋敷之源六

同村武安ニ鎮座地頭飯屋本と戌ノ方貳拾七町程

一妙見神社

右神名者妙見大明神ト奉申、尊号ハ北斗北辰妙見尊星王ニ而有之候、勧請鎮座之年間由緒等相知不申候、祭り日相知不申候得共、毎年十一月中ニ奉祭り候、備物赤飯棗御酒奉備、祝詞清メ祓仕候、右格護人

武安屋敷之 三七

同村蘭田ニ鎮座地頭飯屋本と戌方拾五町程

一妙見神社

右神名妙見大明神ト奉申候、尊号北斗北辰尊星王、勧請之年号由緒等相知不申候得共、昔豊後軍勢鶴ヶ城ニ籠城之節ハ城中之頂上ニ鎮座ニ而有之、中古城下之山奉移候、豊後軍勢勧請之神社与申傳候、

格護人岩元屋敷之 傳 助

同村蘭田地頭飯屋本と戌方拾五町程

一古陳所

但鶴ヶ城与申傳候、

右古城籠城之年間軍主之姓名相知不申候得共、昔シ豊

後軍勢籠城之所何方か歟御責被成候而、豊後勢落城ニ而逃去候所、曾於郡大窪村之内王子与申所ニ而打亡被成候ニ付、于今豊後坂与唱申候由申傳候、豊後坂ハ鶴ヶ城カ壹里程御座候、其間松永村之内豊後塚与唱候森塚近年迄ハ有之候得共、今者無之候、右森塚之辺豊後田与申候、豊後軍勢曾於郡豊後坂ニ打死仕候靈魂為退治、一七日阿弥陀如来供養行法吉祥院五代住持融遍法印ニ被仰付相勤候、依功力ニ靈魂相治候ニ付城内野首与申場所畠地被成下候者、吉祥院由緒之内ニ相見得申候、

福昌寺末寺仮屋本カ末ノ方四拾間程

雲峯山

禪宗 慈恩寺

本尊

正觀音

寺屋敷^{廿一間}

禱反四畦

大ツ式斗禱升

鬼平

柴竹山三反

一卵塔地五畦

大中様 御位牌

一基

高禱石

重久村ノ内

浮免

但御佛鐸料

右 御位牌諸郷末寺迄被遊御建立候御事ニ而、右高禱石被召附置年簡相知不申、由緒等も無御座相糺申候処ニ、元禄十六年七世之住持宅恩僧代ニ自火差発、住持共ニ燒死仕候得者、其節由緒等都而燒失仕、然処ニ正徳元年比八世之住持梅谷代又候出火差発、打続燒失仕候得ハ猶又開基次第相知不申候、

開山カ住持代々

文安^{年号比}

開山福昌寺廿四世棟屋神大和尚

二世 三世 四世 住持相知不申候、

五世中興開基林和尚 六世徳嚴恩 七世宅恩

八世梅谷 九世悦田 十世天章 十一世丹道

十二世竜祝 十三世髙山 十四世寛紋

隅州清水郷楞嚴寺末寺当所松永村在内地頭仮屋本カ戌ノ方廿七町廿四間程

一 富明山

禪宗

脇田庵

一本尊薬師

一寺高無御座

一寺地無御座借地二而御座候、

一開山楞嚴寺十四世松堂玄龍和尚

右開基之年号相糺申候得共、相知不申庵寺ニて御座候

得ハ、代々住持逆も無御座無住寺而已有之候処ニ、

間々琉僧杯寺番相勤、何そ由緒等無御座、如何様之訳

も相知不申候、

開山より住持代々

二世中興廣山澤和尚

三世隔山猊公

四世 五世 六世相知不申候

七世傳斯聞の庵

八世得中守養 九世雲山竜

隅州清水郷楞嚴寺末寺當所松永在內飯屋本々亥ノ方廿九

町拾貳間程

一松永山

禪宗

林高寺

本尊十一面觀音

一薬師如来

一寺高無御座、

一寺地無御座借地ニて御座候、

一開山楞嚴六世善宝苗幸和尚

右開基年間相糺申候得共、相知不申庵寺ニて御座候得

者、代々住持逆も無御座無住明寺而已有之、脇田庵同前

之寺ニて琉僧寺番相勤來、何そ由緒書等無御座、何様之

儀も前後相分不申候、

天喜四年

開山より住持代々

二世最高源宗

三世相知不申候

四世快翁宗付心

五世相知不申候

六世盛庵王昌

七世再中興雲山

吟龍

一止上別當 尾牟礼山錫杖院

眞言宗

乗林寺

一本尊薬師如来

一御免屋敷

式反五畝程
四反程寺山但岡平

右寺開基雖未詳ト、止上権現上古尾牟礼之峯ノ頂上ニ

鎮座ニ而今ノ社地ニ奉移、其拝殿之旧跡乗林寺ト申傳

候、其以後凡及千余年ニ候、

一開山竹林坊

右開山清水台明寺二世之住持ト申傳候、其年曆不詳候得共、竹林山衆集院台明寺ハ天知天皇ノ勅願ニ而白鳳元年ニ創草也ト申傳候、宗旨本法相也ト乗林寺由緒書付ニ相見得申候、

一多門坊

一養蓮

右代々前後相知不申候、

一性空上人

一行賢上人

右天曆年簡ノ頃中興開山与尊敬仕、此砌リも當寺天台宗ト相見得申候、

一亮春

右亮春事ハ、建久七年丙辰八月廿三日□忠久公様薩摩江御下國之節、住吉并嶋津稻荷ノ示現ヲ御蒙給而、大隅桑原郡姫城浦住吉崎御社参ニ而神社御建立、于時同年霜月廿八日御勸請被遊候節、忠久公様止上宮江第三□御社参之由与申傳候、真言右棟札之裏ニ、中興

沙門曾於郡尾牟礼山錫杖院覺惠亮春ト有之由相見得申候、

一秀義

右住持ニ相見得申候得共、寺及破壊候ニ付代々前後并年簡等相知不申候、

右止上別當乗林寺二十世住持、右秀義ハ宝徳年簡之頃住職ニ而有之、其已前及數百年ニ住持十九代為有之由相見得申候得共、住持代々前後相分リ不申候、其已前及破壊為申由、秀義も以後代々左之通御座候

一廿一世	幸久	一廿二世	快精
一廿三世	快悟	一廿四世	兼海
一廿五世	海存	一廿六世	教忍
一廿七世	賴善	一廿八世	覺英
一廿九世	賴盛	一卅世	快春
一卅一世	泰運	一卅二世	雙仙

一卅三世 賢周 一卅四世 頼喜

一卅五世 盛紙 一卅六世 昌雄

一卅七世 覚遍 一卅八世 覚隆

一卅九世 真英 一四十世 盛意

一四十一世 盛紙 一四十二世 盛圓

一四十三世 覚俊

一大川

右大川志和地川与申伝候所、謂者霧島嶽四拾八池の滴自然与流増、四拾八の流号ヲ取て志和地川与申候、水

上ハ隅州曾於郡田口村之内霧島矢嶽大浪池裾山中ハ流

出、田口村并大窪村之内流通候、其間田口村之内霧島

并半田与申所江も流有之候、右川末踊持松村之内江流

出、夫ハ曾於郡重久村之内江流入、馬渡尻与申所ハ高

サ式拾尋計瀧有之候、其外曾於郡松永村之内流通、末

者日當山西光寺村之内江流出候、尤松永村芦江川とも

唱申候

小川

右川、入水川与唱候、水上曾於郡重久村之内東鹿倉之

内炭床与申山中ヨリ流出、同村御牧内諸所流通、関ノ

坂上入戸与申所地ツ底江流入、何方ハ流行躰与茂相見

得不申候処、五町程末坂下江流出候、川下同村之内流

通、夫ハ同郡重久村之内清水并国分境之俣流通、其末

ハ國分新町村之内江流出申候、其間ニ止上申所板橋一

ツ、大渡ト申所土橋志ツ有之候、尤右川於重久村而ハ

稗川与唱申候、其所謂者「中渡瀬上渡瀬下渡瀬此三瀬水神有之、

祓仕、神職社人身ソキ
苦離ヲカカリ清メ申

小川

右川者梅木川ト申傳候川ニて、水上ハ清水曾於郡境赤

坂鹿倉之内ハ流出、隅州曾於郡重久村之内流、御牧内

清水曾於郡境目之俣流通、其末ハ清水山之路村ハ流出

申候、

大川

右大川ハ西川ト唱申候、水上ハ踊宿窪田村之内安楽ヨ

リ流出、曾於郡松永村日當山西光寺村ト境之俣流通、

芦江川江流合、末ハ右西光寺村之内流出申候、

顯娃左京殿家來曾於郡松永村居住

御褒美米六石先キニ

但老人ニ而三石宛

後藤宇右衛門

右之妻

右ハ夫婦共老母江致孝養候段被□聞召上、宝曆十年辰

正月十二日爲御褒美被仰付候、右宇右衛門者相果申

候、右ノ妻ハ于今存生ニ而罷居申候、

後藤宇右衛門法名

幸行知性禪門

右天明八年申二月八日相果申候、石塔ハ松永村之内廻

峯ト申所ヘ有之候、

俗名

後藤庄左衛門

一 右宇右衛門父
壽芳安樂居士

右寛延二年巳六月十一日相果申候、石塔ハ同村之内和

田ト申所ヘ有之候

右宇右衛門母

(音薩の略)

一 サ良壽心待大姉

右宝曆十年辰六月朔日相果申候、石塔ハ右宇右衛門同

所有之候

御褒美青銅二百足

右宇右衛門

妻江

右ハ寛政二年戌八月四日、又々爲御褒美於御城下被仰

付候、右妻于今在生ニ而松永村久留与申所ヘ罷居申

候、

御米三石

十聲寺下人李左衛門江

右李左衛門母江深切致孝養候段被聞召上、爲御褒美

宝曆三年酉十一月被仰付候、右李左衛門先年相果申

候、尤李左衛門存生之節ハ松永村之内堂田ト申所江罷

居申候、

李左衛門法名
覺法道行信士

右宝曆八年寅八月廿三日相果申候、墓所ハ松永村之内前陰与申所ヘ有之候、右李左衛門子孫無御座候、

李左衛門父法名

一 春月永阿信士

俗名 慶之丞

右宝永五年子正月八日相果申候、石塔者李左衛門同
所有之候、

李左衛門母法名

一 栄宝壽慶信女

右寛延元年辰十一月廿五日相果申候、石塔者李左衛門
同所有之候、

四 襲山郷寺社名所古城川筋調

惣高頭五千百八拾七石壹斗壹升八合六勺四才
手札御改元
 惣人数貳千九百七拾五人

内

千七百五拾五人 郷士三百三拾九家内

七拾三人 寺院拾九軒門前三

三人 御口ノ者 二家内

百五拾貳人 社家三十七家内

九百八拾五人 百姓百六十壹家内

拾壹人 居住人 貳家内

右去ル午年札御改元写并惣高右之通御座候、

一	天文六年比	地頭	本田中務少輔殿
一	同拾貳年比	地頭	小島參河守殿
一	同拾五年比	地頭	財部筑前守殿
一	永禄五年比	地頭	三原遠江守殿
一	元亀貳年比	地頭	村田亀丸殿
一	天正年間初メ比	地頭	上原長門守殿
一	同年間中比	地頭	税所越前守入道殿

一	慶長拾五年比	地頭	本田與左衛門殿
一	元和四年比	地頭	税所次郎右衛門殿
一	正保四年比	地頭	町田右京殿
一	万治年間比	地頭	土持權之助殿
一	寛文六年比	地頭	桂 奎之助殿
一	同 八年比	地頭	新納縫殿之助殿
一	延宝六年比	地頭	別府式部左衛門殿
一	天和ノ貞享迄	地頭	別府式部左衛門殿
一	元禄拾貳年比	地頭	市来次郎左衛門殿
一	元禄拾六年比	地頭	堀 四郎右衛門殿 但四郎太夫殿事
一	宝永ノ享保七年迄地頭	地頭	相良權太夫殿
一	享保拾六年比	地頭	本田新助殿
一	延享ノ寛延迄	地頭	北郷權八殿
一	宝曆五年比	地頭	種子島宇左衛門殿
一	宝曆十年比	地頭	町田源左衛門殿
一	明和八年比	地頭	佐久間九十九殿
一	安永十年比	地頭	児玉祝人殿

- 一 寛政貳年の 地頭 北郷作左衛門殿
- 一 寛政拾二年の 地頭 伊勢新五郎殿
- 一 享和元年の 地頭 本田休兵衛殿
- 一 文化五年の 地頭 清水源左衛門殿
- 一 文化八年未正月十日の 地頭 種子嶋次右衛門殿

産物之事

一 松茸

右者霧島山江八九日比生育仕、古来の年々御前所御
献上仕来申候産物二而御座候、

一 明盤

右ハ霧島山之内湯野之与申所二而出来方仕候物二而

御座候、

一 佛鳥類ぼうさふ草与云鳥

右同所山江住居之由承候得共、未取得候者ハ無御座
候、

五 清水神社仏閣名所古城川筋^{惣高}改帳^{人体}

清水神社仏閣名所古城川筋^{惣高}改帳 国分市立図書館
所蔵 片平直行氏旧蔵、写本。

表紙右脇に「寛政七年卯八月并当寅三月書出」とあり、左脇に「大正四年九月改表」とある。

「清水村郷土誌」刊行の際の収集史料と思われる。

清水郷が寛政七年（二七九五）、文政十三年（一八三〇）に藩記録所に郷内の状況を書き出し提出したものの副本を本田親章が借写し、さらにそれを、伊地知季安が抄写したものを清水郷士年寄中へ訂正方依頼するため、送付したものの写しによってつけられたと思われる。しかしそれに加えて清水郷内山之路村、郡田村、川原村、姫木村等の古跡、人名等についての関係史料が収載され、季安自身の考証「管窺愚考」等も抄記されており、また姫木松元氏が季安も同族の伊地知氏であることから同氏に関する系譜の説明も記されている。

以上、要するに本史料は伊地知季安の清水郷に関する

編纂史料であるといつてよい。内容の同一である鹿児島大学附属図書館架蔵玉里文庫本の奥付に「明治廿一年六月下旬以国分郷山口氏原書写之、筆者永田治右衛門」とあるが、片平家所蔵の底本もまた同じく国分郷山口氏本の写本ではあるまいか。

（表紙）

寛政七年卯八月并當寅三月書出

清水神社佛閣名所古城川筋^{惣高}改帳^{人体}

大正四年九月改表

注 本文中「」は朱書を表す。

隅州曾於郡

清水郷 凡五村

総廻拾壹里^{イ九リ十九丁十六間}式町九間^{卯方至財部境自飯屋三里余午ノ方至国分}

十丁子至曾於郡界^{十五丁或十八丁}

総高頭五千八百八拾石余

寛政七年現

員三千四百八十四人

川原村 距地頭館辰方位 高八百石余

弟子丸山ノ路両村ニアリ五口

一葺原山隈部城、在麓境飯屋ヨリ卯辰方鑰掛二町半程野

大手 川原口 脇手 豊ノ口 札ノ辻 忠持 巢堂口 落水口 玄龜庵口

七町冷澤津六町御屋地址旧宅在鑰掛之下

往古藤原姓税所氏所世居也應安四四年 氏久公陣テ咲

限城 在国分宮内 至永和二年本田氏親此城ト姫木城トヲ攻取

故使氏親々治父子守之親治六世之孫紀伊守薰親乃時忠

功アリ、大中公ヨリ数邑ヲ賜ハルニ威勢ニ驕リ子左京

太夫親兼無道ニ一族家臣ヲ殺シテ逆乱スル故天文十七

年治伐シ玉十月九日 四日トモ 薰親父子清水没落シテ庄内ニ

奔レリ則 日新公御入城 大中公モ十四日入御一兩年

マシマシシトゾ此時台明寺ニ伯園公両三度御成アリシ

ト住持来精法印カ元和六年庚申正月五日由緒書ニ詳也

一日新公御二男右馬頭忠將江當城ヲ進セラレ居玉ヒシニ

永禄四年 辛酉 七月十二日肝付省鈞カ師ト廻 今号 福山 竹原郷

躑躅馬立ノ陣ニテ御戦死清水菩提所楞嚴寺ニ葬リ心翁

大安大居士ト法号シ同時從テ陣没スル者七十五人余十

一世住僧近澤ガ寺記録ニ詳也

一忠將子右馬頭征久其御子守右衛門尉彰久迄在城其御

天正八年征久領清水新城上并福山

子相模守生レラレシ時誕生講ノ祈禱ヲ台明寺ニ仰付ラ

レシ事来精法印カ由緒書ニ出タリ相州母堂ハ龍伯公ノ

二女ニテマシマセリ

一征久省鈞ヲ討レ度思召折シモ天正元年祢寝重長肝付ノ

黨ヲ離レ降リケレハ 竜伯公ハ指宿迄出馬セラレ征久

ヲハ將トシテ肝付ニ出陣竟ニ対治セラレテ當城ニ帰玉

ヘルトソ

一清水郷立事年間不詳地頭

天正文禄比

山田越前入道 税所越前入道

元和二 五月九日死

鎌田玄蕃

仲兵衛友光イ

鎌田左京 鎌田源左衛門

五代勝左衛門

鎌田源左衛門 島津安芸

桂又十郎

樺山権左衛門 伊集院半兵衛

天和三亥三月イ五月一日
山田民部有隆

山田新助 新納主税

島津権左衛門

義岡左平太 児玉小六

中馬源兵衛

山岡斎宮 小笠原郷左衛門

梅田九左衛門

桂太郎兵衛

有馬 紉

土岐平太夫

弟子丸村

自飯屋午方
小川院ニツキ弟子丸各六丁トアリ

高七百八十六石余

一北辰大明神

正体業師像長五寸
弟子丸村ノ宮園ニ在リ飯屋辰巳六町

祭神十座

北斗星一郷ノ守護神也

宝殿

御輿床ニ鎮座
南向御合カ修甫

一本地

毘沙門天寶殿ヨリ二町余
北ニアリ氏子修甫

善神玉

左右木像各尺三寸三部束帶
御合カ小板フキ

山之神地主神石鉢小社
氏子修甫大板フキ 宝殿鎮座ノ所靈岩ノ鼻七ツアリ

七星ノ劔先ト云ヘリ

塩井川

寶殿ノ辰巳ニアリ往古ヨリ祭礼毎ニ幣紙ヲ捧ケ案清酒ヲ
手向祭ルナリ

社傳云平家乱ニ清水氏神ト勧請城内頂上高城二千手千

眼觀世音併立有シヲ清水寺山上ニ安置シタルト云傳麓

ヨリ辰巳北辰社ヨリ坤ニ當レリ此社及ヒ觀音ヘハ竜伯

公御上サマ毎々崇詣アリシト云ヘリ

靈窟

寶殿ヨリ北卯ノ方六十間許リニアリ洞穴ニ高サ六尺許横八尺
許リ深キ事十七間許ノ所ヨリ四尺許モ上リ横三尺位其ヨリ深
キ事量リカタシ常ニ浄水出ル平日汲テシホヒニ祭ル祭礼ニモ
此水ヲモ調ヘ供物ヲ備フトゾ

○ 右棟札朽テ讀レス

主取社司

谷口主殿盛方

奉再興北辰大明神

虫ツキ
知レス

癸未 三月二十四日

願主本田因幡守兼親兩座興起焉他字虫損知レス
大工四郎左衛門尉家次

○ 又一枚

(讀カ)

茲歲甲申六月十七日諸當社之次打掃神前之塵時則當社祢

宜有參詣語神之階可相企字知マ
知レス相喜然間集石則同八月十

二日奥隆成就仍捧幣白国家大平諸願皆令満足故也

大永四年甲申八月十二日

願主石塚胤次 敬白

○幣一本長五尺三寸黒塗三ヶ所金物アリ其中ノ金物ニ

弘治四年戊午二月彼岸吉日 御願主敬白

八目ノ鐮矢七本 長刀一振 鋒七本 弓一張ミコシ脇ニ

アリ年中祭米五斗二升五合先年々手形給之凡年八度祭日

正元 二朔 彼岸中日 上己 端午 彼岸中日

十朔 霜朔

高拾石余

隅州曾於郡小川村之内

浮免

右之地税子内待割合を以無親疎致格護年中九ヶ度之祭礼

如旧例堅固ニ可被相勤者也

山田越前入道

慶長九年十二月廿八日

理安判

伊集院下野入道

抱節判

右寺社勘落ニ被召上目録ノミ存セリ外ニ永祿文祿天正ノ
目録屋敷目録有リタレト被召上カ今ナシト云ヘリ

一神主先祖谷口安房介入道神光事天正元ヨリ九年迄御国
家長久ヲ祈ン為ニ六部廻国シテ其受取五代以前安房失
火ニ焼キ今ハ十七通存ス神光成就シテ帰タル時拝賜ア
リト云傳左ノ通持テリ

一中臣大祓祝詞神道十二月大祓 一鬼神面ニ阿吽

一刀一腰二尺 一脇差一腰九寸五分 皆竜伯公ヨリ下サル
トゾ

一守公神 城内弟子丸ニ在リ飯屋辰方二町祭神十五座

東脇神興住吉四座底筒男中……表……
神功皇后 薬師弥陀大日觀音 御餐四膳汁菜皿
無魚類

正面神興弓箭之守公三座中頼朝公左忠久公
右丹後后

鏡三面 虚空藏 御餐膳汁菜皿正月三日
皆魚用他無之

西脇神興止上六座陽神陰一ニ座西ニ男神女一ニ座
東ニ法脉俗脉ニ座像二寸五分六觀音

御餐六汁菜皿
無魚一

稻荷 一座倉稻鬼神本社ヨリ十五間
許下り坂中東向ニアリ御饗一膳 荒神 地主神一座
御饗一膳凡十

五座

面掛松

本社南ノ尾筋ニ老松アリ往古止上社ノ片面自ラ飛キテ
此ニ掛レルトテ名ケシトソ今其面ハ宝殿ニ在リ片面ハ
猶止上社ノ宝殿ニアリ、古松ハ元祿中ニ落木シテ今ノ
ハ植ツキニ荒神御前ヲ此ニテ祭レリ

例祭年ニ二十四度

元日三日五度 六日至七日二度 十四日至五日三度

春彼岸中日一ド上己ニド 端午一度 六月廿九日一

ド 七夕一ド 八朔一ド 秋ヒガン中日一ド 重陽

一ド 十初亥一ド 霜十三一ド 十二月廿五日一度

煤下廿九日一度

一本地十四膳 土器十二束三年一度
御物給之 切盤一毎年清水
惣大工上之

庖丁一同惣カチ
上之 茅筵二枚 山折敷一束 提一

曲柄杓一四行国分本町
年々上之 干鯛一掛 供餐五膳

吳座二枚三行国分唐仁町
年々上之

一年中祭真米壺石先

一古棟札

合奉造立守公神宮一字聖王
王右所希者為掌天長地久御

願圓滿殊者大旦那藤原義久并守護代又四郎藤原征久小

守護代町田治部^{下知}然息災受榮長命有慶家門御繁昌武運
如意怨敵退治而豐饒不知諸人快樂所也仍大願主小嶋先花棚
三河守源喜繩同源七郎不知繩造畢如此神德心中之求願皆
令満足旨趣如件

永祿七甲子歲三月七日

鍛冶安田悪八左衛門
^{ママ}
惣大工小工名
長瀬飛不知

奉再興守公神宮殿一字^{聖王}
^哀
口不知

大願主藤原家久朝臣

右當社再興之旨趣者古昔初清水城内建立高靈之社檀崇
敬余異者也云々當地頭鎌田左京亮政德受國主之芳命仰
下知己成就了云々

于時元和五年己未二月吉祥辰日

當時司阿多藏之丞

當時噺濱田助左衛門尉國分讚岐守主取大工川辺六右衛

門同德田覺右衛門主取鍛冶安田孫兵衛門當時主取太夫谷口主

殿助當地頭鎌田左京亮政德當時奉行篠原十郎衛尉御再興間

之奉行蒲生宮内少輔 當地頭樺山源三郎殿

弟子丸村小縁ノ中屋敷十二間半十四間五畦廿五步

中屋敷五畦大豆苞表

大豆苞表五升八合守公神

大宮司

右前代より御免之太宮司屋敷被下置候

當時噺濱田右京亮 篠原善右衛門 古川權之助

普請見廻衆 野田主馬允 高橋五郎右衛門 古川新兵衛

牧勘ヶ由兵衛 万膳兵部左衛門

大宮司

清水土代々 阿多藏之丞——野田万左衛門——主馬——上田貞

右衛門——長野孝右衛門——社人谷口參右衛門

北辰宮主取ニテ官職願ニ付忝往依願大宮司被仰付自其
代々子孫勤之

山之路村

自飯屋寅方 高六百九十石余
上世来西郷ニ付キ山之路廿五丁トアリ

一日吉山王 山之路村ニアリ祭神廿一座大己貴命台明寺

ノ一山ヲ鎮護セリ宝殿ハ青葉竹林ニアリ

台明寺境内 古墓多シ何人ヲ知ラス

地主園 上古鎮座ノ所トテ森山アリ其時ハ地主權現ト云ヘルトソ

御本地 弥陀觀音勢至左脇開山行上人右脇開基初祖

上七社 本宮權現 釈迦 聖真子 阿弥陀 二ノ宮 薬師

客人宮 十一面 十種師宮 地藏 八王子 千手

三之宮 普賢

中七社 牛御子 大威德 大行事 毘沙門 氣比 聖觀音

王子宮—文殊 旱尾—不動 下八王子—虛空

聖女—如意輪

註三曰ク
正和二年十月廿七日大介兼税所藤原敦胤山王親現ニ寄進長燈祈足田出
し元徳二年六月一日大介兼税所
藤原敦胤燈油田寄進

下七社 小禪師—弥勒龍樹 惡王子—愛染 新行事—吉祥天女

岩瀧—弁才天 山末—摩利支 鈿宮—不動

大宮龜殿—大日 聖真子龜殿金剛界大日二宮龜—日光

一鐘樓堂 天慶九年鐘銘ヲ写シ小鐘ナルニヨテ正嘉元年丁巳十一月十

九日銘改トアリ笛竹貢御ノ所ト云モ見ヘタリ 朱書註
守護代左衛

門尉藤原重頼トアリ

『社旁ニアリ』
一忠久公御願文略ス一年祭七度廿一膳宛清酒黍ヲ供フ

正七 二初申 上巳 端午 八朔 九日 霜未申 十

二廿九日 大餅大根
各二十三

一慶長六年三月高四十石ノ目錄アリ

一宮司 渡辺盛満繩往—代々—主取社人渡辺右京武教

乾司
一諏方上下大明神 弟子丸字都ニ在リ飯屋ヨリ末方七丁

許

祭神二座 健南方命立像八寸八分 善神王 左右二座像各一尺二寸
下照姬命同七寸五分 氏子修甫

本田氏造立上古ハ鋒木ノ俣ニ勘請セシトソ年祭

元旦 春秋彼岸 七朔シソオ 廿日同 廿七日祭弟子
九名

廿八日 麓氏子中

奉造立諏方一字 永正十三年丙子卯月吉日

大且越藤原兼親助成經素云々大工平氏寺師助左衛門宗

貞小工寺師助右衛門助正鍛冶向江助三郎

一歌仙絵板 紀貫之裏云大願主當座主覺祐并種田伊与守

絵師井上但馬守小野朝臣良保信心大且那藤原朝臣

嶋津以久并彰久武運長久云々凡河内躬恒裏ニ云町

田太郎丸同五郎丸天正十六年戊子十一月吉日

(代々社司 谷口主殿)

一乳尾三所大権現 己午ニ向ケリ祭神熊野三所大—

左脇薬師立像長四寸

正躰阿弥陀長五寸立像

右脇千手長四寸

往古弟子丸氏被崇之年月不詳建久年中弟子丸建部氏

宗房アリ

『弟子丸村五丁建久九年三月十二日田所建部宗房所知

此高千穂ノ事ヲハ日向国風土記ニ臼杵郡ノ知舖郷ニ傳ヘ

シ事在本居宣長モ惑ハシテ書紀ノ一書ニ日向襲ノ高千穂添山峯トモアリテ姓氏録ノ序ニモ天孫襲降ト書シテ天降マセシ高千穂嶽ハ曾於郡ノ霧島山ニ弥疑ヒナキ明文ナルヲモ決シ置レンハ最ト遺憾ナル事也 高千穂ノ上ニタマタマ惑ハン人モアランヲ心ツカヒ慥ニ襲之肩書マテシテアレバコソ姓氏録ノ序ニモ指シテ究メテ降襲トナラレシハ疑ナキ事ナリ

左アレハコソ康曆ノ頃迄智尾名アリ

大隅国曾於郡智尾名事就為由緒之地先日雖宛行其狀紛失云々然者重而所宛行也仍先例可致沙汰之狀如件

『康曆三年五月廿日 玄久』

弟子丸若狹殿

諸家大概記云建部姓弟子丸ハ隅州清水之内弟子丸名ヲ致領知為家号

氏久公ヨリ弟子丸若狹へ被下候文書弟子丸名智尾村ノ事為由緒之地被下候ト見得申候云々今弟子丸ニ乳ノ尾三所權現アリ弟子丸氏ノ崇敬セシト棟札ニ曾於郡住人弟子丸治部左エ門建部宗弘ナトアリ如此霧島山ノ麓ニ智尾ト云村アル事ヲ本居宣長ニ知ラセタラハ証拠

ニスベキヲ白尾国柱サヘ氣ツカザルカ何レニモ天降マセシ霧島ノ証ニナル文書ナリ

一宝殿造立棟札右者文明六年甲子三月十八日祈禱主謹言大隅州曾小川村之住人弟子丸武部氏宗重并谷口大中臣氏盛元大工士兵衛三郎并大工藤原氏長瀬親長同八郎三郎

一同棟札明應七年戊午十一月廿七日祈禱主謹言大隅州曾於郡之住人弟子丸治部左衛門尉建部氏宗弘其子又八郎

大工士兵衛三郎谷口盛元

所大權現アリ弟子丸氏ノ崇敬セントテ棟札ニ曾於郡住人弟子丸治部左衛門建部宗弘

一同再興棟札天正二年戊戌小春如意日願主覚因坊宗朝權

大僧都敬白云々夫以當社根本熊野三所大權現本地弥陀

葉師觀音垂跡奉号智熊大權現云々

大隅国於隈城御忠節之辻干今無忘却ト為其證拠之知能

權現領七段 置重而明合之時者可致分別候恐々謹言

伊集院大和守

忠朗 判

天文十七年十二月吉日

實圓坊參

一大宮司川畑宗朝寛門坊横山秀傳坊——蓮生坊

阿含院——寛蓮坊后阿含院蓮性院——阿含院代々横山氏

一 小止上大権現弟子丸清水寺ノ前御領門ニ在リ祭神六座
石躰也曾於郡止上ノ御幸祭御旅所トテ崇タルト也氏子
修甫

世々社司 谷口主殿

郡田村

在飯屋丑方高千四百石余 上世曾於郡二付キ
郡田村十三丁トアリ

一 熊野三所大権現郡田村小山田ニアリ祭神三座 山神一座十

八神一座迦藍神一座

善神二座 元禄十五年壬午二月廿一日御

供所ヨリ出火神殿拜殿神体棟札消失由縁不詳

大宮司大田氏上租創建云々

大田淡路守

清水土
天正中也

対馬——掃部——惣右衛門——掃部

——太左衛門——孫七——万七

一 春山野牧

自飯屋丑寅二距ル二十七八町曾於郡ト堺ヲ接ル所ニア
リ周廻三里三町十八間ニソ其四分ノ一清水三ツメ曾於
郡二馬凡二百足斗リ

一天滿大自在天神 郡田村松元門ニアリ祭神二座中菅丞

相道真東中将殿嫡子西吉祥女北御方社司松元門之源三丞

棟札文明七年未九月二日造立棟札ニ此天神宮御本地由
来少弐殿御下リ之時勸請相傳云々

一 弘治二年丙辰十二月廿五日再興棟札ニ相傳此天神宮由

来ハ少弐殿御下向之時御勸請之御社也末代是ヲ知セ置
者也トアリ、由緒棟札曾於郡地頭財部筑前守盛住司代
木野田藤七本願主稻元兵庫丞大工長瀬助左衛門尉兼滿
同八郎二郎小工高橋善左衛門尉大宮司古川仁右衛門同名
太郎五郎外ニ多人數略ストアリ

一 永禄九年丙寅三月吉日棟札大旦那當地頭三原遠江守重
秋外ニ多名アリ

一片平熊野三所大権現 飯屋ヨリ子丑方七町余郡田村片
平ニ在リ

祭神三座并左右石躰二座勸請年月不詳社地申酉ノ方五

六町ニアリ

鎌足十五代

大宮司系

片平民部太輔兼秀 寛仁二十六代片平準人介
中人兼長

兼堅片平休
右衛門

兼時 休右衛門 兼知 休左衛門 兼由 休兵衛 兼次 休八

兼氏休左衛門

子孫片平休兵衛清水土

右三社ハ根本北辰社ノ末社ニテ寛文十二年北辰社司谷

口主殿カ子主膳曾於郡止上社司上原掃部カ養子ト為リ
テヨリ内諾ニヨテ上原氏ヨリ于今社司タリ

川原村 在飯屋辰方
高八百名余

一山之神 川原村薄之ニ在リ祭神九座 月讀大山祇

東脇束帶男神二座立像八寸

正面立鳥帽子束帶神三座立像八寸

西脇束帶女神二座像六寸五分 開基初祖二座

右清水土宮田少監物庄内乱ニ居番セシ功ニ高七石三斗

ノ褒賜ヲ受タル時創建シテ世々祭之子孫宮田金助也

一山之神 飯屋ヨリ巽方川原村ニアリ村中ノ惣廟タリ祭

神九座 月讀命
大山祇命 奥山中山口山各三座石鉢鏡十一面觀音并

藥師像アリ、善神王左右例祭二月初申十一月初申祭米

壺斗七升五合先每年庄屋差出ヲ以手形給之

一宝殿造立棟札 永正七年庚午十一月廿日天長地久御願

円満国土泰平殊者別而大願主秀延并丸田弥太郎前田次

郎九郎太郎左衛門諸人名敬白大工藤原国家小工平氏宗

貞季安云寺師助左衛門ノコトナルベシ

奉再興山神御宝殿一字 聖一
哀声

右當社再興之旨趣者古昔初於川原名為宗廟建社壇山

神奉勸請崇敬余異者也然而後末之今時覃破損云々于時

寛永四年丁卯十一月七日當地頭相良玄蕃助殿 神主谷

口安房介小工徳田覺右衛門太宮司吉右衛門

一再興棟札萬治四年辛丑二月九日當所人宮田藤右衛門

大工長田七郎左衛門同市来伊右衛門池田左衛門諸人名

略ス

一代宮司古来兩家アリ桑田之吉太郎中間之六藏世々祭之

一山之神 川原村口輪野ニアリ口輪野山之神ト云ヘリ

祭神月讀命大山祇命三座左法鉢座像六寸正鉢男神座像

五寸右女神同五寸五分代宮司口輪野門之休右衛門世々

祭之

一山之神 川原村秋元ニアリ祭神右同三座正觀音座像五

寸代宮司上秋元門ノ長左衛門世々セリ

一高座神 同村中間門ニ在リ祭神三座 上高座神
中……… 石鉢

代宮司右門ノ六藏世々スルトナリ

一山之神 同村葦谷ニアリ葦谷山之神ト云ヘリ祭神二座

月讀命大祇命冠束帶座像長七寸大宮司東芦谷屋敷名頭
金右衛門世々祀之

一 荒人大明神 川原村芦原山ニ在リ祭神大己貴命事代主

命冠束帶二座長七寸西脇ニ稻荷社アリ三座石鉢也

大宮司税所庶族妻屋氏也 上世文 与左衛門——三郎五郎——

与兵衛——伊左衛門——与兵衛——伊兵衛——養子金

右衛門——善左衛門

棟札

奉造立芦谷山之神_カ宇之事_カ天文廿四年乙卯式月廿八

日右意趣者大旦那息災延命寿長遠

子孫繁昌福智円満皆令満恕意足吉祥之故也

妻屋伴左衛門

願主 敬白

一 鎮守大明神 川原村炭床ニ在リ祭神三座冠束帶座像各

五寸炭床中ノ男女ヲ守護シ玉ヘルトソ

代宮司 森岡七兵衛——惣兵衛——万右衛門

鶴右衛門——万兵衛代々セリ

一 瀬戸ノ口鎮守大明神 川原村瀬戸口ニアリ祭神三座左

法鉢座像五寸五分正鉢男神冠束帶左女神各五寸五分劔
請年月不詳瀬戸ノ口中男女ヲ守レリ

代宮司式部左衛門——喜之助——新右衛門

次兵衛——喜右衛門——代々セリ

一 上ノ藺山之神川原村上ノ藺ニアリ祭神三座石鉢大祇神

代宮司善左衛門——五右衛門——善左衛門

庄右衛門——五左衛門世々ス

姫城村 飯屋ヨリ西方也
高二千三百石余
「本手口石原」ト云

古城ハ飛地ニアリ税所氏居レルトソ金吾石

姫木城南ノ頂上巖石ニテ轡ク通カタシ、其所ヲ切崩シ城門

ヲ構タルトテ大石ノ角切崩シアリテ今モ其ヨリ登ル金吾石ト

唱ヘタリ税所氏カ掬レル時志布志勢ト石原口ニ戦ヒ碓山左衛

門勇ヲ奮ヒ岩角ヲ切崩セシトテ名ツケルト云傳又文安四年氏

久公 忠國 在城シ玉ヘル時敵方寄来度々戦利アラセラレ御勢ヲ

被残ト云河俣カ居候向之東之寸尾 サスヲ

いかす尾ヨリ金吾石迄敵攻入其後味方篠ガ峯ノ横入越揉合

セかんぬきの瀬戸税所之両城あひ迄攻入また敵方真向ヨリ

金吾石迄切付度々合戦候^{疾事}て敵本田重恒川侯弥太郎其外數十人
打取ラルトソ

『貞久ノ時 姫木十郎大中臣也 姫木大夫篤季建治二年也

姫木五郎義甲正喜元年 姫木藤七太夫篤季 文永八年

姫木五郎四郎 観応三年 姫木十郎観応三年

姫木左馬助忠通 應永十一年』

一湯ノ牟礼城合戦ニハ宇都相良宗像山北等加勢シテ相戦
ケルヨシ其後氏久公永和中御攻取本田親治ヘ預ラル
ト云々

一熊野三所大権現 外姫城ニアリ祭神三座石躰^{王子十一面ノ尊像ナリ}

右社地ハ上古本田氏居城取添ナリシ由也大宮司下権現

門弥兵衛——太郎助——次郎右衛門——太左衛門——三右衛門

右ノ社ト郡田村ノ小山田ト片平ニアル熊野ヲ合セ三所

ニ崇タル由申傳ヘケルトソ

一貴船大明神 村ノ田辺ニアリ祭神三座^{神鏡三面}本社山城国

愛宕郡ニマシく夫婦ノ睦ヒヲ守玉ト云傳ヘリ

代宮司ハ正八幡宮檢校筋ニテ代々社司ス助兵衛

五次郎——徳五郎——清五郎——代五郎——古老左衛門

一天満大自在天神 本村ノ迫石原ニ在リ

祭神三座^{衣冠一座神鏡二面管丞相道真公中将殿北御方吉祥女}

代宮司松本門八左衛門——萬左衛門——八左衛門

一七社大明神^{『府中守君神ノ末社ナリ』} 右同所ニアリ 祭神七座石躰代宮司正八

幡檢校筋ニテ司之階元門鬼五郎——源太郎

一妙現大明神^{自飯屋西戌ノ方ニ距ル事十二三町} 村ノ阿多石ニ在リ祭神北

都七星三座衣冠男神一座石躰二座姫木ノ城国司カ嶽ト

云靈岩之劔先ニ鎮リマセリ^{朱書 笛竹貫御ノ節奉納スト云々}

代宮司関右衛門——善兵衛——清八——源八

善兵衛

一若宮八幡社 飯屋ヨリ西ノ方二十二町此村ノ隅ト云所ニ在リ

祭神二座^{高靈龍神ノ奥ノ御前鏡小ニ面皆あばうんぼろんノ梵字アリハ十一面ノ像ヲ彫リ天文九年十一月十三日トアリ}

住吉大隅氏建立仁王七十七代ノ帝後白河院代二皇子仁

王七十八代二條院後宇治世七年其後氏神伊豆国ニ隱居

シ玉ヲ三島大明神ト名付玉ヒ大通知勝佛平治元年己

卯三島大明神ノ化身弓削道鏡若一ノ王子^{『文西寄進状』}^{十一面觀越智氏}

大隅国中之中職神職ヲ被成下名字隅ト号ス^{姫木住人大中臣角入道應永二十八年奉寄進水田五反砂礪藏寺}

秀中納言秀信秀續實秀秀廣秀豊秀時時隅越中守秀武二

代左馬助道秀此間廿四代大隅伊豆守秀次大隅助右衛門
尉秀宗隅利助秀歳右名字ノ子孫ハ今無之此通代々祭來
レルニ跡絶テ隅門ノ助市代々社司セリ今ハ迫田ノ助之
進也

一字都岩屋権現〔府中村守君神ノ末社ナリ〕 此村ノ宇都ニ在リ祭神一座 彦大之出見

命例祭二月霜月初遷代宮司江口源右衛門清水 北中城門ノ

徳左衛門——南角門茂兵衛——茂左衛門

一稻荷大明神 此村ノ隅崎ニアリ祭神一座倉稻魂命 衣冠木像

右隅崎ニ勧請セシ時地頭鎌田十左衛門尉政常宝永八年

辛卯諸施主各々名多ク棟札ニアリ主取清水士中條助左

衛門義遠嫡子中條市郎右衛門義淳二男中條助七義次三

男中條十右衛門勝茂令造立之畢

一天神社 此村ノ槇尾ニアリ祭神二座衣冠一座 菅公等也

〔府中村守君神ノ末社ナリ〕 社司北辰社司ナリシニ寛文元年丑八月国分若宮社司谷

口但馬へ一往トテ授ク今府中ノ守君神社司ヨリ祭ヲ司

ル、代宮司ハ内姫城氏子中ヨリ隔年勤ノ然ルニ有馬某

——六右衛門——清八——納助世々セシトソ

一愛宕堂 村ノ平岡ニ在リ、堂守高田門源七

一觀音堂 中城ニアリ 同満田門平八

一地蔵堂 石踊ニアリ 同森山ノ半左衛門

一觀音堂 森山ニアリ 梅田ノ清八

一虚空蔵堂 此村ノ七ヶ所ニアリ、堂守中水流ノ喜三右

衛門

一地蔵堂 同山野ニアリ 堂守古江ノ太郎右衛門

一宗像社 同所ニアリ同稻森ノ仙右衛門

一龍護山洞泉寺 開山楞嚴寺十一世近澤和尚〔用房法名正西建永元年 丙寅八月當寺建立〕

一妙法寺 福山大安寺末寺楞嚴寺配下

右両寺開基年月世住不詳

〔註ニ曰ク〕 空安日、大中臣定隆初テ姫妓ニ移ル妓ヲ改テ木ニナル 寛

弘ノ比二代篤定三代時方

一於限ノ城〔姫木城ヨリ西北ニアリ天神社ナリ、小城トモ云ヘリ姫木ノ追石原ト槇尾トノ両所 二モ神アリ何レカ巻尾、尾限、小城トモ云槇尾之天神ハ是ナリ〕

一こかの森 地頭飯屋ヨリ西ニ距リ十九町姫城村ニアリ

古桶樹根株三ツニ分レ周廻八丈二尺風ノ森トモコガラ

シノ森トモイヘリ、古ヨリ名所旧跡ト傳レトモ文碑ナ

シ古我大臣ノ塚木トモ老人云傳ヘタリ或ハ歌人ニテ古

歌アル故ニ古歌ノ森トモ委ハ詳ナラス〔長門本平家物語ニ

符合セス 重テ述ヘシ天降川トモ云説アリ

一大津川 源ヲ日當山ノ東郷村ニ発シ姫城村ニ流入ル俛

此川源霧島山ヨリ出ル

屋ヨリ十九町許也八町余流通リテ国分ノ内村ニ出ル也

一夕暮ノ関 姫木城ヨリ北ニ當リ湯ノ峯城ヨリ子丑ニ距

ル二町許岩瀬戸ニシテ通路アリ宗像氏ノ古墓残レリ隣

ニ宗像ノ社アリ

辻堂小社

一愛宕堂 弓場ノ上アリ 堂守横山阿含院

一地蔵堂 牟田ニアリ 同 安田孫太郎

一觀音堂 落水 重久惣兵衛

一岩屋不動 弟子丸名 市ノ丸門之勘七

一地蔵堂 弟子丸詰見 平嶺喜左衛門

一葉師堂 郡田村久保田

一北山社 同所

一若宮八幡社 同所宮田

一阿弥陀堂 同所弓場

一觀音堂 同所空

一霧島社 同 近田

一地蔵堂 同 山元

一觀音堂 同 野添

一地蔵堂 同 宇都良

一觀音堂 同 造田

一觀音堂 同 永田

一地蔵堂 同 堂ノ前

一觀音堂 山之路村

一毘沙門堂 同所

一葉師堂 同所

一釈迦堂 同所

一地蔵堂 川原村 堂守瀬戸口門長十

一觀音堂 同名芦谷 東芦谷ノ善左衛門

一地蔵堂 同 炭床 湯田ノ市太郎

一葉師堂 同 下河原 下川原ノ助左衛門

一地蔵堂 同 市野ノ 市野ノ八十

一山王社 同所 右同人

一阿弥陀堂 川原村口輪野 口輪野ノ太左衛門

一山王社 同 飛石 稻元次右衛門

寺院

一竹林山衆集院臺明寺 天台宗 清水祈願所 飯屋ヨリ一里山路 村アリ檢者付修甫
 日吉山王社 本地堂 鐘樓 仁王門 皆檢者付

右白鳳元年創建也人皇三十九代天智天皇勅願所笛竹貢

御之地繪旨下文寄付田解決等其外將軍家之御判文書數

百通有之住持依頼御記錄所江差上置候享保元年丙申十

二月臨寫文書爲卷物七軸臺明寺二箇藏セリ寺高拾三石

八斗三升三合三夕三才外二寺地御免地日吉山王社年中

祭料被仰付置候 創開山祖像 本地堂ノ旁ニ在リ古ハ法中興 建開山祖像 相宗ノ由毎祭御饗ラ供ス

開山大僧正行玄 天台宗也 山門四十八 年受戒保延四年天台座主久安元年轉

補大僧正勸請日吉山王日當山西光 寺開山正八幡宮再興ト申伝フナリ

日吉山王社 飯屋ヨリ一里五町 青葉竹林ニアリ

圓臺房 天承中 人俊 惠房 治承三 亮千阿闍梨 正嘉元 印禪法師

曆応二 年比 印清阿闍梨 榮印阿闍梨 豪榮法師 實祐權

律師 重榮權律師範 開基ヨリ四十四代住僧不詳

十代立久公 時改宗 中興真言開山榮賢阿闍梨 永正 年中二 快賢 法印 天文年中

三寛遍 四精譽 五憲譽 六精宥 七來清 八精賢

九成伝 十盛阿 十一盛忠 十二直盛 十三盛意

十四寛岸 十五寛英 十六快遍 享保十一年丙午八月

吉貴公繼豊公命シテ弥勒院ノ末トシ大興寺同格タラ

シム

再天台改宗中興開山鷲峯鼻祖大僧都憲英和尚

二寂應 阿闍利 三憲瑞 以下法印 四英良 五憲嚴 六良宜 七

憲盛 八憲林 九見定 十良義

不動堂址 本寺ヨリ子丑ノ片六町許ニ在竹山也 破壊セシニヨリテ不動ハ今本寺護應堂ニ安セリ 阿

弥陀堂 得仏公建玉ヒシ堂也 日吉山王社ヨリ 申酉の方一段低ク十五間許ノ所ニ在リ 兒ノ森 丑ニ距リ三

町許路旁ノ左リ四五間程篠田ト云所ニアリ高サ六尺許石組ノ上ニ石塔

アリ上に楠アリシニ落木シテ今ハナシ由緒不詳 感嘆 瀨 本寺ノ門外橋ヨリ十五六間 清見ノ瀧 日吉山王ヨリ亥子

リ高サ一丈二三尺ニ重瀧也兩 岸ヨリ下迄青葉ノ竹生茂レリ

一佛頂山楞嚴寺 禪宗 飯屋ヨリ申酉ニ距ル四丁 弟子丸ニアリ 清水菩提所

御合力 修甫 本尊釈迦座像 我山吾哲通幻派天真派 爲大休安了庵主建立 開基本田元親 永年中

開山天真自性和尚 奥州ノ産ニシテ通幻十哲ノ中也応永二十年癸未 正月十三日越前州宅良慈眼寺ニテ迁化慈眼寺末寺

トアリ 偏中頭馬面坐西天 寺領六石

貫明公御牌 大安靈屋并御牌 心翁大安居士爲菩提寺屍の埋 ルト也高十石島津玄蕃殿寄附

鐘銘 隅州楞嚴寺前永正十三丙子 十一月吉日初進沙門慶文

二世機堂 三巨海 四天秋 五明心 六善室

七清室 八代春 九悦伝 十安清 十一近澤 十二大

洞 十三歳室 十四松堂 朱記十五棟陽 十六春沢 十七白翁 十八活

山 十九實堂 廿雲義 廿一隨岩 廿二大雄 廿三卧雲

廿四大鵬 廿五円岸 廿六本達 廿七性徹 廿八古巖

一菊銘山 真珠院 清水寺 真言宗 飯屋ヨリ午ニ距ル五町

本尊千手観音 境内南ノ岳ニ安ス秘仏朽損セシニヨリ止別當深亮房覺遍造

脇寺三十三鉢 佛工日野氏深賢快重秀賢作

開基年紀伝ラス 平城帝ノ時將軍田村麿勅ヲ奉テ高丸

ヲ勢州鈴鹿山ニ退治セシ時聖徳太子ノ作玉ヘル千手観

音二寸八分ノ霊像ヲ奉メ赴ケルニ其験アリテ勝タルト

テ大同元年清水寺ヲ山城国ニ建テ観音ヲ安シ左右ニ勝

軍地藏ト毘沙門ヲ脇土トセリ其頃ヲヒ此城内ニモ観音

ヲ勧請セラレシトテ地名モ清水ト号セリトカヤ其ノ後

今ノ地ニ移セルトソ慶長中 貫明公国分ニマシマセシ

頃御姫持明君等ト屢光臨アリテ召上ラレシ御膳具トテ

椀高サ二寸五分四ツ椀ニシテ差渡シ四寸八分内朱塗外

黒塗ニ朱ノ蒔絵梅松竹アリ但御笠椀イト目コンシツ平

膳平盆各十人前本寺ノ什宝ニソ有ケルニ稍捐シテ今ハ

僅ニ存セリ

中興開山頼譽 年代不詳二世邵量元龜三年九月寂 三勝暲 四番盛

五順性 六信秀 七遍恵 八秀祐 九日遍 十日盛

十一頼全 十二快賢 十三元長 十四快盈 十五宜祥

十六寛壽 十七寛玄 十八快賢 十九慈傳 廿如周

廿一堯教 廿二盛雅 廿三盛龍

一菊林山片岳寺 飯屋ヨリ午ニ距ル事 八町十トモ弟子丸村ニアリ 開山楞巖寺十四

世松堂和尚 創建年月伝ハラス初メ一僧岳ノ旁ニ隱栖

シテ前栽ニ菊ヲ愛セシヲ 竜伯公聞召サレ辱モ慶長十

年乙巳九月二十七日光臨アリテ尊詠ヲ賜ヘルトテ裱飾

シテ今ニ什物トセリ

片岡をかこひて寺に住人ハ

うき世の外や志ら菊の花 龍伯

一筆令啓入候定ニ御息災ニ御勤可被成ト存候然者前二

龍伯様御筆之表具御頼ニテ候漸頃日出來候ニ付差遣申候

御請取可被成候猶期後音之時候恐惶謹言

伊集院半兵衛

久孟 花押

十二月三日

片岡寺地御房様マイル

一 繁茂山総昌寺弟子丸村ニアリ開基年間詳ナラス福昌寺

末寺ニソ楞嚴寺配下也

一 養心軒ハ郡田村ニアリ曾於郡慈恩寺ノ末ニソ亦楞嚴寺

ノ配下也

二 ケ寺小庵無住ノ寸モアレハ世住詳ナラス

一 青葉ノ竹ハ山ノ路村日吉山王ノ社地ニアリ飯屋ヨリ一

山王ニツクヘシ
今国分向花村ニ基跡ト云伝フ所アリ川底ニナリ橋アリ鏡橋ト云

里五町往古笛竹貢御ノ時ハ伐テ府中村国分鏡ノ池ニ漬

シオキ妙見ヘ奉納シテ税所氏大介兼
隅州
税所介守護セシ頃折々宰

領シテ上京セシトソ

一 清水郷士瀬戸口伝左衛門藏タシ文書天文十五年丙午八

月十五日瀬戸口美作守秀辰 近衛殿下ニ謁見シ短冊二

枚ヲ拝受セシトテ

子孫今ニ所持

いかなれはそのかみ山のあふひくさ

としはふれどもふた葉なるらむ

嘉辰令月歆無極万歳千秋楽未央

万代と見笠の山そよはふなる

天のしたこそたのしかるらし

一 山ノ路村ヨリ一川流レ郡田村ヲ通りテ国分新町村ニ出

ツ支流ニハ長谷宇都良通迫六郷ノ小川アリ

一 川原村ヨリ一川流レテ国分ノ上井村ヘ出ツ支流ハ荒川

内鹿倉国分ノ内猿ノ木場ヨリ川原村ニテ流合ヘリ

一 清水強張踊ハ文禄四年乙未貫明公本御内ヨリ富隈ニ移

玉ヒシ時御城ノ普請ヲ諸士ニ仰付ラレ御加勢申上タル

ニ付慶長元年丙申御移徒ノ時荷担セシ心棒ナト持テ強

業ノ物ヲ背負ヒ万歳ヲ祝テ躍ヲ致シ上覧ニ備奉リケレ

ハ御機嫌不斜誠ニ強張ノ事ト御意アリシトテ強張踊ト

名付年々相踊其後国分曾於郡敷根日当山五外城同様此

士躍仕来同十年癸巳富隈ヨリ国分新城山下ニ御移御在

中年々備 上覧御逝去以後ハ御年回ハ勿論間ニモ右ノ

由緒ヲモテ奉願踊仕来最初富隈ニテハ荷物ノ心棒ヲ手

ニ持テ御祝有之御前ニ躍出其後ハ鐘太鼓何レモ軍中ノ

理ヲ以テ九字又ハ七五三ヲ表シテ踊来レルトナン

産物

木瓜五十斤 枳殼六十斤 サイニ二百斤

右ノ位年後葉園方ニ売上ストソ依年増減モアクト云
へリ

煙草名所

修理田^{弟子丸村ニアリ国分} 本町^{同村ニアリ同} 五段田^{亦同村ニアリ同車}
田^{伊勢ケヤシキニ類セリ} 武元^{ニ類セリ}

東之上^{郡田村ニ在リ同} 砂子田^{姫城村ニアリ同} 是ヲ清水ノ五ヶ

所ト名付タリ又別ニ芋畑^{郡田ニアリ同} 丸嶺^{亦郡田ニアリ同}

通計七ヶ所トス猶別ニモ鎌田田尻鬼田石蔵ナト云ヘル

宜地少カラス清水煙草ハ国分ノ五ヶ所七ヶ所ニモ類シ

一体ノ出来ハ国分ヨリモ増リテ風味ヨカリシトソ去レ

トモ国分五ヶ所ハ格別風味モ宜シク価モ其通ナレトモ

清水ハ五ヶ村惣体ノ風味宜キニ依テ商客他州ニ仕登セ

スル者トモ清水口ト唱ヘテ国分煙草ヨリモ拔群ノ価ヲ

増シ買トナン

一柿 川原村ノ名産

右寛政七年卯八月文政十三寅三月御記録方ニ所ヨリ書
出セシ副草ヲ本田親章郡奉行ニテ国分廻勤アリシカ託
ヘ詰合地方検者ニ頼入密借ソ遣サレシヲ季安任筆如此

文ヲ約ソ抄写スルモノ也嘗テ姫木ノ来歴ハ別ニ一冊ヲ
著シ置タレハ重テ参考セント斯ク草稿スル事爾リ

文政庚寅三月晦日

伊地知季安書

清水郷士年寄衆へ此通御頼被遣可被下候左候テ否之事
張紙ニテ茂イタシ此冊被返具向ニモ相成候得者無此上
欣幸ニ御座候細々申上候得者御覽御賢慮次第可被成候
以上

小十郎

村右衛門様

姫木城

荒増覚

一氏久公咲隈城ニ陣シ玉頃永和三年九月本田氏親不意ヲ
伺テ隅州長尾城^{横川} 姫木城清水城ヲ攻落スニヨリ 氏
久公ヨリ氏親親治父子ニ預ラレ本田安了カ時男子ナク
弟信濃守重恒ヲ養子ニソ清水姫木長尾迄伝領シケルニ
文安元年重恒不臣ノ色ヲ顯シ忠国公自ラ將トソ御発向
アリケレハ重恒拒戦事アタハス曾於郡ニ出奔セリ故公
其旧領ヲ召上ラレ御断分トソ清水ハ 公御夫人心華君

ノ御舍弟新納四郎三郎忠国へ賜ヒ姫木三十町ハ 公御
 舍弟島津出羽守有久へ賜ヒ其外我等家二代伊地知小次
 郎重之ニモ姫木ノ内ヲ被下居住セシニ忠国ハ無程清水
 ヲ差上ラレ候故重恒カ甥本田因幡守国親今ノ本田久米家之
重恒ハ半兵衛家之
 ニ惣小川三十町ヲ賜ヒタレト旧村七百町ヨリノ半地ノ
 上へ其時召上ラレシト也然ニ重恒国親カ清水ヲ攻返サ
 ントノ説ヤアリケン文安四年カ十二月廿九日 忠国公
 モ姫木城ニ入ラセ玉ヒ軍勢ヲ石原口ニ残シ置レケルニ
 御敵本田重恒河俣弥太郎等兵ヲ二手ニ分テ河俣ハ東ノ
 サス尾ニ陣シテ懸リケルヲ御舍弟出羽守有久源左衛門
 尉田布施又七廻某本田舍弟長野備前其外一騎當千拒戦
 テサス尾ヨリ金吾石迄追付セラル篠嶺ヨリ横入レセシ
 兵ト合セテ又今城カン貫ノ瀬戸税所ノ両城ノ合迄切籠
 ラレタリ又敵田間ノ向ヨリ金吾石迄切付タレトモ其時
 モ戦勝テ本田重恒河俣弥太郎カ頸ヲ初中間ニ至リ數十
 人ヲ討取タリ夜ニ入テ外ノ頸ハ取ラストナン出羽守源
 左又七等功アリ一人モ死ル者無シ疵者多シト其後小次
 郎重之子伊地知民部少輔重照迄モ姫木ニ居城セリ

『行脚・雜録』

一文明六年^{甲午}八月三ヶ国ノ一所持等ヲ書タル旧記ニ

清水仁本田親兼云々一城宛被持ト姫木仁伊地知民部西
 郷出雲守牛山仁岩野加治木三郎四郎云々

右ノ通アレトモ私家ノ古系図ニハ小次郎重之ハ号島津
 松元トアリ重照モ号松元民部少輔トアリ其孫ノ代本名
 伊地知ニ改タルト記セリ

^{〔按ルニ〕}
 船津村休左衛門文書左ノ通

一同此御誓文を以懇ろに承事悦喜之いたり候もと

よりめん／＼の御事代々他事なく申うけ給候事にて
 候うへこんと^{上 今度}のきさみことさら御心さしのをり申

つくしかたく候しよせんきやうこうにおいてめん
 めんの御大事をは我々父子大かうと可存候大小事一

味同心に申うけたるへく候猶めん／＼御子孫にいた
 るまでも御大事をは見はなち申ましく候この条 正

八幡大菩薩霧島六所大権現天満大自在天神も御らん
 候へいつはりあるべからず候後日のためにて候間か

くのことく申候恐々謹言

〔大中臣姫木氏力〕

了阿（花押）

応永六年五月一日

姫木松本殿

姫木 角殿

『姫木住人大中臣角入道文西了カ』

姫木馬場殿

楞嚴寺寄進状

姫木住

大中臣角入道

応永廿八年^{かのとのうし}二月廿八日

文西(花押)

右通姫木ニ松本氏角氏馬場氏ナト応永迄ハ居タルト見

ヘ姫城ノ地名ニ松本モ隅モ馬場モ今ニアルト聞ケハ伊地

知民部等カ姫木ニ居タル寸ハ右ノ松本カ跡ヲ領メ松本ト

モ伊地知トモ名乗タルナラン

『古書ニ姫木氏大中臣トアリ世戸口名十三町ト桑東郷ノ

内ニ見ヘタリ瀬戸口ヲ賜テ姫木氏ヲ瀬戸口改タル事ハ瀬

戸口伊豆入道カ覚書ニ詳也』

大岳公ノ時姫木氏ハ瀬戸口ヲ賜テ瀬戸口ヲ号シ町田家ニ

ハ石谷ヲ賜ヒ石谷ト号ストアレハ其例ナラント考ハル然

ルニ小次郎重之ハ島津松元ト号セシハ抑ヨリ居タル大中

臣姓ノ姫木松元ト混同セザル様ニ島津ノ御称号ヲ其一代

下サレシナラン伊地知助太郎先祖日州田島ニ居不紛様島

津田島ト下サレシ例ナルベシ此ニ限ラス市来ノ族ニ河上

氏アレハ御家川上ハ島津川上ト古書ニカケル例也況ヤ松

本ハ平山松元相良松元姫木松本ナト異族多ケレハ御免ア

リテ島津松元ト名乗シナルヘシ但小次郎親伊地知民部少

輔重真法名節心モ上大隅上小河辺ニ居タルカ国分久満崎

社司村岡氏カ文書有

上小河里の山野境目の事

一西ハは^{『集』}や人城の西のさかひひおとり山をさかふいぬ^{『戊』}

いのすみは^{『亥』}ハてしまるみやうをさかう^{『弟丸名』}

一北のさかひハはや人の城の北さか里よりしてけなしの^{『境』}

の城をさかう^{『清水川原村ニアリ毛無野』}

うしとらのすみハあしたニ志里をさかう梅谷のぼりま^{『川原村ニアリ岩谷・後』}

で中のさこのぼりまで津ぶる山のぼりまでをうちとし^{『丑』}

てまつかさより^{『修理田弟子丸村ニアリ』}志やうてんのさかういてのおもてあ^{『井手』}

ゆわをさかう屋たけをさかうてゑないさこのおもてを^{『赤岩』}

さかう^{『矢嶽』}

南『久満崎』ハくまさきの三年にさかうて御まへのと里井『鳥居』をさかう也

右此境目を御さため御候時ハ雍州『紀州二男山城守忠朝応永十八年頃家事二預リ』之御代ニ山野の境

ふみ候事守護方よりハ田中たうけうはま田かすへと『道敷』

のあつちとの上井ふちハきとの以上四人『厚地』

雍州方より若松殿 伊地知殿

借屋入道

古河たうき 同大藏 御ちうけん 右近せう 上小河『道喜』

おとな 仁い田ちやう三分 おちみのけんつう 江口『乙名』『檢校』

タ才 わきのその数えもん なハの太郎ひやうへその

田道性このほか上小河おとなのこらす見申事実なり

弘治二年郡田村松元門天神社ノ棟札ニ大宮司古川仁

右衛門同名太郎五郎ナトアリ此ニ云フ古川道喜ガ子孫

カ

正長二年つちのとのと十月廿五日

伊季（花押）

右之通正長之頃より上小河山野の境定有之時分立会

候人数へ伊地知殿ト相見得其御文明六年甲午八月之

比ハ姫木ニ伊地知民部ト一所杯等之列ニ相見得候間

何□少ツ姫木中堂宮等へ考相来事ハ無之哉ト存申事

候間左之通写方御頼遣被下候事ハ不相成哉可成ハ奉

頼候

一『郡田村松元門ニ在リ』天満大自在天神社神体へ何ソ文字ハ無之哉改見有之候ハバ写申度

一『右之内へ』文明七年未九月二日棟札有之候由文字本之通一字も不

洩様字配り旁本之通り似せ写もらひ申度奉頼候

一弘治二年丙辰十二月廿五日永禄九年三月之棟札迄も本

之通写もらひ度奉頼候左候て松元門之源之丞家へ何そ

古キ文書由緒申伝等ハ無之候哉聞合もらひ度は又奉頼

候

一『姫木村追石原ニ在リ』天満大自在天神 衣冠之神像并鏡二面有之由何そ少も

文字ハ無之哉裏又台の下等よく／＼改見もらひ若も有

之候ハ、写もらひ度奉存候且代宮司松本門之八左衛門

方へ古書付申伝等ハ無之哉書写もらひ度奉頼候

一『同村頼尾ニ在リ』天神社 衣冠之像有之由是又同断文字写方頼存候姫木

村城より西北ニ当リ於隈の城または小城共唱候所へ天

神社当分相立候由別書ニ見当申候右両社之内何方其城

跡ニ御座候哉御糺もらひ可被下奉頼候

『同村平岡に在り』
 一愛宕堂 堂守高田門源七 一觀音堂 堂守満田門平八
 『同村石踊ニ在リ』
 一地蔵堂 同森山ノ半左衛門 一觀音堂 同梅田ノ清八
 『同村七ヶ所ニ在リ』
 一虚空蔵堂 同水流ノ喜三右衛門 一地蔵堂 同太郎右衛門
 右堂之内棟札又者仏体之裏又ハ蓮台等之下ヘ文字無之哉よく／＼改見もらひ度左候て一字にても有之候ハ、御写真可被下候御在之通愛宕地藏等ハ先祖伊地知備後守重康入道喜甫大口平和泉ヘ建立之堂等も有之且十一面觀音等も喜甫孫左右衛門重政地頭所加久藤不動寺之内ヘ預置も有之旁姫木ヘ居候比より因縁も有之右通共ニハ無之哉と疑申訳も御座候間よく／＼改見申度存申事ニテ此段御頼申上候可成ハ亘敷御遣可被下候右次第ニ付清水又ハ姫木等之由緒ハ段々旧記より拔書上代国司之比より別ニ一大冊書綴置候得共年内有川七郎殿と欵申人彼表ヘ旅行ニ付無拋借候やうに承り遣置先日も沙汰いたし候へとも今暫と承未被返候ゆへあら／＼覺申候通右之通御座候間清水ヘ若や右体取馴為申人も御座候ハ、被糺呉候様一先御願越可被下候て時々知れ候事も於有之ハ為御知可被下候尤差当り郡田松本

門之天神社文明七年棟札等ハ現在有之ハ差知罷在実門先此分成共写給候やう被仰越可被下候左候て別冊ニ私綴置候も所ヘ入用候ハ、差遣可入御覽と御申越何分ニも奉頼上候以上

『山野ハ塚山野ノ事か国司ケ嶽モ古書ニ皆アリヌハ山之路廿五丁又ハ石踊ハ永正中ノ戦場ナリノ類申残候』

庚寅閏三月朔日

伊地知小十郎

季安

本田村右衛門殿

尚以名勝志差出式冊即抄写いたし御返申上候御厚礼申上候段々古書之内江相見得申候地名過分御座候夫々愚按申遣度候へとも長々難留置一先御返礼申上候弟子丸誥見ハ弟子丸名六丁恒見三丁郡田名十三丁川原村ノ瀬戸口門ハ世戸口名十三丁抔古文書ニ有之類過分ゆへ申上残候

土持左近將監榮勝申軍忠事

一去々年都城御陣致宿直之處去年三月朔日島津越後入道後卷仕云々

一去年九月之比姫木城没落之時分島津蜂起之間彼城為合力大將真幸院御出之時御供仕致忠節候

右ノ通古書ニ姫木没落セシハ永和三年 氏久公都城後

攻ノ年九月トアレハ二年ノ事に非ス三年九月ノ事明ケ

シ

聖主天中大權現御声
奉草創愛宕大權現神社一字

哀啓衆生普我等 今敬礼

夫以愛宕者神社啓蒙日伊井並尊火產靈尊等ト定記日

戊亥仁當天壬都守護神明座寸即天神第七隈神也火災永ク

退牟為也止天若宮仁和火產靈於置玉奈利偏ニマ都静謐乃

基也当社者昔愛宕郡鎮座之故有此名云々又神社考日愛

宕山天応年中沙門慶俊初開此山緣記日大宝年役小角與

雲遍上人同登此山見日良善界太郎房諸大天在大杉樹上

於是其杵為清瀧明神所謂雲遍即……法師也太郎房一

名榮術太郎俗所謂大天狗之長也謂日良者是上宮大子時

日羅也一説云柿本記僧正真濟入高雄不出橋慢死為、是

也所云愛宕大天狗太郎房也候本地者勝軍地藏也何故名

勝軍乎延命地藏經日我滅度後於末法中国人災起人王政

他方賊来刀兵却起但當憶想延命菩薩今世後世所求不滿

我說法無有是処又地藏十輪經日或有世界刀兵却起害諸

有情此善男子見事也此事於晨朝時以諸定刀除刀兵却令

諸有情互相慈愍候蓋依此經名勝軍歟然則有勝軍靈驗耶

元亨釈書日釈延鎮報鬼法師ト也居清水寺与坂將軍田村

遇固為親友將軍奉来救伐奥州逆賊高丸語鎮日我承皇詔

征夷賊若不假法力争得不辱命公其加焉鎮諸高丸已隔駿

州次清見關間將軍出師退保奥州宮師与賊交鋒官軍矢盡

于時小比 拾矢与將軍々々異之已而將軍親射高丸而斃

於神樂山岡獻首帝城將軍先詣鎮日因師護念己誅逆寇不

知師之所修河法哉鎮我法中有勝軍地藏我造其像供修耳

將軍使説拾矢事乃入殿見殲矢瘢刀痕被其体又泥塗脚也

將軍大驚奏事帝加敬焉于爰隅州増於郡清水庄姫城山新

創一社彫刻愛宕大權現尊像以奉安置之依此功德國家安

泰武運長久君臣合道士庶無病風雨以時穀米成就他国不

起自界不叛惡鬼不来火災不殆至祝至禱至祝

時寛永八年龍集重元單閏季春上院吉祥如意

右姫城村平岡愛宕

檀主中欽言

森山
藥師之棟札

大隅州曾於郡清水村 姫城村森山南無藥師瑠、光如来
者、伝往古………『是縣之變ハ文字不相知』然則此、堂歲………能棟字親

被腐敗於霜風姓根陵夷而悉消磨候茲堂主之者無刀干中
与而及中絶也………也聞者………之大………家國一次即一朝奮
然再興大廐或栴檀香仏黄金宝殿、然日下現成焉昔世尊
遊山 顧曰此日此処是ヨリ奥文字不知年間不相知

坪付写

大隅国瀬戸口名

一大飼飯屋門

二反かりや之門
これはなて
半アマリ

一反 同所

四反 比内一反神領 もり田

河こしニあり

惣以上七反

永正十四年

三月十一日

伊地知周防介
重貞

瀬戸口又四郎殿

清水中委相札申候処瀬戸口氏文書之内ニ右之通有之候ニ
付書写差上申候

一郡田村松元門天神社

文明七年弘治二年永禄九年之棟札相札申候得共古棟
札当分壹枚有之候得共文字等毛頭相知不申候外ニ宝
永之比より比已来棟札三枚有之候得共委數儀少も相
知不申候尤古由緒等為有之由候得共当分無御座候ニ
付取扱方札方申遊置候ニ付相知候ハ、則申可上旨細
事達置申候

一姫城村迫石原天神社

右衣冠之像裏ニ文字有之候得共朽損し文字相知不申
候尤代宮司松本門之八左衛門所へ古書付等為有之由
候得共先年出火ニテ致焼失候段承届申候

桑波田讃岐守

景元

伊地知備後助

重周

本田因幡守

□親

右書判有之

一右同村槇尾天神社

右衣冠之像其外委改見申候得共古棟札并文字等無御

座候

一右同村中城 觀音堂

右同斷

一同所石踊地藏堂七ヶ所虚空藏堂 山野之地藏堂改見申候得共前件同斷

右堂社之内棟札并仏体之裏蓮台等之下類る細々相改見申候得共棟札之儀文字等不相分当分有之候再與之棟札宝永之比より比已来之棟札ニ而委造立之儀相知不申被仏体之儀も朽損し文字相知不申宝永之此彫刻之仏体ニハ文字等有之候得共近年之事ニ而写調不申候若哉清水中ニ委相知儀も難計存申候ニ付取役方江阪方委相遊申候ニ付御ヶ条書之見合可能相成儀少事迄も相知候ハ、則可申出旨頼置申候先改方之成行早々申上候 以上

寅四月

本田村右衛門殿

高柳八郎次

姫木援考録

薩摩隠士

伊地知季彬纂輯

下可早任御下知旨被沙汰守護所調所 事

右者正嘉元年十一月三日御下知之状云大隅国御家人姫木五郎義甲申守護所調所職之事訴狀副具之遣之所申無相違者可被無沙汰之由可被加下知若又有利子細者可令注申給之由所候也云々同年十一月十三日肥後藤内右衛門入道殿施行去大隅国御家人姫木五郎義甲申守護所調所事御教書副訴狀具云如比如状而所申無相違ハ可致無沙汰之由可被加下知若又有殊子細を可注申云者早任被伝下之旨可致無沙汰之状如件

正嘉二年二月一日

守護代

右衛門尉藤原判

季彬梅上持仙岩左城立由来記之横川城横川藤内兵衛尉
時信信時カトモ永久之頃より今居城系図ニ大隅国守護と阿

里其本平姓よりふたり大政大臣清盛之二男 判官基盛の男右馬頭行盛子肥後守信基の三男藤門左衛門尉信行息也と見ゆ比文書ニ肥後藤内右衛門入道殿とあるハ信行の事ならん然共左右の字何れか伝写の誤あるべし爰に無用の事ながら二代新藤内左衛門時盛三代三河守時吉比庶流岩河平松有四代太郎左衛門時種此人系図に越後国守護とあり如何成事ニテ越後の守護に移れるか不詳五代太郎左衛門種清同越後守護六代河内守種清七代大膳亮種盛八代大膳亮種道早川三郎と号ス九代河内守種氏此人より子孫不見得共以後より坎横川城北原家より令支配也と仙岩書置けり又諸家大概に大口衆中肥後助三郎先祖ハ門山九郎衛門与申候 忠国公之御誓紙其外証書所持申候門山ハ肥後之一族ニ而候哉肥後ニ罷成云々季彬曾て聞く比肥後氏むかし代々横川ニ居住せし家ニテ子孫の人語けるよしされは前文肥後藤内右衛門入道の裔胤ならん且文和四年四月畠山直顕に薫し下大隅崎山城に楯籠れる肥後彦太郎種頭同弟彦次郎種久も皆種の字を名乗るにこれは此家六代河内守種清以来の

族類なるべし右文書を證引する序によつて聊此臆説をも書置也大隅国御家人姫木藤七太夫篤季申当国守護所具官調所得分及屋敷壹ヶ所被押領由事訴状具事等遣之子細見干状申状無相違者人任例可致其沙汰若又有殊子細者可致注申之状如件

文永八年十二月十八日

左衛門尉

海老坂左衛門尉殿

『調所氏文書建治二年石築地役ノ田丁ニ小神用田丁云々アル内二三反三寸大穴持新田五反五寸神主同御家人姫木太夫篤季神主惣大宮司同人主神司祐恒中臣五段内五丁料田一反二寸大宮司分田御家人姫木太夫篤季』

大隅国守護所具官調所得分同屋敷數箇

壹箇所

<sub>在新田事
壹段</sub>

『又蒲生院百四十二丁三段三百歩ノ内二府社中臣二反二寸大府御領御家人姫木太夫篤季』

右去文永八年十二月十八日如御下知之状者大隅国御家人姫木藤七太夫篤季申當国守護所具官得分及屋敷壹ヶ所任先例可被致沙汰云々者早任被仰下之旨云得分云屋敷無相

違先例可被致其沙汰之状如件

守護代

左衛門尉判

文永九年二月十三日

守護代

本ノママ
『あゐつ』

延慶二年十一月十九日

三分二惣地下代 沙弥本性

守護方下知状案文

○文和の頃兵衛左直冬の味方ニ属する人々大隅国よりの衆ニ左之通 三国擾乱記御勲功記等二見ヘタリ

大隅国佐殿御方凶徒等交名注文

税所介一族加治木彦二郎一族称寝郡司一族姫城郡司一族蒲

生彦太郎一族修理所五郎弥太郎一族羽月孫太郎・羽坂孫太

郎一族小川郡司一族小濱十郎一族肝付八郎一族末次六郎入

道跡同一族溝邊孫太郎・野邊孫七盛忠跡輩正八幡先社務平山因幡前司

入道ナシ一族弥勒寺執当白房道慶同舍弟九郎左衛門・同舍弟

十郎三郎 敷根村預所 廻村預所正八幡宮神官所司分

杉五郎 東郷藤左衛門入道同荒瀬九郎・吉田左近藏人

清忠但清忠
參御方云々 右注進如件

古城主由来記 尊氏御判

一 姫木城 姫木十郎 守護 道鑑公御代姫木城を守給姓

大中臣の人なり子孫不詳 上古より姫木の郡司と旧記

にあり

『島津上総入道道鑑以肥後宮令旨引率薩摩国凶徒再所々悪堂等逐落大隅国隈本城栗野北里城間為退治所発向也致用意可抽軍忠之状仍執達如件』

諸家大伝記 一 藤原姓税所姫城重久杯一族ニ而候税所は上代霧島神領

を司り申候而罷居候を税所介与申曾於郡辺領知仕候元

弘建武之頃杯高栄申候文明十五年豊州家被攻亡云々

一 姫木氏ハ于今曾於郡之内ニ而候古来税所一族之者姫城

之城ニ罷居其辺領知仕候而姫木と号候 代彦公御証判

数通帖佐船津村之百姓所持申候此者嫡家歟と存候其外

ニモ姫木之文書所持申候者有之候

『島津上総入道欠肥後宮令旨引卒薩欠凶徒再所々悪党等

逐落欠大隅国隈本城栗野北里城間為退治所発向也致用意可抽軍忠之状仍執達如件」

山田聖榮自記

「姫木十郎」○

一 氏久御代ニ税所方求摩相良取合曾於郡ニ老越不斷守護

に敵たるに依て大隅の煩是也社家島津殿之依無他事正

宮之上笑の隈小陣を構へ三年御座有之曾於郡姫木城を

責落す守護代として本田親治氏父子被差置其後清水を

責落し御持候処ニ湯の峯有之合戦有之税所子息討死す

味方ニも御内之瀬戸口方討死す

田尻種甫地理志ニ永和二年氏久公攻取之本田氏親因幡守親

親子ニ預玉フト云々

『一 去々々都城御陣致宿直之處去年三月朔日島津越後入

道後巻仕御合戦之時大将御供仕致散々合戦其日は三組

引退爰大将未御陣御瀧之由依有其字同三日諸軍勢同心

被後巻無子細御陣開候」

「土持左近將監榮勝申軍忠ノ事」

『一 去年九月之頃姫木城没落之時分島津蜂起之間彼城為

合力大将真幸院御出之時御供仕致忠節候」

一 重親戦死之後者氏親家督を仕候処ニ永和之前後 氏久

公より姫木清水両城を御攻取氏親并其子親治江被下隅

州之守護代迄如元無相違被仰付候

『一 自去春之頃飢肥櫛間致在陣大将庄内より御出御供仕至于今致忠節候

右軍忠之段大将御見為之上は無其隱者候然ハ早御判下

給為備後代亀鏡恐惶」

右条申出之通相違無御座候重親抽忠義遂戦死候故氏親

家ヲ相統致し 氏久公江奉仕別て無ニ之忠節を盡たる

者にて御座候應安年中曾於郡城主税所某求摩之相良氏

と心を合せ度々守護之命を相背候而已ならず守護方江

相迫り候ニ付 氏久公御出馬被遊隅州咲隈を御陣に被

定姫木城を被攻落氏親及長男親治江被下候繼而又清水

城をも被攻取是をも氏親父子江被下候由旧記ニ見得申

候此時守護代迄被仰付候儀自家ニ申伝記置候旧記并酒

匂安国寺申状之内ニ相記申候得者別条無之事与見得申

候

一 親治子ハ元親と申候 元久公久豊公迄御二代隅州守

護代并御家老職ニ被補別而忠勤を相励候直子無御座五

番目之弟重恒与申者家督を讓申候而相果候以後重恒者

奉対 忠國公ニ不忠之儀共多御座候ニ付被向御馬重恒

退去仕候ニ付一節清水城新納四郎三郎江被下候得共倅家之代々之城与御座候而元親指次之弟國親江又々清水之城を被下夫々私迄血筋相続来申候左ニ而國親ハ寛正五年ニ戦死仕其子兼親幼少御座候得者清水も危被成候得共從 忠國公別而御取立之御意重ク兼親母江御自筆之御書三通被成下候就夫益親六才ニ而乳母ニせおわれ初之御陣へ罷立候而老年迄弓箭而已ニ相過シ申候軍功之儀与 立久公 忠昌公 勝久公御書之内ニ相見得申候間委不申上候

右之通統絶救危被下候儀御当代之者とは取申子々孫々迄も難有仕合ニ本為候

右ヶ条之内

一元親儀 元久公々 久春公迄而御代与御家老相勤候由無別条儀に候元親守護代之儀者究に御記録所江相知不申候得者家伝之由殊ニ元親一人ニ不限本田家守護代職相勤為申儀ハ別条無御座候得者元親儀も引続而相勤為申ニ而候事

一元親直子無御座故五番目之弟又次郎重恒家を相続仕候

然者騎奢高と致し我意を振ひ不臣之老を願申候ニ付文安元年 忠國公御自將被成御馬を被向御攻伐被近候ニ付重恒防禦之方便を失候而遂ニ清水を下城仕舅ニ而候税所某を頼走申候依之清水を一節新納四郎三郎忠匡新納近江守之四男新納四郎兵衛家之先祖へ被下候由元親差次之弟二郎五郎親光之嫡子因幡守國親父子共ニ初々重恒子之不通ニ旨同不仕高 忠國公江志を奉歸忠節を相守鹿兒島江差越奉仕候其頃新納四郎三郎御断申上清水を差上候ニ付本田家累代之居城之由候而清水を國親江被下候且本田家之家督迄被仰付候処重恒憤を 候而税所江一揆党数を相催し文安五年清水へ押寄候ニ付國親不得止重恒を石原口与申所ニて討取申候由其御國親其嫡子兼親千代鍋と申候三歳ニ被成候時帖佐ニ師仕駒帰与申所ニ而戦死仕千代鍋幼稚ニ御座候而清水危被成候得共、大守、忠國公々別而被付御心候而清水おも抱留成長仕出所之軍劳致し御奉公為仕者ニ而御座候其段申出之砌 立久忠昌勝久三公之御状ニ相見得申候兼親母ニ從忠國公被下候御状三通ハ御譜中ニ被召載候其御条

内ニ御丁寧之儀相見得申候兼親六歳ニ而初之御陣ニ罷

立候儀者御譜中ニ相見得不申候得共本田家之旧記ニ分

明ニ御座候得者無別条儀与見得申候此外此処へ考不分成
候条拔写不致候也

元禄十二己卯八月廿五日 本田次郎左衛門願分

右由緒書拾ヶ条之調總括考之覺段々相見得末之方ニ如

左之

卯壬九月廿一日

御記録所

田中五右衛門

田尻氏地理志姫木城ノ部
一忠国公此城ニ御座候時分敵寄来度々攻合有之御勝利也

石原口御勢を被殘云云河俣ら居り東のさす尾より金吾

石迄敵攻入其後味方篠嶺の横入越も之合今城かぬき

の瀬戸税所の両城の合迄攻入敵方田間向より金吾石ま

で切付度々合戦候得共敵本田重経河俣弥太郎其外数十

人被討取候御舍弟出羽守被手負候由 公御自筆之御状

二十二月廿九日と見得候開年号不詳今按に敵本田拾経

税所を頼曾於郡之人数を引出す□然は文安四五年之頃

歟

御戰場記
一姫木城九代之 太守忠国公御代お石原口御合戦有之

云々

応永記

一同六年己卯夏之頃々物言國中ニ充滿す皆人成疑而殿之

御助對 深シテ総州之三男黒殿ト申ヲ 元久養子アテ

又三郎久照ト名乗り給ふ鹿兒島ニ有屋形作式部之山田

酒匂ノ又次郎上井之神五郎山田之弥次郎被差副只揚貴

妃の玄宗皇帝君世の時揚国忠カ如栄時之人嘲云国忠カ

門ニ入レハ暖風之如扇面ノ有落言己富貴之家ニいか様

ニアルナルヘシ殊ニ北風励サヨシナント言人モアリ北

殿ト依申也養子之事始終不可然被咄ききや之処果シテ十二

月肥後石井伊地知お下大隅被討候同七年庚寅年より唯

如破蜂巢本田ノ信濃守故氏久之御遺言雖敵申弥驍執重

成テ御台山北ニ帰給ふ久照モ鹿兒島退出ト云々難有次

第之信濃守失面目捨本職上洛し雖然 久豊惣翁之受ニ

御讓一給候由自兼日技□セシ□テ被罷下匠作鹿兒島ニ

御座アル間信濃守帰本職号安了入道子息相統して今ハ

清水ヲ構重城跨ル長尾姫木被踏ケリ痛処哉代々ノ忠節

維多衰原ニテ敵陣切崩シ討死セシ親父ノ其忠功ヲモ難

ク相統シ唯是御兄弟不快之故也去程ニ同八年辛巳云云

略于此

『元久時代薩州鶴田ニ御下被向之時御内本田忠親元久を恨申上上総介殿三男北殿取立申すとして御敵仕櫛間ヨリ志布志ニ寄せ向江河原ニ陣ヲ取宝満寺迄勢遣候処越後守犬ノ馬場ニ向合河越ニ先矢合有テ川ヲ越太刀打ニ及テ野辺之手ニ熊給兄弟其外討死』

『本田方ハ大隅ニ有之近辺寄ニハ勢遣知音之方々随有有時横川ニ勢遣候処ニ打負親類内之數十人討死ス同意之衆ニハ廻伊豆守打死天命なれハ不叶上洛ス元久は御音ニ不義ノ子細ニハ自滅ス前忠不成忠ト云共是ハ元久守也既ニ都之城後巻合戦之時杉一揆之旗頭トシテ打死ス忠親不義ナルトテ親ノ忠ヲ非可忘として子孫幼少ナルヲ召出シ親類ノ者ニ相副清水之城を被預年月経候処元久御上洛ノ時御親類様時之老名阿多平田方皆同意被申ニ仕京都ニテ本田忠親入道安了元久之懸御目子孫今ニ繁昌有云々幼少ナルトハ二郎五郎親光ナルヘシ』

帖佐船津村百姓休左衛門所藏元禄中馬場長軒写本ノ写
一日比御せいもんをもてねんころにうけ為候事悦喜のい

たりに候もとよりめん々々の御事代々他事なく申うけ為候事にて候うへこんとのきさ見ことさら御心さしのとをり申つくしかたく候しよせんきやうこうにおいてもめん々々の御大事をハ我々父子大かうと可存候大小事一味同心ニ申うけ為へく候猶めん々々御子々孫々にいたるまでも御大事をハ見はなち申ましく候この条々正八幡大菩薩霧島六所大権現天満大自在天神も御らんにていつはりあるへからす候後日のために候間かくのことく申候恐々謹言

応永六年五月四日

了河 花押

姫木松本殿

姫木 角殿

姫木馬場殿

応永廿八年同廿四年御老中

伊地知縫殿介

『清水楞嚴寺寄進状

姫木住大 臣角入道 季基入道久阿老押

文西 花押

久阿 花押

応永廿八年 カノウトノウシ二月廿一日』

是又為考此于寫置也

応永十九年十二月十三日

久豊 花押

今度時節候志之至難申□悅入候隨て永々御用心痛敷存候

伊地知殿

日州事は悉御方候之間はや一方暇おあけ候兼々御本意於

可被達事不可有幾候らん就其一所うちあけ候はん時は最

前可致合力候此段吉年田申合候之間定可申候哉恐々謹言

五月九日

元久御花押

隈本殿

はたけハ片の加分山のたにをさかう
南ハ松崎のはまをとほりたる中ほりをさかう
たるはこ里の子孫信末ニ給所也

大隅国宮内万得房跡功得丸事為料正所宛行也早任先例可

応永廿年^大癸巳六月一日

領知状如件

藤原忠元 書判

応永九年八月十二日

陸奥守御判

隈本石見守殿

右者意趣^与雖為天下転変於私御大事之時者身之大綱存相

互見統被見統可申候此候偽申候与日本国中大小神祇殊八

幡大菩薩諏訪上下大明神御討可罷免蒙候

応永六年十二月廿日 彈正少弼頼久 花押

三ヶ国中在々所々伊地知先知行分事關所出来者立替所可

宛行也何証状如件

『往言集（一名応永記）云同十四年丁亥五月四日総州御
年六十二テ逝去シ玉フ雍州平佐城ヲ諸取給而雖被蹈得元
久大勢山ヲ越サセ給間不及敵対忠朝モ没落畢同十八年辛
卯久世伯父忠朝為先渋谷城一味郡内ニ乱入被構碇山去裡
ニ山西南方大隅ヲ靡ケレハ三千余騎山ヲ越稻荷原浮橋樋
稼川之堺ニ陣ヲ取ル御方巧云云』
『又一本ニハ山西南方大隅靡ニ三千余騎ヲトモ点ス』
『同廿五年戊戌雍州有不義振舞市来被成遺恨事縦依島事

也有談合同十二月大石カ平ニ陣ヲ取明レハ廿六年己亥正月十一日差寄テ山田ニ陣ヲ取淡谷一族一ニ丸勢雖無不足佐多讃岐守殿ヲ大将ニ被差副角テ難道行間同八月廿九日匠作山田ニ有御越取陣廻シ被責之間雍州成道ノ口去城隈城ニ被楯籠云云

『同廿八年辛丑八月廿日有御越山 貴久隈城ヲ取卷セ給フ雍州無幾程被開城行末ノ在所社不蕃ケレ云云 聖自ニハ其時迄モ譜代ノ人々依被残居城戸口ニテ太刀打候得共無人數ナレハ無指事良有テ山城守之被仰候ハ云云』

一応永廿三年丙申正月十三日総州家四代上総介久世奥州家久貴公の爲ニ鹿兒島千手堂坊にて自殺給ふ

同廿七年右久世の御嫡子総州家五代同又太郎久林も久貴公の爲に川辺城より肥前高木ニ御出奔之久林ハ伊作大隅守久義外源にて若松家元祖下野守久親の爲ニハ御甥也

一同廿八年辛丑八月総州三代山門院居城播摩守守久の御

舍弟上総山城守忠朝隈之城持留被居候処久豊公江降参

ニテ鹿兒島和泉崎へ被召移遁世ニテ道聖と改名

一同廿九年壬寅 久豊公御嫡子貴久公忠国公之御大将ニテ総

州三代守久と山門院ニ被攻掛守久肥前へ出発同年若松下野守久親の舍兄伊作久義の六弟遠江守十忠か爲め殺害せらる久義の嫡子四郎左衛門勝久も七八年以前久豊公へ降参ニテ山門院へ居住候へ共是年他国へ出奔也

一同廿二年己巳正月十三日 久豊公御卒去ニ而忠国公御家督也此年八月廿八日三ヶ国守護職御補任修理太夫と御改名又陸奥守様と御改名是奥州家ニ而四代目也

一同廿五年戊申四月廿七日正長元年と改元正長二年己酉九月五日永亨元年と改元也 左条文書ハ遠国ゆへ十月迄ハ尚正長二年と書きしならん

上小里の山野境目の事
『今国分郷上小川村』

一西ハはや人城の西のさかりちおとり山をさかう
隼人 下り 弟丸(今清水の内)

いぬいのすみハてしまるみやうをさかう

『樺山玄佐自記ニ本田三河守清水ノ隼人ノ城大永五年九月二日取ト見え當時ハ清水也』

一北のさかいハはや人の城の北のさかりよりしてけなし
野 毛 無
の城をさかう

うしとらのすみハあしたにしりをさかう梅ヶ谷のほり

まちつふる山のほりまちをうちとしてまつかさよりし

理由

井手

赤岩

やうりてんのさかういてのおもてのあかゆわをさかう

屋たけをさかうてえないさこのおたてをさかう南ハく

まさきのみねにさかうて御まへのとり井をさかう也

右此境目を御さため候し時ハ雍州之御代ニ山野の境

ふみ事守護方よりハ田中たうけうはま田カサへとの

あつちとの上井ふちハきとの以上四人雍州方より若

松殿 『元祖若松下野守久親若クハ子若松豊前守久儀二男下野守久種カ』 伊地知殿借屋入道

『借屋仮リノ入リ人迄出合ニ見合テ堺踏セシナルベシ』

『応永十四年五月ヨリ同廿八年八月迄十四年ケ間ヲ雍州ノ

御代ト云リ山城守忠朝ヲ雍州ト云シ事応永四年頃ナト見ユ

レトモ是年ヨリ九年以前既ニ久豊公ニ降参遁世ノ道聖ト云

エハ合ス』

『是ヨリ六年以前忠国公三ヶ国守護ニ任ジ玉ヘトモ雍州ヲ

奥州ニシテミレハ忠国公ノ事ヲ云ナルヘシ然レハ別ニ守護

方トハ総卅五代左衛門尉久林ヲ云ナルヘシ如此守護ト仰ケ

ルヲ忌玉フカ翌永亨二年庚戌十一月 忠国公久林ヲ徳満ニ

殺玉也』

古河たうき同大藏御ちうけん右近せう

『古川道喜同大藏御中間右近丞此』

三人上小川借地セシナラン新田ヨリ園田迄六人ハ皆上小川人老名カ』

上小河おとな仁い田ちやう三郎おちみのけんつう江口

土□わきのそのの数えもんなはの太ろひやうへその田

道性このほか上小河おとなのこらす見申事実也

正長二年つちのとの十月廿五日

伊季 花押

『応永記ニ総卅伊久守久ノ御内ニ酒匂伊豆守伊景本田次郎

守親天辰肥前小次郎守経杯伊ノ字守ノ字ヲ名ツクアリ此例

ニヨレハ家ノ季ヲ用ユル人伊久君ノ諱ノ字ヲ拝領シテ伊季

ト名ツクカ然レハ伊地知氏ノ人ニ疑ハシ古系図ニ時季兼季

朝季重季季随季弘季豊時季ナト文安ノ頃迄ハ季ノ字ヲ代々

ツク考ヘシ』

樺山玄佐自記

大永元年五月十日堅利小田かりやになる雨を過し次之

年廣久西郷へ拵へ移り宗栄をかりやへ移すかかる程に

老病といひ入道六十六歳にて彼所において去行さて忠

兼様奉行衆之内本田次郎左衛門尉と云患者有て大隅曾

於郡地頭を領しけるかとおふ河北うす崎もち松を望取
其打かへ横瀬四町帖佐はる毛餅田其外爰かしこ拾八町
を合せ彼四ヶ所知行す樺山にのみならず惡逆諸人歎候
也去程に世間騒動す太郎左衛門尉妻は本田因幡守娘な
れは因州嫡子三河守廣久江以一味此沙弥十三の年三河
守清水隼人の城太郎左衛門尉殿小濱生別府の城を大永
五年九月二日同日ニこれをとる其頃溝辺ノ肝付三郎五
郎真實同意之旨也云々
(願姓)

元久代薩州谷山郡司指宿多河野辺阿多たふせ二かいたう
お失ハれし難儀かせてニハ渋谷鶴田ニ山北牛山は祢き
(田)
た日州かち山にて北郷殿兄弟討死候同野々目谷之城仕
落樺山殿住所となる応永年中ニ上洛候て時分ニ叶面目
をほどこし下向す隅州長尾城本田氏親仕落氏久御代ひ
めき清水両城是も氏親仕落

○久豊代応永年中ニ元久代を請取申仍テ南方伊集院山北
及同意たるによて合戦スきいれ河野辺鹿兒島おいて
数ヶ度およふ日州山東曾井けんとう合戦候高木さ馬助
討死そ河野辺かせてニハ和泉殿兄弟同きいれ討死

○忠国代三ヶ国悉せいひつす次国一揆之事も此代ニあり
せいはつせらるる旁々一家ニハ伊十院殿国方おいては
別府和泉平山一家不殘牛山一族悉坂より上ニハ和田高
城飢肥櫛間南郷梅北いづれも此方々跡御料所として御
一家御内ニ御はい分あり阿久根も此時失はれ候難儀御
合戦之次第ミつへ河田指宿鹿兒島はやまり原いさく合
戦知覧大寺討死てうさひしかり自身太刀打候みまた合
戦時新納四郎三郎殿大崎方其外數十人討死山東すた木
之合戦ニハ一家ニほんかう右京亮殿横山次郎殿討死候
他国おひては肥州さしき合戦ニ菊地千対數十人宗との
者共討死候

立久当御代三ヶ国悉く以御せいひつ御一家御内国方一味
同前ニ仰申所なり京都より御志ゆりやう御官を被成下
候此時ニ薩州ニハ市来羽島高江宮郷高城坂より上ニハ
財部御せいはい□何も御料所となる
右此條々為目安ニ大方申にて候努々他見あるましき事
候

文明二年三月五日 歳七拾三是書終

沙弥聖栄

忠廣へ

大隅国小河院内一成村岡出本城書

『山本教授ノ島津国史編撰ノ時此書ヲ文明六年行脚僧雜
禄ト名題シ其頃ノ一所持ハ多クハ此ヲ以テ読抜ニセラレ
シト云ヘリ』

文明六年甲午八月之比花洛西九州下三ヶ国日向大隅薩
摩行脚廻聞侍江当守護御屋形島津之又三郎殿藤原朝臣
武久御年十二譜代御住所鹿兒島一別府^{「島津」}薩摩守薩州国
久御舍弟中務同彈正平山^{「島津」}三豐後守豐州季久御子息修理
亮匠作忠廉田布施^{「島津」}三相模守相州友久御子息三郎左衛門
尉^{「忠幸」}間^{「島津」}二式部太輔吏部久逸同又四郎御曹司三保下城^{「島津」}二
伯耆守伯州久豐次郎三郎忠徳^{「島津」}肥新納近江守江州忠續
志布志^{新納}三郎左衛門尉御舍兄駿河守駿州安永^{忠明}三
北郷義久野々之谷^{三々}三樺山長久加治木^{安芸守}二智覽^{加治木左衛門尉滿久下野守}佐多高城^{民部少輔久統}島津^{加賀守忠廣}二給黎指宿^{美作守忠常}三九郎左衛門尉久継市成^{加賀守忠廣}二山田平房^{美作守忠常}三宮里
高江^{義久}二河上十郎左衛門尉高橋^{島津}二藏人平和泉^{幸久}二字宿左馬
助

『此旧記ニ注ヲイタシ度多年心掛候而文明六年ト云所ヨ
リ国之面々ト云ケ条ノ出持懸マデ当分二冊ハ草案書等置
申候是モ末川周山殿へ差上置候間近日取ヨセ御越候折可
入貴覽右ニ付国分清水ニ相掛候事可成御心掛御合力可被
下候偏ニ奉頼候以上』

戊十一月三日

季安

景親兄

一御子持之御城様^{今ノ移地頭老}三保高城^{繼久}二新納越後守越州末吉^{忠泰}ニ宮丸

竹山^{左近}ニ伊集院三郎左衛門尉尉串木野^{肝付}ニ河上將監^{忠基}忠基

一国之面々祢寢忠清同田代肝付^{長門守}ニ河内守内州兼忠子息周

坊介兼連同波見真幸^{入未院下野守}ニ北原貴兼同子息又九郎立兼菱刈^{吉田}

二氏重山野^{入未院下野守}ニ羽月^{隱岐守重理}ニ税所介別篤吉田^{遠近守公季}ニ左衛門太夫金吾

入来院^{比谷院遠近守重慶}三祢答院^{佐土原讀岐守祐賀}東郷^{比谷院遠近守重慶}三種島^{佐土原讀岐守祐賀}二小川山東^{比谷院遠近守重慶}三伊東大和

守祐国同六郎祐國佐土原^{今の御家先}二大持^{鹿屋周坊守}縣

一御内之方^{鹿屋}々^{兼資}申良^{高城}二平田左馬助兼宗^{越前守宗政}当奉行^{鹿屋}鹿屋^{鹿屋}二兼直同

高岳^{越前守兼光}ニ若狭介下大隅^{兵部少輔力備前守頼次}二肥後石井伊地知^{周坊守}梶原池袋救仁郷^{恒吉門太郎}

二肝付主税助廻^{形部少輔宣清}ニ敷根清水^{形部少輔宣清}二本田親兼恒吉^{形部少輔宣清}二蓬原二大

寺庄内山田^{治郎少安勝}ニ肝付大炊介給黎^{兼忠ノ三弟}二蒲生顯桂阿多^{兼恒}ニ桑波田

河田ニ比志島郡山ニ村田肥前守経安当奉行各一城宛被

持候『阿多刑部公久カ応永廿七年乙丑
領主桑波田右馬介文明十八年』

『遠江守忠氏一族歟』

一都城衆ニ橋口末弘十郎四郎宇宿小次郎南郷本田岩見

衆 遠江守正右一族歟 米女カ 新蔵人為勝族カ

一高城ニ和田播薩摩長井貴島福永濱田横山富山酒匂末吉

久辛カ

衆ニ樺山藤太郎末弘十郎三郎大持太郎長野常陸守同周

野辺盛在第二方丹後守盛時 豊前守兼永族

六郎左衛

坊守ニノ方松下梅北財部鹿島長野土佐柏原干竈姫木

門入道族

友輔重照

ニ伊地知民部西郷ニ出雲守牛山ニ岩野加治木三郎四郎

直山新左衛門有河彈正入道

孫左衛門政秀 四郎 彦次

直山田代肥前入道黒葛原少輔伊集院ニ鳥取岩本牧山下

郎カ

筑前守信宗 新六

石谷市来ニ大寺美作守曾木隈城ニ猿渡天辰本田周坊介

成枝町田伊作ニ末弘牧瀬宗実鹿兒島衆大寺七郎永吉和

泉越前介平田佐渡守飢肥同伊豆守村田太郎左衛門伊地

重真

忠頼

備前守カ

知新左衛門尉梶原主計河上同因幡守同左京亮長野本田

宗親 民部少輔 彈正久宗

治部少輔内浦枝次関田島五代敷根奎助中俣谷山ニ本田

本ノママ

又次郎長野助五郎水引ニ国分高城彦太郎長州三郎九郎

一薩州之御持城和泉山川高小野阿久根河辺山田鹿兒同

老名高崎一豊州之御持城帖佐平山高城上之山平瀬蒲生

北村溝辺横川東郷同老名上原一新納殿分南郷志布志安

樂松山同老名隈江中型一櫛間老名鎌田三原一北原持城

飯野徳満馬関田吉田吉松野尻栗野一山東城穆佐池尻曾

『文明十九年北原長門守伴兼蔵』

井宮崎清武田野山之城木之脇阿屋本城贈於郡国富財部

竹案八代平賀塩見比知屋門川新田田島同老名稻津野村

垂水落合宮田一祁答院分大村波形鶴田山崎久留木一肝

付分高山本城富山野峰宮下柳龍沢一祿寝分西俣大始良

右之本書ハ智覧之寺ニ為有之由ニ而河野郷右衛門殿

被持来候故写玉也

元禄五年

甲ノ十二月廿六日

右者先祖右衛門重英自筆写置于今致家藏候処御先祖民部

殿御名前相見得候ニ付御懇望被成趣有之此節被写玉候儀

別条無御座候為後証加筆如斯御座候以上

伊地知助太郎

季美 花押

文化十三年子三月廿六日

伊地知小十郎殿

一兩家二領地被下玉候事

右彈正事御家來時分為領地下大隅五勺所を以今高ニツ
キ壹万石余之地ニ而候且又豊後国井田郷柴比名之庄其
外所々領知被下候而垂水本城居住仕候彈正子正貞ニ白
州田島庄八十町今高ニシテ式千八百石程之地ニ而候右
越拜領申候而号田島候是ハ彈正 氏久公之為御名代戰
死仕候惣命之地ニ而候又伊地知筑右衛門先祖ニハ高橋
一所被下領仕候伊地知奎右衛門先祖ニ姫木伊地知越右
衛門先祖加治木ニ能居候而過分領知被下玉云

元禄八年亥五月十八日 伊地知助右衛門 判

古系図

季弘

法名月峰名一庵主

季豊

又太郎縫殿助 家督筋
重時
法名金象龍公庵主
左馬助

重常

民部少輔

重真

法名節心淨貞居士

左近將監在薩州出水

重之

小次郎号島津松元
法名刊實叟常真居士

重照

松元民部少輔
法名道念宗禪居士

重辰

松元民部輔
法名永林久長居士

大隅之内帖佐之新城主取ニテ在番之時從渋谷
家大勢寄來り落城ニテ戰死

重常

松元少外記 美作守
法名光林澤乙居士

薩州伊集院之内油須木城之主取ニテ在番之時
從蒲生吉田江被遣し刻走続太刀始アリ私領市
來之内皆田代一村伊作田之内陣之前之門合十
二町之高也六拾七歳ニテ病死

重次

兵部左衛門尉
重吉 伊与守
長野名字ニ縁與

女子

重康 伊地知民部少輔 備後守
法名安叟慶泰居士

薩州菱刈平和泉之地頭其後肥後芦北湯浦地頭

職并私領拾六町之高也慶長十三年二病死隅州

牛根貝潟馬越横川之城責日州高原小林之城責

有馬島原二而合戦之時度々之高名アリ

女子

池袋
宇都名字二縁與

伊地知氏伝記

一抑平氏秩父之先祖重頼之末孫伊地知縫殿助季隨法名光

輝都仁居士者延元三比薩州之太守貞久公御上洛之砌

尊氏將軍江被得御意薩摩江被召下也嫡男季弘法名月峰

名一庵主其嫡男季豐法名金象龍公庵主者家督相続也

第一次男 伊地知民部少輔重真法名節公淨貞居士

第二次嫡子 法名実叟常貞居士者号島津松元由来系図二

分明也

第三嫡子 松元民部少輔重照法名道念宗禪居士

第四嫡子 重辰法名永林久長居士者太守高久公之御当

代永正之頃大隅之内帖佐新城之地頭賜之彼城江重辰父

子在当之砌從渋谷家催多勢被攻新城其時重辰嫡子小次

郎に語て云大軍寄来之間雖防戦終二責落さるべし然者

重辰ハ新城之主頭として可遂戦死其故者父子一所二雖

遂戦死全以忠功之無詮守護御無勢之間小次郎者衆中之

子共を卒し敵陣を切通り吉田之城二楯籠可抽忠節曾以

各不可為未練若於不遁者無是非籠城討死父子可為同前

旨申含也依之任父命小次郎者人数五六人一味し大勢の

中二懸入向敵を散々ニ切捨吉田の城二楯籠也案のこと

く新城者攻落父重辰討死候此時文書系図悉く相捨候也

第五嫡子 松元を改本名字伊地知美作守重常と名乘法

名光林澤公居士と号す渋谷家弥相談入来より至伊集院

差出軍兵也小次郎者伊集院之内遊須木城之主頭として

在番也其時彼渋谷家の敵蒲生より吉田之城江相懸り候

故彼城麓の河原江出向鎚合之太刀始致之其後市来二被

差移皆田代一村并伊作田之内陣之藺の門拾貳町被下領

之者也 己下事長故略ス

右古系図并伝記ハ備後守重康嫡孫伊地知李右衛門重政

加久藤地頭二被召移候時分宝永十三年五月吉日書綴置

もの也重政貳拾貳歳迄祖父備後二養育せられ候間備後

ニ聞置説なるべし少々誤もあれ共余程旧記ニ致符合候

事有之也

吉松村人馬場氏系図

実名

一馬場^{税所}末孫 藤原氏 一氏神^{春日大明神 和州}
止上大明神 隅州宮内
隅州重久

一幕紋桐タウ鶴丸

一敦毛篤毛同名乗字也

仁王五十九代

宇多院

篤房親王 正二位大納言天慶九年
丙午二月藤原氏給

篤相^{正四位}
右京

篤澄^{右中將}
篤仲^{左中將}

敦長^{形部名}

篤如^{同坊守}
下着号 曾於御館
治安元年 辛酉三月廿一日隅州曾於郡

篤幾^{版上御館}

篤之^{重枝}
篤貞
經秀

篤長

篤頼
行範
篤高

篤康

篤隆
定景

篤秀

篤隅^{馬場号}隅州姫城ノ内馬場ト云所知行候

行俊 一姓 姫木 松元 坂元 清水 入水

宮田 松永 濱川 川波田 白江 白坂

等也

島津忠平公末孫大隅守光久公幕下

馬場主馬篤都^{隅州桑原郡栗野ヨリ}
真幸院吉田ニ移ナリ

篤得^{肥後守}
真幸吉田ヨリ吉松罷移也

篤當^{清左衛門}
吉松住

篤重助七郎

女子 吉田竹下孝右衛門妻

女子 馬関田蘭田勘兵衛妻

篤徳^{清左衛門}

女子
七彌^{早世}

小川明了上人信範流 釈氏秀信印

貞亨四年丁卯七月吉日

右者馬場清左衛門殿文化乙亥二月廿二日為被写本ニテ

写取置証引難成作物と見得候へ共応永六年五月姫木松元殿と宛シ古文書ニ引合候事有之為考此処ニも載置尤右之秀信と云釈氏貞享四年の頃菱刈真幸杯系図認廻候欽季彬氏郷士加久藤預り長崎六太夫家来馬関田中宿田門太左衛門家二男家加久藤郷士伊地知城之助家馬越郷士伊地知嘉兵衛家杯皆同年同人書置系図也殊更城之助家ニハ甚敷妄作相見得難取ものなから貞享の比より近代之儀共又ハ其時分申伝等之事ハ只今よりハ難聞取事も阿連^{あれ}ハ如比也

覚

大島出羽守有久へ日州内梅北七拾五町隅州内姫城三拾町帖佐内田中門四町八段御賜候由又文安元年忠国公本田重恒ヲ御討伐被遊候砌新納四郎三郎忠国へ姫城を給候事も有之由候右ニ付有久へ被給候へハ何年間ニテ何頃迄御領知被成候哉忠匡拝領と同時に二候哉年号御聞合被下度候尤其時御文書も可有之御写御貫被下儀者相成間敷哉文明之比伊地知民部も姫木へ罷居候事見当二間旁考合申度此段御頼申上事宜敷奉頼候

八月廿三日

伊地知小十郎

本田仁左衛門殿

大島休左衛門返詞書

出羽守有久者

自永久至四代忠泰号島津忠泰初ハ島津出羽守中領永禄九年戊午十二月廿七日以公命庶流ノ面々所領

之地を以称号とスル事ニハナレリ忠泰大口之内大島と云所を領知セリ故之ニ大島出羽守といへり是我家の大島を名乗初也後又大島久左衛門といへる前に志るす大島といへる所ハ旧記ニハ大口ノ内とあれと今ハ羽月の内ニアリむかしハ今の羽月大口の内にや

義天公第四ノ子にて我家の始祖也其生し年月ハさだかならず 義天公の御代日向の伊東かをさへとして日向庄内の梅北城に差置せたまひ城下七拾五町隅州姫城三十町同しく隅州の帖佐の内田中門四町八段すべて百九町八反を給ひけり

『高頭千九百八石六斗壹升四合七夕六才』

右ハ文政七年申五月八日郡方書役内田八之進殿江相頼御帳面写取也伊地知重英等法ニシテ一町三十石ノ賦ニスレハ六十三町余モアル割ナリ然レハ有久三十町ノ外ニ又三十三町余モアルナレハ是ヲ伊地知氏ナトニ御配分アリシナルヘシ』

其賜たる年月ハさたかならず遂に長祿三年己卯七月三日日向の三侯院小山^{高城ニア}と云所ニて戦死せり法号八月海高公といえり其子出羽守忠福同しく梅北城にあり文明十六年^{甲辰}十二月二十二日逆谷の鎌か谷といえる所にて大に合戦して深手を負家に歸りて即死せり其子出羽守忠明迄三代ハ続て梅北城に有て伊東を押へたり忠明女子あり^{家嫡因幡守兼親二男}本田刑部少輔親知に嫁す忠明姫木を以親知に典ふる由旧記ニ見へたり去れとも其年月ハさたかならず忠明後ハ求摩の相良か押へとして大口城にあり大口城下三百五拾町一円ニ給ひて明応八年己未大口殿と号せし也右之通報を得たり季彬按ニ西藩野史ニ応永三十年癸卯久豊公伊集院頼久か女を納れて妾にし給ひ出羽守有久を生めるよし見得又世に伝ふる大嶋略系ニ有久戦死の時ハ年三十七と見ゆされハ応永三十年^{癸卯}に生れ給ふ公子ニテ同三十二年^{乙己}正月義天公^{おわり}薨給ふ時ハ僅御年三歳に當れり且梅北及び帖佐等之地大岳公の時に御料所と為り御一家御内に御配分ありし事文明二年山田聖栄記置旧記にみゆ

れは大嶋家に義天公の御代有久伊東か鎮さへとして梅北に差置せ給ふといえるハ大岳公の御代の事を誤り記せしとおもわる

義天公なとかいまた三歳襁褓の小兒を伊東境に備へ給わんや聖栄の旧記明驗なり

『梅北豊前守兼永ノ子守兼文安年中末吉南之鄉村橘野ノ若一王子社内ニ寄附せし仏像に城内安全等ノ文アルトソ

去レハ文安ノ頃迄ハ梅北モ持留ケルカ然時ハイヨク義天公ノ時ニ非シ』

一応永六年五月了阿誓詞ニ姫木松元殿とみへ文明六年旧記に姫木に伊地知民部と見得元祿八年御記録奉行伊地知重英ニテ伊地知奎右衛門先祖に姫木被下置とみへ当家古系図ニ四五代者松元民部少輔なとみへ候ニ付文化十年酉六月從兄伊勢八右衛門貞驍清水方廻勤之節相紀候処今之姫城村内姫城外姫城と両所ニ有之外姫城の内へ古来より松元と唱し門名有之名頭屋敷ニ古墳^{茂有}之被糺具候得共左之通申出何そ可及駭問事無之由尤当分

ハ鎌田典膳領分と也伊地知民部姫木に罷居候時分右之松元と申所へ居住ニテ松元相名乗古系図にも松元を代々書載置候ならん

『一瀬戸口伊豆入道自記云去程ニ豊州ノ御内ニ瀬戸口源兵衛尉大中臣秀勝ト云者有豊州ノ老中ニ日置周防介殿嫡子に美作守殿トテコトニ一人當千也力ノ作州ト同心シテヒハシラのかっせんニ一枕ニ打死ス其年四十九歳也さて又秀勝か先祖を委敷尋ルニカミ大隅の住人ニ姫木ト申何カシナリ志くう神をつかさとり国下を守ルトカヤ掬いにしへより今迄も国司こくしかたけと申て姫木の城乃はつれにそへて有けるハ其時の事ぞかし瀬戸口と申者 忠国公ノ御時瀬戸口名を給リテ其より申ならはしたり扱其後に瀬戸口のおびへまいりし事共ハ豊州之御先祖に忠幸と申か飢肥へ入部ノ御時御供申せし瀬戸口也云々

右伊豆入道幼名ハ虎千代丸元服して源三郎秀安云といひし人の子孫志布志通山ニおり瀬戸口民右衛門と云郷士也文政七年卯三月末代一冊ヲ写して園田實史ニ遣ハ

したるを借得 同年五月九日右之分拔書置ナリ是我伊地知氏 忠国公ノ此姫木ニ移リ松元氏名乗レル例ニ似タレハ考援ニ如斯ナリ』

清水姫木村松元門

次郎左衛門

右次郎左衛門居屋敷内ニ古切石相見得申候処ニ近所之者共石寄互ニ見届吟味為仕候ニ先年より大右衛門祖母と申伝朝夕華香差上來り為申儀ニ御座候由承申候間此旨申上候以上

西六月十一日

洞泉寺

木佐木治右衛門殿

覚

姫木村松元門名頭之

次郎右衛門

右屋敷江石塔法名有之候ハ、可申上候一昨日被伝聞置洞泉寺相頼相糺申候処法名少も相見得不申候申出 別紙書付之通差上申候以上

六月十二日

木佐木治右衛門

伊勢八右衛門殿

右無用之事候得共書入置なり

一元禄七年諸家系図再撰為被仰渡時分書集置候旧記二茂同族名書之内ニ左之通

〇〇助之丞殿門
『本名松元』

伊地知 右衛門殿

右伴左衛門事子細有之伊地知名字剝申候而当分ハ定

テ松元ニテ候

右之通見得ニ助之丞殿方相糺候へ共当分右躰家来子孫無之由承候郷原家次男家二分地之事候間追テ彼方可糺也

一末吉衆中根元記之内ニ如左

伊地知九右衛門

右親右近事本来伊地知殿衆ニテ候末吉之地頭村田雅樂介殿代より衆中罷成候御奉申候

松元門藏助

右先祖父本来祁答院家之人ニテ候伊地知民部少輔殿祁答院之平川之御地頭被成候時より衆中ニ罷成候夫より末吉江慶長十年ニ罷移村田雅樂介殿ニ付御奉公申候右之通相見得候間蘭田勘右衛門殿相頼先祖代之事当松

元喜ハ子孫ニ候由ニ付相糺ニハ共不詳

一松元家 紋所丸ニ違鷹

右当松元喜ハより三代之祖松元八弥左衛門丞子無ニテ国分郷土堀切弥五右衛門二男長左衛門を養子成之願申上御免被仰付候ニ付家ノ字氏神相知不申候

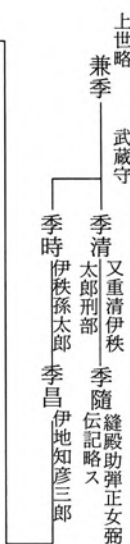
十四日

五郎右衛門

勘右衛門様

一右相見得候伊地知九右衛門も先祖代を松元伊地知之由末吉士當伊地知萬兵衛系図写貫候上代ハ不審成事為存

此ニ載置



季墓 李之助 重昌 孫四郎 重防 对馬守

管窺愚考

姬木氏姬木居城ノ説

按二姬木城ハ田尻種甫カ地理志ニイヘラク大隅州清水郷

姫城村ニ在リ大手口ヲバ石原口トゾ謂ケルトシルセリ又
姫木氏ハ河野通古ガ諸家大概ニイハラク藤原姓税所姫木
重久杯一族ニテ曾於郡ノ姫木城ニ居テ其ホトリヲ領シ姫
木ヲモテ氏トナシ

齡岳公ノ御証判杯通伝ヘテ帖佐船津村ノ農民筭藏シ居レ
リ此者ソ其正曹ナルラシ去共他ナホ姫木ノ文書モタル家
アリトミヘタリ又土持仙巖カ古城志ニハ宮城ノ家臣也俗
字ハ仙左衛門トイヘリ

道鑑公のおほん時姫木十郎ちふもの姫木城を守れり姓
ハ大中臣にて上古より姫木の郡司たること書に出たり子
孫は詳ならんとなん志るせり季彬今ましへ考るに二説そ
の姓をいへるか如きハ仙岩それ得たりとせんいかんとな
れはその族胤なる瀬戸口伊豆入道小字ハ虎千代冠して源三郎秀安
名ツキ後二伊豆守ト云ヘリ
也今志布志人瀬戸口氏其後ナリトシ

斯なんみへけり豊州の御内に瀬戸口源兵衛尉大中臣秀勝
と云者あり豊州の老中に日置周防介殿嫡子に美作守殿と
て一人当千也永正十六年日当山の山王棟札に大旦那藤原忠朝奉行
日置美作守藤原俊久トミユ是なるべし

力ノ作州と同心してひはしらのかつせんに一枕に打死
天文九年九月
三日ノ事也其年四拾九歳なりさて又秀勝カ先祖を委敷

尋にかみ大隅の住人に姫木と申何かしなり志くう神を
つかさとり国家を守るとかや扱いにしえより今迄もこ
くしがたけと申て姫木の城のはづれにそへてたけの有
けるハ其時よりの事ぞかし今瀬戸口と申者 忠国の候

時瀬戸口を給りて其より申ならはしたり
垂水調所氏ノ
文書ニ大隅桑
原東郷ノ内二世戸口名十三ト見ユ上下ノ三体堂松永上西郷東郷ナド
ノ間ニアレバ曾於郡日当山踊りの内ニモアルナラン重テ村人間ヘシ也
扱其後に瀬戸口のおびへまいりし事共ハ豊州之後先祖

に忠幸と申
按ニ豊州忠廉長禄二年隅州東郷城實勝文明十五年忠廉
曾於郡打取七年豊州領分ナク所ノ内満辺横川東郷等ア
リ同十六年三月十六日忠廉上井城ヲ攻取なん旧
記ニミユ世戸口氏此ヲノ時豊州ニ随ヒシナランが飢肥へ入部の

御時按ニ文明十八年
事ナルヘシ御供申せし瀬戸口なり云々とみへれ
ハ仙岩が説は頗る遠からし季彬今その中臣氏の上つ世
に大隅の国司たることをば溯さかのほりて続日本紀らを見る

に天平宝字七年十二月丁酉禮部少輔從五位下中臣朝臣

伊加磨座「セラレ」飲酒言語「ルト云々」時忌諱左遷大隅守天平宝字七年ヨリ六
年目神護景雲二年中

臣清麿任中納言始為大中臣天兒屋根命十八世孫常盤大連公欽明帝二

臣祓ヲ授申ニヨリ始テ中臣姓ヲ賜フ其曾孫大職冠鎌足カ時藤原姓ヲ

賜ヒ其三男二大連力子意美磨ハ中江ニ復シ其子清磨カ時神護景雲二年

中納言ニ任シテ始テ大中臣ト為ルトシ 姓氏錄ニモ大中臣朝臣中臣酒
人宿祢中臣宮処連中臣市連等ハ皆同祖トミユ中臣
習宣朝神饒連日命ノ孫味瓊杵日命ノ後也トアリ
神護二年六月己丑大隅国神造新島震動不息以故民多流

仍加賑恤と見ゆ按ニ新島の出きたるはこのとし月には
あらし去れと此島に大穴持の社を建てる時きことばに
去る神護中に神の造れる島ありといへるに拠れば既に
神護と改元ありける後二出きたる島は疑あらしそして
近頃安永島の出きる時なと一とせともハ海中震湧きて
島もよくハさたまらざりしとなん聞およべハなおさや
うのおりにや民おほく流亡せしならん然を中臣朝臣伊
加磨ここの国司にさすらひきてわつか四とせに當れる
としの事なれば伊加磨恤へて以聞してこそ此日詔して
賑ハし賜へるに至つらんまた宝龜三年六月乙卯從五位
下中臣習宜朝臣阿曾磨為大隅守とみへたり按ニ阿曾磨ハ
道鏡法師ニ黨
スルモノカ元年八月高野天皇崩王ヒシヨリ六日二當とる庚戌貶道鏡法
師為下野国薬師寺別當阿曾磨ハ為多模島守トミヘレハ今大隅守ト為リ
シハ敎ニ道さ また同き九年十二月甲申去神護中大隅国海
るなるべし
中有神造嶋其名曰大穴持神至是為社トミユ按コモ阿曾
磨が多模島ヨリ移サレキテヤウノ七トセニナン當レ
ル年ナレハ亦タ諸ノ中臣氏ノ国司タル時創建セラレシ
社ナルハ疑ヒアラシ但シソシテ此中臣氏ノ族胤益シ
世々姫木ニ居城シ此大穴持神社ノ神主大宮司トシテ歲

時ノ祀ヲモ司リ兼テ国家ヲモ守リ来レル欤乙
此年号ヨリ五百年バカリモ後チナル建治ノ頃宮崎石築地役ノ文号ニ大
穴持神主大宮司姫木太夫篤季トミユ詳ニ後ニ載スハ伊豆入道力説ト併
セ考テ以テ其
然とを志べし後又百五十年バカリモシテ延長五年十月撰
バレシ延喜式ノ神名帳ニモ大隅国五座大一座
小四座囃於郡三
座並ノソノ一二大穴持神社と載られたりまた
道佛公ノ項なるか古文書に正嘉二年二月朔日大隅国御
家人姫木五郎義用訴申也とありて肥後藤内右衛門入道
按ニ種子島肥後守信基ノ第三子藤内左衛門尉信行ちふことの本州の横
川城に封を別ちて世々襲封せし也と古城志等に見得たり此にいう入
道疑ふらくハ横川肥後乃属なるべし時鎌倉の奉行
右筆の職にも居れるか若しくハ本州の守護なる歟也御下知を承り
守護代左衛門尉藤原某をして義用に命て守護所の調所
職たらしむことみへまた書事候
公のすへつ年文永九年二月十三日大隅国御家人姫木藤
七太夫篤季按に篤季は義用か子もしくは弟にも
當れるハ正嘉より十四年こなたなり本州の守護所
具官調所得分及屋敷蘭々所在新聞を八人に侵領せら
れて予め訴出けることのありし等は日守護代海老坂左
衛門尉御下知を承て篤季に沙汰してまたこれを領せし
む事見へまた建治二年ころ 惟康親王西州の牧伯に命
て役所を筑前の宮崎に築き

三世

道忍公をして将とし成らしめらる時御教書をもて諸家

の領田に等しく築役の石を募り出さしむそを賦れる書

等や調所氏の家藏

按に年月日なしおくに右件石築地役任関東御教書とのみ見ゆ嘗て比志島氏の家藏とし

て宮崎後所築地之事とりき出し比志島西俣などの丈尺おりきし建治三年正月の文書をよみたりすべてよく符合しぬればその賦には疑いなら

し又大穴持新田五段五寸神主大宮司御家人姫木太夫篤

季中臣五段内五寸三反宮司分田御家人姫木太夫篤季料

田一反二寸神主惣大宮司同人小大宮司主神司祐恒また

蒲生院の内にてと府社中二反二寸大府御領御家人姫木

太夫篤季按に文永九年ヨリ僅五六年モ後ナレバ藤七太夫トオナシ任ナルベシとなどミへ又文和年中大

隅国佐殿御方凶徒等交名注文にも姫木郡司仙岩カ所謂十郎カ時ニモ當

カレ一族と見ゆ斯く上古より中臣氏の伊加鷹や阿曾鷹

らは大隅の国司と為りて大穴持神社によしある事とも

前にかうがへるが如しまた中古にては姫木篤季この大

穴持の神主大宮司たること建治の頃に見得近くはその

族裔なる瀬戸口伊豆入道か享祿うまれの身をもて古き

伝へを筆して先祖ハ上大隅の住人姫木某にて守君神志くう神

を司りいにしへよりの国司にて国家を守り今に至て姫

木城のはつれに国司か嶽といへる嶽のあり其時よりの

事となんいひおき又土持仙岩も聞ふる博物なることも

上古より姫木郡司と古書にみえけるといひその姓ハ二

人なから皆大中臣といふに拠て彼是ましへ考ふるにそ

の驗しを採ける年々のあはひに動もすれば数百年を隔

てしその間いかなる世の変易事の沿革かありつらんに

もそは知がたければ今見たる古書どもの此に拾へるか

中にしては数百千年の間を馳せわたれどもそもも中臣

氏大隅小司とし大穴持の島を造られ島へまた社を建た

る時など皆中臣氏の国司たること正史にみへしよりそ

の神主中臣氏にて大宮司も亦おなしく世々姫木に居城

し姫木をもて氏としその国司のみより鎌倉の世をお

へ足利のはしめに至までおし通り郡司にて或は守護所

の調所職と為り来れる一筋はおほかた疑ふべきにあら

ず然あれば伊豆や仙岩らかいへる中臣氏の後なること

はあきらけし然を世ニ精博の名高き通古の説ニ藤原姓

税所の族彼なる事はあきらけしといえるはいぶかしさ

れと按るに中つ世にて税所氏の庶子を養襲せしことも

なかさらんよてその系をもかの庶族として子孫二姓を

冒乱すに至れるならん但文武紀の二年八月の詔ふ賜いたる藤原朝臣の姓は其子不比等をして承しめ意美麿来ルカがことときは神事に供らるに縁て旧姓の中臣をなのれとなんみへたれはおよそ藤原氏にても神事に供へらるものは中臣を称さるの故事あるか知らねと税所氏も因よりおなしく供神事もゆるる欤さあれば彼も中臣一□名のらんに然あらざるをもてみればそもまたいひ難し重て識者に問うべし

斯て姫木氏も応安の頃までは宗邑を有てる欤

永和二年文和交名注文ニミヘシニ
二十余年ニヲヨベリ

齡岳公の時本田氏親姫木城を攻陥せり是にいたりて没落せしならん

本田氏姫木及び清水居城の説

山田聖栄自記抄

氏久御代ニ税所方求摩相良取合曾於郡に走越不斷守護

に敵たるに依て大隅の煩是也社家嶋津殿に依無他事正宮之上笑之限に陳を構へ三年御座有て曾於郡姫木城を

責落す守護代として本田親治氏親父子被差置其後清水を責落し御持候処ニ湯の峯今俗ニ山野とよべり
姫木城北ニ当たるにて合戦有

之て税所子息討死す味方も御内之瀬戸口討死す云々

山田聖栄系図目安ノ抄

元久云隅州長尾城本田氏親仕落氏久御代ひめき清水

両城是も氏親仕落長尾城は横川城の
事也と古蹟解ニ云々

酒匂安国寺申状ノ抄

氏親親春なんと上意をうけす候へ共時節を見はから

ひ候てわづかの勢にても大敵ニよせあはせ度々打勝候而候て大隅の国をもふみしつめて候へ是こそ一騎当千

とも可申候也と云々

本田鬼太郎御直元服願書ノ抄

永和之前後 氏久公ヨリ姫木清水両城を御攻取氏親并

其子親治江被下隅州之守護代迄如元無相違被伝付云々

田中国明前件調書ノ抄

応安年中曾於郡之城主税所某求摩之相良氏与心を合せ

度々守護之命を相御伺候而已ならず守護方々相迫り候

ニ付 氏久公御出馬被遊隅州咲隈も御陣ニ被定姫木城

を被攻落氏親及長男親治江被下候続而又清水をも被攻

取是をも氏親父子江被下候由旧記ニ見得申候云々

田尻種甫地理拾遺ノ抄

清水姫木両城永和二年 氏久公攻取之本田二郎氏親其

子親治父子ニ預給云々

右ニ拾ヒシ諸ノ説ヲ参へ考レハ応安ノ頃マテハ姫木氏

ナヲ姫木ニ居城セシナラン

然シテ税所氏ヲト守護方ニシバシ寇^{あだ}セシユヘ 氏久公
 是ヲ討玉ハン為ニ咲限ニ三トセホドヲハス中ニ氏親父

子ヨク敵ノ虚ヲ察^みスマシ僅ノ兵モテ押寄せ責ソ陷シツ
 ランヲ直ニ 公ソノイサヨシヲソテラレテ彼ノ父子ニ
 賜ヒケル事永和二年ナルベシ去レハ其時姫木氏モ没落
 セシハ疑ヒアラシ夫ヨリ次第ニ漂泊シテ帖佐ノ農民ト
 モナレルカ又大岳公ノ時姫木氏ニ瀬戸口各ヲ賜ヒテ夫
 ヨリ氏モ瀬戸口トヨベル事瀬戸口伊豆ガ自記ニモアレ
 ハ其嫡庶ハ知ラネド其頃マテハ余リヲトロヘザルニヤ
 瀬戸口名八十三丁ノ所ニシテ旧記ニ三休堂松永東郷等
 ノ間ニシルシアレハ今曾於郡ノ松永村日当山ノ東郷村
 踊ノ三休堂ナトカナルベシ且東郷マテハ姫木氏ノ村ト
 聞ケリ瀬戸口ノ名此辺ニ遺レルカ重テ訛村人ニ問ヘシ
 是ヨリ以下ハ本田領ノ事ヲ記シ侍ルナリ

応永記ノ抄

六年己卯夏ノ頃ヨリ物言ヒ国中ニ充滿ス皆人成疑兩殿
 伊久元久ノ
 兩殿ナルヘシ 御中余リ甚深ソ総州之三男黒殿ト申シ元久
 有養子又三郎久照ト名乗給フ鹿兒島有屋形作式部ノ山
 田酒匂又次郎上井ノ神五郎山田ノ弥次郎被差副唯楊貴
 妃玄宗皇帝ニ恩幸時楊国忠如榮時人嘲云国忠入門暖風

如扇面有落言也富貴家可成加様余北風勵サヨト云人モ
 アリ北殿ト依申也

按ニ此年夏頃ヨリ北殿御養子アリシ事ヲ合点セザル人
 ニヤアリテサマ／＼花言多ク人皆疑ヲナシケル折シモ
 姫木一族モ其頃迄ハ猶本田領ノ片ハシニモ居レルニヤ
 ゲニ此年ノ夏一味ノ面々盟ヒタル誓文ヲバ帖佐船津村
 ノ百姓休左衛門家蔵セリ通右ノイハルハ姫木ノ宗曾ナ
 ラントイヘルハ是ナルヘシ元禄中馬場長軒模写セシ本
 ヲ借テ又此ニ写採リツ

応永記前抄ノ次キ

養子之事始終不可然被明梟流処ニ果ソ十二月肥後石井
 伊地知於下大隅被討畢 按ニ伊集院彈正少弼頼久元久公ニ奉レ

之時者身之大綱存相互見統被見統可申云々
 応永六年十二月卅日ト見ユ即此月ノ事也 同七年庚辰ノ年ヨリ

唯如為破蜂巢本田信濃守 係圖ヲ按ニ親治カ長男元親ナリ
 後ニハ忠親ト改メ入道シテ安了ト云ヘリ

故氏久ノ御遺言故雖被歎申弥鶴執成重御台帰山北玉フ久
 照鹿兒島退出云々難有次第也信濃守ハ失面目捨本職令上
 洛畢 按ニ酒匂安国寺申状ニ 元久公牛屎はね北ノ戦ニ克テ還ラセ玉フ
 時正八幡ノ前ニテ御内ヲトナラ本田伊地知阿多平田肥後石井酒匂

七人定メ玉ヒシ事見ヘタリ
 又聖榮自記ニモ斯クナン

元久時代薩州鶴田ニ御下取向之時 応永記ハ此事八年ニ見ユ
 志布志ノ時ハナシ

御内本田忠親元久ヲ恨申上總介殿三男北殿取立申すと

して御敵仕櫛間より志布志ニ寄向江河原ニ陣取云云

なとみえたれば肥後石井伊地知三人の乙名は北殿を養子し

給ふ事を合点せざるこのならんよて三氏を下大隅にて討

たんとせしこと忠親北殿を取立んとしての□ざなるべし此

時酒匂次郎ははや乙名の職を致し僧となりをれり薩州安國

寺の住僧是なり□□□□おとなの列となりなば忠親と力を

合るものか被可申狀に公室世子の生れ給ふ時おほかた酒匂

氏より奉れる役儀ありし 元久総州の御縁に成給へる時も

し御座もあらば我等兄弟で其事を承らんに不公儀の御座相

違としるせる語氣を觀て知るべし

山田聖采自記ノ抄

本田方ハ大隅に有て近辺寄々ニ勢遣知音之方々雖有有

時横川ニ勢遣処打負親類内者數十人討死す同意之衆々

を廻伊豆守討死天命なれば上洛する云云

按ニ此時マテハ横川モ横川氏居城セシカ此年ヨリトセア

マリモ前ナル康応二年庚午十月安良大明神ノ棟札ニ大旦那

藤原左衛門尉沙弥正智ト見ヘタリ又忠親清水ヲ出亡セシテ

上落セシ後宮内ノ辺ナト 元久公ウチアケ玉ヘルカ限本ニ

斯ソタクシ賜ヒルコト文庫ニミヘタリ前ノ御書ヲ照シ觀ル

ベシ

亦在有馬氏手鑑

大隅国宮内万得房跡切得丸事給料処所宛行

也早任先例可領知狀如件

応永九年八月十二日

陸奥守御判

限本石見守殿

元永記前件ノ次キ

雖然久豊惣翁ノ受御讓給之由自兼日有披露シカハ

聖榮シキ 久豊油津御參シ時御對面有テ此時ハ御頼母敷之由仰候テ元久御下向候

ヘバ□□テ御召迄久豊ニ御見參如此之儀ニ相成候ヘハ御中も無他事御座候事

軀而被罷下匠作鹿兒島御座間信濃守帰本職 元親守護職ヲ預リタルハ聖

榮自記ニ見ヘ老名ト為シハ酒匂申 狀ニモアレハ職ノ字考ヘ知ルヘシ

号安了入道子息相統シテ 元親ハ隱居シ第五ノ弟又二郎

昔清水構重城跨長尾姫木被踊ケリ 重恒ニ家督ヲ伝ケル事ヲ云ナラン 今

按ニ元親帰參セシハ応永十八年元久公下ラセ玉ヒシコロナ

ルニヤ清色ノ御陣ニハヤ匠作安了ヲ召テ謀玉ヘル事応永記

二見ヘタリ且山田聖榮モ此八月公ノ隠レ玉ヘル時ノ事ヲナ

ン記シヲケルニ御方ニハ本田父子トイヘレハ彼是考ヘ知ヘ

シ但シ父子トハ氏親ト元親ナラン是ヨリ二十七八年モアト

ナル永享十年ニ頭殿ノイハレヲ氏親記シヲケルニ技レハ此

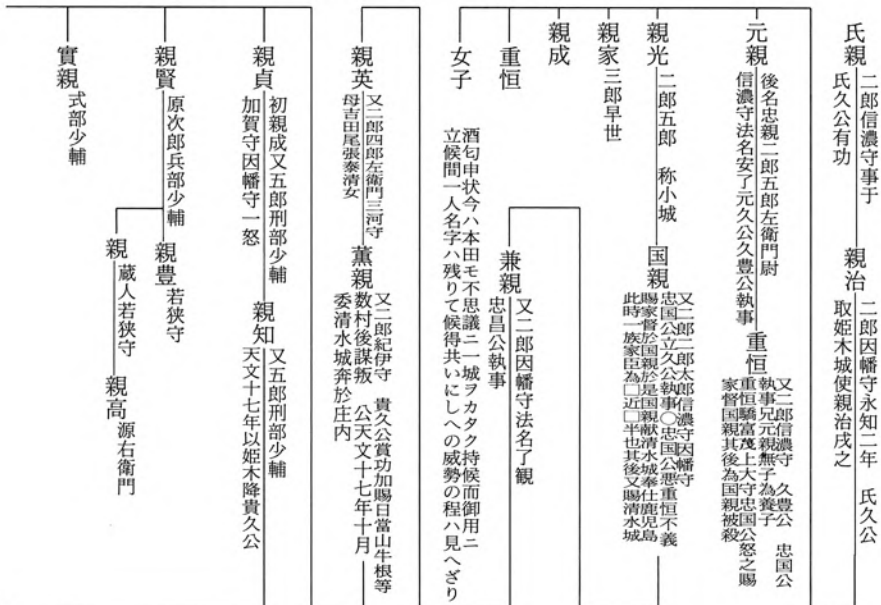
頃彼力壮健思ヒヤルヘシサテ応永記ノ末ニ今二年号計文

安ニ止リ又其末ニ九代貴久公ノ事ヲシルシ今ノ御代ト云年暮テ応永モ卅五天ニ成行ケリト筆ヲ止メ十代立久ノ御寺市来ノ竜雲寺ニ藏メ置レシ御記録トナン聞ヌレハ此トイヘル今者ノ字ハカノ文安ノハジメ大岳公ノ時ヲ指セルハ明ケシ又カノ長尾城ハ今ノ横川ニシテ藤内左衛門沙弥正智守リツランヲ元久公ノ御時ニ姫木清水ハ仕落シソレヨリスヘ氏久公ノ御時氏親皆仕落セシ事聖栄ノ目安ニモ明ラケシ然ルヲ爰ニ今ハト辞ヲ攻メイヘルニ元親 元久公ニ叛キテ出亡セシ時特恩ニテ其幼子ヲ召出サレテ清水城ハ猶相替ラス預ケヲカレタル事聖栄自記ニモアレド長尾テゾ斯モ改メイヘルカ今其詳ナルヲ知ラス

元久之御意云々忠親不義なるとて親之忠を非か忘として子孫幼少なるを召出し親類之者相副清水城を被領年月経候処 元久御上洛之時御親類様時々老名阿多平田方皆同意被申ニ任京都にて本田忠親入道安了 元久之懸御同子孫に今繁昌云々 按ニ元親始ノ次ノ弟親光ヲ継子トセシニ非道ニシテ先ニ歿セリヨテ五弟重繼ヲ養子スト重繼力譜ニ見ユ此ニ召出サレシ幼子ハ親光ナルカ又重恒ナルカ重テ考ベシ

本田嫡流系図

重親弟



女子三人 榊山美濃守信久室
廻氏室 竹田氏室

親兼 初重親又二郎左京大夫
從四位下大炊太夫玄廣
義久公 從父出奔庄内後悔事

公親 與左衛門

本田次郎右衛門家系図

上世同上
元親 一郎五郎左衛門信濃守入道賜隅州守護代住清水城兄親光子
國親 誼大守奪家督所領殺重恒

重經

信濃守美弟也 元親無嗣子依之第二郎五郎親光為繼子然放僻
專非道也而親光先元親死故弟五之弟信濃守重經為後嗣親光之子
二郎太郎國親訴守護賜宗領職及所領半分居鹿兒島此時家臣多
近 臣國親居清水城為家之督

親次 二郎民部

親純 民部丹波自民部親次至親純三四代不記系譜
本田紀伊藏親息左京大夫親兼背太守天文
十七年被逐出其後以先祖重經由緒親純為家督

親替 與四郎戰死
牛根

家親 伴兵衛実本田因幡守親治二男也朝鮮有功 久保公唐人ト組討半兵衛
救急賜鎧先相重經沒落清水城時重器文書等或為國親所奪或紛失
雖然本田家相伝之太刀在當家直父因幡守親治ハ本田氏二男之一筋而
家親ハ親治二男也然トモ養父親替一筋於本田家為養祖父親純以降

勲家督役今也左京大夫親兼嫡子大炊公親 義久公以恩惠蒙赦免此代有
命日本家惣領職ハ如先代賜公親

親紀 親貞勝五郎隼人

親 勝五郎
死江戸

親室 三五郎仲兵衛
美平山八右衛門忠三男
御納戸奉行御近習衆

義久公加冠朝鮮庄内
関原有功兵具奉行普請奉行

恕翁公の老名なる本田信濃守忠親既に、公に叛きて軍
をおこし克たすして居城清水をも出亡し年ひさしう京
洛に奔をれることども前抄に拾へるか如しおほかた其
頃にも移されたる欵伊地知うち上大隅に居おり也と正
長二年十月伊季てふ人の上小河山野の境をば定めおけ
る書にそ見得たりそが中に雍州の御代とみへあるは守
護方よりはたれたれといひあるは雍州方よりは若松殿
伊地知殿などゝげにその立会へる人々の姓名ともあら
あらしるしおけり我か伊地知氏もそのかみ姫木に居て
おほくの采地を領し文明六年の古書および 三四代松元を
もて氏とせり 寛永十三年しるしたる 系図伝記等二見得たり 今此山野の堺おほかた
その隣ひなる清水にぞ堺ひ居けると聞およべは所謂伊
地知殿とは疑らくはまた我か松元伊地知の族属ならん

とその考の援ともなりなん事とも斯もここに拾ひ採ひつきて雍州とは山城州をいへれり応永記二など総州伊久の二男山城守忠朝をは只雍州としるせる事いとおうき且その御代といへるを今かうかへるに伊久嫡長子播摩守守久おはしたれど不孝にましましおほん父の心になはせられず伊久かくれ給ひし後などは守久は山門におはし御子久世こそ伊久のおあとましませどやうやう廿余りも成給ひ物ことおさなくおはしたれは雍州どの位を摂給ひて国の政をも輔まひらせいたくその肝を焦り給へること時の旧記にみへれば応永の十四年伊久かくれ給ひてより廿八年隈城をおちさせらるまで十まり四とせがほどはそへしたがへる人々ら雍州のみよといひつらんも実にそれむべなり今かかる証もかうがへ当ることなど此にあらまし抄おけり

聖業日記

其後総州きうてつ死去有山城守殿代に成て元久川内平

佐ノ城ニさし寄一陣を取退治有り

応永記

十四年丁亥五月四日総州御年六十二テ逝去シ玉フ

御系圖
二五月

ヲ四月ト書御年ヲバ
六十一ト作ル是ナラン 雍州平佐城ヲ請取給而雖被踊得元久

大勢山ヲ越サセ給間不及敵対忠朝モ没落畢同十八年辛

卯久世伯父忠朝為先渋谷成一味郡内ニ乱入被構碇山去

程ニ山西南方大隅ヲ靡ケレハ三千余騎異本ニハ山西南方大隅
靡三千余騎と点セリ

山ヲ越稻荷原浮橋樋縁河之堺ニ陣ヲ取ルト云々

聖業日記

元久御上洛之御留主ニ四ヶ所野心を存緩急ニ及候間清

色鉾之尾と申所ニ一陣を被召候其内ニ御心地急々御一

大事成応永十八年八月六日被成他界候就修理亮殿山東

穆佐ニ居住此左右聞得候へハ修理亮殿夜白を以鹿兒島

ニ御着候御方ニハ本田父子鹿兒島地下御一家ニハ佐多

伯耆守殿一類其外山東より御供ニハ伊地知兄弟不殘親

類ニハ佐多讃岐守同若狭同美濃樺山伊賀同末弘方など

始として 久豊ニ副被申云々

応永記前件鉾ノ尾御陣ノ次キ

鹿兒島ノ左右到来ス匠作ハ安了召有該合暫山東新別府

御越トソ聞得計ル惣翁ノ御事ハ一兩日可極之由世上申

ケリ 亮利国之人成心々被見得八月六日終ニ惣翁薨シ給フ

云々去程久豊久世一成玉由聞得ケレハ匠作安了ニ談合アリ
トハ此事ナルヘシ

頼久壱人大綱大村入来山北ヲ去テ伊集院ニ引退ル云々

去程ニ自鹿兒匠作ノ御使ニ伊地知縫殿助碓山ニ被越久
豊久世合体ノ上ハトテ備後守家親碓山被參久世御悦喜
不斜被仰ケルハ依今左右可有越山云々

按ニ此年恕翁公ノ京ニヲハス間ヲウカセヒ雍州忠朝ヲ先ト
シテ総州久世ヲ渋谷四ヶ所トモニ一味シ山西南方大隅ナト
ノ衆マテ三千余騎ヲ靡テ從ヘテ奥州方ニ野心シテ既ニ稻荷
原ニ陣ヲゾ取ラシケル其時ハ恕翁公モ下ラセ玉ヒ 久豊公
清色ニ陣ヲ召サレテサント謀ラメグラサレシニ折シモ
恕翁公御病ヲコラセ玉ヒテ既ニ危カリシト聞得ケレハ匠作
則本田安了ヲモテ久世方ニ和平ノ事ヲ説カセラレ御身ハ暫
ク山東ニゾ歸ラセ玉フ然ニ幾程ナク恕翁公ノ訃音山東ニ聞
得ケレハ直ニ穆佐城ヲ立セ玉ヒ其老名伊地知縫殿助季豊ヲ
兄弟残ラス其外宗徒ノ人々召俱セラレ夜白ヲ繼テ鹿兒島ニ
駈ツケテ御位牌ヲ持セ玉フ斯テ久世及雍州モシバシハ公
ト御和談ナリ去レバコソ縫殿助ヲ御使ニ遣ハサレ市来家親
杯ト碓山ニ会シテ伊集院頼久ヲ討玉フ事ヲ謀ラセ玉ヘル事
ナト応永記ヲ二見ヘレハ彼ノ上大隅ノ伊地知氏モシヤ姫木
ノ伊地知と同ケレハ則此縫殿助カ弟民部少輔重真法名節心
カ時ニ当レリ然アレハ兄ハ久豊公ノ老名ナレトモカカル御

和平ノ上ニハ雍衆方ニ属キシモイブカルベキニアラスマタ
乱クル世ニシアリケレバ心々ニ成テ成テ別レシモ知ガタキ
トニカク山野ノ境ナト互ニ立会ヒツゝ定メテン事ナトハ
カヽル和平ノ時ナラデハ争ヒツキベキハザナレヨテ季彬ヲ
モヘラク彼境フミハカク御和談アリケル中ノ事ニテ正長二
年伊季カキ留シハアトヨリ追テソノヲボヘイタル事ヲハ記
シヲケルモノナランサレバコソ右ノ書ノ奥書ニモ此境目ヲ
御定メ候ヒシ時ハ雍州ノ御代トトラキムカシヲ語ラヘルコ
トシルセシナルヘシ然ラズバ当御代トモ書ツベキ事ナン去
レト雍州忠朝ハ其正長ヨリ九トセバカリモ前ナル応永ノ廿
八年ニ既ニ 大岳公ヨリ攻ラレテ居城隈城ヲモ打委テ鹿兒
島ニ降参シテ和泉崎トナンイヘル屋敷ニ幽ナル御栖ニテ其
名モ道聖トゾ改メ居ラレヨモヤ当御代トナド書ベキ威權ハ
アラザリシナランカヽル事トモヨク其御定メ候シ時ハトイ
ヘルニ符合セリ

上小河里ノ山野境内の事

一 西ハはや人城の西のさかひおとり山をさかう
いぬ井のすみはてしまるみやうをさかう

一 北のさかいははや人の城の北さかりよりしてけなしの

の城をさかううしとらのすみはあしたにしりをさかう
梅谷のほりまち中のさこのほりまちつぶる山のほりま
ちをうちとしてまつかさよりしやうりてんのさかうい
でのおもてのあかゆわをさかう屋たけをさかうてえな
いさこのおたてをさかう南はくまさきのみねにさかう
て御まへのとり井をさかう也

右此境目を御さため候し時は雍州の御代ニ山野の境ふ
の事 守護方よりは田中たうけうははまたかすへとの
あつちとの上井ふちわきとの以上四人

雍州方よりは若松殿 伊地知殿 古河たうき同大蔵御
ちうけん右近せう上小河おとなには田のひやうへ三分
おちみのけんつう江口タオ わきのそのの数衛もんな
はの太郎ひやうへその田道性このほか上小河おとなの
こらす見申事実也

正長二年つちのとの十月廿五日
とり

伝季 花押

按ニ上小河は調所氏ノ古書ニ隅州小河院ノ内上小河三十五
丁下小河二十五丁ト見ユ今ハ国分ニ隸シテ村名トナレリ其

山野ノ境タルヤ西ノ方ハ隼人城ノ西ナル地形の下リタルニ
日 山トナンイヘル山ノ有ケルニサカヘルト云事ナラン扱
其隼人城トハ日本紀続日本紀延喜式ナドニイヘル本州の隼
人ラガ居タル遺墟ナラン続紀元明帝ノ和銅三年正月庚辰日
向隼人曾ノ君細麿教諭荒俗馴服聖化詔援外從五位下ト見ヘ
同キ六年夏四月乙未割日向肝坏贈於大隅始羅四郡トアレハ
此ノ日向隼人曾ノ君モカノ天平十三年閏三月乙卯天皇臨朝
援外正六位上曾乃君多理志佐ニ外從五位下ナト見ヘタル曾
乃君ハ実ニ此大隅贈於ノ君ニテ此隼人城ニ居タルモノナル
ベシ又樺山玄佐自記ニ本田三河守清水ノ隼人城ヲ大永五年
九月二日取ルト見ユ夫ヨリ本田氏昔ヨリモタル清水ノ本城
ニ対シテ是ヲ新城ト名ヲ改ソシナラン上井寛兼ノ天正四年
八月ノ日記ニナト清水新城上井敷根等ト見ヘタリ今ハ国分
上小川村ノ内ナレド本ハ清水ノ内ナル事明ケシ夫ヨリ乾ノ
隅ハ弟子丸名ニ境フトナリコモ調所文書ニハ同ク小河院ノ
内ニテ弟子丸名六下ト見ユ建久九年ノ旧記ニハ建部宗房ヲ
レリ則弟子丸氏ノモノナリ 齡岳公ノ時ナトハ弟子丸若狹
守ト見ユ此正長ノ頃ナヲ蹈ヘ居タルカ追テ考ベシ今ハ清水
ニ隸シテ村名ナリ夫ヨリ北ノ方ハ隼人城ノ北ニ当リ地形ノ
下リタ所ニ毛無野ノ城トナンイヘル城アリソヘサカウトナ

リ時ノ城主詳ナラス 是モ今ハ清水ノ川原村ニ遺墟アルト
イヘリ夫ヨリ是ノ隅ハ芦谷後ト云所ヲ境トナリ此モ今ハ同
シク川原村ノ内ニ在トイヘリソレヨリ梅ヶ谷上リ迄中ノ迫
上リ迄願山上リ迄ヲ皆上小河山野ノ内トミテト云コトナ
ラン迄ヲマチト書シハテトチト五音相カヨヘバナリ夫ヨリ
松蓋トナン云所ヨリ修理田云字ノ田ヲサカフト云コトナラ
ン修理田ヲトイハンヲのとカキシモ亦タノとヲとは横音相
通バナリ夫ヨリ田ノ井手ノアル面ノ赤岩ヲ目当ニ境ト云コ
トナランイワユハト書シモイトコト五音相通ヘバナリ夫
ヨリ矢嶽チフ嶽ヲサカフテ世鳴迫トナン云ヘルサコノ尾筋
ヲハ境ト云事ナラン然ニ今ハヨナイサコト云ヘレハソコソ
書リベキニエナイサコトカキシモトエトハ五音相通フユ
ヘナリ扱此梅カ谷ヨリ世鳴迫ノ尾立迄ハ皆方位ヲハモラセ
リ今按ルニ東ヨリ巽ニ環レル方ナルヘシ夫ヨリ南ノ方ハ久
満崎大明神ノイマセシ峯ニ堺フテ其大明神ノ御前ニアル鳥
居マテサカフト云事ナラン扱カヤウニ此境目ヲ御定メアリ
シハ是ヨリゾト其前ツカタ雍州忠朝ノ紀州家ヲ撰テ知ラセ
玉ヘル応永十八年ノ頃此大隅ハタリマテ大形雍州方ニ靡
ヒキ居タル時モアリキソシテ守護義天公トシバシハ御和談
ナトモアリタリ其御代ニ山野ノ境踏トテ今ノ縄引竿入ノゴ

トソレゾレ互ニ双ヨリ立会テ見定ソサセヲカレシ事アリツ
ラン此等ノ考ハツバボラン前ノハシカキニモハヤ云ヲケリ
併セ観ルヘシサテ此正長ノ頃ハ既ニ大岳公ノ時ニテ三ヶ国
守護職ヲ拜玉ヒテ四五年モ後ナレトモ若シ前ニアゲツラヘ
ルガゴトク追テ書タル年号ニモアラハ此ニ云守護方トハ義
天公ノ御内ヲサセル辞ナラン田中道教濱田主計等ハ世二同
族多シ貫明公ノ時富隈二田中玄番等見ユ道教カ胤裔歟厚地
ハ上井寛兼天正十二年十二月ノ日記ニナド早朝打立候下井
通候処厚地六弥太ト申者御酒持セ候テ振舞候也トミユムカ
シヨリ世々下井ニ居レルモノナルヘシ上井洩脇ハ四字姓ト
ミユ其頃例尤多シ 菱刈平良莫称遠屋島津川上島津新納島
津田島島津松元姫木松元姫木馬場等ノ類ナリ甲陽軍鑑ニ見
ヘタル宇山無邊助も本ハ洩脇氏ト云ヘリ後ニ上井ヲ省シナ
ランサテ雍州方ヨリ若松殿ト見得シハ他家ニモ若松ハ多カ
レド公族若松氏ノ別子ヲ下野守久親ト云ヒ伊作久義ノ弟ニ
テ総州久世ノ御夫人ノ為ニハマサシク叔父ニゾヲハシケレ
ハ雍州方ニテモ尤歴々タル事思ヒ知ルベシ且其子ニ若松豊
前守儀久同下野守久種等見ユ是ラレ内ナラン伊地知殿コモ
マタ前ニ云ヲケリ併セ考ヘシ借屋入道ノ字草體微茫ニシテ
ヨミカタレヨテ或人入迄トヨソリ若シソレ然ラハ古川道喜

古川大藏御中間右近允此三人ハ上小河ニ借に地シテ居ヲ本
 貫ノ者ニアラザルヘシ去レド此入者迄立会ヘルト云事なし
 と云ヘリ未何レカ是ナルヲ知ラス上小川乙名ト云ヨリ以下
 六人新田兵衛三郎落見ノ原藤江口檢校脇園ノ数右衛門名和
 ノ太郎兵衛園田道性此外乙名モ皆立会定メ置シ事実ナリ去
 レド此乙名トモマテ残ラス程スキシ事ニテヲボヘモセズ又
 六人カキシ上ヘハ入ラザルコトモラセシナルヘシサテ
 正長ト云フ年号応永五年戊申四月廿七日改元アリテ二年己
 酉九月五日ニ又永享ト改元アリシトソ去レド遠国ニテ十月
 マデハナヲ正長二年ト書シナルベシ伊季姓氏詳ナラス時キ
 上小河ノ領主ナル坎ハタ久満崎社ノ大宮司ナル坎抑又カヤ
 ケノ事ヲ司レル時ノ奉行ナルカ重テ考ヘシ今応永記等ヲ按
 ニ総州家ノ伊久守久御内ノ大臣ニ酒匂伊豆守伊景本田二郎
 守親等見ユ皆伊久守久ノソレノ賜フ所ニシテ景ト親トハ
 各其家字ナレハ皆下ニ名ツキシナラン伊季モ此例ニシテ見
 レハ亦伊久ノ賜フト云説ニテソノ頃我カ伊地知氏モ季弘季
 豊時季ナトノ季ノ字ヲ多ク名ツキヌレハ姫木伊地知ノ属ナ
 モマタ知ルベカラス

又応永十年三月廿一日福崎太郎二郎久重北原新右衛門氏純
 ト福昌寺文書ニ見ユヌ重ト純トハ各其家字也北原ハ梶原氏

也

実名

一馬場税所藤原氏 一氏神春日太明神
正八幡大菩薩
止上大明神和州
隅州宮内
隅州重久村

一幕紋 桐タウ鶴丸

一敦モ篤モ同名乗字也

仁王五十九代

宇多院

篤房親王 正二位大納言 天慶九年丙午
二月藤原氏給篤相 正四位
右京

篤澄 右中將

篤仲 左少將

敦長 刑部少

篤如 周房守治安元年辛酉三月廿一日隅州曾於郡下着
号曾於御館篤幾 坂上
御館篤之 重枝
篤貞 經秀

篤長 篤頼 行範 篤高

篤康 篤隆 定景

「篤秀」

篤隅 馬場
 馬場号隅州姫城ノ内馬場言処知行シテ号

行俊

一姓姫城松元坂元清水入水宮田松永浜川波田白江

白坂等也

島津忠平公末孫大隅守光久公幕下

馬場主馬篤都 隅州桑原郡栗野ヨリ
 真幸院吉田移ル

肥後守

篤得 真幸吉田ヨリ
 吉松罷移也

篤富 清左衛門
 吉松住

篤董助七郎

女子 吉田竹下孝右衛門妻

女子 馬関田園田勘兵衛妻

篤徳

女子
 弥七早世

小川明了上人信範流 釈氏秀信

貞享四丁卯年七月吉日

右吉松土馬場清左衛門家系ノ由文化十二乙亥二月廿二

日府士馬場清右衛門殿写サレ候本ヲ以テ同年霜月七日
 夜写之姫木松元ノ事ニ付考合スル事アレハ也

大口平泉村之住士村田源之丞経命系図

上世略

経春 加賀守 隠岐之助

初居羽月新納忠元地頭タル時於大口村
 経舒為大口衆食田若干乃国相鎌政町久倍阿盛
 淳以目録二通授之聖齊藤阿波女為妻
 元和四年戊午三月十九日死葬于専念寺
 法名常珍淨阿

経往

経敬 源之丞 慶長十一年村田源尉
 経秀トソ

為経舒嗣羽月士狼渡氏
 図書実明次子兵部実昌弟
 元和五年己未二月三日死葬
 専念寺法名悦岩芳怡

女子 経敬妻
 六月十四日死金宝妙安

女子 岩城越中妻

経 作左衛門弥富士次
 経泰ト云ハ此カ

經 為左衛門
大口土坂之上万右衛門養子

經書 弥兵衛藤左衛門
平泉物主

貞享三年丙寅七月廿七日死ス葬平泉法名花春清心居士
妻伊地知治左衛門女天和三年癸亥九月廿九日死葬平泉
法名寿屋妙慶大姉

經 治右衛門
平泉物主

經寬 治右衛門始名藤七兵衛
平泉物主

經 源助藤兵衛
寛文二年壬子八月三日生

經基 長八左衛門
元禄二年己巳九月三日生

經 武左衛門
村田戸右衛門養子

女

經 新助治兵衛
平泉物主
寛政十二年庚申 七月八日死年八十
法名 寿保清雲

經 藤次郎
松下十右衛門養子

經文 治右衛門源助 実大口土寺源四郎
平泉勤番 尚貞二男

女 經文妻

經命 治兵衛源之丞
平泉勤番當分相動候

右文化十二乙亥七月六日本田千之助親章写サル本ヲ以
テ于此処ニ書入置也十一月八日 季彬記之

大島休左衛門殿返詞書

出羽守有久者

自有久至四代忠泰号島津忠泰初ハ島津出羽守中此永禄九年
戊午十二月廿七日以公命庶流之面々所領之地ヲ以テ称号ト
スル事ニハナレリ忠泰大口之内大島ト云所ヲ領地セリ故ニ
大島出羽守ト云リ是我家ノ大島ヲ名乗初也後又大島久左衛
門云ヘル也前ニシルス大島トイヘル所ハ旧記ニハ大口ノ内
トアレド今ハ羽月ノ内ニアリムカシハ今ノ羽月大口ノ内ニ

ヤ

義天公第四ノ子ニテ我家ノ始祖也其生シ年月ハサダカ
ナラス 義天公ノ御代日向ノ伊東が押ヘトシテ日向庄
内之梅北城ニ差置セ玉ヒ城下七拾五町隅州姫城三十町
同シク隅州ノ帖佐ノ内田中門四町八段スベテ百九町八
段ヲ給ヒケリ其賜ヒタル年月ハサダカナラス遂ニ長祿
三年己卯七月三日日向ノ三俣院小山ト云所ニテ戦死セ
リ法号月海高公ト云ヘリ其子出羽守忠福同シク梅北城
ニアリ文明十六年甲辰十二月二十二日逆谷ノ鎌カ谷ト
云ヘル所ニテ大ニ合戦シテ深手ヲ負遂ニ家ニ歸リテ即
チ死ス其子出羽守忠明迄三代ハ続テ梅北城ニ有テ伊東
ヲ押ヘタリ忠明女子アリ本田刑部少輔親知ニ嫁ス忠明
姫木ヲ以テ親知ニ与フル由旧記ニ見ヘタリ去レトモ其
年月ハ又サダカナラス忠明後ハ求摩ノ相良カ押ヘトシ
テ大口城ニアリ大口城下三百五十町一円ニ給ヒテ明応
八年己未大口殿ト号セシ也

覚

大島出羽守有久日州内梅北七十五町隅州内姫城三十町
帖佐内田中門四町八段御賜候由又文安元年忠国公本田
重恒ヲ御討伐被遊候御新納四郎三郎忠匡ハ姫城を給し
事も有之由候右ニ付有久ハ被給候ハ何年間ニテ何比迄
御領知被成候哉忠匡拝領ハ同時ニ候哉年月御聞合被下
候尤其時御文書も可有之御写御もらひ被下儀者相成間
敷哉文明之此伊地知民部も姫木ハ在居候事見当し間
寺々考合申致候比段合糺申上事ト定奉記候 伊地知小
十郎月海公子 再問大島氏書 義天公の御代伊東か鎮として梅北城に
居給ひしと云へる説愚按に世に伝写する大島略系ハハ
公子『聖榮野史ニ応永三十年癸卯久豊公伊集院頼久カ
族吉利某ニ説キテ頼久カ女ヲ妾トセント猶々太子ナラ
ント頼久大ニ悦ビ女ヲ献ス此女男子ヲ産ム出羽守有久
ナリト云々』ハ長祿三己卯七月三日日州三俣合戦の時
於小山戦死年三十七と見ゆされは公子ハ応永三十年癸
卯の御生れにて同三十二年乙巳正月御文 義天公薨し
給へる時は僅二三歳の御時に当れり其御年にて伊東を
鎮給へるは御任重きか如シ然共御戦死年を三十七と書

けるに伝写の誤あらんは知るへからす若しそれに誤なくんば梅北に居給ひ伊東を鎮め給ふは 義天公の御代より 大岳公の御時近きにあらすや仰姫木は曾於郡城主税所の族別れてこれを食之邑に因て氏にすと聞く応安中税所氏求摩の相良に黨し動もすれは我藩に寇をなすにより 齡岳公親征して咲の隈に陣し姫記城を攻取給ひ本田信濃守氏親及ひ子因幡守親治に賜はり尋て清水城を攻取られ是も同じく父子に賜はりしと也右親治の長子信濃守元親子なく第五の弟本田又二郎重恒を嗣子とし世を伝へけるに養父元親死後に驕奢を専とし不臣ノ色を露はし文安元年 大岳公自將してこれを攻伐し給ひければ重恒防キかたく清水城を委て、舅税所か家に奔れるとそ此時 大岳公清水城を御夫人の御弟新納四郎三郎忠臣近江守忠臣ノ次男今ノ宅右衛門祖也月海公子ト同シク小山ニ戦死トソに賜はれると也是歳蓋し月海公子実に御年二十二に成らせ給へりよて愚疑ふ 公子にかの姫木三拾町を賜はれしは此四郎三郎へ清水を賜はりたる頃の事にて、大岳公の御時に非すや但し重恒清水を退きしは右に云へる如く見

ゆれど姫木を失へる此何時なる事を詳にせずされと時代をもて按に重恒はかの姫木を拝領したる親治の子にして大概六七十年もあと也時勢をもて考るに家世々国老と為り且守護代の大権を掌り躬もと末子に生れと父の重きを承け家邑の大なるを領す其驕奢を専とするに至るも一朝夕の故にあらし旁以て此時までは清水及び姫木等も併せ領せしと想はる彼れ既に清水を出奔せるに及んで姫木も同じく収公せられ然ふして 月海公子にも賜はりたるに非すや抑また三拾町の分は早く召上らるる事もありて此れより前 義天公より賜りつらんも亦た知るへからす爰にまた文明六甲午此ノ頃三州を行脚し諸郡におひて豪族の面々を廻聞せし旧記あり其中に姫木に伊地知民部西郷出雲守と載せたり西郷氏は未詳民部は我家三世ノ祖にあたり又元禄中大史伊地知助右衛門重英か同族に賜りたる旧領を挙ける書に我家の先祖は姫木に居て多く領知を下されし趣を書ける然に我家系を按るに始祖伊地知民部少輔法名節心淨貞重真は嫡宗民部少輔季弘か三男にして縫殿介季豊入道久

安^{義天公ヨリ大岳公ノ}頃^{マテ御家老ニ}マテ御家老ニ 子弟にて別れ二代小二郎重之^{法名實} 島津松元を号す三代松元民部少輔重照^{法名道} 四代松元民部少輔重辰^{法名永林久長祐佐新城ノ} 五代松元美作守重^{地頭ヲ領シ渋谷ニ攻ラレ戦死} 常^{伊集院ノ内と}油須木地頭と一系重常か時松元を改め本性伊地知に復すと見へ伝文甚簡にして姫木の事は相漏れぬ然はあれど松元即ち姫木の地名たるを古に於ては応永六年五月了^{阿不詳と}阿^{姓字}と云へる人姫木松元殿姫木角殿姫木馬場殿と宛し誓文等を証とし今はまた現在姫木村の門名に松元と云へるの遺るにこれは我家の先祖右の姫木松元氏か跡を領して松元或は伊地知とも名乗れるにや家系に其頃氏を松元と書き同時の旧記は伊地知と書きしなるべし去れど何之時何れの 公より賜はれる事を詳にせず今彼此参考するに古に云文安元年 大岳公本田重恒を攻伐し給ひ重恒出奔せし時彼本田領清水姫木等悉く召上られ公御夫人の四弟新納忠匡へ清水を賜ひ 公御舎弟月海公子へ姫木内三拾町を賜ひ然して姫木の片端尚余地もやありて我先の小次郎重之或は西郷氏等にも賜はるに非ずや尤其頃までは重之か伯父久安入道存生に

て御家老たれはかゝる縁にて賜はりしならん去ればこそ其後二十五年もして文明六年の旧記に姫木に云々前文通見へつらんと千歳の下より疑ひ想へとも徴とするに旧記足らず只疑ふまゝに此臆説をつらねて広く名家の文献を求め此説の誤を正す考援にせんと思うのみ斯て新納忠匡幾程なく清水を 公に致へされければ大岳公また清水を累世の城として本田信濃守国親へ^{元親}次^{二郎五郎親光}子^{重恒カ甥也}重恒カ^{甥也}賜はり家の惣領ニ立られしとそ然に重恒憤りを含みかの税所か黨を催し文安五年清水姫木押寄せ度々戦ありしとなり時に姫木城へは 大岳公ましゝ清水へは国親城守すと見へたり終に重恒及び河俣弥太郎等数十人の賊を討取られ御勝利也此時御舎弟出羽守手負なされしよし公親筆十二月廿九日の御書に見へたりとぞ右出羽守は月海公子ならん此御書并御手負の事なと詳なる人にきかまほしきもの也^{「切レテシレズ」} 大岳公御子の内松元入道か女の^{「切レテシレズ」}ましませる第一の御姫は豊州家に……忠廉に嫁せられ第二の御姫は月海公子の御子忠徳公孫へ嫁し給ひ一人の御男子

は喜入家二代頼久公子と聞く右の松元入道は何れの家
の人なる歟御系図等たゞ松元入道とのみ相見得俗名実
名道号など詳ならずされど右豊州家に入らせ給ふ御姫
桂山和尚の御妹にて和尚文安元年^{甲子}の御産れたるを
以て按に我家松元を名のれる頃にも大方合ひぬれは万
一も右にのせし法名などに似れる入道名なと御家録の
内へは見へ侍らすや其頃紀姓平山族の松元もあるとそ
いまだ孰れる定たる説を承らすよて疑へるなり

六 寺 社 調

「寺社調」は東京大学史料編纂所所蔵、旧島津家臨時編輯所蔵本で一八冊、薩藩領内の薩・隅両国所在の寺社を網羅してその由緒、関係文書、歴代住職名等を書き上げたものである。その記載にほとんど相違なく、さらに日向国諸県郡の分まで収録してあるのが「神社調」四〇冊である。類書の中でもっとも精細であるため、近年市町村地域史編纂の際、基礎史料として重視されてきている。

幕末薩藩では記録所等に命じて寺社領の悉皆調査を行わせており、恐らくその調査報告、寺社よりの提出書類をもとにしてまとめられたものが原本であろう。「神社調」の方には新納久仰^の（寺社奉行、家老）編の注記がみえるから、「寺社調」も編者は新納久仰とみてよいであろう。

新納久仰は幕末の記録奉行伊地知季安の理解者、後援者でもあった。恐らく「名勝志」・「要用集」・「神社考」・

「神社仏閣取調帳」等の諸史料を多く引用し、年次をかけて明治初年までに集成したのであろう。

なお、現存のものは両者とも明治二十三年（一八九〇）の田原直助（陶猗）の注書が載録されていることから、両者ともそのころの写本と考えられる。本書では「寺社調」中、国分市域のものについて抄出（国分諸古記と重複部分は省略）掲載した。

五 卷

帖佐願成寺の祈願寺末寺

隅州曾於郡国分

一原照山

法釋寺

開山運誉上人起立元和元年五月十八日

右同所

一成等山

正覺寺

開山同人起立年間不知

六 卷

国分

寺地改

御目見地

金剛寺

真言宗大乘院末御免地高五拾參石

寺社方検査付

正高寺

右同末御免地高四拾三石

正福院

右同末御免地寺社方修補馬頭觀音

格護獅子尾之元

重蓮寺

右同末御免地濱之市

御目見地

竜昌寺

曹洞宗福昌寺末御免地高三拾石

寺社方検査付

金陵院

右同末御免地

国分寺

清水楞嚴寺末御免地正觀音堂阿弥陀堂

寺社方検査付

永江庵

右同主名地

寿徳庵

徳持庵末名地

洞雲軒

楞嚴寺末御免地

寿岩軒

竜昌寺末名地

見性院

福安寺

楞嚴寺末

安舟軒

伊集院梅岳寺末

西福寺

徳持庵末名地

徳持庵

吉田津^{〔官〕}□寺末御免地寺社方檢者付并合力

淵龍院

安舟軒末御免地寺社方檢者付并合力

常念寺

時□藤沢山末御免地

正行寺

右同末曾於郡念佛寺末名地

御目見地

遠寿寺

法花撰州尼ヶ崎本興寺京都本能寺末

御免地御功米八石寺社方合力

見隆寺

右同末御免地

御目見地

弥勒院

天台宗東叡山末御免地高三百三拾壹石

御物御修補

御目見地

正善院

弥勒院末御免地

西雲寺

右同末御免地

寮常庵

右同末借地

正興寺

濟家花洛建仁寺末御免地高五拾石

寺社方檢者付

東光院

正興寺末御免地

圓福寺

右同末御免地

長源庵

右同名地

御目見地

正圓寺

津 南都西大寺末御免地高拾四石

寺社方檢者付

青琳寺

正国寺末名地

正覚寺

浄土帖佐願成寺末名地

法釋寺

正覚寺末

御居城記

一咲隈城ハ正八幡宮上之山ニテ候 氏久公三年被成御在

城清水姫木城主□外之□堂共御紹罰被成候

一富隈ハ龍伯公鹿兒島本御内ヲ家久公へ被讓進御屋敷構

ニテ富隈へ御移被成候

一新城ハ山下ニ御屋敷構ニテ龍伯公富隈ヨリ御移被成候

国分府内村^(中カ)

守君神

守君神由緒書

谷口——

一古神領五拾五町相付候由申伝候近名神領ト申伝候字之
地方于今多々御座候事

一古守君神座主天神坊ト申寺御座候由申伝

一古調所殿伊集院殿瀬戸口殿姫城殿ト申候テ守君神ヲ奉

守護主取之礼御座候由申伝候右筋目之由候テ垂水ヘ伊

集院名字之人清水ヘ瀬戸口名字之人于今居住之由承リ

申候其時代ハ判官殿代ト申社人五拾五人御座候由申伝

候右筋目之者府中村百姓之内ニ少相殘候

一六月二十九日御差越之御祭りニハ古実鎗馬御座候

スカモチ御屋形ニ上リ御門ニ掛リ候由申伝候

右スカモチ于今神前ニ相籠有之候事

一高拾石曾祖父右京左エ門慶長十九年ニ守君神社人職被

仰付為神領右馬被召付候社屋敷三ヶ所相付有之候御修

補等モ御公義被遊候其以後御分國中諸寺社家知行被召

上候御守君神高モ上リ申候当分ハ屋敷五畦相付候

社司

但右知行目禄格護仕申候事

一正八幡獅子從前代于今十月十六日守君神へ御參詣被成
候ニ付慶賀正月元日參始候事

右守君神宮破損ニ付御修補之儀申上候処由緒書出可申
通被仰付老旨トモ申伝候儀間届書付差上申候可然様ニ
奉頼候以上

国分守君神社人

谷田治左衛門

午十一月五日

一元禄九丙子三月再興棟札略ス

名寄帳

高拾石 守君神領 向花村之内

七ツ田セ町ニ

中田 九畦拾八歩 七升五合蒔

粃七ツ壺斗 ひめのきの 甚右エ門

上川くぼセ町六

上田 九畦十歩 七升五合蒔

弟子丸之 五郎次郎

粃九ツ式斗

若宮田

下畠六畦式拾四歩 七升蒔

弥七

大豆壺斗三升

大津

中畠二反五畦六歩 式斗五升式合蒔

洞雲之内 土佐

大豆六ツ

山崎川原

下之畠壺反四畦拾式歩 壺斗四升式合蒔

源助

大豆式ツ五升

かう田

下畠式畦十五歩 壺町三 二升蒔

平くまの 伊豆

粃壺ツ壺斗

天神坊水流

下畠六畦廿歩

六升六合蒔

又兵衛

右古目禄谷口治部格護

大豆𧄢ツ𧄢斗六升

みゝてら

一古来神領五拾五丁有之候処被召上慶長年間 龍伯様御
代被名付候御高拾石茂其後被召上候由元禄十一年□十

下々畠六畦

三合蒔

国分之
新右工門

一中屋敷廿間半五畦

佐土

大豆𧄢斗

大豆𧄢𧄢斗

下座向村古川

蘭山六間五畦
廿五間

右御之由社家屋敷帳ニ相見得候

下々畠𧄢畦

八合蒔

座向村
八右衛門

右寛保二戌六月書出

元文巳七月書出し

粃𧄢斗

一守君神

合粃大豆三拾俵

本地々藏堂

内

末社

粃拾九俵

稻荷大明神

大豆拾𧄢俵

慶長十九年八月一日

国分

喜入大炊入道

指出

紹嘉印

守君神社

伊弉諾伊弉冉尊御子九神奉勸請候

右守君神宮ハ大隅国惣社ト奉勸請置候御尊五拾五丁御祭廿六ヶ処御座候由于今由緒御座候其時ハ社人五拾五人右筋目之旨蒔中村百姓内少シ相残居申候

一調所殿伊集院殿瀬戸口殿姫城殿此四家ニテ守君神宮主取為被成由于今書付等御座候事

一為朝樣御信仰為被遊由申伝候守君神辻所ニ為朝樣御石燈ト申伝于今御座候事

一大ぼらのかい一ツ為朝樣ヨリ御上被遊候由神前ニ納置候事

一龍伯樣別テ御信仰為被遊神ニテ御座候事

一琉球国御征伐之砌御誓願被遊於神前三七日御祈禱為被遊由左候テ首尾能琉球御手ニ入為申由右為御礼御祭御上被為成候事

一龍伯公ヨリ高拾石御附被遊候目録覚悟仕候御領内寺社家知行被召上候節右高茂上リ申候

一気色森天満大自在天神先年遊行上人御參詣被成御歌為被遊事別ニ由緒無御座候

一祇園天王精舎宮

一熊野權現

一清水内姫城村二天満天神宮

国分

一鳥越二若宮八幡宮

右六社守君神末社ニテ御座候別ニ由緒宝物軒數等無御座候

一右神社私先祖ヨリ主取役相動来申候当代迄社役十五代仕候 龍伯樣御代ニ社役治部太輔ト申者黄金貳拾六枚被仰付上京仕

吉田樣御許狀申請候此時金剛兵衛盛尊ノ御腰物拝領仕于今覚悟仕候

一慶長拾四年七月十一日之御許狀覚悟仕候

一治部太輔嫡子神祇ト申候二男内記ト申候ヲ小村大己貴主取役仕候三男右京左エ門ト申候ヲ国分伊勢宮主取役相動申候処ニ兄弟入組ヲ以テ右府中之様ニ御帰シ被成隠居被仰付候

一右治部太輔事龍伯樣ヨリ別テ御心安御意兼テ為被下者

ニテ御座候由申伝候私迄五代ニ罷成候吉田様御許状三代私迄申請候小村大已貴社司谷口相模事モ同家ニテ御座候此等之段可申上候事

元文二巳三月十二日

権社司

谷口治部印

本田大和守様

御取次衆中

拝領之乃盛尊之事

是者先祖治部太輔ト云者江 義久公ハ黄金貳拾六枚被召上京仕吉田家ニ参宮職御免許有之持参仕候于時 義久公直々拝領被成被下難在頂戴仕数代重宝仕候得共当儀ニ至り別而逼迫仕萬事不波々相成彼刀迄売代なし何方江有之茂不相知然ル処ニ即市井ニおひて見付纔か宛ニ買取再守君神之社司谷口ト申者江格護いたされ候由申伝候得共、
(謝カ)
谷口辱き由奉射恐祝受納仕候事

文 五年二月吉日

濱田仁左エ門

盛金判

谷口稻太郎殿

谷口宮之進殿

国分府中村

守君神

薩城ヨリ東之方ニ去事八里

祭神

祓戸之大神

祭日

九月九日

十一月初卯

一祭料無之

一当社勧請之年曆不詳

社司

谷口 治部

右神社考

同所未社

一 気色森天満天神之社有一年遊行上人巡国之時此所ニ詣

テ読ヲカレシ歌アリ

或書ニ気色ノ社此名大隅ニ出タリト云々

右神社考

七卷

国分府中村

天満天神

社司

谷口——

天神之絵像

堅沓尺七寸横沓尺四寸之坂ニ絵馬之様拵安置有之

右絵書之名判有之候ヘトモ文字不知裏ニ

天満大自在天神御尊像右意趣者藤原宰相 家久公御子

孫繁栄国家安全殊者歌道御冥加御増進故也并隅州国分爲

豊饒如件

寛永二乙巳仲夏吉日大願主敬白

奉再興天満宮宝殿

右々々々々大願主家久公々々々

寛永二乙巳林鐘吉日

当地頭喜入大炊入道紹嘉

当導師金剛寺住法□盛遍

大工

長田沓岐守良秀

鍛冶

有馬六左衛門尉純辰

裏ニ

當奉行東郷小監物重村

有馬主膳正純盛

家村源右工門住永

弓削藏人盛建

大迫四郎兵衛尚次

吉田九老左工門尉清康

小工

西郷彦右エ門尉宗重

右寛保二戌六月書出

全

河辺五郎左エ門尉光重

同甲斐亟光

荒峯大明神

宮地下井村

長田半五兵衛盛貞

一社茅葺 三間方

宮原治右衛門尉盛秀

一拝殿茅葺 四敷三間

上野新右衛門尉景貞

一祭米三升七合七勺

池辺助左エ門尉清秀

從 公義出ル

結縁衆

一祭

徳持庵

十一月吉日次第

長迫門之百姓

国分野口村

与介格護

枝之宮

山之神

宮地下井村

由緒不相知

一社大板葺上屋茅葺 五尺方

一祭米壹斗

一祭米三升七合七勺

年々御蔵入ヨリ御寄附

從 公義出申候

末社

一祭

小鳥大明神

霜月吉日次第

渡瀬屋敷之百姓

助太郎格護

阿弥陀堂

堂地下井村

西福庵格護

一堂茅葺壁板敷板壁

但祭

二月朔日

一祭米三升七合七勺

右者伽藍有上古ニハ修正田式段相付タル由候京竿以来

申絶候就夫御南戸藏ヨリ修正米于今相渡候

福島村

八龍権現

八龍由緒相知不申候

奉造立八龍之御前々々

大檀那藤原厚忠日

永禄元戊午九月

再興

黒川九郎兵衛尉

同

平川金藤兵衛尉

福島越後守

大工

長瀬飛彈守

小工

同九郎右衛門尉

同 七郎五郎

鍛冶

佐藤老岐守

右寛保二戌六月書出

国分真幸村

大乘院末

富隈山

心王院

重蓮寺

開基年間不知開山日秀上人弟子秀誉法印

覚

真言宝寺地濱之市重蓮寺

右前々ヨリ富之隈へ有末寺ニテ候 龍伯様秋成御座候

ニ付寺地 所被召直其節住持日秀上人弟子ニテ候庄内

弓箭二度々使僧ニ被參御奉公被相勤候為其御褒美

龍伯様国分へ御座御直之時分富之隈御護摩所ヲ被下如

前々被罷移候其後富之隈御稻荷御再興座主ニ被召成被

罷居候

右明曆二年申二月十四日寺社改帳面ニ相見得申候

覚

一 稻荷大明神 一字

右富之隈御城内ニ 龍伯様御建立

一 稻荷大明神

右富之隈御城内ニ御立

一 猫神

右中納言様御建立

右稻荷ハ高麓入之砌御奉齎成候由ニテ御建立

一 開山日秀上人弟子秀普

右秀普儀庄内御陣ニ使僧度々被相勤候由其後重蓮寺敗壞仕盛瑗代御城外ニ寺地被下候事

一 十一面觀音一休

但木像高サ一尺五寸立像

一 如意輪觀音一休

但金仏高サ七寸座像

右金仏ハ 龍伯様御代秀普ニ被下候由

一 中興盛瑗法印

重蓮寺

元禄十年巳二月十五日

堯契印

覚

国分新川直シ御普請之時分以外大粧之儀ニ御座候ニ

付故図書尤為御覽濱之市へ被成御越候砌此御普請首尾

能相調候ハ、水天社壇并拜殿御造立可被遊候間拙寺御

使トシテ国分金剛寺へ右之趣可有立願由可申入旨被仰

付候故金剛寺へ此段申達候儀別条無御座候此節任御尋

如此御座候以上

巳三月八日 南雲新右工門

国分

本町

唐仁町

一惠美須

一惠美須

末社

上小川

上小川

小村

小村

一八大龍王

一熊野權現

一日神

一月読神

右同

一冠輪大明神

同所

同所

一久満崎大明神

一冠輪大明神

一稻荷社

一田之神

一山之神七社

一居徳大明神

同所

祭料貳六升六合

一稻荷神社

一太王明神

一妙見社

一荒峯大明神

一稻荷神社

川内村

濱之市

一伊勢

一西之宮大王

一猫神社

一天神社

野久美田村

住吉濱村

濱之市

一白濱權現

一中山大明神

一蛭児神社

一蛭児神社

野村

松之木村

一枝之宮

一小鳥大明神

一小鳥神社

一大龍王神社

祭料壹斗

福島村

一磐神社

一森天子神社

一八龍權現

一天四郎

下井村

調 社 寺 六

一鎮守神社

平下

一山之神

川内

一山之神

川内村

一山之神

上井村

一山之神

府中村

一祇園天王

清水之内姫城村

一天滿天神

府中村

一天滿天神

村内

一二之宮大明神

一青山大明神

一山之神

下井村

一山之神

川内村
祭神保食神

一稻荷大明神

祭料五斗式升五合
下井村

一鳴子大明神

一精舍宮

向花村

一熊野權現

麓

一若宮八幡

一市隼宮

上井村

一井手之神

麓

一藏王

右神社考

国分麓

真言宗

円通山

天皇四拾五代聖武天皇天平十一年己卯天皇之后光明皇

后之御祈願所号国方尼寺御建立之御志願者聖武同前天

下萬民痼瘡之煩御消除之御趣意也此寺モ同大地也尼寺

ニ候哉国分寺同号同所ニケ寺有之候而者聞惑事有依之

其後寺号改而大仏觀音依被被成居而円通山觀音寺円通

者觀音之異名也此寺者向花村之村今三日月ト云字所為

有之由申伝有俗説往古国分寺廊下統説往古此所有池其

内楠大有森此森内三拾人余モ入ベキ
ホトノウトナリ則池形如三日月依之

俗々云名付乎寛文年間新田之開之時為(田地字三日

月)云也(往昔者此池觀音池云也)寛政年間之比迄者

生木有之候得共森者樟脳焚ニ切除池者埋而今田地成右

寺者何之代致破壊候哉其訳不知観音薬師在星霜押移次

第二堂宇及破壊行基之作今通召置ソロテハ仏像モ終ニ

ハ朽破可致残多ト清水楞嚴寺八世代春和尚再興之有志

而時之領主本田紀伊守董親同左京太夫親兼父子歎訴之

于時天文十年辛巳二月国分寺一所ニマトメ観音薬師奉

遷今ハニヶ寺也依之国分寺共観音寺共云夫ヨリ楞嚴寺

末寺故禅宗ニ成ル

一薬師座像四尺三寸卅仏

一正観音座像一丈一尺卅仏

此観音 持明様御信仰被遊候由申伝アリ

今ノ龍昌寺ノ上ヲ花堂ト唱シハ此所迄観音寺境内ナリ

六所ヲ崇シ観音堂有此処ニ香花ヲ備ヘ霧島六所ヲ奉祭

シ所ナリ此堂モ後世破壊シ観音像モ朽壞イタシ候由

右森ノ所ヨリ六七間半己寅ノ方田地ノ中ニ石積立タル

所アリ是平田久兵衛ト云フ人ノ家内老若男女トモ不残

打果埋シ所ト云伝フ作人此石ヲ取除ハ何ソニ付不宜ト

今ハ取立有リ右上意打之事ハ別書ニ委シ古ヨリ此辺ニ

テ三ヶ月婆女出ルトイヘハ啼子モ止ト云久兵衛母之事

ト云今ニ三日月婆女出ルト子共ヲダマス言葉アリ

八卷

国分福島村

伊集院梅岳寺末

海雲山

安舟軒

差出

当軒開基之儀ハ富之隈御代之時於鳩之脇御建立為被遊

寺ニテ御座候其後慶長六辛巳年於国分新城御殿被移之

砌又于当地御建立有之候于時慶長八年庚卯ニ御座候其

時ハ寺領共三石清水之内郡田村ヘ為有之由申伝候今ハ

寺地迄之御免ニ御座候

一開山ハ安舟俊濟

但実氏

右者宮内石田木山正雲寺住持ニテ候于然 龍伯様別テ

御存知之僧故富之隈ヘ被遊御 居折節被召出于鳩之脇

寺御営作被遊寺号賜安舟軒也遷化ハ慶長十五年庚戌十

月

安舟軒

元禄十丁丑正月廿二日

月舟印

一 明暦元己未二月五日

光久公御入被遊候

御供衆

相良内藏之丞殿

大山三郎右工門殿

川野正雪

地頭

喜入休右工門殿

一 萬治二己亥十月二十四日

綱久公御入被遊候

御供衆

鎌田筑後守殿

佐多三次郎殿

椿内記殿

喜入久右工門殿

一 寛文元丑三月十四日

光久公御入被遊候御上洛之故

琉球国王子御同道被遊終日之御慰御酒宴之後御離別之

由有之

茲中山国之王子千里之遠不遠萬頂之難不難来テ日東見

我々感其志至厚存其禮之實儀而喜溢眉宇始見其容□辞

氣出類之国器超宝之鳳毛瑤林瓊樹風姿弘塵幸雖遭良縁

恐難繼見序属青春時惟三月我有述職之勤東促行装噫交

間無根帶人生如浮萍方誦感時花濺淚恨別鳥心之句五内

驚飛矣春燕秋鴻之恨遂不得獲止乃以□線村裁棼詩二章

投髮年芙蓉帳下重自愧而必耳

情事無涯春有涯 黄鶯 緑陰加

新愁點々題何処 差見君顔一咲花

其二

邂逅相逢催別遊 劍情未盡恨悠々

憶君心似東流沓 夜運行無歌休

源少将光久

呈尚氏朝周

翌日中山国王子御禮物ハ泡盛壺壹蕉布式端也

御供衆

島津安芸守殿

島津番書頭殿

伊東三左工門殿

一地頭

喜入久右衛門殿

一下屋敷^{十五間} 卷反三畦安舟軒

大豆三俵二升

右寺地御免之由寺社屋敷帳ニ相見得申候

右寛保二戌六月書出

一寛文十庚戌九月二日綱貴公御入之右者国分御初□入并

福山旧寺迄御越被遊小村ニ御一宿翌日松永何ニ御通道

之砌也

国分松ノ木ノ内

御供衆

浄土宗帖佐

島津 番書殿

願成寺末

地頭

原照山

法禪寺

島津 権七殿

開基年間不相知開山徳蓮運誉上人ニテ候

堀 四郎左工門殿

一客殿 四敷三間三尺

本田右衛門殿

茅葺

始良十郎兵衛殿

一庫裡 五敷三間三尺

一貫明存忠庵主

右同

一持明彭総庵主

右御掛物御位牌安舟軒二代仙岩和尚依願奉安置候

右龍伯様御代ニ浄土宗有之候得共廃壞仕候処ニ松木村

持明様御領分ニ罷成候砌御再興御座候テ法錢ト申坊主

被召置候其後松木村終地ニ罷成候ニ付法錢之兄庄屋之

故寺地庄屋給方之内ニ仕候テ召置候故庄屋給方地ニテ

福島村

于今有之候金之古仏阿弥陀ニテ有之候

右寛保二戌六月書出

右明暦二年申二月十四日所役所寺社帳ニ相見得申候

覚

九卷

国分下井村

当地開基之儀ハ惟新様朝鮮国へ御出陣之時御誓願御座

国分徳持庵末

候テ御帰朝之時分浄土宗四拾八ヶ寺御分國中ニ御建立

無量山

西福庵

被遊候其内ニテ御座候由申伝候事

開基年間不知開山徳持庵三世笑巖勧請ニテ御座候

一当時旧地ハ寺号法楽寺ト申候寛文之比御新田場ニ被召

一米三升三合

成候ニ付寺地野原ニ被召移候砌原照山法禪寺ト山号相

右寺内阿弥陀へ為仏供料御上様ヨリ御寄附之由候申

改申候

伝于今御藏入ヨリ申受候

一本尊地藏菩薩

一寺地借地

座像長壹尺二寸 作者不知

右寛保二戌六月書出

右持明様御建立堂宇之材木ハ根本へ為被仰付由申伝候

十卷

其時分ハ四間四面之堂ニテ候ヘトモ寺地相移候時分修

清水楞嚴寺末寺

甫難成ニ付為省略式間四面之営作申候事

永江庵

一本尊阿弥陀如来

立像金仏長壹尺二寸唐土ヨリ相渡候由申伝候

右永江庵ハ往右上小川村之内江之口ト申所へ有之候処
元禄四年未新田ニ付当分之寺地へ被引移候由

右元禄十丁丑二月廿二日所役所帳留ニ相見得申候

一開山楞嚴寺二世機堂和尚應永二十五年四月三日開基也

一寺地借地

清水楞嚴寺末

新城山

洞雲軒

永享元己酉十一月十四日開基也

開山楞嚴寺三世巨海宗印

亮州隨筆

一清水城ハ本田因幡守国親ハ島津九代忠国侯之時居城セ
シム其本ハ平姓桓武帝ノ流本田次郎左エ門尉貞親之二
代兼親三代親安四代次郎左衛門董親代天文年中落城ナ
リ
同

一姫木城ハ姫木十郎是島津五代貞久侯之時居城セシム其
本ハ氏姓大中臣ノ人子孫不評上古ヨリ姫木ノ郡司ト旧

記ニアリ

寺地改

御目見地

楞嚴寺

曹洞越前慈眼寺末御免地高六石寺社方合力

総昌寺

福昌寺末御免地

片岡寺

楞嚴寺末御免地

洞泉寺

右同

妙法寺

福山大安寺末免地

養心軒

曾於郡慈恩寺末名地

台明寺

国分弥勒院末御免地高拾三石寺社方合力

清水寺

大乘院末御免地

白尾国桂撰名勝考

清水郷姫木村

風杜

士人古我ノ杜共云此地国分郷気色杜ヨリ北之方十町

許ニ存リ

清水

日吉山王

合奉再興山玉宝殿々々々

大願主島津修理太夫入道殿藤原義久朝臣々々々大勸進
隅州曾於郡台明寺院主法印權大僧部精宥嫡弟長寿坊来
精

慶長十五年庚戌五月二十八日

当老中

喜入大炊入道殿

同

平田越前守殿

同

本田三河守殿

御申口

相良勘解由次官殿

惣奉行

阿多周防入道殿

再興奉行

鎌田玄蕃助殿

脇奉行

丸田三右衛門殿

同

山下右近将監殿

大工

原田二兵衛尉

安田孫兵衛尉

一山王本地堂板葺

三間四面四方縁有

右者建仁三年ニ忠久公御建立之

一二王堂葺茅

四敷三間

祭日

二月初中

八月朔日

霜月中ノ申 十二月廿八日 參籠ル

一高拾三石

右龍伯様御代ニテ高四拾石相付候

三明開悟 六道閉傷

大檀那當国守護代左衛門尉藤原朝臣重頼勸進者當山住
僧阿闍梨亮弁銘雕者

大工 藤原 重房

高麗 行則

同 助行

隅州台明寺是青葉鳳笛之貢御所白馬龍締之清躅也巖石
廻外澗川橫中遠近仰於靈驗經素致於綿依愛古鐘銘云

右鐘高サ三尺四寸厚サ二寸五分

天慶九年之比鑄改昔日之小鐘云々此鐘在寺奧如本銘然

口ノ広サ二尺七分竜頭一尺

令其勢昇少其音不遍通送歲霜□及穿□仍衆徒合力万人
在勸改彼古鐘遂此大望上通有頂下度无間分于時正嘉元

忠久公御願文字

年丁巳冬十一月十九日庚午作銘梵鐘高掛

奉立大願事

梵鐘高掛 韻氣无疆

可造立衆集院本堂老宇 參間四面事

夕声伝風 曉響発霜

右件本堂老宇可奉造立之由大願志者左衛門尉惟宗忠久

心池冷水 覚花飛香

上洛間為無為無事安穩泰平所奉立也仍今度下向之時早

邪□収督 法鳥刷翔

可令造立之状如件

聞推尖峯 眠醒家郷

建仁三年十月十九日

感佛因縁 勸僧苦行

左衛門尉惟宗御判

進音遠至 諸天降望

右神社佛閣帳

清水

祈願所真言

一庫裡

右同

竹林山

衆聚院

台明寺

四敷三間三尺

一客殿

茅葺

八敷七間

一長寿坊

但七間ハ六尺縁四間ハ三尺縁 之間ニコモル

一客殿

茅葺

一庫裡

右同 六敷七間

四敷三間三尺

一山王御門右同

四敷二間

一庫裡

右同

一免藏

右同 四敷二間

四敷三間三尺

一大門

右同

外ニ四ヶ坊破壊

坊中衆

一台明寺事天智天皇御願所白鳳元年ニ御建立之由候

一知積坊

一客殿

茅葺

台明寺佛閣

五敷四間三尺

一長谷觀音堂

茅葺

一庫裡

右同

四敷三間

五敷三間三尺

右白鳳元年辛酉建立之由候山王ヨリ三町程奥之東ニ有

一理性坊

堂尾千手堂

一客殿

茅葺

二王堂之脇

四敷三間三尺

一毘沙門堂

茅葺

式間方

二王堂ヨリ内

一阿弥陀堂

茅葺

四敷式間三尺

本風呂

一釈迦堂

右同

式間方

堂藺

一藥師堂

右同

式間方

下之藺

一觀音堂

右同

式間方

台明寺

下 大隅国雜掌

在判

可任次第 證文旨令停止篤房妨台明寺住僧等訴申當寺

四至内作田等事

副下調度文書等

右得台明寺住僧等解狀僞謹檢案内台明寺者無依無怙往古靈崛山修山学聖跡精蘆草創以來不知幾許且天智天皇御宇之時被定篋竹貢御所後遂四百餘歲根本大伽藍也住僧等雖辺鄙顯也崇持天台教迹堂四教三觀利劍密也伝授真言秘術把三密五瓶智水宰府為弘法益賜裁下哉焉正八幡八宮執印故行賢大德為紹隆弘法買取篤房之祖父篤定并楡前篤季之田地當山勝至内相副本券當寺山每年二季彼岸之勤並燈油料寄進二町陸反田地又以來領戒勢之田藺當山三箇日夜不斷常行三昧藺壹所并田地陸段同以寄進畢其後七十餘箇年之間敢無他沙汰随代々国司被加免判了国衙在厅郡司等皆悉所承知也其旨見調度文書等而今篤房雖為篤定末孫不受繼郡司職私訴阿多平權守忠景以彼之武威乍置相伝郡司分領半郡事僅及四五箇年之間謀計之心甚欲分取逐多年寺領田於有限本券田地之頗広称新開加作之由今申成府判始分取寺田或押領四至有限寺園之條非理沙汰誑惑之甚也就中於彼岸田燈油田者台明寺勝示内也他領田地全不相交設雖加新開勝示

内全不可有篤房之沙汰乎而勝示内燈油田 者今年春

既分取畢兼又以為元起阿党住僧等不令切山木苧野草於曠野所殖物等一一押取不与山之本作人京都二八本寺叡岳鎮西二八本山内山被崇国内被祈郡内雖然聖朝外朝国司郡司全不令製止山野草木等乎以之思之篤房一人□例非法也加之篤房違代々国判背往古旧記狩勝示内禁野殺伽藍邊猪鹿條付冥付顯有危有過者也又去々年篤房之所進府解狀僞篤房先祖有指宿願申請国司以私田園寄進台明寺云々是大無實也大虚妄其旨見於是故行賢寄文狀以一椎万誑惑甚也宰府依不令智案内於彼解狀被成御外題欵但可付證文云々未敢定判御外題也台明寺公驗寄文證文明白也篤房者不帶一紙書狀不取出可為證文指本公驗而於四至有限寺領田園領押分取之條實以罪科不輕乎望請鴻恩且為佛法日一任實正令停止篤房之條々非法一々誑惑給者捧恒例不退佛事之功忝奉祈府国安寧之由静念誦読經勤行之心高奉仰正理憲法之貴以解者如證文者事為功德早停篤房可令勤行恒例佛事之狀如件

応保二年十月廿九日

爰々雖有十八人判形文字不分明

任次第證文之 可下

知———在判

大隅国台明寺住僧寺誠惶恐謹申請□大宰府裁事

請被殊蒙鴻恩任八幡宮執印故行賢寄文狀依代々

国判旨停止當郡住人篤房謀略非理佐汰子細狀

副進

調度文書等案

右謹檢案内台明寺者無依無怙往古靈嶺山修山学聖跡精蘆草創以來不知幾許但 天智天皇御宇之時被定篋竹貢御所後逢四百餘歲根本大伽藍也住僧等雖辺鄙顯也崇持天台教迹埜四教三觀利劔密也伝授真言秘術挹三密五瓶智大宰府為佛法蓋賜裁下哉焉正八幡宮執印故行賢大德為紹隆佛法買取篤房之祖父篤定並檢前篤季之田地山勝至内相副本卷当山每年二季彼岸之勤等并燈油所寄進式町陸田地又以來年伝領戒勢之田園当山三箇日夜不断常行三昧祈蘭台所并田地陸 同以寄進畢其後七十餘

箇年之間敢無他沙汰隨代々国司被加免判畢国衙在庁郡司等皆悉所承知也其旨見於調度文書等而命篤房雖為篤定未孫不受繼郡司職私訴阿多平權守忠景以彼之武威乍置相伝郡司分領半郡事僅及四五箇年之間謀計之心甚欲分取逐多年寺領田於有限本券田北之頗広称新開加作之由今申成府判始分取寺田或押領四至至有限寺蘭之條非理沙汰也誑惑之甚也就中於彼岸田燈油田者台明寺勝至内也他領田地全不相交設雖加作新開勝至内燈油田

者今年春既分取畢兼又以之為元起阿党信僧等不令切山木不令蒨野草於曠野所耕殖物等一一押取不与山之本作人京都二八本寺叡岳鎮西二八本山内山被崇国内被祈都内雖然聖朝外朝国司郡司全不制止山野草木等乎以之恩之篤房一人非例非法也加之篤房違代代国判背往古旧記狩勝至内禁野殺伽藍邊猪鹿之條付冥付願有庇有過者也又去々年篤房之所進府解狀併篤房先祖有指宿願申請国司以私田蘭寄進台明寺云々是大無實也大虚妄也其旨見於故行賢寄文狀以一推万誑惑甚也宰府依不令知案内於彼解狀被成 御外題欵但御外題二八但可付證文云々未

敢定判御外題也台明寺公驗寄文證文明白也篤房者不帶一紙申書狀不取出可為證文指本公驗而於四至至有限寺領田蘭押分取之條實以罪科不輕乎望請 鴻恩且為佛法且任實正令停止篤房之條々非法一々誑惑給者捧恒例不退佛事之功忝奉祈 府国安寧之由静念誦說經勤行之心高奉仰正理憲法之貴以解

応保二年五月十五日

台明寺住僧等謹上

大法師 覺心

大法師 弁海

大法師 範耀

大法師 長慶

大法師 勝賀

大法師 源豪

大法師 源耀

大法師 頼暹

大法師 遍覺

藏人所下 大隅国台明寺住僧等

可令早任先例停止笛竹使新儀非法安堵

寺内事

使

右彼寺者國中第一之靈地鎮護國家砌也仍晝夜不斷奉祈
聖朝安穩御願之処件使等寄事於左右致寺僧煩之間粗企
離山思之由所訴申也事若實者甚以不便自今以後早停止
彼煩安堵寺内且弥奉祈聖朝安穩之御願且在庁官人相共
任先例可令致沙汰貢御笛竹之状依藏人權左少弁殿御奉
行所仰如件召物使在庁官人等宜承知更勿違失故下

建仁二年 月 日

出納右衛門少志中原在判 奉

奉寄 台明寺衆集院

故長寿房安覺忌日 九月僧供料田事
四日

在 噌唎郡重枝名内字堀切田六段

副進 奉主沽券

右件田者故長寿坊自重枝先名主噌唎郡司篤盛之手買取
之後領掌無妨仍相副本主之沽券限永年所令寄進衆集院也

但於彼忌日僧供者無缺怠可被勤仕也仍奉寄之状如件

嘉禎二年二月□日

瀧泉房立音玄榮在判

衙

大隅国台明寺牒

當国

欲被早任牒送旨且為不審且加御存知為守護代左衛門
尉違背御式目并遠江守殿御下文状被致沙汰間当山依
迄安堵有限聖朝府国御願御勤擬及闕如子細状

副進

遠江守殿御下文案

送守護所勝状案

牒件事子細去九月廿八日送守護所牒状明白也仍為御

覽進之

仰當山者自本無緣孤独之砌青葉笛竹貢御所也但至貢

御竹者去建保六年五月廿六日為龍敗一竹不殘損失□

雖經年序更不出生之間天福年中之比篠許竹一本出生
為其根源每年生加既大小竹廿本許見在也帝德至貴在

斯綺尤以国解可被經官奏欵盖此寺者為禦鬼氣於国衙

丑寅之方建□鎮護国家道場之後聖朝府国御祈禱式日

恒例佛神事于今無退軫所謂年別勤六月会三十講碩德

諍雌雄霜月会十講師明延鮮弁花加之修正三ヶ日二月

常集会四月佛生会日吉祭一座三問論義講七月三ヶ日

夜不断供花勤九月大念佛二季彼岸不断經論義講每□

□□度講誼三月十五日十八日
三十日 山王講將軍家並遠江守殿祈禱長日

之二□軫誦大般若經并觀音經三卷此外細々勤不違記

録然今為守護御代官違御式目背御下文教令乱入山内

無□衆徒等被譴責之間付使者雖申子細不承引以御文

又牒狀雖申不被取上勤自身今登山無左右可号責之由

以郷公西遊被申之時衆徒等迷子細溺悲淚凌爰御願勤

修禪侶令離山趣臥雲之路耆年長老宿德失東西徘徊非

歎之衢夫佛法依王法弘之王法依佛法持之一山滅己無

疑殆誰入可勤仕御願哉誠一天率土莫靡皇澤之恩恤七

道諸国奉仰関東之御威違背旁御制依被致理不尽沙汰

朝家鎮護御願之寺大將軍家御祈之砌成荒廢之地事不

可不申尤垂衙察為後日可候御斟酌欵仍為被加御存知

牒送狀如件以解

仁治元年十月三日

宮主清彦法師

預清源 法師

專当応派法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

台明寺衆徒等謹言上

欲被殊且為敬神帰佛且任行賢芳躅寄進小料田祈大御

運子細事

副進

行賢聖人當寺被寄進大念佛僧供田二季彼岸佛聖燈油

日吉祭田無盡米粃温釜等狀案

右當寺者獻鳳笛之貢御字鵝王之救法然而依為無緣之敵

輻更無住侶之依怙常變麋鹿之苑廬為狐狸之居所 行賢

聖者憐佛寺之荒廢傷僧徒之退散被寄進上件料田等狀文

分明也不遑羅縷自其以降法燈鎮挑僧徒繼踵抑當御代宿

因內動護威外呈社務重國務堂上如花神恩交朝恩門前為

市台明寺又公家武家之御祈所行賢聖人帰依之砌也然者

每仰被古跡之嚴蓋望此新恩之泰若所請有御許容被寄進

小料田者齊代於先賢留名於後世於戲佛神廻眦護御運之

長久衆徒合掌祈現當之御願仍勒子細乍恐上言如件

弘安十月八月 日 台明寺衆徒等

當国台明寺衆徒等申為在庁篤秀以下輩被致狼籍之間事

訴狀副書謹進上候子細 狀候哉可有洩御 奏聞候狀

仍言上如件

裏在判

大隅国台明寺衆徒等申當国目代感範致狼籍由事如今年

三月廿五日御教書者可注申子細云々仍致沙汰候之處守

護代景綱令進上請文候以此旨可有彼披露候哉恐惶謹言

文保元年五月八日

請文

前上野介平時直

裏在判

閑東御祈禱所大隅国台明寺雜掌長慶重言上欲早被經敵

蜜御沙汰且被鎮當国守護御代官安東四郎左衛門尉置綱

代惟村以下在庁御家人等狼籍且停止感範惡行被糺返損

寺領止上村百姓等住宅致追捕狼籍候事

副進

一通 御教書案

右於巨細者具載本解狀畢但如守護御代官景綱請文者感

範依捧訴狀去三月十九日被尋下衆徒等候畢云々此條国

衙正祝物之濟由更非守護方御沙汰何可捧訴狀哉而尋下

衆徒等之由被申之條無謂次第也就中申成 御教書付

進守護御方時曾不及異儀乍被請取之景綱令引汲敵方感

範捧訴狀之由載請文之条今案參差之沙汰尤可足賢案哉

同狀者 若同篇候者感範既為訴人令申子細候云々比

当山雜掌守護使惟村狼籍事捧訴狀於守護御代官之

時感範為訴人之由敢 申之乍請取彼狀無其沙汰還

日數之後感範為訴人令申子細之旨載請文之条眼前引汲

也且感範惟村等致狼籍之間就テ訴申被成御教書之処以

彼阿党 代官惟村不尋下在國贊テ感範等捧非 請文

之条希代珍事之彼狼籍亭根源赴自止祝物之上訴申在國

守護御代官惟村於之間所務狼籍共以不能守護方御沙汰

哉早重被成下御教書被召上感範以下与力人等被行所當

罪科 損物者任負數不日可糺返之旨為蒙御成敗重言上

如件 大隅国台明寺雜掌敗 申打櫛蹂躪以下狼籍重訴

狀如比子細見狀可令明申也仍□達如件

文保二年十月五日

遠江守在御判

目代殿

奉寄進

衆集院阿弥陀堂

大隅国曾於郡重富名内折橋田七段事

右寄進志趣者為入阿沙離生死證大菩薩及至法

衆生平等利益相制調度證文等所奉寄進也仍寄進之狀如

件

正慶二年壬二月九日

絶主比丘尼妙願在判

奉寄進

大隅国曾野郡三郎丸名内井手山開山野等事

右志趣者為比丘尼賢勝現当二世悉地成就円満山内安穩

上下諸人福貴豐饒也但此役者山王御宝前正月朔日御鏡

十枚分米黒毫斗式升
御幣紙一帖 御酒分米二斗者御鏡十枚内日吉別当分

三枚四枚餘別当一枚宛申口一枚二枚者当參衆徒御肴料

也所詮於下地者永代為賢勝相續之跡智聖可奉備之末代

知行之輩若令緩怠被役之時者可為衆徒御沙汰也仍為後

代寄進狀如件

文和三年甲午十二月廿四日

比丘尼賢勝在判

大隅国台明寺中在庁篤秀已下輩狼籍事師願申狀制奥書

如此子細見狀候畢被申関東之由天氣所作之以此旨可令

洩申候仍言上如此仲兼頓首謹言

伊集院下野入道

抱節在判

二月十一日

中宮亮平中

進上彈正大弼殿

台明寺衆徒中

長日御祈禱御卷数致進 目出心之候被仰下候仍執達如
件

十月五日

右衛門尉彈衛在判

山王領

隅州曾於郡山之路村之内

高四拾石

任天下御下知 致勘落為国家安全右之知行為御祭礼并
修造田令支配者也

慶長六年三月吉日

山田越前入道

七 国分諸古記

国分諸古記は、代々野村家に守り継がれて来た貴重な古記録史料である。野村源三郎能綱は、慶長十二年（一六〇七）から島津義久の直臣で、嚈役の重責にあつた。嫡子源右衛門尉信綱、孫外記安綱へと引き継がれ、その間の国分のもろもろのことが書き写され保存されていたものを、子孫の手で一冊にまとめられたものである。

古くは永徳二年（一三八二）の文書から、寛延三年（一七五〇）までのものが収められている。なかでも、島津義久の国分舞鶴城での八か年、慶長九十六年（一六〇四）と、父義久亡き後二十か年を過ごし、国分の城で亡くなった亀寿（島津家久室）のことなど克明に書き残されていて興味深いものがある。

国府賦所の村里改帳や寺社改帳などの写しに加えて、神社寺院の今は無き古文書や棟札、斜木家をはじめとする当時の名家に伝わる古文書が書き写されている。とくに元禄十一年（一六九八）の寺社改帳、寛延三年（一七

五〇）の寺社由緒のまとめの写しは、廃仏毀釈によって今では知る由も無い往古の姿を、残されたこれらの古文書によつてたどることができる。このことは、国分市民はもちろんのこと、多くの郷土史家にとつて幸いなことであつた。

この国分諸古記を資料編に掲載するに当たり、はじめ鹿児島大学玉里文庫所蔵の明治二十一年の写本を複写し、それと野村家の原本とを照合して解説を行った。

国分諸古記については、すでに三ツ石友三郎・原口虎雄両氏によつて発表紹介され、学界では定評のあるものであるが、この度の資料編の刊行に際して、あらためて野村家原本の全文を掲載して、その全容を紹介することとした。原本は、鹿児島市在住の野村泰道氏によつて大事に保存されている。

国分諸古記 目次

一大隅 曾於郡桑原郡 国府	二〇九
一義久公	二一〇

一義久公雪窓院にて御法体之次第……………	二一〇	一寛永八年諸士の和歌……………	二六八
一大友家由緒書……………	二二三	一慶長十七年春より国府外城地頭ほか……………	二六九
一絵図方之儀に付公義への提出文書……………	二二五	一慶長十九年大坂乱書留……………	二七〇
一本田佐渡守山口勘兵衛起請文……………	二二〇	一伊勢天照太神宮……………	二七二
一国分士鎌田刑部の古文書……………	二二〇	一稻荷大明神……………	二七七
一鎌田刑部の系図……………	二二二	一若宮八幡宮……………	二八〇
一国府新城縄引帳……………	二二三	一文明山龍昌寺……………	二八一
一異本国府新城縄引帳……………	二二四	一五峯山竜護院金剛寺……………	二八七
一五社大明神……………	二二八	一鷲峯山勸持院遠寿寺……………	二九七
一大人之穴……………	二三一	一仏光山常念寺……………	三〇一
一龍伯様国府麓御屋形跡……………	二三三	一太平山国分寺……………	三〇五
一龍伯様御詠歌一冊之内抜書……………	二三四	一愛宕堂……………	三〇九
一国府御代犬追物手組書留……………	二三五	一永徳寺地藏堂……………	三〇九
一慶長十年国府衆中……………	二三六	一永徳寺正寿院……………	三一〇
一龍伯様御嫡女ほか……………	二四三	一行者堂……………	三一二
一於上様御代国府諸士起請文……………	二四五	一熊野権現……………	三一二
一於上様御台所賄記録……………	二五〇	一龍王宮……………	三二三
一於上様御代国府御内築地板上屋大工帳……………	二五八	一成等山正覺寺……………	三二三

一地蔵堂	三二四
一御荒神	三一五
上小川村向花村の内	
一本町	三一五
一戎社	三一六
一唐人町	三一七
一隅州曾於郡上小川村	三一七
一久満崎大明神	三一八
一国府七隈	三二六
一永江庵	三二六
一新城山洞雲軒	三二七
一隅州曾於郡上井村	三二七
一韓国大明神	三二八
一虎岳山淵龍院	三三三
一安骨山徳持庵	三三六
一隅州曾於郡川内村	三四八
一稻富大明神	三五〇
一今霧島	三五一
一高塚山神	三五二

一観音堂	三五五
一隅州曾於郡下井村	三五六
一乙宮権現	三五七
一鳴子大明神	三五八
一無量山西福庵	三五九
一隅州桑原郡小村浦町	三五六
一光久公御飯屋地	三六〇
一国府土堀切大炊左衛門元禄十年の覚書	三六六
一大穴持大明神	三七〇
一日輪山東光院	三七四

注 本文中○と▲は朱書

○大隅曾於郡桑原郡国府

右国府総廻り十六里八町五十三間、東西者長南北者狭し、御城五ヶ所、当時高頭式万式千九百七拾六石余、総人数壹万三千四百六拾人余、

龍伯様浜之市富隈江十ヶ年、麓江八ヶ年 御在城也、

按、釋日本紀云、日本国者東西長南北狹也、是国府雖為少地秋津洲準乎、

御當家十六代

○義久公

初忠義 又義辰 虎壽丸 又三郎 三郎左衛門尉 正

五位下修理太夫 從四位下法印龍伯三位、

但、御系図写

一天文二年癸巳二月九日、於伊作而御誕生、

御父陸奥守貴久公、御母入来院彈正忠聰女、

一一同十九年庚戌十二月十九日、

貴久公從伊集院鹿兒島江御移、其時

義久公御年十八、

一天正十五年丁亥五月六日、伊集院於于雪窓院而御法

躰、号 龍伯公、

一天録四年乙未冬、從鹿兒島浜之市富隈江 御移、御在

城十ヶ年、

一慶長九年甲辰十二月、從浜之市国府江御移、御在城

八ヶ年、

一同十六年辛亥正月二十一日、於于国府而 御逝去、御年七十九、御法号 實明存忠庵主妙谷寺殿、

一同二月十五日、從国府福昌寺江御越山、同二月二十日

御荼毘、

右 御遺体鹿兒島江御越山之節吉田筋御通之筈候得

共、龍昌寺鉄山和尚被致御供、白かね筋被遊 御通候

処ニ、芝之元辺ニ而黒雲相降りたるの由候得共、鉄山

和尚法力を以相除き、無難白かね筋被遊 御通候由申

伝候、尤代官村田源左衛門・本田七左衛門・野村少外

記、於福昌寺 御葬禮迄被相勤候段、野村伊賀守書留

之内ニ相見得候、

○義久公於于雪窓院 御法躰之次第左ニ記之、

一元龜三年壬申五月四日、伊東之軍来ニ于加久藤一敗北

矣、天正六年、大友侵ニ於日州新納院高城一是又敗北

也、

一肥後国熊本之城主城越前守親政、宇土之城主宇土伯耆

守、天草太郎左エ門尉栖本某、上津良某、大矢野弥太

郎、志岐憐仙、矢崎之城主中村一太夫、合志之城主合

志藏人親為、限部但馬守、八代之城主相良修理大夫義陽、弟相良大膳亮、田尻某、肥前国高来郡有馬之城主有馬修理大夫義純入道仙石、安徳之城主安徳入道宗泉、龍造寺山城守隆信、割府之城主赤星安房守統家、大津山川内守、龍造寺肥前守正家、小代下總守、筑後国柳川之城主蒲池近江守鑑盛入道宗雪、草野宗養、星野九左エ門尉、筑紫之秋月種實、原田伊賀守、限莊之城主甲斐上總介、阿蘇惟前、三船之城主甲斐宗運、筑紫上野介廣門、入田宗和、志賀道益、戸次源三、肥前国岩屋城主高橋紹運鎮種、宝満之城主高橋弥七郎統増、其外国主、城主、義久主之来服于旗下矣、又戰而降焉、天正十四年豊後御征伐也、

一 島津世禄云、^{ママ「録」カ}

太主義久主、使三文之和尚・鎌田刑部

左衛門尉訴九州於秀吉公、公曰大隅薩摩并肥

後半国・筑後半国・日向半国為島津之土地、日向半

国許伊東、豊前・筑後・肥後半国又添豊後賜

大友、肥前一国ハ与二中国ノ毛利一、筑前一国為二秀

吉公之分領一、令已定而將二帰二文之和尚・刑部左

衛門尉之際、此事已聞二於薩摩ノ諸將一、有レ云ヘ

ルコト九州ノ地皆属レ我主可也、不レ然則兵不ト云フ可レ

停矣、乃シ増二益軍威一、修二練干戈一、是ノ時小寺官

兵衛・仙石權兵衛尉兩將以下分二割一、国郡一上為レ

任ト而下二向ス九州一、仙石ハ渡二豊後一而向レ豊前一、

小寺ハ與二中国ノ毛利一同行シテ而差二于豊前一雖レ欲ス

ト行二ト分レ国之令一、筑前之城井某・長野・秋月・高

橋等ハ專ラ附シテ薩摩一而不レ聽二於小寺・仙石一、薩

摩ノ勢霜刃鉄騎雷轉風馳シテ大ニ破二豊後半国一、大友

左衛門尉義鎮驚^キ躁^キ、魂魄飛散而不レ知三其ノ所二防

禦一スル矣、義鎮與レ仙石議ス構二陣一於府内上原之地

一、十二月十二日義鎮・仙石與土州之長宗我部弥三郎

信親・讚州之十河隼人佐政泰等、侵二年満家久之陣

ヲ、臨二其戰一而我兵討二殺信親・政泰一、則仙石權兵

衛尉・尾藤甚右衛門尉纔ニ保レテ微命一而竟敗北ス矣、

一秀吉公數ニ嶋津氏之罪一曰ク、既ニ不レ用二分レ国之

議一而反テ追ニ散仙石・尾藤等一、又討二殺長宗我部・

十河等一、滅二亡ス筑前岩屋城主高橋紹運鎮種一、是

皆其咎罔^レ赦、然則向^テ西海^ニ以征^ニ伐彼^一、党徒^ヲ、乃渡^ニ関之戸^一、其声已振^ニ豊後^ニ、故昔日降^リ来者皆背^ニ違^{シテ}島津^ヲ傾^ニ心^一、大友^ニ耳、三月十二日薩摩之軍發^ニ野上^一、其夜^ハ留^ニ健軍^一、秀吉公^ノ前鋒来^ニ于湯之城^一、與^ニ小寺^一運^ニ籌策^一欲^レ侵^ニ健軍之陣^一、由^レ是我軍相戰而討殺^{スル}者^ノ十有六、故^ニ彼^ノ凶徒退散^ス也、同十三日早旦唱^テ凱歌^ヲ再^ヒ到^ニ于府内^ニ、自後叛^リ心謀逆者相合^テ、同十四日漂^ニ泊^シ兵船^ヲ進^ニ二沖之洲萩原^一放火^ス、則我軍走統^キ討^ニ取敵數十^一、同十五日高野木食興山上人、一色宮内少輔兩人来^テ勸^ム和睦ノ事^ヲ、而^レトモ不^レ合^ニ于諸將^ノ心^一僉謂^フ不^レ如下早歸^ニ我國^ニ以保^{ツテ}薩隅日三州^ノ要害之處^一而待^中ニハ其時^ヲ、故 義弘主與家久・忠長議島津左エ門尉歲久・同姓右馬頭征久、隨^レ兵向^レ二肥後退^一焉、義弘主・家久^ハ從^ニ日向路^一退也、到^ニ都於郡^ニ參^ニ二会^一ス 太守義久主^一、謝^ニ軍勞^一感^ニ驅馳^ヲ之勲功^一者不^レ少云云、一秀吉公之弟羽柴美濃守領^ニ二十萬騎^ノ粹兵^一、天正十五年四月六日構^ニ二陣^一于日州高城・財部之境^ニ、其陣

之數乃^シ五十一所也、 義久主・義弘主在^ニ于都於郡^一待^ニ二薩隅之援兵^一之際、美濃守陣^ハ弥增^ニ二高大^一欲^レ陷^ニ二新納院高城^一、而其兵之来^ルコト不^レ知^ニ二幾度^一、於是山田越前守有信率^テ二百余騎^一堅^ク守^ニ二其籬^一、乘^レ時欲^レ倍^ニ勢^一進往^ク者、喜入式部太輔久道・平田新四郎・上原兵部少輔・本田弥六・同姓治右衛門尉・三原下總守・同姓右京亮・野村狩野介・伊地知刑部少輔・宅萬與八左エ門尉・八木越後守・肥後宮内少輔・奈良原安藝守・同姓狩野介・宮内勝兵衛尉也、美濃守之前鋒宮部中務卿法印是城坊、小寺官兵衛尉者築^ニ二壁於根白坂^一上^ニ、四月十七日欲^レ攻^ニ二陷^一其陣^一、 義久主 義弘主出^テツツ營、隨兵中務大輔家久・島津三郎二郎忠隣・同姓圖書頭忠長・北郷左エ門尉時久・其子讚岐守忠虎・伊集院右衛門太夫忠棟・平田美濃守光宗・同姓左馬助・伊集院下野守久治・鎌田出雲守政近・肝付彈正忠兼寛・本田下野守親貞・上原長門守尚近・顯娃左馬助久虎・此志島紀伊守国貞・同姓氏部少輔義智・鎌田刑部左エ門尉・市来美作守・吉

田若狹守・稻留新介長辰・新納縫殿助・同姓越後守・

河田駿河守義朗、都合軍衆二万余人相進合戰、失利島

津三郎二郎忠隣戰死ス、其余亡者三百余也、其後興山

上人・安芸安国寺・一色宮内少輔来^テ求^ニ和諧之議

一、義久主聞^レ之嘆^テ曰、吾^レ起^レテヨリ兵^ヲ以後横^ニ行

九州^ニ無^ニ一人可^レ敵^ス、而^チ庶^レ可^レキ^ニ使^{シム}関西之地皆

為^ニ我有^ト、而^{トモ}今卒^ニ困^ニルコト於此^ニ是^レ天也非^レ人

ニハ也、古之人有^レ云^ルコト、城非^レ不^ニモ高カラ也、池

非^レ不^レ深也、委而^{シテ}去^レ之^ヲ命也、詩曰、畏^ニ天之

威^一于時保^レツ云^フ之^ヲ、孟子曰、以^レ小事^レ大^ニ者ハ畏

天者也、畏^レ天者能^ク保^ニツ其国^一、孔子曰、知^レハ

機^ヲ其神乎云云、和諧之議^モ不^レ亦宜乎、同二十一日使

二忠棟^一為^レ質、則興山上人・安国寺・一色宮内少輔

欣然^ト帰^ル美濃守之本營^ニ、而後不^レ経^レ日義久主

・義弘主婦^ニ薩摩^ニ矣、秀吉公聞^テ幕下^ノ其利、

一從^ニ佐敷^一乗船来^ニ薩摩出水^ニ矣、其地ノ人大^ニ畏^レ

不^レ免^一矢^ヲモ而反^テ為^ル郷導^一、秀吉公又乗船、同

月二十五日着于川内設陣於太平寺云云、太守義久主

欲^レ詣^{セント}秀吉公之本營^ニ、五月六日發^ツ鹿兒島^ヲ

着^ニ于伊集院^一、而^{シテ}入^テ雪窓院室^一義久主婦^ニ為^レ髣髴

ス其名^ヲ龍伯^ト、同八月到^ニ太平寺^一、因^ニ佐々奥陸

守・堀左衛門佑^ニ見^ニ于秀吉公^一、乃^シ賜^ニ備前之包

平・三条之宗近二柄^一、皆^ナ腰間^ニ所^レ親帶^{スル}之劍

也、自^ラ解^テ授^ク焉、翌日賜朱印云云、同十五日義久

主以^ニ息女^一為^レ質而賜^レ暇帰^ニ鹿兒島^一、則義弘主

・征久^{後ハ為}乃至^ニ守^レ一城^一之人^ニ皆来稱^ス賀也、

秀吉公賜^ニ朱印^一於義弘公主父子^ニ云云、

○大友家 御当家ニ由緒書写

大友因幡守様 御当家ニ由緒之事

但因幡守様當時御旗本^ニ而御座候、

一因幡守様御事大友家之正統^ニ而御座候、先祖大友左近

將監能直者、頼朝卿之御子与申説御座候得共、不慥

成儀^ニ而御座候趣、御記録之内ニ相見得申候、

一右御先祖大友因幡守親時入道道徳之女子、御家五代

貞久公之御夫人^ニ而、宗久公・師久公・氏久公之御

母堂^ニ而御座候、

一同御先祖大友豊前守政親之女子、御家十一代忠昌公之御夫人^二而、忠治公・忠隆公・勝久公之御母堂^二而御座候、

一天正五年伊東家御攻亡、伊東家豊後江致退去大友家を頼被居候処、同六年之秋、因幡守様御先祖大友左衛門尉義鎮入道宗麟・其子新太郎義統、伊東家を為令復入八万之人数相催、十月廿日日州高城を取囲候、城代山田新助有信五百之人数^三而城を守、以之外危相見得候故、嶋津中務家久事吉利下総忠澄・鎌田出雲守政近・比志嶋紀伊国貞以下之諸將を引率シ、城に籠候処、敵兵攻候事甚急ニ御座候得共、家久強ク防キ罷在候処、龍伯様三万之軍兵^二而日州^二被成御發向、十一月朔日日州佐土原^二被成御出陣、大友之陣を御攻可被成与思召、其隙を伺被成候、同十日之夜、惟新様御奇計を被運、伏兵を設敵首五百余御討捕被成候、左候而松山之陣を放火被成候而御人数を被納候、同十一日、龍伯様目白坂江御陣被居候、此日伊集院下野久治為前鋒挑戦得利候、翌十二日、両軍相交高城之麓下水流^二而大

合戦有之候、然処嶋津右馬征久・同図書忠長軍を進横ニ討之候故、敵軍乱騒候所を、中務新助城門を開突出候付、義鎮父子大ニ敗走いたし、惟新様并中務以下之諸將致追討、高城より至美々川七八里之間、屍無之所茂なき様^二候、人馬河水ニ溺死候者数不知候、翌十三日、龍伯様凱歌被執行、同月廿八日鹿兒嶋江被成御帰陣候、右通大友家御領内ニ攻入候儀、御鬱憤ニ被思召、天正十四年以新納武蔵忠元計策を被廻、十月十四日豊後江軍を被出候、惟新様御大将^二而嶋津左衛門歳久・同三郎次郎忠隣・嶋津右馬征久・嶋津圓書忠長以下之諸將致從軍、御人数三万七百余^二而肥後国より豊後国南部へ御攻入、島津中務家久一万余之人数^二而日向より梓山を越豊後三重ニ討入候、龍伯様^者同月十八日御進発、日州塩見城^二被成御座、御下知被成候故、惟新様并中務両方^{より}軍を進挾攻候ニ付、大友家之一族悉致降参、中務事義鎮之居城府内之近所、利満之城迄攻入稠敷取囲候、然処是より前以仙石権兵衛・長曾我部弥三郎・十河隼人佐・尾藤甚右衛門、殿

下 秀吉公之命を請、為和睦豊後ニ来候處、不図此合戦逢大友之軍ニ加リ、大軍ニ而十二月十二日、中務備候利満之陣に攻来候故大合戦有之、長曾我部・十河兩人戦死、仙石・尾藤ハ逃去、大友義統者府内之城ニ逃入、父義鎮相共ニ府内を捨而高崎と申所致退去候故、翌十三日中務府内ニ攻入候、大友父子高崎を去り、豊前国龍王ニ致出奔候、夫々諸所御攻被成候内、天正十五年秀吉公九州ニ御進發之故、此御方御人数者御帰陣被成候、右通大友家、往古者 御家ニ御身近キ御由緒茂御座候處、天正年間以來節々御迫合有之候ニ付、右之儀者大友家ニ茂相知有之筈ニ御座候、

右書付者、御用ニ付御記録奉行より被書出候書留反古之内ニ有之候を、為被写置之由ニ而被持居候人有之候ニ付、若キ人聞覚ニ茂可成事与鹿兒島土被写置候故写之、

○絵図方之儀ニ付 公義江御差出被成候御書付之内、被書写之、

▲薩摩守家之元祖嶋津豊後守忠久者、右大将頼朝卿之長

子頼家卿・実朝卿之庶兄ニ而御座候、母者此企判官能員之妹丹後局ニ而候、密妾懷胎之儀を御台所嫉妬被成候ニ付、丹後局上方江趣、摂州住吉江被參掛候節産氣催候故、旅宿を求候得共許容仕者無之ニ付、不得已住吉社辺之於石上男子を被致誕生候、是則右之忠久ニ而御座候、

此時雨降り暗キ夜也、其時狐来テ狐火数多相見得、此光リテ御誕生之御助力ト成リ、是則住吉末社ノ稻荷大明神也、依之島津ノ御家稻荷ヲ氏ノ産神ト崇ラレ、是ヨリ雨ヲ御家ノ吉例トス、又誕生石トテ于今住吉ノ社辺茶屋ノ前ニ有之、其辺ノ茶屋ニテ薩摩ノ誕生石ト相尋ヘシ、ヨク教之也、

折節、近衛基通公御社參被成候處、社辺ニ児啼相聞得候ニ付御人を被遣被為見候得者、右ノ次第ニ候故取揚候様被仰付、京都江被召列候、右之由緒を以近衛様御家族と罷成、于今旧好之一筋乍憚断絶不仕候、当薩摩守より五六代以前之先祖共迄者、任官受領等之節者、近衛様御推挙ニ而御座候、丹後局事其後惟宗民部

太輔廣言ニ嫁候ニ付、忠久繼父廣言ニ被育、惟宗之姓を冒罷在、元暦二年忠久七歳之時始而謁頼朝卿ニ候処、為食録勢州波出御厨内、同国須可御庄を被下、又翌文治二年忠久八歳之時、島津御庄薩摩大隅日向三ヶ国之被補地頭職ニ、同年八月薩州江下向仕候、右之通、幼稚ニ有之候得共、頼朝卿夷子之故、早速厚祿為被下置事ニ御座候、頼朝卿之御下文数通于今有之候、一忠久より当薩摩守ニ到廿二代五百年余ニ罷成候得共、薩隅日之儀者由緒不相替筈与存罷在候、薩摩大隅日向三ヶ国を嶋津御庄と申候由、頼朝卿御下文ニ茂相見得申候、然者嶋津家ニ付而ハ、薩隅日之三州者名字之地ニ而御座候、勿論御代々公方家之御証判頂戴仕置候、

一中古より者日向之内ニ小地を被遣置候御衆茂有之候得共、其以後茂日向国地頭職之儀、往古ニ不相易薩摩守家ニ被仰付候、公方家之御証判数通、其外日向国支配之儀ニ付而奉書等于今有之候、

一当薩摩守より五代之先祖修理太夫義久、九州ニ手を付

候ニ付、天正十五年、秀吉公御自身御下向被成、終ニ者御和談仕候、其節者天下御敵与罷成候得共、以前より之一筋を被相立、薩摩大隅一円并日向半国余、早速被下置候、

一日向之儀者国之中程南北ニ一筋大山有之ニ付、東ノ方を山東、西之方を山西と唱来申候、山西者一円薩摩守領分ニ而、山東茂百六七十ヶ村程領分有之候、島津左京居城佐土原茂山東之内ニ而御座候、当分者御朱印別立而被下置候得共、此地茂以前者島津中務太輔与申候庶流之者江分遣置候地ニ而御座候、其後左京先祖佐土原江罷在候儀茂、薩摩守先祖修理太夫義久より權現様江奉願為被差置事ニ而御座候、山東ニ者当分伊東出雲守様・秋月長門守様・三浦壹岐守様杯之御領地迄ニ而、其余者御領少々有之、其外日州半国程者于今薩摩守領分ニ而御座候、

一正保年間、絵図被仰付候節者、日向国清絵図大隅守へ被仰付候ニ付而、日州御持合之御衆各御領分之絵図、薩摩守城下江以使者被遣、絵師迄被添遣、此方絵

図役人共出合吟味仕候上、日州之清絵図相調、絵図并箱ニ茂大隅守名書仕相納置為申事御座候、其節者大隅守事未薩摩守と申候、以上、

▲薩摩守先祖嶋津修理太夫義久入道龍伯儀、名護屋御在陣以來、權現様別而御心安被仰下、慶長三年伏見之宅江被為成、終日御機嫌能為被成、御座儀杯御座候、一島津兵庫入道惟新儀茂龍伯同前ニ御心安被仰下候、高麗より帰朝之節者、惟新宅江被為成御祝儀被仰下、御吉例之御腰物之由ニ而国俊之御刀拝領仕候、且又中納言家久江長光之御腰物被下置候、

一家久家来伊集院幸侃与申候八九万石之分限之者、逆意有之段、權現様兼而被聞召及候、依之於伏見幸侃成敗仕候節、權現様より井伊兵部少輔を被遣、若あふれ者茂候ハ、御加勢可被下哉、様子見届參候様ニ与上意之由ニ而、士式拾騎計召列被參候、

一幸侃事者兼而石田治部少輔与懇意ニ有之候処、成敗之儀を六ヶ敷申成候ニ付、家久暫高雄之長谷寺江致蟄居候処、權現様被聞召付、家来致成敗候儀、奉行中構

有間敷事ニ候条、早々可罷帰旨、伊奈図書頭を以被仰下、且又中途為警固五十騎程被遣候、

一幸侃世倅源次郎、居城日向国都之城楯籠十二之取出を構候ニ付、龍伯より人数を差越、都之城を押置、地形之絵図を相調、家来喜入大炊を以委曲申上候処、權現様御前江被召出、絵図之上ニ而委細ニ被聞召上、地之利を得たる敵にて候間、卒爾ニ攻申間敷由ニ而攻口之手配等、御差図被仰下、別而御懇成上意ニ而御座候、

一源次郎都之城江楯籠候ニ付、從權現様為御見廻山口勘兵衛両度迄被差下、段々御懇成御差図有之、且又寺沢志摩守事御内意有之、都之城江差越候、

一諸大名誓紙差上候節、惟新誓紙之文言、御感被遊、其後、權現様より御誓紙被遊、惟新江被下置候、

一関ヶ原御陣以後、井伊兵部少輔より与力勝五兵衛・山口勘兵衛・与力和久甚兵衛薩州江差下、御前之儀取持可申旨被申越候ニ付、兵部少輔・勘兵衛方迄龍伯并家久より、鎌田出雲と申者差上を宜頼存候趣申遣候

処、則 権現様御前江出雲を被召出難有 上意有之、
御脇差拝領仕候、左候而本田佐渡守・山口勘兵衛連署
之誓詞被差越候、

一 龍伯病氣ニ有之上洛難叶ニ付、龍伯并家久連署之誓詞
相認、慶長七年之春、島津凶書与申者を以差上候処、
同四月從 権現様龍伯江宛書之御誓詞被成下候ニ付、

家久上洛仕候、折節 権現様関東江御帰府ニ付、市来
八左衛門と申者を以伏見江罷上り候段、本田佐渡守迄
申達候得者、早速御内書被成下、同年十二月廿五日
権現様御入洛被遊、同廿八日 御目見得被為受、御馬
式疋・御鷹二連拝領、翌年正月月中旬御暇被下候、

一 備前中納言秀家薩摩江落下り罷在候ニ付、一命を御助
被下度旨、御訴詔申上置候処、本田上野介を以達 上
聞、秀家事叛逆之棟梁被助置へき者ニ而無之候得共、
家久訴詔之儀難黙止 思召候ニ付被有死罪、豫州久能
江被差置之旨被 仰出候、

一 慶長十年龍伯病氣大切之由達 上聞、為御尋 上使祐
乘法印薩摩江被差下候、

一 琉球国王 権現様江御禮可申上旨申遣候得共、不致領
掌候ニ付 権現様江申上置、慶長十四年之春、家久山
川と申湊迄出帳仕、人数者琉球江差渡、早速退治仕、
中山王尚寧致降参候ニ付、則 権現様江申上候処 御
感不斜、則御感状被成下、琉球国永々可領之旨被 仰
出、龍伯并惟新江茂銘、御感状被下置候、

一 同十五年家久中山王召列罷上り、八月六日駿河江参府
仕、同八日中山王召列登城仕候処、御代始ニ異国を相
從、其上国王を召列候事、無比類働 思召之由、御懇
之 上意を蒙り、同十八日於 御城御饗應御酒宴之
上、常陸之介殿・於鶴殿江御仕舞被仰付、段、結構成
上意貞宗之御腰物大小拝領仕、御暇被下候、

一 同廿五日家久江戸江参府仕候処、段々上使被成下、同
廿七日又 上使を以御米千俵拝領被仰付、同廿八日中
山王召列登 城仕候処、早速異国を相從国王を召列候
事、御喜悅不大形由御懇之 上意を蒙り、九月三日於
御城御饗應、同七日於御数奇屋 台徳院様御手自御茶
被下、同十二日ニ茂登城仕、同十六日又御饗應之上貞

宗之御腰物并御馬、且又桜田之屋敷拝領被仰付、御暇被下候、

一同十六年龍伯死去仕候ニ付、楯甲斐守右衛門為 上使

薩摩江被差下、御書并御香奠銀千枚拝領仕候、

一元和二年四月八日 権現様御不例及御大切、家久儀加

賀利家・仙台政宗と同じく駿河 御城御奥江被為召、

弥天下安全之儀御頼被成之旨 上意ニ而、家久江いや

正宗之御脇差拝領仕候、

一同五年之夏惟新病氣為御尋、篠崎吉右衛門薩摩江上使

被差下候、

一同七月廿一日惟新死去仕候ニ付、花房五郎左衛門薩摩

江上使ニ被成下、御書并御香奠銀千枚拝領仕候、

一同七年二月四日家久帰国之御暇被下候節、御脇差并銀

五百貫目拝領仕候、

一家久内々一方之御奉公仕度存念候ニ付、国許之妻子江

戸江引移可申旨奉願候処ニ、天下安全之御奉公不可過

之由 上意ニ而、途中之御扶持米被下置中途段々御馳

走、且又大坂川筋罷通候節者船あらけを被仰付候、右

之一筋を以頃日迄も其通被仰付候、此後諸大名妻子江戸江段々為引移由御座候、

一寛永七年九月十八日、桜田屋敷江 大猷院様被為成拝

領物品々有之、家来島津式部・島津玄蕃於 御前諸大

夫ニ被仰付、御腰物・御時服・白銀拝領仕候、

一同月廿一日 台徳院様被為成 拝領物品々有之候、

一同十四年家久病氣為御尋、 上使新庄右近太夫薩摩江

被差下、御鷹之鶴拝領被仰付候、

一同十五年家久死去仕候ニ付、 上使能勢小十郎薩摩江

被差下、御書并御香奠銀五百枚拝領被仰付候、

一同年正月十三日大隅守光久 御城江被為召、家久於国

元病氣之由被 聞召候間、早々致帰国看病可仕候、且

又肥前島原一揆ニ付、為御城代松平伊豆守被遣置候

間、若不意之儀茂致出来候ハ、可合力之旨、阿部豊後

守を以被仰付候付、光久即日発足、直ニ島原江罷越、

上意を蒙リ候旨伊豆守江申届、其後帰国仕候、

一同年四月光久家督之御礼申上候処ニ、 大猷院様御側

近被召寄、家久相果候儀残多被 思召候由、御懇之

上意を蒙り退出仕候処、家来島津又八郎・島津弾正・

島津下野・伊勢兵部・鎌田出雲・顯娃長左衛門・新納

右衛門・喜入休右衛門・相良奎之助 御前江被召出、

中納言仕合残多被 思召候、不相替領国之仕置可入念

旨 上意之由、土井大炊頭於 御前申渡候、

一同十六年光久家督以後始而帰国仕候、依之為御祝儀翌

十七年之春、 上使佐々權兵衛薩摩江被差下候、最早

為參勤備後軺迄致着船、於彼地權兵衛行会、 上意之

旨奉承知候、

右式通之御書附者、絵図方之儀ニ付 公義江御差出

被成候御書付之内ニ有之候故、若者共為可存知にと

て為書写置之由ニ而被持居人有之、其志尤之事与我

又同意にて、鹿兒島士被写置候故写之、

▲本田佐渡守様 山口勘兵衛様御起證文写

敬白起請文前書之事

一 龍伯殿 少将殿御身命之儀、恙御座有間敷事

一 御国之儀者兼日如御約束相違有間舖事

一 兵庫頭殿御事右之御双所御入魂之上者、無相違様御執
成可申事、

右起證文於相背者

梵天帝釈四天王、惣而日本國中六十余州之大小之神

祇、別而伊豆箱根兩所之權現 三島大明神 八幡大菩

薩 天満大自在天神 部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者

也、仍起請文如件、

本田佐渡守

慶長六年八月廿四日

正信

山口勘兵衛

直友

島津修理太夫殿

羽柴 少将 殿

家康公曰、義久不_レ催_二上京_一者以_レ我為_レ欺乎、神

不_レ享_二非礼_一胡為_二両舌哉_一、逐_二書_一誓文_一賜之、

右本書鹿府大乘院有之、

○国府士鎌田刑部左衛門跡江有之候書留写

覚

▲祖父兵部太輔 御家之御重物 龍伯様 惟新様 又市
郎様御三殿江進上仕候留書御座候間、書立差上申候、

一 御系図巻卷

一 但御家古与リ相傳候御系圖ニ而御座候事、

一 御文書式百六通之内

一 但頼朝公御判紙三通有之候、

一 霰之御幡一流

一 但勝浦合戦義経公為被差御幡之由ニ而、

一 御當家一物与申傳候事、

一 御母衣 忠久公御母衣之由申傳、角之箱ニ入、

一 御簾一流 忠久公御簾之由候事、

一 熊野太刀一腰為所持申由被聞召上候而、御望之由

強而被仰付候付、於鹿兒嶋平野入道宗堅御取次ニ

而、龍伯様江進上申候事、

一 源氏之鬚切之御太刀 龍伯様江進上事、

一 鶴ヶ作之御太刀一腰 龍伯様江進上事、

一 八幡翁与申御太刀一腰 龍伯様江進上之事、

一 血吸之劔

但九寸五分、赤銅金具、けほりニ鳩有、頼朝

公御定持之由候、物を差シ血出ルことなし、

依然血吸与号スといへり、

右之名刀為所持仕由被聞召上、御望之由被仰下候

ニ付、毎々ニ、龍伯様江致進上候事、

一 勝光之御腰物 又市郎様江進上之事、

一 但関東小田原江御出陣之砌、御所望之由被仰下

候ニ付、致持参進上申候事、

此外ニ御太刀御脇差拾七柄 龍伯様 惟新様御両

殿江進上申候、作名小名不相見得候ニ付、一々ニ

不及書立申候事、

一 牧溪和尚之眞筆墨繪之觀音

一 但三幅一對 龍伯様江進上之事、

一 茶臼釜 惟新様江致進上候事、

但八角茶臼之形眞似かいたるにより、茶臼釜と

号由候、頼朝卿之御釜之由候、於帖佐進上

之事、

一 大白瀧与申琵琶一面

但白木也、撥面ニ唐波ヲきせ、瀧水を白ク書也、

龍伯様江進上之事、

一 小白瀧と申琵琶一面

但白木也、撥面ニ唐波ヲきせ、瀧水を白ク書

也、大白瀧ヨリ少シチイサキニヨリ小白瀧と

号由候、

龍伯様江進上之事、

一 松風と申琵琶一面 龍伯様へ進上之事、

比三面之琵琶者、從古帝王之雖為御重物、多田

満中之代マ源家相傳、御當家ニ相統之由申傳

候、右三面之琵琶者、都方目明相下、如何程ニ

茂買可申由細々申候得共、題目之重寶を他國江

出申儀如何存申候而、所持仕置致進上候事、

一 先年我等方被召上候御文書拾通之内被 聞召

上、強而被 仰付候御書物者、嘉禄三年六月十八

日、 忠久公於鎌倉御逝去之日、 御自筆ニ為被

遊三ヶ國御讓狀一通、

如右致進上候、以上、

辰三月廿一日

加目山三郎兵衛

右鹿兒嶋士加目山三郎兵衛殿事、國府士鎌田刑

部左衛門庶子家、鹿兒嶋士鎌田弥右衛門殿嫡

子、加目山家猶子ニ被罷成、右書留加目山家ニ

有之、鎌田外記代ニ三郎兵衛殿右書留写被遣

候由、刑部左衛門被官村田喜左衛門子、當分鎌

田典膳殿家来村田庄右衛門所持ニ而、右之趣致

咄候ニ付、珍敷書留故写之、

○鎌田刑部左衛門系圖写

(朱書)

大外記
筑前守

法名久岳宗昌庵主

政策

心

日向國新納院財部地頭被仰付罷移、知行
廿九町八段、依無志子政年ニ家渡、

(朱書)

尾張守入道寛栖 法名嘉翁勝觀庵主

政年

御奉公之事御公義工儘相知馬関田地頭被仰付、

(朱書)

刑部左エ門 母山田

法名勢岳本隆居士

政廣

秀吉天下ニ九州之事ヲ訟詔ニ、隅州正興寺文之和尚ト上洛申候
刻、国光御刀御ハヲリ巻物拜領也、地頭志布志、

女子 一腹
政 大炊助 他腹
女子 一腹 於飯野戦死

李之助 母阿田大煩息女
政常 依無一子二男相渡

政良 次郎五郎 一腹
外記 依無一子弟政直二相渡、
法名明雄春光居士

政直 慶長八癸卯加増卜知行七拾一石被下

一 外記存命之内二同名又七郎江我等系圖可被返之通申候者、伊勢兵部少輔殿色、指引殿として鎌田名字之指引心得申候而、伊勢殿伯様江申上候處二不慮二外記相果、其後殿様御死去依為被成、繼圖之入組事濟不申候、
鹿兒嶋御諏訪居頭役鎌田名字二廻來候二付御老中柁山權左衛門殿・比志嶋紀伊守殿の御書中を以仁指可申通外記二被仰付居頭役同名出雲守江申付被相勤候、
玄番助 一腹 法名傑山芳英庵主

政房 次郎五郎外記 母野村加賀息女 法名傳室利心居士
女子 元禄六歲酉九月九日死去生年未八十七才

政康 次郎五郎 刑部左工門 後次郎右工門 母中村六兵衛息女
源助 李之介 一腹
法名天山祖翁居士 宝永七庚寅九月十七日死去 生年午八十一才

政為

法名頼翁了悟居士 宝永五戊子四月十六日死去 生年戌七十五才

右式通鎌田典膳殿家来村田庄右衛門格護、

○國府新城縄引帳写

▲國府新城惣廻リ間數八百四十八間、町ニノ十四町八間、

但一間六尺三寸相究縄引、

右國府城古来々新城与申傳候、四方岩掛、高サ廿式

尋又ハ廿三尋、高底有リ、城内松山、杉 楠其外雜

木大木竹山有之、

一 大手之古路之俣縄引始、

一 未方八間 左右竹木山、此縄頭左外備より瀬戸少

有、

一 申西間式十間、此縄頭十三間目々右外廻リ口小路

有、左右共ニ古屋敷、左右竹山、

一 未申間二十間 左右竹木山

一 未申方十一間 左右竹木山

一 西方二十間 此縄頭十間目々左小路外廻リ出

	合少ツ、登ル、	一	同百四拾石七斗四升	肥後勘兵衛尉
一	同方二十間 左右竹木山、古屋敷有、	一	同八拾五石	大迫四郎兵衛尉
一	酉戌間廿間 此繩より坂元屋敷有、是より平地、	一	同百貳拾壹石八斗壹升六合	安樂伊豫守
一	酉戌間十六間 左右共より古屋敷、	一	高六拾五石六斗二升壹合	市來宗右衛門尉
一	子丑間二十間 右同斷	一	高七拾九石六斗貳升三合	富山五郎右衛門
一	同方六間 此繩頭十文字与云所之右小路、	一	高六拾五石	荒田助右衛門
	但道末より用水有、子ノ方より當て生	一	高五拾六石七斗壹升三合五勺	市成弥兵衛尉
	竹ト云所六十間程有、寅ノ方當	一	高七拾五石七斗	南雲順右衛門
	テ百間程より牛ヶ迫ト云所有、	一	高八拾七石貳斗四升六合	長崎仙右衛門
一	酉戌間二十間 左右竹木山、古屋敷之跡有、	一	高七拾五石一升八合	永利傳左衛門
一	同方十四間 右同斷	一	高七拾石八合	高野善左衛門
一	同方二十間 此繩頭より左リ馬乗り馬場有、右	一	高七拾四石九升貳合六勺六才	奎田九兵衛尉
	十六間目右忍ヶ尾通小路有、	一	高五拾貳石壹升八合	有川六弥左衛門
一	同方十五間 此繩末十五間目左外廻リ入口山	一	高百六拾壹石五斗六合七勺	蒲地帶刀長
	道有、岩渕之まより左右山有、	一	高貳拾五石七斗三升	河野仁兵衛尉
一	申酉間廿間 此繩頭より少々ツ、下ル左岩かけ、	一	高七拾石	坂本豊前守
	異本 国府新城繩針帳拔書	一	高六拾四石八斗四升六合	松下番左衛門
一	高三百六拾石貳斗壹升 小原治部左衛門	一	高四拾五石五斗六升	勝目八左衛門

一 高百石九斗貳升三合三勺 肥後壱岐守

一 高三拾壱石五斗三合 山崎治部少輔

一 高四拾六石 田代仁右衛門

一 高八拾六石貳升壱合 久留弥左衛門尉

一 高九拾石壱斗 吉田九郎右衛門

總合高貳千百三拾石九斗九升六合壱勺六才

右貳拾四人新城江被召移候、

新城山留衆 井上主馬丞

井上休吉

井上助兵衛

井上彦七

右四人新城山留衆

寛政四年壬子正月十六日書之、市成氏武昭 右卷末ニ

如此記シアリ

明治二十一年三月三日 國分衆中市成氏以本写置候

也、 一三

(國分新城繩引概統き)

一 同方七間 右同斷

一 亥方十三間 右同斷

一 酉戌間十一間 此繩頭左山、右岩かけ、

但御番所有所迄

一 午未方八間 左右山、左山平外廻道有、

一 亥方七間 此繩末からめての口・かきかけ

口迄繩引留、

▲ 東大手口よりかきかけ迄貳百九十六間、遠釘はり本か

きかけ口、

一 未ノ方ニ當て涼松、目掛七十間程ニ有、

一 子方當てしのびが尾、百廿間程ニ有、

一 此岩高底二十五間程、

一 ひき、所十七間程、岩より下竹木山、惣様かけく

る輪、

▲ 國府新城金剛寺之上岩測り横ニ繩引、

一 丑方廿間 此繩登ル此繩末より平地、

一 同方廿間 右同斷

一 子丑間廿間 此繩頭を左右古屋敷之跡有、

一 同方廿間 右同断

一 同方六間 此所を忍ヶ尾繩筋、

一 亥子ノ間廿間 左右古屋敷之跡、

一 亥子間廿間 右同断

一 同方四間 右同断

一 寅卯間十間 此繩頭を古屋敷是まで、

一 子方廿間 右同断

一 同方六間 右同断

一 丑寅間廿間 此繩右ニ當て猫ノ尾有、

一 丑間十八間 しのびか尾の東ノ谷ニ而繩引

留、

一 十文字繩筋を六十間用水出ル、此流レ寅卯之間

當テ流ル、牛ヶ迫江用水過分ニ出ル、丑寅ノ間ニ

當て十文字、繩筋百間程、木屋後のふちより少

下リ、

一 寅卯之間ニ當て茶臼か城三百間程ニ有、高サ新城
を見入候様有之、此所を清水隈邊之城、子ノ方ニ

當テ四百間程ニ有、曲輪之四壁竹木山、田畠清水

人家有、東者五社大平續人家なし、南西者國府麓

人家續田畠多シ、御城山内杉松楠雜木竹山有、

一 外を城内ニ通用之道大手之口老筋、

但大手口ノ下を清水江通ル小路有、迫道也、

一 東大手ノ口を北忍か尾、猫ノ尾迄間數五百十間、

町ニシテ八町三十間、

▲ 東大手口之事

一 御門立候跡有、左右岩掛道瀬戸横二間程少々登

リ、何程も人馬通用有之候、御門を北廿間程ニ深

ほき有、

一 御門前瀬戸道越廿間程ニ小陣と申所有、此所二之

丸之跡と申傳候、なるほど平地横四十間程、豎六

十間程と見及申候、四方雜木竹山、

一 大手口を辰巳間當て目掛百間程ニ、大平と申取揃

有、

一 大手口を辰方ニ當て陣崎と申所有之候、此所遠目
番所立候由申傳候、四百間程ニ相見得候、

▲用水之事

一 生竹と申所、過分用水出申候、

但城内十文字の七十間程子丑間當て有、

一 うしか迫と申所、過分用水出申候、此水流末清水

江出申候、

但城内十文字の百式十間程寅方ニ有、

▲からめての口事

但此所かき掛とも申傳候、御門立候跡有、

一 高サ九尺程ニ切さけ有之候、此切さけ梯橋をかけ

候て、何程も人馬之通用可有之与相見得申候、

一 御門外ニハ左右ほき、

一 御門立候所ニ、瀬戸岩きさ岩掛、高サ右壱丈、左

式丈五尺計御座候、

▲忍びか尾之事

一 此所ハ大手口も式百廿間程戌方當て有之候、此所

者人之通用ハ有之候、然共繩かつらに取付申候

而、壱人ツ、登ル所ニ而御座候、

一 茶臼城ハ新城を見入申様ニ有之候、

但野岡、松少有、此所ハ遠目番所立候由申傳候、

右茶臼の城外ニ、城内を見入申高キ所ハ少も無之

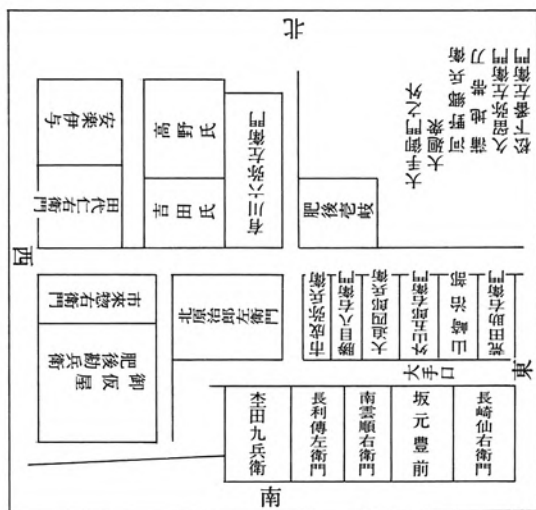
候、

一 城の寅方ニ當て目掛百七間程ニ、五社大明神与申

宮有之、四方杉山、

但城と五社之間ニ畠有、太底畦式三町程与相見

得申候、



一 城近邊江茶臼の城より外ニ城内近見入程之高キ山野
無御座候、

一 取添大平并茶臼か城用水有之候、

一 城近邊ニ川池沼無御座候、

一 外曲輪跡當分竹木盛長并藪山所々畠有之候、

右元禄十二卯年二月十五日檢使永山与右衛門殿・

牧仲太兵衛殿、繩曳帳内写之、

▲龍伯様国府新城江被召移候人数屋敷刻左ニ記之、
(割カ)

大口口御門万事差引 河野郷兵衛

長崎仙右衛門兩人江被仰付置候

右絵図所衆中所持之人有之、我等小二才時分写置候得共
持主致失念候、所衆中勝目助八方江も右絵図所持ニ而候、

新城

○五社大明神

別當

金剛寺格護

右五社大明神者、二之宮大明神・大穴持大明神・宮之

浦大明神・劔大明神・止上大明神、御神躰八面之神

鏡、天文四年本田氏勸請、慶長六年 龍伯様御崇敬

故御再興棟札有、天文四年より寛延三年迄二百十六年
ニ成ル、

▲五社御神躰、神鏡八面銘々佛像御姿ニ而御座候、裏ニ
文字彫付有之、神鏡差渡四寸五部

▲鏡一面 隅州五社大旦那本田薰親
天文四年十月吉日

▲鏡一面 大宮寺
天文四年乙未

▲鏡一面 大願主本田盛親 子息次郎丸
天文四年乙未

▲鏡一面 作者曾木重安
天文四年乙未

▲鏡一面 本田長壽丸
天文四年乙未

▲鏡一面 勸請師臺明寺權大僧都寛遍
天文四年乙未十月日

▲鏡一面 作者鎌田政宗
天文四年乙未

▲鏡一面 筆者竹下 作者御濱宗房
天文四年乙未

右寛保三亥年金剛寺大圓法印被致開帳候処ニ、右之

通文字彫付有之由承候、

一 慶長六年 龍伯様御再興棟札写

聖主天中天 迦陵頻伽聲

奉再興新城五社大明神御宝殿一字、

哀愍衆生者 我等今敬礼

右當社再興之旨趣者、昔初於新城鬼門之方角建高靈之社壇、崇敬余異者也、然後末之今時破損朽擗、^(瘞カ)故

国主之芳命蒙臣從仰於巧匠番匠下知、而以月於重日

積來、而功力已至而造營成就畢、依之撰宅嘉會之辰

而修搆於棟上、而奉請神明於玉殿御鎮座已畢、寔是

曾為御武運長久、曾亦為國家安全意願也、若忝者、

君主 藤原義久朝臣御息^災延命、而同壽永於龜鶴御

武運保千秋萬歲長榮耳已

慶長六年辛丑十二月十八日

當老中

山田越前守入道有信

小工等

日野大膳正重正

大工

長田七郎左エ門尉良助

高野善左エ門尉重勝

社衆

谷口阿波助秀家

長濱十良左エ門師近

以上兩三人取成衆也、

當座主權大僧都信秀^{シルス}認之、

宝殿三敷式間小板葺 一 拜殿四敷三間茅葺

但茅袋葺有

右式行慶長六年 龍伯様御再興被遊候処ニ、及廢懷^(壞カ)

候ニ付奉訴、享保七年寅十月、一往檢者附御修甫被

仰付、造替御普請有之候、

一 善神王兩社

一 石華表但權現之元ニ有リ

一 御祭五節句并十一月十五日御神供差上、別當勤行、

社人罷出御神樂相勤候段、金剛寺十七世大圓法印^ハ

承候、

一 十一月十五日御祭御司國府衆中、

一 御祭米八斗七升五合年々于今被仰付候、

一 下屋敷^{十五間半} 八畦廿三步

大ツ沓俵沓合

金剛寺格護

一 下屋敷^{十一間半} 五畦

大ツ式斗 谷口八十郎格護

一 元禄十一年寅十一月書留写

五社大明神者、止上大明神、二宮大明神、大穴持大

明神、宮之浦大明神、劔大明神、

右天文四年、本田氏勤請建立之由、御正躰文字相見

得候、龍伯様御崇敬被遊候、慶長六年御修甫之棟

札于今御座候、

右元禄十一年寅十一月國府賦所書留ニ相見得候、

清水中諸由緒書帳内写

五社神社 祭神十六坐并門守善神王二坐、

右神名者、新城五社大明神ト奉申候、御神跡者一ノ

宮止上權現上ノ宮ト申也、二ノ宮大明神下の宮ト申

也、大穴持神社、宮ノ浦大明神、劔大明神、此五社

ニ賀茂ニ春日ヲ添テ、城ノ鎮守トシテ鬼門之方ニ往

古ニ勸請有之候由、七社御坐候テ、五社大明神ト奉

申候、右御神社者 龍伯公國府御居城之節、慶長六

年辛丑御再興有之候棟札有之由、右新城者 龍伯公

御在城之砌、上古隼人城ト申処ヲ新城ト御改玉フト

申傳ヘ有之候、此神社ハ隼人之敵心ヲ為鎮ノ守護神

ト申傳也、

右神社者、國府祈願所金剛寺座主、神前勤方ハ清水

北辰宮社人谷口家ヨリ相勤也、御免ノ社家屋敷一ヶ

所被下置候、

一 五社領高五石之内御目錄其外御書附社人方ニ格護

也、右本書、清水衆中濱田平左エ門所持諸由緒書之

内写之、

五社領

隅州弟子丸村曾小川村上小川村之内

もすわら 中田 一段 一石四斗 九郎兵衛先

上白木 上田 一段 一石六斗 同人

よない追 下田 一段 一石

き見まつ 上田 八畦十歩 一石一斗六升六合

合五石余

右之地無親疎割合、座主・祝子・内侍三人ニ而被致格

護、年中八度之御祭礼如旧例堅固ニ可被相勤之者也、

山田越前入道

慶長九年十二月廿八日

伊集院下野入道

抱節書判

五社領五石之内名寄目錄

向花村之内

下手町五ツ九畦廿四歩之内四升時
下田四畦廿七歩

源助

粗三表式斗式升五合

外三升三合三勺過

高老石式斗

右之地相當ニ御祭、本ノマ、可相勤者也、

喜入大炊入道

慶長十九年八月朔日

紹嘉印

祝子太夫

右本書清水北辰宮社人谷口彦左衛門、元文二年丁

巳二月五日清水神社改帳之内写之、

○大人之穴

右數根宗廟劔大明神詞官瀬戸口但馬、元禄十一年寅十

一月廿五日神社由緒書差出留写、

劔大明神御殿拝殿・善神王両社、石鳥居御修甫御祭米

年三兩度被下候、右大隅五社之一社韓國宇津峯神社、

上代者宇津峯頂上ニ御立被成候、中古ニ御殿ヲ其下ニ奉

移、劔大明神と申候、彼宮所も年曆久敷御座候哉御神

木等物旧候、劔大明神と申事、往古國府新城之主熊周

日向之都を奉背候故、第二皇子小白命謀略ヲ以て被誅

候、依之御名大和武命と奉申由候、熊周之裔孫ニ大人

弥五郎と申魔人出生仕リ惱人民候を、源氏為友御下向

ニ而退治之御謀被成候得共、新城之傍ソバ大穴ニ閉籠リ、

輒不及人力ニ候故、偏ニ奉頼神慮ヲ、奏神樂妓樂催感

候處、一ノ宮止上權現、二之宮大明神、大穴持之神

社、宇津之峯神之神社、宮浦神社御出現ニ而、神謀被

遊候、弥五郎魔性やわらき穴より出遠見仕候を、為友

神變奇特之威ニ乘て忽打亡給ふ、弥五郎髻四肢を切て

國府之内所々ニ埋被崇置候、末世成靈神と當世迄其し

るし御座候、為友公も是より鎮西八郎と成給ふ由候、

大人之穴を惡災袋と申候、神樂所を拍子川と只今も申

候、右退治之折節、宇津峯神就中靈驗新ニ劔のことく

現シ給ふ、故に劔大明神と奉唱由候、魔性退治之神達

を五社と申事 忠久公御下向之時、本田殿國府新城を

御持ニ而、近方皆領地之時、御城鎮守として新城鬼門

之方に勧請被成候、五社大明神と奉申候、御神躰ハ右

之五神ニ賀茂・春日を添而七社御あがめ被成候、件之

由緒を以、義久公も劔大明神を弥被遊御取持、御再

興結構ニ御座候処ニ、御代相替り中絶ニ而、以之外破

壞仕候ニ付、右之由緒を以て様子申上候処ニ、寛文九年己酉十一月相達、寺社御奉行嶋津出雲殿御證文、川上七左衛門殿御取次、當地頭桂式部殿御請取ニ而、御檢使之上宮所麓松原江御造替被成候、往古之神領下小川院と申傳候、御供田有村門、大宮司堀之内門之事、只今も小川名江申傳御座候、劔大明神格護詞官瀬戸口但馬、

一神樂所拍子川と申所、國府上小川村之内ニ于今拍子川と申所有之候、弥五郎髻を同所同村之内御ふろが山ニ埋、鼻を同所向花村之内鼻面川江埋、四肢を同所野口村枝之宮江埋候說申傳有之候得共不詳、

熊周之事

一本朝記ニ云、人皇十二代景行天皇十二年、熊襲謀ニ反シテ日州ニ不ニ朝貢一冒ニ州縣一云云、同十一月皇師到ニ日向ノ国ニ起ニ行宮一居レヲ焉、数日欲レ討ニ熊襲一、時帝聞テ其ノ臣厚鹿文走鹿文雄傑ヲ患テ與ニ群卿一相儀シテ曰、是ノ二賊ハ熊襲カ之渠師也、衆類甚多シ其鋒キニ不可當焉、奈何セン一臣進曰、梟師有二女一、姉

曰ニ市乾鹿文、妹曰ニ市鹿文一容貌端正ニシテ心貪リ宣以ニ重幣一召ニ納レ摩下ニ伺ニ其消息一犯ニ不意、則曾テ不シテ血ヌヲ刃ニ賊必敗ナン矣、帝然リト之ヲ、示シテ幣ヲ欺ニ招其ニ女一、通ニ姉女一陽寵レ之、於是姉女奏ニ天皇一曰、陛下無レ愁ニ熊襲カ之不ルコト服セ、妾有二良謀一、願假ニ悍士一二ヲ、斬レ父獻レ之、帝悅テ許焉、姉女販レ家使下ニ皇兵一伏中賊營之間ニ、多設ニ醇酒一令レ飲ニ己カ父一、乃醉而寢焉ニ女密カニ斬ニ其弓弦一、官兵進テ殺シ之并テ屠ニ殘黨一九州悉平、時ニ天皇惡ミ市乾鹿文之不孝甚一責レ之遂ニ斬テ以狗ニ軍中一、以ニ弟市鹿文一賜ニ火国造一

小白命之事

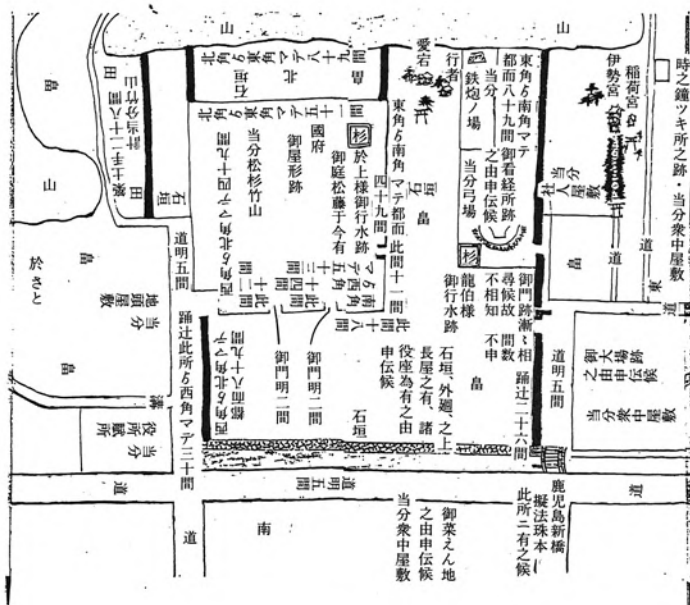
一同云、同二十七年秋八月九州之賊大ニ叛テ掠ニ国内一、於レ是ニ帝使下ニ小碓皇子一征中西州上、皇子時十六歲、容貌麗美身ノ長ケ一丈聰明ニシテ有二大略一、督レ兵到ニ九州一、時賊將川上ノ梟師與ニ群黨一宴、於是ニ皇子解レ髮ヲ作ニ童女ノ姿一、藏ニ劍於衣中一入ニ川上之宴室一交ニ居女間一、川上感ニ皇子之容姿一携レ手

揚^レ杯猷酬無^レ笑、夜闌川上醉伏、於是尊拔^ニ衣中之劍^一刺^ニ川上胸^一、時川上未^レ及^レ死曰、汝何者耶、尊對曰、天皇之子也、名^ニ曰本童男^一也、川上歎曰、吾是西州之剛士無^ニ強力勝^レ我者^一矣、未^レ嘗見中若^ニ皇子^一之者上、自今号^ニ皇子^一宜^レ称^ニ日本武尊^一言訖乃死、於是尊分^レ兵討^ニ餘類^一、西地悉平夷、尊乃帰京、

為友之事

一同云、為朝自^ニ幼穉^一勇武、其長七尺余臂力絶倫、且猿臂^{ニシテ}善射任^ニ于情^一暴凶也、為義責^ニ其逆^一逐^ニ之鎮西^一、時為朝僅十三居^ニ豊後國^一欲^レ奪領^ニ九州^一、國人不^レ肯從^一、各築^レ城以拒^レ之、為朝怒大戰^ニ余回^一、陷城数十余壁、三年^{ニシテ}九州悉^ニ属^一為朝之威風^一、称^ニ日本後臂將軍^一、自亦称^ニ總追捕使^一、於是帝勅為^ニ義^一一制^ニ為朝之剛傲^一、為義大驚使^下人喚中還京師上云、

○龍伯様国府麓御屋形江八ヶ年被遊御座御逝去跡、於上様二十ヶ年被遊御座候屋形跡、



一 御屋形跡内東角と南角迄都而四拾九間、
(すべて)

一 同南角と西角迄都而五拾三間、

但
西角二六間二四間之升形有

一 同西角と北角迄四拾九間、

一 同北角と東角迄五十壱間、

右四方石かけ、

一 同外東角と南角迄都而八拾九間、

一 同南角と西角迄右同斷、

一 同西角と北角迄右同斷、

一 同北角と東角迄右同斷、

○ 龍伯様御詠歌一冊の内抜書

國分ニ移リ大中良等ノ夢想有て歌ノ會アリ、

慶九雪六日

水路新雪

今朝ハ猶ふりかさねたる白雪に

絶ぬハ水のなかれ成りけり

松経年

當座
作りなす庭に千とせの影見へて

こけむすはかり松そ木高き

九つの品の上なるむらさきの

雲こそやとりなむ阿弥陀佛

かこしまゝいなり山の紅葉とて手折テ送られし時、

えたすこし折さゑおしき紅葉はハ

心岳良空ノためニ詠之
たてなからにや神に手向ん

かの實窓正眞大師こちれいならす病床にふし、

日数をふるほとにいれうヲもとめ、有驗者僧をた

つねいのりかちしまゝ成しかと、常ならざる

ならいのかれかたく、世をはやうせし事をかなし

ひ、人々歌たてまつるもよふされ、一首をつらね

靈前に手向るものならし、

法印龍伯

御佛の跡したひてやさかりなる

はなも散行二月のそら

慶長十二年二月十五日

庭の白藤盛成し時詠之、

植そへし松にかゝれる藤かつら

慶十三花も千年のかけや見るへき
卯月吉

右御詠歌國府士 三宅兵十良所持、

御詠歌并 龍山様杯御歌段々有之、

先年御記録所江被差出候由、右一冊上書ニ相見得、

歌書紙数二十五枚与相記有之、

○國府御代御犬追物手組書留写

慶長十一年十一月

御犬追物手組之事

初日

殿 此字一字上リテ御座候

本田弥六

喜八 嶋津攝津守

比志嶋宮内少輔

川上 嶋津十郎

嶋津藤次郎

檢見

川上 嶋津上野入道

北郷 嶋津次郎

吉利 嶋津奎右衛門尉

新納 嶋津勘解由次官

三原次郎四郎

相良新右衛門尉

伊集院 嶋津助右衛門尉

喚次

川上 嶋津喜左衛門尉

殿

二日一番

川上 嶋津式部太夫

町田 嶋津少兵衛尉

村田 刑部少輔

喜入 嶋津攝津守

檢見

川上 嶋津十郎左衛門

二日二番

殿

嶋津河内守

吉利 嶋津奎右衛門

伊勢平左衛門

川上 嶋津式部太夫

檢見

川上 嶋津十郎左衛門

三日之一番

嶋津又吉

川上 嶋津河内守

川上 嶋津十郎

本田 弥六

上井 甚六

入来院 澁谷石見守

喚次

佐多 嶋津六郎兵衛尉

喜入 嶋津攝津守

川上 嶋津左京亮

白濱 澁谷三四郎

鎌田 玄番助

町田 嶋津少兵衛尉

喚次

佐多 嶋津六郎兵衛尉

北郷 嶋津次郎

喜入 嶋津攝津守

嶋津河内守

川上 嶋津十郎

川上 嶋津左京亮

三原次郎四郎

本田弥六

佐多 嶋津又太郎

比志嶋宮内少輔

三日之二番

嶋津河内守

吉利 嶋津李右衛門

川上 嶋津式部太夫

北郷 嶋津掃部助

新納 嶋津勘解由次官

別府 二礼舍人助

平田新三郎

伊勢平左衛門

新納 嶋津近江守

川上 嶋津十郎

檢見

喚次

殿

嶋津雅樂助

右本書國府士鎌田形部左衛門跡諸文書之内ニ有之、

形部左衛門被官村田喜左衛門子當分鎌田典膳殿家來

村田庄右衛門所持写之、

一

上使様御答書ニ云、犬追物之儀於御尋ハ、

忠久於鎌倉被致稽古、此道專弓馬之故実有之事故、

當家代々令傳來、大隅守光久代正保三年四月七日於

江戸芝屋敷御老中様方招請被致張行、同四年十一月

十三日於武州王子村被備、大猷院様御覽たる儀茂

御座候、然処ニ先年生類憐被仰渡候以來張行不仕

故、當時ハ書傳迄ニ而修練之者無御座候、

一 犬追物場所之儀者、竹ニ而埒を結、其内ニ而仕事ニ而

御座候、

一 射手方人數者拾貳騎ツ、三手ニ分ケ、三拾六騎ニ而仕

候、於王子村備 御覽候節茂、三拾六騎ニ而御座候、

一 射手之外檢見・喚次とて二騎御座候、

一 弓ハ馬上、弓矢者驀目ニ而仕候、

右上使様方御答書之内ニ相見得候、

○慶長十年國府衆中

○町田縫殿助後名駿河守 子縫殿助 其子右京。同名八

左衛門尉。佐多宮内後名越後守。長濱十郎兵衛尉。長崎

織部佑 子次右衛門 其子七左衛門。加世田善左衛門尉

孫刑部左衛門。鎌田外記亮 子外記 其子次郎五郎。

平田久兵衛尉 御成敗。飯牟礼紀伊介 養子善五郎。長

谷場主膳正 鹿兒嶋江。太追平左衛門尉 子蘇右衛門。
 本田與三兵衛尉。相良勘解由次官 子權兵衛 其子土佐
 。下村主水佑。阿多勝右衛門尉。瀬戸口三左衛門尉。佐
 土原兵右衛門尉 子狩野之助 子源五兵衛。木脇若狹入
 道。有馬清丞 子清左衛門 其子弥八。平田肥前入道。
 永吉三河入道。宮内主殿助 養子喜右衛門 子喜兵衛。
 東郷藤兵衛尉 子肥前 其子藤兵衛。平田新次郎 養子
 利右衛門。山崎少兵衛尉 谷山江移衆。市來太郎右衛門
 尉 子五兵衛。辻伊与入道 養子伊左衛門。坂元彦右衛
 門尉 子休左衛門 其子覺介。後藤宗次郎。同名石見守
 子吉左衛門 其子五右衛門。野村城之介 子伴五左衛
 門 其子伴四郎。通運齋。青屋宗右衛門尉 子市來宗兵
 衛 其子權右衛門。等意 子井尻覺兵衛。郷田源左衛門
 尉 子源介。野村少外記 子伊賀 其子外記 二男左門
 。川村玄番允 子与三兵衛。宮内宗十郎 養子兵部左衛
 門。岩切縫殿助 子縫殿。大寺弓次。同名源五。村岡奉
 前守 子城之介。三原次郎左衛門尉 子大炊助。牧之瀬
 弥介 養子六左衛門。町田新左衛門入道。津曲善左衛門尉

子七兵衛 其子新寿院。宮内助兵衛尉 子与八左衛門
 。吉田丹波入道 子九郎右衛門 其子九郎兵衛。篠原因
 幡跡。貴嶋和泉守。野村藏人佑 加治木江移衆。山田弥
 七後土佐。般若坊。黒田少兵衛尉 子才之丞 其子新右
 衛門欵。中嶋四郎右衛門尉 子右近 二男掃部左衛門。
 坂元平右衛門尉 子与左衛門。相良彦二郎今名主稅助。
 大山六右衛門尉 孫伊与欵。稻津伊豆守 子因幡。川口
 半右衛門尉。田中藏介。同名喜兵衛尉。都外平二兵衛尉
 。石川弥右衛門尉。測脇弓右衛門尉 子久左衛門。外山
 五郎右衛門尉 養子喜兵衛 其子次郎左衛門。岩切仲右
 衛門尉。平田喜左衛門尉。山内權左衛門尉 子與右衛門
 二男山介。河野主馬允。柴間。白井丹波守 孫長崎千
 右衛門 其子三郎右衛門。郡山伊与介。山中四郎兵衛尉
 。種子田勘兵衛尉 子新左衛門。上原右衛門佑。伊集院
 下野入道。兒玉五右衛門尉 養子主水。岩城源兵衛尉。
 木原七郎三郎。村田源左衛門尉 子郷左衛門 二男平内
 左衛門。肥後宗兵衛尉。南雲宮内少輔 子三郎 其子尅
 岐。市成弥兵衛尉 養子喜右衛門 其子弥三郎。勝目八

右衛門尉 子與左衛門。田代二右衛門尉 養子源兵衛。
 肥後彦岐守 子主水 其子勝右衛門。有川六弥左衛門尉
 。村岡藤藏。兒玉次左衛門尉。草道七兵衛尉。大迫喜右
 衛門尉 子万左衛門。門松五郎次郎。二階堂与七郎。薄
 生宮内少輔 養子新十郎。東郷堅介 子五郎兵衛 其子
 堅介。同名助八。小野新右衛門尉。三宅七兵衛 子七兵
 衛。崎田平兵衛尉。山下助左衛門尉。弓削藤右衛門尉
 子藏人。川上治部左衛門尉。沢權右衛門尉 子新右衛門
 。吉井甚三郎。吉田六郎右衛門尉後名伴雪。古川勘右衛
 門尉。竹内弥十郎。米田武之丞。高野善左衛門尉 子勘
 左衛門。松田万右衛門尉 養子堅介。宮里備後守。市來
 出雲守。前田七郎右衛門尉。伊地知勝左衛門尉 子周防
 其子治十郎 其子弥吉郎。芋生佐渡入道 養子与次郎
 。久目村才七 子七右衛門。市來善兵衛尉。竹内平三郎
 。月野大膳亮。小野少三郎 子甚右衛門 吉岡仲四郎後
 名宮内太輔。折田六左衛門尉 子權五左衛門。宮原彦兵
 衛尉 子平八 其養子次郎兵衛。谷山相左衛門尉 子兵
 左衛門 其子与一右衛門 二男佐左衛門 与一右衛門子

与市。肥後隱岐 子縫殿 其養子主計。大野弥三郎後名
 匠堅 子正三郎。慶節老。長濱備後守。豎山讚岐入道
 養子郷兵衛 其子伴左衛門。市成藤助 子奎右衛門 其
 子弥右衛門。中將。浦川奎左衛門尉 子藏丞 其子奎左
 衛門。川野才之丞 子六郎左衛門。川上右京亮 子佐左
 衛門 其子右京。河村新左衛門尉 子八左衛門。和田乘
 介 子十介。山内十兵衛尉。和田三五郎 吉松江移衆。
 二木五右衛門尉 子才左衛門 其子權左衛門。本乘坊
 子本林坊 其子覺入坊。川村帶刀長 子伴左衛門。同半
 藏。小城大炊左衛門尉 吉松江移衆。平野六郎左衛門尉
 子國分丹波。鎌田左京亮 子左京。長野吉左衛門尉。
 伊集院市右衛門尉 大口江移衆。福岡小左衛門尉。津留
 十郎右衛門跡。福岡新兵衛尉 子新兵衛大口衆。染川源
 之丞 子源之丞。圖師九右衛門尉 子喜兵衛。新納孫右
 衛門。市來勘三郎。大善坊 子忠存坊 其子喜右衛門。
 存力坊 加治木江移衆。伊ヶ藏勘解由 横川江移衆。阿
 多甚左衛門尉。阿多源左衛門尉 養子才左衛門。本田与
 左衛門入道 子大炊太夫 其子佐左衛門 大炊太夫舍弟

与左衛門。山口相左衛門尉。家村源左衛門尉。子采女
 其子清兵衛。源左衛門二男源右衛門。其子次左衛門。山
 下右近將監。他出被申候。武元五郎右衛門尉。子善之丞
 。本覺坊。子存堯坊其子本覺坊。大泉坊。齋藤佐渡守
 子与三左衛門。其養子伊左衛門。爲阿弥。野間孫兵衛尉
 子九左衛門。徳田市左衛門尉。子少右衛門。順賀。永
 利傳左衛門尉。窪田清右衛門尉。子善左衛門。二男性音
 坊。岩切与左衛門尉。養子平右衛門。東郷加賀守。安樂
 大炊助。子伴兵衛。其子伴三郎。山田越前入道。子民部
 少輔。二男土佐。三男主計。伊集院刑部左衛門尉。養子
 平兵衛。吉井郷右衛門。かこしま。吉永源兵衛尉。道喜
 子道壽。其子服部權兵衛。喜入大炊助。子久右衛門。二
 男丹波。三男久次郎。久右衛門子吉兵衛。其子十郎。慶
 阿弥。長田後藤兵衛尉。子主税。福屋七介後名五郎兵衛
 。蘭田助右衛門尉。子勘左衛門。其養子治左衛門。妹尾
 傳兵衛尉。竹村孫左衛門尉後名鎌田土佐。養子鎌田新左
 衛門。内田源次郎。川越右近將後名三右衛門。𠬪岐野弥
 四郎跡。大坊跡。大光坊跡。宇多七左衛門尉。子二右衛

門。米良弥八。松本彦左衛門尉。宮原右兵衛尉。土持次
 郎九郎後名權之佑。加治屋六丞。東郷内膳正。吉松江移
 衆。上原源右衛門尉。有馬長右衛門尉。鎌田清兵衛尉
 子平右衛門。有馬善吉。平田宗右衛門尉。時任采女正。
 野村吉五後名織部。川上又左衛門尉。川野郷兵衛尉。子
 道紀。其子長右衛門。道紀舍弟郷左衛門。高崎甚左衛門
 尉。永吉伴兵衛尉。宇都八兵衛尉。養子弥七左衛門尉。
 山田弥兵衛尉。愛甲五郎左衛門尉。養子五郎左衛門。野
 村玄蕃允。北原治部左衛門尉。子雅樂助。久木田五兵衛
 尉。子孝左衛門。福崎彈右衛門尉。中原六左衛門尉。有
 馬讀岐守。子吉兵衛。二男治兵衛。染川善六。指宿𠬪岐
 守。子主税。其養子助左衛門。主税舍弟隼人。同主税
 助、右二記。久留弥左衛門尉。子弥左衛門。其子長左衛
 門。河崎長兵衛尉。八ヶ代弥吉。養子傳左衛門。猿渡新
 介。川村銀兵衛尉。御成敗被成。湯地左近將監。松山寛
 兵衛尉。有馬軍弥左衛門尉。向井勘解由左衛門尉。子吉
 左衛門。岩切与兵衛尉。子宗兵衛。舍弟彦左衛門。末田
 主馬允後名鎌田幡广。養子傳左衛門。四元長門守。米良

右京亮。鮫嶋大藏助。伊地知筑後入道 子佑十郎 串良
 江移衆。遠矢金十郎。緒方小右衛門尉。勝目助左衛門尉
 。新納四郎右衛門尉後名三河。有馬三左衛門尉。伊地知
 利兵衛尉。帖佐新七郎。岩城宮内左衛門尉。蒲地帶刀長
 子帶刀。川俣志摩丞 子宗左衛門 養子宗左衛門。野
 村喜介後名但馬 子但馬。白濱甚右衛門尉 子覺左衛門
 。東郷安房入道 子十左衛門 其子十左衛門。岡本主計
 助。中郷主水佑 子宗仙。吉加江安房入道。大膳亮 財
 部江移衆。前原隱岐守 養子六郎兵衛。新納小兵衛尉
 加治木江移衆。田実彦右衛門尉 子九左衛門。李田善左
 衛門尉 子九兵衛 其子十左衛門 九兵衛舍弟清兵衛。
 東丹後守。村岡木之介。平田平藏後名狩野介。川野猪右
 衛門尉。関六左衛門尉。御祈念所圓良坊。御祈念所俊玄
 坊。鎌田玄蕃允 養子源左衛門。井尻平兵衛尉 子伊東
 市右衛門 二男造右衛門。税所越前入道 養子次郎右衛
 門 其子右衛門兵衛。伊集院九郎兵衛尉 大口江移衆。
 柳彦左衛門尉 子彦左衛門。野村吉郎後名慶悅 養子右
 馬介。平田七左衛門尉 御成敗被成候。北郷掃部助 鹿

兒嶋江移衆。吉田治部左衛門尉 養子次郎兵衛 其子長
 四郎。肥後勘兵衛尉 子壽右衛門。伊集院半右衛門尉。
 窪賀六。阿多幸兵衛尉^{「本ノマ」} 鹿兒嶋江移衆。塚田相右衛門尉
 鹿兒嶋江移衆。税所弥右衛門尉 子小兵衛 二男利左衛
 門。山路小左衛門尉。久木田大膳正。木有馬藤兵衛尉。
 緒方源兵衛尉。前田大炊助。伊瀬知半八後名酒勾久左衛
 門 子吉左衛門。三清後家。荒田助市 子外山次郎左衛
 門。宮下小右衛門尉。川俣奎之丞 鹿兒嶋江移衆。山内
 市兵衛尉 子源助。堀切孫市。椎原与右衛門尉。山口彦
 七。中山次郎介。上野勝介 子九右衛門 其子宗五郎。
 愛甲四郎兵衛尉 谷山江移衆 子平次郎。川嶋新五左衛
 門尉 子新左衛門。河崎九右衛門尉。岩切彦七郎。靄丸
 弥右衛門尉。有馬助右衛門尉。谷山孫六 曾於郡江移衆
 後名宗兵衛。大平賀兵衛尉 吉松江移衆。齊藤銀五郎
 子兵左衛門。山内吉兵衛尉。前田志广助。同名仲右衛
 門尉。郷田金太郎。德持銀之丞 子市兵衛。竹山善九郎
 。荒田助右衛門尉 子助四郎。四本六介後名伊豆 子十
 左衛門。福永平左衛門尉。山之口助五郎。柏木三郎五郎

吉松江移衆。津曲藤左衛門尉 鹿兒嶋衆 養子長右衛門。三坂仲兵衛尉 鹿兒嶋江移衆御小者衆。木場伊左衛門尉跡。長田七郎左衛門尉 孫七郎左衛門。武元帶刀長。山下小右衛門尉 子利兵衛。仲七。竹下市介。加治木孫右衛門尉。春口善兵衛尉。松永源四郎。伊尻次郎右衛門尉。折田利右衛門尉。林千次郎 子甚左衛門。伊駒新兵衛 大口江移衆。伊知次郎介。小川内藏介 養子三郎兵衛。宮里奎丞 子小兵衛。松井源左衛門尉。松本土佐介。千田左吉兵衛 子万兵衛。大門吉兵衛尉 養子彦右衛門。野村半五郎 子秀嚴坊。二河六兵衛尉。隅本弥市。長田次郎太郎 鹿兒嶋江移衆大工。岩切堅物允 子堅右衛門。二男與兵衛 鹿兒嶋江。田中與三右衛門尉 鹿兒嶋江移衆。蘭牟田大覺御小者衆。大迫四郎兵衛尉 子早右衛門。犬童與七郎御小者衆。有馬主膳正 養子平田左衛門。平田弥十郎。曾木主馬允。調所大炊左衛門尉 子内記 鹿兒嶋。新納式部少輔 子式部。鎌田弥三郎。蘭田左平次 子平兵衛。有馬喜左衛門尉 養子存行坊。平田加賀入道。本田甚次 子新右衛門 鹿兒嶋衆。井尻

紀伊入道。熊谷次郎右衛門尉。大浦民部左衛門尉 子久内大工鹿兒嶋江。小倉孫左衛門尉。伊瀬地勘解由 子和泉 其子源藏。長瀬權介。春山越中守 養子正右衛門。本田伊豆守。松下善藏 子紹甫。河野左近。楠本伴之丞 子五兵衛 其子五郎左衛門。中村喜兵衛尉後名与左衛門。本田半左衛門尉 曾於郡江移衆。吉永源左衛門尉跡。津曲德丸。迫田長左衛門尉。皿良善介 子權左衛門。二男善左衛門。同名藤兵衛尉。滿尾源右衛門尉。高野善兵衛尉。木佐貫宗左衛門尉 養子吉左衛門。鎌田市右衛門尉。奥原篠之丞 子篠之丞。岩崎孫介。和田主稅助。上山太郎。高野源五跡。内浦四右衛門尉。四本長門守。宮内玄蕃左衛門尉 子六兵衛。新橋傳右衛門尉 養子傳右衛門。猿渡五郎右衛門尉。山崎治部少輔 子治兵衛。其養子平四郎。松山長左衛門尉。伊集院助七。武宮宗右衛門尉。安藤新三郎。日高藏右衛門尉。伊集院彦六 養子堀切九兵衛。野間口肥前守 清水衆。蒲地四郎左衛門 子孫四郎 鹿兒府。大山相右衛門尉。末原對馬。木村喜左衛門尉 曾於郡江移衆。隅元治部之丞。伊集院加左

衛門尉 子九右衛門。重信市之丞 子堅介 鹿兒嶋。田中助市。川良伊賀守。藤井九郎右衛門尉。税所宗左衛門尉。上野新左衛門尉 養子岩右衛門。伊地知新二郎。丸田三右衛門尉 子与右衛門 鹿兒嶋江。武元小左衛門尉。下村四右衛門尉。二次七左衛門尉。河畑喜左衛門尉。堀内壹岐。唐仁原善三郎。黒江傳之丞 御成敗被成候。兒玉權助。内山武之丞。岡村治右衛門尉。富松弥六。折田右衛門兵衛尉。篠少右衛門尉 子太郎兵衛 其子喜之助。大田大善允。兒嶋玄番助。比良田式部左衛門尉。坂本軍介。海野織部左衛門尉。福岡弓介。石塚七左衛門尉。子城之助。井尻八兵衛尉。久木本山之丞 子源左衛門。西田茂助。大迫清兵衛尉。宮原助左衛門尉。高崎兵部少輔。梅北淡路守 養子藤兵衛。山崎助作。黒木市右衛門尉。藤田乗介 衆中ふれ 高城江移衆。川口三右衛門尉。有馬甚兵衛尉。泊源太左衛門尉。新原十右衛門尉。肝付作右衛門尉 子大右衛門 鹿兒嶋。別府源二郎。上村主税助 子平右衛門 鹿兒嶋。日野六右衛門尉 子兵左衛門。伊地知五郎兵衛尉。西郷八郎左衛門尉 鹿兒嶋

衆。兒嶋三左衛門尉 敷根衆。川越助市後名有馬六左衛門 子三左衛門。迫田与兵衛尉。中馬勘助。渡邊九郎兵衛尉。溝口市藏。有馬次郎四郎。佐藤筑後守。唐仁原弥三。飯牟礼彈左衛門尉。安樂相兵衛尉 敷根衆。田中市左衛門尉。前田七兵衛尉。川添善介。滿富勝介。小川平吉。長谷場主水佑。猿渡七兵衛尉。関次介。野村弥四郎出水衆。町田助右衛門尉 子甲斐。安木十郎右衛門尉。若松淡路入道。肝付孫三郎。木下四郎左衛門尉。蓮香掃部左衛門尉。御中間衆 有間九七。江田善右衛門尉。永吉伴兵衛尉 鹿兒嶋江。伊地知九介。楠本傳兵衛尉。黒川新九郎。小原茂右衛門尉。山田弥左衛門尉。松崎奎右衛門尉 子助七。伊集院下野入道。山口掃部左衛門尉 子仲兵衛 二男松下仙左衛門。岩下傳右衛門尉。一寛坊。有馬主計助 子源六左衛門 二男大壽院。白石八藏。日高吉右衛門入道。鎌田助二郎。藤野休右衛門尉。御道具衆 岩田四郎兵衛尉。同楠本齊兵衛尉 養子八右衛門。四本五郎右衛門尉。蘭牟田新左衛門尉。河野奎兵衛尉。西田新四郎。藺田七之丞。木村十兵衛尉。山田源五

○有川新五兵衛。御中間衆兒木源藤。中嶋藤右衛門尉。

松浦三右衛門尉。宇都八兵衛尉。竹下作右衛門尉。御道

具衆池田甚五郎。同轟木金左衛門尉。同坂本助右衛門尉

○同古藤次左衛門尉。同山崎乗助。同坂本七右衛門尉。

同谷口弥中兵衛尉。河野平次郎。長田新三郎。同中嶋左

市。同長田七郎。同小野彦之丞。同池田善四郎。同安樂

拾介。同豎山四右衛門尉。同瀬戸山孫四郎。同松脇源介

○同野添藤兵衛尉。津曲源介。福嶋市兵衛尉。下田源三

郎。山本源左衛門尉。大山賀次右衛門尉。藤崎弥藏。御

道具衆木場弥五兵衛尉。同渕脇甚吉。同小牧弓右衛門尉

○同岩重七介。同窪田千七兵衛。同富田二右衛門尉。楠

本齋藤兵衛尉。福永与左衛門尉。田中与市。前原助作。

山本五郎右衛門尉。宗壽。竹下大炊助。春山監物。子監

物。石塚宗左衛門尉。深水九藏。池亀式部入道。田嶋仲

兵衛尉。長谷場主水佑。藤井助次郎。吉田丹波入道。中

野仲兵衛尉。吉田若狹入道。楠本傳兵衛尉。御道具衆佐

伯小右衛門尉。同上山助次郎。同村岡源之丞。同田中作

助。有馬主計助。本覚坊。濱田太左衛門尉。井尻紀伊入

道。池田三吉

龍伯様御嫡女

○御女子 於平様

右島津八郎左衛門尉實久子息島津薩摩守義虎室、国府

上井村江被遊御座、慶長八年癸卯雪月十二日上井於御

屋敷御逝去、御法名蓮昌妙守庵主、渕龍院江御遺躰御

靈屋御安置、

右同御二女

○御女子

右 日新公次男右馬頭忠將子右馬頭以久子守右衛門尉

彰久之室也、清水江在城也、

龍伯様御三女

○御女子

龜壽様 於上様、国府様

元龜二年辛未四月廿六日誕生、母種子嶋左近太夫時堯

女、寛永七年庚午十月五日卒、御年六十、御法名持明

彭窓庵主興國寺殿

(合点ハ朱ナリ)

▲右 太守中納言家久公之御簾中、天正十五^亥年、御年十七^三而御上京并文祿年中又御在京^欽、

慶長十六^辛年正月二十一日 龍伯様御卒去、已後寬

永七^庚年迄二十^七年、

於上様國府江被遊御座、同年十月五日國府於御屋形御卒去也、尤 御當病ニ付愛宕法印御祈念、九月五日^乙同十一日迄一七日結願御賄方并 御遠行ニ付、十月十一日福昌寺江御移之時、御賄方代官石塚七左衛門・有馬丹後守・野村伊賀守相勤候、御膳府帳于今取仕仕候、

一島津世祿云、天正十五^丁 義久主奉^レ命先^二秀吉公^一上府、則六月二十三^日發二船博多津一泊二長門國下関一、其息女所^レ載之船又一郎久保・又四郎彰久^{島津右馬頭以久孺子也}圖書頭忠長其外國中城主子為^レ質將入京者来^二于比津一、於是 義久主下^二於船一^二到二阿弥陀寺一旅宿、翌日到二上関一、同二十五^日 義久主有^二宿願一詣^二敵嶋一而經^レ日與^二息女一俱著^二船撰津國界之浜一、入^二山城國平安城一求^二旅宿於四條一云云、

一島津世祿記云、天正十六^戌年 義久主賜官暇之際、別^二女子一赴^二薩摩一、不^レ堪^二其愁情一詠^二首歌一賜^二細川兵部太輔幽齊一

義久

二世トハチキラヌモノヲ親ト子ノ

ワカレム袖ノ哀ヲモシレ

幽齊

馴々シ身ヲハハナタシ玉手箱

二世トカケヌ中ニハアリトモ

幽齊達^二 義久主倭歌於 秀吉公上覽^一、而女子幸俱得^レ暇九月十四^日發^二和泉堺浜一、連^二其船一不^レ幾日着^二日州細嶋一、下^二於船一過^二日隅一十月十四^日帰^二入薩摩鹿兒島一、則貴戚臣故旧老無^レ不^レ悅樂焉、同云、文祿元^年辰薩摩國人獻^二干梅北宮内左エ門尉國兼之首於名護屋一、餘黨聞^レ風盡散兵塵皆靜也、義久主彼叛逆之事一毫不^レ知^レ之、故因^テ石田木工頭一白^二于 秀吉公一、而未^レ得^レ免^レ罪、家康公幸聞^二其言一再達于 秀吉公曰、義久之不^レ預^二其逆暴一者分明也、

予謂 義弘父子在二朝鮮一 義久在二于茲一、其女子与二義弘之婦人一為_レ質居二聚樂一矣、或忘_レ子或忘二妻妾一豈為此謀乎、其言道理當然也、秀吉公乃积_レ疑云、

於上様御代国府諸士起請文写

愚恭惟起請文欽前書矣不識于

起請文

何事可惜哉紛失嗚呼後生嗜文

書好古人孰不歎息乎

有頂天下者到金輪際佛神皆悉驚白言堅牢地神八海所接龍王龍衆十王十鉢俱生神太山府君司命司祿冥官冥衆有情無情辰星南斗北斗星日耀星破星羅曜星計都星巨文星明星七夕星八榮星本命星四方四佛五方五佛大聖摩利支尊天太白神太歲神八諸神十二月將神天葬神地葬神阿豆知神天神地神海神木神火神金神水神風神諸神諸菩薩諸善神東方降三世明王南方軍荼利夜叉明王西方大威德夜叉明王北方金剛明夜叉明王中央不動明王大黑尊天毘沙門天王大弁才天女宇賀神十五童子三宝荒神多婆羅天王武荅天神頗梨采女蛇毒鬼神王八王子八万四千六百五

十余神金剛界七百余尊胎藏界五百余尊金剛藏王日光蛇帝主大聖金剛童子普天率土愛染明王妙見菩薩過去現在未來三世諸佛一萬八千軍神二萬八千軍神三萬八千軍神四万八千軍神五万八千軍神六万八千軍神七万八千軍神八万八千軍神九万八千軍神十万八千軍神一千八百師天童子一萬燈明佛二万燈明佛三万燈明佛藥師如来宝生如来無量寿佛微妙身如来文殊普賢觀音勢至十六善神八万四千夜叉神泰日域崇廟 天照皇太神宮四十末社内宮外宮風宮諸末社八幡大菩薩春日大明神王城鎮守山王廿一社根本中堂本尊立塔諸堂諸坊之本尊薩埵祇園午頭天王松尾大明神平野大明神吉田立田熱田大明神大原大明神稻荷大明神賀茂下上大明神貴布祢大明神北野天滿天神三輪大明神住吉大明神三十番神愛宕四所大權現熊野三所大權現十二所權現九十九所權現廣田大明神金峯山權現吉備宮大明神對馬天王羽黑山權現葛城大權現峯々藏王權現子守勝手大明神梅宮大明神法花廿八品三藏法師鞍馬毘沙門天吉祥天女雨寶童子閼東守護神伊豆箱根兩所權現三嶋大明神鹿島大明神富士大權現白山妙理權現

立山大菩薩諏訪上下大明神出雲大社大明神多賀大社御
 靈八所大明神殊者氏神惣者大日本国六十六ヶ国大社二
 千小社五百九十二所大小神祇等地藏菩薩陀羅尼菩薩龍
 樹菩薩虚空藏菩薩梅檀香菩薩大病神八万四千鬼神大恩
 神歲破神天蘇神大疫神夜氣夜刃神妙鬼神六百五十余神
 金山六十万鬼神刀八毘沙門天王父天狗太郎眷属九億
 四万三千四百九十余神善貳師童子八所大明神善害坊次
 郎坊八万四千眷属飯繩大明神四十四万一千眷属大天摩
 三万三千小天狗三万三千眷属知羅天狗十二天狗等日
 域中山々峯々嶽々居所住之大天狗小天狗等名作群集而
 正路之旨照鑑給殊別而者九州擁護大小神祇等當国鎮守
 正宮八幡大菩薩霧嶋六所權現當所勸請神祇等薩州諸神
 等若偽心於有之立処受白癩黑癩之重病八万四千毛孔四
 十二之骨節日日夜々苦病無止深厚蒙御罰於後世者八寒
 八熱隋阿鼻地獄到未來永劫不可有浮期者也
 仍靈社上卷起請文如件、

元和五年己未二月七日

喜入吉兵衛尉殿

春山越中守殿

蒲生宮内少輔

久洪

真武

清宗

町田助右衛門尉殿

阿蘇新九郎

前原源左衛門

忠親

惟興

貞元

大坊

飯牟礼紀伊介

有馬喜左衛門

通純

光家

純長

田中佐渡守

岩切與兵衛

窪田清右衛門

国安

信安

儀昌

伊瀬知源藏

加世田善左衛門

永崎織部佑

吉雄

景林

正通

本田七左衛門

東郷小監物

有馬主膳正

親治

重村

純盛

豎山宗次郎

吉田九郎左衛門

市成奎左衛門

利次

清康

武秀

久留長左衛門

市来出雲入道

宮原平八

景次

家在

景昌

有馬銀八

石塚七左衛門

存堯坊

純政

種房

通次

米田二亟入道

林千次郎

長野吉左衛門

七 国分諸古記

家次	重次	祐次	祐康	宗正
家村 彦介	山中四郎兵衛尉	伊集院加左衛門	奈田九兵衛尉	伊瀬知 半八
住次	種正	久豊	信隆	本ノママ 吉
蒲地四郎左衛門	上野新左衛門	田実彦右衛門	久木田五兵衛尉	曾山 吉内
貞固	景貞	重政	重親	吉次
野村七郎兵衛尉	勝目八右衛門	木佐貫宗佐入道	帖佐 平六	丸山 七介
元綱	秀親	盛高	宗仍	重昌
市来喜次郎	長崎五郎介	四本 権七	本林坊	三宅七兵衛尉
家秀	通次	忠次	慶山	国丑
川野邊喜四郎	曾山兵左衛門	弓削 平吉	岩城与左衛門尉	正覚坊
満次	吉治	盛政	重利	盛栄
井尻勘解由左衛門	黒川新五兵衛	田代 平介	奈田善右衛門尉	音津 彦吉
祐正	家長	清安	信高	正次
永吉藤左衛門	篠原太郎兵衛	岩田 甚吉	肥後與次郎	泊 小十郎
久朝	国明	等次	盛清	信次
鎌田左平次	三嶋小平蔵	文 沅 _{本ノママ}	前田大学左衛門	佐土原新六
政安	清光	永次	清房	祐光
佐土原源五兵衛尉	野村伴五兵衛尉	平田二右衛門	長田 与吉	襄田千壽院
				四本伊豆介
				純次
				湯田郷兵衛尉
				伊集院刑部左衛門尉
				久武
				良勝
				重次
				重時
				盛秀
				宮原治右衛門
				忠次
				伊集院 彦六
				福崎二兵衛尉
				儀次

西 造右衛門	兼信	上野 少介	肥後勘兵衛尉	伊瀬知太郎兵衛尉	長田半五兵衛尉	大林坊
楠元齋藤兵衛尉	佐正	是枝彦三郎	奥 与次郎	垂野新左衛門	渡邊九郎兵入道	野村長佐入道
竹井二右衛門	久商	河上右京亮	谷村助左衛門	加治木善右衛門	李田舍人助	淵脇弥次郎
肥後彦三郎	盛滿	池邊助左衛門	荒田助右衛門	宮原善右衛門	蒲地帶刀長	指宿隼人正
川上久次郎	久通	河野孫十郎	東郷 監介	野村小外記	上原小監物	木佐貫吉左衛門
蓮香掃部左衛門	儀正	三宅 三介	喜入丹波守	新橋傳右入道	税所宗左衛門尉	西郷彦兵衛尉
伊瀬知勘解由右衛門	吉重	貞安	大迫四郎兵衛尉	荒田助四郎	肥後相馬丞	北原右衛門尉
門尉	純安	政次	能綱(血判)	服部久兵衛尉	宗俊	千田左吉兵衛尉
有馬源六左衛門	廣次	植木内蔵丞	野村源三郎	山崎治兵衛尉	瀧次	川崎治兵衛尉
川村与三兵衛尉	末信	山内甚次郎	松下番左衛門	吉信	重長	四本 小蔵
良次	秀長	家次	盛明	宮里 李丞	正明	永利 傳介

七 国分諸古記

吉信 盛綱 清久 綱秀 重正 純次
 坂口長助ヨリ五部計下ル
 坂口長助本ノマ、
 西田右衛門尉

貞隆 光秀 重光 明山三兵衛尉 濱田五兵衛尉 梶原源太兵衛
 景次 血判ニ

中嶋四郎右入道 大門彦右衛門尉 藤田与右衛門 兼次 清次 盛次 景次 血判ニ
 篠崎 善吉 江口 源七 奥原佐々之丞 小川内蔵介 牧本主殿 血判ニ 牧本善四郎

田代二右衛門 良寛坊 徳持孫次郎 全政 松田吉蔵 家秀 古河藤右衛門 政豊 山口加藤左衛門
 印判ニ血判 書判ニ血判 無名乗

肥後彦岐守 清堅 李田善左入道 津曲七兵衛尉 石井今兵衛 今藤 小吉 竹内清右衛門
 盛昌 信實 兼明 秀次 宗震

山下小右衛門尉 牧瀬助右衛門 森 徳之丞 友吉 印筒与九郎 服部茂左衛門 安村
 家富 家次

小藤小三兵衛尉 竹迫主税 竹之内市助 血判ニ 有馬 清丞 弓削 藤六 盛健
 藤次 武重

中満清六 高橋源吉 川口新左衛門 血判ニ 長崎千右衛門尉 泉杏坊 市来宗右衛門入道
 政清 正澄 純武

春山小監物 森 宗次郎 有馬左近次郎 家村筑後入道 神宮司主水左衛門 家村源右衛門
 家幸

住房

純實

重時

重房

儀佐

桃山内蔵丞

井尾平兵衛尉

富山五郎太入道

齊藤与三左衛門

山内多太右衛門

弓削喜左衛門

忠增

祐知

吉秋

真盈

廣親

政威

音津孫左衛門

河邊五郎左衛門

宮原 甚七

肥後民部左衛門

「此ノ所本ノママ」

肥後仲兵衛尉

正次

満秀
印判ニ
血判

盛次

盛時

盛次

岡本字佐衛門

久富弥左衛門入道

安樂伊与介

右本書国府賦所江有之同役暖江申達写之、

重信

景家

兼利

(於上様御台所賄記録) (原本ニ表題ナシ)

安樂大炊助

上原勘解由兵衛尉

伊地知助左衛門

霜月七日

兼次

直次

重政

一上白米九升七合五勺

御女房衆廿九人之食米

河村八左衛門尉

堀切彦兵衛尉

中村弥兵衛尉

但老入ニ付一日ニ貳合五勺宛

秀信

重昌

重清

一々名付有別紙也、

山下助左衛門

有馬加左衛門

西郷彦左衛門

一味噌貳升者

右之人数調料成、

家治
印判ニ
血判

住家

宗重

一塩老升老合

右之人数調料成、

北原雅樂助

市成弥兵衛

大林坊

一酢貳盃

右之人数調料成、

兼康

武顯

一白酒四十老盃

右之人数食酒ニ成、

町田長三郎

南雲順右衛門

坂本彦右衛門

但老日ニ老入ニ付老盃宛

久夫

良勝

清昌

内三人ハ一日ニ老入ニ付貳盃宛也、

伊地知勝左衛門尉

「此ノ所本ノママ」

富山 助丞

一ミ酒老盃

右之人数調料成、

右霜月七日より同十四日迄、毎日右同断故不相記候、
御女房衆一々名付紛失ニ而候哉不相見得候、

十五日

一 上白米九升七合五勺 御女房衆三十九人之食米成、
一味噌三升ハ 右人数調料也、

但十五日ニ而候間、汁一ツ重候
間如此候、

一 塩壺升五合

右同人数調料也、

一 酢貳盃

右同人数調料也、

一 ミ酒壺盃

右同人数調料也、

一 鳥目百廿文

右同人数調料也、

是ハ汁一ツ重候間買申候、

常中之肴ハ濱村より出候、

一 白酒四十壺盃

御女房衆廿九人之食酒

但壺日壺人ニ付壺盃宛、

内三人ハ一日ニ付貳盃ツ、

右十六日より廿七日迄霜月七日御賄之通、毎日同断、

廿八日

一 上白米九升七合五勺 右同人数食米ニ成、
一味噌三升ハ 右同人数調料也、

一 塩壺升七合

右同人数調方ニ入、

廿八日ニ而候間右同、

一 酢貳盃

御女房衆廿九人之調料也、

一 白酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

一 鳥目貳百文

右同人数汁一ツ重候間如此候、

右廿九日より晦日迄、霜月七日御賄之通両日同断、

十二月一日

一 上白米九升七合五勺

御女房衆廿九人之食米、

但一日壺人ニ付貳合五勺宛也、

一 ミそ三升貳合

右同人数調料也、

但朔日ニ而候間、汁一ツ重此こ

とく候、

一 塩壺升七合

右同人数調料也、

一 酢貳盃

右同人数調料也、

一 ミ酒壺盃

右同人数調料也、

一鳥目百五拾文

右同人衆汁之魚代、

但朔日ニ而候間如此候、常中之

肴ハ濱村より出候、

右二日ノ十四日迄、霜月七日御賄之通毎日同断、

十五日

一上白米九升七合五勺

右同人数調料也、

一ミそ三升者

右同人数調料也、

但十五日ニ而候間汁、一ツ重

此如候、

一塩壺升七合

右同人数調料也、

但十五日ニ而候間、汁一ツ重如

此候、

一酢貳盃

右同人数調料也、

一ミ酒壺盃

右同人数調料也、

一白酒四拾壺盃

右同人数食酒成、

一鳥目貳百文

右同人数調方ニ成魚の代、

右十六日ノ廿七日迄、霜月七日御賄之通毎日同断、

廿八日

一上白米九升七合五勺

御女房衆廿九人之食米成、

一味噌三升ハ

右同人数調料也、

廿八日ニ而候間、汁一ツ重如此候、

一塩壺升七合

右同人数調料也、

但廿八日ニ而候間如此候、

一酢貳盃

右同人数調料也、

一ミ酒壺盃

右同人数調料也、

一白酒四十壺盃

右同人数食酒成、

但一日壺人ニ付壺盃宛、内三人

者一日ニ貳盃宛、

一鳥目貳百廿文

右同人数調魚の代、

但廿八日ニ而候間、汁一ツ重候

まゝ如此候、

常中之肴ハ濱村ノ出候、

右廿九日、霜月七日御賄之通ニ而候、

晦日

一上白米壺斗四升六合貳勺五才

御女房衆廿九人之食米成、

内四升八合七勺五才ハ古飯ニ成

候間、晩ハ二合五勺宛也、

右同人数調料也、

但汁一ツ重候間、ミそ一升かさ

ミ申候、

右同人数調料也、

右同人数調方ニ成、

右同人数調方ニ成、

右同人数朝の食酒、

右同人数晩の食酒、

但右節供ニ而候間如此候、

右同人数調之魚之代、常中之肴

ハ濱村より出候也、

正月元日

一上白米壹斗九升五合

御女房衆廿九人之節供調ニ成、

一上白米七升八合

但一日ニ壹人ニ付五合宛也、

一ミそ四升者

一塩貳升者

一ミ酒貳盃

一魚大小拾三献

右同人数調ニ入、汁二ツ、なます一ツ、焼物一ツ、合四通ニ而

候、是ハ串木野瀬之魚也、

右同人数食酒ニ成

但一日ニ壹人ニ付壹盃宛、

正月二日

一上白米壹斗九升五合

一上白米七升八合

一ミそ四升者

一塩貳升者

一ミ酒三盃

一清酒四十壹盃

但壹日一人ニ付壹盃宛、

一魚大小拾壹

但汁二ツ、なます一ツ、焼物一

ツ、合四通ニ成也、魚ハ串木

野瀬魚也、

正月三日

一上白米壹斗九升五合

御女房衆廿九人之節供米ニ成、

但一日壹人ニ付五合宛也、

一上白米七升八合

右同人数カ食ニ成、

但一人ニ付貳合五勺食也、

一味噌四升者

右同人数調方ニ成、

一ミ酒貳盃

右同人数調料也、

一塩貳升者

右同人数調方ニ成、

一酢四盃

御女房衆廿九人之調方ニ成、

一清酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

一魚大小拾三献

右同人数調ニ成、汁二ツ、なま

す一ツ、焼物一ツ、合四通ニ而

候、

但くしきのせの魚也、

四日

一ミそ貳升者

右同人数調料也、

一塩壹升壹合

右同人数調料也、

一酢三盃

右同人数調料也、

一白酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

一魚大小五ツ

右三人者貳盃宛也、

一魚大小五ツ

右同人数調料也、

魚ハ串木野瀬魚也、

五日

一上白米九升七合五勺

御女房衆廿九人之食米ニ成、

但一日壹人ニ付貳合五勺宛也、

一ミそ貳升者

右同人数調方ニ成、

一塩壹升壹合

右同人数調方ニ成、

一酢貳盃

右同人数調料也、

一白酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

一魚大小五ツ

御女房衆廿九人調ニ入、

但くし木の瀬魚也

一上白米九升七合五勺

右同人数食米、

五日

一麦五升者

右同人数調、

一ミそ式升壹合

御女房衆廿九人之調料也、

但節分ニ而候間如此候、

一塩壺升壹合

右同人数調料也、

一上白米四升者

右同人数麦之飯ニ加候米也、御

一清酒廿盃

右同人数食酒ニ成、

女房衆又内衆合八十四人之調

一上白米壹斗九升五合

右同人数節供米也、

也、

一ミそ四升者

右同人数調料也、

一小豆式升五合

右同人数節分ニ而候間如此候、

一塩式升者

右同人数調料也、

六日

一酢四盃

右同人数調料也、

一上白米九升七合五勺

右同人数食米ニ成、

一ミ酒二盃

右同人数調料也、

但一日壹人ニ付式合五勺ツツ

一清酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

一ミそ式升者

右同人数調方ニ成、

一魚大小拾式献

右同人数調ニ入、汁二ツ、なま

一塩壺升壹合

右同人数調料也、

す一ツ、焼物一ツ、合四通ニ

一ミ酒壹盃

右同人数調方ニ成、

成、串木野瀬魚、

一白酒四十壺盃

右同人数食酒ニ成、

右正月八日、同十四日迄、同六日御賄之通毎日同断、

一魚大小

右同人数調ニ入、

十五日

但串木野瀬の魚也、

一上白米七升者

御女房衆廿九人亦内衆四十五人

七日

一上白米三升三合六勺

右同人数又内衆四十五人合八十

一小豆四升者

右同人数かゆニ相添候、

四人ニ而、ミすうつ之調ニ成、

一上白米三升者

鏡餅壹枚ニ調申候粥餅也、

一 上白米壹斗九升五合

右同人数食米、

但一日壹人ニ付五合宛也、

一 ミそ貳升者

右同人数調料也、

一 塩壹升壹合

右同人数調料也、

一 酢貳盃

右同人数調料也、

一 ミ酒壹盃

御女房衆廿九人之調料也、

一 魚大小拾三献

右同人数調ニ入、但串木野瀬魚也、

一 白酒四十壹盃

右同人数食酒ニ成、

十六日

一 上白米八升者

右同人数亦内廿六人合七十五人之時のかゆ米也、

一 みそ壹升八合

右同人数亦内廿六人合七十五人之時汁ニ成也、

一 塩壹升者

右同人数調料也、

一 鳥目百文

右之かゆニ入豆腐の代、

一 上白米壹斗八升者

鏡餅六枚ニ調、右之人数点心ニ成同日之時ニ入也、

一 清酒貳十盃

右之人数点心之口之酒ニ成也、

一 上白米一斗九升五合

右同人数食米ニ成、

一 ミそ五升七合者

右同人数調料也、

但てんしんの汁までニ成、

一 塩三升壹合

右同人数調ニ成、

但汁三ツ菜貳ツニ入也、

一 ミ酒三盃

右同人数調ニ入也、

一 酢貳盃

右同人数調料也、

一 清酒四十一盃

右同人数食酒ニ成、

但一日壹人ニ付一盃宛、内三人

は貳盃宛也、但時日ニ而候間

御酒ニ而候、

一 鳥目三百文

御女房衆廿九人之調ニ成魚代也、

右正月十七日ヨ同廿七日迄、同六日御賄之通毎日同斷、

廿八日

一 上白米九升七合五勺

右同人数食米ニ成、

一 ミそ三升者

右同人数調ニ入也、

但廿八日ニ而候間、汁一ツ重如

此候、

一塩壹升七合

右同人数調ニ成、

一酢貳盃

右同人数調ニ入也、

一ミ酒壹盃

右同人数、

一白酒四十壹盃

右同人数食酒ニ成、

但一日壹人ニ付壹盃ツ、内三

人ハ一日ニ貳盃宛也、

右正月廿九日ヨ同晦日迄、同六日御賄之通毎日同断、

二月一日

一上白米九升七合五勺

御女房衆廿九人之食米成、

但一日壹人ニ付貳合五勺宛也、

一ミそ三升者

右同人数調料也、

但朔日ニ而候間汁一ツ重候間、

ミそ一升重申候、

一塩壹升七合

右同人数調料也、

一酢貳盃

右同人数調方ニ成、

一ミ酒壹盃

御女房衆廿九人之調料也、

一鳥目百八十文

右同人数汁之魚の代、

但朔日ニ而候間、汁一ツ重申候

間如此候、

一白酒四拾壹盃

右同人数食酒ニ成、

但一日壹人ニ付一盃ツ、内三

人ハ貳盃ツ、

右二月二日ヨ同十四日迄、正月六日御賄之通毎日同断、

二月十五日

一上白米九升七合五勺

右同人数食米ニ成、

一ミそ三升者

右同人数調料也、

但十五日ニ而候間、汁一ツ重候

条一升重申候、

一塩壹升七合

右同人数調料也、

但十五日ニ而候間汁一ツ重候間、

塩六合重申候、

一酢貳盃ハ

右同人数調料也、

一ミ酒壹盃ハ

右同人数調料也、

一白酒四十壹盃ハ

右同人数調料也、

但一日壹人ニ付壹盃ツ、内三

人は式盃ツ、

右二月十六日、同廿六日迄、正月六日御賄之通毎日同断、

右 於上様御代、御代所役濱田五兵衛霜月七日より翌二月廿六日迄帳内写之、年間不相知候、

本書右五兵衛子孫濱田五郎左衛門格護、

於上様御代国府御内築地板上屋大工帳写

元和二年八月五日

御内築地板上屋ニ付大工帳

国分御代所

一清酒三盃
八月五日

築地上屋柱立祝ニ成、

加藤左衛門・与吉殿

一真米一升三合
同日

右同

一真米四合三勺三才
同日
長田吉殿一度賄

一真米一升三合
六日
長田与吉殿

一真米一升三合
同日
楠元内蔵丞殿

一真米一升三合
七日

同人

一真米一升三合
同日
長田与吉殿

一真米一升三合
七日
有馬与市殿

一真米一升三合
八月八日
与吉殿

一真米一升三合
同日
与市殿

一真米一升三合
同日
内蔵丞殿

一真米一升三合
同日
加藤左衛門

一真米一升三合
同日
惣二郎

一真米一升三合
八月九日
主水左衛門築地かや上屋釘四百作

候、

一真米一升三合
同日
与市殿

一真米一升三合
同日
与吉殿

一真米一升三合
八月九日
内蔵丞

一真米一升三合
同日
加藤左衛門

一真米一升三合
同日
惣二郎

右五人ハ築地のほり作

一白米五合
同日
木分定衆四人之中食、上屋之か

ハら分候、内壺人ハかち番子、

一真米一升三合
八月十日
長田与吉殿

七 国分諸古記

一 真米一升三合 同日	楠元内蔵丞	一 真米一升三合 同日	与吉殿
一 真米一升三合 同日	有馬与一殿	一 真米一升三合 同日	加藤左衛門
一 真米一升三合 同日	加藤左衛門	一 真米一升三合 同日	惣二郎殿
一 真米一升三合 同日	惣二郎	一 真米八合二勺 同日	かち六人、大工こ取三人、但定衆也、
合五人ハ御内築地柱立候、			
一 真米一升三合 八月十日	主水左衛門桁付釘作なをし候、	一 一寸釘百者 同日	せかい板付二成、
一 かちすミ込二ツ 同日	右同人	一 真米一升三合 八月十三日	長田与吉殿
一 下白米一升二合 同日	台所定衆九人右之普請仕候、内 三人ハ木わき申候、内一人ハか ち番子、内五人ハ 本ノママ	一 真米一升三合	楠本内蔵殿
一 真米一升三合 八月十一日	楠元殿	一 真米壹升三合 八月十三日	山口宗次郎殿
一 真米一升三合 同日	与吉殿	一 真米壹升三合 八月十三日	有馬主水介殿 一 荒かね壹貫七百目
一 真米一升三合 同日	与一殿	一 すミ込四ツ但普請夫やき申候	一 式寸釘百六拾
一 真米一升三合 同日	加藤左衛門殿	作申候 一 真米一升定衆中飯但八人分鍛冶番子七分わ き小取 一 かや廿四駄 一 わらなわ拾五坊ふきなわ ニなる 一 小竹四束しもとニなる 八月十四日	一 真米一升三合
一 真米一升三合 同日	惣二郎殿	長田与吉殿 一 同壹升三合楠本内蔵殿 一 同壹升三 合山口加藤左衛門 一 同壹升三合同名宗次郎殿 右四 人ハけた作たる木かけ 一 同一升三合有馬主水左衛門 釘作一すミ込二ツ右之釘作入 一 たる木付式寸五分數	
一 真米一升三合 八月十二日	楠元殿		
一 真米一升三合 同日	人、内奉行一人中飯ニ成、		

二百五拾八 一 けた付長さ四寸数廿一 一 八月十四日 かや廿一

駄 一者築地上屋ふきニ入 一 なわ廿坊ふきなわニなる 一 ほそなわ五坊はしあみなわニなる 一 小竹三

束ぬいふニなる 一 八月十五日 真米一升三合楠本内蔵丞殿 一

真米一升三合有馬与市殿 一 同一升三合山口加藤左衛門殿 一 真米八合六勺根占衆田中佐介殿 一 真米八

合六勺中萬市郎殿 一 八月十六日 真米八合六勺市拾殿 一 真米

八合六勺新九郎 一 真米一升三合長田与吉殿 一 真

米一升三合楠本内蔵殿 一 真米一升三合有馬与市殿

一 真米壹升三合山口加藤左衛門殿 一 真米一升三合

同宗次郎殿 一 真米一升三合田中佐介殿 一 八月十六日 真米壹

升三合中萬市郎殿 一 真米壹升三合市拾殿 一 真米

壹升三合新九郎殿 一 八月十七日 真米四合をかわき申候 右道具

三人中食定衆 一 真米壹升三合長田与吉殿 一 同壹

升三合有馬与市殿 一 真米壹升三合山口加藤左衛門殿

一 真米壹升三合山口惣次郎殿 一 真米壹升三合田

中佐介殿 一 真米壹升三合中萬市郎殿 一 真米一升

三合新九郎 一 真米壹升三合市拾 一 真米五合八お

かわき三人小取壹人中食ニ成但定衆 一 かや拾式駄築

地之上屋ふき 一 小竹式束ぬいふニなる右同 一 大

繩八方ふきなわニ成右同 一 八月十八日 真米壹升三合長田与吉殿

一 真米壹升三合有馬与市殿 一 真米壹升三合山口

加藤左衛門殿 一 真米壹升三合田中佐介殿 一 真米

壹升三合中馬市郎殿 一 八月十九日 真米壹升三合市拾 一 真米

壹升三合新九郎 一 真米壹升三合長田与吉殿 一 同

壹升三合楠元内蔵殿 一 同壹升三合有馬与市殿 一

同壹升三合山口惣次郎殿 一 同壹升三合田中佐介殿

一 同壹升三合中馬市郎殿 一 同壹升三合新九郎 一

同壹升三合市拾 一 八月廿日 同壹升三合長田与吉殿 一 同

一升三合楠本内蔵丞殿 一 同壹升三合田中佐介殿 一

同壹升三合中馬市郎殿 一 八月廿日 同壹升三合市拾 一 同

壹升三合新九郎 一 八月廿一日 下白米六合二勺五才おか衆三人上

屋ふき式人合五人中食ニなる 一 八月二十一日 同壹升三合長田与吉

殿 一 同壹升三合楠本内蔵殿 一 同壹升三合山口加

藤左衛門殿 一 同壹升三合田中佐介殿 一 同壹升三

合中馬市郎殿 一 同壹升三合市拾 一 同壹升三合新

九郎 一 同壹升三合鍛冶主水助釘作申候 一 貳寸五分釘百四十六 四寸釘廿出来申候 一 荒かね貳貫五百匁釘作ニ入 一 同すミ込四ツ入 一 下白米壹升定衆八人普請中食内三人ハおかはき 一 かや拾貳駄同上屋ふきニ入 一 小竹貳束ぬいふニなる浅井竹 一 大繩拾貳方ふいなわニなる 一 真米壹升三合長田与吉殿 八月廿二日

一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同壹升三合田中佐介殿 一 同一升三合中馬市郎殿 一 同一升三合市拾一 同一升三合新九郎 一 同一升三合有馬主水左衛門一 二寸五分釘百卅三本作申候 一 四寸釘廿但地かねハ別ノおろしかね之内 同一すミ込二ツ右之時入 一 下白米壹升三合五勺五才定衆七人中食但築地普請おかはき鍛冶番子仕候 一 かや拾四駄沓わ築地上屋ふきニ入 一 小竹二束ぬいふニなる右同根占竹なり 一 大繩拾方ふきなわニなる右同 一 はし拾九枚右同根占より参候はし 一 米一升三合長田与吉殿 一 同一升三合山口加藤左衛門殿 一 同一升三合同惣次郎殿 一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同一升三合田中佐介殿

一 同一升三合中萬市郎殿 一 同一升三合新九郎 一 同一升三合市拾 一 同壹升三合鍛冶主水助 一 四寸釘拾六本作 一 貳寸五分釘百五拾二同 一 荒かね壹貫六匁五拾匁 一 すミ込三ツ右之時入 一 下白米七合五勺ハ定衆六人中食内二人ハ鍛冶番子 一 米一升三合長田与吉殿 一 同楠本内蔵丞殿 一 同一升三合山口惣次郎殿 一 同一升三合田中佐介殿 八月廿四日 一 米一升三合中萬市郎殿 一 同一升三合市拾 一 同一升三合新九郎 一 下白米五合定衆四人中食なる但築地普請 一 かや拾二駄二わ上屋ふきニ入 一 小竹二束ぬいふニ入 右同浅井竹 一 大繩拾方但右之ふきはニなる 一 はし拾二枚右同根占 一 米一升三合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同一升三合山口嘉藤左衛門殿 一 同一升三合同惣次郎殿 一 同一升三合田中佐介殿 一 同一升三合中馬市郎殿 一 同一升三合市拾 一 同壹升三合新九郎 一 下白米八合七勺五才定衆七人中食築地普請おかわき上屋ふき衆 一 かや拾九駄四わ上屋ふきニ入 一 小竹二束ぬい

ふなる浅井竹 一 大縄拾三方右之ふいなわなる

一 はし九枚但根占はし右二同 八月廿六日 一 ま米一升三合長田

与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同一升三合

山口惣次郎殿 一 同一升三合田中佐介殿 一 同一升

三合中万市郎殿 一 同一升三合市拾 一 同壹升三合

新九郎 一 下白米七合五勺定衆六人中食内三人おかわ

き 一 かや廿駄築地上屋普請二入 一 小竹五束右同

二入但浅井竹 一 なわ拾七方右同ふいなわなる 一

はし九枚右同根占はし 八月廿七日 一 ま米一升三合長田与吉殿

一 ま米一升三合楠本内蔵丞殿 一 同一升三合山口

加藤左衛門殿 一 同一升三合惣次郎殿 一 同一升三

合田中佐介殿 一 同一升三合中萬市郎殿 一 同一升

三合新九郎 一 同一升三合市拾 一 下白米定衆六人

中食内三人ハをかわき三人ハ番こ小取 八月廿八日 一 ま米一升三

合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同

升三合山口加藤左衛門殿 一 同一升三合惣次郎殿 一

同一升三合田中佐介殿 一 同一升三合中萬市郎殿

一 同一升三合市拾 一 同一升三合新九郎 一 はし

合七拾八枚内四拾七枚根占ヨリ參候 内卅壹枚爰元ニて

普請夫あミ候 一 たる木六佰かや上屋ニ入右同 一

柱八拾本右同ニ入内四本長さ壹定三尺五寸 一 はり四

拾右同 一 けた四拾三右同 一 むねの木廿同 一

たふさ木八拾同長さ七勺五寸ひろさ五寸五分あつさ七分

一 せかい板八拾枚長さ・ひろさ・あつさ右同 一

う立四拾右同但古柱なり、

是まてかや上屋ノ分

八月廿九日 板上屋之分

一 ま米一升三合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵

丞殿 一 同一升三合山口加藤左衛門殿 一 同一升三

合山口惣次郎殿 一 同一升三合田中佐介殿 一 同

升三合中萬市郎殿 一 同一升三合市拾 一 同一升三

合新九郎 一 同壹升三合ふき釘作有馬主水助 一 す

き込壹ツ右入釘長さ二寸五分百八拾二本 地鉄ハ前のを

ろし鉄之内なり 一 下白米六合三勺定衆五人之中食内

木わき三人鍛冶番子二人 八月卅日 一 同一升三合長田与吉殿

一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同一升三合山口惣次

郎殿 一 同 一 升三合田中佐介殿 一 同 一 升三合中萬
 市郎殿 一 同 一 升三合新九郎 一 同 一 升三合市郎
 一 下白米三合八勺定衆三人中食木わき 一 真米一升
 三合長田与吉殿 一 同 一 升三合楠本内蔵殿 一 同 一
 升三合山口加藤左衛門殿 一 同 一 升三合同惣二郎殿
 一 同 一 升三合田中佐介殿 一 同 一 升三合中馬市郎
 一 同 一 升三合市丞 一 同 一 升三合甚九郎 一 下白
 米三合八勺定衆三人之中食木わき 一 真米一升三合長
 田与吉殿 一 同 一 升三合内倉殿 一 同 一 升三合田中
 佐介 一 同 一 升三合山口宗二郎 一 下白米八合八勺
 定衆七人中食木分鍛冶番子迄 一 同 一 升三合加藤主水
 介ふき釘作二寸五分百九十五 一 荒かね九百目右同ニ
 入 一 炭三ツ右同 一 真米^{九月三日}一升三合長田与吉殿 一
 同 一 升三合内蔵殿 一 同 一 升三合同惣二郎 一 同 一
 升三合田中佐介 一 同 一 升三合主水丞ふき釘作二寸五
 分釘百八十五作候 一 荒かね一貫目右同ニ入 一 鍛
 冶炭四ツ右同ニ入 一 下白米八合八勺定衆七人木分三
 人加冶番子二人ハ木取二人右同中食 一 同 一 升三合長

田与吉殿 一 同 一 升三合楠本内倉殿 一 同 一 升三合
 山口惣二郎殿 一 同 一 升三合田中佐介殿 一 同 一 升
 三合中馬市郎殿 一 同 一 升三合市丞殿 一 同 一 升三合
 新九郎 一 同 一 升三合有馬主水介殿釘作釘数貳百三十
 八長さ貳寸五分 一 荒かね一貫四百目右同細工ニ入
 一 炭四ツ右同 一 下白米二合五勺定衆二人中食右之
 加冶番子 一 真米^{九月四日ノ晩}四合三勺川邊弥左衛門 一 同 四合
 三勺坂本利右衛門 一 同 一 升三合長田与吉 一 同 一
 升三合楠本内倉 一 同 一 升三合山口惣二郎 一 同 一
 升三合田中佐介 一 同 一 升三合新九郎 一 同 一 升三
 合市丞 一 同 一 升三合坂本利右衛門 一 同 一 升三
 合川邊弥左衛門 一 同 一 升三合有馬与市 一 同 一 升
 三合同名主水介ふき釘長さ二寸五分数貳百三拾四作候時
 之食米こしつ、薪、かねハ前ノ遺残 一 鍛炭^{九月五日}貳ツ右同
 一 下白米六合三勺定衆五人ノ中食内二人ハ加冶番子
 一 真米四合三勺中馬市郎殿 朝一度分是ヨリ罷帰被
 申候 一 同 五合道半米ニなる 一 同 四合三勺田中佐
 介殿 朝^{九月六日}度分 一 同 一 升八右両人之半米 一 同 一

升三合長田与吉殿 一 同 一升三合楠本内蔵殿 一 同
 一升三合山口惣二郎殿 一 同 一升三合新九郎 一 同
 一升三合坂本利右衛門 一 同 一升三合川邊弥左衛門
 一 同 一升三合有馬与市 一 下白米五合ハ定衆四人中
 食内二人鍛冶番子 一 真米一升三合鍛冶主水助殿 一
 地鉄ハ古釘なり釘数四百六十五長さ二寸五分 一 炭
 込式ツ右時三入 一 真米一升三合長田与吉殿 一 同
 一升三合楠本内倉殿 一 同 一升三合有馬与市殿 一 同
 同 一升三合山口惣二郎殿 一 同 一升三合坂本利右衛門
 殿 一 同 一升三合ハ河邊弥左衛門殿 一 同 一升三合
 新九郎 一 白米三合八勺定衆三人中食但木わき申候
 九月八日
 一 真米一升三合長田与吉殿 一 同 一升三合楠本内蔵
 丞殿 一 同 一升三合有馬与市殿 一 同 一升三合坂本
 利右衛門殿 一 同 一升三合ハ河邊弥左衛門殿 一 同
 一升三合新九郎 一 同 一升三合山口惣二郎殿 一 白
 米三合八勺定衆三人中食但木わき申候 一 真米壹升三
 合長田与吉殿 一 同 一升三合楠本内蔵殿 一 同 一升
 三合山口惣二郎殿 一 同 一升三合新九郎 一 同 一升
 三合坂本利右衛門殿 一 同 一升三合河邊弥左衛門殿
 一 同 一升三合有馬主水助殿二寸五分釘二百五拾作候
 一 すミ二ツ右三入 一 地鉄古釘なり右之時 一 下
 白米三合八勺定衆三人中食鍛冶番子番上小取まで 一
 九月十日
 真米一升三合長田与吉殿 一 同 壹升三合楠本内蔵丞
 殿 一 同 壹升三合坂本利右衛門殿 一 同 一升三合河
 邊弥左衛門殿 一 同 一升三合新九郎 一 同 一升三合
 山口惣二郎殿 一 同 一升三合有馬与市殿 一 同 一升
 三合鍛冶主水助殿三寸五分釘二百六拾作申候 一 すミ
 込二ツ右同 一 地鉄ハ古釘なり右同 一 下白米三合
 八勺定衆三人中食鍛冶番子大工小取まで 一 鳥目三貫
 文長田与吉殿作朝ニ相渡申候日数 一 同 三貫文楠本内
 蔵殿作料ニ相渡申候日数 一 同 貳貫文山口惣二郎殿作
 料ニ相渡日数 一 同 壹貫文有馬与市殿作料ニ相渡日数
 一 真米一升三合楠本内蔵丞殿 一 同 一升三合有馬
 与市殿 一 同 一升三合山口惣二郎殿 一 同 一升三合
 河邊弥左衛門殿 一 真米壹升三合坂本利右衛門殿 一
 九月十一日
 同 一升三合新九郎 一 同 鍛冶主水助殿 釘作二寸五

分釘百廿三 一 炭込二ツ地鉄古釘右同入定衆やきすミ

一 下白米七合五勺定衆六人中食番上小取木わき鍛冶

番子まで 一 九月十二日 真米一升三合坂本利右衛門殿 一 同一

升三合河邊弥左衛門殿 一 同壹升三合新九郎 一 同

一升三合鍛冶主水助殿 一 釘貳百五拾二寸五分釘作申

候 一 すミ込二ツ右二入定衆やき申候 一 荒鉄廿斤

右二入是ヨリ濱崎吉右衛門納なり 一 下白米壹合貳勺

五才定衆一人中食右之番子 一 九月十三日 真米一升三合有馬与吉

殿 一 同升三合山口惣二郎殿 一 同壹升三合河邊

弥左衛門殿 一 同升三合坂本利右衛門殿 一 同一

升三合新九郎 一 九月十四日 同升三合長田与吉殿 一 同一升

三合有馬与市殿 一 同壹升三合山口惣次郎殿 一 同

一升三合河邊弥左衛門殿 一 同一升三合新九郎 一

同升三合有馬主水助殿 三寸五分釘貳百六拾六作申候

一 すミたわら三ツ右同入定衆やき候 一 荒鉄壹貫

百廿目但七斤釘地鉄ニなる濱崎吉右衛門納なり 一 下

白米一升定衆四人中食ニなる鍛冶番子二人番上小取二人

どうでい家ふきの故二合五勺ツ、なり 一 九月十五日 真米一升三

合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵殿 一 同一升

三合山口惣治郎殿 一 同一升三合河邊弥左衛門 一

同一升三合坂本利右衛門殿 一 同一升三合新九郎 一

同一升三合有馬主水助殿二寸五分釘三百十ヲ作申候 一

すミたわら二ツ右同二入 定夫やき申候 一 下白米

一合二勺五才定衆壹人中食鍛冶番子 一 九月十六日 真米壹升三合

長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵殿 一 同一升三

合有馬与市殿 一 同一升三合山口惣二郎殿 一 同一

升三合坂本利右衛門殿 一 真米一升三合川邊弥左衛門

殿 一 同一升三合新九郎 一 九月十六日 同八合六勺安藤作市殿

一 下白米二合五勺定衆中食右同普請 一 九月十七日 真米壹升

三合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内蔵丞殿 一 同

一升三合有馬与市殿 一 同一升三合山口惣次郎殿 一

同一升三合河邊弥左衛門殿 一 同一升三合新九郎

一 同壹升三合有馬主水助殿二寸五分釘百五拾作申候

一 すミ込三ツ右入普請夫やきすミ 一 荒鉄拾壹斤同

地かね湊吉右衛門殿納なり 一 同下白米七合五勺定衆

六人中食きわき番上子取鍛冶番子まで 一 九月十七日 下白米五合

大工新九郎罷帰り候時道半食 一 真米一升三合長田与

吉殿 一 同升三合楠本内蔵丞殿 一 同升三合河

邊弥左衛門殿 一 同升三合山口惣次郎殿 一 同

升三合有馬与市殿 一 同升三合鍛冶主水助殿二寸五

分釘百八十作申候 一 すミたわら式ツ右入 一 同白

米二合定衆二人中食鍛冶番子 一 同升三合楠本内蔵

丞殿 一 同老升三合有馬与市殿 一 同升三合河邊

弥左衛門殿 一 同升三合安田作市殿 一 真米一升

三合長田与吉殿 一 同升三合楠本内蔵丞殿 一 同

一升三合有馬与市殿 一 同升三合山口惣次郎殿 一

同升三合川邊弥左衛門殿 一 同升三合安藤作市

殿 一 同升三合主水左衛門殿 築地上屋ふき釘式寸

五分釘百九十二 一 炭二ツ五寸釘廿四 一 荒鉄七斤

半右之釘ニなる濱崎吉右衛門殿より参鉄也 一 白米三

合八勺定衆三人中食小取番子まで 一 真米一升三合長

田与吉殿土屋細工 一 同升三合楠本内蔵殿同細工

一 同升三合有馬与市殿同細工 一 真米一升三合坂

本利右衛門殿同細工 一 同升三合川邊弥左衛門殿同

一 同升三合安藤作市殿上屋細工 一 白米一升一

合式勺五才定衆五人上屋内三人は木分に 一 真米一

升三合長田与吉殿 一 同升三合内蔵殿 一 同升

三合有馬与市殿 一 同升三合山口加藤左衛門殿 一

同升三合同宗二郎殿 一 同升三合河邊弥左衛門

殿 一 同老升三合坂本利右衛門殿 一 同升三合安

藤作市殿 一 同升三合有馬主水左衛門殿 釘作但二

寸五分ふき釘百十三作申候 一 すミ込三ツ右同細工ニ

入 一 荒鉄拾七斤右同細工入但濱崎吉右衛門納之 一

下白米八合八勺定衆七人中食但木分三人加治番子二人

大工小取二人 一 真米一升三合楠本内蔵殿之内西之御

門脇しのひ帰し細工 一 同升三合坂利右衛門同細工

一 同升三合有馬与市殿同細工 一 同升三合川

弥左衛門同細工 一 同升三合安藤作市殿同細工 一

同升三合かち主水左衛門ふき釘式百五十作候 一

かちすミ込二ツ右ニ入普請夫焼炭地かね前ニおなしか

ね也 一 白米五合門屋ふき二人かち番子二人之定衆中

食 一 真米一升三合長田与市殿 一 同升三合内蔵

七 國分諸古記

殿 一 同一升三合弥左衛門殿 一 同一升三合利右衛門殿 一 同一升三合作市殿 一 下白米四合八勺定衆三人中食ニ成木分之時 九月廿五日 一 真米一升三合与吉殿 一 同壹升三合内藏殿 一 同壹升三合与市殿 一 同一升三合加藤左衛門殿 一 同一升三合弥左衛門殿 一 同壹升三合作市殿 一 同一升三合利右衛門殿 一 同一升三合加ち主水左衛門殿但五寸釘七十二作候 一 すミ込三ツ右同 一 下白米七合五勺代所定衆六人中食但三内西御門脇ノ木取木分ち番子 九月廿六日 一 真米一升三合長田与吉殿右御門番屋ふき細工也 一 同一升三合楠本内藏殿右同 一 同一升三合山口加藤左衛門殿右同 一 同宗次郎殿右同 一 同一升三合有馬与市殿右同 一 同一升三合坂本利右衛門殿右同 一 同一升三合河邊弥左衛門殿右同 一 同一升三合安藤作市殿右同 九月廿六日 一 真米一升三合加ち主水左衛門殿右同細工也 一 すミ二ツ右同二寸五分釘式百五ツ作申候 一 荒鉄四斤半右細工釘ニ入 濱崎吉左衛門殿納 一 下白米八合八勺定衆七人ノ中食但加ち番子細工木取ぬりかへ普請まで仕候 一

ふき板千百丁右番屋上ふきニ入 一 柱五本右同ニ入 一 貫九丁右同ニ入 一 楠ノふき板廿五枚御門わき屏ノ上ふき 一 めおそひ廿五同 一 板持四ツ 一 けた二ツ長さ一丈四尺右同ニ入 一 かわら二ツ右同ニ入長さ三尋 一 忍ひ返ノ木五十四本二寸方 一 ぬき四ツ右同但御門左右分 一 ふき釘但番や六百ハ納戸より出候 九月廿七日 一 真米一升三合長田与吉殿 一 同一升三合楠本内藏殿 一 同一升三合有馬与一殿 一 同一升三合宗二郎 一 同一升三合安藤作市 一 同一升三合かち主水左衛門三内西御門二寸五分釘二百十作候 一 炭三ツ右ニ入 一 荒鉄十斤ハ右之釘ニ入 濱崎吉左衛門殿納 一 白米六合三尺之内御門番屋かへぬりかち番子中食 一 小竹二束同番屋かへニ入 一 小縄三方右同ニ入 九月廿九日 一 鳥目一貫五百六十文長田与吉殿八月九月分濟 一 同一貫六百八十文楠本殿八月九月濟 一 同一貫百文有馬与一殿渡八月九月實濟 一 鳥目一貫五百文山口宗二殿八月九月迄之分濟、
右於上様御代元和二年丙辰八月五日御内築地上屋御普

請大工帳、御台所役濱田五兵衛帳留写之、本書右五兵衛子孫濱田五郎左衛門格護、

○寛永八年九月廿五日 中納言様國府江被遊 御光儀、

於喜入紹嘉殿宅御誦被遊候書留写、

但於上様御逝去翌年之事ニ而候得ハ、於上様御逝

去後迄、紹嘉殿國府江為被成御座と相見得候、

題 紅葉

こく過す秋ハあらしな薄くこく

もみつる岡に伴なへる袖

いろを知人待えたる紅葉はは

けふ一しほの詠め也けり

四袖を待てやいろの増るらん

栄へさかふる庭の紅葉は

尋常にあらぬすまいや諸人の

心とゝむる庭の紅葉は

思きやかつ見へ初る紅葉はを

またきにとはん袖の有とは

山蔭に見ゆる紅葉も今日社は

家久

豊後守
久賀

紹嘉

新納三河守
久徳

金剛寺
意仙

いろ一入の詠めなりけり

枝かハす木々の紅葉の陰にきて

にしきかた敷諸人の袖

折をえてまちける袖の色香をも

しるやき高き陰の紅葉は

遠望峯頭晴景鮮

青林楓影満山連

醉中不覺秋將暮

疑是千紅三月天

常葉なる山にもみちのあらハれて

けふに妙なる詠めなりけり

植置し庭のもみちのいろ／＼に

いつくの秋はさもあらハあれ

幾秋を送りむかひて今日ハ猶

色にいろそふ庭の紅葉は

陰高き紅葉のもとに立寄て

詠めにあかぬけふの暮哉

時をえて見る人からの紅葉はは

渋谷四郎左衛門
重持

有川淡路守
貞守

藤田助右衛門
実房

為善

鎌田土佐守
政重

蒲生宮内少輔
清宣

東郷少監物
重村

正壽院
常栄

染ますいろや千入なるらん
(ちしほカ)

家村筑後入道
壽□

常盤木もいろに成けり立ましる

もみちのこすゑ朝日いさよふ

東郷肥前守
重位

神やとるさかり久しき紅葉はの

折を待えてときめける岡

川上伊与入道
久晴

幾千代もたつやかさねんから錦

あかね紅葉の陰のやとりは

喜入摂津守
忠政

寛政八年 九月廿五日

中納言様國府江被成 御光儀、於紹嘉宅紅葉之題ニ而

御歌被遊候、右之衆被召出、一首ツ、如此候、

右 御歌書一冊紙数五枚、

○慶長十七壬子年春より國府外城ニ罷成候由、野村伊賀

守書附之内ニ相見得御地頭之事、

國付御家老

一 國府外城始御地頭

喜入大炊入道紹嘉老

一 御地頭

喜入吉兵衛殿
洪久

一 御地頭

喜入久右衛門殿

一 御地頭

寛文三年同八年戊申十二月十二日中將様御子
御他界被成候

嶋津又六殿

寛文九年己酉十二月二十二日御家老御城代
嶋津権七殿

但縫殿 伊賀殿 勘解由殿 將監殿与段々御名替被

成候由、

宝永三年丙戌正月九日

嶋津圖書殿

一 御地頭

御家老

肝付主殿殿

一 御地頭

御家老

名越右膳殿

一 御地頭

大御目附御家老

樺山主計殿

一 御地頭

若御年寄

島津仲殿

延享五年辰八月二十八日

大御目附

山岡齊宮殿

一 御地頭

○國府噺役

一与

一 東郷五郎兵衛殿

一 平田利右衛門殿

二 南雲沓岐殿

二 野村外記殿

一与

一 有馬弥左衛門殿
 一 豎山半左衛門殿
 二 肥後少右衛門殿
 二 家村次左衛門殿
 一与
 一 鎌田新左衛門殿
 一 坂元久左衛門殿
 二 有馬清左衛門殿
 二 市成喜右衛門殿
 一 右賦一二付之ことごとく、一年ツ、成とも半年成とも
 一 右寛文七年丁未二月三日、野村源右衛門
 一 右本書式通國府賦所有之候、同役噺へ申達写之、
 一 御城へ被召出、御吟味衆野津弥五左衛門殿を以、嶋
 津圖書老が國府噺役十式人ニ而相勤候得共、此節が
 四人定役ニ被仰付候段、源右衛門日帳ニ相見得申
 候、
 衆書出候而御相談申候、然處上原宗右衛門・伊瀬知源右
 衛門・坂元休左衛門・野村源右衛門各可然由被仰候間、
 以其心得御奉公可被入精者也、
 末二月三日
 島津又六
 島津圖書

右賦一二付之ことごとく、一年ツ、成とも半年成とも
 替合に噺役可被相勤者也、
 酉七月廿四日
 喜入久右衛門

國府噺衆中

覺

先地頭代ニ者、噺役拾貳人ニ而四人替合ニ一年ツ、被相勤
 候、當年も其分ニ可有之歟之由被申出ニ付而、何れ茂御
 老中衆へ御相談申候處、何方之地頭所も替合ニ者不相勤
 候間、年生能衆見合可申由被仰候ニ付、近年噺役被仕候

○慶長十九年大坂乱野村源三郎書留之内写

一慶長十九年冬比大坂一乱ニ付野村源三郎被召立、日向
 高岡が 中納言様御供立ニ而細嶋江御滞留、御供船三
 百艘山川之津江相揃之由候得共、北風しきりにて東目
 廻りかたき由ニ而、細嶋江御船待日数十五六日もやと

覚候、其間ニ大坂より猿渡新介殿・伊集院半右衛門殿
 兩人下着ニ而、もはや大坂取合相始候様被申上、殊之
 外御急キニ而、美々津・細嶋之間ニ御供船廿四五艘御
 かからせ、少々軍衆被乗、相残軍勢者船廻り次第御跡
 可参由ニ而御出船催候、國府上乘喜入久右衛門殿、
 鹿兒島衆国分衆已上十人被為乗、都合上下八拾四人乗
 組、夜は横寝も不罷成候、御渡海之催ニ而御馬など
 やすめられ候刻、大坂ノ小船ニ而福屋五郎兵衛殿被罷
 下、はや無事ニ罷成候由被申上候ニ付 御下向被遊、
 野村源三郎事も正月始致帰国候段、本名源三郎後伊賀
 守書留之内ニ相見得候、

一 御上洛御供衆之賦写

御上洛御供衆之賦

高五十七石六斗七升二合

高七十石

夫耆人

野村源三郎殿

中嶋四郎右衛門殿

高五十六石九斗一升八合
 夫耆人
 高拾五石

永吉藤左衛門殿

垂野新左衛門殿

高四斗一升

中滿清六殿

合式百石主從四人

鉄砲耆挺

玉藥百放

持道具

こしうちわ一本

鎚耆本

耆人一日分ノ賦

一 錢五十文

夫錢

一 同三十文

木質

一 同十文

故実

一 同十七文

米五合ノ代

耆人五ヶ月分

一 錢拾六貫五拾文 銀子ニメ五十六匁一分七厘五毛

但老石ニ付一匁一分二厘三毛

一 高五十石ニ付いの子一ツ宛

於大坂可被相納之也、

慶長十九年

十月廿八日

紹嘉 印

右本書于今有之、

一 慶長二十年五月、又々大坂立として入木まで被召立候

得共、五月七日落城之由候、

右趣、野村源三郎後名伊賀守書留之内ニ相見得候、

國府惣廟

社家頭取社司斜木

○伊勢天照太神宮

美濃

右天照太神宮者、往古 龍伯様御屋敷ノ西之方森之下

ニ御宮作御座候處、慶長年間 龍伯様富之限ノ國府麓

江御屋形御移之時分、京都吉田殿江御使者を以被仰

入、花表之額太神宮与書記、國府宗廟与御崇、神領高

拾貳石御寄附之由候得共、其後高被召揚候旨申傳候、

慶長七年寅師走從 龍伯様御造宮之棟札有之候、且又

國府賦所屋敷之内ニ御宮跡大掠木有之、其下ニ幣帛有

之候得共、近キ比落木等ニ而今ハ無御座候、慶長七年

ノ寛延三年迄百四拾九年ニ罷成候、

御

手力雄タチカラヲの神

御神躰木像

▲神

御鏡

天照皇太神宮

御神躰御木像

躰

栲幡タケハタチ千々ヒメ姫

御神躰木像

右御三躰御相殿御木像之由、斜木美濃ノ致承達候、

一 宝殿小板葺礎桁行九尺七寸、梁行五尺外ニ三方縁、

宝殿拝殿取合

一 廊下小板葺九尺方

一 拝殿茅葺礎五敷三間三尺

右三行檢者附御修甫

一 御石之花表有 太神宮御神名

一 御供所茅葺四敷三間

右所修甫

一 御長刀 一振

右宝物于今御宝殿ニ有之候、

聖主天中天

一 御祭米五斗式升五合、年々御蔵入を被仰付候、

大檀那大梵天王

一 御祭八月彼岸、九月十五日、十一月中西ノ日御神

迦陵頻伽聲

供指上、御神樂神事御司囃を相勤候、

一 殿様御光儀之節 御代参有御参錢、

△奉造宮伊勢天照皇太神宮宝殿一字拜殿一宅

右 御光儀日帳見合記之、

哀愍衆生者

一 御地頭御初而入之節、御支度にて第一ニ御参詣御参

大願主帝釈天王

錢青銅百足、

我等今敬礼

右御地頭御初而入、日帳右同断、

右奉為天長地久御願円滿殊信心大檀主藤原義久朝臣御息

一 下屋敷^{十六間} 壹反四畦廿式步大豆式表五升

右御建立の御より被召附候、
御伊勢 燈明

下屋敷^{十五間} 壹反三畦大ツ

當郡無事諸人歡喜城内堅若軍勝利上和下睦吉祥成就一切

一 下屋敷五畦大ツ壹斗

御伊勢太夫 出雲

障碍天然解脫心中所求国滿故也仍奉造立懇精之趣如件

蘭山^{五間} 三畦十步

當奉行伊集院下野入道久治 惣大工長田七郎左工門

一中唐竹百本

慶長七年壬寅霜月二十四日 鍛冶 有馬讚岐守

中屋敷^{廿二間} 壹反五畦十式步大ツ式表八合

遷宮師法印覺遍敬白

一 中屋敷五畦大ツ式斗三升

御伊勢 内待

棟札裏ニ

法佛風災應身 作事奉行衆

棟札

水災金すきとふに孔を穿

村田源左衛門

意蓮火災報口

江田源左衛門

当地頭

彩色絵師

右御棟札御宝殿之内ニ有之、

嶋津勘解由久當

野村福泉坊公綱

寺社奉行

鹿兒島主取大工

棟札

嶋津織部久達

東勘左衛門頼重

奉修宮伊勢宮御宝殿小板葺拜殿草葺抑天照太神者本斯国

鹿兒島檢使

太神也雖然伊勢國崇秘之後靈光著于世先邦君 龍伯公聊

酒匂幸左衛門忠榮

有志願自伊勢國重移坐此國奉号伊勢宮宝殿蔭之以庁木頭

國府噺

鄭重至誠之微拜殿葺之以生草守茅茨不□之誠然而終為国

宮原藤兵衛種昭

府惣社爾來每向朽廢乃告公門以修治之今又隨旧規自去冬

同

至今奉^(春力)二殿修補功畢冀 金闕清寧宝祚遠長殊 太守從四

久木田七郎右衛門重賢

位上左近衛中將源朝臣綱貴嚴君并從四位下待從源朝臣吉

同

貴公之尊躰堅固宝等遐遠公苗咲繁家門椿樹茂萬民安泰百

野村外記安綱

穀豐饒神風吹四方仁雨酒者弘結忌邪曲之言垢黑意照正直

同

之頂察君丹心且又被除天地之間所起災殃猶為常世之浪重

坂本休左衛門清榮

歸國謹言謹記

右御棟札御宝殿之内ニ有之、

維時元祿第十丁丑春正月吉日

一 伊勢太神宮

大檀主薩隅日三州大守左近衛中將源朝臣綱貴公

右古來者 龍伯様御屋地々西之方森之下ニ御宮作御座

候處、慶長年間富隈ノ國府江御屋形御移之時分、右御宮作御屋敷ノ東ニ被召直、京都吉田殿江御使者を以被仰入、花表之額太神宮与書記、國府之惣廟与御崇メ、

神領高拾貳石御寄附之由申傳候、其後高者被召上候、當分者年中三度之御祭米五斗貳升五合從御藏入被仰

付、八月彼岸入之日、九月中之九日、十一月中之酉、

御祭無懈怠毎年相勤申候、此外由緒書物等無御座候、

元禄十一年寅十一月廿八日 祠官 斜木左京

右國府賦所神社帳ニ相見得候、

一 斜木美濃文書写

口上

其方祖父斜木飛彈殿并親父斜木次郎助殿儀、御先代

之時分、我等江上井村地頭被仰付候砌、上井衆中之儀

別条無之候、御尋ニ付其段書付進之候、以上、

卯正月十九日

今井松閑 印

斜木左京殿

右元文五年申八月晦日、寺社方取次衆今井与平次殿被差越候節、噯野村喜太夫、横目山内孝兵衛・野村伊右

衛門相勤候處、斜木美濃ノ右文書與平次殿へ掛御目候得者、與平次殿写被取候故、此方江も写置候、本書斜木美濃格護ニ而候、

板札

▲相傳フ慶長年間 大守義久公欲レ奉下勸二請シ 天照太

神ヲ於西國上而依二近衛公一奏 聞シ玉フ焉於是雖二

天子神慮難レ計而勅使赴二勢州一山田ニ令三巫祝ノ窺二

神意一神意納受之靈驗隨二幣帛一現然タリ尔来隅州國府

郷新城之西擇レ地集レ材而宮殿成焉華表之額為二太

神宮一也今歲正徳元年辛卯之夏予為レ拜二受許狀一東促

行裝一也然而神宮所典籍ニ不相見也且 天照太神之号

日本國中不レ多也隅州何故稱二 天照太神一乎大明神

権現之間謂レ可改二勸請一拒レム焉ヲ雖然創造之時華表之

額刻レ石ヲ巖ニ然タリ 于レ今一豈可レ誣哉猶訴而不レ已

於茲神官所評議曰慶長以來年久宮司不ニ上京一其中間

典籍有ニ失脱一也歟国俗之所レ傳且ツ刻レ石之文字何可

レ疑乎復レ旧正徳元辛卯六月十八日奉レ載ニ典籍大隅国

天照太神^一而拝受祠官之許狀矣嗚呼正直^ハ雖^レ非^二一旦ノ依怙^一必蒙日月之憐神語著明哉從^レ是因^二敬益威之德^一萬庶以助除殃之驗国土安全以往幾千歲也

大隅国府 天照太神祠官

正徳元年辛卯八月吉祥日

斜木出雲守敬白

右板札一枚ニ相記御宝殿之内ニ有之、

許狀

一隅州曾於郡國府天照太神之祠官斜木出雲守平清進、恒例之神事參勤之時、可着風折烏帽子狩衣者神道裁許之狀如件、

正徳元^{辛卯}年六月十八日

神祇管領長上從二位侍從卜部朝臣 印判

右許狀写、本書斜木美濃格護、

斜木美濃由緒書

一斜木左京其子斜木出雲其子斜木美濃迄

天照太神宮祠官三代相勤申候、 龍伯公

天照大神宮被遊御崇敬候、最初主取社人五次郎与申者相勤候、其子權内相勤申候、其後谷口右京卜申者一節相勤申候処ニ、私祖父斜木左京国府上井村韓國大明神祠官ニて御座候処ニ、延宝二年寅十二月寺社御奉行所御免御證文を以、天照太神宮祠官并所社家頭取役被仰付候、然者私親斜木出雲事、正徳元年卯六月十八日致上京候処ニ、吉田様被仰候者、慶長年間以来、天照太神宮祠官致上京候例、帳面ニ不相見得候由被仰候ニ付、親出雲被申上候ハ、慶長年間、太守義久天照太神宮國府江被致勸請候節、天照太神之号近衛様御取持ニ而被遊御免候、尤花表額ニも天照太神宮卜御座候由委細申上候處、左候ハ、何ッ疑者有之間敷与被仰、夫ハ天照太神祠官斜木出雲守与許狀初而申請候、私儀享保六丑四月居官之許狀并元文二年四月上京仕、天照太神宮社司斜木美濃守平清詮与許狀頂載仕、三代相勤申候、

斜木

美濃

許狀写

一隅州曾於郡國分天照太神之祠官斜木美濃守平清詮、任先例神事參勤之時、可着風折烏帽子狩衣者神道裁許之狀如件、

正徳元辛卯年六月十八日

神祇管領長上從二位侍從卜部朝臣 印判

許狀写

一赤色千早之事、許容大隅曾於郡國分天照太神宮之社司斜木美濃守平清詮、向後可着用之狀如件、

元文二年四月五日

神祇管領長上卜部朝臣兼確 印

右許狀式通本書斜木美濃格護

國分麓

別當

○稻荷大明神

金剛寺格護

右稻荷大明神者、慶長十二年丁未八月十四日御建立也、御當家九代 忠國公御子相模守友久天勇公御子相模守忠幸一瓢公、出水嶋津筑後守殿之御聲にて候處、御前様御面顏惡敷候故、一瓢公之御氣ニ不入、以御仕

合御離別被成度御心中雖有之候、御前様御奉公至厚ニ而年月押移候、然処御當家千代 立久公御舍弟河内守久逸公之御子又四郎善久公之御後室 日新公之御懷梅窓様御容顔美麗之段一瓢公被聞召、以使節御縁与被成度旨再三被仰入候得共、不通ニ御返事無之候、其後一瓢公諸臣下ニ被仰合、御計略を以御前様を薩摩山堂ニ奉捨置、一七日ニ當候日、御前様并女房衆六人於彼堂猛火之煙となりたもふ之由候、其後又一瓢公ハ梅窓様を頼ニ御縁興被仰入、菊三郎日新公を御養子ニ被成候ハ、兎も角もと御返答有之、一瓢公御養子ニ被成候ニ付御縁与相濟、田布施江御移御縁住被遊候、右先御前様御遺恨ニ付御建立也、

但慶長十二年ハ寛延三年迄百四十四年ニ成ル、

▲御神躰御木像

一宝殿茅葺礎四敷三間但前ニ縁有、

右御修甫御合力銀被仰付候、

但自分修甫

一石花表

一中屋敷七間半六畦拾五步

稻荷
別當

大ツ壺表五升三合

一下田六間四畦廿六步

稻荷
別當

初壺表九升

一御祭日十一月三日御神供指上別當々讀經、尤五節句之

勤無懈怠被相勤候、

棟札

聖主天中天

大檀那大梵天王

迦陵頻伽聲

稻荷大明神宝殿二間三間

一字

衰慙衆生者

大願主帝釈天王

我等今敬礼

右明神者嶋津一瓢老御前依出合不和案外離別也是故對

御當家遺恨深結無治術処雖送数年月日其憂愁于今不絶

以爰 藤原朝臣義久公并家久公令崇敬奉建立一字宝殿

然者国家長保万民康寧壯園太平晝夜無事風雨順時五穀成就心中所求如意満足故也仍意趣如件

當地頭山田越前入道 大工長田七郎左エ門入道

慶長十二年丁未八月十四日勸請

普請奉行法印盛有

當座主權大僧都圓盛

右棟札御宝殿有

一伊作記云抑伊作ノ家ト申ハ御當家九代目陸奥寺忠国大

岳公御子三人御座ス宗子友久天勇公ハ父ノ御跡ヲ不統

天倫ヲ守リ田布施ノ郷ニ居住シ玉フ二男立久節山公父ノ

御跡ヲ給賜三男久逸河内公ハ伊作七代目犬安殿姉御婿

也其時高橋ハ伊地知六郎ニ被下罷居阿多ハ阿多丹波ト

申人古来ヨリ領地仕天勇公御家臣ト成リ毎朝田布施出

仕也伊作家根元ハ御家四代忠宗公ノ御舍弟從忠長公

代々ノ領地也犬安殿迄七世也去レドモ犬安殿家接ノ御子

孫ナク剩若年ニシテ長祿二年戊寅十二月初四日卒故ニ久

逸公其跡ヲ接キ給忠長公ヨリ日新公迄伊作十代ト申也去

程ニ久逸公伊作御城ニ居住被遊田布施境ニハ松崎大藏

御番トシテ被召置永吉境ニハ滿富郷八左エ門御番トシテ被召置日新公御直親又四郎善久公ハ大殿死去ノ年ヨリ十年以後御誕生也其後善久公ハ日州久志摩ノ前主新納駿河守是久ヨリ婿御養子ニ御所望故善久公ヲ久逸公御同心被遊久志摩ニ御入郷御供衆中宮又右エ門池上又左エ門平田二郎兵衛堀之内日向都合二十人也去レドモ後御養子モ御トケ不被成又如伊作御飯郷被遊候然レドモ御前様ハ貞女不見両夫被仰伊作ノ様ニ御越御縁住被遊候去レドモ善久公二十計迄御子ナキ故ニ御歳十九ノ初春ヨリ金峯山有御誓願丑ノ時二月御参詣三年被遊成就ノ辛亥十二月十三日夜金峯山於小野山師七人ニ御参会山師申見ハ善久子孫望ノ願力可相叶行方不知失給フ次ノ壬子正月元日ノ夜御前様有御夢相枕上ニ山伏立寄給ニ汝ニ男子授ル処美正也ト腹三度撫給ト夢覺其年菊月二十三日ノ夜暁天ニ御誕生也則御名ヲ奉号菊三郎様ト候其後善久公御歳二十四明応三年甲寅四月十八日御卒去也此年犬安殿死年ノ年ヨリ覃^{オホソバ}三十七年也自夫善久公御後室久逸公御夫婦菊三郎公御寵愛頻ニシテ御歳七明応

七年戊午二月十五日海藏院ニ御登山久逸公御夫婦善久公ノ御後室海藏院ニテ伊作諸臣下ニ御酒被下候御学文無比類御歳十五丙寅八月五日御下山被遊諸臣共喜申事無限候明応九年庚申十月十一日久逸公於加世田御戦死也其後菊三郎公御懷梅窓様ト奉申ハ御容顔美麗ニシテ然モ御貞心ノ由田布施ノ友久公御子忠幸一瓢公被聞召以使節梅窓様御縁組被成度由再三雖被仰梅窓様不通ニ御返事不遊候其比一瓢公出水ノ嶋津筑後守御婿也去レドモ御前様御面顔悪クシテ一瓢公ノ御氣ニ不入以仕合御離別被成度御心中雖有之御前様御奉公至厚ニシテ年月押移畢其後一瓢公諸臣下ニ被仰合春ノ時分高橋ノ薬師参詣ニナソラヘ夫ヨリ直ニ浜遊被成兼テヨリ計略ノ事ニテ小船一艘コシラヘ汀ニ浮置御前様ヲ是船ニ載上沖中ニ漕出シ市来浦ニ押寄夫ヨリ肩輿ニ載奉リ薩摩山堂捨置諸臣下ハ如田布施罷帰一七日ニ當日御前様并女房衆六人於彼堂猛火煙成給其後又梅窓様ニ一瓢公ヨリ御縁与ノ旨以使者頻ニ被仰其時梅窓様返答ニハ貞女雖不見両夫菊三郎ヲ御世接ニ於被成菟^{ウサギ}モ角モ御意可応由有御返事一瓢公

此段被聞召上寔ニ吾雖覃ト老年未タ家督無子幸菊三郎殿猶子可被成旨大慶也縱自今以後雖有直子此約諾違變有間敷旨御誓紙被遊梅窓様へ御送賜也梅窓様御誓紙御披見被成一瓢公御心底雖無疑諸臣ノ下心中難窺旨依被仰諸臣下皆々誓紙仕梅窓様ニ進上仕其後梅窓様如田布施御移御縁住被遊云云

國府麓

代官司谷口

○若宮八幡宮

六右衛門

右若宮八幡宮者何命・初建立之年間不相知候、前代ニ者向花村之内蛭田与申所江御宮作有之候処ニ 龍伯様御意ニ而國府麓江被召置被遊御信仰候、國府麓武士方半分・本町半分・向花村惣様產生神ニ而候、古來者神領高為有之由候、

▲御神躰御木像

一宝殿茅葺礎式間方

一拝殿茅葺礎四敷三間三尺

右式行所修甫

一御供所茅葺礎三敷三間

一善神王兩社

一石花表

右三行氏子修甫

向花村
下屋敷^{十式間}十四間 五畦十八步 大ツ式斗式升四合

一下屋敷 五畦 大ツ式斗 才之丞

右社家屋敷御帳面ニ相見得候、

一御祭九月十九日、十一月中ノ卯御饗御酒指上、御神樂相動候、

棟札

奉再興若宮八幡宮

隅州國府郷若八幡宮古來安ニ鎮於蛭田之平地ニ而被レ寄附神領一所ニ以崇敬一也今向花村ニ有二若宮田名一者蓋シ其地也慶長年間以ニテ 義久公之命一移ニ宮殿於鳥越ノ岡間ニ以信仰不レ斜也物換星移而宮殿漸ク向ニ廢壞一也於レ是自レ郷司以テ至ニ庶人一励レ信心企レ造立ヲ長短ノ材木者獻從諸名潤色之銀錢者捧從郷中官司大匠盡ニ精力一宮殿不レ日成ヌ矣所レ希者國都平安郷中豐饒四時有レ祥八節攘災所謂神者依ニ人ノ敬ニ增レ威ヲ人ハ以ニ神ノ助一添レ運豈ニ不信哉

元禄十二歲次己卯陽復月丙申敬白

暖
坂本休左衛門
同 服部茂左工門
同 伊地知治部右工門
同 李田善左工門
同 西郷八兵衛
同 野村五左衛門
同 野村外記
同 津曲善左工門
同 福永佐左衛門
同 匠師
山口字左衛門
同 代官前
谷口右近
宮原藤兵衛
種昭

一若宮八幡宮但建立年間相知不申候、

右前代者向花村之内蛭田与申所江御宮作有之候処ニ、

龍伯様御意ニ而國府麓江被召置、御建立被遊候而御信

仰之由候、國府武士方半分・本町半分・向花村惣様之

產生神ニ而御座候、古來者神領過分為有之由申傳候、

于今若宮田・彼岸祭田・油田与申字之地方向花村之内

ニ御座候、此外由緒書物等無之段、元禄十七年寅十一

月國府賦所帳留ニ相見得候、

曹洞宗福昌寺末寺

○文明山

龍昌寺

右龍昌寺者勸請開山石屋和尚、慶長十年開基也、

龍伯様御菩提所ニ被遊御建立候、龍伯様御位牌・御

肉牙・御舍利、外ニ長持寺殿大中良等庵主伯圍様、蓮
昌妙守庵主於平様御位牌御安置、高百石 龍伯様御朱
印ニ而被召附候得共、其已後被相滅、当分三十三石之
寺高ニ而候、住持代合之節者御城虎之間ニ而被仰付 御
目見御寺ニ而候処、慶長十年ノ寛延三年迄百四十六年
ニ罷成候、

▲本尊釋迦如来 但座像御長一尺二寸作者不知 一尊

▲脇士 但立像御長四寸五分作者不知 二尊

▲本尊釋迦滔佛座像 但後光臺座有 一尊

右弥勒院隱居妙徳院寄進

▲龍昌寺殿 貫明存忠庵主 御牌一基

右御厨子ニ御安置

▲義久公御肉牙

▲同御舍利

右御同厨子ニ御安置、

右御外家及破損御修甫之願申上趣有之、願之通被

仰付、寛保二年壬戌四月十五日寺社方取次平田

源左衛門殿新 御厨子御持來ニ而、所役々并諸

寺院被罷出、御入佛御供養首尾能相濟申候、

但御厨子御紋付

▲長持寺殿 大中良等公庵主

御牌一基

右長持寺与申候寺、伊東殿城下飢肥江有之由候、右

御牌龍昌寺江被遊御立候訳由緒不詳、

▲蓮昌妙守庵主

御牌一基

御先祖 忠久公御代々御法名御位牌掛物

一幅

忠久得佛大禪定門

忠時義道佛大禪定門

久經道忍大禪定門

忠宗道義大禪定門

貞久道鑑大禪定門

氏久齡岳久公大禪定門

元久恕翁忠公大禪伯

敬外欽公大姉

久豊義天忠公大禪定門

壽山椿公大姉

忠国大岳譽公大禪定門

心華安公大姉

立久節山忠公大禪定門

鏡堂圓公大姉

忠昌圓室鑑公大禪定門

天直妙幸大姉

忠治蘭窓友公大禪定門

友久天勇機公大禪定門

忠隆興岳盛公大禪定門

心蓮安公大姉

久逸

善勝寺殿德瑤輝公大居士

永峰伊安大姉

善久越山超公太禪定門

梅窓妙芳大姉

忠幸

大年寺殿大年登公大居士

日新寺殿梅岳潤公在家菩薩

寬庭芳看大姉

貴久 南林寺殿大中良等庵主

雪窓院殿雪窓妙安大姉

義弘松齡自貞庵主

家久花心琴月大居士

一開山石屋大和尚禪師

二世大鱗大和尚

三世南嶺大和尚

四世龍現吞大和尚

五世鍊山索大和尚

六世菖山芳大和尚

七世風外嚴大和尚

八世天外真大和尚

九世智圓察大和尚

十世載月雲大和尚

十一世元黃牛大和尚

十二世仁岳堯大和尚

十三世大本智大和尚

十四世大測宅大和尚

十五世祖屋道大和尚

十六世玄海育大和尚

十七世大信仙大和尚

十八世大登用大和尚

十九世定天通大和尚

一客殿茅葺礎拾壹敷五間

一廊下板葺九間ニ五間

一茶堂茅葺礎六敷五間

一門茅葺礎明七尺式寸五部

右四行檢者衆附御修甫

一庫裡茅葺六敷六間三尺

一釜屋茅葺堀立小屋三間三尺

一免籠茅葺四敷四間

一鐘樓茅葺礎八尺四方

一下門茅葺

一馬屋茅葺四敷三間三尺

右六行所修甫并自分修甫

一下屋敷三反三畦大ツ表式斗五升

龍昌寺

内表反三畦 だび所

一下田八畦初式表斗四升

龍昌寺先

右式行御竿不入之由、寺社屋敷御帳ニ相見得候、

一石仁王 但龍昌寺十七世大信和尚建立、

▲今度國分江就被移 御殿為新地建立、本地式拾石并當

八拾石合百石被充行早、所中之諸役可為御免許候、京儀國役之時者可被相勤者也、仍狀如件、

山田越前入道

慶長十年極月十四日

理安

伊集院下野入道

抱節

龍昌寺

右本書龍昌寺格護、

一高三拾三石

右慶長十年 義久公高百石被遊 御寄附、御朱印目

祿被 仰付置候處、寛永年間右之内被召揚、當分三

拾三石寺高之由、國府賦所寺院改留帳ニ相見得候、

写

隅州桑原郡國府文明山龍昌寺之事

一龍昌寺儀者 龍伯公慶長九年從富隈國府江 御殿被成

御移、極月廿六日御移徙御座候而、翌年之春為御菩提

所御建立可被遊 上意御座候而、直 龍伯公被遊 御

光儀、寺地之四境以 御杖被遊 御下知、則普請奉行

佐多越後守江被 仰付之由、山田理安・伊集院抱節江被 仰渡、其時敷皮御敷を被遊 御座候而、被遊御下知候地ニ松植置候而、于今証拠之松与申候而、龍昌寺中庭ニ有之候事、

一同十年之秋ニ至而殿堂修造早、則文明山龍昌寺与寺号山号御附被成候、様子ハ、住持南嶺和尚与 御吟味被遊候、其時南嶺和尚被申上候ハ、殿様御事ハ、天下ニ無隠文武二道之御大將与諸國々申由承候条、文武明成御用文明山与御付被成候而可然御座候由被申上候得者、龍伯公一入御悦喜ニ被思召、如何様ニ茂南嶺江御任被成由 上意御座候而、山号如此ニ御座候、寺号之儀者 龍伯之龍之字ヲ取、福昌之昌之字ヲ取、龍昌寺与御定被成候、福昌寺之昌之字ヲ御取被成候様子ハ、開山石屋和尚勸請被成候ニ付、如此ニ御定被成候由申傳候事、

一同年之極月十四日、高百石為後代御付候、御袖判之御書物迄通召置候事、

但別紙ニ写差出候、

一慶長十三年戊申二月廿一日 御肉牙落申候を、御納戸衆指宿老岐・岩切縫殿助兩人ニ被仰付、龍昌寺儀は後年 御骨之地ニ被遊候条、可納置之旨被仰付候、兩人之衆頂戴申、龍昌寺住持南嶺和尚へ渡被相納置候、于今舍利塔ニ籠御牌圖師之内ニ納置、代々嚴密ニ受取渡仕申候事、

一御死去以後、正月廿一日 御年季七月十三日御施餓鬼仕候、其後高被召上世三石ニ被召成候得共、右之御吊于今無懈怠多年相勤申候、依夫國府中近所之寺院龍昌寺為末寺、以 御下知被召付候由申傳候、

龍昌寺

寛文十二年壬子九月十五日

峯運

寺社御奉行所

右本書留龍昌寺格護、

一毎年正月廿一日并七月十三日御施餓鬼ニ、清水楞嚴寺養心・斬宗昌寺・片岳寺・洞泉寺・妙法寺、敷根瑞慶寺・十輪寺、曾於郡慈恩寺・林高寺脇田庵、日當山東林寺、國府國分寺洞雲軒・徳持庵・圓龍院・高德院・

西福庵・永江庵・安舟軒・福安寺金陵院・壽岩軒、五

ヶ外城寺院相揃、所役々罷出、御法事無懈怠被相勤

候段、國府賦所寺院改帳内ニ有之候、

一義久公御逝去慶長十六年^{辛亥}正月廿一日從者位牌

一蘭室宗馨居士 新納式部少輔

一月舟宗心居士 村岡豊前守

一瑞翁良玉居士 市来清左衛門

一花翁道栄居士 肥後權之丞

一一山宗将居士 赤塚吉右衛門

一機先道全居士 山口对馬守

一天庵道雲居士 吉井佐渡守

一月浦春花居士 武彦左衛門

一舜岳曇堯居士 染川源之丞

一無庵宗作居士 田尻小吉

一鏡山栄臨居士 濱田民部左衛門

一進歩要精居士 岡本讃岐守

一寶山常珍居士 春田佐渡守

一昌屋常繁居士 新原藤左衛門

一權大僧都仙朝法印 林仙朝法印

右位牌木札壹枚ニ相記有之候、龍昌寺十七世大信和

尚代ニ改之与有之、古位牌者當分無之候、

一端座釋迦掛繪 一幅

一鷹繪掛物 一幅

右式行 義久公御寄附

一御靈膳道具法被打敷破損之節ハ、御修甫被仰付候御証

文有之候、

一下馬札

右前々被召建置、破損之節者御書替被仰付候、

▲文明山頂花堂六觀音 一字

但作者性空上人^ニ申傳候、觀音六躰之内貳躰ハ御形

迄有之御長等茂可相記躰ニ而無之候、

右者俗説ニ申傳候者、上代霧嶋山江峯入御座候時

分、鹿兒嶋之内吉野ハ懸入當山花堂ニ而相勤、國府

之内谷ヶ峯・財部之内大峯筋罷通、霧嶋山江為懸入

由候、右之趣元禄十年^丑三月廿一日龍昌寺書留之内

ニ相見得候、

龍昌寺隱居所

岱叟寺

右寺廢壞、寺地計當分ハ有之候、

龍昌寺

一下屋敷 四畦大ッ卷斗式升

隱居所

右卷行御竿不入之由、寺社屋敷御帳ニ相見得候、

覚 写

一國府新溝之内鳥越之拔之口江捨リ地少有之候、龍昌寺

隱居地ニ可被下由、先地頭喜入休右衛門殿被申出、

彼拔溝口洪水之時分無心元所之由候間、番ことく、

可然由前々申渡置候為証文如此ニ候、以上、

未三月廿二日

圖書 印

野村藏之助殿

菱刈源兵衛殿

右之通ニ圖書老より此節被仰渡候、依之我々より写遣

候、可被得其意候、以上、

未三月廿四日

野村藏之助

菱刈孫兵衛印

龍昌寺

右本書龍昌寺格護、

▲慶長十六年正月廿一日酉刻

龍伯公御逝去御歌

世中の米と水とをのミつくし

つくして後は天津大空

一龍伯公御逝去御供衆

鹿兒島

新納式部

國府

肥後權之丞

存生てかゝる浮世にあふ坂の

武 彦左衛門

水より清き我心哉

道しらす君の跡をハ見おくりて

山口對馬

のりおくれしと急ぎこそすれ

村岡豊前

未來より來世此世に至るまで

染川源之丞

三世の御供するそふくとく

君は花おしむとすれと春風に

仙朝坊

ありてや本のねに満るらん

清水

吉井土佐入道

岡本讃岐入道

若きとてさのミおしむな世中は

大口

市來清左衛門

ちりてそ花も色ハ色なり

赤塚吉右衛門

二つなき命を君に奉り

鹿児島

濱田民部左衛門

心の内に月そのこれる

新原藤左衛門

田尻小吉

春口佐土入道

右國府士市成喜右衛門編集落葉艸一冊之内ニ相見得

候、

真言宗大乘院末寺

○五峯山

龍護院

金剛寺

右金剛寺者、開山覺遍法印慶長九年開基也、龍伯尊

老義久公為御祈願所被遊御建立候、貫明様・持

明様・妙蓮様御位牌御安置、高百石義久公御朱印ニ

而被召附候得共、寛永年間三拾三石被相減候處、

持明様高十石、中納言様高拾石被遊御寄附、

合寺高五十三石ニ而候、往古者金剛寺坊中六坊有之、

寺地于今境内ニ有之候、金剛寺長日番御目見御寺ニ

而候、慶長九年より寛延三年迄百四拾七年ニ罷成候、

▲今度國分江就被移御殿、為祈願所吉祥院知行之内廿

石、新地八十石合百石被充行屹、(記)所中之諸役可為御

免許、京儀國役之事者可被相勤者也、仍狀如件、

山田越前入道

慶長十年季冬十四日

理安

伊集院下野入道

抱節

金剛寺

右本書金剛寺格護、

一高五十三石

當寺高

内一高三十三石

右慶長十年 義久公高百石被遊御寄附、御朱印目

祿有之候処、寛永年間ニ右高之内被召揚、右之通

ニ而候、

一高十石

右 持明様御寄附、

一高十石

右 中納言様御寄附、

右之趣、國府賦所寺院改留帳之内ニ相見得候、

▲本尊千手觀音立像御長三寸五部

一尊

但一刀三礼日秀上人作御厨子入、

▲両界

一幅

但 御上様御寄附唐筆極彩色、

▲弘法大師

一軀

但 御厨子入、

▲當金剛寺御建立貫明存忠庵主御牌

一基

▲持明彭総庵主 御掛物御牌

一基

▲實媛妙蓮大姉 妙蓮様者種子島左近
太夫殿御姫也、

御牌一基

右 御三殿御厨子一ツニ御安置、

一御打敷 但絹名不知、

一牧

右 御上様御寄附、御打敷裏ニ、

音に聞く高野の山の遠けれハ

かねて打敷く法のさむしろ

右御詠歌 御上様御自筆之由申傳候、

一法華經 但二重箱ニ入、

右 御上様御寄附、

一御靈前道具并打敷破損之節者、御修甫被仰付御證文

有、金剛寺格護、

一繪天鷲絨但七星唐人繪織出、上ニ賛有、

一卷

一墨繪但唐筆 山水ニ山人之繪、

一卷

右式行 義久公御寄附、

覺

一貴寺江御寄進之掛物、先_キ比表貝仕調之願申出趣有

之、此節表貝相濟候ニ付可相渡候条、此書付相届次

第、為請取代僧早々當座江可罷出候、以上、

亥四月晦日

寺社奉役所印

國分

金剛寺

右御掛物二幅、寛保三年癸亥閏四月被申受候寺社奉行

所御書付、金剛寺格護、

慶長十七年壬子

一開山覺遍法印四月九日

年号脱文

二世盛有法印九月戊戌廿八日

寛永十五戌寅

三世賴喜法印五月朔日

寛永十七庚辰

四世盛遍法印六月十九日

寛文四甲辰

五世有尊上人五月八日

正保四丁亥

六世賴源法印九月二日

七世賴有法印六月十九日

延宝六戊午

八世盛錢法印

元禄五壬申

九世賴圓法印正月九日

元禄十四辛巳

十世真應上人九月廿一日

十二世賴永法印八月廿八日

十二世憲海法印三月朔日

十三世盛樹法印六月八日

十四世盛純法印三月廿七日

十五世覺英法印八月十七日

十六世義海法印五月十日

十七世太圓法印

十八世尊盈法印

十九世真有法印

一本堂小坂葺礎堅式丈三尺四寸横式丈五尺一寸
外四方五尺式寸縁

右檢者衆附御修甫所

一本堂疊并盤盈迄破損之節ハ御修甫被仰付候、

一本堂棟札写

聖主天中天

大檀那大梵天王

迦陸頻伽声

奉新建立四間四面本堂一字御本尊千手觀音

哀愍衆生者

大願主帝釋天王

我等今敬札

右千手尊形者日秀上人一刀三礼之妙像也依之致祈精立

處達衆望凝運歩即時增福壽故 嶋津御家重宝世間獨尊名

佛也爰以護持 大檀家久公國家家長久御子孫繁榮計興立一

宇堂舍臆諸人參詣往来功作国土安穩万民快樂五穀豐饒風

雨順時令千里内七難不起所對怨讐自然退治心中大願皆令

満足矣當地頭藤原氏久正作業奉行僧都圓盛同長濱拾郎兵

衛尉師延當寺住持覺遍法印同堂供養寺畢

慶長十六年辛亥五月大吉日敬白 惣大工長田七郎右工門

尉

脇大工津曲伊佐工門尉

同 折田利右衛門尉

同 吉兵衛尉

惣鍛冶有馬讃岐守

右棟札有金剛寺、

▲鰐口 但指渡耆尺三寸余鰐口図左記之、一箇

右 龜壽様御願為成就御寄附

一堂客殿取合
一廊下小板葺礎 一間五間

一客殿取押葺礎十一敷五間 但外西一間五間耆尺底
東一間二三間三尺底

右式行御合力銀御修甫所

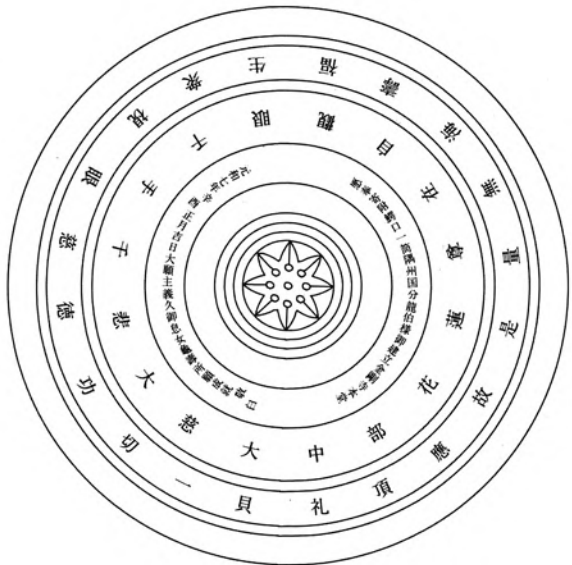
一客殿棟札写

寺社奉行嶋津清太夫殿

大工加治木
神田太兵衛

御物座奉行町田勘解由殿

奉再興金剛寺客殿一字 大檀那 源光久公



御使衆二階堂城之助殿

賜銀壹貫五百目修補之者也

寛文五年乙巳霜月吉日 當住持法印頼圓

當地頭喜入久右工門殿

右棟札有金剛寺、

一茶堂茅葺礎 六間五間 一客殿茶堂取合

一廊下取押板葺 四敷貳間 一茶堂庇取押板葺貳間四間

一客寮茅葺 四敷四間

一取合廊下取押板葺礎 貳間壹間

一茶堂ノ庫裡取合廊下 四敷貳間 一庫裡堀立 五敷

五間三尺 一物置茅葺堀立 四敷三間三尺

一鐘樓茅葺

一大門茅葺 一門茅葺 一馬屋茅葺 四敷三間

右十貳役所并自分修甫

一下屋敷三反 大豆沓表三計沓升 金剛寺

内八畦堂地

右御竿不入之由寺社屋敷御帳ニ相見得候、

一貫明樣御石塔 一基

三州太守修理太夫義久公

妙谷寺殿貫明存忠庵主

元和二年丙辰三月吉日建之

右御石塔表

撞鐘銘

願諸賢聖 同入道場

願諸惡趣 共時離苦

奉治鑄南閭浮堤大日本國豐州大野郡鎮守 深山社磐鐘

事

夫以罰賦吒王免乎願莫若惡邪聚王道九頭龍罪以降拔苦
与樂之功洪鐘殊勝滅罪生善之德捷捷提貴仍爲天長地久
御願圓滿發起結緣悉地成就乃至法界有情離苦得樂所鑄

如件

嘉曆三年^{本ママ}戊辰十二月七日 大工則繼

大願進登鉞

大檀那沙弥孔釈

▲鎮守華尾權現 一社

右賴朝公丹後御局忠久公御三人之御尊形座像 龍伯

樣御建立寺内ニ御安置

▲隅州國府金剛寺龍護院五峰山由來之事

夫當寺者慶長九年^{甲辰} 龍伯尊老義久公從濱之市所移

居城於國府新城也于時建立當寺爲 御祈願所矣寺之後

有之峯所充行寺故号五峯山彼標五峯之金剛故名金剛寺

以 龍伯公之守護所故稱龍護院也是皆 義久公自稱之也本堂之本尊千手觀音此觀音者日秀上人一刀三禮而自刻彫之所獻于 義久公以為 御一世之緣佛故殊信之為

本尊矣于時為國家豐饒建立四間四面之堂奉遷今千手觀音也賜寺領百斛御朱印之趣炳焉也然屢毀破之時分被減于三十三石也 公常告衆曰欲拜謁于我者必詣此觀音也其後持明彭總公被立 龍伯公御夫婦之御牌且又御自身之御牌安置之此御牌者伏見御在番之時隨京都因幡堂賴心房性盛法印被受法諱於 持明彭總庵主賴心房自書以所獻之 御牌也其時彭總庵主為 龍伯公御夫婦御法會料被附十斛田也然後前 中納言家久公其旨見達上聞又被附十斛之領也本領合于今五十三石也自尔以來正月二十一日七月五日十月五日中午三箇度之御法會不怠也法會衆僧者福山敷根國府清水曾於郡日當山踊七ヶ所之僧侶致衆會于今相勤者也

右本書金剛寺格護

一 每年正月二十一日七月五日十月五日福山不動寺敷根蓮持院國府正高寺正福院重蓮寺清水清水寺曾於郡吉祥院

乘林寺日當山三光院西光寺踊真福院七ヶ外城寺院相所
役々罷出御法事無懈怠被相勤候

金剛寺脇寺

一下屋敷^{廿五間}式反^{老斗}哇^斗廿步 大ツ式表^斗 正壽院

一中屋敷^{廿七間}式反^斗哇^斗拾步 大ツ三表^斗三斗 蓮花院

一中屋敷^{廿三間}式反^斗哇^斗 大ツ三表^斗式斗七升 醫王院

一下屋敷^{四十間}式反^斗 大ツ式表 佛眼院

一中屋敷^{廿七間半}式半^斗式哇^斗 大ツ三表^斗式斗七升 普賢院

一中屋敷^{廿四間}式反^斗哇^斗拾步 大ツ四表^斗八合 善福院

書物留写

一 正壽院 一 蓮花院 一 醫王院

一 佛眼院 一 普賢院 一 善福院

右ハ 龍伯様御看經之御奉公被相勤衆之故、御存命

之内ハ知行切米被下候而御奉公被申候、其後 御上様

被成御座之時分ハ寺地切米計被下、如前々御奉公被仕

候に、今ハ寺地計ニ而御奉公、其外金剛寺ニ而寺役相

勤候處ニ、此度寺地可被上之由、御侘言申上候事、

一金剛寺隱居屋敷 一 門前屋敷

右ハ前々被召付置候、寺地餘分無之ニ付被官召置候、今度屋敷被召上候ハ、被官可召置処無御座候条、御侘言奉存候事、

一御稻荷座主屋敷

右ハ前々屋敷迄を被下、霜月三日之御祭・年中之花香・掃除等相調儀ニ付、屋敷被召上候ハ、御祭等茂難相調候間、御侘言奉存候事、

一新城五社座主屋敷并祝子屋敷

右者取添之城内ニ有之、前々毎日勤等相調申候、御城之依為鬼門、前々五節句御祭米として 龍伯様御代より今相續、米八斗七升五合相渡御祭調申儀ニ候、座主・祝子無之候而難叶候条、御侘言奉存候事、

右何も別儀無御座候、御方御存之前ニ候間、御侘言御申上可被下候、以上、

国府

万治二年亥三月十二日

金剛寺

喜入久右衛門殿

右書附留金剛寺格護、

○霧島權現石之小社○天満天神石之小社

○庚申堂茅葺礎三敷二間三尺三方縁

○真応上人入定石廟

真応上人修行記

▲上人者薩州鹿兒府之産也、祖父者筑後國柳川之武士、昔年臨軍場抗敵数度而遂戦死也、子六歳為孤失托処被堤携他人、到薩陽在真福院中歴歲月也、及弱冠而号寺前徳右エ門也、壮年而保室、而元和五年己未設一子上人也、此児六七歳能唱真言陀羅尼、嬉戯常陳仏具設僧客、父母見其異群児而為祖父孝養欲成出家也、乃十一歳之秋憑師使此児任安養院中也、然因師移住職於花林寺相隨以住霧島也、十三歳之春前太守 光久公之舍弟久直公、偶詣霧島暫迴駕於花林寺、乃見此児有麗質乞師、同駕而帰于采邑都之城也、於是始受俸祿而得朝夕侍御之寵也、雖然官遊不称素情且以悖父母之命、故十六歳之秋辞官庭、寛永十一年七月二十一日成出家而修護摩灌頂也、二十四歳而入江州惣持寺中而三年之間修密法、又在京都知積院裏而九年之余熟経意矣、然後成

伊勢內宮照雲寺住持職而勤行十七年焉、時為亡母孝養有歸鄉之思不得已、乃辭照雲寺到薩陽、是歲寬文十一年十一月二十一日、成隅州國分金剛寺住持職勤行二十年焉、其間於安養院道場修灌頂初法談招大乘院裡衆僧於金剛寺道場論議二七日矣、有弟子兩人、長号岱春、少号一雲、皆銳利而不凡、各侍御師側如形影相隨也、延宝八年春太守 綱貴公有述職之勤、而催行裝於武州也此時為旅中祈禱有供奉之 命、而住江戶桜田別野一年焉其間受上人号、一祈再禱無不驗矣、因茲主君安全諸官庶民亦得脫災殃也、翌年秋歸古寺也、寺前五峯山尾岩石確乎荆棘莽然、上人一呼令辟之庶民子來、於茲風景清潔眺望靈奇、天和三年造立庚申堂、而本尊木像自彫刻而安置焉、元禄初辟其地南而立三尺四方之石定設小戸於西向、日秀上人之古定也、同年壬申九月二十一日行年七十四歲、成木食草衣之身而入定矣、口号有二章

其一

真応上人作

平生念望今日達

獨居石窟咒微音

任地塵世毀譽事 遁得利名唯一心

其二

全

岩根圍地卜居處 三尺四方石室中

着法衣禪陳座貝 觀心阿字待臨終

定中所修者觀自他一味平等利益禱

国守安全衆民快樂書誦誦經陀羅尼彫刻仏像夜唱真言念仏廻向法界定外左右安置仏像勤請霧島權現天滿天神所以祈當山守護万世不易也且又準擬我形像於藥師如来刻木像而安置庚申堂也自入定之日經七年而寒暑風雨無侵肌胝蛇蝮蝎無近体自国近鄉庶民他国遠途行人皆來詣禮拜不知幾千萬矣若或苦虫齒或愁腹痛則到誓願^マ于上人而即日苦去痛除賽礼人亦不多也是歲元禄十一年戊寅九月二十一日行年八十而示寂滅也噫奇哉入定之日九月二十一日寂滅之日亦九月二十一日是非凡慮之能可及也僧侶靡然各為礼民俗叢尔皆為拜昌於存日也我儂數輩朝暮出入五峯山下而見其行狀不怠感其德輝广大故記見聞所及而欲伝後世而已

元禄十一年十月二十一日

右本書國府士市成八右衛門所持写之、

法華宗京都本能寺摂州尼ヶ崎本興寺末寺

○鷲峯山 勸持院 遠壽寺

右遠壽寺者開山権大僧日實法印永祿三庚申年開基也、

翌酉年本寺宣任被申請鷲峯山号本成寺日實從 内裏口

宣案被申請候然處ニ 持明様 御母堂妙蓮様為御菩提

元和九酉年被遊御再興 貫明様妙蓮様持明様御牌御安

置御仏餉米八石其時之住持大蓮院日税中興開山ニ而遠

壽寺と改号被仰付山号院号者不相替候住持代合之節者

御城虎之間ニ而寺社御奉行衆より直ニ被仰付門首列御

目見御寺ニ而候永祿三年より寛延三年迄百九十年罷

成候

▲本尊釈迦多宝仏 座像御長三寸式分脇立四菩薩四天王

不動受染高祖迄十三鉢厨子一ツニ安置作者不相知

一三十番神 座像各三寸八分三十鉢厨子一ツニ安置作者

不相知

一鬼子母神 座像御長六寸

一十羅刹女 立像御長各六寸十一鉢厨子一ツニ安置作者

不相知

▲日蓮上人 本像

一驅

右者此間磯御方江有之候得共、今度貴寺江御寺納候

間宜被致安置候、仍而如此候、以上

元文五年六月廿二日

米良藤右衛門判

遠壽寺

右御書附遠壽寺格護

▲貫明存忠庵主

御牌一基

▲圓信院妙蓮

元龜三年壬申十二月廿三日御逝去御牌一基

▲持明彭総庵主

御牌一基

▲御厨子位牌頼朝公ヨリ椿窓公迄廿一代之尊靈

椿窓様者日新公御息女也肝付彈正江嫁肝付三郎五郎御出

生以後御離別持明様御養女ニ被成候故椿窓様御吊等持明

様被遊候事但加治木椿窓寺へ御位牌有之候

一御茶臼但ギンタリ

一ツ

右 持明様御寄附

一御刺刀箱但菊ノ蒔絵

一ツ

右同断 但黒塗鷹ノ羽ノ蒔絵

一御文庫

一ツ

右同断但妙蓮様御道具

一御珠数袋

一ツ

一硯石 但蛸形浪ニイタラ貝ノ彫物有 一ツ

一香箸 沓對 一茶杓 沓ツ 一濃茶々椀 一ツ

一古今集但書本沓部 一小箱但黒塗蓮花ノ蒔繪 一ツ

右六行御寄附之訳書留不相知候得共、御寄附物与申

傳候由、住持日暹々被申候、

一開山日實 中興開山日総

三代日詮 四代日通

五代日輝 六代日勝

六代日統 八代日勝

九代日暹

一御牌堂小板葺礎九尺四方外四方式尺八寸縁

右御位牌元和九癸亥年被遊御安置候、

一客殿茅葺礎八敷六間 六間之縁有、

一廊下取押葺沓間ニ式間

一庫裡茅葺礎堀立五敷五間三尺

右四行御修甫之節者御合力銀被仰付候、

一番神堂茅葺礎五敷式間三尺

一雜物置所茅葺三敷式間 一馬屋茅葺三敷式間

一本門大板葺 一下門茅葺

右五行所并自分修甫、

上小川村之内

一下屋敷十五間式反 大ツ沓表五升 遠壽寺

一上屋敷六間半五畦拾三步 大ツ沓表式斗四升八合

右同

右御免寺地之由、寺社屋敷御帳ニ相見得候、

▲ 御 廟

貫明存忠庵主 御石塔

圓信院妙蓮 御石塔

持明彭総庵主 御石塔

右遠壽寺石室之内ニ被遊 御安置候、

▲ 宣 任

本門法華宗寺号事

本成寺

右所授如件、

永祿四年^{辛酉}三月吉日日承

口宣案

上卿 中山大納言

永祿四年廿日宣旨

權大僧都日實

宣叙法印

藏任頭右大^マ深^マ淳光奉

覺留写

鷲峯山

遠壽寺

一本尊釈迦多宝佛

但御長三寸式分、脇立四菩薩、四天王、不動、愛染、

高祖迄厨子沓ツニ安置御座候、作者不相知候、

一 永祿三庚申年當寺開基有之候而、翌酉年兩本寺京都本

能寺・攝州尼ヶ崎本興寺宣任申請鷲峯山本成寺と寺号

申候、開山者權大僧都日実法印ニ而候、尤 内裏様口

宣案申請右之通ニ候、然處ニ元和九癸亥年遠壽寺与改名



被遊候様子者、彭窓様御懷 妙蓮様為 御菩提御建立

被遊候、其時代住持大蓮院日税中興開山ニ被遊候事、

一 貫明様・妙蓮様并御太祖 頼朝様御代々 椿窓様

迄、厨子位牌御同前ニ御立被成候、

左候而、毎日御茶湯上リ申候事、

一 其以後寺内不致破壞様ニ被仰付御書物沓通、其節之御

家老衆兵部少輔殿・左近將監殿・彈正大弼殿御書物御

連判ニ而于今有之候事、

一 毎年米八石ツ、御佛供米と被下候、尤御手形右御家

老衆御連判ニ而故、同断ニ有之候事、

右之條々、當寺由緒之儀被仰付候ニ付、大鉢書付差

上申候、此等之段宜様御申上可下候、以上、

元祿十年^丑 閏二月五日 國府 遠壽寺印

御暖衆中

右本書遠壽寺格護、

一 覽 写

妙蓮様為御位牌所遠壽寺被立置候、後年不致破壞様貴

所暖之、從御藏入可被相調候者也、

寛永十一年十一月十四日

兵部少輔印

左近將監印

彈正大弼印

福屋五郎兵衛殿

一 手形写

米拾六石 大蓮院江可被相渡候、寛永七年同八年兩年
之御扶持方取後候由、御侘被申上候ニ付如斯候也、
寛永十一年十一月十四日

兵部少輔印

左近將監印

彈正大弼印

福屋五郎兵衛殿

右式通本書遠壽寺格護、

一 覚 留 書

妙蓮様御為として遠壽寺被召立候由來ハ、愚僧為学文
致在京、老母見參之為罷下り、種子嶋のことく可參覚
語候処ニ、町田紀伊助殿ニ而被仰聞候通者、 御兩親

様御同前なから、妙蓮様御事ハ御二歳之御時御おくれ
なされ候故、御形をさへ御おぼえなされず、剩其宗旨
之御吊をもなされず、萬御殘多思召、連々宗旨之御寺
を御立なされたく思召刻、幸ニ罷下候間召留られへき
よし候て、老母所江やすらひ申候、其後伊地知勝左衛
門殿御承にて、町田紀伊助殿手前より御寺造立被申致
御番ニ付、紀伊助殿を以被成 御意候様子ハ、此御寺
ニ者知行を御付なされ候はんすれとも、時分から思召
まゝならて、當時ハ御やしなひを被仰付候 御兩親様
之儀候間、貫明様・妙蓮様御同前に御茶湯をあげ申候
へ、後々ニハ知行相付られ、永々相續いたすやうに
薩州様江御憑御申なさるへきとて、御佛供料・御やし
なひ分合米八石ツ、被下候、其後 黃門様江も御上洛
之時分、川内御船元まで伊地知勝左衛門殿を以此御寺
召立られ候間、聞召おかるへきよし御申被成候、然者
持明様御逝去之後右之米相留候故、江戸江申上候得
者、三原左衛門殿御下之時如前々に被仰定候、其明年
為御礼江戸江參上申候刻、町田駿河守殿・伊地知采女

正殿兩人にて、殊ニ采女正殿ハ前々の事を存之人にて候故、御寺之儀委細ニ被申上候得ハ、兩年取おくれ米被下、其上修理等も 御公儀より可被仰付由承候間罷下候、然處ニ兵部殿も御下り候而、於此方修理之儀申出候刻、各様御判紙を以後日不致破壊様にと、福屋五郎兵衛殿江被仰付候、就夫五郎兵衛尉殿手前より客殿之四方板ひさし・庫裡御靈前之たゝミ十帖ツ、兩年被相調候、客殿之母屋ハ其俣に相延申候、此度 御續目に罷成、御やしなひの儀此方ニ而事すミ不申候故、江戸江申上候得ハ、御條書を以如前々被仰定候、然者御寺之修理此節ニ而候間、修理之所注文を以申上候得ハ、かや竹はかり少之御合力として被下候、此分にてハ不罷成候、其上此方にてハ愚僧手前より申調かたく候間、福屋五郎兵衛尉殿江被仰渡たる御判紙之ことく、當御代官衆江被仰付候而可被下事奉憑候、後々のために御寺江も、修理并御やしなひの御判紙致頂戴度候事、以上、

遠壽寺

寛永十八年二月十三日

日税判

兵部様

御与力衆中

右書物留遠壽寺格護、

差出留写

鷲峯山遠壽寺觀持院

一 御石塔書付 圓信院殿妙蓮尊靈

慶長十二年六月十八日也、但是ハ卅三年之御吊ニ御

立被成候歟、

一 御位牌一尊 貫明存忠庵主

一同 圓信院殿妙蓮尊靈

一同 持明彭總庵主

御厨子位牌頼朝ヨリ椿窓迄、御先祖代々

當寺御建立之所以者、持明様御懷妙蓮様御菩提所と

ノ御建立可被成通紹嘉老江御尋被成、則御代官町田紀

伊助殿江被仰付、元和九年癸亥成就仕候而、御兩親

貫明様 妙蓮様并御常住御看經被遊候、頼朝公より椿

窓様迄 御先祖代々御厨子位牌御兩親御同前ニ御立被

成候而、毎日御茶湯上り申候、左様ニ御座候而、妙蓮

様御命日廿三日ニ者御代官町田権右衛門殿江被仰付、納戸衆一人ツ、御參候而御寺ニ而御月忌御座候、其米八石宛毎年御佛供料とて相渡り申候、其上春秋ニ者時分ノ之衣裳等迄被下、剩弟子として鹿兒嶋衆山口早左衛門孫之三男甚助与申童子、御奉公ニ差上被申候を出家ニ召成御付被成候、名宮内卿と申候、彼仁御養として米三石ツ、衣裳迄時々ニ被下候、左候つれ共彼宮内卿江戸江參り、直ニ不罷下候まゝ、宮内卿へ被下分ハ則相留り申候、當寺御建立之 御意趣、 黃門様江ハ伊地知采女殿を以御申被成、 光久様へハ御書物ニ而御申為被成由候、此外寺領之知行又屋敷・山野・門前地可被成寄附之儀者、 光久様御入部御待為被成由候、然処 持明様無程御他界被成候ニ付、其年ノ明ヶ年迄兩年八石ツ、之米御公儀より被召止候、就夫其通江戸江被申上候ニ付、御書物下り候而如本々米被下候故、追付住持江戸江罷下、次目之御目見得申上候、其時 持明様御位牌安置可申上通得 御意被申上候ニ付、尤御建立之貫首ニ而御座候間、可然候ハんと 黃

門様・光久様御意候而、持明様を安置被申上候、其時分江戸ニ而當寺内之屋敷先喜入久右衛門殿承被成屋敷相廣まり申候、其節御寺永々御修理之書物迄通、又午未兩年取後之米拾六石之書物迄通、兵部殿・彈正殿・將監殿御判紙被下候而、于今相續申候、勿論修理等其時分ノニ御座候、已上、

明曆元年己未七月十八日

遠壽寺判

御改所

吉貴公

一御印御書附写

國中之僧侶近年道学之心懸うすく、我慢之族有之由不可然候、向後ハ本寺又者導師を輕、修学等之志有者を嫉妨に成、又は法之為なと申なし、口事諍論を企候僧於有之者相糺、急度可申付旨寺社奉行江申付置候、且又修学之志者堅固ニ雖有之無福故難勤段無紛僧者、志相遂候様ニ可令供養候、右之旨得其意、宗門法式を不乱如法相勤、早竟道儀不衰様可致接得也、

宝永二年十一月十五日

吉貴 印

遠壽寺

右本御書付遠壽寺格護、

繼豐公
一御判御書附写

御判

國中之僧侶道字之心懸薄相成ニ付而、先年 總州様以御書付寺院江被 仰聞置候、到當代弥其旨不致忘却修学勤行無懈怠不亂、宗門之法式道儀不衰様可致接得旨、諸宗門之門首江可申渡也、

享保七年十二月九日

右本御書付遠壽寺格護、

一御判御書附写

御判

國中之僧侶道字如法堅固可相勤旨、御先代以御書附寺院江被仰聞置候、致當代猶以不忘却修学勤行無懈怠不亂、宗門之法式道儀不衰様可心掛旨、諸宗之門首江可申渡也、

寛延元年八月廿七日

右本御書付遠壽寺格護、

右御判物御書附、御代々御世代御家督之節、於 御城遠壽寺江被仰付候、

時衆宗相州藤沢山清浄光寺末寺

○佛光山

常念寺

右常念寺者開山其阿、慶長十年開基也、

龍伯様御建立、忠久公々貞久公迄御五代、貫明様・持明様御牌御安置、寺高百石為被召附之由候得共、當分ハ無高ニ而候、日想山常念寺と申候處、寛文年中遊行卅九代上人佛光山与被相改候、御目見御寺ニ而候處、

慶長十年々寛延三年迄百四十六年ニ罷成候、

▲本尊阿弥陀如来

一 軀

但立像木佛安阿弥作

▲常念寺殿貫明存忠庵主

御牌一基

▲持明彭總庵主

同

▲得佛道阿弥陀佛以下四代

同

▲道佛仁阿弥陀佛

同

▲道忍義阿弥陀佛

同

▲忠宗公
道義仲阿弥陀佛

同

▲貞久公
道鑑行阿弥陀佛

同

一開山其阿弥陀佛

右開山者曾於郡念佛寺十世上人良久大和尚也、

元和二年丙辰正月十五日遷化

二世

三世臨阿弥陀佛

四世相阿弥陀佛

五世中興覺阿弥陀佛

六世文峯軒圓瑞和尚

七世文峯軒覺阿了山和尚

八世東陽院覺了吟和尚

九世夢傳覺阿大德

十世文峯軒覺阿了碩和尚

一客殿茅葺礎五敷四間三尺但四敷二間カキ有、

一茶ノ間茅葺礎五敷五間三尺

一庫裡茅葺堀立六敷六

間 一馬屋茅葺堀立四敷四間

一大門茅葺礎

一下門茅葺礎

右六行所并自分修甫

向花村之内
一下屋敷十七間五畦廿步大ツ壱斗壱升三合

常念寺

右御免寺地之由、寺社屋敷御帳ニ相見得候、

一大麦

国分衆中方

一真粃

右同衆中方

一大麦二拾表八升

右同町濱在郷

一真粃式拾表八升

右同町濱在郷

右壱ヶ本ニ兩度ツ、前々勤メ取納有之候、勤メ被仰

付候御證文者、先年類火之砌致焼失候段、當住脱

一旦方百人計

衆中并町人

一未十二月二日口上書留寫

口上書

國府道場常念寺事、龍伯様為三ヶ寺御建立候、尤城下

ニ十二時マ無之候而者不叶儀ニ思召御取立候、其時分本

堂三間四面并茶堂御建立候、開山住持嶋津坊ニ而候、

其後寺地川成ニ罷成、少々相残候時分、國府 御かミ

様御定ニ而、喜入紹嘉老道場地を見立、仁礼右近殿・

川上式部殿を以被仰上候得ハ、如望寺地被下候、其時

分又如前々普請被仰付、其後炎上仕、先ツ仮堂ニ而、

五敷三間三尺茅葺堀立ニ而于今罷在候得共、御代々御

先祖・貫明様・持明様御牌、御茶湯・香花無懈怠候事、

一古之假堂ニ而候故、先年遊行廻國々時分茂、一宮可罷(宿九)
成由候得共、御佗言申一宿も無之候事、

一右本堂・茶堂破損仕候条、喜入休右衛門殿ハ同五郎兵衛殿を以再興之儀被仰上候得者、先々修理ニ而も可調候哉と御座候而山崎佐左衛門殿檢者とシテ被差越見届ニ而候得共、假堂之故此節再興被仰付度由申上候得者、佐左衛門殿三間四面之指圖切符迄被成候、乍去當分銀無之候故、重而被仰由被仰聞、于今不調候事、

右之趣可然様ニ御披露奉仰候、以上、

未十二月二日 国府 常念寺

国府

御地頭様

右書付留常念寺格護、

一明曆三年酉九月廿一日指出留写

指出留写

国府道場寺地之事、前々濱之市江 龍伯様御座候時分、林原江寺地出候、寺作無之内ニ 龍伯様国府江御座相直候事、

一国府江御座ニ付寺地割有之時分、国府江江雲庵と申庵地向花村江被召移、其跡江道場寺地六段、国府三ヶ寺之内とシテ高百石相付、曾於郡道場嶋津僧其阿住持ニ御定ニ而、慶長十年ハ佛殿・茶堂次第ニ建立被成候事ニ付、山号寺号之事ハ時宗ニかきり、遊行上人ならてハ寺号山号相定事不罷成候故、国府道場ト申候事、

一右之六段之寺地川成ニ罷成候而、此寺二代目ニ国府地頭喜入大炊入道殿前ハ道場寺地鹿兒島江御申被成、寺地望之様返地被出之證文御座候、夫ハ佛殿茶堂造立候、此寺三代目ニ遊行上人卅五世此国江下向之時分、

日想山常念寺与被相定候而より、御位牌茂常念寺殿

實明存忠庵主と御座候事、

一右知行百石者、曾於郡念佛寺其阿前ハ御公儀御申被成、念佛寺江相置候而、常念寺ハ無縁ニ罷成候事、

一開山ハ當代迄五代ニ罷成候、前々之事承得候分申上候事、

国府

明曆三年酉九月廿一日

常念寺

国府屋敷方御檢地

御奉行中

右書付留常念寺格護、

一寛文三年卯五月廿五日書物留写

書物留

龍伯様御座所國府江為被召置時分、三ヶ年ニ高百石ツ、相付候、其時之道場住持嶋津坊主其阿、寺地茂六段之故門前迄御座候、然處先年御分國御支配之砌、一外城ニ祈願所・菩提所計知行被召付、其外之寺地ハ高押落之御法度被仰出、道場高百石上リ地ニ罷成、于今知行無之候、右之寺地も次第ニ川成ニ罷成、少々相殘候折節、國府 御かミ様御定を以、喜入大炊入道紹嘉老道場地を見立、仁礼右近殿・川上式部太輔殿ニ而、御公儀江被仰上、如望寺地出候間、佛殿・茶堂茅葺ニ御建立御座候而、御代々御先祖・龍伯様佛前ニ御茶湯・香花毎朝備上候、御中興御修理之佛殿修理前參候寺領無御座之故、坊主前ハ不罷成候、此等之旨御地頭江御申被成、修理御座候様ニ奉仰候、以上、

國府道場

寛文三年卯五月廿五日

常念寺

國府

御暖衆中

右書付留常念寺かくこ、

一寛文八年申二月十二日口上書留写

口上書

度々申上候常念寺儀、龍伯様御代為三ヶ寺御建立被遊、五代御位牌、其後 御かミ様之御代ニ、龍伯様常念寺殿貫明存忠庵主と有之 御位牌御立被成候、御位牌此五六ヶ年訴詔申上候儀、少々御合力銀被下候ハ、修理等仕、御位牌不損様ニ格護申度奉存候間、似合御合銀被下候様ニ被仰上可被下候事奉頼候、以上、

寛文八年申二月十二日

常念寺

野村助左衛門殿

右書付留常念寺格護、

一元禄十年丁丑二月十日常念寺来由書留写

國府佛光山常念寺来由之條々

一當寺者慶長十年 龍伯様御建立被遊候事、

一開山者其阿、勝久様御子、應 龍伯様命從曾於郡念佛

寺移住被成候事、

一前々者寺領百石寄附被遊候得共、諸寺院高被召上候時

分無禄ニ罷成候事、

一寺地六反餘被仰付候得共、川成罷成候故、喜入紹嘉

老・仁礼右近將監殿・川上式部少輔殿を以御取次、堂

地之分被仰付候事、

一正保年中類火故、寺内并諸書物等致焼失候通申來候事、

一當寺五代之住持寛阿弥中興之事、

右者此節諸寺院來由可申上旨被仰渡候ニ付、當寺之

故実如此御座候、以上、

常念寺

元禄十丁丑年壬二月十日

了讚印

國府

御暖衆中

右國府賦所帳留ニ相見得候、

曹洞宗能州總持寺末寺天真派清水楞嚴寺末寺

○太平山

國分寺

右國分寺者開山行基菩薩、天平九年開基也、人王四十

五代聖武天皇勅願ニ而御建立、日本國中一國一寺經納

所、本圓通山國分寺、天台宗ニ而候處、清水楞嚴寺八

世代春和尚、天文年中中興、太平山國分寺曹洞宗ニ罷

成候哉、其訳不詳、天平九年、寛延三年迄一千十四年

ニ罷成候、

行基姓ハ高志氏、泉州大鳥郡ノ人也、以テ天智天皇七

年生ル、及テ出ルニ胎ヲ胞衣裏纏、母忌ヲ之ヲ棄テ、置ク

樹下ニ、経宿ヲ往ヲ見レハ出胞ヲ罷言、父母大ニ悦テ鞠

育ス、童稚之時与兒輩遊フ、動スレバ讀ス仏乘リ、歳十

五ニテ出家シ居リ薬師寺ニ、読テ瑜伽唯識論ヲ即了シス其

意ヲ、既ニシテ而周遊ノ都鄙ヲ教化衆生ヲ、道俗慕テ化ヲ

追從ヘル者以テ千百ヲ數、而所行之里民間クトキハ基ノ

来ヲ争ヒ来テ礼拜、基所口過ル遇ヘハ嶮難ニ架橋ヲ修路ヲ

築陂ヲ穿渠池ヲ、百姓至テ今ニ蒙ル其利ヲ焉、聖武天皇

甚ヌ敬重ク基ヲ詔メ授ケ大僧正之位ヲ、施ス四百人ノ出

家ヲ、時ノ人合曰行基菩薩、留止スルノ之処ニハ皆建道

場ヲ、幾内ニ凡四十九所、諸州亦往々ニ而在弟子相繼

ヲ皆守遺法ヲ、天平二十一年二月八十歲、於テ菅原寺寂
ス、

一無高故巨方并六十六部納經助力

▲正觀音但大像座像金箔仏御長一丈一尺五寸

行基菩薩作

一正觀音堂茅葺磯縁有横式丈一尺九寸

右檢者附御修甫所

▲藥師如来但中像座像四尺三寸 金箔仏

行基菩薩作

一藥師堂茅葺礎式間四面前三尺縁有、

右所并自分修甫、

△本堂阿弥陀如来

一當寺開山代春永大和尚

一當寺中興大雲雄和尚禪師

一當寺七世再中興州安全益和尚

一客殿茅葺礎六敷五間外兩平三尺之庇

右御合力銀御修甫、

一庫裡茅葺四敷四間

一門茅葺

右三行所并自分修甫、

一中屋敷十七間七畦十九步 大ツ壺表三斗升三 国分寺

右寺地御免之由、寺社屋敷御帳ニ相見得候、

一義昭將軍御書写

相国寺普廣院之儀、京都依錯乱及退転候、就其蔭涼斬本ノママ

下国候、此節再興之馳走可喜入、猶昭光可申也、

九月十五日 御判

右義昭將軍御書壺軸与申伝、国分寺格護、

一大膳太夫義祐書写

為天下御立願金泥心經、州々国分寺御奉納之勅使四辻

宰相中将殿御下向、其国御經被仰付候条一通進之候、

尔々御祈念尤肝要候、恐々謹言、

七月四日

大膳太夫義祐判

右御書付国分寺格護、

一隅州曾於郡国分郷太平山国分寺再造立記写

荊山之璞雖晦於石中遇和氏而後顯豐城之劍雖埋於地中遇雷氏而後顯物之顯晦固各有時斯是靈地久雖陵夷致今隆然亦不時哉乎抑中古天平九年以聖武皇帝勅願日域中建立一國一寺而定自王宮國都及庶人有祈禱之志者皆所以奉納六十六郡經之地也當寺其一而行基菩薩開基蓋當時寺地困數町而金堂瓦殿繁榮精舍或伝于齒齕マカ或覈于典故豈可誣哉雖然千載變易兵亂數起樓閣頽敗而塵埃寺地分散而為民居不知幾春秋矣只有正觀音大像座像一丈一尺五寸箔佛行基作堂宇四面各四弓葉師中像座像四尺三寸箔佛行基作堂宇四面二弓九重石塔都破鐘一口牛王印板而纔二見遺物其俗說曰昔日當寺廢壞而依此鐘徒為風雨被曝而及欲移于清水台明寺以使數十人荷之到河辺俄重於千鈞各不堪其肩遂投河水即俾村民百人許推之鐘破而猶不動衆人恐其奇異而如古地返之輕恰如一羽迄今其所号鐘澗而在清水中也或曰寺朽鐘破而觀音葉師兩像堂宇自古巖然何也曰觀世音菩薩葉師如來者衆生濟渡之誓願經說著不可勝等凡此鄉人民到憂水旱疫疾螟蝗等亦皆無祈而不驗矣如何座見其堂之破而令風雨汚仏体耶嚮

是百五十年前清水楞嚴先師代春結小庵於觀音堂傍繼絕香起棄檣而不失古跡如縷此時天文十一年為天下泰平之祈禱自禁裏欲願經說所著不可勝等凡此鄉人民到憂水旱疫疾螟蝗等亦皆無祈而不驗矣如何座見其堂之破而令風雨汚仏跡耶嚮是百五十年前清水楞嚴先師代春結小庵於觀音堂傍繼絕香起棄檣而不失古跡如縷此時天文十一年為天下泰平之祈禱自禁裏欲令勅使四辻宰相中公奉納金泥心經一卷勅使有故不入此國命日州伊藤義祐以桑門寄心經於當國本田氏而令奉納當寺也義祐書翰本田氏副書今伝在本田氏家也或說曰勅使留在千日州日數焉此時當國有逆臣動干才且憚山川險路而不入也又云天文後當寺住職稍有間斷而金泥心經藏小櫃在觀音堂本田氏偶參詣而見之為恐風雨破滅而取伝我家也未知然乎否

代春以後雖天真派相統之地或住或否漸相伝到我住居三十年于茲矣從入院以來造次顛沛無不慮此寺復古也故遍訪索當寺由來古実於寺家社家俗家而知其万一而已近來延宝五年自奥州白川西福寺法華經一部二十八品 混一快同年洛陽北野浄土宗阿弥陀經一卷各奉納于此寺也天和三年当地之產近江源氏末流野村信綱感古抽信心傭鑄工牌破鐘再興而繕ギンナキ鬱ギンナキ余又當鐘樓黃昏晨朝殷々然略認古風也

且他國人時參詣亦不為少也然寺宇蕭然不掩風日無処・

客号貞享二年告郷司暖横吏目而訴此寺再造立於地頭並

寺社奉行而事未果也其翌貞享三年武州江戸小石川沙門

圓順自心回国而奉納藥師經一卷也同四年勢州桑名杉山

八藏觀音經一卷同五年常陸国谷中田中庵僧万非法華經

一部卷八又皆奉納于此寺也因此当寺来由猶以著矣時今四

海泰平而国政安和君明臣正而一膳所有則不細事未敢焉

況此寺之訴乎卒元禄四年陽復月始造立檢使大匠相与展

刀到翌年三陽月寺楼成矣尚載奉行所史冉于後來永有修

補而賜其旨趣之一楮于余也於是当寺雖旧地其殿又新自

今後幾千歲哉乎備記其事以伝寺孫庶幾無失也元禄五年

歲次壬申中和月甲申日国分寺現住全益勤書

寺社奉行

島津織部殿

地頭

島津縫殿殿

普請檢者

川上藤兵衛

当地暖役

肥後六右衛門

野村 外記

李田善右衛門

鎌田新兵衛

一 国分寺撞鐘銘

謹奉陶鑄洪鐘

一口

大日本国鎮西洛大隅州曾於郡円通山国分寺

再興主

佐々木野村源右衛門

源信綱

源住比丘州安益叟謹誌

于時天和三癸亥二月十八日

冶工

伊東吉左衛門

祐信

一 国分寺客殿御修甫御免御書付写

覚

隅州国府之

国分寺

右從往古由緒有之、其上寅之年大風ニ客殿并庫裸吹

倒、当分木屋掛ニ罷居候処ニ、他國人折々致參詣候

節、右ニ而は難成合候間、客殿老宇御造立被仰付、

往々御修甫所ニ被仰付被下度旨、段々口上書ニ由緒書

を以申出置候故、旧冬遂披露置候處ニ、國分寺之儀一

國一ヶ寺之札所、其上從古来由緒有之儀ニ而、客殿老

軒造立申付、御修甫規横帳ニ茂可召載置旨、此節高橋

左門取次ニ而被仰渡候条、得其意候様ニ、國分寺并暖方江茂可被仰渡候、以上、

貞享四年卯六月六日

寺社奉行所 印

嶋津縫殿殿

右御書付國分寺格護、

國府

○愛宕堂

主取山伏格護

右愛宕堂者、國府 御代之時分者福嶋村百姓屋敷近邊、上小川村之内ニ愛宕堂有之、永德寺正壽院格護之由候處、其後延寶九酉年本 御内北山付江被召移候、當分者寺無之座主屋敷迄有之、國府主取山伏格護ニ而候、

一愛宕堂式間四面茅葺礎

一字

右修甫之節者衆中方出銀、

一右葦表

一屋敷

▲永德寺地藏堂幹緣文

隅州國分庄永德寺地藏堂再興幹緣文

聞、昔隅州國分庄者諸大薩埵之古道場也、相伝、比地昔年有洪水之害、人皆作魚矣、丁斯時也、諸大薩埵亦

面貌枯瘁而流入大海、諸大伽藍亦梁棟傾斜而化烏有去矣、及其水之涸也、一尊地藏薩埵不知自何地何山而來、幸得解脫洪水之難止、於是処居民之有其志者即構一字之茅堂、安置薩埵因寺名永德、有一比丘修香火業、比丘去來堂宇至今壞、在民村是亦居民擊遺者之所口伝也、未知是否尔來經其歲月者不知幾百回矣、慶長辛丑之夏、島津華胄龍伯尊君相攸欲營華第於此地、至於甲辰冬之仲華第落成矣、諸士大夫之侍從者殆乎千人、野人之懷惠而移家者倍焉侍、然後國分為一都會之地矣、於是乎上行下効百廢具興有神宇之復旧者有仏廬之斬新者輪興之美壯麗奮目矣、独地藏薩埵堂宇蕭、然依旧不蔽風日尊体亦有若無矣、爰有瞽者、正寿院者欲再造薩埵之堂宇有其志而無其力、若非檀度之助爭遂其夙志乎、於是肩囊手杖遍敲十方檀度之門、古之所謂細流聚而成巨海、土壤積而成太山、若然則土木之功亦寸累尺錙積銖者何願不成乎、夫以地藏薩埵者閻魔國十大冥之主君、而以大悲願為内以忿怒相為外矣、按、蓮華三昧經地藏・有六種之名、第一檀陀地藏、第二宝珠地

藏、第三宝印地藏、第四持地地藏、第四除蓋障地藏、第六日光地藏、蓋一体分身而導地獄餓鬼畜生修羅人天之六道也、衆生在世有無量罪業及其新寂也、薩埵判在世造惡之輕重斗秤欺誑人、且復懸以淨玻瓈鏡照彼衆生心內罪惡想、夫薩埵之慈心令一切衆生遠其罪惡、是故現忿怒相道之齊之、因茲稱勝郡地藏閻魔王王赫斯怒、爰整諸衆生以遏諸惡業以篤人間祐以對于膽部州、此閻魔王之勇也、今閻魔王一怒以安人間諸衆生、然則勝軍之合不虛設者乎、其功勲之所及豈復可言說乎哉、且有薩埵之誓願、縱有五逆罪者俊其惡以一心念地藏薩埵、薩埵以大悲願力代其衆生受諸罪苦、其慈心之及諸衆生者有海之口溪之舌不足報焉、若有善男善女聞此誓願者何敢造其罪作其惡宇、漢昭烈皇帝將終勅其子曰、勿以惡小而為之勿以善小而不為皇帝之慈、於其子者延及天下後世之人其所利濟者豈下博哉、薩埵之德亦一毛一滴之善根不為不夥、一瞻一礼之帰依何得無惠、伏願上自公卿大夫下至士農工商有其善根者、施一溢米福等河沙捨半文錢罪消塵劫、今我勸進之志在茲而已、

慶長十三年戊申三月廿四日 誓者正寿院敬白

右作者文之和尚本書国府士家督盲僧帖佐智圓格護

写

自探題下狀之事

▲九州二島盲僧等惣檢教事^{ママ}

右任例而天長地久御願円滿之可致御祈禱精誠、淨心檢教宛給所也、依是到于籠遠盲僧等、各此狀可相順者也、背此旨者其沙汰可有之者也、仍為後代到于未代不可有違乱者也、為後日證文狀如件、

正賀^{ママ}二年八月一日

源 義重^{御判}

自嶋津奥州下文之事

▲大隅薩摩日向國三ヶ國盲僧惣檢校

右任例而天長地久御願円滿可致御祈禱精誠者、安達檢教宛給所也、依是三ヶ國盲僧等各可順者也、若此旨背候族於出来者、時葉負安達檢教其所領主奉合可致其沙汰、到于後々未代不可有違乱煩者也、仍為後日狀如件、永徳二年^{庚辰}三月廿二日

嶋津之但馬頭清久



▲國分御方角之諸所座頭家督職之儀、依致懇望指遣之、

諸篇無疎略之事可相勤者也、為後證墨付如此、已上、

慶長十五年

本田三河守

正親

平田越前守

宗親

喜入大炊助

久正

祥壽院



▲國分方諸村之座頭家督之儀、國分先役人より墨付被出

置候、其證文爰元江差出御侘之由申候条、如前々家督

職申付候間、於向後違變有間敷者也、已上、

元和二丙辰

比志嶋紀伊守

國貞

三月廿三日

伊勢兵部少輔

貞昌

三原諸右衛門尉

重種

町田勝兵衛尉

久幸



祥壽院

口上

▲國分永徳寺地藏堂ハ、只今ハ御内之後に去々年以來移

被成候、我等承申候ハ、國府御代之御時は、福島村有

下に始は僅之茅屋に安置シ、有か無か之躰ニ而風雨ニ

侵御座候を、其砌長倉祥壽院信心を起シ、彼地藏堂を

可致再興と思立、慶長十三年戊申三月正興寺前ノ住文

之老を頼申、奉加帳ヲ書調、龍伯様江指上言上被申

候、其時御上覽ニ相達申 御意被遊候者、勝軍地藏者

武運守護之薩埵ニ而 諸人崇敬申さて不叶儀也、祥壽

院建立之志、神妙ニ被思召候、奉加之儀御免被遊之

御上意之趣被仰下候、祥壽院謹難有奉存大慶為被申之

由、于今子孫ニ申傳候、依夫國府諸士中町在郷方々之

檀度^(徒)ニ到、心落之奉加ニ而結構ニ建立成就有之候、香

花屋敷迄被下直ニ座主ニ罷成被申候、右奉加帳家等頂

戴仕候、且又、慶長十五年三月、國府御方角沙門家督

職被仰付候御書物一通被下候、又元和二年三月重々ニ

家督職之御書物壹通被下候事別儀無之候、 御上様御

時有ハ専ら地藏堂香花之業をも相勤被申候得共、御他
界之以後、鹿兒嶋之ことに移申、於彼地ニ相果被申
候、夫より家督職跡之儀も大方ニ罷成衰微仕候、又地
藏堂香花之儀も脇々々指寄餘多にて、替へ于今到テ
相勤為被成之由候、然ニ我等事十ヶ年以前ニ右祥壽院
沙門跡目被仰付、當分此地ニ罷移申候、就夫御断ニ存
候ハ、右跡目ニ御座候得者、地藏堂之香花等如前々相
棒申度候、一ッハ御代御時之嘉例を存上、一ッハ祥壽
院修行之勲功を存申、傍以相勤申度候、何とそ右願申
一筋、各様御相談被下候事偏ニ奉願候、以上、

天和三年

亥三月朔日

正壽院

国府

御暖衆中

右五通本書、國府士家督盲僧帖佐智圓格護、

一 永徳寺正壽院者、家督盲僧國府士長倉正壽院ニ而候、
其次加世田之産佐藤祥壽院國府札取家督ニ罷成候、其
次加世田十二之宮智常、國府札取家督職罷成候、其次

國府士帖佐智圓家督職當分相勤罷居候、長倉正壽院よ
り佐藤祥壽院之間、家督盲僧暫断絶之由智圓ハ承候、

○行者堂

国府
主取山伏格護

右行者堂者、延宝八庚申年、本御内北方江創立之由、
元禄十一年村里改帳ニ相見得候、行者尊佛本國府士三
嶋本学坊看經所江被成御座候本尊之由、三嶋大光院ハ
承候、

▲役行者御木像古佛玉眼

但上作佛与相見得候得共、作者不相知候、

一 行者堂四敷三間茅葺礎

右修甫之節者、山伏中并俗山伏中、且又志之面々出

幾ニ而相調候、

○熊野權現 天照太神宮社人

永田
八十郎カクコ

右權現往古々創立与相見得候得共、開基之年間由緒

不相知候、

一 熊野權現社

右修甫之節者、近方志之面々出幾ニ而相調候、

○龍王宮 天照太神宮社司 斜木美濃格護

右龍王宮者、龍伯様御代御建立之由申傳候得共、

由緒不祥候、

一龍王社 一葦表

一俗説云、雷しけく被落候付、龍王宮御造宮有之候得共、無其儀しづまり候由申傳候、

一右社修甫之節者、近方又者志之面々并上小川村と相調候、

浄土宗帖佐願成寺末寺

○成等山 正覺寺

右正覺寺者、明曆四戊戌年建立、開山運譽道白上人被定候、帖佐願成寺四代載譽代ニ被同 尊意、栗野と國府江正覺寺被召立候、明曆四年と寛延三年迄九十九年

ニ成、

一本尊阿弥陀佛 一驅

一當寺開山德蓮社運譽道白上人大和尚 位牌一基

一當寺二世中興行蓮社心譽好山大德 一基

一客殿五敷四間茅葺 一茶間茅葺五敷五間半

一庫裡茅葺五敷六間 一大門茅葺

右四行旦方修甫

一住持代合入院之節者、御受不及御沙汰候、

一寺地借地ニ而候処、延享五辰年左之通被仰渡候、

一寺地目録写

國府 福嶋村

一寺地^{廿貳間半}壹畦^(壹反九畦拾五步)拾五步

國府 正覺寺

大ツ式表壹斗八升三合

高と九斗壹升九合七勺七才

右寺地五萬石御藏入高ニ而候処、國府正覺寺と大山野五畦自分失墜を以致田開可差上旨候間、寺地御繰替被下度依願御免ニ付、延享四年卯九月郡奉行神宮司弥兵衛竿相究、差出候帳面之通為寺地被下之旨、同十二月十五日御家老衆任御引付令支配候、向後守法式勤行無緩疎可相勤者也、

延享五年戊辰二月廿九日

比志嶋隼人 印

川田與右衛門 印

右本書國府賦所江有之候写、延享五年辰五月正覺寺江相渡候、

一書留写

當寺正覺寺者 帖佐願成寺開山運督上人、肥後國於宗雲館 惟新公江初而被致御目見御帰依不致、當國江可被差越之旨 上意、天正十六年自飯野栗野表江被移御座候ニ付供奉有之、以上意庵室之寺地被仰付、則庵室を御立被下、御厚恩不淺居住有之候処、義弘公高麗國御陣江御渡海被遊候ニ付、御發駕前ニ先寺号御定可被下候間、書記可被掛 御目ニ之旨被 仰出、願成寺・正覺寺之二名書記、以五代右京亮奉詞 尊意候処、願成寺寺号可然之旨 上意ニ而寺号決正仕候、一高麗御帰陣之後、自栗野帖佐表江被移 御座候付、栗野願成寺を帖佐江可被引移之旨依 上意、餅田名之内原之寺与申寺地江願成寺御造立有之候、栗野庵室之寺地旧跡江者被祠 尊意正覺寺を取立置候得共、漸々無住ニ罷成致破懷候、

一國府正覺寺・帖佐願成寺四代住持載誉代開山被祠 尊

意栗野庵室之寺地旧跡江被立置候、正覺寺致破懷、懷寺罷成候段、今以殘念至極ニ被存、國府諸役之衆并檀方江致内談、心服之上 公義江御訴被申上、御免許を以栗野正覺寺を國府之内福嶋名江、正覺寺新造ニ取立建立有之、至今寺住持無斷絶堅固ニ相續仕候、是偏ニ上人ニ御高恩之至ニ而御座候、

右之趣、正覺寺格護書留ニ相見得候、

○地藏堂

米田勸左衛門格護

右地藏菩薩者、國府士米田嘉兵衛建立也、

一棟札写

抑此地藏菩薩ハ、日秀上人一刀三礼之御作、御弟子深賢の彫刻于して御厨子安置し給ふ、來由をたつぬるに、元祖米田嘉兵衛宗長と云しハ、往昔 太守公豊州岩屋責之節、御供いたしはけしき御弓箭ニ而、一命あやうく弓手の肘ニ鉄砲玉負ながら心中ニ立願せしハ、此敵なんなく落城あらハ、歸陣之後摩利支天の尊容を建立し米田家ニ崇め奉り、永く子孫ニつたゑんと、一心不乱誓願之瑞現ニや、敵城忽チ落去、 太守公御歸

陣、嘉兵衛安穩則上人江參りぬ、誓願の旨趣聞召れ
咲をふくませ、此尊軀を彫刻彩色、事畢り嘉兵衛頂

戴、居宅之内ニ持佛堂をかまへ安置、供花おこたらさ
りしに、程なく身まかり、養子貳之丞纔十三歳の幼
稚、母宮内社司より帰りに不幸ニ夫にわかれ、常の
産なけれハ、常の心なく、孤子をすてあらぬ方にとつ
きしとかや、年少之貳之丞居宅の取繕も心にまかせ
す、朝夕の煙うすくして有か無かの渡世に、地藏菩薩
の持佛堂も、いらかやふれて霧不斷の香をたき、扉落
て八月又常住の燈をかゝけし風情なれハ、國分寺の觀
音堂を假ニ安置とさためしとかや、時うつり事去り、
養父嘉兵衛代ニも心よせ、今廢壊し事一向なけかわし
く、予絶たるをつきすたれたるを起し、一紙半錢の貯
を以て、今の岡ノ上四方板壁に造立し畢、月の朔日、
十五日、廿四日、廿八日、香花を備え奉る事自他嘉幸
ならん、歸命頂礼、

享保二十年卯六月廿四日

米田勘左衛門敬白

○御荒神 但御掛物絹表具

松田本林坊

右從 寛陽院御拝領ニ付、國府中不殘春秋兩度の勤メ
松田氏直ニ相請取候、御荒神自分行者堂江御立置也、

写

地頭喜入休右衛殿以取次、不動之繪被指上候、為替荒
神之繪從 光久様拝領候、随分泌藏尤候、恐惶謹言、

大乘院

丑

三月七日

本臨坊

右本書松田本林坊格護、

麓

○ 上小川村向花村之内

本町 但野町 年行司書下名字町人

▲本町東

一惣人数六百拾四人 男三百五十八人 女貳百五十六人

内 名頭百貳拾貳人 但元禄十一年村里改之節八拾竈

一御制札 札之辻前々被召立置候、

一札辻ノ東財部境栗野木迄

一右同ノ西加治木境龍口迄貳里廿四町

東財部境△西加治木境迄

一札辻△南小村津畑迄

一右同△北曾於郡境迄

南小村津畑△北曾於郡境迄

一札辻△上小川村迄十三町程

一右同△上井村迄廿町程

一永迫村迄親村上井村△分間廿町程

一右同△川内村迄壹里壹町程

一渡瀬村迄親村川内村△分間壹里程

一口輪野村迄親村川内村△分間廿五町程

一野平村迄親村川内村△分間廿町程

一右同△下井村迄三拾貳町程

一深迫村迄親村下井村△分間壹里拾町程

一^平下村迄親村下井村△分間壹里半程

一札辻△小村迄廿六町程

一右同△福嶋村迄十六町程

一右同△松之木村迄拾三町拾五間程

一右同△野口村迄拾壹町程

一右同△住吉村迄廿七町七間程

一右同△真孝村迄壹里四町卅五間

一右同△小濱村迄壹里卅壹町拾七間

一永濱親村小濱村△分間八町程自水手町

一小牧村親村小濱村△分間拾貳町程

一右同△野久美田村迄壹里拾五町程

一右同△小田村迄壹里拾町程

一右同△内山田村迄卅町程

一右同△内村迄廿九町程

一右同△見次村迄廿七町程

一右同△新町村迄拾五町程

一川畑村親村新町村△分間拾三町程

一かわらけ田村親村新町村迄分間拾五町

一右同△向花迄拾貳町程

一右同△府中村迄拾三町四拾三間程

右拾五ヶ村國府繩引帳以記之

○戎社

右前々△御鎮座、戎者推古天皇九年春三月聖德太子始

市使商賈知売買術、當此時誓姪子神為商賈鎮護神、後世以惠美須崇福德神自是始焉、

一本町豎馬場南馬場末ニ高麗町之旧跡有、

麓

上小川村之内

○唐人町 但野町 年行司書下名字町人、

▲唐人町東

一惣人数四百六拾九人 男貳百七拾六人 女百九十三人

内名頭九拾七人但元禄十一年村里改之節七拾二竈

往古唐船松通幅之砌、唐人此地ニ居付唐人町与名付之

由申傳候、于今唐人之子孫林氏、

一唐人町本町通路之間ニ五官橋与申候石橋有、本唐人之

名与申傳候、

○隅州曾於郡上小川村 庄屋役衆中

一高頭貳千九百七拾七石貳斗余

但御藏入給地、

一百姓人数五百廿五人

男三百三人

女貳百廿二人

内名頭四拾七人、但元禄十一年村里改之節五拾九竈、

一名物車田たはこ、外ニも段々名所有、末ニ記之、

一正長二年上小河里山野境書付写

上小河里の山野境目の事

一西ハはや人城の西のさかり、ちおとり山をさかう、

いぬいのすミハ、てしまるミやうをさかう、

一北のさかいハ、はや人の城の北のさかりよりして、け

なしの、城をさかう、

一うしとらのすミハ、あしたにしりをさかう、梅谷のほ

りまろ、中のさこのほりまろ、つふろ山のほりまろを

うちとして、まつかさよりしやうりてんのさがり、い

てのおもてのあかゆわをさかう、やたけをさかうて、

ゑないさこのおたてをさかう、南ハくまさきのミねに

さかうて、御まへのとり井をさかう也、

右此境目を、御さための時ハ、應抄之御代ニ山野の境

ふミ事、守護方よりハ田中たうけう、はま田かすへと

の、あつちとの、上井ふちハきとの以上四人、應抄方

より若松殿、伊地知殿、

借屋入た

右河たうき 同大藏 御ちうけん右近せう、上小河おとな、仁い田ちやうミろ、おちミのけんつう、江口土才ワきのそのゝ数多もん、なハの太ろひやうへその田道性、このほか上小河おとなのこらす見申書実也、正長二年つちのとの十月廿五日 伊季（花押）

右本書久満崎宮大宮司

村岡 喜兵衛所持、

一初櫻古木壺本

山下門蘭山

外側江植次有、

右 龍伯様脇なは落しの邊を被遊御覽、御詠歌為被遊之由申傳候得共、御詠歌致紛失于今無御座候、

一筒之口名水

右國府 御代より于今清水ゆへ、當分酒屋酒造入二相用候、

一拍子川

右住古一宮止上權現、二之宮大明神、大穴持神社、宇都峯神社、宮之浦神社、奏神楽妓楽御神謀を以、魔人大人於拍子川御退治被成候由申傳候、

○久満崎大明神、天照皇太神宮社司、斜木美濃格護、

右久満崎大明神者、何尊并建立之年間不相知候得共、

文明六年甲午三月廿四日建立之棟札有之候得者、古來

者神領過分相付候、永徳二年壬戌三月十日久盛判形、

右目録御記録奉行衆御用ニ付差上置、其上書付之内、

正慶二年・應永二十六年之書付有之候付而者、文明以

前之建立与相見得候、永徳二年より文明六年迄之間九十

三年罷成候、前代者國府中之惣廟之由候得共、龍伯

様國府江御殿御移之時分、天照太神宮を國府之惣廟ニ

御崇敬被成候ニ付、其時分より上小川村之惣廟と崇為申

由候、永徳二年より寛延三年迄三百六十九年に罷成候、

△御神躰御石躰

一宝殿小板葺九尺方礎 一拝殿茅葺四敷三間礎

一御供所茅葺三敷式間礎

▲善神王兩社 一石葺表

右五行氏子修甫、

一御祭九月九日、十一月初申之日、年中ニ兩度御神膳御

酒差上御神楽相勤候、

一棟札写

龔奉造立大隅上小川院

久滿崎大明神御宝前

右伏以金輪聖王天長地久國家安寧殊當國當保干戈不起
庶民得処矣大旦那藤原頼忠壽域兼福海綿延子孫繁茂而
四時釀災八節捨祥故耳

時文明第六甲午三月念四日

奉行 中津野武村

大工 藤原吉久

小工 五郎四郎

右本棟札、元禄八年亥十一月廿三日ノ夜、宝殿焼失之
節致焼失候ニ付、諸神社棟札写、國府賦所帳留を以記
之、

一慶長十五年九月廿二日

九滿崎御宮作ニ付すゝめ日記

一鳥目五十文鎌田帶刀殿 一鳥目十三文同四郎左衛門殿

一同十文永田与兵衛殿 一同五文池邊助左衛門殿 一

赤靱弝升田中大善正殿 一鳥目十文市藏坊 一同廿文

大坊 一同廿文本覚坊 一同十文千昌坊 一同三十文

存力坊 一同十文孫右衛門殿・同三右衛門殿 一同十

文八木新右衛門殿 一同五十文安田甚左衛門殿 一同

十文竹崎民部少輔殿 一真米弝升 一同十文丸太三右

衛門殿 一同六文白濱甚右衛門殿 一同十文田実彦右

衛門殿 一同五文武元九左衛門殿 一同十文上野新左

衛門殿 一同十文本田伊豆守殿 一同五文坂本三郎右

衛門殿 一同十五文楠本傳兵衛尉殿 一同十文井尻平

兵衛尉殿 一同十文妹尾傳兵衛尉殿 一同十文奎田万

右衛門殿 一同廿文福崎小左衛門殿 一真靱弝升平田

与進入殿 一鳥目十文指宿弝岐守殿 一同十文武村孫

左衛門殿 一真米弝合北原治部左衛門殿 一鳥目十文

税所志摩之助殿 一同十文同奎之丞殿 一同三十文松

元彦左衛門殿 一同五文德永源兵衛殿 一真靱弝升平

田狩之佑殿 一鳥目十五文大泉坊 一同十文上田六之

丞殿 一同廿文吉田六郎右衛門殿 一同十文野村織部

祐殿 一同十五文春山越中守殿 一同廿文上原右衛門

之祐殿 一同廿文猿渡新祐殿 一同百文鎌田玄番祐殿

一同五十文川上右京亮殿 一同廿文喜入吉兵衛殿 一

同五十文山田民部少輔殿 一同十文野村長左衛門殿
 一同十文町田甚兵衛尉殿 一同十文大寺李兵衛尉殿
 一真米三升伊地知理兵衛尉殿 一鳥目百文平野威要
 一伊集院半右衛門殿 一真米貳升野村但馬守殿 一赤
 米壹升和田乘介殿 一代官々よりニ衆 一鳥目五文宗
 兵衛尉殿 一同九文 長田藏之丞殿 一同三文吉井九
 兵衛殿尉殿 一白米壹升本田大炊太夫殿 一同五合米
 良權之介殿 一赤米壹升上原源右衛門殿 一鳥目百文
 福崎新兵衛尉殿 一同三十文東郷休伴老 一同十文鎌
 田外記助殿跡 一白米壹升阿多勝右衛門殿 一同壹升
 本田神次殿 一真米貳升豎山民部左衛門殿 一白米貳
 升三原次郎左衛門殿 一鳥目三十三文相良勘解次官殿
 一同十七文岩切縫殿助殿 一同廿文飯牟礼紀伊介殿
 一同五十文七島衆五人 一同廿文木原七郎左衛門殿
 一同十文藤山茂介殿 一同廿文鮫島大藏丞殿 一同廿
 文大野將監雪殿 一同十文伊地知少左衛門殿 一白米
 河上又左衛門殿 一赤米壹升相良彦次郎殿 一真米壹
 升野村藏人佑殿 一鳥目十文児玉四郎兵衛尉殿 一同

十文平田權兵衛尉殿 一同十五文川上帶刀左衛門殿
 一同十文正覺坊 一同十文權現之太夫 一川村帶刀殿
 ・同与介 一東郷助兵衛殿 一染川源之丞殿 一同廿
 文伊瀬知勘解次官殿 一真米壹斗長谷場主膳正殿 一
 同粗一ツハケ代弥五兵衛殿 一同壹升四本六介殿 一
 鳥目十文山山四郎兵衛殿 一同五文筆屋源吉殿 一真
 米貳升郡山六兵衛殿 一鳥目十文山田弥兵衛尉殿 一
 同十文萩原源左衛門殿 一同十五文東郷三左衛門殿
 一赤米壹升松崎奎右衛門殿 一鳥目十文町田駿河守殿
 一真米壹升伊集院備後守殿 一鳥目十文隈本吉右衛門
 殿 一同廿文鎌田四郎左衛門殿 一同五文宮原右兵衛
 尉殿 一同三十文湯地左近將監殿 一真米壹升永吉伴
 兵衛尉殿 一鳥目五文浦川奎左衛門殿 一同廿文家村
 彦三殿 一真米壹升有馬長右衛門殿跡 一同壹升東郷
 長門守殿 一真米壹升御茶坊主菜きん 一鳥目十文井
 尻洞為 一同十文御茶坊主純賀 一赤米壹升御茶坊主宗
 連齋 一同壹升遠矢重兵衛尉殿 一鳥目十文吉岡宮内
 太輔殿 一真米壹升田代形部少輔殿御内儀 一赤米壹

升村田源左衛門殿 一鳥目五文川上治部右衛門殿 一
 真靱老升野村備中守殿 一鳥目十文中江主水祐殿 一
 真靱老升木脇惣要 一同老升岩仲右衛門殿 一鳥目十
 文く称村七右衛門殿 一同六文いんとう与右衛門殿一
 同五文吉井弥一兵衛尉殿 一赤靱老升ささいしうとの
 一鳥目十文和田志摩之丞殿 一赤物五合吉井助左衛
 門殿 一鳥目十文牧ノ瀬助右衛門殿 一同五文竹の内
 弥七兵衛殿 一同五升弥七兵衛内物 一同十文加世田
 善左衛門殿一同五升上山少吉殿 一同五升林千次郎殿
 一同十文虎尾慶阿弥 一徳田市左衛門殿 一同十文
 荒田讃岐入殿 一同廿文平田七左衛門殿 一白米老升
 下村主水祐殿 一鳥目廿文長濱十郎兵衛尉殿 一同廿
 文大迫平左衛門殿 一同十文肥後因幡守殿 一同九文
 江田源左衛門殿 一同七文市成全右衛門殿 一同十文
 岡村治右衛門殿 一同六文益満同雷^マ齊 一真米老升坂
 本平右衛門殿 一鳥目五文永吉藤左衛門殿 一真物老
 升貴嶋和泉殿 一鳥目三十文村岡善兵衛尉殿 一同廿
 文榎屋出雲介 一同三文川野李兵衛殿 一同三文かち

清右衛門尉 一同三文肥前介 一同五文湯田与七殿
 一同十文大迫喜右衛門尉殿 一同五文湯田八郎左衛門
 殿 一同十文有馬清之允殿 一同五文中嶋藤右衛門殿
 一同十文孫作 一同七文井花藤右衛門殿 一同五文お
 く宮内左衛門殿 一同十文筑後介 一同七文拾草坊一
 同三文仲介 一同五文迫田孫十郎殿 一五文次郎四郎
 一五文吉右衛門 一廿文下寺之御かりや五右衛門尉
 一三文源左衛門尉 一四文善兵衛尉 一四文单兵衛
 尉 一十文本田七左衛門殿 一三文新左衛門尉 一三
 文彦右衛門尉 一五文小三郎 一六文屋く嶋衆一十文
 野村斉右衛門殿 一十文千中坊 一十文宮里奎允殿一
 五文三坂中右衛門殿 一十文齊六 一十文平右衛門殿
 一五文二木才左衛門殿 一十三文同五右衛門殿 一
 五文二屋藤小相兵衛殿 一十五文かりや源二郎殿 一
 四文仲右衛門 一はかりや源左衛門尉 一五文田中作
 兵衛尉殿 一真靱老升^御中間衆半右衛門殿 一赤靱老
 升竹下弥二右衛門殿 一篠原拾兵衛殿 一赤靱老升武
 本藤兵衛尉殿 一十文黒川市左衛門殿 一十文吉井仁

右衛門殿 一五文前田勝兵衛尉殿 一五文四郎右衛門尉 一五文次郎三郎 一十文小濱助太郎殿 一十文有村弥平次殿 一真靱靱升山下小右衛門殿 一十文そめ屋道喜 一米靱升松下番左衛門殿 一真靱三升内三郎次郎 一五文菅山早左衛門殿 一同五文同兵左衛門尉殿 一十文同内善進殿 一赤靱靱升千田佐吉兵衛尉殿 一十五文西藤与相左衛門殿 一十文伊集院兵部左衛門殿 一十文阿多丹入道殿 一廿文留松弥六殿 一廿文本ノマ、伊岡喜右衛門殿 一十文藤田拾介殿 一三文甚兵衛尉 一六文与五郎殿 一五文御船頭弥二右衛尉 一十五文九郎左衛門尉 一平兵衛尉 一十文原對馬介一鳥目十文宮内助兵衛尉殿 一真靱靱升肥後与二郎殿 一鳥目十文同主計助殿 一同五文うば上 一同五文ほうり主水佑殿 一同五文宗左衛門尉 一山内権左衛門殿 一真靱靱升吉田丹波入道殿 一同靱升本田勝三郎殿 一赤靱升同名与左右兵衛尉殿 一鳥目十文楠元半之允殿 一同十文川野新右衛門殿 一同十文西郷八郎左衛門殿 一同十文豎山讃岐入道殿 一同五文内蔵之允 一

十文永田次郎太郎殿 一同五文杉田権五左衛門殿 一同卅文永江弓右衛門殿 一同卅文宮原藤兵衛尉殿 一真靱靱升高山吉右衛門殿 一鳥目十文西郷彦左衛門殿 一同五文大浦民部左衛門殿 一同廿文篠原勝右衛門殿 一真靱靱升大浦弓助殿 一同靱升川畑次郎右衛門殿 一赤靱靱升重信丹波守殿 一鳥目十文有馬讃岐守殿 一同卅文岩切監物公殿 一同十五文田中与相右衛門殿 一同十文宮内式部左衛門殿 一同十文藏野金兵衛殿 一十文上村主税殿 一同十文四本孫四郎殿 一同十文伊こま新兵衛殿 一赤靱一升野村外記殿 一鳥目十文拾兵衛尉殿 一同十文宮内平六殿 一同十文大林坊 一同五文拾右衛門殿 一真靱靱升はしノ口蔵 一鳥目十文山田殿内坂本弥兵衛尉 一同十文同内奎左衛門 一同十三文同内清三郎 一同十文同与七左衛門 一同十文源左衛門 一同十文川野齊之允殿 一同百文是枝重存坊 一同百文東雲軒 一同廿文新經院

右本書村岡喜兵衛格護、但横折帳、

一 判描写



充行

正興寺領下池尻下作職事

汰樂寺又言檢校所

右石田者有限所當公事、守先例無未進懈怠可令勤仕者、仍所充行如件、

正慶二年三月六日

右村岡喜兵衛所持、玆敷判物故写之、

一應永廿六上小河村各田坪付写

應永廿六上小河村各田坪付之事

合

一新田門の分一町 にいた三反 ふかかハ八段なは

以上二町一反

一江の口門の分 一反 ふかハリ 二反廿部 のまくち

四反 すしふミ 三反 けハいつくわ 四反 大つほ

二反 城の下 三反 大もんくち 四反廿部 くし

のこり 一反廿部 しほ入 以上二町六反

一前水門の分 三反 ひがしの丸 四反 にしの丸 三

反山下外 まつの木田 以上一町八反

一上西川原門の分 七反 くりいか 八反 山下 六反

廿部 かハラ田 三反 にしかハラ 三反 島めぐり

以上二丁七反廿部

一下西川原門の分 四反 ひわ木 二反 大しほ入 四

反廿部 下ふるかハ 二反 まつの木田 八反 かし

わき 一反 なへ田 以上二町一反廿部

一宝樂寺門の分 一町一反 なは 二反 いけまし 三

反 しんかい 三反 きゑた 三反 ふか川 以上三

町二反

一牟も門之分 三反 たかまし 五反 たかハラ田 六

反 大つほ 四反 なはの柳田 二反 さうつ 二反

のまくち 以上二丁二反

一脇蘭門の分 六反 さうつ 二反 とうへ 三反 の

さき 二反 みすミ田 以上一町三反

一蘭田門の分 二反 かきの木田 三反 のまくち 四

反 かいもと 以上九反

一 かりや 四反 すゑふミ 三反 あいつほ 七反 つ

してん 三反 いわさき 七反 はちのつほ 八反

きたなかむた 八反 みなミ中むた 三反 なのはのあ

し原 一反 ゑないさこ 八反 くのつほ 四反 こ

たつはミ 五反 さのつほ 四反 山下 八反 十の

つら 以上七町三反

一 さた人給分 一町 にしふるかハ 三反 はまさき

四反 なのはかわそい 二反 せとくち 二反 以上

二 町三反しやうつか前御用註一町上らのつほ四反御代

官給分以上一丁六反 一 寺田の分 八反 柳田正國

寺領 三反 つくたかうたい坊 一反 かうせうしの

しやしやうてん以上一二二反

一 くまさき大明神の祭田 三反 くわんしやせくてん

二反 正月七日まつりてん 四反 二月のはやまてん

三反 三月三日まつりてん 一反 五月五日まつりて

ん 三反 なこしてん 二反 たなはたてん 三反

九月九日まつりてん 四反 霜月まつりてん 二反

めうけんまつりてんわきのそのの門ニあり 七反 ひ

き田 以上三町四反

惣都合田数三〇三町五段半(十九)

右本書横折帳老冊村岡喜兵衛格護、

一 永徳二年三月十日久盛判古目録写

くわんしやうてん四反 七月てん三反 しも月てん三

反 五月てん反 おがのほり一反半 ひかし□い上一

丁一反半

一 かうミたうのれうてん半

一 めうけんのれうてん一反

そうつかう十六ちやう八反六十分

内むくのそのく井つるはた筆せつちうの事

一 にい田かとのふん

一 所いその五反 一所二所にしのその七反

一 しもにしかわらのかとのふん

一 所いその四反 一所ミなミのつる二反 一所むかへ

のつる二反半 い上八反半 内四反もとその 四反半

つる

一 糸のくちのかとのふん

一 所いその三反 一所東ほかその二反半 一所まへの
つる六反 一所むかへのつる一丁六反 い上二丁七反
半

一 わきのそのふん 一所^二所^三合^三三反

一 きのしたかとのふん 一所よしなか二反

一 さた人ふん

一 ちやうつかひその三反半 一所いその一丁

一 所なは五反

一 上にしかわらのかとのふん

一 所つるはたけ三反半 一所同所にし三反小

一 所むかへのつるひがしのやしき三反

い上九反三百分

一 くまさきの御へいそのうち一反

一 ほう山くしのちんしやその一反せんれいと事

そうつがうはたけ 八丁三反小

右ちうしんせつちうのちやう如件

永徳二年^{ミツ}のへ 三月十日 久盛 (花押)

右本書村岡喜兵衛格護、

一元禄十一年寅十一月久満崎宮由緒書写

久満崎大明神、前代者國府郷中之惣廊ノ由、 龍伯様

國府江御屋形御移之時分、伊勢大神宮を國府之惣廟ニ

御崇敬ニ而候ニ付、其時分々上小川村之惣廟と為申由

候、只今伊勢宮江相付候、内侍屋敷久満崎之内侍を為

被仰付由候、

一 古來は神領過分ニ相付候、永徳二年壬戌三月十日久盛

判形之古目錄御座候、

但丑九月、御文書奉行市來源右衛門殿御用ニ付差上

置候、

一 只今者神領無御座候、上小川村之内御幣園と申屋敷、

百姓々古例ニ而毎年御衣紙一帖・米壺升、冬込之時御

宮江差上申候、祭田之字付ハ御檢地帳ニ相見得申候、

一 文明第六甲午三月廿四日再興之棟札御座候、大檀那藤

原頼忠・奉行中津野武村と御座候、

右之外由緒事物等退轉仕候由ニ而無御座候、

社人 半左衛門

右書付、國府賦所元禄十一年寅十一月帳留二有、

一元禄九年丙子八月棟札写

奉修造久満崎大明神宝殿小板拜殿草葺

隅州国府上小川村久満崎大明神者、従古来奉崇敬不知幾春秋矣、時維元禄第八乙亥歲十一月廿三日夜半有火而宮殿宝物悉焼却焉、唯文明年間造立記銀之一楮偶在大官司之家而免灰底也、神慮之所赴非人智之所及也、諸人只驚其奇異而已、竊謂、蓋神者惠物為心故、水早疫疾平素祈而消除也、如今此妙火代庶民之凶苦、而焼宮物者民間何凶事之有哉、果今年五穀登而村落豐饒也、於各応家之有無而捧貨財求新材、而宮殿稍増旧製、宝殿蔭以片木而抽氏子之精誠、拜殿葺以生草而守茅茨不劉之誠、然後行遷宮之礼巫人宝前唱祝言氏子殿下催歡喜、簫鼓者帶岩水之声而洗触身之汚、舞袖者招嶺松之風而拂起意之塵所、希神威充四方恩光照八紘、就中国都繁榮郊村安富而永受福沢也、

時元禄九年歲次丙子八月吉日謹記

神主

斜木左京清貞

大宮司

村岡半左衛門良亮

大匠師江口仁右衛門祐位 小匠師江口五左衛門祐永

同半田七郎左衛門重治 同脇元休左衛門清昌 同原田

五右衛門重村 鍛冶有馬慶右衛門純常 彩色師山内兵

右衛門治昌 上小川村庄屋井手上清左衛門惟榮 唐人

町年行司西川有右衛門和恒 普請肝煎村岡只右衛門良

林 同迫田六兵衛同 西藏元弥次郎 同山下土佐 同

江之口休右衛門

○ 国府七隈 笑隈内村 獅子隈内山田村 平隈新町村

隈崎上小川村 富隈住吉村 恋隈上井村 星隈同村

▲ 隈崎 久満崎大明神御鎮座

曹洞宗清水楞嚴寺末寺

永江庵

右永江庵者、往古上小川村之内江之口与申所江有之候

处、元禄四未年御新田ニ付当分之寺地江被召移候由、

元禄十一年寅四月七日国府村里改帳ニ相見得候、開山

楞嚴寺二世機堂和尚 応永二十五年四月三日開基也、

応永廿五年より寛延三年迄三百三十三年ニ罷成候、

▲本尊正観音

一尊

一當庵開山機堂和尚

位牌一基

一客殿茶之間五敷四間三尺茅葺

一庫裡

一大門茅葺

右三行旦方修甫、

一住持代合入院之節者 御受御礼不及御沙汰候、

一旦方 一屋敷

曹洞宗清水楞嚴寺末寺

○新城山

洞雲軒

右洞雲軒者、永享元己酉年十一月十四日開基也、開山

清水楞嚴寺三世巨海宗印和尚、永享元年より寛延三年迄

三百廿一年ニ罷成候、

本尊薬師如来但厨子入

一尊

一楞嚴寺三世當斬開山巨海宗印和尚禪師示寂

一客殿茶之間四敷三間三尺、後三尺庇有茅葺、

右旦方修甫、

一住持代合入院之節者、御受御礼不及御沙汰候、

一旦方四拾人餘

一屋敷

迫田

○四足堂阿弥陀

久満崎大明神大宮司

なは

村岡喜兵衛格護

○阿弥陀堂 右阿弥陀者、久満崎大明神御母之由申傳候、

久満崎

但久満崎大明神之御本地共ニ而者有間敷候哉、未審、

○早馬大明神

右同人右同

○鎮守社

大宮司門

源吉 右同

○薬師堂

山下門

庄左衛門右同

○阿弥陀堂

上新田門之 休三郎カクコ

○地藏堂

宇助カクコ

右創立年間由緒不相知候、本上小川村迫田江御安置ニ

而候處ニ、年間ハ不相知候、當分之堂地ニ者、福嶋村

八龍宮御鎮座ニ而候得共、福嶋村之様ニ八龍宮御迂宮

ニ付、其跡宮地ニ右地藏御移り御安置、于今迫田江堂

地之跡有之由、宇助咄ニ而候、

隅州曾於郡上井村

庄屋役衆中

▲上井御城 三輪朝臣兼喜并右馬頭殿被為成御座候由、御平様被遊御座候御屋地跡并諸土屋敷旧跡有、

▲御平様御屋地跡、今ハ圓龍院寺内ニ罷成候、

一上井御地頭山田越前守殿 今井松閑殿

右上井御地頭今井殿ハ國府御地頭江御答書、國府賦

所寛永年間帳留ニ相見得候、

一高頭千廿八石三升六合九勺三才

諸与 御蔵入

一百姓人数四百五拾人 男式百六拾老人 女百八拾九人

内名頭三拾三人 但元禄十一年村里改之節四十七竈

一名物上井川之站 名所七隈之内式限有

韓國神社主取社家

斜木

源左衛門

○韓國大明神

右韓國大明神者延喜式大隅五社之一社也、隅州正八幡

宮大貴己命、福山宮之浦大明神、屋久島救之神社合五

社ニ而候、韓國大明神御建立之年間不相知候、永正元

甲子十二月再興棟札有之候得共、其已前之事不相知

候、永正元年より寛延三年迄二百四十三年ニ罷成候、

永禄十年・元和五年・宝永五年御再興之棟札有之候、

▲御神躰御木像

一宝殿小板葺 一拜殿茅葺四敷三間

一廊下小坂葺老間方 一御供所茅葺四敷二間

右御修甫料、宝永五年十二月廿二日、伊集院用之

助殿御取次寺社御奉行所御證文ニ而、御修甫銀拾五

枚被仰付候、

末社 一冠輪大明神 韓國之父神

同 一恋限大明神 右同之母神

同(神々) 一荒人 同 一天一神 一若宮 一山之神

一善神王両社小板葺六尺方 一木華表

但御修甫方

一御祭米壹石貳斗、古来ハ今以御蔵入ハ被仰付候、

一御祭正月元日 二月初午 九月九日 十一月初午

右年中四度之御祭、御神膳御神酒差上御神樂相勤、御

司噺并衆中相勤候、九月九日御花から御神酒、御本

丸江指上申候、

一宝永二年乙酉十二月 御代參後醒院喜兵衛殿白銀十兩

御奉納、所役之罷出申候、

一棟札写永正元年再興

龔奉再興 唐神八所大明神社壇 一字

大工 松永助左工門尉

右仰願者皇風永扇四海帝道遐昌九庚十月一風五日一雨

大工 藤原帶刀兵衛尉

誠致千円誠專祈大檀那三輪朝臣兼喜本命元辰福祿寿星

願主 今村石見守

寿山高於迷盧福海深於滄海子葉孫枝幾萬歲六親九族當

願主 斜木飛彈守

城当村之諸人常安常樂四時無一点之災八節有大來之慶

永祿十年丁卯十二月廿七日成就之敬白

三災八難遠檳他方百吉千祥之砌仍丹惱如件

長瀬助左工門

于崙永正元季甲子十二月吉日 謹書

一棟札写元和五年再興

大工助左衛門藤原親次

聖主天中天迦陵頻伽聲 大旦那大梵天王

大願主藤原朝臣盛家

奉再興唐神大明神宮 一字

小工八郎三郎 藤左衛門尉

哀愍衆生者 我等今敬礼 大願主帝釈天王

藤九郎 新九郎

一棟札写永祿十年再興

聖主天中天迦陵頻伽聲 大旦那大梵天王

右奉為護持願主藤原義久朝臣御息女龜寿様御息災延命
身意勇健源當二世安樂御領豐饒衆人觀喜別而者御家繁
栄國中安穩庄園太平万民快樂晝夜無事風雨順時五穀成
就心中所願如意滿足故也仍旨趣如件

奉再興上本ノママ唐神八所大明神社壇一字大隅国上井

哀民衆生者 我等今敬礼 大願主帝尺天王

于時元和五年己未卯月吉日

右意趣者息災安穩武運重音大法主大壇那藤原朝臣嶋津

當奉行

義久様當地頭長久一如意皆今滿足之故也

飯牟禮紀伊介藤原光家

新納兵部左衛門尉忠包

大工 西郷彦左工門尉

伊瀬地太郎兵工尉

鍛冶 有馬源六左工門尉

神主 斜木飛彈守

肝煎 小篠助太郎

右棟札壹枚、宝殿大破之節致紛失候哉于今無御座候ニ
付、国府賦所諸神社改帳留を以記之、

一棟札写宝永七年再興

奉再興韓國大明神御殿各一字
拜殿

夫以此神社者大隅五社之一而廟食於国府郷上并村宇豆
峯不知幾春秋也里俗相伝古来者被寄附神領数町雖宮殿
盡美物換星移而梁棟日々傾側典籍漸々放失也僅有元和
五年 持明彭総公修覆之棟簡且又祭米壹斛式斗每歲廩
人繼之今猶不怠焉於茲郷中諸司共社人捧訴帖遂達 太
守吉貴公貴聞賜以白銀百五十兩猶又氏子数百人各有志
者出一紙半錢工師展力庶民子来再興經營不日而全造畢
也遷宮之礼祭祀之儀行焉於是日宇都雖旧峰其殿又新所
禱国都安全郷村豐饒風不鳴枝雨不壞境三光正位四時有
祥故也

宇豆創造幾千載 今又再興宮殿光

幣帛香爐階上潔 粢盛菜菓マ實中昌

松風響出和巫奏 鳥下嚙来扶熱黄

誰識神威無限処 山高海濶マ水決々

時宝永七歲次庚寅二陰月吉日敬白

訴帖達貴聞次序

地頭肝付主殿殿郷司 坂本休左工門郡吏 野村五左工門

社奉行柘山助太郎殿 野村源五左工門 津曲善左工門

御家老鳥津中務殿 肥後周右工門村司 豎山郷兵衛

取次 伊集院用之介殿 李田善左工門 園田六右工門

岩切與右衛門工師 新橋甚介

平田利右衛門宮司 斜木次郎左衛門

一御合力銀被仰付候御証文写

覚

銀拾五枚 韓國大明神宮

右社頭由緒之儀委曲達 貴聞、一往造替料為合力銀、

右員数可相渡候、若及不足候ハ、氏子中助合を以修

甫可仕候、尤後例二者被仰付聞敷旨、中務殿、伊集院

用之助御取次御証文を以被仰渡候間、致受用修甫堅固ニ相調、成就之首尾當座江申出候様可被仰渡候、以上、

寶永五年子十月廿二日

寺社奉行所印

肝付主殿殿

右之通申来候間、堅固ニ可被申渡旨御差圖ニ而候、以上、

子

十月廿四日

萩原 甚七 印

野田喜兵衛 印

国府

噯衆中

一由緒所写

韓國大明神

末社

一冠輪大明神

同

一恋隈大明神

同

一荒人

同

一若宮

同

一天一神

韓國之母神

韓國之父神

一山之神

一右古來者、上井村宇津峯^ニ御宮作有之候得共、以後辰巳ノ方四五町隔候而、宮作為有之由申傳候、一前々ハ御祭田式町餘被召付候得共、京竿之時分為被召上由候、

一元和五己未年 持明様御再興被遊候而 御崇敬之段、于今棟札ニ相見得申候、

一當分ハ年中御祭米壹石式斗從御藏入被仰付、御祭毎年無懈怠相勤申候、

右之外由緒書物等無御座候、

社人 斜木次郎左衛門

右國府賦所元録^{マモ}十一年寅十一月廿八日帳留ニ有之候、

上井村下々屋敷^{七間}廿五間 五畦廿五步 大ツ壹斗四升六合

一下々屋敷五畦 大ツ壹斗式升五合 韓國大明神太夫 源左衛門

同所下々屋敷^{十間}廿六畦廿步 大ツ壹斗九升三合 右同

一下々屋敷五畦大ツ壹斗四升五合 内侍

右式行 社家屋敷御帳ニ相見得候

藥師堂茅葺礎式間四面 上井村南門之藏六^コカク

右創立之年間不相知候、韓國大明神御本地与申伝候、於上様御再興被仰付候由棟札ニ相見得候、

御薬師古佛座像木佛十二神木像

右御厨子 於上様御再興与申伝候

一棟札写

上棟薬師堂再興

聖因永昌佛縁糸続状希 応医王善□本願力法 大全憑

大将夜刀守護功檀門三州大守嶋津義久公之御息女運命亨通御子孫武名長久国人以忠以義国家安平共一家繁茂常悉除病患济得快楽矣

于時寛永六年己巳二月吉日

願主敬白

再興有司藤氏町田紀伊守忠秀河畑肥前守□下酒匂□左

工門 大工河邊甲斐守 長田半五兵衛 當村肝煎小篠

助左工門 下肝煎平内

右棟札一枚、朽損文字不相知字ハ丸ニ而召置候、棟

札堂坊主上井村南門蔵六方格護、

原文

○一此書相調候已後、宝曆五年韓國大明神御還替有之、上井村末ニ記之、

○井手神

韓國大明神主取

斜木源左衛門格護

右初造営之年間由緒不相知候、

一石之小倉式尺方

一御祭米四升式合、于今御蔵入被仰付候、

一御祭二月彼岸ニ神事相勤候、

諏訪大明神主取

○諏訪大明神

山元伊賀

右諏訪大明神者、慶長七年御造立也、慶長七年ニ寛延

三年迄百四拾九年ニ罷成候、

▲御神躰御鎌

一宝殿大板葺礎式間方上屋茅葺

一拝殿茅葺礎三敷三間 一御供所 一木萃表

右氏子修甫、

一御祭米三斗式升、于今御蔵入被仰付候、

一御祭七月廿八日御神事相勤御司噯又者衆中相勤候

一棟札写 慶長七年造立

聖主天中天 迦陵頻伽声 大檀那大梵天

奉造立諏訪大明神精舍

哀愍衆生者 我等今敬礼 大願主帝釈天

右為護持信心大檀主藤原義久朝臣御息災延命御子孫繁昌御武運長久国家安全万民豊樂次藤原有信又同氏利昌福寿増長所求如意吉祥不退心中所願決定成就決定円満矣仍大旨如件

慶長七年壬寅正月吉日

大工 長田七郎左エ門尉良助

同名 采女正良貞

折田利右エ門尉年盛

鍛冶 山下 市 丞

棟札裏ニ

當地頭山田越前入道有信當代官堅山讃岐守利昌

下代 前田掃部左エ門尉重昭

肝煎 小篠助左衛門尉

右棟札有宝殿

川内村
一下々屋敷十四間七畦 大ツ式斗堯升 山元 伊右衛門

右社家屋敷御帳ニ相見得候、

曹洞宗国府安舟軒隔庵

○虎岳山 刈龍院

右刈龍院考、開山安舟軒俊濟和尚也、龍伯様御嫡女

御平様薩州義虎之室、慶長八年癸卯雪月十二日御他界

被遊候ニ付、為御菩提所御屋地不殘寺内ニ被召成、高

拾石被召附、龍伯様御建立御寺ニ而御座候処、其以

後高被召揚、于今御佛餉米式石被仰付候、慶長八年よ

り寛延三年迄百四拾八年罷成候、

▲蓮昌様御靈屋大板葺礎五尺九寸ニ四尺九寸

一右上屋茅葺礎三敷方

右式行檢者附御修甫所、

▲本尊觀音

▲蓮昌妙守庵主 御牌一基

右之御子 御碑一基

▲通津宗窓大居士

一開山安舟俊濟大和尚

一客殿茅葺礎六敷四間三尺縁有、

右御修甫之節者、御合力銀被仰付候、

一庫裡茅葺礎五敷五間板縁三尺サシヲロシアリ、

一物置茅葺礎四敷貳間取合樋之間有、

一門茅葺

右三行所并自分旦方修甫、

一米貳石 蓮昌揉為御佛餉料、今以御蔵入より被仰付

候、

一留香爐

右御寄附之訳不相知候得共、御寺之儀候間、御寄附

物共ニ而者有間敷哉之由候、

一下々屋敷^{十貳間}六畦拾貳步 大豆壹斗三升 圓龍院

右寺社屋敷御帳ニ相見得候、

一慶長十二年目錄写

隅州曾於郡上小川村之内

替地目錄

高五石者但浮免

右之地為新知令配分候、弥々以 蓮昌様 御靈前之

儀、無怠慢可被相勤者也、

慶長十二年九月廿四日

平田久兵衛尉
宗親判

山田越前入道
理安印

喜入大炊助
久正判

圓龍院

隅州曾於郡上小川村之内

加増目錄

浮免

うしいき

上田壹反貳畦 壹石六斗八升

六弥太

松木田

下田壹畦拾七步 壹斗五升六号七勺

早介

火うちせまち

中田壹畦十步 壹斗六升

新左衛門

おくその九を三分之内

上畠壹畦廿步 壹斗六升六合六勺

六右衛門

山ノうしろ二反之内

中畠壹反六斗 持留村之内

左近次郎

住吉

上畠壹反八畦廿步 貳石貳斗四升

勘解由次官

合五石三合

先

已上

慶長十二年雪月九日

平田久兵衛尉
宗親判

山田越前入道
理安 判

喜入大炊助
久正 判

圓龍院

右古目錄式通圓龍院格護、

一 差出写

差出

一 御魂屋之上屋但茅葺四方九尺

一 客殿六敷四間三尺但茅葺

右國府上井圓龍院事考、龍伯様御嫡女蓮昌様慶長八

年癸卯雪月十二日御他界被成候ニ付、為御菩提所御屋

地不殘寺中ニ被召成、龍伯様被遊御建立、高拾石被召

附候得共、于今被召上御佛供米式石ツ、御納戸御藏

ノ每年被下、御月忌等迄不懈相勤申候、右之通御崇敬

之御寺之由候故、破損之時分ハ從御公儀御修甫御座

候、巳ノ年高崎惣右衛門殿・堀四郎左衛門殿御取次を

以、銀六百五拾八匁餘被仰付候而、開修甫相調申候、

其後御葺替茂依無之、兩はり下地迄すたり申儀御座

候、去年之大風ニ弥破損申候条 急度御葺替被仰付候
様ニ御申頼存候、以上、

卯十一月三日

貫察 印

國府

御横目衆中

御噺衆中

右被申出候通別条無御座候間、御葺替被仰付候様ニ御

申頼入候、以上、

卯十一月三日

國府横目

矢野助太夫 印

同 山崎清右衛門 印

同 家村源右衛門 印

同 野村源右衛門 印

同 肥後勝右衛門 印

同 宮原藤兵衛 印

福昌寺

右書留圓龍院格護、

一 御靈膳道具御調替御證文写

覚

御靈膳道具

一御本腕^マ壺^マツ但上眞塗御紋三ツ、金箔磨

一御汁椀四ツ但二三四ツ目迄右同断

一御皿腰高拾ツ但上眞塗御紋三ツ金箔磨

一御酢味噌入壺^マツ但右同断

一御供行四枚但溜塗

一小扇形壺^マツ但右同断

一御菓子入縁高壺^マツ但右同断

一右請臺杓^マ但切足八寸塗右同断

一御茶湯茶碗二ツ但上眞塗御紋三ツ金箔磨

一右請台二ツ但右同断

一御茶湯提子壺^マツ但溜塗

一右請臺壺^マツ但右同断

右拾式行白木櫃ニ入但鎖前有、

右者蓮昌妙守庵主様御靈膳道具、年来久敷候故及破損候、雖然住持自力ニ難成候付、御調被仰付度之旨訴訟依申出、遂披露候處、此度一往之儀申出之通被仰付、

右之通出来候而相渡候間、取置茂入念可然候、尤後年之儀者住持自分調ニ可然候、仍如件、

元録^マ十五年午六月三日 寺社奉行所 印

國分圓龍院

右御證文圓龍院格護、

○安骨山

曹洞宗薩州吉田津友寺末寺

德持庵

右德持庵者、本龍泉寺ト申候而、寺之字都与申所へ有之、開山吉田津友寺二代足室圓給和尚、長禄二年之開基也、上井村菩提所ニ候處、持明様御下知を以只今之所江相直德持庵与被相改、德持庵開山日和和尚、持明様御再興、貫明様御牌并御骨被遊御安置、御佛餉米式石被召付候、泉龍寺^マ跡上井村矢嶽之下みの前之上ニ有之候、長禄二年々寛延三年迄式百九十三年ニ罷成候、

▲本尊釈迦如来但古佛座像

▲六觀音厨子一ツニ御安置

右 持明様御持佛堂ニ御崇敬有之候を、德持庵江御安置ニ候、

▲貫明存忠庵主

御牌一基

▲義久公御骨厨子之内ニ御安置

右 御外家箱及破損御修甫之願申上、願之通御厨子御調、寛保二年壬戌四月十六日寺社方取次衆平田源左衛門殿御持来ニ而、所役々并諸僧罷出、御入佛供養首尾能相濟申候、

長禄二戊寅二月十七日

一前惣持津友二世当庵開基足室圓給大和尚禪師

一四世德持中興盈澤充和尚

一德持開山日山和尚

一客殿茅葺六敷四間三尺

一茶堂茅葺五敷三間三尺

右二行、依願御修甫料銀拾五枚被仰付候、正徳五年未

九月御修甫相濟候、御證文德持庵格護、

一庫裡茅葺五敷四間三尺

一門茅葺

一石之二王

右三行檀方修甫、

一眞米貳石 貫明様為御佛餉料御蔵入被仰付、近邊之

寺院相揃御月忌被相勤候、

一經箱但唐物、牡丹之彫物有一箇

一錦手大膳鉢一ツ

一青滋水指但口七寸少欠目有一ツ

右品御寄附之訳不相知候得共、德持庵 持明様御再興之御寺故、御寄附共ニ而者有間敷候哉、結構成物ニ而候、右之外諸品校割帳ニ相見得候得共、宝物与申程之物無之由、德持庵現住東悦被承候、

一切手写

切手

一眞糲五表五升者

一赤糲貳拾表貳斗者

右之分上并龍泉寺江可被相渡候、五人扶持方、慶長十

四年三月より同八月迄六ヶ月之給分也、

慶長十四年三月九日

平久兵衛 印

山越前入

喜大炊助

村田源左衛門殿

野村少外記殿

右本書野村喜太夫方江有之候、

一手形写

手形

眞米式石先かき

右者上井之徳持庵江可被相渡候、國府様御代 御私ニ 貫明様御位牌被召立候ニ付、前々如御仕置御佛供米として今年も相始被給候、御使喜入久右衛門殿を以被仰聞如此ニ候、以上、

寛永十一年十二月十六日

福屋五郎兵衛

竹内寛右衛門殿

橋口勝兵衛殿

右本書徳持庵江カクゴ、

一指出留写

寺地^{十五間} 老反五畦^{差出}

卯塔老反

右者 持明様御代 貫明様御牌御立被成候而、御供

米式石宛毎年相渡、勿論寺地其刻も御免地ニ而竿入

不申候条、此節寺も反畦相記差出申候、以上、

明暦三年酉九月十七日

徳持庵 芳充印

屋敷檢地

御奉行衆中

一書物留写

書物

徳持庵之儀者 國府様御私領ニ 貫明様・妙蓮様・持明様御三殿様之御牌御立被成候、御使者町田紀伊之介殿ニ而御座候、其節御佛供米相渡、今迄毎月御命日ニ者近邊之四ヶ寺相揃、御月忌相勤申候、寺地事上古之上井之菩提所之儀無其隠候、今度屋敷檢地奉行伊集院庄右衛門殿被差越候砌、右之段申候得者、竿取寺も出候而反畦被相記候、國府様御私領ニ 御三殿之御牌御立被成候事、徳持庵計ニ而御座候、國府様御仕置之様ニ寺地御免奉頼候、以上、

明暦四年戌六月六日

徳持庵

御檢地

芳充 印

御奉行所

右書留式通徳持庵江カクゴ、

上井村

一下々屋敷^{十八間} 老反八畦 大豆老表老升

徳持庵

右寺地御免之由寺社屋敷御帳ニ相見得候、
御靈膳道具被仰付候覺書写

覺

- 一金磨御碗五ツ
- 一白木御碗壺ツ
- 一足付八寸三枚但右同
- 一薄鍋壺ツ但ふた有
- 一燒物押鉢式ツ内一ツ損物
- 一御菓子入壺ツ但溜塗
- 一竹輪十二但溜塗
- 一御供行二枚但溜塗
- 一物請平足折敷三枚但溜塗
- 一水の子入式ツ但足付溜塗
- 一曲鉢四ツ但溜塗
- 一同まかり壺ツ
- 一この桶壺ツ但溜塗
- 一金磨土器式拾内二ツハ耳土器

國府

德持庵

右者御地物方江有之候御靈膳道具、先比當座迄被置候ニ付、此節右之通德持庵江可相渡候間、請取之堅固ニ致格護、御靈膳方江可相用候、勿論一往渡切之事候間、至後年雖為破損修甫無御構候、尤住持替り之節ハ、校割同前ニ後住江堅固ニ次渡候様ニ可被申渡候、以上、

正徳四年午三月廿八日

寺社奉行所 印

福昌寺

右之通被仰渡候間、堅固ニ致格護、御靈膳方江可被相用候、左候而住替等之節者、校割同前ニ後住江次渡可有之候、以上、
福昌寺

午四月二月

副司案 印

國分德持庵

右本書德持庵カクゴ、

一德持庵来由書物写

國府上井村德持庵来由之覺

一德持庵之儀最前者寺之宇都与申所江御座候、其後持明様御下知を以只今之地ニ相直申候、昔々上井村之菩提所ニ而候、寺地除地ニ而御座候、
一御本尊釈迦如来但古佛座像
一開山者吉田津友寺二代足室圓給和尚、画像自贊、于今德持庵ニ御座候、
一六觀音厨子一ツニ御安置

右 持明様御持佛堂ニ御崇敬有之候を、徳持庵江御安置被遊候、

一貫明様御骨錦ノ袋ニ御納

御位牌御安置被遊候様子ハ、持

明様御代ニ國府龍昌寺・金剛寺之外、御私領之内ニ御牌寺御建立可被遊御志ニ而御座候、其時分徳持庵無住ニ而御座候ニ付、可然出家有之候ハ、此寺ヲ御建立

可被遊与被思召上候、然処ニ、庄内素生之出家芳龍、

下井村江草庵を結び、宮内之文之和尚江久敷物讀承罷

居候を 持明様被召出、銀式貫目拝領仕上京出世仕候

而、日山和尚与申候、徳持庵寺地狭く候ニ付、近邊百

姓地道場門之屋敷被召付、寺作等結構ニ被仰付、 貫

明様御骨并御牌御安置被遊候、御使町田紀伊介殿ニ而

被 仰下候者、御骨与申袋之儀茂 持明様御手縫ニ而、

緒迄も御手打ニ而候間、努々不可有疎略候、先佛餉米

式石被仰付候、且又寺高茂可被召付候得共、重而賣知

行可有之砌、買地を以可被召付候旨、住持日山和尚謹

而承申候、寺高不被召付候内ニ 持明様御他界被遊候

ニ付、無其儀御座候、御佛餉米于今不替、每年被仰付

候、

一右段々者、日山和尚第子芳充幼少ニ徳持庵ニ罷居、上

方遍参之後、師匠之跡徳持庵住持ニ罷成、五十六七年

居住仕、壽命九十二而逝去申候、此老僧代本寺末寺之

御改被仰渡候砌、委細之書物被差上、其書物留于今御

座候、其内ニ徳持庵來由之儀有之候を以書付申候、其

書物惣様長々敷御座候付、書載不申候、

一徳持庵江 御牌御立被候節、門前三下馬札相立申候、

何れ之時ニ退轉仕候哉、只今ハ無御座候、于今札立之

本与申候而其場者御座候、

但下馬札立候跡、徳持庵出口西之方一間土手之上ニ而候

下馬札御書替之願被申上候処、本下馬札差出候様与有之候得共、朽損

り紛失故御書替不被仰付段申傳由、八十才計上井村百姓半左衛門・五右衛門与申者咄ニ而候

徳持庵寺内

▲阿弥陀堂

右(説文か)

御城内

○三寶荒神

衆中御城山留格護

右御創立之年間由緒不相知候、乍然 於上様御再興与

申傳候、御城山中西之嶺ニ有小社御鎮座、

御城内たれの元も入、

○地藏堂

衆中御城山留格護

右御創立之年間由緒不相知候、元本尊者右馬頭殿佐土

原江御移之節、右馬頭殿内士ジカワ名字之人抔守上佐

土原江被差越、彼之地江堂有之由、ジカワ名字之子孫

上井村百姓五右衛門与申者所江立寄咄為有之由候、當

分之本尊ハ古脇立之由、年八拾才計五右衛門・半左衛

門兩人咄ニ而候、

一石塔一基但無銘

十右衛門格護

右石塔者虎ヶ石共云、又者十郎之石とも云、由緒不

祥、俗説云、大磯之虎六十余州致廻國、曾我十郎祐成

為菩提一ヶ國ニ石塔一基ツ、建立与申説も有之候得

共、實否不分明候、乍然建久四年五月廿八日、曾我十

郎祐成戦死、右石塔于今毎年五月廿八日縁日ニ而諸人

致參詣候ニ付而者、虎ヶ石与ハ不被申候、

○御駕籠立石

水之下

右 龍伯様御狩御登せ之節、此所江御駕籠相立候由申

傳候、

國府七隈之内
○戀隈

右矢嶽之下西むたの上ニ楠森有、其元ニ石ノ小倉有、

右同
○星隈

右いてか山之内南ニ楠ノ木式本有、枝葉諸人手掛も不

罷成由申傳候、

○藥師堂

一字

次右衛門格護

右永祿十丁卯年創立也、永祿十年も寛延三年迄百八十

四年ニ罷成候、

▲藥師佛御からの裏ニ書付有写之、

斜木出雲守助明 同十郎右衛門方

同助四郎

佛阿沙門梵泰本願檀那宗精

奉刻彫東方藥師醫王善逝之尊形

于時永祿丁卯仲秋彼岸日敬白

宝曆五亥年韓國大明神、依願御造替披キ御修甫被仰付

候、斜木出雲書留写、

韓國宮由緒考鑑

韓國大明神者所撰於延喜式大隅五社之一社也、社殿幾經星霜矣、永正元^{甲子}十二月吉日、永祿十^{丁卯}十二月廿七日、元和五^{己未}卯月吉日、宝永^{庚寅}二陰月吉日再興棟札、簡以後及大廃也、社司訴寺社方、而宝殿拝殿及兩善神王御供所有造宮也、誠何幸哉、承命各來勤於此地而修理全造畢也、伏願將神明光輝禱、御武運長久國家安穩而已、此書後生之可為考鑑欵、時宝曆歲在乙亥十二月初

吉源盛房序、

一棟札四枚有写

一宝永五子年銀拾五枚為御合力被仰付候、御證文写有之

乍恐口上書を以御訴申上候、

韓國大明神宮

一御殿一字 小板葺 一廊下一字 小板葺

一拜殿一字 茅葺 一善神王兩宇 小板葺

一御供所 茅葺

右韓國大明神宮、前代者韓國宇豆峯之神社与奉申、國府上井村宇豆峯与申候嶽ニ被遊御勸請候處、宇豆峯よ

り辰巳之方四五町程下ノ地ニ御鎮座ニ而御座候、尤唐神与茂奉申由、棟札ニ相見得申候、右神社者大隅五社之内、延喜式ニも相見得為差立神社ニ而、往古者御祭田被召付置候得共、京竿之時分被召上候由申傳候、當分八年中ニ四度之御神事相勤、御祭米壹石貳斗、御手形ニ而被下、御祭之砌者御司所囑衆、又ハ囑衆差支候節者衆中衆々御勤被成候、左候而九月九日御祭ニ者、御酒・御奈・當季菓子御本丸江差上申候、然者五社之内四社者國分正八幡宮、同所大穴持、福山宮之浦大明神、屋久嶋救神社之儀者、御修甫所之様ニ承申候処、右韓國宮計御修甫所ニ而無御座候、前代御修甫被仰付候永正元年^{申子}十二月 永祿十年^{丁卯}十二月、元和五年^{己未}卯月、右年間ニ御奉行付ニ而御修甫被遊候由、棟札ニ相見得申候、且又大隅五社為御參詣、宝永二年乙酉十二月韓國宮へ 御代參後礎院喜兵衛殿白銀十兩奉納被遊、所御役々衆御出勤被成候、其砌右社頭及大破御修甫之願申上候処、伊東才藏殿御見分之上、宝永五年子十二月、為御合力御銀十五枚成シ被下、不足分

者氏子中^の助力を以修甫相調候様被仰渡、御修甫相調申候、其以後小破之節^者取繕菟哉角^与仕候得共、右社頭寶殿其外虫付^ニ而大破、開修甫^ニ不仕候而不叶儀^ニ罷成申候処、私事御存知之通小身者、殊^ニ氏子中茂此近年差迫り、延米等申上候者而已有之候^ニ付、修甫相調不申候、依之御訴申上候、恐多奉存候得共、五社之内韓國宮之儀延喜式^ニ茂相知候神社之儀候得共、破壊仕候儀残念至極奉存候、何とそ右由緒を以御見分之上、右四社同格^ニ御檢者附御修甫所^ニ、此節より被仰付被下候様御申上可被下儀奉頼候、以上、

韓國宮祠官

西八月十八日

斜木出雲

国分社家頭取

斜木美濃殿

右斜木美濃殿并所御唼衆御次書有、

本文^ニ付寺社方御取次衆小田善兵衛殿、御免者衆白石弥左衛門殿、御大工衆津留九兵衛殿・瀬戸山庄左衛門殿、國分御唼衆野村喜太夫殿、御横目衆荒田源助殿・山元次右衛門殿、國分御主取大工衆新橋甚六殿、同御

筆者衆代中村弥七左衛門殿、同衆中御触平山新平兵衛殿、西十一月朔日上井村江御差入^ニ而、翌二日^の三日迄社頭御見分相濟直^ニ御立被成候事、

覚 写

國分上井村韓國大明神社頭及大破候得共、社司并氏子中小身者共故、修甫造替難叶由^ニ而、往々檢者付修甫所被仰付度旨、申出趣有之候得共、申出之通^ニ者不申付候、右神社之儀為差立由緒有之候^ニ付、壹分銀振廻次第一往檢者付を以、造替并披^キ修甫可申付候、尤繩竹夫手間等者、所役^ニ可差出様可被申渡候、以上、

戌二月晦日

寺社奉行所

右之通被仰渡候間、得其意如例首尾可被致候、此旨御地頭御差図^ニ而候、以上、

取次

藤嶋幸右衛門 印

戌二月晦日

国分唼衆中

右之通被仰渡候間、難有可奉承知候、以上、

宝曆四年戊寅二月五日

國府賦所 印

坂本納右衛門 印 平田藤太夫 印

安樂十内 印 林 伊左衛門 印

野村喜太夫 印 斜木出雲方

口上寛

韓國大明神

右社頭并末社年來久敷虫付ニ而及大破、造替披キ修甫之間不仕候而不叶躰罷成申候得共、所并氏子困窮仕手及不申候付、御見分之上御檢者付を以、御造替被仰付被下度旨、先比奉訴趣御座候処、御銀御振廻次第一往御檢者付を以、御造替披キ御修甫可被仰付旨被仰渡趣、難有次第奉存候、此上者時節を奉待居訴ケ間敷不申上筈御座候得共、大虫付ニ而御座候処、此比ニ罷成申候得者客殿迄虫相見得申候ニ付、折角相除申候得共手式ニ及不申候、今通ニ而者、御神躰ニ虫付之程無寛束奉存候間、何とそ急度御造替披キ御修甫之間被仰付被下候様、被仰上可被下儀奉頼候、右通難有被仰付候上者、訴詔ケ間敷儀曾而不申上筈御座候得共、御神躰虫

付ニ罷成候而者別而如何ニ奉存候ニ付、不願恐申上事ニ御座候間、此等之趣を以被仰上可被下儀奉頼候、以上、

戊六月廿日

斜木

出雲 印

斜木美濃殿

右斜木美濃殿并所御暖衆御次書有、

写

韓國大明神社頭虫付ニ付、斜木出雲書物ニ、法様之次書を以願申出趣有之候得共、當時御銀御振廻無之ニ付、此涯願之通難被仰付候条、御神躰虫付念遣敷候ハ、假殿所役相調候様ニ与、寺社方取次小田善兵衛殿を以被仰渡候間、此旨可被申渡御地頭御差図ニ而候、以上、

戊七月十八日

取次

藤嶋幸右衛門 印

國分

暖衆中

右之通被仰渡候間、急度御仮殿致見賦作調可申渡候条、是又左様ニ可相心得候、以上、

戊七月廿一日

國府賦所 印

斜木

出雲方

亥正月二日

斜木出雲

斜木美濃殿

右斜木美濃殿并所御喫衆御次書有、

写

右之通被仰渡候ニ付、所中ハ御仮殿相調致外迂宮置候事、

口上覚

韓國大明神社頭虫付ニ而御造替之願申上候処、虫付相増候ニ付近々御普請御取付被仰付被下度旨奉願候処、當時御銀御振廻無之ニ付、御神鉢虫付念遣敷候ハ、仮殿所役ニ相調候様ニ与被仰渡趣承知仕、仮殿相調外迂宮相濟申候、然者御祭之節晴天ニ者御庭ニ而相調申候得共、風雨之節者舞神樂相調不申必至与可仕様無御座候、殊ニ長々御仮殿ニ被成御座候段敷々敷奉存候、依之乍恐奉願候者、當時御繁多之砌難申上御座候得共、當春中御普請被仰付被下度奉願候、左様ニ御座候ハ、造立銀之儀者此涯氏子中ハ差出置可申由承申候、左候而御返銀之儀者、當年中御振廻次第被仰付被下度奉願候間、何卒奉願候通被仰付被下候様ニ、被仰上可被下儀奉願候、以上、

其許韓國大明神社頭造替申付筈ニ而、當分仮殿江致迂宮置候得共、風雨之節御神事ニ差支候間、普請取付被仰付度候、左候ハ、入目銀之儀者氏子中ハ可差出候間、御返銀之儀者當年中被仰付度旨申出趣有之候ニ付、申出之通當春中普請取付可申付候、右入用之材木本木之儀者、此

内建置候由候、右材木ちんえ上廻角老本ニ付何程ニ而可相調旨、所中兼而山方等相馴候者召寄致吟味、氏子之内ニ茂右鉢之者も有之筈候間、是又委致吟味可申出候、尤近外城江茂右之段申渡、吟味之上早々可申出候、右候ハ、急度取付可申付候、遲滯有之間敷候、以上、但右之段社司出雲江も可申渡候、

宝曆五年亥正月廿四日

寺社奉行所

國分噺中

右之通被仰渡候間写差越候、以上、

国府賦所 印

亥正月廿八日

斜木出雲方

一右之通被仰渡置候処ニ、亥二月十一日造替方御檢者衆宮之原弥右衛門殿・富田鉄兵衛殿、上井村江石切衆西村六左衛門殿・小原清右衛門殿、木挽衆秋原半十郎殿・平田鉄兵衛殿、繪師衆瀬戸口七兵衛殿、塗師衆鮫嶋善左衛門殿被差越、（本ノママ脱文カ）亥五月

一亥五月十一日御取次衆小田善兵衛殿、御筆者衆吉井源右衛門殿、惣御大工衆肥後周左衛門殿、賦御大工衆瀬戸山庄左衛門殿、御大工衆木佐貫半助殿、御塗師衆図師分右衛門殿、手代衆次助殿、右七人宮内_レ被差越、御檢者衆宮之原弥右衛門殿・富田鉄兵衛殿、御囃衆代野村喜太夫殿 御横目衆山元次右衛門殿・肥後喜右衛門殿、御郡見廻衆代佐土原仙右衛門殿 御主取大工衆新橋甚六殿、御筆者衆三嶋本右衛門殿 御觸衆町田次右衛門殿、右御立合跡御見分首尾能相濟、七ツ時分小

田殿何れも宮内_レ被差越候衆被為立候事、

一亥五月十二日御檢者衆宮之原弥右衛門殿・富田鉄兵衛殿、御普請方諸事御成就ニ而、首尾能被為立候事、

一亥五月十三日之晚、御囃衆代野村喜太夫殿、斜木出雲被召列、小田善兵衛殿宮内御旅宿江為御礼罷出候、御筆者衆白石弥左衛門殿御差越ニ而、早速より韓國宮社山井大平山江立置候本木財木取調被仰付、御普請ニ御取付有之候事、

一右ニ付國分御囃衆代野村喜太夫殿、御郡見廻衆代佐土原仙右衛門殿被相勤候事、

一右ニ付大工切組木屋方所檢者諸具受取人倉野助兵衛殿・松元権兵衛殿、御供所方諸具請取人矢野藤七殿・曾山藤五左衛門殿被相勤候事、

一社方主取壱人、功才壱人ツ、毎日相勤候事、

一右ニ付亥三月十七日、同十九日上井村・下井村・川内村女共為寿進潮汲來、宝殿・拜殿・家地江相掛候事、

一亥三月廿日宝殿柱立棟上ケ有之候ニ付、同四月五日中為御見分寺社方御取次衆小田善兵衛殿、御筆者衆白石

弥左衛門殿・大工衆瀬戸山庄左衛門殿御差越ニ而御見分相濟、同七日御立被成候事、

一同四月十八日拜殿柱立、同廿三日御供所相立候事、

一 右ニ付大工衆深水四郎右衛門殿・中尾仲兵衛殿・山元五右衛門殿・井上作右衛門殿・永井伊右衛門殿・大磯善左衛門殿・山元弥助殿・屋祢大工衆木場傳右衛門殿・吉井源右衛門殿御旅宿江右同断之事、

御迂宮之次第

一 亥五月廿九日依頼本田出羽守殿御名代井之上宮内殿、并社人衆御迂宮ニ付被差越候事、

一 亥六月朔日夜中丑刻、井之上宮内殿并中馬采女殿・西郷大膳殿・有屋田佐平次殿・谷口善平次殿・谷口仲右衛門・國府社人頭取斜木美濃・谷口相模・同清兵衛・同弥市・谷口治部・同早右衛門・同種子右衛門・同太郎左衛門・山元伊豆・斜木出雲・同休兵衛・同作平次・同源八・同源四郎、下井村之喜兵衛、同所之勘右衛門、同所之才右衛門、上井村之源八、同所之岩助、右

社人相揃御迂宮被相勤候事、

一 前日滿かたの祓、當日二日朝十八神道、當日一萬度之祓被相勤候事、

一 御司野村喜太夫殿御勤被成候、御附衆中村喜藤次殿被相勤、御迂宮首尾能相濟候事、

一 亥六月十七日幸社御奉行衆嶋津十太右衛門殿、御取次衆永井勘左衛門殿、御筆者衆宮之原弥右衛門殿・白石弥左衛門殿、御囃衆宮原藤兵衛殿、宮内与頭衆留守市郎右衛門殿宮内より韓國宮江御參詣御見分被成候、其節韓國宮御内殿御修甫御願申上候事、

一 右ニ付御囃衆代野村喜太夫殿、御郡見廻衆代佐土原仙右衛門殿、寺社御奉行衆任御差図ニ御出合被成候事、

一 亥十一月晦日、寺社御奉行衆宮之原甚五兵衛殿、御取次衆中馬休左衛門殿、御筆者衆山口六左衛門殿・愛甲十兵衛殿、御囃衆代野村源五左衛門殿、宮内与頭衆沢五納右衛門殿宮内々韓國宮江御參詣御見分被成候事、

一 亥十二月十三日、韓國宮御内殿御修甫宮内正宮御普請方ニ而御調、今日御取次衆小田善兵衛殿韓國宮へ宮内

より被差越、御迂宮首尾能相濟候事、但野村喜太夫殿江御勤方小田善兵衛殿が被仰渡候得共、御親父御正忌日ニ而候故御遠慮被成候、

写

野村喜太夫

右者噺役之内、韓國大明神社頭造替ニ付、首尾係ニ而候処、幸此節噺寄役ニ而相詰居候処、右勤方断為申出由被申越趣相達候得共、喜太夫事最初の首尾係之事候間、相濟候迄強而相勤候様ニ各々被相達、尤國府噺方江茂右之趣を以首尾有之候様可被相達候、以上、

三月廿二日

寺社奉行所

宮之原弥右衛門殿

富田鉄之丞殿

右之通此節御普請成就仕、御遷宮首尾能相濟申候、以上、

韓國大明神社司

宝曆五年乙亥十二月吉日

斜木出雲

○隅州曾於郡川内村

庄屋役衆中

右川内村古來者下井村之内ニ而候得共、万治二年ニ相分、當分下井村・川内村式ヶ村ニ罷成候段、元禄十一年寅四月七日國府村里改帳ニ相見得候、

一高頭九百拾壹石七斗貳升壹才 諸与御藏入

一百姓惣人数、四百九拾六人 男貳百九拾七人 女百九

拾九人

内名頭三拾七但元禄十一年村里改之節四十二竈

▲御狩倉山有、享保四年亥四月廿日狩倉付御用帳留写、

本戸狩倉山中の國府下井村津畑迄道法四里程、

一栗の木 財部境 御立山

小名

一登屋尾 一津れん野 一弥五殿開キ 皆入野ニ而御

座候、

本戸狩倉山中より國府下井村津畑迄道乘四里程、

一上牟田 財部境 御立山

右鹿倉江櫟・櫛・松・榎其外雜木御座候、時々御用

材木出申候、皆用水頭ニ而御座候得共、所用事ニ相

立不申候、

本戸狩倉山中より下井村津畑迄道乘三里半程

一石坂 財部境 御立山

一小名ハイ 這坂木山ニ而御座候、

右同断

一大楠 福山境 御立山

一小名 坂之川内 木山ニ而御座候、

右同断

一荒平 福山境 御立山

右狩倉江櫟・楠・松・榿其外雜木御座候、時々御用材木出申候、皆用水頭ニ而候得共、所用事ニ相立不

申候、

本戸狩倉山中より右同津畑迄道乘三里程

一山嶽 福山境

一小名 馬飼ヶ野 入野ニ而御座候、

右同断

一椿八重 福山清水國府境

一小名 大畠入野 一眞谷木山ニ而御座候、

右同断

一高牟禮 清水境

一小名 瀬越 木山ニ而御座候、

右狩倉江櫟・楠・松・榿其外雜木御座候、時々御用材木出申候、皆用水頭ニ而御座候得共、所用事ニ相

立不申候、

本戸狩倉山中より國府下井村津畑迄道乘三里半程

一腰折 清水境

一小名 久木平 一平松ヶ野 皆入野ニ而御座候、

右同断

一日當 清水境

一小名 古屋敷 入野ニ而御座候、

右同断

一さきなし 清水境

右狩倉江櫟・楠・松・榿其外雜木御座候、皆用水頭

ニ而御座候得共右同断、

本戸狩倉山中より國府下井村津畑迄道乘四里半程

一弓木 財部境 御立山

一小名 佛坂 入野ニ而御座候、

右同断

一長椎

財部境

御立山

小名

一飯盛 木山ニ御座候、

右狩倉江御用木右同断、其外雜木御座候、用水頭ニ

而御座候得共、所用水ニ相立不申候、

本戸狩倉山中ヨリ國府下井村津畑迄道乘四里程

一白仁田 國府之内

本戸狩倉山中ヨリ右同津畑迄道乘四里程

一芹牟田 清水財部國府境

右狩倉江櫟・榊・松・榎其外雜木御座候、皆用水頭

ニ而御座候得共、所用水ニ椎立不申候、

下井狩倉山中ヨリ右同津畑迄道乘式里

一猿之木場 清水福山國府境

小名 一登屋ヶ尾 一虚ろ松 一たらのえ 一大平み皆入

野ニ而尾座候、

右同断 一犬食ひ 國府の内

右同断 一場貫キ

福山境

御立山

小名 一志らりのみの尾木山 一瓶松入野ニ而尾座候、

右同断 一堀切

國府之内

御立山

右同断 一阿免ヶ平

福山敷根國府境

小名

一片繫り木山 一高田川原 一内野、一深山ヶ迫

一陣之平 一渡瀬

右六ヶ所共ニ入野ニ而御座候、

但渡瀬之内ニ庄内乱之節御陣所之野御座候、于今堀

跡有之、此所を渡瀬陣与申傳候、

下井狩倉山中ヨリ國府下井村津畑迄道乘式里程

一笹目木 清水境

小名ツプロ 一首ヶ野 一地獄川 一白塚 皆入野ニ而御座候、

右六狩倉江櫟・榊・松・榎其外雜木御座候、尤用水頭

ニ而御座候ニ付所用事ニ相達、

右者此節狩倉附御用之由被仰渡候付、如斯御座候、以

上、享保四年亥四月廿日、國府行司岩切治左衛門・秋

山与左衛門、竹木見廻川村八郎左衛門・沢新右衛門、

山方嘸坂本休左衛門、御山奉行所、

○稻富大明神

稻富宮下井村乙宮權兩社詞官

下井村百姓肥前

右御造宮之年間由緒不相知候、御祭米五斗貳升被仰付、噯又者衆中御司相勤候、

▲御神躰御木像

一 宝殿三敷貳間但大板葺上屋茅ふき

一 拜殿四敷三間但かやふき 一 御供所九尺方

一 石萃表 右四行氏子中修甫

一 御祭米五斗貳升餘御藏入被仰付候、

一 御祭之儀年々二月初末、九月十九日、霜月初末、年々

三度御祭神事相勤、御花から御神酒御本丸江差上候、

御司所噯又者衆中相勤候、

一 國府賦所元禄十一年寅十一月廿八日、寺社改帳内写

古來者御祭田二反半為相付由候得共、其後被召上候、

只今者年中三度之御祭米とゞ米五斗貳升三合、二月初

末、九月中之九日、霜月初末ニ國分与御藏被仰付、

御祭相済神酒并時菓一籠御納殿江指上候由、所役所帳

留ニ相見得候、

○今霧嶋

右御造宮之年間由緒不相知候、川内村鎮守尾門稻右衛

門門付之内江御立被成候、九尺双方之岩屋ニ而候、
棟札写

奉再興今霧島御宝殿

聖主天中天迦陵頻伽聲
哀愍衆生者我等今敬礼

右意趣者奉為天長地久御願田滿持者信心大檀那藤原義
久朝臣御息災延命御子孫繁昌恒受快樂皆令満足當村安
全五穀豐饒而已

慶長六年辛丑閏霜月廿七日 大願主松原千介

大工松田肥後守

○高塚山神 稲富宮乙宮兩社祠官下井村百姓 肥前

右御造宮之年間不相知候、龍伯樣濱之市御代、山神

御靈驗餘多為有之由候、

御神躰 一 宝殿大板葺一間方 一 拜殿茅葺三敷貳間

右式行氏子中修甫、

宝殿江御連歌御懷紙与相見得有之候得共、廃壞之節相

損文字見得かね申候、

一 御祭米三斗年々御藏入被仰付、本社末社米三升七合五

勺ツ、配分ニ而御祭有之候、

一 御祭之儀者十一月中ノ申、御祭神事相勤候、

一棟札写

天長地久億々萬歲于時元和二年

謹奉再興山王廿一社之宝殿一字之事此志趣者

国土安泰人々快樂 十月十有二日

千田左吉兵衛 松田弥右工門 久木元山之丞 泊源太

左工門 千助 彦九郎 服部弓兵衛 九郎兵衛 六右

衛門 大炊右衛門 彦三郎 泊小十郎 十郎兵衛尉

源左衛門・彦九郎・貳介・對馬介・助十郎・中嶋弥市

・權右衛門・左左衛門・助兵衛・小篠吉左衛門・市之

助・五藤左衛門・二郎左衛門・児玉七助・六弥太・大

藏丞市吉・山下六左衛門・六郎次郎・大工河俣五次右

衛門、小工清左衛門、各同懷敬白 右御宝殿有之候、

一御由緒書写并子落村勘右衛門來由、

高塚山神

右宮立始者相知不申候、我等先祖以來崇敬仕來申候、

義久様濱之市江 御座被遊候時分、先祖中村丹後嫡大

炊之介被遊御存候而、御狩之時分被遊 御立寄候ニ

付、山御假屋一軒作調毎々被遊 御入候、其 御屋地

只今ハ槐を植立人ニ踏ませ不申候、大炊之介迄ハ子落
村江持留高拾四石餘被下候而、國府衆中并ニ御奉公仕
候得共、漸々衰微仕、拙者迄三代百姓ニ成落申候事、

一前々ハ、御祭米三斗ツ、御藏被仰付候處ニ、坂本但
馬与申人庄屋役承候時分、末社七所ニ同前ニ配分仕候
故、只今ハ米三升七合五勺ツ、ニ而御座候、末社与申
候ハ、木場・平下・深尾迫・渡瀬・野平・口輪野・長
迫右七ヶ所ニ而御座候、吉野元山野神者、前々行司久
木元山之丞与申人 御意ニ而狩集ニ高塚山之神ヲ勸請被
申候事、

一右山之神靈驗餘多御座候、神前ニ鳥居松与申候而長大
之木式本御座候を、濱之市 御代に御用ニ而伐取筈ニ
被仰付候、其夜 義久様御夢現之間、御枕頭ニ山之神
立せたまひ、鳥居御免被成候と有之候故、翌朝早馬
之御使者ニ而被召留候、西之松ハ半分計伐掛申候、東
之松ハ斧立計仕候を、其儘被召立置候、西之松ハ右之
痴故五十年ノ後台風ニ轉申候、東之松ハ只今盛長仕
候、斧立之跡于今御座候事、

一 庄内騒動之時分、福嶋村岡之別府江罷居候池田玄番之

丞与申人、十才計之下人を召列れ、千本松ト申所へ茅

伐ニ參候を、庄内より見取ニ參候武士見逢、右下人を狼

籍ニ奪取引行候得共、玄番不及手、此山之神宮江走込

深ク誓願を懸申候、其日 御狩有之、義久様茂被遊

御立、清水之内薄と申所之住人宮田伊与之介・弟作

右衛門、狩済候而山中を可立出与仕候ニ、山神とおほ

しき御様躰ニ而手招を以山道を御案内候ニ付、兄弟共

兼々信仰之山神之儀ニ而候得者、如何様奇瑞成へしと

存、御告ニ任せ山道を足早く窺行候得者、童子を一人

口をからけ、庄内之武士引つり行候を見付候ニ付、作

右衛門名乗かけ、弓取直し矢ニ筋射付打果し、童子ハ

取返シ則御披露申上、於 御前御褒美被下候、右玄番

之丞靈驗之程を奉感山之神敷地ニ罷移、玄番子孫只今

木場之嘉右衛門与申百姓ニ而御座候事、

一 義久様行司役泊源太左衛門ニ被仰付候時、山ノ神之靈

驗直ニ御對顔之御誓願深ク御座候ニ、御納文有之、童

子之御貌ニ而御立出、義久様ニ御對面為有之由申傳候、

御祭被仰付、御歌御自筆之短冊、泊源太左衛門江被

下候、其 御筆跡源太左衛門子孫有之由候、義久様

御祈禱之御連歌懷紙ハ、于今社壇ニ納候而御座候事、

右先祖來申傳候分候分申上候、此外由緒書物無御座

候、

右書付、

元禄十一年寅十一月廿八日

子落村之

勤右衛門

所悵留相

見得候、

▲義久公御詠歌写

山口 あつき弓春のとなりに咲そめて

山口しるくにほふ梅かえ

義久

中山 しら雪のふりつもりたる中山に

わけつゝゐるや鹿の子いもり猪

奥山 おく山に跡たれてます神かきも

心やなひくやまとことのとは

身にしらぬつみ咎^{とが}の立おほふ

雲吹はらへ八重のしほ風

松に雲立そふひまに顔見へて

いらかも高き神の御やしろ

右御詠歌國府衆中泊源太左衛門頂戴仕、子孫泊源右衛門今ニ格護ニ而罷居候、

一泊源右衛門口上書写

口上覚

私先祖泊源太左衛門与申者、最前伊作江罷居、御奉公相勤罷居候處、鹿兒嶋江被召移、其後 龍伯樣濱之市江被移 御殿候節御供仕、別而難有被召仕御奉公相勤罷居候處、清水・敷根・國府三ヶ所行司役被仰付相勤申候、左候処ニ清水・敷根之儀ハ 漸々御断申上御免許被仰付、國府一所之行司被仰付置候、右之通ニ御座候故、御鹿倉近ク上井村江居屋敷被下置候、其節山神三社被遊御建立、両社者御狩倉内御建立、一社者居屋敷御勧請被遊置候、 御尊筆ニ而山口・中山・奥山之御詠歌拜領仕、于今頂戴仕置申候、其節被遊 御意候者、居屋敷ハ山口、吉之元ハ中山、高塚ハ奥山与被仰下候由傳候、

泊源右衛門

右之趣、泊源右衛門行司役願書之内ニ相見得候、

高塚山神末社下井村木場

稲富宮乙宮岡社祠官下井村

▲山之神

百姓 肥前

一御祭米三升七合五勺 今以御藏入被仰付候、

一御祭十一月初子御祭神事相勤候、

右同下井村平下
▲山之神

同人

一御祭米三升七合五勺 右同断、

一御祭十一月初丑右同断、

右同下井村深尾追
▲山之神

同人

一御祭米三升七合五勺 右同断、

一御祭十一月初寅右同断、

高塚山之神末社川内村渡瀬
▲山之神

下井村百姓社人
勘右衛門

一御祭米三升七合五勺 今以御藏入被仰付候、

一御祭十一月中之末御祭神事相勤候、

右同川内村野平
▲山之神

同人

一御祭米三升七合五勺 右同断、

一御祭十一月初申右同断、

右同川内村口輪野
▲山之神

下井村百姓社人
伊豫

一 御祭米三升七合五勺 右同斷、

一 御祭十一月中午右同斷、

高塚山神末社上井村長迫 韓國神社主取斜木

▲荒峯大明神 源左衛門

一 御祭米三升七合五勺 右同斷、

一 御祭十一月初申右同斷、

渡瀬村之前平下之後

▲渡瀬之陣旧跡有

右庄内乱之節、入來院又六殿大將ニ而たてこもり被

居候由申傳候、

一 右同所遠目火立番所有

野坂瀬戸之上

一 遠目火立番所有

子落

一 觀音堂 一字 勘左衛門カクコ

口輪野

一 地藏堂 一字 仲右衛門カクコ

田吹

一 觀音堂 一字 新五格護

曹洞宗上井村德持庵末寺 孝徳院

右孝徳院者開山盈澤芳充和尚、万治二年御訴申上創立

也、万治二年ノ寛延三年迄九十二年ニ罷成候、

▲本尊虚空藏 一尊

一 開山盈澤芳充和尚禪師

一 客殿茶之間五敷四間茅葺

一 庫裡四敷四間三尺右同

右式行 旦方修甫

一 住持替合入院之節者、御受御礼不及御沙汰候

一 屋敷御免寺地六畦 一旦方四拾人計

一 觀音堂 一字 四敷式間三尺茅葺礎

右當分破壊ニ而、客殿佛旦ニ觀音被成御座候、

湯之權現社

右權現者住吉湯泉有之權現御鎮座之由申傳候、當分

ハ清水計出、湯泉少無之候、

高日山業師堂一字

右豎像御觀音二鉢、一尊者極古佛、一尊者金剛寺眞

應上人之御作替、且御地藏豎像一軀御同厨子ニ御安

置、外ニ一軀極古佛有、古來之棟札一圓さらに書付

有之候得共、年來久敷棟札ニ而文字不相見得候、創

立之年間由緒不相知候、

▲觀音豎像二尊内一尊極古佛

▲地藏豎像一尊

右厨子一ツ御安置

外二

▲古佛一尊

一觀音堂茅葺礎式間四面但前二縁有之候、

一棟札写

上棟奉造建觀音堂 一字 伏願

這南方海岸孤絶補蛇落伽山正觀音薩埵者一切衆生化度

一菩薩也昔盛時所以外隆於堂宇美付於佛像而非後世之

所能及也今也所裏堂司亦貧乏而堂宇(傾カ)傾心(敗カ)賤矣天運循環

無往不復依之上敬於佛神下惠於凡民以修造諸十三所破

堂社は夫一堂也実始民尊信不異農業堯舜之時稻采粲然

復明於田村放国家豊成万民康樂五穀成就殊者願主安寧

武長久子孫繁榮者也

棟札裏ニ

大工江口仁右エ門

施主山元源五左エ門

同

山元六兵衛

山元源蔵

右同

西郷庄兵衛

同

山元用右エ門

同

山元源作

同

鍛冶高城ヨリ下井村エ入作 木引

同

山元右近

同

源口弥三右衛門

山元右近

源口弥三右衛門

同

上野正右エ門

同

其外施主多人数名書有

彦作

南膽部州大日本国西海路大隅州曾於郡国府河内村高日

山 白銀百五匁八分内十八匁三分下井村

川内村庄屋

松原稻右エ門

下井村庄屋

小濱半右エ門

小觸

六右エ門

同

利左エ門

同

久作

同

善右エ門

元禄己卯歲三月十三日造畢

一觀音堂一字高安門用右エ門カクコ

一伊勢宮社柳田門松之丞カクコ

○隅州曾於郡下井村

庄屋役衆中

右下井村往古者下井村川内村一名ニ而、一節敷根江被

召附候得共、又々國府江御返シ被召附、万治二年ニ相

分り、當分ニヶ村ニ罷成候段、元禄十一年亥四月七日

御領國中惣繪圖御調ニ付、村里改帳内ニ相見得候、

▲御藏上納米于七百石餘

國分与諸与

鹿兒嶋士
下代老入

右御藏付下井村・上井村・川内村・敷根・湊村・上

之段村・麓村、但古來々清水川原村も御藏入ニ而候

得共、重富領ニ被召成上納方無之候、

一高頭千八百七拾三石式斗六升四合七勺壹才諸与御藏入

一百姓惣人数八百廿式人 男四百九十八人女三百廿四人

内名頭八十人但元禄十一年村里改之節七十九竈

○乙宮權現

下井村乙宮權現川内村稲富大明神兩社祠堂

肥前

右乙宮權現者、瓊瓊杵尊之御子豐玉姬を奉崇候也、乙姬ニ而被成御座候付、乙宮与奉申之由候、又ハ鷺鷥草葺不合尊之御后龍宮之乙宮、神武天皇之御母与棟札ニ相見得候、考ルニ神武紀^一日本書記云神武天皇者、鷺鷥草葺不合尊第四子也、母ヲ曰ニ玉依姬^{ワタツミノムスメ}一海童之小女也与有之、何れかはならぬ、且ツ御創立之年間不相知候、

▲御神躰御木像 一宝殿小板葺礎九尺方

一拝殿茅葺礎四敷三間 一御供所茅葺三敷二間

一木花表 右四行氏子中修甫

一御祭米三斗五升御藏入^ル毎年被仰付候、

一御祭九月十九日、十一月初五日、年ニ兩度御祭神事相

勤候、御花から御酒御本丸江差上候、御司噺并衆中^ル

相勤候、

写

一瓊瓊杵尊御子豐玉姬奉崇、乙姬ニ而御座候ニ付、乙宮与奉申由申傳候、

右國府賦所元禄十一年寅十一月十八日神社改帳内ニ相見得候、

一棟札写

享保十二次丁未歲

奉再興乙宮大權現棟梁一字

閏二月大祥日

豐葦原水穗国西海道大隅国曾於郡国府庄下井村御位高御鎮座座須由來者鷺鷥草葺不合尊之御妻也龍宮乙宮此御神也 神武天皇之御母也願主邪氣消除五穀豐饒国都長久里民安全故再色志者神人以敬益感人神以助受福云云神道加持三元加持

時享保十三^{戊申}年陽月吉旦日書之願主敬欽言

乙宮主取

權主取

大宮司

社人

関肥前

伊兵衛

堅助

勘右工門

社人

左衛門

内侍

太郎左工門

休左工門

同

惣右工門

彩色師

市成八右工門

右在御宝殿

○鳴子大明神 下井村乙宮大權現川内村稻富大明神兩社
祠官

肥前

右何尊御勸請之訳不相知候、古来よりの御神ニ而、寛

文五年巳八月十八日當分社地江御再興与相見得候、

一御神躰五神御木像内御一躰極古御神躰

右主取関肥前御神躰之趣承候

一宝殿小板葺礎壹間ニ壹間餘三方ニ飛縁有但茅袋葺有、

一拝殿茅葺礎四敷三間

一木花表

右三行氏子中修甫、

一御祭

一棟札写

小川大工
岩下對馬
大工

寛文五己巳年

奉建立大隅曾於郡鳴子大明神

講大工
窪山次郎左工門

八月十八日 庄屋 小濱安右工門 同 前田鬼五郎

写

奉建立鳴子大明神 右意趣者息災延命子孫繁栄富貴満足
家内安穩長久円満祈所也

大工

脇田形部左工門 瀨戸口甚左工門

庄屋

小濱次郎左工門 前田慶次郎

同

窪山正左工門

于時貞享五年辰十月吉日

写

奉再建立鳴子大明神拝殿 一字

隅州国府下井村鳴子宮者古来村中擁護之神而水旱疾病
祈而所以除焉宮地本雖廣大大波洗岸根風傾樹木社檀已
近危矣於是旧地之東南一町許卜地而以村民衆力奉移宮
殿造立成矣座祝奏樂奉清神前也願郷里安全稼穡豐饒千
秋萬歲万々歳

筆作矢野氏安分 九拝

賛曰

社壇臨渚洲 祭祀遍春秋

音楽和松響 神慈比水流

時宝永三歲次丙戌純陽月吉日 欽誌焉

庄屋

服部茂左工門 大工 向井勘右工門

主取社人 神左工門 權主取 加賀

社人 惣右工門 社人 太郎左工門

講代官司 慶次郎 講代官司 安兵衛

右棟札三ツ宝殿在リ

○無量山 曹洞宗國府上井村德持庵末寺 西福庵

右開甚之年間不相知候、開山德持庵三世笑巖勸請也、

▲本尊 一開山 一客殿茅葺五敷五間 一庫裡茅葺四敷

四間 一門茅葺

右三行旦方修甫

一内阿弥陀堂茅葺礎二間四面

一米三升三合右阿弥陀仏江為御仏餉從 於上様被遊御寄

附候由申伝、于今御藏入と毎年被仰付候、

一外阿弥陀堂茅葺礎二間四面

右式行旦方修甫

一寺地 一旦方

一住持替合入院之節、御受御礼之沙汰ニ不及候、

松山 一毘沙門堂 一字 權兵衛格護

一覚書写 覚

國分之内下井・河内兩村、敷根江雖被召附候、最前之通國分江可被召付候、敷根之儀小所ニ而名無之手つかへ之由候間、人夫可入時分ハ右兩村と敷根江致加勢候様ニ可被申付候、以上、

寅十二月九日 御物座 印

國分 比志嶋主膳

暖中

右御書付國府士家村源四郎所持写之、

○隅州桑原郡小村浦町在郷 庄屋衆中

▲御高札御立被召置候、 年行司浦人書下名字

▲光久公御代御飯屋有、

▲御藏 ▲同

高頭六百九拾七石八斗式升九勺八才之内

一高四百八拾三石八斗八升九合七勺九才 浦浮免

右浦人以勲功相開キ、浦人作職地ニ被仰付、諸殿役百姓并ニ相勤候得共、享保年間ニ依願高掛リ夫役式

升米百姓方江相渡、御免之上諸殿役不相勤候、

一浦町人数九百壹人 男五百廿六人 女三百六拾五人

内名頭百三拾六人但元禄十一年村里改之節百十八竈

高頭右同断之内

一高式百十三石九斗三升壹合壹勺九才 在郷

一百姓人数貳拾九人 男十六人 女十三人

内名頭四人但元禄十一年村里改之節六竈

○光久公御飯屋地三反八畦十五步三十三間
三十五間

元禄八年亥十一月十日大ツ三表壹斗五合

御飯屋守 堀切安左衛門

國府小村御飯屋定有物帳

普請見廻

加治木善助

右同

市來惣右エ門

右同

服部孝左衛門

是々普請見廻格護

表御座間

一四敷四間家壹ツ但茅葺板天井板敷壹間ニ式間ノかき有

一九尺之御床有

一半障子四間、内三間ハ表張付金すミ繪、壹間白木

一明障子壹枚 一切戸壹間但掛かね有

一襖壹間但引手掛かね有

一窓戸壹間但掛戸有棒壹ツ

一かけ戸壹枚

一西ニ壹間ニ四間板庇但のくひ板敷上ニ板れんし有

一雨戸七枚但戸袋有 一切戸式間但掛かね有

一表御座ノ間ハ奥御座ノ間通廊下

一壹間ニ四間但板葺内壹間ハのくひ板敷三ツ竹縁

一切戸三枚但掛かね有

一御涼所取付廊下 一三尺ニ三間但板葺竹縁

一御涼所四帖半敷但茅葺板敷

一琉備後畳壹帖半 一掛戸八枚但繪掛かね有
長九尺廣三尺

一軒合へ々但四方 一四方三尺板庇有但うら屋ね
よし竹縁

一奥御座間五敷七間

但茅葺なつし天井板敷

内御本間七間ニ九尺

御縁壹間ニ六間色付のくひ板敷、壹間ハ土間

一九尺ノ御床有 一違御棚有

一御棚小ふすま四枚但引手有 一腰障子六間

- 一 襖_ト間_ヲ但引手掛かね有表金たミ繪、裏墨繪
- 一 御腰物掛_ト 一 御手拭掛_ト
- 一 御衣掛_ト 一 琉備後疊三帖_{但切合}
- 一 一兩戸拾枚_{但戸袋有} 一 一切戸_ト_{但鉄しやうかき有}
- 一 御寢所四敷_{式間}但茅葺板天井板敷
- 一 琉備後疊六帖 一 御寢所疊四帖_{但琉備後絹縁箱有}
- 一 一ふすま_ト間_{但引手掛かね有、表金たミ繪裏墨繪}
- 一 一切戸_ト間_{但掛かね有、一窓障子式枚}_{但掛かね棒_トツ}
- 一 一西三三_尺式間_{板底有、但御雪隠御通うら板有竹縁、}
- 一 一切戸_ト枚_{但掛かね有、一窓戸式枚}
- 一 一窓障子_ト枚_{但掛戸有棒一ツ} 一 掛戸_ト枚_枚
- 一 御雪隠_ト_{但うら板板葺板敷}
- 一 鎖輪_ト通 一 琉備後疊_{式帖}_{但切合}
- 一 一窓戸_{式枚} 一 一窓障子_ト枚_{但掛戸有棒一ツ}
- 一 一掛戸_ト枚_枚 一 一切戸_ト枚_{但掛かね有}
- 一 一次間三敷五間_{但茅葺なつし天井竹床}
- 一 琉備後疊_{式帖}_{但切合} 一 一切戸三間半_{但掛かね有}
- 一 鎖輪_ト通 一 一窓戸_{式枚}
- 一 一奥御座ノ間次ノ間_ヲ取付廊下三敷_ト間_{但板葺竹床}
- 一 一切戸_ト間_{但懸かね有} 一 一窓戸_{式枚}
- 一 御寢所_ヲ次間_{御通廊下三三_尺七間}_{但板葺竹縁}
- 一 一切戸_ト枚_枚
- 一 一西二次茶之間九尺_ニ間_{但なつし天井}
- 一 内_ト帖_{敷ハ竹縁}
- 一 琉備後疊_{式帖}_{但切合} 一 いろいろ_ト枚_ツ
- 一 一半障子_{式枚}_{但掛戸有棒一ツ} 一 一掛戸_ト枚_枚
- 一 一北_ニ間_{ニ三間三尺}_{但局通なつし天井のくひ板敷}
- 一 内_ト間_{ニ三尺ハ板葺}
- 一 一切戸五枚_{但掛かね有} 一 一窓戸六枚
- 一 御風呂屋御通廊下_ト間_{九尺}_{但板葺竹縁}
- 一 一切戸三枚_{但掛かね有}
- 一 御風呂屋四敷三間_{但かやふき}
- 一 内八帖_{ハ板天井掛板敷}
- 一 御湯板_{式ツ} 一 御小ふろ_ト枚_ツ 一 御湯船一ツ
- 一 一妻_{式間}のし立 一 一_ト間_{ニ棚一重}
- 一 一切戸四枚_{内式枚ハ掛かね有} 一 一掛樋臺_ト枚_ツ

一 窓戸式枚 一 御上段沓帖敷有

一 琉尺疊沓帖

一 東ニ三尺ニ式間ノ板庇有但土ノ間

一 御料理所六敷七間但茅葺なつし天井竹床

内式間ニ三間ノ掛板敷 一 八帖敷ハ御酒郡屋^(部カ)

一 式間ニ二重ノ樋棚有 一 八帖敷ハ納戸^{但板葺廊下廻り}

一 切戸九間内四間ハ掛かね有 一 窓戸式間

一 三間ニ三重戸棚有但新戸六枚 一 御膳立三ツ

一 置いろり沓ツ 一 走沓ツ 御板ノ間沓ツ

一 沓間ニ三尺ノ取置竹縁有 一 式帖敷廊下^{但板葺}

一 琉尺疊六帖但切合

一 西ニ沓間四間板庇有竹縁

一 御料理風呂間四敷三間但茅葺拭板敷

一 御風呂ノ上三尺ニ式間板天井有

一 切戸四間^{但掛かね有}

一 北東ニ沓間ニ四間板庇有但竹縁

一 御取次ノ間四敷四間但茅葺なつし天井竹床

一 三尺ニ三間ノ上段有 一半障子三間

一 一ふすま式間^{但曳手有} 一 御道具掛沓ツ

一 南ニ沓間ニ三間縁かわ但なつし天井竹床

一 切戸式間^{但掛かね有} 一 窓戸四枚

一 窓障子式枚^{但掛戸式枚棒式ツ}

一 掛戸式枚 一 三尺ニ三間竹縁有

一 御番所六敷三間但茅葺なつし天井竹床

一 三尺ニ三間竹縁 一 切戸五間^{但掛かね有}

一 御玄喚沓間ニ五尺^{但板葺ふみたん有}

一 御番所^{御料所}通廊下一間ニ式間^{但板葺竹床}

一 茅筵四枚

一 御番所次間四敷式間^{但茅葺竹床}

一 切戸五間内式間掛かね有

一 窓戸式枚

一 大釜屋四敷三間^{但茅葺土之間}

一 大戸沓枚 一 窓竹れんし

一 西ニ沓間ニ六間板庇有内四間ハ竹縁式間ハ土ノ間

一局三敷六間^{但茅葺竹床} 一 切戸五間半

一 窓戸式枚 一 置いろり式ツ

一南ニ三尺六間ノ庇有但なつし天井竹縁

一局ノ次茶間江取付底下三尺式間三尺但板葺竹縁

一腰かへ双方有

一三尺ニ式間三尺竹縁有屋根なし、御風呂屋ノ局通、

一東ニ湯殿雪隠有但板葺 一切戸式枚

一御旅蔵六敷五間但茅筵竹床 一大戸老枚

一鎖輪老通 一茅筵三拾枚

一御旅蔵番所四敷式間但かや葺竹床

一切戸四枚 内老間掛かね有
老間黒ろ掛かね 一疏尺疊三帖

一茅筵五枚

一御馬屋四敷五間但かや葺内式間竹床

一茅筵八枚 一楠すそ船式ツ 廣老尺九寸五歩
長式尺六寸
高老尺六寸

一切戸式枚

一松飼船六ツ 廣老尺老寸
長式尺老寸
高サ九寸

一御馬三足立但くわん折釘有

一供屋老間ニ六間但板葺 一腰掛有

一裏御門老ツ但引戸有 一鎖輪老通

一鎖前大坪式ツ

一御いろり縁式ツ

一奥通内外屏中門式ツ 一鎖輪式通

一戸式枚但くゝり戸

一石井戸五ツ但ふた有内老ツ上屋有

一局雪隠三ツ但板葺

一次雪隠三ツ但板葺

一御馬すそ所但石たん有

一柱式本但くわん折釘有

一御飯や守居所五敷五間但かや葺竹床

一前三尺ニ五間板庇有

一後四敷三間板家有但竹床

一妻老間ニ式間三尺茅庇有

一半障子三枚 一切戸四間 一老間ノ床有

一古疏尺疊拾帖

一御飯屋守釜屋四敷三間三尺但茅葺

一平妻ニ三尺之差下シ有

一釜屋ノ居所取付廊下老間ニ式間但板葺

一御門老ツ但屏中門板葺鎖輪老通

一戸窓枚 一下門窓ツ但茅葺

一扉有

一御馬や四敷十間但茅葺

一貳間ノ腰掛貳ツ 一北ニ三尺ニ十間差下有

一御中間番所四敷四間三尺但茅葺

一西ニ三尺ニ四間三尺差下有敷物無

一三尺炬窓ツ

一ハミ屋三敷貳間但かやふき

一東ニ三尺ニ貳間差下有

一垂城戸窓ツ但かうし有

一木屋四敷五間三尺但かやふき

一北ニ五間三尺差下有

一東ニ妻ニ三尺ニ貳間差下有

一木屋四敷四間三尺但諸雜物入用

一東平ニ四間三尺ニ三尺指下シ有

一疏尺押卷五拾五枚

一疏備後疊貳拾七帖

一疏尺疊貳拾五枚

一疏備後長御座窓枚

一疏尺長御座拾枚

一行灯拾ヲ 一炭取三ツ

一御あんだ窓ツ但敷物有

一切はん三ツ 一きやたつ三ツ

一登はし六桁但竹

一からはり三拾貳本

一鉄しやうかき窓通

是ハ御飯屋守格護

一朱椀三拾人前但折敷揃有之

内平皿三拾 坪皿三拾 盃三拾

湯次三ツ めし次三ツ但かい三ツ

一朱二ノ椀三拾

一朱二ノ丸盆三拾枚

一朱三ノ椀三拾

一朱三ノ丸盆三拾枚

一鑊子三ツ 一水さし六ツ

一手水鉢五ツ 一丹荷十四荷

一大鍋三ツ 一釣なへ五ツ

一かな輪三ツ 一すり鉢式ツ

一押鉢三ツ 一皿九束式ツ

一茶わん八束三ツ 一水桶五ツ

一半切桶式ツ 一口切桶三ツ

一折湯桶壺ツ 一茶々碗式ツ

一御掛樋桶壺ツ 一御湯桶式ツ

一鉄灯台三ツ 一茶盆五ツ

一火箸七膳 一湯桶三ツ

御風呂や

一掛樋桶式ツ 一湯桶四ツ

一手桶九ツ 一かいき十ヲ

一柄勺大小三ツ 一大桶壺ツ

一湯柄杓壺ツ 一掛樋桶式ツ内一ツ御湯殿

一筈桶三ツふた有 一三尺あしろ戸九枚

一しやうかき十ヲ 一畳台三ツ

一垂城戸三ツ但かうしあり

一大鍋壺ツ差渡式尺

右者子二月十九日之御證文ニ而書載也、子五月廿四日、

右者、國文小村御飯屋家数并定有物如此候条、不損捨候様ニ被致格護、後年替合之刻、此帳面を以可被續渡候、若後日被請取候諸道具於有之ハ、時々此方江被申出可被書載候、勿論損廢拂物ニ者、慥ニ證文取置被差出候ハ、可相除候、此帳面者前々々相渡有之候処ニ、出入物且又古役之面々役替ニ付、當役之名付ニ御改被下候様ニ与申出候故、相改者也、

御勘定所 印

元禄八年亥十一月十日

中村甚介 印

村田喜右衛門

中江九右衛門 印

後醍院奎右衛門

家村平八

黒葛原主左衛門

右本書國府士堀切彦兵衛子堀切治部左衛門子堀切大

炊左衛門子堀切安左衛門子堀切彦左衛門所持写之、

一 小村御飯屋御普請為見廻、親曾山後藤右衛門并曾山甚

兵衛、服部孝左衛門、万治三年小村江被召移候、

一 小村御飯屋御引取ニ而、享保二年麓江移戻候、

卯八月廿五日

曾山千右衛門

國府士堀切大炊左衛門元禄十丁丑年覺書写

一 寛永十一年甲戌十一月大鳥七ツ、小村洲崎松原下ニ參

候、就夫 御認としテ中納言様加治木々兩日親治部左

衛門所ニ被遊 御光儀、御機嫌能御座候而、青銅千足

治部左衛門ニ拝領仕候、其時地頭喜入休右衛門殿ニ而

御座候、

一 寛永十五年戊寅二月、中將様被遊 御下向、其冬々

親治部左衛門所ニ被遊 御光儀候、御在國之砌者節々

被遊御着候、

一 寛永廿年癸未、國分ニ上使飯屋有之候、其家最寄四敷

三間三尺ニ御家出來申候、治部左衛門居所御末ニ罷成

候、左候処ニ、御子様御奥方御同心被遊候ニ付、御

家大キニ罷成候、其時之普請見舞衆鎌田新左衛門・存

堯坊ニ而御座候、有物日記別紙ニ有之候、

一 慶安二年戊子江豚沓ツ進上申候処ニ、青銅百足新納大

藏殿御取次ニ而拝領仕候、

一 慶安四年庚寅

(三九) 向之嶋江被遊 御光儀候而、上原惣右

衛門・林伊左衛門・某召寄被置候、其時喜入休右衛門

殿・黒葛原勝右衛門殿々 御前之御出会口外仕間敷通

之起請文可仕通承り候間、任 御意相調進上申候、

一 承応二年癸巳二月、中將様小村江被遊 御光儀、川

上九郎左衛門殿・上原惣右衛門・高野孝右衛門・林伊

左衛門・某被召寄、青銅百足ツ、喜入休右衛門殿御取

次ニ而拝領仕候、

一 同年十一月、中將様向之嶋江被遊 御光儀候、川上

九郎左衛門殿・上原惣右衛門・某三人參上仕、達 上

間被 仰出候者、三日中ニ御狩被遊候間、見物可仕通

被 仰出候、追付御狩御座候、三人共ニ鹿一ツツ、打

申候、兩人者鹿枝四ツツ、拝領仕候、拙者ハ追突之

故、鹿沓丸拝領仕、向之嶋ニ而作良、善助殿頼存矢開

キ仕候、右候而御暇申上候処ニ、又々御狩被遊候間、逗留可仕通被仰付候而、拾八日逗留仕候而罷帰申候、

一同年木綿羽織袴ツ、木綿衣装袴ツ、有村市兵衛殿御取次ニ而拜領仕候、

一同年江豚袴ツ進上仕候処、青銅百足新納大藏殿御取次ニ而拜領仕候、

一同三年甲午江豚袴ツ取候而持參申候処ニ、向之嶋横山江被遊 御光儀候ニ付進上仕候、其時 上意候ハ、近日鹿兒嶋江御振舞被下候、今袴ツ情入取調可差上通被仰付候、罷帰其晚取ニ出申候処ニ、大キ成江豚取申、翌朝持參申進上仕候、其節上意候ハ、被思召上候儘ニ進上仕候儀ニ御機嫌好被 思召、永山辰左衛門殿御取次ニ而青銅三百足拜領仕候、

一明曆三年丁酉東目御通道之節小村江被遊 御着候、拙者事茂都之城迄御供可仕通被 仰付候、其前かと拾六端帆袴艘作調仕上せ候処、於中途破損仕、必至与行廻り罷在候処ニ、地頭喜入休右衛門殿被為申上候ハ、不意之損亡過分ニ仕候而行廻申候間、少シ御心付被遊

可被下通被為申上候、其御御心付被遊間敷旨被 仰出候、然者於都之城御銀貳貫百三匁大山伊与殿・川上五兵衛殿御使ニ而借被下候、其節兩入被仰聞候者、休右衛門被於小村御心付之段被申上候得共、御心付被遊間敷旨被 仰出候得共、前々入念奉公仕旨、御存知被遊候間、依之右之員數借被下候間、口外仕間敷通被仰付候、

但江戸大火事ニ付從江戸御飛脚御座候付、當秋御上洛之筈ニ而都之城被御帰城被遊候、

一明曆三年丁酉二月七日、高野孝右衛門・林伊左衛門・某小村江被召寄、青銅百足ツ、喜入休右衛門殿御取次ニ而拜領候、

一同年江豚袴ツ進上申候処、青銅百足新納大藏殿御取次ニ而拜領被仰付候、其節、大藏殿江申候者、此中ハ拜領被 仰付候、先比御銀過分ニ借被下候間、此節拜領仕候儀曾而罷成間敷通申候、大藏殿拙者申分尤ニ候間、御序之時分可申上通承候、左茂御座候哉、其後江豚度々進上仕候得共拜領不被仰付候、間々ニ參上仕候

得者度々拜領仕候、

一 同年酉三月、小村江被遊 御着候、林伊左衛門・某江銀十四匁五分宛大山六右衛門殿御取次ニ而拜領仕候、

一 寛文二年壬寅十月廿八日、中將様小村江被遊 御着

候、鶴參候を 御認ニ而御打被遊候、殊之外 御機嫌

好御座候、翌日御祝とシテ國分噺四人上原惣右衛門・

林伊左衛門・某迄ニ壹歩金一切ツ、拜領仕候、

一 寛文五年乙巳十一月、江豚壹本取候而持參申候処ニ、

網久様向之嶋江被遊 御光儀候ニ付、彼方江持參申候

而黒葛原勝右衛門殿江申入候処ニ、御狩ニ御登せ被

遊候、於 御狩場ニ 御目見仕候、罷帰リ候跡が青銅

百足西次郎兵衛殿御使ニ而拜領仕候、

一 寛文十三癸丑年、東目 御通道之節、口上書を以御地

頭縫殿殿御訴詔申上候処、大山主馬殿御取次ニ而於高

岡達 上聞、御銀貳貫七百六拾目拜領被仰付候、質物

とシテ持高九石七斗餘有之候を差上置候、毎年所務代

銀を以差引目成候節高返シ被下筋ニ被 仰付、借状相

調御物座ニ差上置申候処、元禄四年未秋迄二十九年ニ

目成候而、高并借状御物座が返シ被下候、借状別紙ニ

有之候、右御上洛ニ高岡迄御供可仕通 御意候、於彼

地首尾能御座候故、山下喜右衛門殿御取次ニて銀子拾

式匁五分拜領仕候、

一 延宝六年戊午十月、中將様平松江被遊 御光儀、御

機嫌窺として參上仕候處、野元源右衛門殿御取次ニ

而、青銅百足拜領仕候、

一同八年庚申十二月、歳暮之御礼とシテ御台所迄參上仕

候処、青銅百足伊地知権左衛門殿御取次ニ而拜領仕

候、

一 翌年正月、年頭為御慶御台所迄參上仕候処、青銅百足

権左衛門殿御取次ニ而拜領仕候、

一天和二年、中將様小村江被遊 御着候、御帰城之刻

加治木江被遊 御光儀、其節上方が踊能仕候女召下シ

候、兵庫様御廣間ニ而踊被 仰付候、野村内藏之助・

上原惣右衛門・高野孝右衛門・林伊左衛門・某五人見

物ニ參上可申通、任 御意參上仕見物申候、難有仕

合ニ存候、

一貞享四年丁卯十二月十九日、中將様御下向之御祝儀

とシテ、高野孝右衛門・林伊左衛門・其三人御番所迄

参上仕御祝儀申上候、青銅百足ツ、拜領仕候、

一元禄二年戊巳十二月廿日、歳暮之為御祝儀御台所迄参

上仕候処、青銅百足間世田七兵衛殿御取次ニ而拜領仕

候、

一同四年十二月廿一日、歳暮之為祝儀御台所まで参上仕

候處、青銅百足間世田七兵衛殿御取次ニ而拜領仕候、

一同六年十二月、歳暮為御祝儀御台所迄参上仕候処、銀

拾式匁間世田七兵衛殿御取次ニ而拜領仕候、

一元禄七年甲戌五月十八日、御台所迄御機嫌窺とシテ

参上仕候処ニ、芭蕉式端間世田七兵衛殿御取次ニ而拜

領仕候、

右條々拜領仕候段々、子孫之家誨ニ茂可罷成哉与書

記置者也、

于時

堀切大炊左衛門

元禄十年丁丑三月吉祥日

右本書國府士堀切大炊左衛門子堀切安左衛門嫡子堀

切彦左衛門所持写之、

一堀切大炊左衛門借状写

借状

銀子貳貫百三匁者

右者身代行迫迷惑至極御座候処、久右衛門御銀

申請無利借被下候、誠に冥加恐奉存候、返上之儀

者漸々上納可申候、勿論上納不相濟内者御錢入同

前ニ奉存、御奉公可申上候、少茂別儀御座有間敷

候、為後證如此御座候、以上、

明曆三年酉二月十日

堀切大炊左衛門

印形
書判

小嶋甚兵衛殿

黒葛原治部左衛門殿

此表銀百貳拾目返上被仕候処ニ、納不足銀之儀者、御

仮屋守数年首尾能被相勤候ニ付、被下之旨被仰出候

ニ付書物相返之、

西十二月廿三日

伊東傳左衛門

書物

一真米六百石者

右者、大坂仕上米として仕繰ニ申請候、代銀者大坂立直成ニシテ、真米壹石ニ付四拾七匁之直成、來年三月限ニ大坂御藏江代銀堅固ニ上納可申候、若後日如何様成出合御座候共、口入前々無^マ儀首尾可仕候、少も別儀御座有間敷候、為後日書物如此候、以上、

萬治二年亥十二月十五日

口入

堀切大炊左衛門 判

高所

此表首尾能相濟申候、以上、

喜入久右衛門与力

上^{ママ}月九日

伊十院安右衛門 印

堀切大炊左衛門殿

義久公々堀切彦兵衛江被 仰付、琉球江罷下候御判物

左ニ記之、

大隅國富隈之湊住吉丸

船頭彦兵衛尉

琉 球

慶長七年壬寅季秋七日

義久

下



右本所國府士堀切彦兵衛子孫堀切彦左衛門所持写之、

○大穴持大明神

大穴持社司谷口

相模

右大穴持大明神者、大己貴命昔奥州津輕山御安鎮被遊候処、為西國守護神御下向可有御座旨、勅命を以常州込江庄主橘氏宮永家上下式十五人ニ而、神輿を守護仕罷下候処ニ、日州串嶋之沖ニ而波風荒ク候得共、神力寄特共御座候而串嶋江御着船、其比串嶋之守護野邊氏人を頼一七日御滞留、夫より福山江御着候処ニ、福山ニ者はかはかしき御船無之より、陸地岡山を人数催し道作らせ、敷根之様ニ御通り被成候、夫より此道を神割坂と申候、俗ニかめわり坂与申候ハあやまりニ而候、坂之上ニ而御神供を奉候付、かめわり坂与あやまり候由、其上叡山と于今申候、敷根々御船ニ而隅州福瀬之渡ニ御着船、于時越保元年^{ママ}辛丑三月五日、福嶋村

江御飯屋出來、其後小村江本宮作為有之由候、當分者
 檢者付御修甫所ニ而御座候、

▲御神跡御石鉢

一宝殿小板葺礎 桁行壹丈三尺四寸梁行八尺四寸外三方
 縁有

宝殿拝殿取合

一廊下小板葺壹間方

一拝殿小板葺礎四敷三間三尺

石三行檢者附御修甫

一御祭米三斗三升三合、御藏入を被仰付候、

一御祭九月廿九日、十一月初丑ノ日、年中ニ兩度御祭神

事相勤候、御司噯を相勤候、御祭御花から御神酒御本

丸江差上申候、

大穴持末社

同

一日之神社

同

一月之神社

同

一稻荷大明神社

同 一大田神社

同

一大王神社

右五行氏子中を修甫、

殿様江戸御參勤東目筋御通路之砌ハ、古例ニ而社司神

前鳥居之元江罷出來候由、國府賦所寛保壬戌六月神社

改帳ニ相見得候、

小村下、屋敷^{十式間}六畦 大ツ式斗壹升六合

一下、屋敷五畦

谷口

和泉

一下、屋敷^{十三間}六畦廿八步大ツ式斗斗升式合 喜三郎

下屋敷^{十七間}壹反三廿壹步 大ツ壹表壹斗六合

谷口

一下屋敷五畦 大ツ壹斗七升五合

谷口

藤兵衛

蘭山^{三間}式畦

右社家屋しき御帳ニ相見得候、

写

一大穴持大明神

右大明神者、昔奥州津輕山江御安鎮被遊候處、為西國

守護神下向可有御座旨、勅命を以常州込江庄主橘氏

宮永家上下二十五人ニ而神輿を守護仕罷下候ニ、日州

串嶋ノ沖ニ而波風荒ク候得者、神力奇特共御座候而串嶋

江御着船、其比串嶋之守護野邊氏人ヲ頼一七日御滯

留、夫ヨリ福山江御着候処、福山ニハハカシキ御

船無之ニヨリ、陸地岡山を人数ヲ催し道作らせ敷根之

様御通被成候、夫より此道を神割坂と申候、俗ニカメ

ワリ坂と申候ハアヤマリニテ候、坂ノ上ニテ神供ヲ奉候、其上叡山ト于今申候、敷根^マ御舟ニテ隅州福瀬ノ渡ニ御着船、于時越保元年^マ辛丑三月五日ニ而候、福嶋村江御仮殿出来、其後小村江本宮作有之、御祭田過分ニ相付、大宮司江ハ大屋敷為被下由申傳候、

但御祭田之古目録ハ切レ^レニ成候而文字見得不申候、其写有之候得共年号無之候、為御見合写候而差上申候、大宮司屋敷目録ハ、慶長十九年御支配所^マ之御書付于今御座候、写ニ而差上申候、奥州津輕山^マノ御下向之儀も古キ書物有之候得共、只今切レ^レ少々相殘文字も見得不申候、越保元年^マ辛丑三月五日宮永家兄弟四人、野邊殿同意なと云文字少計御座候、其写トテ我等先祖以來傳受之、神前御祈禱儀式書付之奥ニ右段々書記御座候ニ付此節書出申候、

御祭田者京竿之時分惣様被召上、其後持留村ニ畠高五石五石^マ被仰付、十三年程格護申候、其後差上、宮内内山田村江田高五石被仰付候得共其後被召上、當分ハ霜月初丑御祭米三斗三升三合御藏^マ被仰付候、依之御花から并銀貳双御納殿江差上申候、此外由緒書等退轉仕

為申由ニ而、于今無御座候、

右書付元禄十一年^マ寅十一月國府賦所帳留ニ相見得候、
写

大隅州大穴持之祭田

一町二反、右之内二反ハ正月七日ノ祭田一反 二月初辰日祭田之一反三月三日祭田之二反五月五日祭田之一反七月七日祭田之二反九月九日祭田之二反同月中九日祭田之二反同月乙九日祭田之一反十月亥日ノ祭田之二反霜月初丑日祭田之四反之内姫妓二度彼岸ノ祭田之一反十二月廿日煤掃祭田之四反ノ内ヨコマクラ一反ホサキ田山ノカクコ

此分大宮司之所領

一反宮内シユシヤウ田 三反ナコシ田 二反高瀬是ハ屋敷付 五反シユシヤウ田 是ツカサ^マイ

右之内知行有所之事

一八反舟そ有下 一三反上小川内竹本 一三反向花村之内三角田

一壱町三反内村内あせび 一三反福嶋モフタリ 一三反

同村外モフタリ

一三反同村同小ムカへ 一壱町三反同村名越田 一三反

清水ウチ水

一三反宮内へタノ前 一三反内姫枝 一三丹野久美田村

はるけ

一四反持留村之内横まくら 一壱町右同ブシヤテン

午正月十六日

右書付永禄十一年^元寅十一月國府賦所帳留ニ相見得

候、

寛写

小村大穴池大宮司居屋敷福嶋村江御座候、定其許御支^(持)

配ニ被成門割付候らん、彼屋敷之儀者大宮司ニ可被下

之由候、以上、

慶長十九年八月廿日

御支配所 印

喜入大炊入道殿

右書付元禄十一年^寅十一月國府賦所帳留ニ相見得候、

一棟札写

奉修治大隅国五社随一

大己貴神社宝殿小板葺並拝殿小板葺金輪聖王天長地久

宝祚長遠御願円満殊粍 三州刺史綱貴嚴君四位侍從吉

貴尊公御息^災延命 御武運永保御子孫繁榮年厄月災應

時消除天禍地蠶永殊不起且又德日麗天神風滿地百穀畦

康哉唱巷領内山河江海永鎮安寧所有萬民安隱快樂加之

神明威光輝六合武門芳譽飛八挺懸宝殿嚴麗於日月不枋

固拝殿柱礎於雨露難侵千秋萬歲萬々歲

大檀主薩隅日三州太守從四位上行

左近衛中將源朝臣綱貴公 祠官谷口右京進

當地頭崑津勘解由久當

寺社奉行崑津織部久達

鹿兒島檢使 酒匂幸左工門忠榮

國府掾 宮原藤兵衛種昭

右同 久木田七郎右工門重賢

右同 野村外記安綱

右同 坂本休左工門清榮

彩色師 野村福泉坊公綱

右棟札御宝殿ニ有リ

○日輪山

臨濟宗京五山派國分宮内正興寺末寺

東光院

右東光院者、開山國分宮内正興寺十四世梅岩和尚之

開基也、國府土堀切彦兵衛事、義久公蒙尊命、琉

球御退治前御船頭被仰付候ニ付、海上御安全首尾能

御手ニ入候誓願立置、慶長十四年之春、家久公山

川湊迄御出張被遊、人数琉球ニ被差渡早速御退治、

中山王尚寧降參、已後願成就ニ付再興与相見得候、

▲本尊

一 開山

一 客殿茅葺礎五敷四間三尺

一 茶堂茅葺礎五敷五間三尺

一 庫裡茅葺五敷三間三尺

一 門茅葺

一 毘沙門堂茅葺礎式間四面

右五行旦方修甫、

中將光久公

▲寬陽院殿恭雲慈溫大居士 御掛物御位牌 一幅

右國府土堀切大炊左衛門事、國府小村御飯屋守被仰

付、其上御側近ク被召仕、中將様御逝去之砌御供

仕、於福昌寺剃髮願申上、御位牌奉拜受候、右御

位牌居宅江勤請仕候得共、大炊左衛門嫡孫堀切彦左衛

門代ニ東光院江奉 御安置候由、東光院住持被申出

候段、寛保二壬戌六月國府寺院改帳ニ有之候、

一 東光院再興月浦宗潭居士俗名堀切彦兵衛事、義久公

蒙 貴命、琉球御退治之節御船頭被 仰付、海上御安

全御武運長久首尾能御帰陣之祈り為 御願成就東光院

再興仕候、本尊安置仕候由申傳候段、東光院住持被

申出、寛保二壬戌六月國府寺院改帳ニ右同斷

東光院末寺

東隣軒

右寺致廢壞、當分寺号迄ニ而寺地茂無之由右同斷、

一 寺地

一 旦方

一 住持替合入院之節、御受御礼之沙汰不及候、

一 藥師堂茅葺礎式間四面三方縁

東光院
コクカ

右堂地東光院隱居屋敷之由申傳候、

右堂地

一 怨慶玄忠和尚禪師 石塔 一基

右小村玄忠焼酎之元祖

原書以國分士族野村源右衛本写之

明治廿一年二月五日 筆者 鎌田政温

全 三月廿三日 糺合 児玉五兵衛

全 五代徳夫

全 中島一三



『国分諸古記』(野村家所蔵)

八 服部日記

五行

合四千九百三拾四石貳斗八升七勺四才

内、五斗三升壹合六勺

但、先年ヨリ時々引入

一郷土惣人数 千八百人

内、百二拾六人 跡付

拾壹人 名跡

八人 新跡付

一同郷土惣家部 八百四拾貳

内、百七拾八人 高持家部

貳百六拾七人 高持無屋敷

貳拾六人 一ヶ所家部

三百七拾六人 無屋敷家部

一同惣廻り 拾六里拾八町五拾三間

但、間数ニシテ 三萬五千六百九十三間

町ニシテ 五百九拾四町五拾三間

一濱之市網屋町御制札ヨリ清水之内姫城村石踊之下境迄

三拾九町十六間

服部日記は、国分たばこの祖といわれた服部左近衛門宗重の家に伝わる文書で、服部典孝氏（国分市中央四丁目）蔵本である。一七枚綴りの横折帳で、表紙には日付、筆者名も無いが、安政二年（一八五五）の記録が納められているので、そのころの記録と思われる。内容は国分郷土高、惣人数、国分郷縄引、御屋形略図、屋敷割図、新城縄引等が記されていて、国分郷を知る上で貴重な史料である。

日記

一 国分郷土高 四千八百三拾石三升八勺三才

一 高五拾三石 金剛寺

一同三拾三石 龍昌寺

一同拾石 三光院

一同七石三斗四升貳合七勺壹才 獅子尾寺

但、間ニシテ 二千三百五拾六間

里ニシテ 壹里三町拾六間

一同所戸渡口ヨリへた小嶋迄半里、同沖小嶋迄壹里と申
傳候

一へた小嶋 貳拾六町貳貳間廻り

但、間ニシテ 千五百八拾貳間

一沖小嶋 九町廿四間廻り

但、間ニシテ 五百六拾四間

一本町御制札ヨリ清水境鳥越迄 八町五拾間

一下井村之内、本戸鹿倉

惣廻り 七千貳百三拾五間

但、町ニシテ 百貳拾町三拾五間

里ニシテ 三里拾貳町三拾五間

一本町御制札ヨリ加治木境迄 貳里九町拾八間

一金剛寺ヨリ宮内辻堂迄 貳拾九町四拾間

一地頭飯屋ヨリ加治木境迄 貳里貳拾壹町

一同所ヨリ敷根迄 壹里三町貳拾間

合、三里貳拾四町廿間

但、加治木境ヨリ敷根境迄

小田村通大津川渡、

一加治木境ヨリ野久美田村之内松ヶ平御立場迄 貳拾四
町三拾貳間

一同所御立場ヨリ小村大己貴命社迄 壹里四町廿壹間

一小村大己貴命社ヨリ敷根境迄 貳拾壹町五拾貳間

三行合

貳里拾四町五間五合

但、加治木境ヨリ敷根迄

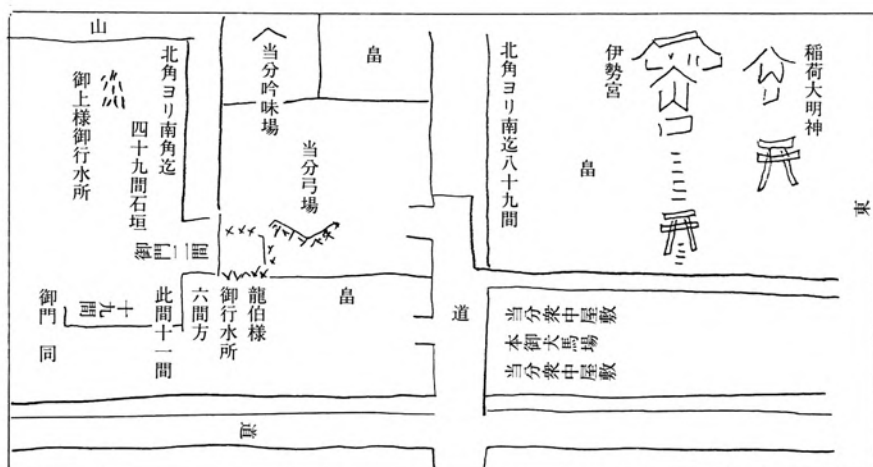
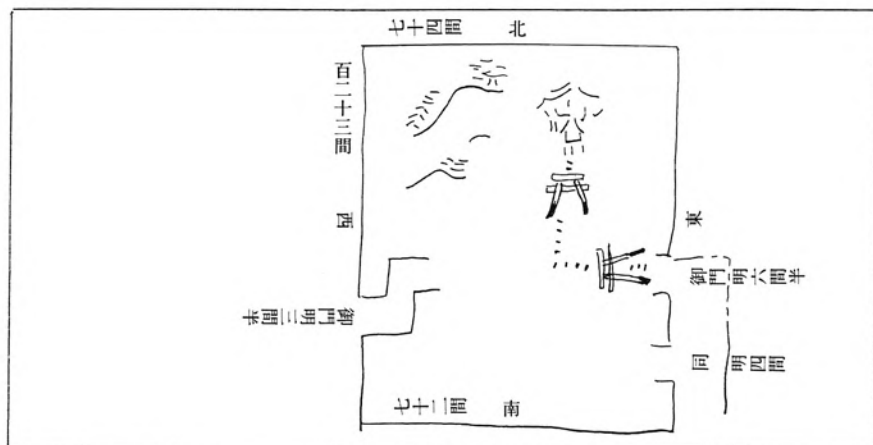
濱之市通川尻渡

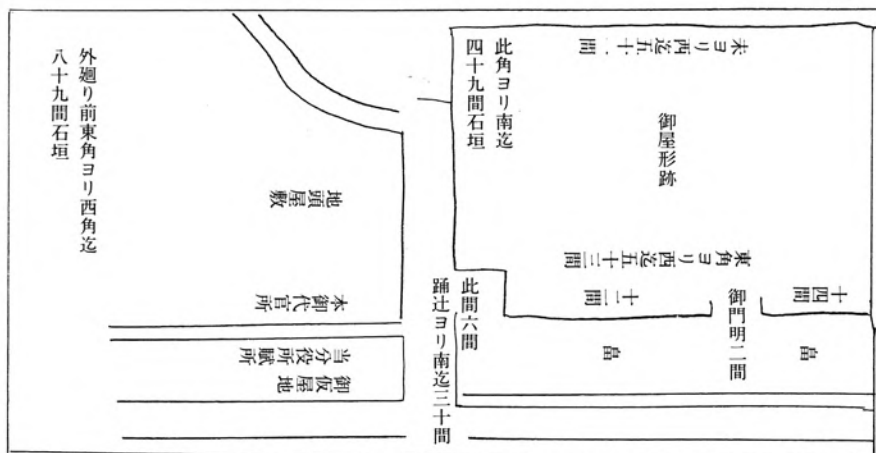
一東西加治木境ヨリ財部境迄 道法五里程

一南北小村ヨリ曾於郡境迄 貳里程

一地頭飯屋ヨリ宮内弥勒院迄 二十九町二十三間

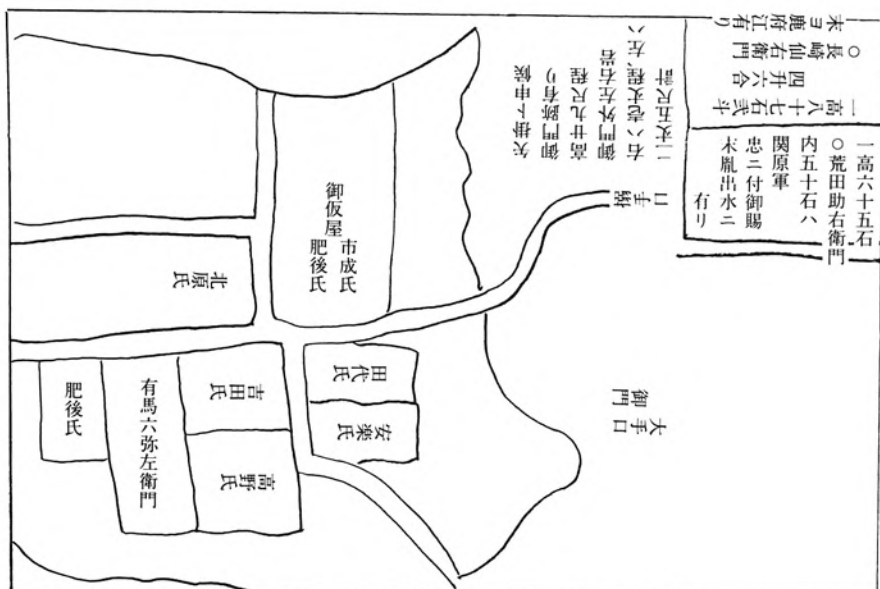
一同所ヨリ八幡御宮迄 三十壹町四拾壹町四拾六間

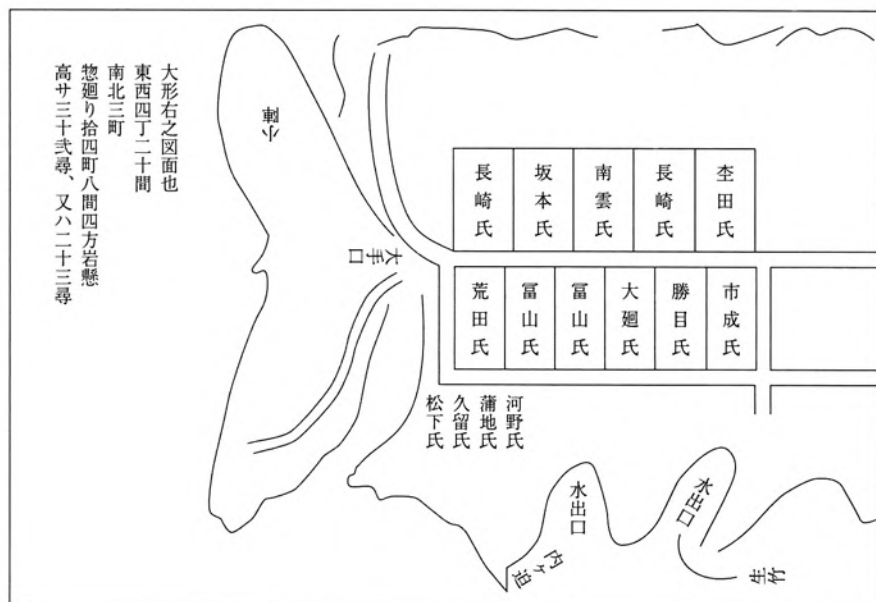




御記編年		口掛矢		屋	
高百二十一石八斗壹升六合 ○安樂伊與守 御家江御泰公 福島之住士也 取合之榎日州 肝付家之末胤、肝付		新城屋敷 高六十九石六斗貳升三合 ○市來宗右衛門 川辺之住士也 高百四十石七斗四升 ○肥後勘兵衛 種子嶋之住士也		御飯屋 高百四十石七斗四升 ○肥後勘兵衛 種子嶋之住士也	
高百七十八石八合 ○高野善左衛門 元和元八月ヨリ鹿見島 二付高野末 鹿府江有		高九十石壹斗 ○吉田九郎右衛門		幸偏江不致隨身忽乎 持高之内 百石八 北原伊 ○北原治部左衛門住士肝付家 高三百六十石貳斗壹升伊	
高五十貳石壹升八合 ○古川六郎左衛門		被行候、北原□□之由			

	大口之住士 末胤鹿兒島江有り		十院 末胤 逆心	
	高百石九斗貳升三合 三勺 ○肥後壹岐守 種子嶋住士也		○市兵衛 才五合三升 七斗七十五高	高七十石九升 ○李田九兵衛 加世田住士
	一 高貳拾五石七斗六升 同百六拾壹石五斗六合七勺 同八十六石貳升壹合 同六十四石八斗四升六合 大手御門外大廻衆御門萬事差引	河野郷兵衛 薄地帯刀 久留弥左衛門 松下番左衛門	○關右八目懸 四升 路 斗 五十五十四 斗 五十五十四 斗 五十五十四 衛 大廻四郎兵衛 高八十五石 前七十九石六斗貳升三合 ○富山五郎右衛門 内廿石八肥州矢崎城攻ノ時 軍忠ニ付御賜也	高七十五石七斗 ○南雲權右衛門 被仰付候得共差上候南雲末胤府江 有リ 南雲氏八元和元年百石ノ御加増
			高七十三石 五斗三合 ○富山治部 仙台山崎 之住士也	高七十石 ○坂本豊前守 田布施之住士





一大手口御門跡、左右岩積、横二間程、人馬通り有り、二十間程東之方江深谷有り

一大手口ヨリ道越廿間程辰之方ニ小陣と申小城有り、此所ニ之丸跡と申傳へ候平地ニシテ立六十間程、横四十間程、

一本丸之内十文字ヨリ七十間程丑之方ニ当て生竹と申所用水過分二出、尤十文字ヨリ寅之方ニ当て百二十間程丑ケ迫と申テ用水出、双方水清水之内、田地相應ニ養ひ候

一大手口ヨリ式百二十間程戌当テ忍ケ尾と申所有リ、人通りハ有之候得共、かづらなとニ取付宅人ツゝ登り候、

一当所御新田東郷肥前守被相始候由

一龍王新田寛文年簡^{マヤ}

一新町村中手新田肥前守被相初候由

一上井村新田寛文之比、当分古田相成候

一新川直り萬治三年ヨリ寛文三年迄

一宮原新田享保年簡

一 小濱村溜池享保年簡

一向花村鼻面川直シ宝曆卯ノ冬ヨリ辰之秋迄

一下井波戸濱之市新田寛政之比

一 当俗ニ矢立ト申所有リ、実名ハ埋峯ケ嶽ト申候、

一 富ノ隈、住吉ノ内、

一 獅子之隈、内山田村之内、

一 海老之隈、内村之内、

一 平隈、新町村之内、 当分堂山ト申所、

一 隈崎、上小川村之内、

一 都之隈、上井村之内、但、右取場之辺、

一 星之隈、右同村之内、但、川ヨリ東之方、

右七隈、何年簡ニ二相定候哉ト被問候時ハ、隈蔵ト申

人ノ時代ニ相始ルト答テ宜敷由候

一 当城大人在城ニテ、早人ノ城ト唱候、其後清水本田支

配ニ成リ、新城ト唱候由、然共公辺ニ不達、内輪之唱

ニテ候故、龍伯公文禄四年九月、濱之市富之隈江拾年

被遊御在城、夫ヨリ新城江御在城之思召ニテ、慶長九

年十二月廿六日思召立被遊、慶長八年佐多宮内將輔忠

増ヲ以、小路割稽古トシテ上京被仰付罷登、其節表向

被致願達罷下、夫ヨリ新城ト唱候、小路も相定リ、慶

長九年十二月廿六日新城江被遊御授、其時国分ト相

定、慶長十六年正月廿一日御逝去、其跡御亀様二十年

被遊御座候、是ハ持明院様ノ御事、慶長十七年之春ヨ

リ国分外城ニ相成候、地頭喜入炊之助久正入道紹加老

一 清水本田新城支配ノ砌、何様之子細ニテ候哉、大中公

江敵対ノ御不審被為有、樺山安芸守善久入道源佐小濱

村生別府居城ニテ、野久美田村、小田村青木大明神辺

ヨリ西支配ノ時分ニテ、本田逆心ニ付可打取旨樺山氏

江被仰付、直ニ本田方江被攻寄候處、如何思ケン柱ニ

一首

立なれし巻乃柱もわするゝな

廻りあふへき よしもあるかと

書置、家内不残逃去、善久御覽被成、返歌ヲ詠して、

矢ノ根ニク、リ付、御馬ニテ被為追候處、大久保ニテ

半町程ニ追付、右ノ矢射掛候テ、其俣御引取、夫レヨ

リ本田都城江落行タルトモ言、又求磨江落行タル様子

ニも承及、実正不相分、本田跡及中絶ニ、然処龍伯公
思召ニ而、鹿児島士本田六左衛門江系図被下、其後別
ニ木田與左衛門公親ト号御取立、当分曾於郡本田之元
祖之由、

一真米六石起、用達衆江礼米

一同八石同、問屋礼米、

一同式石八斗同、役所書役兩人扶持米、

一同老石式斗同、右同助役兩人、

但、助役之儀右同外ニ勤候数扶持米有り、

一真米四石八斗起

但、役所取枿兩人扶持米

一同五石

但、郷士触役五人扶持米

一同七石五斗先キ

但、時之カネ打三人扶持米

一同三石

但、新川渡守扶持米

一同四斗五升五勺起

但、御軍役調練場仮屋角廣メ新地上納

一鈔貳貫百七拾六文

但、小村 濱之市浦役助筆紙墨代

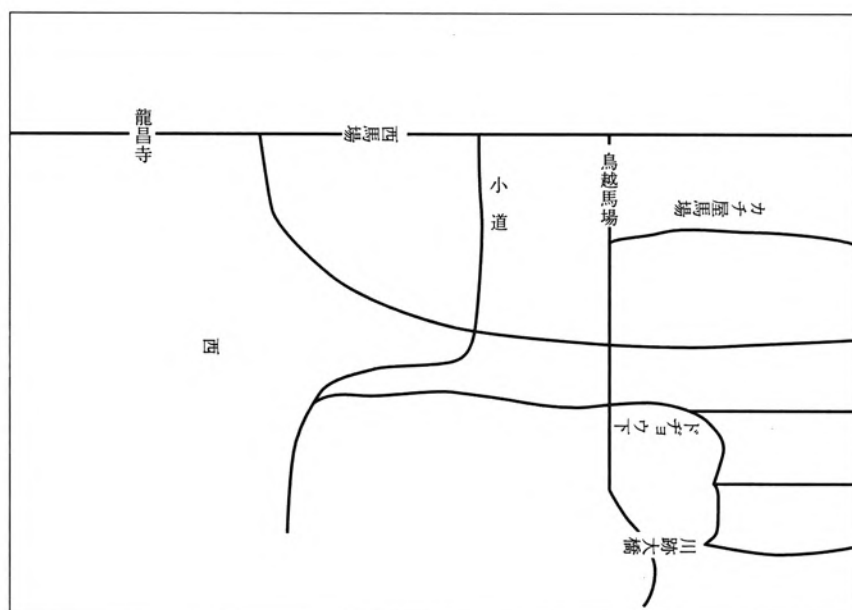
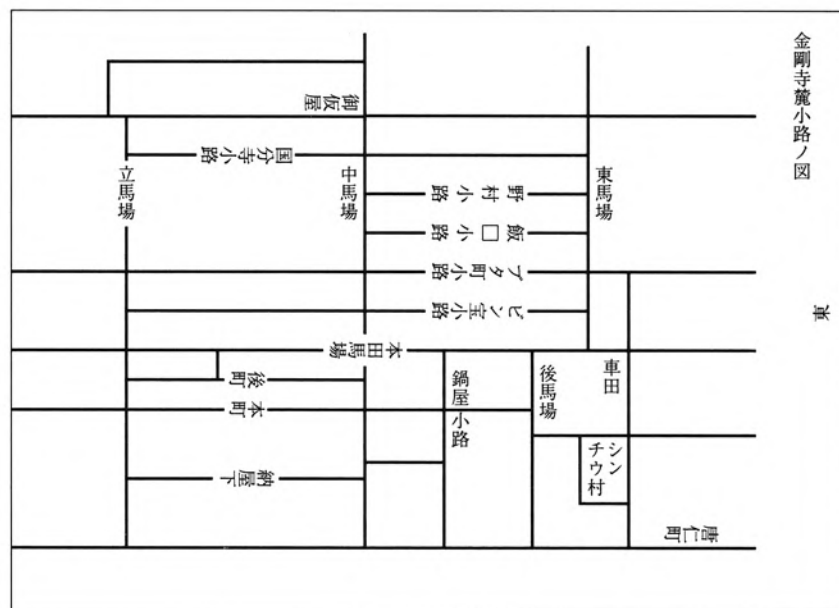
一鈔三貫文

但、寒中伺御機嫌、兩種料

一同三貫文

但、歳暮御祝儀ニ付、同断

一新城大手口ヨリ辰己酉ニ当テ目掛り百間程ニ大平ト申
取添有り、同所ヨリ辰ノ方当テ陣崎ト申所有之、此所
遠目番所立候由、四百間程ニ相見得申候、



一夫百拾四人 上小川村

一同七拾人 上井村

一同六拾五人 川内村

一同貳百七拾人 下井村

一同貳人 小村

一同百三拾五人 福嶋村

一同六拾五人 松木村

一同八拾人 野口村

一同七拾貳人 府中村

一同四拾八人 向華村

一同五拾人 新町村

右川東拾壹ヶ村

合用夫五百三拾七人

一高千百七拾五石九斗貳升六合貳勺六才 内村

内、九拾四石四斗七升五合八勺四才

但、漸々御竿入高

四十一石七斗九升三合六勺七才

但、諸人抱地高

残而千三拾九石六斗五升六合七勺五才

但、竿次帳内高

内、百九拾石貳斗七升五合九勺壹才

但、庄屋浮免込ル

八百四拾九石三斗七升八合九勺壹才

但、百姓請取高

一門数二十九

但、耆門ニ付三拾石餘ツ、

一竈三十五 百姓方

一同二十八 諸家来、与力足輕

一用夫六拾四人

内、六人御高格護不相調

一現人数百九拾三人

内、男百三人

女九十人

一高千百八拾四石九斗八升貳合三勺八才 見次村

一高六百四拾三石七斗貳合九才 真孝村

田高四百五拾八石貳升貳勺貳才

一竈数六十三

一現人数三百十六人

男百八拾三人

女百三十三人

一用夫百十六人

内、二十五人役目并年季病者

一同九十五人

一同二十三人

一同百五十三人

一同三十九人

右川西九ヶ村

合用夫千五百八人

一四拾五人 名主

一四人 綱差

一四拾九人 杓楮掛下役

一三拾人 小触

一三拾三人 用水掛下役

一五人 御蔵枅取

外二内役

一拾老人 名主

一拾四人 小触

一貳人 杓楮掛下役

一五人 用水下役

一九十人 作與

一三十二人 下山留

一二十人 牛馬主取

合三百七拾六人

内、貳百貳人御證文役

百七十四人内役目

一加治木宿場定立

壹ヶ月二付十日ツ、

但、壹日二付夫三拾人ツ、馬拾五疋ツ、

壹ヶ年分請負頼入米貳拾五石、起

外二、二日重ミ被仰付、壹日二付同断

壹ヶ月分頼入 六貫四百文

一溝辺右同

壹ヶ月二付壹日ツ、馬三十五疋

壹ヶ年分頼入米三石八斗四升、起

一小倉筋寄人馬

壹ヶ年分夫馬三百、請負米壹石七斗餘

右、十二月取米加治木郡見廻方江相頼来候

一濱之市宿場右同

壹日ニ付夫十五人、馬六人

夫壹日壹人ニ付錢八十文ツ、馬壹疋ニ付百六拾四

文ツ、

右、住吉村江請負ニ相頼入候

一正八幡鳥井、享和三亥年新御造替、夫ヨリ此方追々御

修甫有之候、

一当所府中村大掛越、此節目鏡橋御掛替有之、安政二年

卯七月ヨリ御取付、九月中御成就ニ付、御用人中村新

介殿御見分之節渡、初左之者共御請仕相勤候、

松木村中村門名頭

一当年八拾三才

小次郎

一同七拾三才

小次郎

妻

一同五拾四才

小次郎子

金右衛門

一同四拾九才

金右衛門

妻

一同貳拾七才

金右衛門子

金藏

金藏

一同貳拾五才

金右衛門二男

妻

一同貳拾壹才

けさ七

袈裟七

一同拾九才

金右衛門娘

妻

一同拾貳才

金右衛門娘

ふち

一同九才

小次郎二男

すへ

一同三拾七才

けさ次郎

袈裟次郎

一同三拾才

けさ次郎

妻

一同五才

けさ次郎子

袈裟右衛門

一同九才

けさ次郎娘

けさと

一当年スリ切

小次郎

娘

一同三拾四才

小次郎三男

休右衛門

一同三拾貳才

休右衛門

妻

一同拾壹才

休右衛門子

スリ切

一同九才

休右衛門二男

傳四郎

一同五才

休右衛門

娘

九 薩隅日諸城記

国分市中央四丁目の荒田義国氏蔵のものであり、現在県歴史資料センター黎明館に寄託されている。荒田家は、国分郷における筆頭郷士の家格で、代々三役を務めた家柄であり、先祖伝来の古文書が多く保存されている。

この古文書は、「諸家略系図」と「薩隅日諸城記」の二編から成っている。なお、本古文書の末尾に『文化十三子年』（一八一六）とあるので、このころ書かれたものであらうと思われるが、執筆者の名は不明である。

一 諸家略系図

この編の末尾に『尊氏將軍家の時、薩隅日を奪わんとして当国に下向し、云々』とあり、足利尊氏が勢を振っていたころの薩隅日の諸家略系図であらうと推察される。

七十八名の諸家の出自、略系が収載されており、鎌倉時代末期から南北朝期、室町時代初期にかけて薩隅日三

州に勇名を馳せた武將家の略系図と思われる。

二 薩隅日諸城記

薩隅日の諸城・塁・陣について、その由来、城主・領主の変遷・盛衰、城をめぐる合戦の状況などが記されている。

本編に収載されている城の数は、薩州（薩摩）五十九、隅州（大隅）四十七、日州（日向）十三、不明四である。

（表紙）

薩 隅 日 諸 城 記

諸家略系図

一 蒲生美濃守清寛

此子孫蒲生十郎兵衛也、

大織官鎌足公之後胤三位通基公之孫子真光坊舜清、

初為隅州蒲生之城主、是より十一代目蒲生祖藤原教清、十二代蒲生之城主也、

一 吉田若狹守清正

此子孫吉田休兵衛也、

日本武尊御子息長雅純ヨリ五拾二世之人也、日本武尊城主也、

一 畠山礼部

畠山元祖義純七代之後胤、号修理亮、直頭源氏ノ苗裔他国之大名也、父ハ畠山四郎宗国、

一 山田弥九郎貞有

平家之苗裔武藏三郎左衛門有国孫式部少有寛ノ後胤、

一 北原彦次郎

肝付家之祖左兵衛佐兼定七代北原周防守範兼庶子也、

一 伊地知新左衛門、号田嶋嶋津、

秩父太郎重光六代伊地知彈正季隨後胤也、

一 天辰次郎、本田家之支族也、

一 肝付八郎兼重

天智天皇之御子大友皇子十九代後胤也、日州三俣院之城主肝付家七代之正嫡也、号三俣八郎、

一 税所介篤用

敦實親王之後胤篤如十代之孫也、霧□□□氏ハ藤、

一 森三郎次郎行重

平家之人也、大隅国守護代、

一 本田次郎左衛門尉貞親

本田次郎親恒之後胤也、大隅守護職ヲ賜ル、法名静

觀氏、藤、

一 帖佐太郎信宗

平家内大臣宗盛公之苗裔、平家元祖なり、

一 肥後房良西

平家太夫判官周防守家成第二友清之二男ナリ、帖佐領主、氏ハ平、

一岩清水俗別當了清

岩清水別當紀兼信之後胤帖佐下向、平家之元祖、

一姫木十郎

大中臣隅州姫木之城主、

一本田信濃守氏親 氏久公之御家老、

本田静観三代之後胤ナリ、

一始良平太夫良門

族姓不知、頼朝公之御代始良之領主、

一山田加賀守忠経

山田式部少忠繼四代之後胤ナリ、

一碓山金吾忠安^(久)

嶋津判官師久公之御二男、号始良三郎左衛門尉、

一三位^(天)蔵行忠

後漢靈帝之苗裔、隅州吉田院古領主、

一末次六郎

族姓不詳、

一〇〇十郎

族姓不詳、

一執印行賢

族姓不詳、

一源為重

鎮西八郎為朝公之御二男也、

一大藏良長

後漢靈帝之後胤、隅州加治木院之古領主大藏氏、

一藤宰相経平卿

左大臣冬嗣公の七代之後胤、加治木領主大藏良長

為養子、

一加治木八郎親平 大藏氏

藤宰相経平之後胤也、加治木院郡司、

一藤内兵衛尉時信

平家基盛公四代之後胤、大隅国守護、

一息長清道

〇〇正八幡宮之神官助清嫡子也、吉田家元祖、

一菱刈^(相印)〇〇重妙

藤左中将正二位隆長之嫡子三位中将隆重之御子也、

隅州菱刈家之元祖、

一 曾木藤五郎直茂 藤原氏

菱刈重妙之末子曾木三郎後胤也、

一 土岐左衛門尉国房 源氏

土岐隱岐守光貞苗裔、隅州敷根之城主、

(大始)

一 □□良六郎晴義

藤真夏卿後胤長谷藤四郎義兼六代之孫也、隅州大始

良領主、

一 横山弥三郎有義 藤原氏

大始良晴義之兄、横山領主、

一 佐多太郎存盛

平家四位少将資盛四代伊与房時盛之嫡子也、隅州佐

多領主、

一 田代次郎兼盛

伊豫房時盛之二男也、田代元祖、

一 佐多三郎左衛門尉忠光

忠宗公之御三男也、佐多領主、

一 祢寝三郎盛 平

伊与房時盛三男、祢寝元祖、

一 祢寝太郎義 □ 藤

□□之後胤長谷四郎義兼三代之孫也、隅州祢占院郡

司也、

一 北原又太郎延兼 伴

肝付河内守兼貞舍弟北原右兵衛兼幸四代也、後胤串

良院領主、

一 平田右馬助重宗

佐多太郎信宗ノ嫡子、串良院城主、

一 財部六郎左衛門尉正信

平家基盛公之後胤岩川六郎信家嫡子也、

一 河邊平太道綱

平家從五位下伊佐平次貞時七代之後胤、薩州河邊城

主、賴朝公之御代、

一 松房丸

忠宗公之御二男豊後守忠氏之御子和泉宗兵衛忠直四

代之孫也、於川辺討死、

一 □房丸

右之御弟、同打死、

一 山本孫五郎

祢寢一族、同討死、

一 別府五郎忠明 平

伊作平次良道之五男、加世田之城主、

一 益山□郎兼澄

(藤原)

□□純友之後胤、加世田益山領主、頼朝公御代也、

一 穎娃太郎忠純 藤

平家穎娃本地頭忠次養子、

一 穎娃次郎左衛門久純

藤原純友之後胤也、

一 穎娃三郎左衛門憲純

右久純之苗裔也、此代穎娃没落ス、太守久豊公御攻

落云々、

一 知覧四郎忠信

伊作平次貞時流、薩州知覧之院郡司、

一 指宿五郎忠光

伊作平次貞時流、穎娃太郎忠方之末子也、

一 別府弥平五信忠

伊作平貞時之流、別府五郎忠明後胤、

一 谷山五郎資忠法師覺信

別府弥平五信忠四代之後胤、谷山郡司、

一 嶋津式部孫五郎宗久

山田三代之後胤、薩州谷山之中山田村居住、

一 大隅式部小三郎

御家知覧之流歟、

一 野村四郎康綱

佐々木三郎盛綱之後胤ナリ、□□

(城主)

一 □□河□□嫡子、薩州南郷□□、頼朝公之御代、

一 嶋津三郎兵衛尉貞忠

御家四代之太守忠宗公之御二男、□□□□和泉殿元

祖、

一 伊集院弥五郎久兼

御家二代之太守

忠時公之七男常陸守忠

□□□□□□
(經四男侍從)

房俊忠之嫡子也、伊集院之初領主也、

一 執印中務少将友成

宗大納言知国七世之苗裔、号国分左

□□□□
(衛門尉)

一 惟宗太郎政家

國分左衛門尉友成之二男也、為市来十郎□□□家^(房)□

養子統市来□□、惟宗氏、

一 嶋津山城守忠朝

嶋津判官伊久公之御二男、相馬之祖、

一 嶋津判官伊久

総州祖師久公御子也、

一 ^(谷)□山五郎入道隆信

別府弥平五信忠後胤也、

一 權執印三郎次郎俊正

石清水俗別當信經之男、^{本ノママ}紀太夫正信之後胤也、

一 入来院五郎坊定心

渋谷庄司重國男太良光主五男也、入来院之元祖、

一 高城六郎重貞

^(光)渋谷□重六男也、薩州高城郡司、

一 ^(色)知□□□□□覽、和泉太夫兼保之庶子也、

一 郡山弥^(三)□郎賴^(平)□

加治木六郎恒平五代後胤、郡山城主、

□□嶋之庶、川田川城主、

一 ^(彦)□谷伊勢守重武

祇答院家十二代久正嫡、号鬼九大明神、此社宮ノ城

虎井村、

一 白男川又太郎 重

東郷元祖渋谷權頭忠重後胤、渋谷又次郎武重入道□

□禪末子也、白男川名之領主、

一 嶋津七郎左衛門尉資忠

御家四代之太守 忠宗公六男、北郷元祖、

一 車内三郎 渋谷東郷□□

一 酒匂紀伊助

□平二景高之庶子也、刑部允朝景之後胤也、

一 □入五郎弘氏 上井氏元祖、号三輪□、

一 楡井賴仲 旧記仁禮賴長卜有、

源氏之与流也、号信濃源氏、

尊氏將軍家之時、欲奪薩隅日下向當國、語三州之地頭

御家人等ヲ、居城志布志松尾挑合戰□□□□□更其

□掛テ諸處發軍、然ニ亦畠山礼部□□薩州山北擊入襲

三州、仁礼ハ与肝付兼重□□□□□□□□与嶋津□□□□
相闘、此三人争□危□□□□覺□畠山之軍責□志布志亡
仁礼也、□留□□□□

薩隅日諸城由緒

一 鶴丸御城

鹿児島

右此御城ハ古へ上ノ山与申而、領主相居たる、島津
守護氏久公御代薩州之御家人交名帳ニ上ノ山領主与
有之、近代 太守龍伯公慶長年中此城ヲ□初メテ御
居城也、
(伊敷)
一□□之壘 右同

右此所ハ領主為相居所也、守護 道鑑公之御代交名
帳ニ、伊敷之領主与有之、其後 太守久豊公之御代
ニハ伊敷□四郎忠純与云者□□壘是ハ長谷場六郎久
純ニ男也、自此上古肝付□之祖大監兼行□公家薩州
之守護与成りて、上伊敷ニ下向して此□四拾町ヲ
築、伴椽御館与申也、其後肝付へハ隅州肝付院へ順
遷せられ、于今子孫繁昌ス、

一 原良之拵

鹿児島

此陳ハ 太守久豊公之御代、伊集院彈正少弼頼久御
家之敵人与成て 守護方ニ弓ヲ控ル、時此壘に凡
シテ露逆意、仍而 守護方ノ軍勢困ニ、此壘御合戦
有之、伊集院親頼 日置肥前守・町田土佐守・^(大)田
三郎四郎杯究竟之若武者、屋形之御内□□□□□ニ
打物ヲ拾テ組打ニ勝負、□□奈良ハ組臥られ危□□
□兄入奈良四郎左衛門尉走続キ、大田三郎四郎ヲ打
留□□□□一町^時□□□□の合戦ニ、敵味方の手負打
死其数をしらず、□□客屋乃陳ヲ二重三重ニ取囲挑
戦ふ、伊十院切負已ニ□^(打)死与見得ける、此時蒲生美
濃守清寛・吉田若狭守兩人之和談ニ依り、霜臺の命
ヲ助らる、

此合戦、奈良四郎左衛門、太田三郎カ真中ヲ碎ヨ
ト打ケレハ、爰ニ於テ打レケル、弟八郎ハ男泣シ
テ大勢ノ中ニ掛入、切クルイケル故ニ、中開テ通
シケル、

一 野本原ノ陳

鹿児島

右此陳ハ、守護氏久公之御代、官方之大將ノ畠山礼部与申人、他国^{薩州}ニ乱入、守^{護方}□□ニ敵シ申□□国一揆之衆ニハ、谷山・帖佐・加治木・山北・和泉□、此外ニ當国之地頭御家人過半礼部之手ニ属ス、仍畠山率大軍野本原ニ陳幕ヲ張、守護方無勢なりといへとも、対彼陳月之野伏出ニ御合戦隙間なし、或時礼部之方^高声ニ喚はりけるハ、兼而聞及たる嶋津殿の御内山田弥九郎殿ニ見参申すへし、角申者ハ礼部方多田四郎といふ者也、弥九郎も後れける若ものなれハ、言葉を通にも及ハすと、四尺計の大刀ニ手^種□ヲ以出、味方の軍勢是ハ何事そと尋ニ、山田被申ハ、機ヲ望む程の兵なれ、そハ何様先に太刀を討とらんと覚、手楯ヲ指出し思ふ様二楯のハを切セ、下をなく□し、其時踏寄て組打せんにしかしと蒐出れハ、敵は袖笠印□□り切たる若武者、四間之中ニ蒐出ル、敵陣ハ是不知□□□□通て□たり、多田ハ長刀之中を抜て上太刀ニ成て切て掛、案之如楯のハを切らせ踏寄ハ、敵長刀ニ而弥九郎か甲のてつへ

ん真中吹返しにそ掛けり、両方とも二切乱れて、はや組ンと見へける處ニ、味方後陳の兵馳続、弥九郎討スナト声くゝに喚て戦を挑ミけれハ、礼部方の軍兵共馳続入乱入違て相戦を、弥九郎ハ多田四郎万袖笠印を切落シ、太刀鋒ニ貫き、是見給へ今か勝負の印そと時を作れハ、味方も同時ニ作りけり、角而双方相引にそ曳たりける、軍鎮て礼部方^花□けるか、弥九郎殿□振舞など言葉を掛けハ、味方もしりて言葉□□ス、野本合戦之事中古迄ハ申傳る也、

一 東福寺城

古此城之持初ハ、矢上左衛門尉盛純ト申而^有馬庶流之人也、頼朝將軍の御代以降代々守之也、然ニ守護氏久公之時、鹿兒島之郡司矢上左衛門五郎高純を御退治有て、鹿兒島を御座所与成シ賜ヒ□□□矢上を亡し鹿兒嶋を御手裡ニ入させ給ふ、其後 太守久豊公ノ御代、伊集院彈正頼久御家之敵人たるに依、鹿兒嶋方を押領す、此時吉田若狭守清正 久豊公ヲ招請吉田之伊職に、東福寺城ニハ番人を込置れける所

ニ、窺 守護之御留守ヲ番人之内北原か良徒伊集院、軍勢を此城呼入ル、仍テ城中騷働□□及合戦に、番人之内遠矢無覺と云者あり、□□□□薄□かくくの□□等も、無格護□手比の大竹を求而□□廻し、大勢の中ニ破て入相戦ふニ、夜中ノ軍なれば敵は太刀を振て敵に向ふとそ見得ける、城ニ□手揚れは扱は竹と見へたり、暗キ夜にて無覺か竹筒に頭を破れ、討死する敵二三人に及へり、竹竿ハさしくのめ碎て其身も打死ス、誠ニ武士の嗜も角のことくあるへし、□一子をも持されハ残る名もなしと、上下感涙を催ス、此夜の合戦に打死する寂に、北原彦次郎・舎弟弥次郎・同太郎三郎、御親類に佐多三郎九郎、良從二天辰次郎・同式部次郎・伊地知□左衛門を始として皆同□に討ス、

一 催馬楽城

鹿兒嶋

古此城ハ矢上氏支配の要害也、守護 貞久公鹿兒嶋御退治の時、矢上左衛門五郎高澄・中村彈正秀純・肝付八郎兼重国一揆之張本成レハ、催馬楽城ニ楯籠

振逆意、仍歴應三年八月十五日より守護方の軍勢圉之、明ル曆應四年五月廿四日迄数度の合戦有之、追手合戦の大將ハ嶋津七郎左衛門尉資忠、搦手之大將ハ嶋津三郎左衛門尉資公也、
(久脱)

一本城 實方橋口之御城なりと旧記ニ有り、鹿兒嶋、

此城ハ□□□久公矢上御追討有て、鹿兒嶋ヲ御子

貞□□元□□讓與へ給ふ、仍而□□

(一行不明)

一 国分城 太守□□
上古何某此城ヲ□□□来由不詳

隅州

国分方ハ古へ惣而税所氏之所領と見たり、其後 守

護道鑑公之御代ハ本田貞親入道静観、大隅国守護

職を賜り居住ス、同御代大隅国守護代森三郎行親与

旧記ニ有り、

一 富隈城 古河某此城ヲ築キタルカ由来不詳、国分之内、
鎮西八郎為朝御下向有テ宮内ノ御居住也、

其時此城共ヲ築□□歟、

一 たつまき城

□□□初メ由来不分明、道鑑公□□

(一行不明)

□□ニハ領主

段々相替、頼朝公之御代宗盛之苗裔帖□□□信□

帖佐之郷ヲ被下居住□□、此肥後房良清・善法寺了

清皆帖佐ヲ領シタル人也、新正八幡ハ弘安年中了清

建立也、其後此城ハ嶋津豊後守忠廉□居城ナリ、

一曾於城

隅州

上代此城之持初ハ、治安元年丑ノ廿一、篤□与申公

家大隅配流、此苗裔□□篤實霧嶋之為税所職□□、

此代々守此城也、

一□□□

右同

〔此行不明〕
迄討

守護〔以下忠〕

一姫木城 此城之持初ハ真光□□

右同

右此城大中臣姫木氏持初ける城也、氏久公御責取

本田家の城ニ賜、此時ハ姫木十郎与云者守之、

一末次城

隅州

上代末次名字之者守之也、守護氏久公此城ヲ御責

取、山田加賀守を城主ニ居らる、

一牛元城

右同

右此城ハ種子嶋一族岩川名字之者守之、氏久公此
城ヲ御仕落御手裡ニ入給ふ也、

一小□城

□□□□之者□□也比肥久公之御□□

旧記ニあり、氏不詳、

一市成城

隅州

古此城ハ市成名字之者守之、族不詳、守護道鑑公

御退治有テ、山田加賀守忠純ニ市成六町分ヲ給ふ、

従是加州ノ城と成て、天文十三年矢田加賀守忠廉代

市成領ヲ 太守貴久公ニ献し奉也、

一始良城

□□

古此城ヲ持タル□□良平太良□ト旧記有之、頼朝

將軍□□

□□之比嶋津判官伊久之

守護

〔以下一行忠〕

隅州蒲生

〔此城〕

□□之持初ハ真光□舜清□人也、右豊前国

宇佐々大隅ニ来り垂水ノ城ヲ守也、其後保安四年癸

卯潤二月遷同国蒲生城、此時垂水ニ觀請したる宇佐

之西宮ヲ奉遷蒲生院、八幡是也、舜清々以降代々之

城主也、

一かゆうか城

□□

上古此城之持初ハ大蔵氏三位行忠ト云人也、天仁三年正月廿五日吉田院ヲ執印行賢ニ^讓□渡され、夫^ハ又孫之為重ニ讓渡サル、此人鎮西八郎為朝之二男也と旧記あり、然ニ上古日本武尊之御子息長宿祢^{ヲキナカノスクネ}紙之苗□大隅正八幡宮神官息長清進ト云人有□□、重清道為舟之母方之祖□□あり、依之為重^ハ□□吉田を清道ニ讓被渡、是吉田家之元祖也、且城名ヲ取事ハ右吉田氏か臺所のかゆう、此時ヲ見立取初たる城なれハ、かゆうか城与名付タリ、

一加治木城

(太夫)

□□

此城之持初ハ上古大蔵□□良長と云人無子孫、然ニ一条院御宇寛弘三年、藤宰相経平卿為流人加治木郷に下向ス、此所春日大明神を勧請ス、良長^{後家肥}喜山女房と夫婦となり、□加治木の家を連続ス、其子を大隅大□頼長と号ス、是^ハ嫡々相繼して加治木十八代三郎實平世子無之シ、仍而嶋津豊後守季久之

三男を以養子と定、夫^ハ□□□□平□□□□して、

是より加治木家□□□□□加治木彈正名乗タルハ是ナリ、

一横川城

隅州

此城之持主ハ文永・弘安之比ハ左馬之頭行盛之苗裔藤内兵衛時信守之とあり、此人ハ大隅国守護と旧記ニ見ヘタリ、種子嶋肥後同家也、

一栗野城

隅州

此城之持初ハ頼朝將軍之御代建久之比ハ、栗野郡司守綱ト旧記ニ見ヘタリ、族姓不詳、中古ニハ真幸ニ北原家之城と成、

一溝邊城

右同

此城主元弘・建武之比溝邊孫太郎守之、族姓不詳、氏久公之御代ニ本田信濃^{太夫}守重親守之とあり、

一岩鋸城

隅州之内

此城帖佐之惣領主^ハ支配之城也、豊久公之御代於此城御合戦あり、

一本城

□□

古此城之持初は三郎坊相印重妙与云人、建久四年頼朝將軍と菱刈院ヲ給り令下向隅州、此城之主ト成、夫と菱刈家代々相續有て、十四代目城主菱刈大和守重猛入道舜山之子権頭重豊代、龍伯公と退治シ給ふ、先祖重妙ハ宇治平等院之住職と旧記ニあり、

一馬越城

隅州

菱刈重妙嫡子太郎太郎隆氏守之、元享□□馬越藤四郎行家居城也、

永□□□
兵部少輔と云フ人城主

一曾木城

右同

此城ハ菱刈重妙之庶子、曾木三郎と名乗而此城之主と成り、元享之比ハ曾木藤五郎直義居城なり、

一廻城

隅州福山城ヲ云

此城は古源三位頼政之孫、兵庫太郎と云人令下向此城主と成、守護 元久公之御代ニハ飢肥□□□古城

(伊豆守)

也、此伊豆守ハ元久公御在洛之時致御供、飢肥ハ廻

氏事也、

一敷根城

隅州之内

古此城主ハ源氏土岐氏之人也、土岐讃岐守光貞□□

左衛門尉国房令下向、此城主と成ル、從是以前□□頼朝將軍之御代ハ敷根九郎正正守之と旧記ニ有、

本ノママ

一本城

右同高山之内

此城之持初ハ薩摩守兼貞与云人、後一条院・鳥羽院長元九年九月九日、肝付院ヲ給り令守此城、肝付家元祖是也、從是嫡々相續して肝付河内守兼統入道省鈞□□□左馬頭良兼代落城也、

一鹿野屋城

隅州

古此城ハ津野四郎兵衛尉守之と旧記ニ有之、其後肝付家之庶子鹿野屋周防守宗兼之居城となり、

太守忠公之御

代正中之比
ハ串良院地頭津野四郎兵衛尉ト旧記有、氏不詳、

一垂水城

右同

上代此代は真光坊舜清与云人、豊前国宇佐と下向して初而守此城ヲ、其後被遷同国蒲生之城□□、古ニハ伊地知家支配之城成といふ、

一大始良城

隅州

此城主は大始良六郎藤原之時義と云人也、其後ハ守護氏久公之御住城と成なり、元久公は於此城ニ御

誕生也、

一横山城

右同

古此城主ハ横山弥三郎有義守之、大始良一家之人也、

一志々目城

右同

此城主ハ古へ志々女藤藏義藤与云人守之、大始良
横山同家之人也、

一佐多城

右同

古 頼朝將軍之御代ニハ佐多新太夫高清此城ヲ守と旧記ニ有之、此人氏姓不詳、且又此城は四位少將資盛公之孫伊与房時盛之息、佐多太郎存盛□惟源氏忍身隅州守此城ヲ、佐多之嫡流有之与□□□承久兵乱之時令上洛、於宇治川遂戦死、自是佐多之家断絶して御家四代下野守忠宗公御三男、佐多三郎左衛門忠光之城と成也、

一田代城

□□

古此城之持初ハ伊与房時盛之二男田代次郎兼盛守之、佐多存盛之舍弟也、

一柵寝城

右同

(一 行見えず)

柵寝院北俣郡司五郎胤義ト有、藤氏志々目流なり、頼朝將軍之御代□□掃部次郎藤原之義明、此城主与旧記ニ有之、此人ハ横山志々目不同家之人也、根占成盛い前之城主歟、

一串良城

右同

此城之持初ハ北原又太郎延兼ト云人也、真幸之北原氏之先祖也、元久公之御代應永之比ハ平田右馬助重宗此城主成也、

一恒吉城

右同

右此城主平氏之流早崎禮道か三男恒吉大□ト云者守之、此者種子嶋家人也、

一財部城

右同

昔此城は財部三郎正信ト言者守之、種子嶋同家也、一日當山

上代此城は税所・本田両家之支配之城歟、守護貞久公時中津川勘解左衛門ト云者守之与旧記ニ有

之、中古ハ北原氏押領す、

一河邊城

薩州

古此城は川邊家より取初り、頼朝將軍之御代川邊平
 太平之道綱守之、依為平家方謀反人被流硫磺ヶ嶋
 云、其後應永之比島津上総助久世御居城也、御生害
 之後伊集院彈正少弼頼久此城ヲ押領、被奉□□□□
 守豊久公、仍而應永二十四年丁酉□月十一日伊集院
 退□御合戰有之、御味方軍發て和泉殿兄弟・祢寢兄
 弟・内山本孫九郎、国衆ニハ蒲生美濃守清寛・吉田
 若狭守清正・栗野菱刈田代肥前守打死ス、御内ニ伊
 地知將監打死、此外給黎・猿渡・和田・下田・西村
 等之者數十人討死也、

一別府城

薩州

古へ此加世田之城を取初たる人ハ、後平氏之流別府
 五郎忠明といふ、頼朝公之御代此城之主成、中
 古は守之なり、其後御家支配城と成、此責曆應四年
 五月二十八日之御合戰なり、

一顯娃娃城

右同

上代此城之取□ハ河□權頭忠長と云人也、頼朝公之
 頃□□守之、是□後平氏之流也、忠長之孫顯娃之本
 地頭忠次無嗣、仍而益山太郎兼澄ハ息男を以為養
 子、是より藤原と成て、顯娃太郎忠澄と名乗也、
 守護貞久公之御代顯娃二郎左衛門久純与云者守之
 也、然ニ久豊公御代顯娃城主三郎左衛門尉憲純ヲ
 御退治有之、夫々久豊公之御居城トナル、其後肝
 付氏カ庶子ニ顯娃之□被下、顯娃左馬頭久兼名乗、
 代々守之、今之顯娃氏ハ是也、

一指宿城

薩州

此城之持初は後平氏之流指宿五郎忠光也、頼朝將軍
 之御代此城を守ル也、是与別府同家也、其後□□
 公之□□_(二行不明)□□_{られ奈良美}□□_忠
 久公御代指宿郡司石堂入道ト有之、是□□□□不
 詳、

一知覽城

薩州

古へ城主ハ谷山五郎資忠法師覺□□旧記ニ有之、頼
 朝公之御代覺信曾祖父別府弥平□信忠ト云者ヨ古

(山院)

□□郡司ニ而守城也、當国之守護 元久公之御代谷山^(御)退治有之、天文年中 太守貴久公谷山御合戦之時□□之城主谷山駿河守・伊集院山城守・松崎□□守乞和降参、文□之比山田家之祖嶋津式部孫五郎宗之入道□□谷山之地頭と旧記ニ有之、

一飯田城

谷山

守護 元久公之御代谷山御合戦之砌、此城□□□□六度之合戦有て、此時野□四郎康綱ト云者□入、敵三人ヲ切臥、海老原出雲入道ヲ討取と旧記ニ有之、

一阿多城

薩州

此城之持初ハ阿多平四郎忠景ト云者也、依而平家平治□□年蒙追討之宣旨、被流硫磺ヶ嶋と旧記ニ有之、□□□州守藤原ノ信純ト云者ヲ聳養子とし、阿多平太郎宣澄ト名乗也、是も平家謀反□□□御追討之^(二行不明) 忠久公^(二行不明)

□□

是御家

一鯨嶋城

古へ此城ヲ持初タル人ハ駿河国之住人鯨嶋四郎□□

□□頼朝公之恩免建久年中合下向薩州□□

族姓ハ伊豆国狩野□□家光か子也、駿河□□成、仍而城之名を鯨嶋ト云、其後阿多之領主太主貴久公之御代ニハ阿多飛彈經久守之、町田家之庶流也、

一伊作城

伊作

此城は御家三代目之太守修理亮久經公之御二男嶋津三郎左衛門尉忠長為伊作之地頭□□旧記ニ有之、上代伊作之領主□平次郎平良道与云□なり、肥後之国菊池四郎經遠ハ良道か聳也、仍□□地頭ヲ經遠ニ讓渡シ、自夫菊池次郎□□有り、然ニ和田八郎藤原之親純と云者後女□□与成、自是又伊作ヲ親純ニ讓渡シ、代々伊作□□作と云ハ是也、伊作之内和田ト名主居□□

一南郷

此城之持初ハ將軍 頼朝公之御代々薩州□□阿多平四郎四郎時清入□□云人有□□^{(道(西と))}

□□揚房實辨永吉之城長祿□□城

U

U

U

L

U

L

22

此城之持初ハ伊集院三郎紀□成と云人也、元久□

御代此□裔伊集院四郎□□入道迎西□守□
(男)

代目太守 大隅守忠時公之七子常子太夫

郎忠經の末子侍從房□忠之息□
院

之領主と成て代々守城也 御家伊集院と

薩州

此城之持初八大蔵之政房と云人宝亀年中

来城主と成て鍋ヶ城ヲ

郎政宗と云人家久之簀養子と成
市来「

今之市来は是より相続す、号□

11

市來之内大蔵□支配之城也、建武

市来

一
串
木
野
城

此城之持初は後平氏之流串木野

古へ御家川上家之居城と也、貴久公之御

一隈之城

此城之持初八後平氏之流薩摩太郎忠

〔友〕

用久居城□ 建久九年鎌倉御触狀薩摩

州家山城守忠朝此城二節御居城也

一平佐城

上代ハ後平氏薩摩家之居城也、其後守護元久

代□総州家嶋津判官伊久公之御居城「

一上野城

薩州

古へ此城ノ持主ハ串木野三郎忠道之舎弟上野四郎忠
(云人也)

頼と
☐
☐
☐

一 永利城

薩州

古此城之持初八永利氏之人也、族姓不知、守護道鑑

公之御代ニ、永利中務丞兼元属テ、御家於所々抽軍
忠□□□□、此時渋谷家囲此城合戦有之、

一車内城

□□

谷川城共云、又国見か城とも云、此持初ハ

云、□川同家 守鑑公之御代東郷藏人□□

□□令下向といへとも古領主□一国司不随、渋谷依

漸々と手に入、自夫渋谷氏之居城と成て

子孫此

□□城主也、□□曆應五年□□

一碓山城

薩州

上代後平氏之流薩摩家支配之城也、其後御家総州家
之御居城也、應安之比島津判官師久公之御居城也、

氏久公御代曆應二年六月廿日、薩州兩方之凶徒鯨嶋

彦次郎家藤・谷山五郎入道隆信等之御敵押寄此城合

戦有之、此時権執印三郎次郎俊正籠居城中ニ合戦追

拂、元夫凶徒捨此城楯篋入来院内測之城也、

一清敷城

薩州入来院

上古ハ喜色の城ト云也、古此城之持初ハ入来院三郎

太夫藤^(原)□頼忠ト云人也、長和年中新田宮へ入来院司

水田寄進事旧記ニ有之、其後寛治寛□之時代當テ、
関東渋谷殿下向有り、為入来院領主守此城入来院五
郎坊定心ト云□なり、從是入来家代々相統す、

一樋脇城

薩州入来院内

代々入来家支配之城也、

一芋瀬城

薩州高城ノ城ヲ云

此城之取初ハ伴家之苗裔武光兵衛尉ト云、頼朝將軍
之以前ハ此城ヲ守居たる人也、其後関東渋谷殿下向
有て為高城郡司、夫ハ代々此城を守

一□□城

□□

此城も高城家支配□□

一野田城

山門院之内

此城之持初ハ後平氏之流平次郎太夫胤国と云人也、

此子孫山門院郡司秀忠ハ、文治五年於関東 頼朝將

軍元服して御烏帽子并御腰物拝領ス、族姓ハ千^(家)□家

之庶流也、忠久公初而薩州御下向之時も、御船山門

院ニ着て野田御居住被成、此時山門左衛門秀忠當地

頭ニ而此城ヲ守り居タル人也、

一本牟禮城

山門之内

忠久公此城ニ御居住とも云、其後道鑑公之御居城トナル、

一莫祢城

薩州

上古城主ハ不詳、寛四年十二月四日後平氏之庶流神崎太郎成兼ト云人、鎌倉殿ヲ拜領ニ而令下向、阿久根之城主と成ル、是ハ世々此職ヲ守なり、

一杉城

薩州和泉城云

上代此城之持初ハ、伴肝付薩摩守兼俊之舍弟太夫行俊ト云人城之主と成、頼朝將軍之御代行俊之苗裔和泉太夫兼保、蒙悉禿和泉新庄之郡司職ニ補せらる、是より世々守此城也、其後守護忠宗公之御二男三郎兵衛尉忠代此城主と成て守之、此御子孫松房丸・乙房丸御兄弟、元久公之御代薩州川邊之合戦打死也、從是御家和泉断絶す、其後守護 久豊公之御二男薩摩守用久和泉之城主成も、夫ハ守此城也義虎公之御先祖也、貞久公之御代和泉二代嶋津左衛門兵衛尉忠直守之也、

一知色城

薩州家□

古此城茂古和泉之庶子知色氏守之、文和年中嶋津判官師久公囲此城御合戦有之、此時之城主ハ知色庄三郎入道行寛ト云者也、後師久公此城へ御居住

一井口城

古□

古和泉之庶子井口氏守之、

一大口城

□□

上古此城之持初ハ薩摩四郎元衡ト申而、平家基卿之御孫保元年中ニ薩摩国牛屎院ニ下向而守此城也、守護道鑑公之御代城主牛屎左近將監高元、其比宮方□□一揆之張本成故、背御家時之弓を□□此城守ルトいへとも、永祿之比ハ肥州求磨之相良此城ヲ押領して□□守之、然ニ龍伯公之御代御合戦有之□□之凶賊ヲ形部太輔ヲ大口之地頭と成し、令□大口城、

一池部城

薩州田布□□

古此城は二階堂氏守之、二階堂ハ阿多高橋之地頭□□□文永・正應之比鎌倉□□家之御朱印を以、二階堂隠岐左衛門入道行存ヲ薩州ニ被召下、自是代々

高橋ニ居住す、是ハ異國警固之ため薩州ニ被下召た

る人也、守護忠宗公之御□□内裏大番之御□□池部

入道ト有之、

一 羽月城

□□

古此城之持主□□同家之人也、忠宗公御代城主

羽月右衛門入道□兵衛入道ト旧記ニ有、道鑑公之

御代羽月落城□付、其時之城主ハ羽月太郎元鎮ト

有、

一 山野城

右同

此城之持初ハ牛屎家之庶子山野氏守之、守護総州家

貞久公之御代城主山野孫次郎ト旧記ニ有之、

一 郡山城

右同

此城之持初ハ滿家左近將監資宗□□隅州加治木□

八郎親□か庶子也、資宗鎌倉軍家御感狀□□補

滿家之郡司、東俣・小山田・比志嶋・川田・□□依

(西侵)

親平ノ讓知行ス、自是郡山之城主□加治木親平ノ孫

□三郎良平ヲ居らる、道鑑公之御代郡山弥三郎良

平ト云者守城也、

一 比志嶋城

薩州滿家院

□法□榮辨ト云人比志嶋之領主也、此人ハ志田三郎

□□□□之苗裔村上三郎左衛門尉信州□□守護人

也、時ニ為□□身頼 忠久公令下向薩州、忠久公

憐之□□左衛門滿家院比志嶋、□時滿家郡司長平か

(其)

女を以為妻產男子、榮辨是也、其後村上氏蒙赦免信

州ニ帰□□男□□留テ當国比志嶋・川田・西俣

是也、守護忠宗公之御代ハ滿家五郎義祐ト云人な

り、

一 川田城

□□之内

右此城主ハ比志嶋家之庶子□□守之、□□□□公之

御代川田左衛門太郎□資清守城、

一 鹿籠城

□□

此城之持初ハ鹿籠六郎時純ト云者也、頼朝將軍家

□□此城ヲ守、中古ニ者御家川上家之人守之也、古

城主時□族姓ハ藤氏之人也、純友之末流也、

一 ミかむりか城

□□

入来院之中、旧記ニ洲上城ト有之、守護貞久公之

御代曆應年中於此城御合戰有之、委□□

一 虎居城

此城之持初ハ大前氏之人也、八幡太郎義家□□□
 祁答院郡司大前彦太郎道秀守城也、其後□□□□□
 年ニ関東之渋谷殿、鎌倉殿之御朱印ヲ以令下向薩州
 祁答院之地頭ニ被居ル、此人ヲ吉岡三郎□□□□□
 渋谷之城と成て重直ヲ十二代相統シテ渋谷□□□□□
 祁答院家滅亡ス、其跡嶋津左衛門□歲久ニ賜り居城
 トせり、其時迄ハ此城之名ヲ下城と云也、其後北郷
 □□領之時ニ宮之城と名付ラル、今ハ村之名ト成て
 虎居名ト云也、

一 長岡城

上代大前氏支配之城也、其後渋谷蘭甫守此城ト云、

一 山崎城

上代大前家支配、其後渋谷祁答院家之□□□後右馬

□重直守城□□

一 蘭牟田城

祁答院蘭牟田之要害也、大前氏支配之城也、其後□

祁答院家之庶子蘭牟田河内権頭重元此城□□、

一 大村城

祁答院大村之要害也、大前氏支配之城也、其□長谷
 祁答院家之庶子大村又次郎諸重ト云者之城也、其子
 渋谷駿河守重知国一揆之張本たる□□□、元久公御
 代大村御退治有て、其跡ハ本田氏御□□

一 靄田城

此城之持初は関東渋谷大谷四郎重茂、寶治三年鎌倉
 殿御朱印を以令下向、薩州為靄田城主、自夫□□此
 城ヲ守る、靄田氏は奉村 元久公不忠勤之人也、仍
 嶋津判官伊久□も国一揆之凶徒□□原車□□て、
 城ハ渋谷家御内儀有て靄靄田城受難儀之間、氏久公
 率諸軍彼境御出陣有て挑合戦、敵強クテ無御勝利
 漸々と陣を開キ御退候處、敵追掛候處返シ合御合戦
 有て、山を引□御帰陣也、其後應永八年ニ又総州ヲ
 始渋谷一家囲此城靄田及難儀之間、元久公御出陣
 有て□靄田彼所神崎ト云所ヲ 元久公之御本陣□総
 州方之御陣ハ萩平ト云山也、自夫互ニ敵味方大合戦

有り、双方共手負討死其数ヲしらす、□ハ総州方打負和談二成、

一松尾城

日州志布志之要害なり

上代此城ノ持ハ由来不詳、頼朝公ノ御代救仁院ニ平八盛直ト云人有リ、此人松尾城ヲ守歟、是ハ平家方謀反之張本ト旧記ニ有之、其後 氏久公御代新納越後守實久居城也、

一内城

右同断之要害なり

一都城

日州庄内之要害なり

此城ノ持初ハ忠宗公之末与七郎左衛門資忠以来代々北郷家守之也、此以前正安比ニハ肥州求广ノ相良家ハ此城ヲ押領ストあり、

一野々美谷城

一志和池城庄内

一飯野城

日州飯野要害

上代此城ノ持初ハ真幸院ノ総領主草部次郎年貞ト云人守此城也、此人ハ 頼朝公ハ已前ノ城主也、其後真幸院ハ北原家ノ知行と成テ近代迄地頭□也、中古ニハ惟新公御居城也、

一德満城

日州

上代ニハ草部氏支配之要害也、永享二年庚戌十一月一日惣州家ノ裔嶋津犬太郎殿於此城為 守護忠国公ノ御生害御歳、

一長野城

薩州祁答院中

此城上代大前家支配ノ要害也、道鑑公之御代国一揆の凶徒渋谷彦次郎重春・車内三郎・西岡弥四郎等楯籠此城奉敵守護方、仍而 道鑑公催諸卒围此城御合戦有之、其後永録年中渋谷ノ凶徒等入籠テ此城奉仇 太守、故惟新公為自将围ノ御合戦有トいへども、強敵なれば無御勝利御退出也、

一日置城

薩州

此城持主ハ日置彦太郎弘純ト云者也、建長ノ比ニハ領主之、頼朝公ノ御代小野太郎家綱ト云者御朱印を以薩摩国日置庄地頭職ヲ賜下向、此人ハ弘綱ノ流ニ而ハなし、大江田郷田家元祖也、日置庄 忠久公ハ山田弥九郎ニ被下と旧記ニ有リ、天文二癸巳十月二十四日 日新公ハ城主山田弥九郎ヲ以御打取也、

一給黎城

薩州

此城ノ初ハ後平氏別府谷山同家之人守之也、自夫御家三代之守護 久經公之御舍弟常陸介忠經之嫡男給黎彦三郎宗長此城ヲ守、其後長祿三年蒲生形部少輔久清、此後凶徒蒲生之城ヲ落来て、給黎守此城也、忠昌公之御代賜旧領□入蒲生城也、

一峯城

薩州高江ノ中

此城ハ始 紀ノ太夫正信か孫子高江三郎太夫正員ト云者守之也、其後 嶋津判官師久公之御城と成、此時渋谷四ヶ所之凶徒蜂起し而、應安七^{甲寅}年清數彈正少弼重門大將ニ籠城ニ取掛合戦有之、敵味方ノ手負打死其數ヲ不知、

一萩峯城

隅州帖佐ノ内

此城 氏久公ノ御代畠山禮部ノ家老野元藤司ト云者此城ニ楯籠ル、守護方より囲之御合戦有之、

一穆佐城

日州

上代何某持初タルハ由緒不知、將軍尊氏公之御代畠山兵部太夫此城ニ楯籠、此時菊池肥後守武元率八

千餘騎囲城、畠山相戦無勝利落居、又永祿年中將軍義教卿ム穆佐院一所ヲ大福田寶幢寺ヘ御寄進なり、旧記ニ有之、其後 守護 元久公之御舍弟修理允久豊公穆佐之城代としテ御居住也、此御合戦□□大將嶋津六郎□□資久大隅助三郎忠国ナリ、

一加瀬田

大隅国古肝付家支配也

守護道鑑公御代、建武三年正月六日ハ六月十日迄囲此城ヲ御合戦有之、敵方ハ肝付八郎兼重なり、

一三俣城

日州

中古何某持初タルカ不詳、道鑑公之御代二者肝付八郎兼重か居城也、

一松尾城

祁答院宮之城虎井名ノ中

上代大前氏城、其後渋谷家支配之城也、弘治年中隅州蒲生之城主越前守義清蒲生落居而退去テ、祁答院渋谷良重ヲ頼、仍良重扶助之此城ニ居住ストいへり、

一境田城

薩州祁答院求名ノ中

此城昔日境田氏守之也、族姓不詳、且又中古 龍伯公ノ御代惟新公御大將ニ而、率諸軍祁答院之中長野城ニ御掛大合戦有之、雖然城手堅持善敵方張り申候故、惟新公不得勝利御命奇々御助ニ而、漸々と御退陳なり、敵方ハ渋谷・菱刈・牛屎・北山・和泉・真幸ノ北原、肥後求广之相良等ノ凶徒等大勢、長野ニ楯籠申故如此也、其時此境田は長野□城□、境田ノ子孫今鹿兒嶋士境田八郎右衛門也、

一 鷹巢城

薩州鹿兒嶋郡宮之浦

古此城ハ矢上長谷場氏支配要害歟、矢上□弓壇といふは此城なるへし、

一 本城

隅州吉田之中

此城ハ吉田家之元祖初テ築之居城トス、

一 高隈城

□□

古此城ハ肝付家ノ人守之歟、氏久公之御代高隈ハ

田代肥後守双久之知行所ト旧記ニ有之、

一 牛祢城

右同

上代何某此城ヲ持初たるか由来不詳、道鑑公之御

代牛祢兵衛五郎道綱ト云者あり、是牛祢城□也、後ニ属于莫祢家ノ旗下、伊集院郡本ノ合戦軍忠抽被疵也、此姓不知、

一 内碕山城

下大隅之内

此城は 貞久公ノ御代下大隅ノ住人肥後彦太郎種頭舍弟彦三郎種久兄弟、宮方畠山修理亮直頭ニ属シ、此城ニ楯籠御合戦有之、肥後無利退散す、

一 松尾城

薩州河邊之中

久豊公之御代ニハ酒匂紀伊介ト云者此城ヲ守也、

一 咲^笑隈城

隅州宮内

此城昔 鎮西八郎為朝居城也、

一 小濱城

此城ハ 氏久公ノ御代小濱十郎守之、族姓不詳、

一 上井城

隅州国分之内

上代此城之持初ハ踏入五郎弘氏ト云者也、是ハ諏訪

家元祖、氏ハ三輪姓之人也、

一 高城

薩州河邊ノ中

上代河邊氏支配之畧也、太守貴久公之御代鎌田加

賀守守之、貴久公御責取加州降參、

一北村城

隅州蒲生之内

此城初ハ蒲生家三代目太夫清直之二男北村次郎清則
か城也、從夫比志島氏之庶子北村諸三郎清範か居城

トナル、

一松坂城

右同所之中

弘治年中 太守貴久公蒲生御陳之時此城責取、

一〇〇城

隅州帖佐

上代帖佐氏支配ノ畧也、天文年中肝付三郎五郎率多
勢此城ニ籠ル、御合戦有之、

一平山城

古ハ此城ノ持主ハ岩清水別當了清ノ孫平山左兵衛亮

武一か城也、

一平松城

右同所

上代帖佐ノ支配也、其後平氏之流大隅国ノ守護藤内兵
衛時信か苗裔平松美濃守武盛城也、種子島一族之人、

一伊作田城

薩州市来ノ内

古此城ハ上原氏之人守之、道鑑公ノ御代之城主ハ

伊作田兵部掾也、号上原、文和元年八月薩州之内□^徳
□等馳集り此城ニ、守護方ヘ仇ヲナス、

一尾崎城

薩州出水之内

元和三年六月十日、和泉之一族知色彦三郎入道行賢
此城ニ楯籠、守護方ニ仇ヲ報^{する}□□故、師久公率多
勢困此城大合戦有之也、同十二日行賢落城す、

一塊之城

薩州伊集院之内

此城ハ氏久公御代貞治四年乙巳、始て築此城ヲと旧
記有、

一加久藤城

日州真幸院

此城上代ハ紫部氏支配之要害也、其後北原家五代之
苗裔周防介範兼城也、

一馬関田城

□□支配之城也、其後北原周防介

範兼之弟馬関田又九郎守之也、

文化十三年末秋

十 国分・清水郷役所資料

(一) 日帳 国分賦所^{こくぶんしつ}

国分市立郷土館蔵の史料である。

慶応二年（一八六六）九月朔日から同二十九日までの国分賦所の日帳で、賦所の役職と行政について書かれており、江戸末期の役所の実情を知る史料として取り上げた。

(二) 月番頭書横折帳

国分市立図書館蔵の史料である。

慶応二年（一八六六）十二月、月番頭の山内甚右衛門の覚書で、当時の御飯屋の役人の仕事の一端をうかがい知ることができる。

(三) 国分諸在萬志らべ帳

国分市中央二丁目 秋山房枝氏蔵

この史料は、郡見廻役の秋山庄右衛門が嘉永五年（一八五二）命によって、国分郷内諸村の田畠別高、郷士高、百姓請取高、浦高を調査し、郷士年寄衆中へ提出し

たものである。

(四) 国分新道新田縄引帳

東京大学史料編纂所蔵

天保八年（一八三七）元禄国絵図以後変替の地面の絵図改め直しの幕府の命をうけた藩記録所の指示を受けて、桑原郡国分小濱村、野久美田村・真孝村新道、住吉村・真孝村新田、嚙嚙郡国分下井村・小村新田の見分けを行い、縄引を実施、後年のために、地元役人が署名捺印して提出したものの写しである。

(五) 隅州清水惣廻並麓小路縄引帳

国分市立図書館所蔵

絵図作製のため、地元役人衆が清水惣廻り並通道、麓小路を見分し、老間六尺三寸の縄曳を行い、帳面作成の上、元禄十一年（一六九八）十二月絵図検者衆へ差出したものの写しである。

(表紙)

慶応二年

上京

日帳 国府賦所

寅九月朔日

安楽伊右衛門

矢野四郎兵衛

林市郎左衛門

服部休作

山内惣兵衛

服部喜左衛門

山内甚右衛門

山内甚五郎

慶応二年寅九月朔日 晴天

一安 伊右衛門昨日より当番

市来惣右衛門

一林 市郎左エ門 出席

前原伸之丞

一山 惣兵衛 下井村詰

安楽鉄兵衛

一山 甚五郎 鹿府詰

一服 休作 枿方

一服 喜左衛門

先達而より
小村詰

一町夫三人

内壹人 中間

貳人 弁当様

右者明二日御地頭様御子息壯之介様并御用達衆踊江乘馬ニ而差越筈ニ付可レ迎明朝正六ツ時拙者宅江罷出届被成候様可申渡旨唐仁町江年行司申渡候

寅九月十日曇

一安 伊右衛門

市来惣右衛門

一服 喜左エ門 出席

安楽鉄兵衛

一服 休作 枿方
上小川詰

一山 甚右衛門 取納方

一山 甚五郎 鹿府詰

九月十一日 晴天

一安 伊右衛門

江口庄太郎

一服 喜左エ門 出席

前原伸之丞

一山 惣兵衛 先達而より
取納方

安楽鉄兵衛

一山 甚右衛門 右同

一山 甚五郎 鹿府詰

寅九月十二日 曇

一安 伊右衛門

江口庄太郎

一服 喜左衛門 寺社方

前原仲之丞

一山 甚五郎 昨日同断

安樂鉄兵衛

一山 惣兵衛 取納方

一山 甚右衛門 右同

遺言書

私事病氣二有之折角養生仕候江共今躰二而ハ壯氣二仕

儀無定策候若相果申と男子無御座候二付御見合を以後養

子願御申間敷候 以上

九月十三日

松元傳七

松元傳衛殿

松元十藏殿

右松元傳七事病氣二而候処養生不相叶昨十四日相果申候

遺言書之通男子無御座尤親類之内後養子与相成者無御座

二付後養子見立申迄之間明村二而被召置被下候様御申奉

成候私共親類之衆次書如斯御座候 以上

子 九月十五日

松元十藏

松元傳衛

岩切新太郎殿

吉元七郎殿

右與中頭書留之通

私共親類

□□書

松元傳七

右者当高帳御改以後相果申候儀別条無御座来る高帳取除

被下様御奉申上候 以上

子 九月九日

松元十藏

△御用達志方

右者明十四日御地頭様其外踊江御越之筈二付銘々無間違

様可被下濟旨郡見廻を以て申渡候

一、鎗持忝人

一、中間忝人

一、長柄忝人

右本町年行司殿江申渡候

寅九月十四日 雨天

一安 伊右衛門

一山 甚五郎 昨日婦郷
出席

松下庄八

前原仲之丞

安楽鉄兵衛

寅九月十五日 晴天

一安 伊右衛門

一山 惣兵衛 出席

一服 喜左衛門 右同

一林 市郎左衛門 右同

一山 甚右衛門 右同

新橋傳之助

前原仲之丞

安楽鉄兵衛

今日御地頭様其外踊江□□御成候五ツ時

御出立

寅九月十六日 雨天

一安 伊右衛門

一山 甚五郎 出席

新橋傳之助

前原仲之丞

安楽鉄兵衛

寅九月十七日 曇天

一安 伊右衛門

一服 喜左衛門 出席

一山 甚右衛門 右同

一山 甚五郎

一刻出席
今晚鹿府行

前原直左衛門

前原仲之丞

安楽鉄兵衛

国府

当春於野作御買入相成候茶種之内幼木式拾九俵之株送状
不相届何様之訳ニ而相滞候哉理介可申出旨細々仰渡様承
知仕相糺申候処右茶種差廻候船頭より下町駄賃取之善太
郎と申者江渡置申候ニ付右之船頭善太郎江引合差出候様

取計置候段浜之市年行司より申出候間此段後届申上候

寅

九月十七日

以上

暖

安楽傳右衛門

国府

(綿?)

先度土炮製茶など御渡相成居候得共木津布茶包之儀其節

御渡に不相成ニ付此節御渡候可相成候間高成方として参

上可仕旨爰元用達衆より被仰渡趣承知仕別冊通帳□参仕

候間御渡被下度此段申上候 以上

寅

九月十七日

與頭

有馬傳太郎

暖

安楽傳右衛門

銘茶用係

御見聞役衆中

一、御地頭様御事十四十五日踊江被撻御成候処今曉八ツ

時比御飛脚至来候一儀他家江無嫁居候御妹御病氣重成候

段申来飛脚兩人之内一人番所滞在一人ハ踊之以外ニ差越

候処九ツ時分御両者直々御踊府之賦ニ而海陸之手当相成

案内志人相付

候処七ツ時分御養生無御叶之旨又々申来ニ付御地頭様御

親子并御用達衆茂俄ニ御帰村ニ付津畑迄荷物付届人馬茶

郡見廻方ニ而ハ間逢兼候 以上

安楽伴左衛門

病氣 山口休太夫

子

九月十九日

右節句御禮儀名書半切調

但 御不塩梅ニ付名書迄ニ而相済候

寅九月十九日

晴天

一安 伊右衛門

江口庄太郎

満田吉右衛門

安楽鉄兵衛

今日庄太郎 伊勢宮御祭方

寅九月廿日 晴天

一安 伊右衛門

江口庄太郎

一服 休太夫 出席

一山 甚五郎 鹿府趣

一山 惣兵衛 茶取納方

一山 甚右衛門 西右同

一服 休作 柙方

前原仲之丞
安樂鉄兵衛

寅九月廿一日 晴天

一安 伊右衛門

松下庄八

一山 惣兵衛 昨日同断

前原仲之丞

一服 休作 右同

安樂鉄兵衛

一山 甚右衛門 右同

一山 甚五郎 右同

一林 市郎左衛門 普請方後
小村行

一服 喜左衛門 寺社方

寅九月廿二日 曇

一安 伊右衛門

松下庄八

一山 惣兵衛 出席

前原仲之丞

一林 市郎左衛門 右同

安樂鉄兵衛

一山 甚五郎 鹿府詰

一山 甚右衛門 取納方

一服 休作 柙方

一服 喜左衛門 寺社方

寅九月廿三日 晴天

一安 伊右衛門

新橋傳之助

前原仲之丞

安樂鉄兵衛

口上覚

国府

当年五拾毫才 禪宗

荒田与左衛門 下女

もと

右者私下女に而候処渡世不如意者二有之去ル未三月外二
列合も無之𦵏人都市之城表江暫賃取稼方として罷越度旨申
出ニ付早目ニ可罷帰旨申付兼居候処三拾日程も打過候
間々不罷帰候付迎兼す候得ハ居先相知不申
病氣ヲ以宿方仕候得共行先キ相知不申候処付欠落之御披
露不申者二不 (以下紙なし)

国府

御唼衆中

右申出趣承届別条無御座候間奉願通被仰被下候様被傳
上可被下儀奉頼候

子

九月廿三日

唼

安楽傳右衛門

右同

服部休太夫

御用達

新納辰輔殿

寅九月廿四日 雨天

一安 伊右衛門

新橋傳助

安楽鉄兵衛

満田吉右衛門

前原仲之丞

寺社方楮伐

岩切新太郎殿

吉元七郎左衛門殿

與中次書每之通與頭同断

子

九月五日

與頭助

有馬傳太郎

荒田與平次

国府

御唼衆中

右乃返事出様承届別条無御座候間奉願通被仰被下候様

御傳上可被下儀奉頼候 以上

子

九月廿六日

唼

安楽傳右衛門

林市郎左衛門

御用達

新納良輔殿

寅九月廿五日

松元傳藏

一安 伊右衛門

江口庄太郎

一服 休太夫

出席

満田吉右衛門

一服 喜左衛門

右同役
寺社方

安楽鉄兵衛

一林 市郎左衛門

右同
普請方

一服 休作

右同
牛馬方

一山 甚五郎

鹿府詰

一山 甚右衛門

暖助方

一山 惣兵衛

右同

前原仲之丞

昨日同断

国府

上荷船壹艘

右者神瀬御普請方石槽御用船二而下波戸内江繋置処去ル

六月之夜乃流失行衛不相知付浦々相糺何分可申出旨被仰

渡様承知仕相糺申候処似寄之船流寄不申候段申出候間此

段御届申上候 以上

子
九月廿五日

暖

安楽傳右衛門

神瀬御普請方

下津畑御出張

去ル六日夜其先神川村之者兩人漁□夕小橋舟江兩人乗組

ニ而差越候処時化揚り不罷帰ニ付溺死之類と被祭候間相

糺御報可申上旨壹條書を以て御問合相違糺方申渡候も似

寄之儀無御座候間此段申達候 以上

子
九月廿九日

暖

安楽傳右衛門

大根占

御暖衆中

寅九月廿六日 曇

一安 伊右衛門

江口庄太郎

一林 市郎左衛門

満田吉右衛門

安楽鉄兵衛

前原仲之丞

寺社方椿伐方

十 国分・清水郷役所資料

寅九月廿七日 晴天

一安 伊右衛門

前原直左衛門

候 以上

子
九月廿七日

町浦役

鎌田藤左衛門

満田吉右衛門

安楽伊右衛門

安楽鉄兵衛

前原仲之丞

御船手

寺社方椿伐方

留此下二入

未札御改者

国府

男女貳千貳拾三人

四ヶ浦

寅九月廿八日 晴天

内貳百五拾人 死人

一安 伊右衛門

前原直左衛門

外二 三拾七人 出人

一山 甚五郎 昨日帰郷
出席

満田吉右衛門

三百人 生子

安楽鉄兵衛

三拾六人 入人

現人数貳千七拾七人

国府

内千百六拾三人 男

一摘人御取締之事

九百拾四人 女

一椿木御取締并雜売椿賣御取締之事

一無證文者御取締之事

右者御用見合相成未札改者二基キ人数出入致差引届可申

右者取締仕月々御届可申出者被仰渡置趣様承知仕爰元

相糺申候処三ヶ条共ニ不審ノ廉無御座候間此段御届申
上候 以上

子

九月廿八日

横目 前原仲太夫

噯 安楽伊右衛門

日州表椿木

御取締横目

伊地知休蔵殿

寅九月廿九日 晴天

一安 伊右衛門

松下庄八

一服 喜左衛門

出席

満田吉右衛門

一山 甚五郎

右同

前原仲之丞

一山 惣兵衛

取納方

安楽鉄兵衛

一服 休作

枡方

一山 甚右衛門

真孝御分改

一分六百文

但

右同給地米壹石分 右同断

一分五百文

但

右同雜穀類壹石分 右同断

右者当夏以来運賃分など不相應之賃を可取成と聞得別而不
可然法右通之儀御用見合相成候間御内隅々迄聞合致糺方
相違之有無可申出旨承知仕相糺申候處右之通(以下破損のため不明)

此段申上候 以上

子

九月廿九日

横目 前原

噯 安楽

国府表
御締方 横目

山内一介殿

一分八百四拾弍文

但

煙草壹駄 宮内より浜之市迄道法の

七合程

一分壹貫八百文

但

焼酎三駄^{マア} 駄ニ付六百文寸道法同断

一分^但 疋貫六拾四文

煙草四繩負^但 疋駄本町より小村迄道法疋里程

一分^但 八百文

煙草三繩負^但 右同断

一分^但 五百六拾文

運賃分^但 疋人分小村并浜之市浜村より

鹿兒島上下津畑迄

一分^但 八百四拾式文

右^但 疋人分并差出ホ□□□之者

同断

右之通取調可差出旨仰渡趣委細承知仕候依之相調申候処

如斯御座候間此段御届被申上度奉致候

并指

海老原彦兵衛

寅九月

国府

御町浦役人衆中

(表紙)

慶應二年寅十二月朔日

月番頭書横折帳

山内甚右衛門

寅十二月朔日晴天

一今日林市郎左衛門殿^ハ當番相究候、出席服部休太夫殿

・服部喜左衛門殿・山内甚五郎殿・安樂鉄兵衛殿・前

原仲之丞殿・前原直左衛門殿、

二日雨天

一四ツ時^ハ役所出席、長兵衛殿・伊右衛門殿・甚五郎

殿、出役鉄兵衛殿・仲之丞殿、出外惣右衛門殿、

三日晴

一四ツ時^ハ役所出席、長兵衛殿・市郎左衛門殿・伊右衛門殿・鉄兵衛殿・仲之丞殿・惣右衛門殿

四日曇晴

一四ツ時^ハ役所出席、林氏・山内甚氏、後射納ニ付弓場詰長兵衛殿・休太夫殿・喜左衛門殿・市郎左衛門殿・甚五郎殿、

五日晴風

一四ツ時^ハ役所出席、伊右衛門殿・甚五郎殿・休太夫殿・鉄兵衛殿・仲之丞殿・傳之助殿、

一清水・曾於郡^ハ用達衆江被差出候書付数通、用達衆御帰府之節御取落ニ相成、差送候様鯨嶋助右衛門方江被申越、今日差送呉候様同人^ハ被申出候ニ付、取次毛利氏江宛宿次^ハ仕出ス

六日晴

一四ツ時^ハ役所出席、伊右衛門殿・鉄兵衛殿・仲之丞殿・庄太郎殿、

一下井蔵大豆取納ニ付、出役林市郎左衛門殿、

一真孝蔵・出物蔵迄取納ニ付、山元彦右衛門殿江相頼候、

一菱百三拾貫五百文

右者先比横川之太郎八江馬賣渡候者共、抑方衆^ハ御糺方之節、雜用取揃^ハとシテ大坪清左衛門江相渡ス、

七日晴

一四ツ時分役所出席、休太夫殿・鉄兵衛殿・吉右衛門殿・棕呂木改ニ付小村江出役、伊右衛門殿、

一宮内原御新田母溝入口式間落申候、洩所破損前日詰より出役臼井平右衛門殿相頼候、

一下井蔵取納ニ付林氏、

一起炭式表

右用達衆注文ニ付、小野小四郎方^ハ取入、今晚荒田傳八殿出府便^ハ差上候、

八日雨天

一今朝 御地頭様御帰リ之筈候ニ付、六ツ時々所所出席
いたし候得共、雨天故御見合ニ付罷帰候、出席休太夫
殿・長兵衛殿・伊右衛門殿、四ツ前々又役所江出席い
たし候処、雨天故御帰リ御取止メハニ相成候、出席ハ
今朝之通、

十二月九日晴

一今早朝 御地頭様并左一郎様御帰府、出席長兵衛殿・
休太夫殿・伊右衛門殿・市郎左衛門殿、四ツ時々又出
席休太夫殿・伊右衛門殿・鉄兵衛殿・吉右衛門殿、七
ツ後罷帰候、

十日晴

一今日ハ山内新右衛門殿内室被相果候ニ付、服部休太夫
殿江當番相頼候、
一出納蔵取納ニ付、山元彦左衛門殿江頼、
一下井蔵御米御囲ニ付、出役伊右衛門殿、

十一日半天

一四ツ時々役所出席、市郎左衛門殿・休作殿・喜左衛門

殿・休太夫殿・鉄兵衛殿・仲之丞殿、七ツ時分取引
候、

一今日ハ住吉村御取揚米代、住吉村々拝借ニ付、檢見河
野助左衛門殿・横目大塚助五郎殿・郡見廻久木田八右
衛門殿立入方ニ付相渡候、

十二日曇風

一四ツ時々役所出席、長兵衛殿・市郎左衛門殿・伊右衛
門殿・鉄兵衛殿・吉右衛門殿・傳之助殿、七ツ時取引
候、

十三日晴

一四ツ時々役所出席、伊右衛門殿・鉄兵衛殿・仲之丞
殿、座揚々龍昌寺見賦ニ付差越候、横目大塚助五郎殿
・出役安樂鉄兵衛殿・前原仲之丞殿、觸役新橋傳之助
殿、大工海老原三郎兵衛殿、郡見廻ハ差支ニ被相頼候
事、

十四日半天

一四ツ時々役所出席、伊右衛門殿・甚五郎殿・鉄兵衛殿
・仲之丞殿・惣右衛門殿、七ツ後取引取候事、

十五日晴

一 今日ハ服部喜左衛門殿江當番相頼候、

十六日電

一 四ツ時分役所出席、伊右衛門殿・休作殿・長兵衛殿・

甚五郎殿・市郎左衛門殿・鉄兵衛殿・仲之丞殿、

一 今日ハ服部休作殿江當番次渡候、

(表紙)

嘉永五年子六月

国分諸在萬志らべ帳

嘉永五年（一八五二）子六月に書かれた国分諸在萬志らべ帳（秋山氏所蔵）は、郡見廻の秋山庄右衛門が命令によって国分郷内諸村の田畠別高、郷士、百姓、浦高等に区分して集計した現在の農林統計に匹敵するもので、国分郷の郷士年寄衆中へ提出したものである。

巻末に次の様に書かれている。

右者諸在百姓請取高并人体現用夫 其外萬取志らべ申候様御ヶ条書を以被仰渡御承知仕相志らへ申候処右之通御

座候間帳面相濟差上申候 以上

子六月廿五日（嘉永五年） 郡見廻 秋山庄右衛門

国分 御郷士年寄衆中

高頭貳萬四千百貳拾壹石三斗九合六勺三才 諸村

五百六拾七石壹斗三升九合六勺貳才 抱地高

四千貳百七拾三石七斗四升貳合五才郷士自作并諸人作職

四百八拾七石三斗六升六合八勺七才 小村浦高

壹万八千七百九拾三石六升壹合九才 百姓請取

一、錢五千四拾五貫七百五拾三文

右去亥秋免成銀

一、同五百八貫三百六拾壹文

右 去亥夏免成銀

高頭三千七拾貳石貳斗八升貳合八勺壹才 上小川村

千拾八石壹斗貳升六合貳勺七才 郷士自作高并諸人作職

七拾壹石五斗壹升七合七勺 抱地高

享保七年寅御檢地竿次地

田方六拾五町四反拾六步

田高千七百九拾五石五斗七升八合六勺九才

但壹畦二付貳斗六升三合五勺五才

畠方貳拾六町壹反五畦廿貳步

畠高百八拾七石六升壹勺九才

但壹畦二付六升八合六勺五才

一、人体 五百八拾四人

一、現用夫 女三百六拾四人

男 貳百拾九人

女 百四拾五人

一、用夫壹人二付 高九石八合余

一、竈数 九拾六

一、錢五百四拾貫百五拾八文

右者野口村部下金之内村中当春煙草

肥本代トシテ拝借仕候尤当秋返上仕筈御座候

但利分之儀者年々本分ニ取入来候

一、同 百六拾壹貫八百拾九文

右壹行去亥秋免成銀

一、分八貫九百文

右壹行去亥夏免成銀

百姓請取

右 同

利五部

先年小村江油粕御囲所被仰立候節御納分

畠高百拾壹石六斗三升六合四勺六才

右同

一、同貳千貳百拾壹貫貳百四拾九文 内六拾壹貫百文

右壹行去ル酉年分去亥年迄内上納

但壹畦ニ付六升五合九勺八才

尤年々諸銀掛ハ榮勞御見分之上内上納被仰付置候残而

一、現用夫女 百五拾八人

貳千百五拾貫百四拾九文

男 九拾四人 女 六拾四人

去亥年煙草代

一、用夫壹人ニ付

一、分三千貫文位

高拾石九斗四升余

内千七百七拾五貫文

肥本代

一、竈數 六拾壹

残千貳百貳拾五貫文

作得

一、竈數 壹 中宿者

高頭千六拾三石八斗貳升九合九勺壹才

上井村

人体 六人 男 貳人 女 四人

特高七石九斗壹升四勺壹才

一、分百五拾貫文 利 五郎

九石三斗八升壹合貳勺五才

抱地高

貳拾六石八升六合四勺七才

諸人作職

右老新町村部下金之内牛馬代として去亥夏拝借仕壹ヶ年

享保十巳年御檢地竿次成

但利分之儀者毎々本分ニ取入来申候

田方三拾五町八反六畦拾貳分

一、家内三人 上村門 喜助

田高九百拾六石七斗貳升五合七勺三才

百姓請取

但壹畦ニ付貳斗四升五合三勺九才

男 壹人 女 貳人

畠方拾六町貳反四畝六歩

右者去ル末年宿元を出行衛相知不申候ニ付早速より親類與中共より尋方仕候得共当分迄茂尋附不申候

一、分三百拾五貫六百四拾八文

右者去亥秋免成銀

一、分三拾八貫拾八文

右者去亥夏免成銀

一、畠方壹反貳畦程 出来麦三斗六升

右者当子夏大山野麦地并出来高

去亥秋煙草代

一、錢七百五拾貫文

内四百八拾貫文

残而貳百七拾貫文

高頭千六拾四石七斗八升四合壹勺七才

内損高九石五斗七升五合

百貳拾九石三斗三升七合五勺

百六拾石六斗五升三合九勺六才

文化五辰年御見地竿次分

田方三拾五町八反四畦拾四步

田高六百六拾八石四斗六升三合五勺四才

但壹畦二付壹斗七升九合貳才

畠方貳拾九町七畦壹步

畠高百六石三斗貳升九合壹勺七才

但壹畦二付三升四合三勺七才

一、人体 三百貳拾三人

一、現用夫女 百九拾九人

男 百人 女 九拾九人

一、用夫一人二付 高七石七斗四升七合九勺ツ、

一、竈数 五拾七

一、同 貳ツ 中宿者

人体八人 男 五人 女 三人

文政十一子秋延米

一、真米三拾五石七斗五升

内貳拾八石四斗九升

但文政十二貫秋より去亥秋迄内上納仕候

残而 七石貳斗六升

但返上方当秋迄取延被置候

部下御取揚米代御囲錢

一、分貳百九拾貫八百四文

利五部

百姓請取

右同

内七拾八貫七百四八文

利五部

右老行村中部下り御困分之内牛馬買本代金として拝借仕

卷ヶ年二三両式步ヅッ年府上納仕等

但利分之儀者年々本分ニ取入来申候

式百拾老貫八百七拾貳文

利五部

右同断ニ付煙草肥本代として拝借仕当秋返上仕可申候

但利分之儀前条同断

差引残而百七拾六文

右老行有金ニ而地頭飯屋土蔵江格護仕置申候

一、分式百八拾三貫九百七拾文

右者去亥秋免成銀

一、同拾貳貫八百五拾八文

右者去亥夏免成銀

去亥秋煙草代

一、分三百六拾貫文

内式百拾老貫八百文

残而百四拾八貫貳百文

肥本代

作得

一、畠方四町五畦

出来麦 拾貳石老斗五升

右者当子夏大山野麦地并出来高

高頭千九百貳拾九石三斗八升七才

下井村

内損高拾五石四斗三升七合三勺貳才

八石老斗七合貳勺九才

抱地高

百七拾三石六斗四升老勺五才漸々御竿入諸人作職高

宝曆三年酉御檢成

田方六拾五町四反八畦廿五步

田高千六百三拾八石九斗三升五合老勺貳才

但老畦二付貳斗四升貳勺五才

百姓請取

畠方貳拾七町四反五畦拾老步

畠高百八石六斗九升七合五勺老才

右同

但老畦二付三升八勺五才

一、人体 八百七拾貳人

一、現用夫女 五百貳拾六人

男 貳百九拾四人

女 貳百三拾貳人

一、用夫老人二付 高五石九斗四升四合余

一、竈數 百貳拾貳

一、竈数 五 中宿者

但塩浜高迦レ

加こ屋敷余地

人体拾八人 男 八人 女 拾人

田方五町六畦八歩

一、分三百五拾四貫貳百六拾貳文

田高百六石四斗八升七合八勺貳才

百姓請取

右者去亥秋免成銀

但老畦ニ付貳斗壹合七勺九才

一、同七拾貫三拾七文

畠方拾六町五畦七歩

右者去亥夏免成銀

畠高六拾石貳斗四升九合六勺九才

右 同

一、畠方 老反六畦 出来麦 四斗八升

右老行去亥夏大山野麦地并出来高

去亥秋煙草代

一、現用夫女 拾七人

一、分千百貫文位

男 拾人 女 七人

内 六百五拾貫文

一、用夫老二人 付 高拾六石六斗七升三合余

残 四百五拾貫文

作得

一、竈数 六ツ

高七百貳拾四石五斗三合壹勺貳才

小村

一、竈数 六ツ 中宿者

高三石四斗三升貳合三勺三才

人体三拾五人 男 貳拾四人 女 拾七人

八石五斗六合貳勺五才

抱地高

先年小村江油粕御囲所被相立候節御納銀

享保九年辰大御支配

一、錢百四拾八貫五勺百七拾九文 内壹貫三百文

四百八拾七石三斗六升六合八勺七才

浦受取高

六拾老石九斗三升貳合四勺九才

諸人作職并

より榮勞

御見分之上内上納被仰付置候

残 百四拾七ノ貳百七拾九文

一、錢 七拾五貫文

右老行新町村部下金之内馬代として拝借仕当年より

老ケ年ニ金老兩貳步ツツ年之内上納仕筈御座候

但利之儀者年々本分ニ取入可申候

一、同百三拾三貫三百拾老入

右者去亥秋免成銀

一、分四貫九百四拾八文

右者去亥夏免成銀

去亥秋煙草代

一、同 貳拾四貫文

内拾貳貫文

残 拾貳貫文

去亥秋大根代

一、錢 貳拾貫文

内八貫文

残拾貳貫文

高頭千九百五拾四石貳升四合五才

六拾四石三斗八升四合三勺八才

三百七拾七石三斗老升九合五勺九才

諸人作職ハ

文政十一年御檢地

町浮免

田方六拾貳町九反八畦拾九步

田高千貳百八拾三石老斗三升六合七勺七才

但老畦ニ付老斗九升五合五勺七才

百姓請取

畠方三拾四町七反四畦廿八步

畠高貳百貳拾九石老斗五升三合三勺老才

右同

但老畦ニ付六升三合三勺老才

一、人体

高五百五拾九人

一、現用夫女三百三人

男 百六拾三人 女 百四拾人

一、用夫老入ニ付 高九石貳斗七升八合余

一、竈數八拾

福島村

抱地高

一、竈数 𧄞 中宿者

人体三人 男 𧄞人 女 貳人

文政十一子秋延米

一、真米百七石六斗貳升
内七拾五石七斗三升

右𧄞行文政十二巳秋より去亥秋迄内上納仕候

残高三拾𧄞石八斗九升 但返上方当秋迄差延被置候

一、残六百九拾四貫百九文

右𧄞行去亥秋免成銀

一、同百四貫四百六文

右𧄞行去亥夏免成銀

去亥秋煙草代

一、錢千四百五拾貫文位

内 九百貫文

残 五百五拾貫文

高頭八百八拾七石七斗貳升五合六勺貳才

百五拾八石五斗四升四合七勺八才

宝曆三酉年御檢地

肥本代
作得

松木村

諸人作職

田方貳拾三町六反四畦拾歩

田高五百七拾四石𧄞斗三升九合𧄞勺七才

但 𧄞畦二付貳斗三升三合𧄞勺貳才

畠方貳拾八町三反五畦拾𧄞歩

畠高百五拾五石四升𧄞合六勺七才

但 𧄞畦二付五升貳合四勺九才𧄞

一、人体貳百三拾五人

一、現用夫女 百三拾貳人

男 七拾七人 女 五拾五人

一、用夫𧄞人二付 高九石四斗七升余

一、竈数 四拾𧄞

文政十一子秋延米

真米七拾六石八斗八升

一、内六拾𧄞石八斗七升

右𧄞行文政十二丑秋より去亥秋迄内上納仕候

残而拾四石八斗𧄞升 但返上方当秋迄差延被置候

去亥秋煙草代

一、錢 九百五拾貫文

百姓請取

右 同

内 五百貫文

残而 四百五十拾貫文

肥本代
作 得

内損高 七石八斗壹升八合七勺五才

三拾四石壹斗九升三合七勺九才

抱 地

去亥秋大根代

六拾壹石九斗五升四合五勺壹才

諸人作職

一、錢 貳百五十拾貫文

文化五辰年御檢地竿次

内 百貫文

肥本代

田方三拾四町六畦拾八步

残而 百五十拾貫文

作 得

田高七百九石七斗壹升八合九勺貳才

百姓請取

部下御取揚米代御囲錢

但壹畦二付貳斗三勺八才

一、同 百拾壹貫貳拾六文

畠方貳拾貳町八畦廿步

内 九拾貫文

畠高百三拾九石貳斗八升壹合貳勺五才

右 同

右壹行村中牛馬買入本代分として拝借仕一ケ年二四

但壹畦二付六升五勺三才

両ツツ年府上納仕申候

一、人体 貳百六拾四人

貳拾壹貫貳拾六文

一、現用夫女 百五十拾七人

右壹行有金二而地頭假屋土蔵江格護仕置申候

男 九拾八人 女 五拾九人

一、錢 四百五貫八百八拾九文

一、用夫壹人二付 高八石六斗六升余

右壹行去亥秋免成銀

一、竈数 五拾五

一、同 三拾五貫百四拾壹文

一、同 壹ツ 中宿者

右壹行去亥夏免成銀

人体 貳人 男 壹人 女 壹人

高頭九百四拾五石壹斗四升八合四勺三才

野口村

文政十一子秋延米

一、 真米七拾八石三斗八升六合
内四拾八石六斗三升七合

右耆行文政十二丑秋より去亥秋迄内上納仕候

残而 式拾九石七斗四升九合 返上方当秋迄召延被

置候

部下御取揚米代御囲錢

一、 錢 千六百五拾九貫六百五拾八文

内 五百四拾貫百五拾八文

利五部

右耆行上小川村中当春煙草作職

肥用油粕代トシテ拝借仕当秋返上仕可申候

但 利分之儀者年々本分ニ取入申候

六百三拾貫文

右耆行村中煙草作職

肥用油粕代トシテ拝借仕当秋返上仕可申候

但 利分之儀者年々本分ニ取入来候

式百八拾壹貫貳百四拾八文

利五部

右耆行村中牛馬買入本代トシテ拝借仕一ケ年ニ

金拾貳両ツツ年府上納仕申候

但 利分之儀者年々本分ニ取入来申候

貳百八貫貳百四拾八文

利五部

右耆行住吉村牛馬買入代トシテ拝借仕当子秋よ

り辰秋迄五ケ年二年府上納仕可申候

但 利分之儀者年々本分ニ取入来申候

去亥秋煙草代

一、 錢 千百貫文

内 八百貫文

肥本代

残而 三百貫文

作得

一、 錢 三百六拾六貫八百拾文

右耆行去亥秋免成銀

一、 同 四拾壹貫五百九拾六文

右去亥夏免成銀

先年小村江油粕御囲所被建置候節御納銀

内 三拾貳百八拾五文

右耆行去ル申年より去亥年迄内上納仕候尤年々諸持

掛栄方御見分之上内上納被仰付置候

残而 六拾九百六十八拾壹文

高千貳百四拾五石四斗六升貳合四勺九才

府中村

内損高拾六石六斗壹合六勺

四拾七石七斗三升三合三勺三才

抱地

貳百五石壹升三合貳勺貳才

諸人作職

宝曆九卯年御檢地

田方三拾八町五反壹畦廿九步

田高八百拾六石四斗六升七合貳勺九才

但壹畦二付 貳斗三合四勺八才

百姓請取

畠方貳拾町八反貳畦壹步

畠高百七拾六石貳斗四升八合六勺五才

右同

但壹畦二付 八升壹合貳勺五才六

一、人体 貳百四拾九人

一、現用夫女 百三拾五人

男 八拾貳人

女 五拾三人

一、用夫壹人二付 高拾貳石六斗六合余

一、竈数 五拾七

先年小村江油粕御囲所被建置節御納候

一、錢 九貫六百九拾六文

内 壹貫七百三拾六文

右壹行去ル酉年より去亥秋迄内上納仕候尤年々諸持

掛榮勞御見分之上上納被仰付置候

残而 七貫九百五拾五文

一、錢 百九拾貫六百六拾貳文

右壹行去亥秋免成銀

一、錢 貳拾貳貫貳文

右壹行去亥夏免成銀

去亥秋煙草代

一、同九百八拾六貫文

内 六百貳拾五貫文

残而 三百六拾壹貫文

高頭千貳百八拾四石三斗六升八合七勺六才

内 五拾五石九斗九升六勺三才

四百九石六斗五合三才

文化八年御檢地

田方三拾四町三反八畦拾八步

田高六百八拾六石五斗九升七合四勺八才

肥本代

作得

向花(華)村

抱地

諸人作職

但尅畦二付 尅斗九升尅合六勺七才

畠方拾貳町五反八畦六歩

畠高百三拾貳石貳斗尅升五合六勺貳才

但尅畦二付 尅斗八勺八才

一、人体 貳百拾九人

一、現用夫女 百三拾四人

男 七拾五人

女 九拾九人

一、用夫尅人二付 高拾五石九斗尅升六合余

一、竈数 四拾四

一、竈数 三ツ 中宿者

人体 九人

男 五人

女 四人

去亥秋煙草代

一、錢 八百六拾貫文

内 四百八拾貫文

残而 三百八拾貫文

一、分 百四貫三百八拾尅文

右尅行去亥秋免成銀

一、同 四貫百七拾六文

右尅行去亥夏免成銀

一、藍葉 三貫目位

高千四百六拾五石三升四合五勺八才

内 四石尅斗七升七合八才

百七石八斗四升五合六勺三才

天保十一年御檢地

田方六拾四町貳畦六歩

田高千貳百七拾石貳升貳合貳勺九才

但尅畦二付 尅斗九升七合九勺七才

畠高七拾三石九斗八升九合五勺八才

畠方拾尅町四反尅歩

但尅畦二付 六斗貳升三勺五

一、人体 貳百貳拾五人

一、現用夫女 百貳拾八人

男 七拾人

女 五拾八人

一、用夫尅人二付 高拾九石三斗貳升八合五勺余

一、竈数 五拾尅

一、竈数 貳ツ

中宿者

新町村

抱地

諸人作職

百姓請取

右同

人 拾貳人 男 七人 女 五人

文政十一年子秋延米

一、真米四拾八石五斗四升

内拾三石六斗四升

右老行文政十二丑秋より去亥秋之内上納仕候

残而 三拾四石八斗九升 但返上方当秋迄召延被置候

部下御取揚米代御囲錢

一、錢 七百三拾四貫四百七拾貳人

内 三百貳拾八匁八百四拾八文

右老行村中牛馬買入本代金として拝借仕一ケ年二七

拾六貫九百文づつ当年より寅年迄五拾八貫百四拾八

文づつ寅年より先キ年府返納

百五拾貫文 利五部

右老行上井村馬買入代として拝借仕当年より一ケ年

ニ金五兩づつ年府上納仕筈候

但利分之儀者年々本分ニ取入来申候

七拾四貫文

右老行小村在馬買入代トシテ拝借仕当年より金老

兩貳歩づつ年府上納仕可申候

但利分之儀者年々本分ニ取入来申候

百八拾貫六百貳拾四文

右老行有金ニ而地頭假屋土藏江格護仕置申候

一、錢 百四拾三貫百六拾四文

右老行去秋免成銀

一、錢 三拾貳貫三百九拾三文

右老行去亥夏免成銀

去亥たばこ代

一、同 七百三拾五貫文

内 四百拾老貫五百文

残而 三百貳拾三貫五百文

一、同六拾貫五百七拾貳文

内 貳貫百文 酉年より亥年迄内上納仕候尤年請

持藏ニ出米以留御見分之上内上納上可仕候

内残而 五拾八貫四百七拾貳文

見次村

高頭千貳百五拾九石八斗貳升四合五勺九才

内損高七石式斗七升五合𧄢勺七才

𧄢石𧄢斗八升二合式勺九才

抱地

五拾式石四斗三升八合五勺五才

諸人作職

寛政八辰年御檢地

田方五拾八町四反三畝拾九步

田高千五拾六石式斗四升𧄢合式勺五才

但𧄢畦二付𧄢斗七升三合五勺式才𧄢

百姓請取

畠方式拾四町四反八畦式七步

畠高百四拾九石九斗六升式合五勺

但𧄢畦二付五升八合六勺三才九

一、人体 式百五拾五人

一、現用夫女百四拾七人

男 八拾式人

女 六拾五人

一、用夫𧄢人二付

高拾四石七斗𧄢升余

一、竈数 四拾九

一、竈数 四ツ 中宿者

人体 拾式人

男 七人

女 五人

一、錢三百六拾六貫三百式拾𧄢人

右𧄢行去亥秋免成銀

一、同六拾六貫四百拾八文

右去亥夏免成銀

去亥秋たばこ代

一、錢五百六拾貫文

内三百式拾貫文

殘而 式百四拾貫文

先年小村江油粕御囲所被相立

一、同五百拾九貫五百廿八文

内三拾四貫廿式文差順ニ而去酉年拂持被仰付三貫七百

文去酉年亥年三ヶ年内上納仕候

右𧄢行年々請持掛よ榮勞御見分之上被付候

殘而

四百八拾𧄢貫八百六文

肥本代

作得

滞納

内村

一、竈数 四拾三

中宿者

一、同 拾七

高頭千貳百拾八石五斗四升五合貳勺
内損高四拾七石六合七勺

抱地

人体 七拾三人
男 三拾六人

四拾貳石六斗九升壹合六勺七才

諸人作職

女 三拾七人

貳百五拾石九斗三升六合七勺九才

田方三拾九町四反三步

一、錢百四拾六貫七百八拾五文

百姓請取

右老行去亥秋免成銀

田高七百八拾七石四斗六合三勺貳才

但老畦二付貳斗壹升壹合八勺

一、同拾貫八百七文

畠方四拾町三反六畦拾歩

右壹行去亥夏免成銀

畠高百三拾八石四斗壹升四勺貳才

右同

一、藍葉 八貫目位

但 壹畦二付四升貳勺七才

一、菜種子 七石程

明和三酉年御檢地

一、畠五反三畦

一、人体 貳百拾貳人

出来麦 貳石六斗五升

一、現用夫女百三拾人

右大山野麦地

男 七拾三人

去亥秋たばこ代

女 五拾七人

一、錢五百六拾貫文

一、用夫老人二付

内三百六拾四貫文

高拾貳石六斗八升余

残而 貳百貫文

作得

肥本代

高頭千三百拾九石壹斗七升七合貳勺

内損高 五石五斗三合壹勺三才

貳石貳斗壹升九合八勺

四百四石貳斗壹合貳勺三才

田方四拾九町九反五步

田高八百三石壹斗壹升七合八才

壹畦二付壹斗五升四合五勺壹才

畠方貳拾町壹反四畦廿步

畠高百九石五斗八升九合壹勺壹才

壹畦二付 五升貳合貳勺壹才

一、人体 百四拾八人

一、現用夫女 九拾壹人

男 五拾四人

女 三拾七人

一、用夫壹人二付

高拾六石九斗余

一、竈数 三拾

内山田村

七

中宿者

人体 貳拾八人

男 拾五人

女 拾三人

一、分三拾四貫九百八拾四文

右壹行去亥秋免本銀

一、同四貫七百元

右壹行去亥夏免本銀

一、藍葉 八貫目位

一、畠六畦

出来麦 貳斗四升

右壹行大山野地并出来麦

去亥秋煙草代

一、分百貫文

内 五拾貫文

残 五拾貫文

先年小村江油粕御囲所被相立置候節滞納

一、分百七拾四貫八拾六文

肥本代
作得

七貫八百文

右老行去ル酉年より去亥年迄内上納仕候

四拾三貫八百八拾四文

右老行禿得ニ而引損被仰付置候

残而 百貳拾貳貫四百八文 不足

小田村

一、竈數 貳拾八

中宿者

高頭千三百八拾三石五斗五升壹合七勺五才

内四拾貳石七斗九升三合七勺四才

抱地

人跡 百拾五人
男 六拾八人
女 四拾七人

三拾貳石四斗三升七合四勺九才

寛政八辰年御檢地

田方六拾町八步

田高千百四拾九石七斗壹升壹合壹勺五才

百姓請取

一、分九貫六百文

但壹畦二付 壹斗八升壹合九勺五才

右同

右老行去亥夏免本銀

畠方四拾四町五反八步

畠高百六拾壹石六斗九合三勺七才

一、畠 壹反六畦

出来麦四斗八升

但壹畦二付 三升四合八勺七才

右老行大山野地并出来麦

一、人体 三百七拾五人

去亥秋煙草代

一、現用夫女 百九拾七人

一、分八百貫文

内 男 百拾九人

内 四百五拾貫文

肥本代

三百五拾貫文

作得

高 拾四石壹升余

野久美田村

一、竈数 貳拾六

高頭五百八拾九石六斗三升壹合貳勺五才

一、同 八 中宿者

内損高貳石五斗七升五合

人体 四拾貳人

三拾貳石貳斗四升五合八勺三斗

男 貳拾四人

拾石八斗九升七合九勺貳才

抱地高 諸人作職

女 拾八人

延享二丑年御檢地

一、分九貫八百文

田方貳拾五町壹反壹畦七步

右壹行去亥秋免本銀

田高五百貳石三斗八升五合四勺貳才

百姓請取

一、畠壹反貳畦

但壹畦二付 壹斗九升貳合五才

出来麦四斗八升

畠方拾貳町壹反三畦拾六步

右壹行大山野地并出来麦

畠高四拾四石壹斗貳合八才

右 同

去亥秋煙草代

但壹畦二付 三升四合八勺九才

一、分六百四拾貫文

一、人体 百六人

畠高百七拾七石六斗三升貳勺壹才

右 同

一、現用夫女 六拾八人

但壹畦二付 貳升八合四勺壹才

男 三拾九人

一、人体 三百四人

女 貳拾九人

現用夫女百七拾六人

一、用夫壹人二付

男 九拾六人

女 八拾人

一、用夫𡔷人ニ付

高六石四斗八升八合余

一、竈数 四拾𡔷

一、同 七

人体 三拾𡔷人

男 拾六人

女 拾五人

一、分五百三拾九貫三百八文

右𡔷行去亥秋免本銀

一、同拾四貫五百七拾貳文

右𡔷行去亥夏免本銀

去亥秋煙草代

一、同五百七拾貫文

内三百八拾貫文

残百九拾貫文

去亥秋大根代

一、分九百拾貳貫文

内四百五拾六貫文

残四百五拾六貫文

「浜之市御新田の部

四拾六石四斗七升𡔷合八勺七才

田方拾貳町六反九畦廿五歩

田高百四拾九石貳斗八升𡔷合貳勺五才

但𡔷畦ニ付 𡔷斗𡔷升貳合八勺六才」

「浜之市御新田二ヶ村之石高

田方四拾六町四反八畦拾八歩

高六百八拾𡔷石貳斗三升九合五勺八才

但𡔷畦ニ付 𡔷斗四升壹合七勺貳才」

(注) 右は眞孝村葉末之附箋であつて浜之市新田の総高を示すものである。

すものである。

住 吉 村

高頭九百四拾𡔷石六斗五升貳合九才

内村損高貳拾三石貳斗七升九勺四才

拾石六斗四升七合九勺六才

五百五拾三石三斗四升𡔷合六勺三才

諸人作職

抱村高

肥本代

作 得

眞 孝村

諸人作職

浜之市御新田

明和五年御檢地

田方拾三町六反五畦廿九步

田高百九拾八石五斗壹升八合七勺五才

但壹畦二付 壹斗三升九合五勺七才

畠方五拾七町三反壹畦廿九步

畠高百七拾九石壹斗四升三合七勺五才

但壹畦二付 三升壹勺八才

同三百五拾貳貫文

殘貳百八拾八貫文

小 浜 村

高頭九百四拾七石七斗八升七合貳勺九才

内損高九斗壹合四才

拾三石壹升三合五勺四才

享保十一年犬御支配

田方三拾九町九反五畦八步

田高七百六拾貳石三斗三升壹合貳勺五才

但壹畦二付 壹斗八升三合壹勺七才

畠高百七拾貳石四斗三升七合五勺

右 同

去亥秋煙草代

畠方四拾五町貳反貳畦九步

但壹畦二付 三升六合六勺壹才

一、人体 六百七人

一、現用夫女三百三拾八人

男 百八拾貳人

女 百五拾六人

一、用夫壹人二付

高五石壹斗三升六合壹勺貳才

一、竈数 百三

一、分四百四拾三貫百七拾八文

右行去亥秋免本銀

一、分貳拾貫三百四拾文

右行去亥夏免本銀

一、藍葉 拾貫目位

一、畠壹畦拾五步

出来麦 三石壹斗

右行大山野地并出来麦

一、分千貳百貫文

内九百貫文

残三百貫文

一、白炭 九百石

内拾七石七斗五升

残八百八拾貳石貳斗五升

代分八百八拾貫貳百四拾八文

内貳百貳拾貫文

残六百五拾七貫貳百四拾八文

高頭八百貳拾壹石五斗五升六合貳勺五才

内損高三石七合貳勺七才

貳石八斗七升九合壹勺七才

百九拾五石七斗五升三合壹勺貳才

寛保三亥年御檢地

田方貳拾八町九反七畦五步

田 拾六石四斗七升壹合八勺七才 諸人作職

田方 拾貳町六反九畝廿五步 濱之市御新田

田高 百四拾九石貳斗八升壹合貳勺五才

但、壹畦二付 壹斗壹升貳合八勺六才

上納分

田高 四百四拾五石貳斗九升三合七勺五才 百姓請取

但、壹畦二付 壹斗五升壹合三勺

薪代

畠方 六拾貳町七反四畦廿七步

畠高 百七拾七石六斗三升貳勺壹才

右 同

眞孝村

但、壹畦二付 貳升八合四勺壹才

一人 体 三百四人

一現用夫 百七拾六人

男 九拾六人

女 八拾人

諸人作職

一用夫 壹人二付

高 六石四斗八升八合余

百姓請取

一竈数 四拾壹

一同 七 中宿者

人体 三拾老人

男 拾六人

女 拾五人

一錢 五百三拾九貫三百八文

右老行 去亥秋免本銀

一同 拾四貫五百七拾貳文

右老行 去亥夏免本銀

去亥秋煙草代

一同 五百七拾貫文

同 三百八拾貫文

残 百九拾貫文

去亥秋大根代

一銀 九百拾貳貫文

同 四百五拾六貫文

残 四百五拾六貫文

(貼紙)

濱之市御新田二ヶ村之拳

田方 四拾六町四反八畦拾八步

高 六百八拾老石貳斗三升九合五勺八才

但 老畦二付 老斗四升老合七勺□才

高頭 九百四拾老石六斗五升貳合九才 住吉村

内、損高 貳拾三石貳斗七升九勺四才

拾石六斗四升七合九勺六才 抱地高

五百五拾三石三斗四升老合六勺三才 諸人作職

明和五年御檢地

田方 拾三町六反五畦廿九步

田高 百九拾八石五斗老升八合七勺五才 百姓請取

但 老畦二付 老斗三升九合五勺七才

畠方 五拾七町三反老畦廿九步

畠高 百七拾九石老斗四升三合七勺五才 右 同

但 老畦二付 三升老勺八才

(貼紙)

拾六石三斗八升三合三勺

田方 三拾三町七反八畦廿三步

田高 五百三拾六石九斗五升八合三勺三才

諸人作職

濱之市御新田

但 尅畦三付 尅斗五升貳合五勺六才

一人體 百六拾七人

現用夫女 九拾四人

男 四拾九人

女 四拾五人

一用夫 尅人二付

高 七石尅斗七合余

一竈数 貳拾貳

一同 拾尅

人體 四拾人

男 貳拾人

女 貳拾人

一錢 貳百八貫貳百四拾八文

右之内野口村部下り御取揚米代錢之内、牛馬買入代
トシテ拝借仕、当子秋ヨリ已秋迄五ヶ年限上納被仰
付置候、

但、利錢之儀者年々本錢ニ取入来申候、

一錢 百九拾八貫七百四文

右尅行、去亥秋免本銀

一同 三貫九百五拾六文

右尅行 去亥秋免本銀

去亥秋煙草代

一同 九拾貫文

内、四拾貫文

残 五拾貫文

去亥秋大根代

一残 八百貫文

内、四百八拾貫文

残 三百貳拾貫文

先年小村江油粕御囲所被召置候節御納錢

一同 千四拾五貫百四拾三文

内 貳百九拾貳貫八百五拾五文

内 七貫五百文

右尅行、去ル酉年ヨリ去亥年迄三ヶ年請持掛ヨリ

榮勞御見分之上内上納仕候

中宿者

作得

肥本代

作得

肥本代

居住郷士并

中宿者

残 貳百八拾五貫三百五拾五文

七百五拾貳貫貳百八拾四文

百姓分

内 八貫八百文

右之内同断

残 七百四拾三貫四百八拾四文

但 返上方当秋迄取延被置候

諸村并

一 用夫𤑔人ニ付、一ヶ月夫仕四日四合程ニ相廻申候、
ママ

一 諸出米之儀、郷士其外所中人別割ニ而年末取揃仕候、

尤𤑔人前六合九勺ツ、

一 諸出錢之儀、郡見廻詰所、諸在庄屋役所筆紙墨代、高

割ニ而出錢仕候、高𤑔石ニ付百拾六文内外、

一 濱之市宿場・加治木宿場・溝邊等江寄人馬受錢并遠方

江萬納物、又は夫立被仰越候節請負ニ差出候ニ付、右

出錢は夫割仕候、夫𤑔人ニ付四百三拾貳文内外、

一 諸所より御用材木取下ニ付、出牛差立候節、御拂賃錢

ニ而は不引足候ニ付、三合米掛高二相掛、加次錢為差

出申候、高𤑔石ニ付錢四拾四文ツ、

一 百姓共之内、父母江孝養又は□まへ江相事、叮嚀相事

候者罷居不申候、

一 村々在役年限無御座、多年相勤候茂有之、半過は三四

ケ年ツ、相勤申候

一 御藏々枿目三盃入は先米三斗八升五合位ニ而相納申候

但、貳盃入は御藏上納不仕候、

一 給地之儀は、先米貳斗三升位ニ而相納申候、

五ケ年分

一 御囲粃粟 千九拾貳石六斗三升四合

内 粃粟 九拾九石貳斗三升

粃 五拾𤑔石貳升

粃 四拾六石貳斗八升

同 八拾七石五斗六升

粃粟 三拾貳石六斗五升

粃 七拾七石𤑔斗貳升五合

同 三拾七石六斗八升

同 四拾貳石七斗九升五合

上小川村

上井村

川内村

下井村

小村

福嶋村

松木村

野口村

同 四拾九石六斗四升九合

府中村

粃 貳百石三斗五升四合

粃 四拾貳石五斗七升

向花村

右去亥三月種子用ニ拝借被仰付候、当子秋返上仕

同 七拾貳石五斗四升五合

新町村

筈御座候、

同 六拾石七斗五升

見次村

右貳行差引

同 四拾六石三升

内村

有粃 四百七拾八石貳斗六升七合

同 四拾六石七斗五升

内山田村

有粟 壹石七斗九升

同 六拾七石壹斗三升五合

小田村

内 粃 三百九拾三石貳斗六升八合 百姓方

同 貳拾六石九斗八升五合

野久美田村

粟 壹石七斗九升

右同

同 四拾六石七斗貳升五合

小濱村

右貳行、村々庄屋役所所藏江格護有之候、

粃 三拾貳石貳升五合

真孝村

粃 六拾八石壹斗四合

郷土方

粃 粟拾七石七斗四升

住吉村

右壹行、納人宅江銘々格護有之候、

粃 拾八石五斗五升

宮内社家

同 五石七斗三升五合

本町

同 五石七斗三升五合

本町

右壹行、本町人鶴木政右衛門土藏江右同断、

同 八拾五石壹斗五合

郷土方

同 拾壹石壹斗六升

宮内社家

粃 四百拾貳石貳斗貳升三合

代錢 千百六拾六貫六百貳拾壹文

右者去亥夏所中飯料用ニ賣拂之願御免被仰付、右

一百姓共之内勸農方ニ拔群出精いたし候者、又は村中為

筋ニ罷成候者罷居不申候、

代錢地頭飯屋土藏内江格護有之候、

一牛馬 千貳百四拾壹疋

諸村

駒 六百七拾三疋

駄 貳百拾壹疋

男牛 貳百四拾七疋

女牛 百拾疋

惣合損高 百四拾九石七斗壹升四合六勺八才

惣合高 壹万八千七百九拾三石六升三勺五才

作用夫 千九百七拾六人

但、耄人二付、九石五斗壹升六勺餘ツ、

右者諸在百姓請取高并人体現用夫女其外萬取しらへ申出候趣、御ヶ条書を以被仰渡趣承知仕相しらへ申候処、右之通御座候間帳面相認差上申候、以上

郡見廻 秋山庄右衛門④

子六月廿五日

國分御郷士年寄衆中

(表紙)

天保八年丁酉

十一月五日

國分新道新田縄引帳

國分本町御高札之本より濱之市通、道縄筋之内貳千貳百四拾間目、濱之市町末八幡宮埦之馬場十文字直口之所々縄引始、

一子丑間貳拾壹間 左右町屋敷

此縄頭十文字有、八幡宮埦之馬場通、

一同方式拾間 右真孝村百姓屋敷
左田

一同方式拾間 左右田

一同方式拾間 左右人家

此繩末左ニ小道有、

一同方四拾間

右人家
左御蔵屋敷

此繩拾壱間目右富之隈江之通道有、

一同方式拾間

左右人家

一戌方九拾八間

左右同

此繩頭右八幡宮埒之馬場通

一同百四拾間

左人家
右畠

一酉戌間式拾間

左右畠

一同方式百式拾間

左右同

○此繩頭左三拾間程ニ墓所有、

一同方四拾間

此繩五間目左ニ、鹿兒島下町札辻より之七里塚有、

一亥方拾間

左右同

一亥子間拾間

左右同

一亥方七間

左右同

一戌亥間式拾間

左右同

一戌方三拾七間

左右同

一戌亥間八拾間 左右同

一酉方八間 左右同

一申酉間三拾間 左右同

一戌亥間五拾三間 左右同

一亥子間拾間 左右同

此繩末真孝村・野久美田村両村境、

一亥方拾八間 左右同

一酉戌間拾六間 左右同

一酉方式拾間 左右同

一戌亥間拾壱間 左右田地

一酉方八間 左右同

一申方式拾間 左右同

此繩末拾式間目右八間、笛吹川土橋横ニ引渡ル、

一同方式拾間 右同
左畠

一未申間拾三間 左右同

一申方七間 左右同

此繩頭左式拾間程ニ水神小倉有、

一酉方拾八間 左右同

一 申酉間拾三間	左右畠	一 戌亥間四拾間	右畠 左畠
一 申方拾間	左右同	一 同方拾五間	右畠 左人家
一 酉戌間三拾間	左右同	一 同方式拾間	左右人家
一 酉方拾間	左右同	此繩末、右墓所、左畠	
一 酉戌間五拾間	左右同	一 同方拾間	左右畠
一 未申間拾間	左右同	一 亥方拾間	左右同
一 申酉間拾五間	右田 左畠	一 亥子間四拾間	左右同
一 戌方拾七間	右田 左村居	一 亥方拾四間	右畠 左畠
此繩頭より少シ下ル繩末土橋横ニ渡ル、		一 同方四拾間	左右人家
一 同方式拾間	左右田地	此繩頭より右之方拾式間程ニ墓所有、	
一 戌亥間式拾間	左右同	一 酉方四拾間	左右人家
一 丑寅間拾間	左右同	此繩七間目より右之方ニ觀音堂有、	
一 亥子間拾五間	右畠 左人家	一 子方式拾六間	左右人家
一 戌亥間六間	左右藪山	一 亥方拾式間	右田 左人家
一 戌方拾六間	左右同	一 申酉間八間	左右人家
一 同方拾四間	左右同	一 酉方式拾間	左右同
一 戌亥間五間	左右同	此繩末右之方式拾間程ニ中山大明神社有、	
一 亥方拾七間	左右同	一 酉戌間式拾間	左右村山

此縄頭を坂登り

一酉方式拾間

左右同

一午方五間
一巳方六間

左右同
左右同

一申酉間拾四間

右畠
左村山

一午未間七間

左右同

一酉戌間八間

左右畠

一申酉間式間

左右同

一亥方五間

左右同

一戌方拾八間

左右同

一子丑間七間

左右同

一申方拾間

右畠
左畠山

一戌亥間式間

左右同

是迄下り終

一酉方六間

左右同

一酉方五間

左右畠

一申方式拾間

左右同

一申方五間

左右同

一未申間拾七間

右野
左人家

一午未間六間

左右同

一申方式拾間

右畠
左人家

是より坂登り

一申酉間式拾間

左右畠

一申方五間

左右同

一未申間拾三間

右野
左畠

一酉戌間五間

左右同

一同方式拾間

左右同

一戌亥間三間

左右同

一未方式拾間

左右同

一亥子間拾式間

右畠
左野岡

是迄坂登り終

一未申間拾壱間

左右畠山

一申方拾五間

右追田
左畠山

此縄頭より坂下り

一同方拾七間

左右野岡

十 国分・清水郷役所資料

此繩末、野久美田村・小濱村兩村境、
是迄登り終ル、

一同方六間

左右^{サコ}追畠

此繩頭を坂下り

一申酉間拾貳間

左右同

一酉戌間七間

左右同

一申方拾三間

左右同

一申酉間拾三間

左右同

一酉方拾三間

左右同

一酉戌間七間

左右同

一同方貳拾間

左右同

一未方拾壹間

右^{サコ}數山
左追畠

一酉戌間八間

左右同

一酉方拾貳間

左右同

一申方九間

左右同

一申酉間拾壹間

左右同

一酉方四間

左右數山

一酉戌間貳拾間

右^{サコ}數山
左追畠

一申方拾間

左右同

一午方拾四間

左右同

一未方四間

左右同

一申酉間拾壹間

左右同

一未方五間

左右同

一同方貳拾間

左右追畠

此繩迄二而下り終

一同方貳拾間

左右同

一未申間貳拾間

右人家
左追畠

一戌方六間

左右人家

一戌亥間百間

左右同

一未申間拾八間

右人家
左畠

一申方五間

左右同

一酉戌間拾五間

左右同

一酉方拾壹間

左右田地

一申方拾三間

左右同

一酉戌間拾壹間

左右同

一同方拾三間

右畠
左畠

此繩末、右岩之上大日如来石祠有、

一申酉間七間

左右田地

一申方式拾間

左右同

此繩末、拾沓間目程左之方ニ墓所有、

此繩末国分小濱村十三田土橋之涯迄、

繩引留ル、是迄直道終、

合間數貳千三百八拾四間

町ニして三拾九町四拾四間

里ニして沓里三町四拾四間

國分濱之市新田真孝村御制札之本より繩引始

一子丑間四間

左右小溝横ニ引通

一卯辰間三拾間

右新田
左古田

此繩頭石橋有、繩末右ニ人家有、

一午未間拾八間

左右人家

此繩頭左右沓間半程ニ六地藏有、

一辰巳間七拾七間

右新田
左人家

此繩頭真孝村・住吉村兩村境、

一卯辰間四拾間

左右同

一辰方四拾間

左右同

一卯辰間百貳拾間

左右同

此繩三拾間目より左右人家有、

此繩百拾間目小溝横ニ引通、

一辰方式拾間

左右同

一卯方三拾間

右新田
左人家

一寅方拾四間

右新田
左畠

此繩末新川口土手涯迄引付ル、

一午未間貳百八拾間

右田
左川原

是より新川口土手涯海手之方、

一未方百六拾間

右新田
左海

一未申間貳拾間

左右同

一同方式拾四間

右池
左海

一申酉間六間

左右同

一酉戌間貳拾間

左右同

一同方式百貳拾間

右田
左海

一戌方式拾間

左右同

一 戌亥間式拾六間 左右同

此繩末住吉村・真孝村両村境、

一同方百貳拾間 左右同

一 亥方拾間 右池
左海

一 子丑間百四拾間 左右同

此繩末より左貳拾間程波戸有、

一同方貳拾間 左右同

此繩貳間目左ニ水神小倉有、

此繩五間目水道石橋渡ル、

一同方貳百六拾間 右田
左海

一 丑方貳拾六間 右田
左人家

一 卯方貳拾間 左右同

一 寅卯間六拾四間 右新田
左古田

一 卯辰間拾貳間 左右同

此繩末真孝村御制札之元迄繩引留ル、

合惣廻間数 ^(張紙) 千八百拾壹間

町ニシテ 町ニシテ三十四十二間

国分・敷根境国分方境木本より、海手之方下井村新
田繩引始、

一 未方百貳拾間 右古田
左川原

一 未申間拾六間 左右同

一 酉方六拾間 右古田
左海

一 酉戌間貳拾間 左右同

一 酉方拾貳間 左右同

此繩末迄ニ而古田終ル、

一 申方六拾間 左海
右新田

此繩頭々右六拾間程ニ松山と云人家有、

一 申酉間貳拾間 左右同

一 酉方百八拾間 左右同

一同方貳拾七間 右潮入
左海

一 子丑間貳拾間 左右潮入

一 子方貳拾間 左右同

此繩中水道石橋横ニ引通、

一同方拾七間 左右同

一 酉戌間貳拾間 右塩濱
左潮入

一 酉方式拾間

左右同

一 未方式拾間

左右同

此繩中水道石橋横ニ引通、

一 申酉間六拾間

左右同

一 酉方式拾間

左右同

一 酉戌間拾七間

左右同

此繩末敷根湊村境松之本迄繩引留ル、

○前之丸ニ引統書へし、

国分・敷根境国分之方境木本ノ、往還土手之俣繩引

始、

一 丑方四間

右川原
左古田

一 戌方三拾四間

左右古田

一 申方式拾間

左右同

此繩頭ノ川原と云人居右之方百間程ニ有、

一 申酉間七拾七間

左右同

一 申方式拾間

左右同

一 戌方式拾九間

右古田
左新田

此繩六間目石橋渡ル、是より左新田、

一 戌亥間百式拾間

左右下井村人家

一 亥方式拾間

左右同

此繩四間目左ニ昆沙門堂有、引統墓所有、

一 同方式拾間

右田
左人家

一 同方式拾間

右古田
左新田

此繩五間目ニ石橋渡ル、

一 同方八間

左右人家

一 戌亥間百七拾間

左右同

一 酉戌間拾間

左右同

一 申酉間式拾間

右古田
左新田

此繩五間目迄ニ而人家終、

一 同方拾間

左右同

此繩頭ノ拾式間程子丑間ニ當、鳴子大明神社有、此

繩末石橋横ニ引渡ル、繩末右ニ制札有、

一 申酉間拾壹間

左右同

此繩末敷根湊村境迄、往還筋繩引終ル、

一 未方式拾間

左右同

是より右敷根湊村、左国分下井村、

一同方式拾間

右塩濱
左田

此縄中土手・小溝横ニ引通ル、

一同方式百九拾五間

此縄末敷根湊村、国分下井村海手之方境松之本迄、

縄引終、

合惣廻間数

(張紙)

千六百五十七間

町ニシテ

町ニシテ廿七町三十七間

一酉戌間式拾四間

右塩濱
左海

国分小村新塩濱・敷根湊村境海手之方々縄引始、

此縄末左海鼻崎江水神小倉有、

一子方四拾八間

左右同

一酉戌間式拾間

左右同

一戌方式拾間

左右同

一亥方三拾間

左右同

一子丑間拾三間

左右同

一丑寅間式拾間

右塩濱
左川

一丑方式拾間

左右同

一子丑間六拾間

左右同

此縄末小水道引通、

一同方五間

左右同

此縄末国分小村・敷根湊村境ニ而縄引留ル、合間数

町ニシテ

右者、今度從

公儀御領國中、元禄年鑑已後交替之地面御繪圖御改直之儀被仰渡、桑原郡國分小濱村・野久美田村・真孝村新道・住吉村・真孝村新田、囃咄郡国分下井村・小村新田、此節御見分之上、沓間六尺三寸式拾間縄ニ而縄引仕、方位町間相違無御座候条、為後年帳面加印形差上申候、以上、

筆者

天保八年丁酉

六ヶ村銘々
何村庄屋

十一月五日

何かし印

浦役

何かし印

用水掛

何かし印

郡見廻

何かし印

郷士年寄

何かし印

御記録方添役

黒田新之丞殿

郡奉行見習

調所藤内左衛門殿

(表紙)

隅_カ清水窓廻并麓小路縄曳帳

清水豊之口御制札之元巳方縄筋財部_江之脇道赤坂峠迄
中道立縄曳

一〇方_(破損) 四拾八間 左右土屋敷

一巳午間 四拾五間 右同

此縄頭_ヲ四間目ニ左比迫小路有、

一午方 四拾間 右同

此縄頭_ヲ式拾間目瀬戸登り、

一辰巳間 五拾間 左右土屋敷

一午方 式拾九間 右同

但此繩頭を左内馬場行小路有、此繩末式拾九間目右平等寺馬場、繩頭を廿間目瀬戸是迄、

一辰方 四拾間 右同

一辰巳間 式拾間 左右土屋敷

但繩頭を右大山小路、

一卯方 六拾七間 右同

一卯辰間 九間 右同

一辰巳間 六拾間 右同

但繩頭を小瀬戸二入四拾間目、瀬戸是迄、

一辰方 八拾間 左右田

一未方 式拾間 左右畠

一卯六 百式拾式間 左畠、右田

一午方 四拾間 左右田

但此繩頭左拾四五間程二北辰宮主取屋敷

有、小川渡ル、

一辰巳間 八拾間

但此繩頭を卯辰ノ間當テ崇廟北辰宮社有、

一卯方 百間 左岩^(がけ)右田、

但此繩頭を午方當テ式百間程二国分城有、

一辰巳間 四拾間 左畠 右田

一寅方 百式拾八間 左右野岡

一丑方 三拾六間 右同

但繩頭を瀬戸二入、

一卯辰間 式拾間 右同断

一寅卯間 四拾間

但此繩頭を十文字岩坂登ル、

一未方 式拾九間

但右同断、此繩末二而瀬戸離、

一巳方 五拾四間 左右野

但此繩頭を繩末左右野四拾間目を瀬戸に

入、

一卯辰間 式拾間

但瀬戸是迄、

一卯方 六拾間

但此繩頭を四拾間所迄左右二いほ山、繩末

式拾間目左牧福山、右畠、目掛り百間程

二川原村・瀬戸ノ口村枝村、左右竹木

山、

一丑寅間 百四拾間、

但此繩頭を六拾間目左畠右野岡、

一寅卯間 三拾三間 左畠 右野岡

一卯方 百間 右同

一丑寅間 百間

但此繩頭を右ひとくらヶ迫、繩末二而迫

終、

一寅方 式百六拾間

但此繩頭を左右ひとくらヶ原、目掛り左八

間程かけ、右百間程かけ、

一卯方 四拾間

此繩頭を右野平芦谷迫、左野岡

一寅方 百間

但右同断、八拾間目を坂下り、

一卯辰間 六拾間

但右同断、四拾間目を瀬戸二入、

一寅方 百四拾七間

但繩頭を式拾七間目を瀬戸是迄、芦谷迫二

入左右野岡、

一寅卯間 式百式拾間

但此繩頭を左右野岡、芦谷迫、

一寅方 百四拾間 右同

一卯方 式拾間 右同

一辰巳間 四拾間 右同

一卯方 四拾間 右同

一丑寅間 百間

但此繩頭を少々小坂登、左右野岡、

一寅卯間 八拾間 右同

一寅方 百八拾間

但繩頭を式拾間目芦谷迫是迄、四拾間目下

城戸原左右平地、八拾間目左二野道有、

財部へ通道也、

一丑寅間 四拾間、

但繩末^ゝ五間程右二下城戸迫有、

一丑方 百間 左右野原平野原、

一寅方 百間 左右野

一寅卯間 百四拾間 右同

但繩頭^ゝ左見帰り迫、繩筋^ゝ五間程、四拾

間め右川内狩倉、川中迄分間六拾間程、

一丑寅間 六百六拾間

但繩頭^ゝ式拾間目見帰り迫是迄、左右野平

地、百四拾間め上城戸原、式百間目右川

ち狩倉、川中迄分間百間程、

一寅卯間 式百間 左右野

但繩頭^ゝ百式拾間目左亀のくら迫、繩筋^ゝ

五間程、

一卯方 六拾間 右同

一寅卯間 式百四拾間

但繩頭^ゝ四拾間め右、目掛り百五拾間程二

川久保山有、六拾間め左木原枝迫、繩筋

^ゝ五間程、繩末^ゝ枝迫是迄、目掛り百間

程右二木原村、曾於郡之田飛地有、

一寅方 式拾間

但繩頭^ゝ右木原村・中宿村也、左木原迫、

一卯方 百間 右同

一寅方 四拾間

但繩頭^ゝ鳥井ヶ原、左右野平地、

一丑寅間 百式拾間 右同

一寅卯間 六拾間 右同

一丑寅間 式拾間

但繩末鳥井ヶ原柴立、左右野岡、

一此所清水・曾於郡之境、鳥井ヶ原柴立、長野田之

渡り、溝之田小溝^ゝ野平、寅卯間拾間目^ゝ迄間數四

百五拾八間、丁ニシテ七町三拾八間、曾於郡之内、

一卯辰間 四拾間

但繩頭^ゝ溝ノ田原、左右野岡、

一寅卯間 八拾間 左右野岡

一丑方 六拾間 右同

一寅方 百貳拾間

但繩頭久木野之八拾間目、左畠、右野

岡、

一丑方 四拾間 右同

一寅方 五拾貳間

但荒田ノ尻久木野之渡り川中迄清水之内、

一從是道筋曾於郡之内久木野之渡り、川中ノ財部境

赤坂迄貳百八拾間、丁ニシテ四町四拾間、曾於郡

之内、

合間數六千百七間

丁ニシテ貳里貳拾九町四拾七間

内拾貳丁拾八間曾於郡之内

豐之口御制札之元々赤坂峠、清水・財部・曾於郡三方

境迄、

一高松之尾筋三方境

一子方 高松狩倉清水之内、

一午未間 芹牟田・大尾之付国分之内、

一卯辰間 峠谷頭財部之内、

從是財部境取合尾筋俣繩筋、

一寅方 貳拾間

但繩頭久右ハ財部之内、左清水之内、左右

谷、

一寅方 貳拾間 右同

但左右山、ミのを俣繩筋、

一丑二 六拾間 右同

但繩頭久四拾間目下ル、

一丑壹 四拾間 右同

一丑二 四拾間 右同

一丑方 貳拾間

但繩頭久少登ル、

一丑寅間 貳拾間 右同

一丑壹 貳拾間 右同

一寅方 貳拾間 右同

一卯壹 貳拾間 右同

但繩頭久峠境尾之付、

一丑二 式拾間 右同

但縄末日隅兩州之境是迄、

一子丑間 式拾間 右同

一子二 式拾間 右同 少下ル

一子方 六拾間 右同

一子二 式拾間 右同

一丑一 式拾間 右同

一丑二 式拾間 右同

一子丑間 式拾間 右同

一丑一 式拾間 右同 双方野ニ出、野俣下り、

一子方 式拾間 右同

一寅二 式拾間 右同 双方谷、

一亥子間 四拾間 右同

一子方 六拾間 右同

一子一 四拾間 右同

一亥子間 式拾間 右同

一子一 式拾間 右同

一子方 式拾間 右同

但縄末々山ニ入、

一寅二 式拾間

但谷ニ入下川下ル、

一亥右 式拾間

一此縄末清水・財部・曾於郡三方境、ぬめり谷ト申

所、

合間数七百八拾間

丁ニシテ拾三町

是迄財部境

一高松ケ尾、国分・清水・財部三方境

従是国分境取合縄筋尾筋俣、

一酉方 百間

此縄頭々右高松狩倉清水之内、左芹牟田狩

倉国分之内、

一申方 四拾間 右同

一申酉間 四拾間 右同

一申方 四拾間 右同

一午方 六拾間

但縄頭を右ほツ木の牟礼狩倉清水之内、左

芹牟田国分之内、左右山下ル、

一未方 六拾間 右同

一午方 四拾間 右同

一午未間 四拾間 右同

一午方 貳拾間 右同

一申方 六拾間 右同

一午未間 六拾間

但縄頭を貳拾間め右うそ越清水之内、左芹

牟田国分之内、

一未申間 四拾間 右同

一午未間 貳拾間

但縄頭を右中牟礼狩倉清水之内、左桑木川

内国分之内、

一巳方 貳拾間 右同

一卯辰間 六拾間 右同

一辰巳間 八拾間 右同

一巳午間 八拾間 右同

但縄頭を少下ル、

一辰巳間 貳拾間 右同

一巳午間 四拾間 右同

一卯辰間 貳拾間 右同

一巳方 四拾間 右同 貳拾間目を山二入、

一卯方 四拾八間

但縄頭を少下ル、貳拾八間目山是迄、平松

ケ野出、右野、左山きわなる筋を貳間

程、

一寅卯間 四拾間 右同

一卯方 四拾間 右同

一辰巳間 四拾間 右同

但縄頭を左右野

一午未間 六拾間

但縄頭を貳拾間目野是迄山二入、左右高牟

礼狩倉、右清水、左国分、

一午方 四拾間

但縄頭を縄末迄左右谷、尾筋ノ俣登、

一巳方 六拾間

但尾筋俣登、

一巳午間 貳拾間 右同

一午方 六拾間 右同

一午未間 四拾間 右同

一未申間 四拾間

但繩末高牟礼峠、右清水、左国分、

一申酉間 四拾間

但繩頭を下ル、繩末うそ越、

一午方 百七拾五間

但繩頭を谷下り百六拾間目大畠ノ谷、小川

渡ル拾五間目山是迄、

一辰巳間 八拾間

但繩頭を野ニ出大畠、四拾間目二本戸へ行

道有、八拾間目を野原登、

一卯辰間 四拾間 左右野

一辰巳間 四拾間 右同

一午方 八拾間

但繩頭を左椿八重山麓、貳間程国分之内、

右大畠野清水之内、

一辰巳間 貳拾間 右同

一巳方 六拾間

但繩頭を右ニかう見山繩筋を貳拾間程、左

椿八重、

一辰巳間 貳拾間

一此繩末清水・国分・福山三方境、さか木之本迄、

合間数貳千九百貳拾三間

壱里拾貳町四拾三間

是迄国分境

從是福山境ニ取合

さか木之本申方繩筋

一申方 百貳拾間

但繩頭を下ル、右清水、左国分、左右野、

一申酉間 四拾間 右同

一未方 貳拾間 右同

一午方 四拾間 右同

一此繩末壹丁かやとうたらの本、清水・国分・福山
三方境、

合間数式百式拾間

三町四拾間

是迄福山境

從是国分境ニ取合壹丁かやとうたらの本、

(異筆)
「申酉間繩筋」

一申酉間 六拾間

但繩頭を大谷狩倉清水、左猿ノ木場国分、

なわ筋三のをノ俣、

一酉方 六拾間 右同

一申方 四拾九間 右同

一申酉間 六拾間 右同

但繩頭を山ニ入、

一酉方 六拾間 右同

一申酉間 四拾六間 右同

但繩末ニ而山是迄、

一未申間 貳拾四間

但繩頭を野ニ出、右とひかを野清水、左猿
ノ木場山ニ添国分、

一申方 七拾三間

但繩頭五拾三間目を山ニ入、

一酉方 八拾間 右同

一申酉間 四拾九間

但繩頭を貳拾九間目山是迄野ニ出、

一酉方 八拾間 右同

一申方 六拾間

但繩頭を立山差合野、

一未七 百式拾間

但繩頭を野下り繩末右白塚清水、左うつろ

松国分、

一申酉間 四拾間 右同

一酉方 八拾間

但右白塚、左さゝめき、

一戌亥間 四拾間

但繩頭を登、

一 申酉間 式拾間

但縄末野是迄、

一 亥子間 四拾間

但なわ頭を山二入、四拾間目山是迄、大谷

清水、左さゝめき国分、

一 戌方 式拾間

但なわ頭を野二出、右あけ野、左篠めき、

一 酉方 八拾間 右同

一 戌亥間 八拾間 右同

一 戌方 式拾間 右同

一 酉方 六拾六間

但なわ頭を六間目野是迄、山二入、

一 酉戌間 六拾間

但縄末山是迄、

一 酉方 四拾間

但縄頭を登二成、右芝本清水、左山国分、

一 未申間 四拾間 右同

一 酉方 式拾間 右同

一 戌方 四拾間

但右芝本、左しやうしうつる、

一 酉戌間 四拾間

但なわ頭を尾筋俣下ル野是迄、式拾間目

山入、

一 申酉間 式拾間

但なわ末山是迄、

一 酉戌間 四拾間

但縄頭を左右山谷、右薄木山清水、左しや

うしうつる国分、

一 酉方 三拾間 右同

一 未申間 四拾間

但縄頭を下ル、右へた山清水、左蓑かけ国

分之内、

一 申酉間 三拾三間 右同

一 戌方 八拾間 右同

一 戌亥間 六拾間

但縄頭を右芋洗谷清水、左荒之田国分、

一申西間 四拾間 右同

一戌方 貳拾間 野是迄、

一亥方 四拾間

但繩頭を左右山谷、繩末ニ而野ニ出、

一酉四 四拾間

但繩頭を大尾崎清水、左壺盃山国分、

一申西間 七拾四間

但繩頭を六拾間所くたり、岩廻下り、繩末

野是迄、

一未申間 四拾間

但繩頭を山ニ入谷、

一申西間 六拾貳間

但繩頭を五拾七間目牧川内川畑迄、繩末五

間川渡ル、

一酉戌間 五拾九間

但繩頭を登、左右直竹山、廿九間目山是迄

野ニ出、此所上井村・川原村・川内村

境、

一戌亥間 四拾間 左右野、

一酉戌間 八拾間

但繩頭を四拾間目小迫渡ル、六拾間目谷登

左右野、八拾間目尾越野原下ル、

一酉七 四拾間

但繩頭を永山迫、左右野、貳拾間目左田少

有、

一酉戌間 八拾間

但繩頭を六拾間所迫登、左右野、

一酉方 八拾間

但繩頭を貳拾間目野原下ル、赤崩迫四拾間

所を野原登、

一酉戌間 四拾間

但繩頭を荒岩峠、即野原下ル、

一酉八 八拾間 右同

一酉戌間 六拾間

但繩頭を本宮迫、左右野岡、野平俣登、

一申西間 四拾間 右同

一未申間 百貳拾間 左右野岡、

一申三 貳拾間

但一繩右直三郎ヶ迫清水現島、左島少有国

分、

一申七 貳拾間

但繩頭も長迫山竹山、

一寅方 六拾間 右同

一戌亥間 貳拾間

但繩頭も右野岡、左山、

一酉方 四拾五間

但繩頭も貳拾間所双方山下り、四拾五間目

右田有清水之内、迫山国分ノ内、

一申七 貳拾間

但繩頭も登、左右小唐竹山、

一酉方 四拾間

但繩末山是迄、

一未申間 貳拾間

但繩頭も野二成、

一申酉間 貳拾間

但繩頭も右くらさミ谷、田有清水、左長迫

山国分、

一未方 貳拾間

但長迫山之尻左ハ保山、右野岡、

一午未間 貳拾間 右同

一申方 九拾八間

左右野岡、繩頭も六十間めも四間程ニ田

有、左野岡

一亥方 三拾間

但繩頭も登、左右迫、繩筋尾筋俣、

一酉方 三拾壹間 右同

一申酉間 貳拾間 右同

一酉戌間 四拾間 右同

一申酉間 九拾三間

但繩頭も右なへ迫清水内、左なかむた頭国

分内、峠是迄、四拾八間めも尾筋下ル、

繩末八間はなて岩ノ上迄、岩高サ五間、

一酉戌間 六拾間

但繩頭を左右野岡、

一子方 八拾三間

但繩頭を登野岡峠、廿三間所を下ル、繩末

一戌方 六拾間 右同

四間程田迫有、

一申西間 貳拾間 右同

一亥子間 貳拾間 右同

一申方 四拾間 右同

一子方 百二間

一戌亥間 七拾八間

但繩頭を右迫清水之内、左井手か山国分之内、四拾間め上井川涯迄、繩末を川渡ル、

内、四拾間め上井川涯迄、繩末を川渡ル、

但繩頭を尾筋之峠下ル、繩末平石迫迄、四拾間目迫田、右平石清水、左梅か谷国分之内、六拾間所を野平登リ、

一子方 四拾間 左右野岡、

一亥ノ八 八拾八間

一亥方 七拾間

但繩頭を松笠谷たにキワ下ル三十間迫、左

但繩頭を四拾間目左右迫、迫なかれ尾筋ノ

右田、中二小溝有、

一酉ノ二 四拾九間

一酉八 貳拾間

但繩頭を芹谷へ通野道有、野原登、

但繩頭を尾筋ノ俣下ル、左右野岡、四拾間所を右外なへ現畠清水、左梅谷頭田国

一戌亥間 貳拾間

分、

但尾筋ノ俣松笠か尾、上井村・川原村・上

一戌方 九拾八間

小川村境、

但繩頭を野原登六拾間、七拾貳間之内繩末

一子三 六拾間 右田清水、左迫国分

六間八岩、七拾八間目を左右野岡かけ尾

筋、

但此一繩迫田清水之内、左山国分之内、

一酉六 四拾間 右同

一戌六 式拾間 右同

一亥子間 四拾間

一亥方 式拾間 右同

但繩頭より式拾間所左蘭城国分之内、右たな

一戌亥間 式拾間 右同

め清水之内、

一亥八 式拾間 右同

一戌方 六拾間

一酉方 三拾四間 右同

但繩頭より野原下ル四拾間、右枝迫清水、左

一辰六 式拾間 右同

野平迫国分、

一申方 拾九間

一戌亥間 九拾間

但此一繩田清水、左山国分、

但繩頭より尾筋ノ俣下ル、大戸岩ノ上迄、繩

一戌亥間 三拾四間 右同

末拾間ハ岩、

一申酉間 拾老間

一未申間 百五拾間

但繩頭より大戸ノ口白坂田、右清水、左山国

分、但繩頭より大戸迫二入左右へほき岩かけ、右畠

分、

清水、繩末百拾九間目より右田、左岩、

一己午間 式拾間 右同

一酉三 四拾間 右同

一己方 式拾間 右同

一亥方 四拾間 右同

一己六 式拾間 右同

一未方 式拾間 左右山、

一申酉間 拾六間 右同

一戌亥間 三拾四間

一午三 式拾間

但縄頭を右畠清水、左山国分、

一申酉間 式拾間 右同

一子方 三拾六間 右同

一酉戌間 三間 右同

一午三 式拾間 右田左山、

一午未間 式拾間 右同

一申方 四拾間 右畠左山

一亥方 式拾間

但縄頭を国分之城岩下迄分間拾四五間程、

右田清水、左山国分、

一丑方 式拾間 右同

一亥方 拾八間 右同

一丑方 三拾四間 右同

一酉方 四拾間 右畠左山、

一子方 式拾間 右同

一寅方 式拾間 右同

一子丑間 式拾間 右田左山、

一申六 式拾間 右畠左山、

一酉三 式拾間 右同

一子丑間 式拾間 右同

一酉方 式拾間 右同

一子方 式拾間 右同

一寅方 三拾式間 右同

一戌方 八拾間

但縄頭を柳ノ丸右畠、左山、四拾六間目を

市ノ丸屋敷、右山、左岩かけ、

一申酉間 式拾間 右同

一戌六 四拾八間

但縄頭を右方膳屋敷清水内、左岩かけ国分

之内、

一未申間 式拾間 右松山左岩かけ、

一未方 四拾間 右同

一己六 式拾間

但此一縄清水観音山留り、尾筋越右山、左

岩かけ、

一辰己間 拾三間

但此拾三間岩、

左山、

一卯方 式拾間

一亥子間 三拾間 右同

但縄頭を中ノ字都、右畠、左岩かけ、

一戌方 式拾間 右田左山、

一午方 式拾六間 右同

一戌亥間 式拾間 右同

一己方 拾四間 右同

一酉戌間 式拾間 右同

一申方 式拾九間

一亥方 式拾間 右同

但縄頭を式拾間目迄岩かけ、右畠、縄末を

一申方 三間 右同

右田、左山、

一巳午間 四拾間

但縄頭をばくろかうと、右田清水、左山国

一卯辰間 式拾間 左山右畠、

分、

一午方 六拾間 右同

一酉戌間 拾三間 右同

一卯辰間 式拾間 右同

一午方 式拾間 右同

一午未間 式拾間 右同

一午八 式拾間 右同

一戌方 四拾間 右同

一辰六 式拾間 右同

但縄頭を国分城忍か尾岩下迄分間四拾間

一未方 式拾間 右同

程、午八二当ル、

一戌方 三拾五間 右同

一酉戌間 四拾間

一午八 式拾間 右同

但縄頭を式拾間目右同左山、四拾間目右畠

一亥子間 式拾八間 右同

一酉方 式拾間 右畠左山

一丑寅間 式拾間 右同

一子丑間 三拾七間 右同

一亥方 四拾六間

但繩頭をさかし山、右田清水、左山国分、

一午六 式拾間

但繩頭を目掛亥子ノ間ニ、當分間百五拾間

程ニ喜田村有、弟子丸ノ親村也、

一午方 式拾間 右田左藪山

一申酉間 式拾間 右同

一巳午間 式拾間 右同

一巳八 式拾九間 右同

一戌方 式拾間 右同

一申酉間 拾五間

但繩頭を左右いほ山、尾越、

一酉戌間 式拾間 双方いほ山、尾下り、

一亥子間 三拾四間 右田左藪山、

一酉三 式拾間 右同

一未方 式拾間

但原下り、左右藪山、

一酉戌間 式拾間

但繩頭を迫田右清水、左山国分、

一亥子間 式拾間 右同

一申八 式拾七間

但繩頭を野岡登

一未方 八拾間

但繩頭を後迫左右畠、左国分之人家有、四

拾間目を左右藪山、清水を国分御内へ通

小道有、八拾間目を梨之迫平山道迄、

一未申間 八拾間 左右藪山

一申酉間 式拾間

但繩頭を左四拾間程後迫迫田有、清水之田

地飛地

一午未間 式拾間

但繩頭を右太郎か迫平清水、左藪山国分、

一申方 式拾間

但繩頭を尾筋ノ俣、左右數山、

一申三 式拾九間

但繩頭を式拾間目ニ右松有清水之内、左ニ

松有国分之内、

一戌亥間 式拾間

但繩頭を鳥越岡尾筋ノ俣、左国分麓、右畠

清水、

一亥方 式拾間 右同

一亥八 式拾間

但繩頭を下ル左右畠、

一酉方 四拾五間

但繩頭を式拾間目右野原、左墓原、式拾四

間所瀬戸ノ上迄吉兵衛瀬戸横ニ渡ル、此

所弟子丸村・向花村・上小川村境、四拾

五間目左ニ若宮社有、右藪山原繩筋尾筋

ノ俣、

一酉戌間 式拾間 右同

一戌方 式拾間

但繩頭を左右山国分、右藪山ノ下ニ畠有清

水、

一亥子間 三拾老間 右同

一酉方 式拾間 右同

一子方 三拾四間

但繩頭を原下ル、三拾四間目山是迄、

一寅四 式拾間

但なわ頭を蛇塚右畠、左田、

一丑三 式拾間 右同

一寅八 式拾間 左右田、

一寅方 式拾間 右同

一丑方 式拾間 右同

一子六 四拾間 右同

一亥子間 五拾六間

但繩頭を四拾間所、府中村・向花村・弟子

丸村境、五拾六間目所、府中村・新町村

・弟子丸村境、右鉢ノ久保田国分、右本

町畠清水、

一子丑間 七拾七間 左右田

一亥子間 四拾間

但繩頭^〆右畠井田清水、左鉢窪国分、

一丑方 百間

但繩頭^〆田越目掛七拾間程二川際渡り有、

流末末方間二當、目掛り六町程二姫木村

人家有、

一寅六 四拾八間 左右田

一卯八 貳拾九間 右同

一寅八 三拾八間

但繩頭^〆畠井田新田土手井板ノ本、右田清

水、左土手、

一丑方 貳拾四間

但繩頭^〆貳拾間目新溝横手渡ル、左右田、

一丑七 四拾間

但繩頭二寺馬場入ル、石橋有、馬場辰方左

右土屋敷、

一丑寅間 八拾間 右土屋敷、左土手、

一寅三 六拾間 右同

一丑寅間 四拾間 右同

一寅方 拾七間 右同

一丑方 五拾五間

但繩頭貳間横手渡ル、貳拾貳間所弟子丸村

・新町村・山之路村境、左二霧嶋通道有

四拾間所新溝實有、

一寅八 貳拾間 右田左土手

一寅卯間 貳拾五間 右同

一丑寅間 六拾間 右同

一丑方 四拾間 右同

一子方 五拾間

但繩頭^〆四拾間所右二土屋敷清水、左土手

国分、

一寅方 貳拾間 右田左土手、

一丑寅間 貳拾間

但繩頭郡田村・新町村・山之路村境、

一丑三 六拾間

但繩頭新溝是迄、目掛丑方ニ當テ五拾間程
ニ郡田村有、右壹明寺へ行道有、
一亥子間 三拾五間

但繩頭ニ式拾間め川畑迄、川上方流末、辰
方九間ハ川渡ル、

一亥六 六拾間

但繩頭ニ勝吉ノ前右田清水、左田国分、

一亥方 三拾五間 右同

一亥子間 四拾間

但繩頭ニ式拾間所ニ目掛リ丑寅間ニ當テ、五

拾間程ニ穆佐村有、郡田名ノ親村也、

一子丑間 四拾間 左右田

一丑方 式拾七間

但繩頭ニ式拾間所迄左右田、七間めニ左田

右畠、

一戌方 拾六間

但此繩頭ニ窪田左右田、卯方當リ目掛リ五

拾間程ニ窪田村有、郡田村親村也、

一子丑間 三拾六間 左右田
一丑方 拾四間

但此繩頭霧嶋通道、繩末道是迄、

一酉六 百間

但此繩頭ニ右鳥井田清水、左上柳田国分、

一戌亥間 五拾間

但此繩頭ニ右五ノ坪清水、左上柳田国分、

繩頭清水ニ曾於郡へ通ル小道有、

一 此繩末道場口土橋之本、清水・国分・曾於郡三方

境、

合間數八千九百六拾五間

四里五町式拾五間

是迄国分境

從是曾於郡境取合、道場口土橋ノ元繩筋川上リ、

一寅卯間 式拾八間

但繩頭ニ右田清水之内、左田曾於郡之内、

川上リ、

一子方 三拾六間 右同

一寅卯間 三拾五間

但繩頭右まつさう清水之内、左樋豊曾於郡之内、左右田、

一丑方 貳拾間 左右田

一亥子間 貳拾間 右同

一寅方 六拾間 右同

一亥方 貳拾間 右同

一丑方 四拾間 右同

一辰方 九拾を七間

但繩頭を川是迄、右かけ熊清水、左同名曾於郡、

一丑寅間 貳拾八間

但繩頭右三拾間程ニ亀甲小野岡有、清水之内、此所霧嶋行路道俣繩筋、

一辰巳間 八拾間

但繩頭を霧嶋道是迄、左畠右田、

一巳方 三拾間

右あふき田清水之内、左畠曾於郡之内、

一卯辰間 三拾五間 右同

但繩末を右田清水之内、左丸岡曾於郡之内、

一寅方 貳拾間

一辰方 四拾四間 左右田畠

一午方 三拾七間 右同

一寅卯間 貳拾間 左右畠

一寅方 貳拾九間 右同

一卯辰間 貳拾壹間

但左右田、小溝上り繩筋、

一卯方 百壹間

但繩頭を岩崎尾筋ノ俣ニ繩筋、右迫畠清水之内、小唐竹山迫田曾於郡之内、繩頭四拾五間目を左右野原、六拾五間目ニ而野岡峠、八拾壹間目を左右迫田、

岡峠、八拾壹間目を左右迫田、

一丑方 六拾間

左右野へ尾筋登、

一卯方 貳拾間

左右野、縄頭迫頭右尾、

一寅卯間 百八間 左右野

但縄頭と三拾三間目深谷、左ニ小唐竹山有

曾於郡内、右野岡迫畠清水之内、四拾間

目野原登、六拾間目と左右野原かけ、縄

末大尾右鷹之巢清水、左同名曾於郡之

内、

一丑寅間 四拾間

但鷹ノ巢野岡裏かけ、右清水左曾於郡、

一寅方 六拾間

但縄頭峠、左右野原地、

一卯方 六拾間

右野原裏かけ、左野、

一子方 八拾間 右同

一丑寅間 八拾間 右同

一丑方 四拾間 右同

一寅方 四拾間 右同

一丑寅間 六拾間 右同

一卯辰間 式拾間 右同

一辰方 六拾間

但縄頭と野原下り、右大岡谷清水之内、左

野原曾於郡之内

一巳方 四拾間

但縄頭と野原登、

一卯方 六拾間

但縄頭と式拾間目くわけハか迫、右清水、

左曾於郡

一寅方 四拾間

但縄頭峠、式拾間目と右野谷清水、左野曾

於郡、

一卯辰間 四拾間

但縄頭と野原下ル、式拾間目と本徳迫、

一寅卯間 式拾間

但縄頭と野原登、

一丑寅間 百間

左右野、縄頭と目掛辰巳間當テ拾町程、

山路村有、

一寅卯間 四拾間 右同

一卯方 六拾間 右同

一寅方 貳拾間 右同

一丑方 六拾間 右同

一子丑間 百貳拾間 右同

一丑方 百貳拾間 右同

但百間目御牧堀有、

一寅方 四拾間 右野原、左野

一丑寅間 八拾間

但繩頭六拾間目夜走迫ト申小迫有、左右

野、

一辰方 六拾間 左右野

一寅卯間 四拾間

繩頭野原登、

一寅方 六拾間

右野原左迫、繩頭六拾間目峠、

一寅卯間 四拾間 右同

一丑方 貳拾間 右同

但からすが崎、

一子丑間 四拾間 右野平、左野、

一子方 五拾間 右同

一丑寅間 百四拾間 右同

一寅方 貳拾間 左右野

一寅卯間 四拾間 右同

一卯辰間 百八拾間

但繩頭野平下ル、百間目法か崎、百貳

拾間目野平登、

一卯辰間 貳百貳拾間

但繩頭下リ左右野、六拾間目野平登、

百八拾間目山ニ入山平下リ、

一丑方 六拾間 左右山

一寅卯間 六拾間

但繩頭御牧根垣左ニ有清水、左右山、

一子方 六拾四間

但繩頭六拾間目小瀧有、高サ三尋程、川

横式間程、

一寅卯間 五拾三間 右山左野、縄筋川登、

一丑寅間 式拾間 右同

一亥方 五拾五間

但縄頭山、右清水左曾於郡、左右かけ、

一子方 式拾間 左右山

一丑寅間 三拾老間 右山左野

一辰方 五拾五間 右同

縄頭を枯木渡り、

一卯方 百間 右同

一子丑間 式拾間 右山左野

一亥方 百間 左山右野

一卯辰間 六拾五間 右山左野

一寅三 四拾間 右同

一寅卯間 六拾間 右同

一寅方 四拾間 右同

一巳方 三拾老間 左右野、右山是迄、

一丑寅間 四拾間 左右野

但柳ノ渡り、

一寅方 百間 右同

一丑寅間 式拾間 左右山

一卯辰間 六拾間 右山左野

一子丑間 八拾間

但縄頭を右崩か迫清水、左野曾於郡、

一寅方 八拾間 右同

一卯辰間 四拾間 右同

一寅方 三拾三間

但縄末御牧犬城戸出、右柿木迫清水、左曲

迫曾於郡

一寅卯間 五拾三間

但縄頭を右山清水、左迫曾於郡、四拾間目

を左右山、

一巳午間 四拾間 右同

一寅方 四拾間 右同

一卯方 六拾間 右同

一卯辰間 式拾間 右同

一辰巳間 八拾間 右同

一未申間 六拾間 右山左野

一卯辰間 貳拾九間 右同

一未方 百貳拾間

但繩頭^〆右古屋敷清水、左榎か迫曾於郡、

一卯方 百貳拾間

但繩頭^〆右池田ノ尻、目掛り四拾間程ニ曾

於郡之田地飛地有清水之内、

一寅卯間 六拾間 右野左山

一辰方 四拾間 左右野

一卯方 貳拾間 右同

一卯辰間 百間

但繩頭^〆左右いほ山繩筋登、川横七尺程、

右清水左曾於郡、繩頭左萩ノ渡也、川長

野田打出シ渡合、

一丑寅間 四拾間

右山清水之内、左野曾於郡

一辰方 四拾間

一卯辰間 四拾間

一寅卯間 八拾間

但繩頭川渡ル、長野田村、田迫尻谷山、左

右野平、

一巳午間 四拾間

一午未間 貳拾間

但繩頭^〆右野清水之内、左栗か迫曾於郡之

内、

一午方 四拾間 右野左迫畠

一巳方 百四拾間

但繩頭^〆八拾間目右あさか迫清水之内、左

栗か迫曾於郡之内、

一卯辰間 四拾間

但繩頭渡^〆野平下ル、廿間目^〆野平登、

一辰方 貳拾間

但繩頭峠、右野左迫、

一辰巳間 四拾間 右同

一辰方 六拾間

但縄頭より池か迫清水、左馬渡り曾於郡、

左右野、是より下ル、

此縄頭より式拾間目右清水支配之内、拾式三町程ニ

田地曾於郡之内田地有、目掛午ノ方ニ當ル、目掛

リ午未間ニ當テ六七町程ニ木原村有飛地、

一辰方 式拾間

田有、左右野平、

一巳午間 拾七間 左右田

一辰方 四間 右同

但左右野平、右清水之内、左曾於郡之内、

一寅方 四拾間 右野左田

此縄頭より野平登

一卯辰間 式拾間

但縄頭より峠、縄末迫迄、

一卯方 式拾間 左右野

一卯辰間 九間 左右野平

一辰方 三拾間 右野平左田

一寅方 九間 左右田

一子方 式拾間

右野左田、野平俣登、

一子丑間 六拾間

左右野平、縄末峠、

一寅卯間 八拾間 右同

一寅方 六拾間

右野平清水内、左馬渡り迫曾於郡、

一丑寅間 四拾間

一亥子間 五拾間

縄頭右溝ノ田清水内、左之曾於郡、四拾

間目より野平下ル、

一子方 六拾間 左右野

一寅方 式拾間

此縄左右田、右清水、

一戌亥間 八拾間

右野平清水、左田曾於郡、

一亥方 八拾間

縄頭より右野平清水、左田曾於郡、野平

登、

一亥子間 四拾間 左右野平

一丑方 五拾弔間 右同

但繩筋尾筋俵下ル、四拾間所々山入後谷、

右清水左曾於郡、繩末谷川廣サ三間程、

川登繩筋、

一丑寅間 六拾間 左右山

一卯方 四拾間 右同

一丑方 弍拾間 右同

一寅卯間 弍拾間 右同

一卯辰間 弍拾間 右同

一丑寅間 四拾間 右同

一丑方 四拾七間 右同

一卯辰間 四拾八間 右同

一午未間 四拾間

但繩頭々左右野、

一卯辰間 四拾間 右同

一卯方 三拾六間 右同

一巳方 四拾間 右山左野

一丑寅間 四拾間 左右山

一辰巳間 四拾間 右同

一寅卯間 五拾九間 右同

一辰方 弍拾弔間 右同

一寅卯間 弍拾七間 右同

一卯辰間 弍拾間 右同

一辰方 四拾間

右野迫清水、左山曾於郡、弍拾間目々^{①虫}

□山、

一卯辰間 四拾八間 右同

一丑方 四拾間 右同

一卯方 四拾八間 右同

一此繩末清水・曾於郡・財部境、ぬめり谷迄、

合間数七千七百八間

三里弍拾町弍拾八間

是迄曾於郡境

惣合間数弍万五百九拾六間

合道法九里拾九町拾六間、清水惣廻、

御制札之本ヲ

一宗廟比良大明神 分間八町程、目掛辰巳間當ル、

祈願所

右同

一竹林山臺明寺衆集院 分間タ里程、目掛丑寅間當ル、

菩提所

右同

一佛頂山楞嚴寺 分間八町程、戌方二當ル、

御制札之本ヲ

一清水觀音

分間六町程、目掛午方二當ル、

右同

一隈部之城大手之口 分間拾タ町程、目掛辰巳間當、

一城之惣廻

壱里式町程、

但岩ノ上四方かけ、少々高低有、

一城之横

五町程

一城之立

七町三拾間程

但松有、竹雜木有、

一城之中央ニ高城ト申所有、高サ拾丈程、横六間程、

立拾五間程、

一中央高城ノ大手之口巳方二當ル、但大手之口上立迄
高サ拾五丈程、

一中央高城ノかきかけ口西方二當ル、人之通有、高サ
貳拾丈程、

一大手之口人馬之通有、

一高城之下乗水ト申所ニ水有、

一ひやさか川ト申所ニ出水有、

一かきかけ口之下外城ト申所ニ、右馬頭殿御屋敷之跡

有、

一城之近邊ニ池沼川無御座候、并城ヲ見入ル高山無御

座候、古来ノ申傳之由緒無御座候、

御制札之本ヲ

一國分麓之境 分間拾六町程、目掛申方二當、

右同

一曾於郡之境 分間拾四町程、目掛子丑間當、

〔後筆〕
一貳里貳拾九丁四十七間、麓御制札之本ヲぬめり谷財

部境迄」

右同

一福山之境 分間三里程、辰方二當ル、

御制札之本々分間八町程、目掛子方二當ル、但飛村、

一姫木迫ノ出口新溝手之元、国分・清水・曾於郡三方

境、辰巳間繩筋土手俣、從是国分境取合、

一辰巳間 式拾間

但繩頭々右畠清水之内、左田国分之内、

一午方 式拾間 右同

一卯方 三拾三間 右同

一巳方 式拾間 右同

一午方 四拾間

但繩頭々式拾間目左右畠、四拾間目左右野

岡、

一未方 式拾間 左右田

一午未間 四拾間 右同

一未方 四拾間 右野岡左田

一午三 六拾間 左右田

一午未間 式拾間 右同

一同方 四拾間

但繩頭々式拾間所、右畠野岡清水之内、左

田、

一午未間 六拾間 左右同

一申方 式拾間 右同

一午未間 六拾間 右同

一未申間 式拾間

此一繩右野岡清水ノ内、左田国分之内、

一申方 四拾間

繩頭々八間目右竹下人家有、左田、

一未申間 八拾間

但繩頭々左田、右寺ノ前人家有、

一戌亥間 拾間

但繩頭々新溝渉ル、左二濱之市へ行道有、

一酉三 四拾間

但繩頭々式拾間目左右畠、四拾間目右畠清

水之内、左人家国分之内、

一酉方 六拾間 右畠左田

一申方 四拾八間

但繩頭を右阿た石人家清水之内、左田国分之内、

但繩頭を式拾七間目左溝右畠、三間八溝渉ル土手横ニ繩引、

一酉方 六拾間 右畠左田

一申酉間 四拾間

一酉戌間 八拾間 右同

但繩頭を千足橋左右田、亥子ノ間ニ當テ百

一戌方 式拾間 左右田

間程ニ木ヶ森有清水之内、

一酉戌間 六拾七間 右同

一申六 百四拾間 左右田

一午未間 五拾間 右同

一酉二 八拾間 右同

一辰巳間 拾八間

一申酉間 六拾八間

但繩頭を拾五間八土手横、三間八溝渉ル、

右田左畠、此繩末を五間程申酉間當テ大

一未申間 式拾間

津川有国分之内、但繩末東曾於郡・清水

但繩頭を土手ノ俣、右溝左田、

内、西桑原ノ郡国分之内、

一午七 百貳拾四間 左右田

一子方 八拾間 左右畠

但繩頭ニ而溝是迄、

一寅卯間 百間 左右田

一申酉間 式拾間 右同

一丑八 六拾間 右同

一午未間 九拾六間 右同

一丑二 四拾間 右同

一卯辰間 拾貳間 右田左畠、

但左右諏方ノつるト申所、

一午方 拾六間 左右畠

一亥方 式拾間 右同

一申方 三拾三間

一戌亥間 式拾間 右田左畠

一酉戌間 四拾間 右同

一申方 四拾間 左右田

一未申間 四拾間 右同

一未三 四拾間 左右畠

一申方 式拾四間 右同

但繩末川畑迄、

一酉方 七拾壹間

但繩頭々式拾間川渉ル、夫々双方川原、但

陸渉、

一子方 式百間

但繩頭々百間目川畑登リ、

一寅方 式拾間

但此式拾間川渉ル、

一丑方 式拾四間 右同

一寅方 六拾間 左右畠

一卯三 四拾間 左右田

一卯方 八拾間

但なわ頭々右中嶋川原清水内、左湯之川原

国分之内、

一寅卯間 三拾壹間 左右畠

一子丑間 百式拾間 右同

一亥子間 式拾間 左右田 石踊川原

一亥方 八拾間 左右畠

但繩頭々六拾九間目霧嶋通道横通、

一子丑間 式拾間 川畑登

一酉戌間 式拾間

但此式拾間川渉ル、

一亥子間 百間 右川左畠

但繩頭々八拾間目左山王山、百間目二而山

終、

一子方 式拾間 左右川原

一亥子間 八拾間 右同

一此繩末国分・清水・日當山三方境、東曾於郡・清

水之内、西桑原ノ郡国分之内、

合間数三千式百廿四間

道乗老里拾七町式拾三間、是迄国分境、從是日當山

境二取入ル、

一卯三 六拾間

但繩頭〆四拾間目左右川原、式拾間川涉

ル、

一丑八 式拾間

右畠清水内、左田日當山内、

一子丑間 六拾間 右同

一子方 八拾間

但繩頭〆四拾間目新原門、姫木之枝村也、

一丑方 四拾間 右人家山、左田、

一子丑間 六拾間 右同

一亥子間 四拾間 左右田

一子八 四拾間 左右田

一子丑間 式拾間 右同

一丑方 式拾間 右同

一丑寅間 三拾壱間 左右田

此繩末西曾於郡・日當山、東曾於郡・清水内、

一戌方 式拾間 左右田

繩頭〆右鏡原清水、左神劔日當山之内、

一戌亥間 八拾間 右同

一亥六 式拾間 右同

一子丑間 三拾壱間 左右芝原

一此繩末清水・曾於郡・日當山三方境、東曾於郡・

清水、西曾於郡・日當山、

合間數六百式拾式間

丁ニシテ拾町式拾式間、是迄日當山境、從是曾於郡

境二取合、

一辰方 式拾間 左右畠

右清水之内、左曾於郡之内、

一卯辰間 四拾間 右同

一卯方 百五拾三間 右同

一辰巳間 式拾間 右田左畠

一辰方 六拾間 左右田

繩頭〆四拾間目霧嶋通小溝涉ル、双方野田、繩末御新田溝有、

一末方 拾貳間

但新田溝俣繩筋荷原、

一辰方 貳拾貳間

此繩頭々貳間目御新田溝渉ル、

一辰巳間 四拾間 左右田

一午方 五拾四間 右同

一辰方 六拾間 右同

一卯辰間 三拾間 右同

一午方 貳拾六間 右同

但繩末御新田溝、但上溝、

一辰方 貳拾貳間

但繩頭々貳間目溝渡ル、左右田、

一巳方 貳拾間 左右田

一巳午間 五拾六間 左右田

一卯方 七拾壹間

但繩頭々右大とり姫木之渡、繩筋々貳百間

程巳ノ方ニ當ル清水内、

一辰巳間 七拾壹間

但繩頭左いほ山、曾於郡々松永村へ通行路

道有、右畠清水之内、七拾壹間目左右野

岡かけ、

一同方 三拾壹間

但繩頭々貳拾間目瀬戸二入、

一卯方 六拾五間

但繩頭々瀬戸是迄、

一卯辰間 四拾間 右野岡左竹山、

一卯方 貳拾間

左田曾於郡之内、右野岡清水之内、

一卯辰間 貳拾貳間 左右いほ山、

一午方 貳拾間 右同

一巳方 六拾間 左右田

一辰方 三拾間 右同

一此繩末姫木迫ノ出口新溝横手ノ元、国分・清水・

曾於郡三方境、

合間数千七拾三間

町ニシテ拾七町五拾三間、是迄曾於郡境、

惣合間數四千九百拾九間

道乘貳里九町五拾九間 姫木惣廻

一 姫木中道、濱之市と霧嶋通道曾於郡之内、松永村之境

と

一 未申間 八拾間 左右田

一 未方 百間 右田左人家

一 午未間 六拾間 右田左畠

但新溝土手尽、

一 辰巳間 八拾間 右同

一 巳方 貳拾間 右同

左溝を八間程山野村枝村有、

一 午未間 百貳拾間 右田左新田溝、

一 午方 百貳拾間 右同

一 未方 貳拾間 右同

一 午方 八拾五間 右同

但此繩末溝是迄、

一 申酉間 百十三間

但百十三間右人家左田

一 申方 四拾間

此繩末霧嶋と濱之市通道国分内村之境大津川畑迄、

合間數八百五拾八間

丁ニシテ拾四町拾八間 姫木中道

御制札本と

一 姫木城大手之口 分間八町程、目掛戌亥ノ間當、

一 城惣廻 三拾貳町廻程

但四方かけ竹雜木山

一 城之立 六町程

一 城之横 貳町半程

一 大手之口ノ高サ拾五丈程

一 城之中央ニ出水有、

一 大手之口上リ立ノ元ニ、金五石ト申傳石有之、

一 大手之口と目掛巳ノ方ニ當テ分間四丁程、さしか峯

ト申所有之、別ニ古来と申傳由緒無御座候、

一 城ノ近邊ニ川沼池無御座候、并城ヲ見入之高キ山無

御座候、

高頭千貳百六拾貳石壹升余 御制札ノ元と

一郡田親村 分間拾五町四間程、目掛子方當、右

枝村無御座候、

高頭五百五拾石七斤余 御制札之本

一山之路親村 分間三拾町八間程、目掛丑ノ方當、

右枝村無御座候、

高頭千三百四拾三石貳斗貳升余 右同

一姫木親村 分間貳拾壹町程、目掛酉ノ方當、

一新原門枝村 姫木親村ノ分間八町程、目掛丑ノ方

當、

一飯牟礼門枝村 右親村ノ分間六町程、目掛寅卯方

當、

高頭七百五拾三石四斗壹升余 御制札ノ本

一弟子丸親村 分間八町拾貳間程、目掛午方二當、

右枝村無御座候、

高頭四百九拾九石七斗三升余 右同

一川原親村 分間壹町貳拾壹町^間程、目掛辰ノ方二

當、

一瀬戸口屋敷枝村 川原親村ノ分間壹〇程、目掛戌

方當、

一口輪野枝村 川原親村ノ分間五町程、目掛卯方

當、

右者繪圖御出来ニ付、清水惣廻并通道・麓小路各御見分ニ而、壹間六尺三寸ニシテ縄曳仕、帳面相究差上申候、以上、

行司

宮田山之丞

同

元禄十一年寅十二月十七日 田中為右衛門

竹木見廻

岩松左衛門

同

鯨嶋惣左衛門

郡見廻

高橋新右衛門

同

有馬勘右衛門

暖

安田^(虫)□右衛門

同

久松清右衛門

同

鶴丸助右衛門

繪圖御檢者衆

永山与右衛門殿

牧忠太兵衛殿

絵師

加世田孝左衛門(花押)

右同

伊瀬知五右衛門

右同

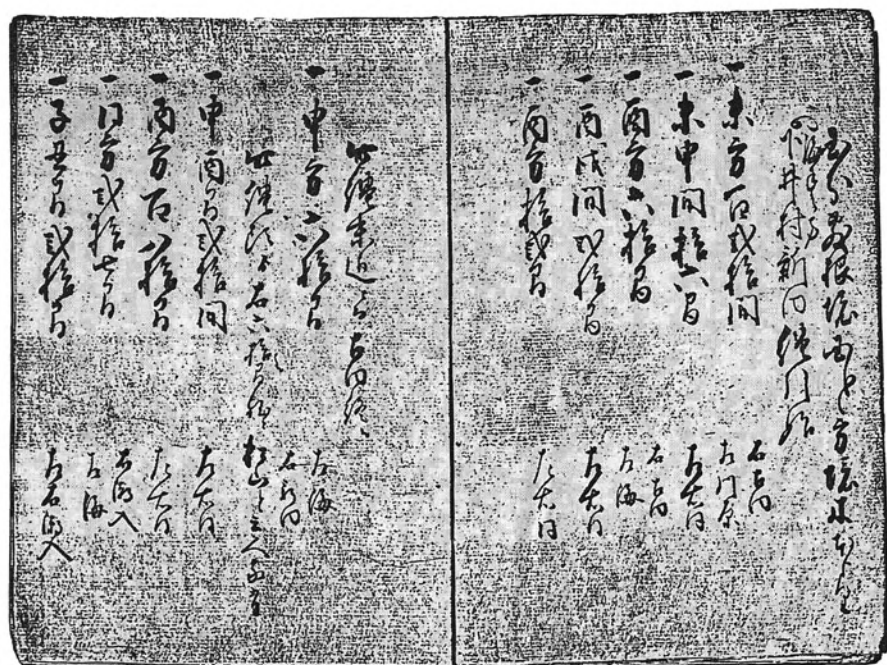
米郎喜右衛門印(花押)

檢者

牧忠太兵衛印(花押)

右同

永山与右衛門印(花押)



『国分新道新田縄引帳』(天保8年)

十一 高 帳

(一) 龍伯様御代国分衆高帳

国分市立郷土館は、龍伯様国分衆中高帳の複写を所蔵している。原本の所在は不明で、昭和四十八年国分郷土誌の編さんの時収集されたものらしい。

龍伯（十六代義久）は、慶長九年（一六〇四）に浜之市の富隅城から国分舞鶴城に移った。そのころの国分衆中についての記録は、野村家に伝わる古文書をまとめた国分諸古記に「慶長十年国分衆中」として掲載されている。しかし知行高についての記載がない。さいわい有馬家文書に文政三年（一八二〇）写しの「龍伯様御代国分衆高帳」があり、義久時代の国分郷士の知行高を知る貴重な史料と思われるので転載する。

(二) 高取納帳

万延元年（一八六〇）の山内家の石高の収支を記載した文書。

国分市中央二丁目二四の三一、山内久実氏より国分市

立図書館に寄贈されたものである。

(三) 本田家知行名寄目録

文化三年の襲山郷士本田安左衛門の知行名寄目録

(表紙)

龍伯様御代国分衆高帳

龍伯様御代国分衆高帳

龍伯様御代国分衆中高帳

一高千五拾貳石九斗六升□合

大膳亮殿

一高□□七拾六石壹斗貳升六合

本郷掃部介

一高千七百五拾五石四斗五升五合

伊集院半右エ門

一高千八百卅三石貳斗九升四合

山田民部小輔

一高千貳百八拾六石九斗八升

吉田美作入道

一高千百廿八石四斗五升

相良彦四郎

一高千拾石七斗貳升

鎌田玄番介

一高千三石五升三合

土持左衛門權頭

一高九百五拾石

喜入大炊介

一高六百三拾石

本田大炊大夫

一高五百七拾石

平野六郎左エ門入道

一高五百六拾貳石

平田越前守

一高五百五拾石

税所越前守入道

一高五百四拾壹石八斗四升五合四勺

野村但馬

一高五百四拾四石七斗五升三合

大善坊(是枝次)

一高五百六石三斗壹升壹升四合マ

猿渡新助

一高五百六石四斗六升六合

福崎新兵衛

一高四百七拾石七斗八升七合

東郷安房守入道

一高四百六拾四升四合

伊地知理兵衛

一高四百五拾石

阿多甚左衛門

一高四百廿石五斗貳升五合

吉田六郎左衛門

一高四百拾壹石三斗七升

田代形部少輔

一高四百石

本田三河守

一高式百八拾三石六斗式升五合

〔中江氏家〕
□瑞仙

一高四百七石

上原右衛門佐

一高式百六拾四石五斗三升七合

山田土佐守

一高式百貳石貳斗壹升

北原治部左衛門

一高式百五拾石

川上猪右衛門入道

一高三百八拾石

相良勘解由次官

一高百五拾石壹升

野村藏人頭

一高六百五拾壹石

山口内藏之介

一高式百貳拾石九斗八升八合

遠矢重兵衛

一高三百四石六斗五升六合

玄與

一高式百貳拾石壹合

大野左近惣監

一高三百拾石六斗

米良休右衛門

一高式百貳一石壹斗六升七合

笠山民部左衛門

一高三百五石四斗六升六合

町田甚兵衛

一高式百拾石壹升

町田駿河守

一高三百四石四斗三升貳合

佐多六郎兵衛

一高式百八石五合

川上左京亮

一高三百四石三斗八升貳合

伊地知清右衛門

一高式百四石

指宿耆岐守

一高三百石六斗五升八合

小野左京亮

一高式百石

岩切縫殿介

一高三百石貳斗壹升五合

大山六右衛門

一高式百石

野村才右衛門

一高三百三石六斗五升

米良權介

一高式百石

平田狩野介

一高三百三石六斗五升

和田乗助

一高式百石

税所弥右衛門

一高三百石

八木新右衛門

一高式百五拾四石貳斗五合六勺

児玉四郎兵衛

一高三百石

川上又左衛門

一高式百石

下村主水佑

一高三百石

三原次郎左衛門

一高式百五石九斗六升貳合

〔加治木是校氏家〕
存力坊是校大善坊二男

一高三百石

藤山茂助頭

一高式百石壹斗九升

鯨嶋大藏少輔

帳 高 十一

一高貳百石	伊集院備後守	一高百廿五石七斗	肥後甚兵衛
一高百八拾石四升四合	永吉半兵衛	一高百廿壹石	大迫平右衛門
一高百六拾石	阿多仲五郎	一高百廿石	有馬左兵衛頭
一高百六拾石	野間孫兵衛	一高百廿石	市來太郎右衛門
一高百五拾石	本田仲三郎	一高百拾石	鎌田四郎右衛門
一高百五拾石	春山越中守	一高百拾五石	慶阿弥
一高百五拾六石貳斗八升貳合	飯牟礼紀伊守	一高百拾五石	藤阿弥
一高百五拾三石	上原源右衛門	一高百四拾貳石壹斗壹升	本学坊
一高百五拾六石七斗七升八合	蒲地帶刀長 _子	一高百九石貳斗八合	德永源兵衛
一高百五拾石七斗三升	野村織部頭	一高百六石五斗三升三合	折田对馬守
一高□拾壹石貳斗壹升	木原十郎左衛門	一高百三石	川野江兵衛
一高百四拾石	德永銀之允頭	一高百壹石三斗六升貳合	長浜與一兵衛
一高百四拾石	月野石見守	一高百壹石七斗四升貳合	瀬戸口三右衛門
一高百三拾六石	八代四郎兵衛	一高百三石八斗八升	鎌田少外記
一高百三拾石壹斗六升	妹尾傳兵衛	一高百貳石	奥山藤五郎
一高百三拾石八斗	野村長左衛門	一高百石	阿多勝右衛門
一高百拾石	平田主水左衛門	一高百石	因野喜兵衛
一高百廿六石壹斗四合	大馬李兵衛	一高百石	坂元平右衛門

一高百石

阿多才兵衛

一高五拾石

川村玄番之允

一高百石

安樂伊予守

一高九拾石

宮内主水介

一高百石三升貳合

松元彦左衛門

一高四拾五石

大貳

一高百石九斗五升八合

白浜甚右衛門

一高八拾貳石

本田主馬首

一高百貳石三斗

山口对馬守

一高八拾六石

宮原右兵衛

一高百石

中江主水佐

一高八拾五石

指宿主税介

一高百石

長江休右衛門

一高八拾五石貳斗三升六合

村田源左衛門

一高百石五斗四升

家村筑後守

一高八拾四石壹斗貳合

臼井千右衛門

一高百石

道正休甫

一高八拾壹石

久留弥左衛門

一高百九石貳斗五升九合

黒田折之允

一高八拾壹石九升五合

津留嘉次郎作

一高九拾五石壹升

有馬清之允

一高八拾石八升

本田九右衛門

一高九拾五石

肥後壱岐守

一高八拾壹石

蒲生宮内少輔

一高九拾石六斗八升四合

税所志摩亮

一高八拾石

有馬主繕正

一高九拾石壹斗

有馬喜右衛門

一高八拾石

加世田善右衛門

一高九拾石四斗貳升三合

中村善兵衛

一高八拾石

南雲宮内少

一高九拾石三斗九升

田中对馬守

一高八拾石三升貳合

本田奎介

一高九拾石

伊地知筑後入道

一高八拾壹石壹斗九升貳合

市来善兵衛

一高九拾八石

岩切與兵衛

一高八拾石

伊地知勘解由次官

一高八拾石	調所大炊左衛門	一高六拾五石	高野善左衛門
一高八拾石	田実彦右衛門	一高六拾五石貳斗	川村帶刀左衛門
一高八拾石	大迫四郎兵衛	一高六拾四石四斗三升	井尻八兵衛
一高七拾六石壹斗壹升四合	宮崎兵部少輔	一高六拾四石貳斗 ^{〇八升} 五合	藺田助右衛門
一高七拾五石	山田弥兵衛	一高七拾三石	武村孫左衛門
一高七拾三石	浦川藤右衛門	一高六拾壹石	本田半左衛門
一高七拾石四升七合	弓削藤右衛門	一高六拾壹石	長濱後藤衛
一高七拾石九斗四升壹合	福屋七助	一高六拾石六斗貳升壹合	春屋宗右衛門
一高七拾石	長浜十郎兵衛	一高六拾石貳斗七升六合	平田為兵衛
一高七拾石四升五合	松崎奎右衛門	一高六拾石	染川源之充
一高七拾石三升八合	永利傳右衛門	一高六拾石五斗	楠元伝兵衛
一高七拾石	町田助右衛門	一高六拾石	福崎小左衛門
一高七拾石四斗七升七合	野村弥四郎	一高六拾石	宇田七左衛門
一高七拾石八斗壹升	三清後宅	一高六拾石	長崎織部頭
一高七拾石八斗壹升	肝付佐左衛門	一高六拾石	川村新右衛門
一高七拾石貳斗四升貳合	服部弓兵衛	一高六拾石	川上治部右衛門
一高六拾九石九斗壹升七合	伊集院形部左衛門	一高六拾石	永吉三河入道
一高六拾九石壹斗貳升	留松長兵衛	一高六拾石七升貳合	田中氏欸 等意

一高六拾石

肥後因幡守

一高六拾石

伊集院九郎兵衛

一高六拾石

江田源左衛門

一高六拾石

湯治左近持監

一高六拾石

新納式部少

一高六拾石

湯治四郎右衛門

一高六拾石五升

四元壱岐守

一高五拾九石七斗三升壱合

長谷場主膳正

一高六拾石

世竹生佐渡入道

一高五拾六石七斗三升

新納四郎右衛門

一高六拾石

荒田助右衛門

一高五拾石

坂元彦右衛門

一高六拾石貳斗五升

畠山宇右衛門

一高五拾五石

津曲善左衛門

一高六拾石

市来弥兵衛

一高五拾八石

長谷場主水輔

一高六拾石

平賀和泉守

一高五拾四石三斗八合

村岡豊前守

一高六拾石

上原堅助

一高五拾四石壱斗貳升六合

吉田九郎右衛門

一高七拾石

中島四郎右衛門

一高五拾石

阿多勝次郎

一高六拾石

松下盛右衛門

一高五拾貳石

有馬弥六左衛門

一高六拾石

向井勘解由次官

一高五拾石九升

吉田丹波入道

一高六拾石

川嶋新五左衛門

一高五拾石七合

井戸平兵衛

一高六拾石

岩切彦七

一高五拾石壱升六合

米田二之亮

一高六拾石

皿良善助

一高五拾石三升貳合

野村玄蕃

一高六拾石

平田肥前入道

一高五拾石

奥原佐之亮

十一

一高六拾石

斎藤佐渡入道

一高五拾三石六斗

辻子助四郎

古 文 書

一 高五拾石 大迫善右衛門

一 高五拾石 井尻

一 高五拾三石壹斗五升 勝部助右衛門

一 高五拾六石 松田万右衛門

一 高五拾石二斗四升 市木藤助

合貳百六人

文政二年庚辰六月藤井親睦より致借用写置候事

(表紙)

萬延元年申秋

高 取 納 帳

山内甚右衛門俊徳

定出米九石三合壹才 人役米込

申十一月十七日相渡ス

一 一匁貳百三拾五文 梅ヶ谷永作畠代

十一月廿日渡ス

一 同三百八拾四文 内村永作日用かす 出牛かす

内貳百五文 日用かす

酉六月廿五日

一 同三百七拾文 内村永作夏免本銀長太郎へ渡ス、

田高

申十月十八日

志岐^(虫)□十郎印

一高六石五斗

敷根上之段村之
有村門

指宿仲兵衛印
月の木直右衛門印

納米貳石五斗八舁七合六才

十一月二日

本行之内四斗三舁、新橋次左衛門殿方江以後總方之節

内檢高壹斗七舁六合四夕八才

證文出ス

付入いたす筈也、御藏免之儀者拙者格護、

差引残而

現高六石三斗三合五夕貳才

上小川村之
上村門

納米貳石五斗壹舁六合七夕六才

納米四石八斗四舁貳合三夕四才

外二壹合九夕四才 賦米入

内壹石六斗八舁 出米入

合納米貳石五斗壹舁八合七夕

受取濱之市出納藏

内七斗五舁 出米入

十一月十三日入

十月廿六日

一麦六舁五合 押入ニシテ三舁貳合五夕受取

一麦壹斗貳舁壹合六夕 真米壹石六斗四舁四合 上小川之長次郎
米ニシテ六舁八夕入 申十月十五日 国分郷士

十月廿六日受取

一真米壹石七斗六舁八合七夕

十一月十三日入

中村徳之助印
大迫源之丞印

受取 福山出納藏

真米壹石壹斗八舁

敷根之
新五左衛門

一真米六斗貳舁

證文貸ス

高 十一

国分郷士
宮原清右衛門印

屋敷方畠自作上村門方江遺ス分 十月廿二日

九月十三日受取

九月廿五日受取貸

一真米六斗

一真米貳石

一同貳斗 上小川之休助方江拙者遣シ分

長次郎方_レ遣ス、明日受取之節

十月廿四日

一同九舛七合 上小川之源兵衛_レ入

十月廿五日

一同壹斗六舛 鎌田新角殿_レ入

十一月二日

一同壹斗 安楽小兵衛殿_レ入

十一月十三日

一同壹合三夕四才 同人

十一月十五日

一同三斗六舛 松田本乘院殿_レ入

十一月廿一日

一同三斗五舛 本田七郎右衛門殿_レ入、益田氏ふりかえ、

十二月十九日

一同四斗七舛 服部喜之助殿_レ入

十二月廿二日

一同貳斗四舛 益田次郎殿_レ入

一高四斗六舛四合三夕四才

納米壹斗八舛四合八夕壹才

内五舛出米入

十月十二日

一麦五合 押入ニシテ貳合五夕受取 申十一月 国分郷

士

十月十二日受取

十四日 中村徳之助印

一真米壹斗三舛四合八夕三才

大迫源之丞印

十月廿二日

證文出ス

一高壹石壹斗

内畠高壹斗壹舛九合七夕九才

納米四斗三舛七合八夕

受取濱之市出納蔵

内壹斗六舛 出米入

真米壹斗六舛 四郎助

向花村之

柳門

府中村之

西門

請取濱之市出納蔵

真米五舛 府中之 清右衛門

十一月十五日 申十月十三日 国分郷土

一麦尅舛尅合 中村徳之助印

米ニシテ五合五夕入 大迫源之丞印

十一月五日 十一月十五日

一真米貳斗七舛七合八夕受取 證文出ス

一高尅石尅斗尅舛七合七夕尅才 新田村之 田畑門

畠高五舛三合尅夕三才

納米四斗四舛四合八夕五才 受取

内尅斗五舛 出米入 真米尅斗五舛 新田村之 喜太郎

十月廿四日入 申十月廿三日 高帳掛

一麦尅舛貳合 中村新蔵印

一真米尅斗貳合八夕五才受取

一同尅斗九舛貳合 枝本意仙殿入筈 十月廿四日

代棧三貫七拾貳文 十二月八日受取 證文貸ス

但尅石二付拾六貫文直成

一高五石六舛貳合五夕

畠高尅石二付六舛九合貳夕、 検地

府中村之 末吉門

納米貳石尅舛四合八夕八才

畠高損六舛貳合尅夕四才

納米貳舛四合七夕五才引

残而納米尅石九斗九舛尅夕三才 十一月五日

外二六夕八才 賦米入 證文貸ス

合納米尅石九斗九舛八夕尅才

内五斗 出米入

十一月五日 真米尅斗三舛七合 府中之 源左衛門

一麦五舛六夕 申十一月二日 国分郷土

米ニシテ貳舛五合三夕受取 中村徳之助印

十月五日入 大迫源之丞印

一真米尅石貳斗八舛 出米尅斗八舛九合

十一月五日 大塚七左衛門殿入

一同貳斗入 受取

戌十二月六日受取 真米尅斗八舛 府中村 伊左衛門

残而先米尅舛尅合八夕九才受取 高帳掛

申十一月六日 肥後新蔵印

出米合五斗

一高八石七舛四合八夕九才

栗野北方村之
平谷門

内田高七石四斗九舛五合六夕七才

損高式斗六舛七夕九才

現高七石八斗壹舛四合壹夕

納米三石壹斗壹舛

外ニ貳合八夕七才 賦米入

合納米三石壹斗壹舛貳合八夕七才

内壹石八舛 出米入

十月廿一日入

一麦七舛八合壹夕

押入ニシテ三舛九合五才

酉正月六日受取

一夫良三百文

一淺四貫五百文 鹿もた駄代元崩

内七百文酉正月六日受取

九月廿九日受取貧ス

九月廿日受取

真米八斗

一真米七斗五舛

此所ニ米四表預リ

九月廿九日新五郎入

一糯五斗四合五夕

十月廿一日入

一同八斗

十一月廿一日

一同壹斗六合三夕七才

右九月廿一日相納いたし候

十月廿一日

證文貸ス

受取濱之市出納蔵

真米貳斗八舛六合 喜太郎

申十月九日 国分郷士

中村徳之助印

大迫源之丞印

諸取濱之市出納蔵

真米六斗六舛六合 次郎

申十月九日 国分郷士

中村徳之助印

大迫源之丞印

出米合九斗五舛貳合

栗野幸田村之
窪田門

一高拾貳石八斗七舛三夕九才

内畠高八舛三合三夕三才

納米五石壹斗貳舛貳合四夕貳才

十一月六日

内貳石 出来入

證文出ス

寅年々高壹石二付三合七夕五才ツ、休ミ地

合納米四舛八合貳夕六才下り

未十一月元

利一分

申壬三月朔日種子親代とシテ貸ス

一淺壹貫百五拾五文

一金子三朱 淺ニシテ壹貫五

百文

未十一月々申二月迄利六拾九文

元利合壹貫貳百貳拾八文

内百拾貳文申十一月六日入

十一月朔日入

一真米貳石壹斗五舛

内壹斗九舛三合七夕壹才 古川門江付入

残而壹石九斗五舛六合貳夕九才

十一月六日入

一同壹石壹斗八舛八夕七才

酉三月廿九日種子親代ニ貸ス

一金子壹歩壹朱 太次郎

淺ニシテ貳貫五百文

右同

一塩壹貫文め

同人

右萩原十兵衛方々掛ニ而取入貸ス

受取山ヶ野金山藏

受取山ヶ野金山藏

真米壹斗七舛四合

栗野之

休助

真米壹斗四舛七合 孫助

申十月廿六日 国分郷士

申十月廿三日 国分郷士

有嶋休吉印

肥後五右衛門印

肥後五右衛門印

有嶋休吉印

受取山ヶ野金山藏

受取山ヶ野金山藏

真米七舛四合

栗野之

源左衛門

真米壹斗壹舛四合

栗野之

孫助

申十月廿日 国分郷士

申十月廿日 国分郷士

肥後五右衛門印

有嶋休吉印

有嶋休吉印

肥後五右衛門印

請取山ヶ野金山藏

受取山ヶ野金山藏

一同壹斗

栗野之
孫市

真米九斗五舛六合

栗野之

太次郎

帳 高 十一

申十月十四日 国分郷士 申十月七日 国分郷士

肥後五右衛門印 肥後五右衛門印

有嶋休吉印 有嶋休吉印

受取山ヶ野金山蔵

真米𦵔斗貳合 栗野之 太次郎

申十月廿日 国分郷士

肥後五右衛門印

有嶋休吉印

請取山ヶ野金山蔵

真米𦵔斗七舛 栗野之 萬次郎

申十月廿四日 国分郷士

有嶋休吉印

肥後五右衛門印

受取山ヶ野金山蔵

真米𦵔斗 栗野之 庄左衛門

申十月廿二日 国分郷士

肥後五右衛門印

有嶋休吉印

都而田高

一高𦵔石貳斗四舛六合五夕𦵔才

納米四斗九舛六合𦵔夕𦵔才

内𦵔斗七舛 出米入

申二月廿日種子粃代二貸ス

一大𦵔四枚

𦵔ニシテ四百六拾四文

右十一月十五日受取

十一月十五日

一真米三斗七合𦵔夕𦵔才受取

受取山ヶ野金山蔵

十一月五日

證文出ス

有嶋休吉印

本行之内𦵔舛九合拙者受取申候、

残而五舛七合以後總方之節林伊左

衛門殿方江付入ル筈也、御蔵受取

之儀ハ拙者格護、

栗野幸田村之

庄屋浮免

請取山ヶ野金山蔵

栗野之 與之助

申十月九日 国分郷士

肥後五右衛門印

有嶋休吉印

出米合式斗四舁六合

一高六石五斗壹合三夕四才

栗野北方村之
坂元門

内畠高壹石九舁三合七夕五才

田畠合損高壹石三斗六舁貳合貳夕壹才

安兵衛殿高迄引

現高五石壹斗三舁九合壹夕三才

内田高壹斗三舁五合貳夕八才之内七舁壹合見掛地高

納米五合六夕七才

残而田高六舁三合八夕八才畠高二込

田畠合高五石壹斗三舁九合壹夕三才

納米貳石四舁五合五夕七才

外二壹舁四合九夕八才 賦米入

合納米貳石六舁五夕五才

内七斗出米入

帳

高

十一

十一月十三日

一麦五舁壹合

米ニシテ貳舁五合五夕受取

申之年見掛地なり

米三舁三合壹夕三才引

一夫良三百文

十月八日入 與次郎

一真米貳斗七合

十月廿四日入

一同四斗貳舁

十一月二日五郎助入

一同貳斗三舁七合

十一月十三日

十一月八日仙右衛門入

證文出ス

一同貳斗四合

十一月十三日入

残而現米貳斗貳舁八合四夕貳才受取

受取加治木出納藏

受取加治木出納藏

真米九舁貳合

くり之

与右衛門

真米四斗貳舁六合

栗の新蔵

申十月廿九日 国分郷士

申十一月五日 国分郷士

山本覚右衛門印

山本覚右衛門印

橋口七左衛門

橋口七左衛門

請取加治木出納藏

淺ニシテ壺貫文

十一月五日

真米貳斗壺舁三合

右十一月四日受取

證文出ス

申十一月五日 国分郷士

十月廿一日入

新納宗之助印

一真米貳石

請取山ヶ野金山藏

山本覚右衛門印

十一月三日入

真米八斗

栗野之
十太郎

橋口七左衛門

一同壺石四斗

申十月十二日 国分郷士

出米合七斗三舁壺合

十一月四日入

肥後五右衛門印

一高拾四石四斗三舁六合四夕六才

栗野幸田村之
古川門

十二月四日露田門を付入

内畠高壺石貳斗壺舁六合四夕六才

一真米壺斗九舁三合七夕壺才

受取山ヶ野金山藏

納米五石七斗四舁五合七夕壺才

酉三月十四日種子親代ニ貸ス

真米八斗五舁貳合 三五郎
栗野之

内壺石六斗 出米入

一金子貳部

申十月二日 国分郷士

申二月廿日種子親代

申九月廿九日受取貸ス

一金子壺歩 古川門 けさ助

一真米貳石 吉村門江渡

淺ニシテ四貫文

有嶋休吉印
肥後五右衛門印

淺ニシテ貳貫文

右十一月四日受取

十月廿一日受取貸ス

一高八石壺斗七舁三合七夕

栗野米原村之
藤垣門

申壬三月十日若松門勘助江渡

一同壺石貳斗

畠高三斗壺舁五合壺夕貳才

一同貳朱

納米三石貳斗五舁三合壺夕四才

内壺石八舛 出米入

未十二月元一わり七分

一錢貳貫百貳拾五文

未十二月の申十一月迄利四百七拾文

元利合貳貫五百九拾五文

内壺貫三百文受取十一月六日

申九月廿五日受取食ス 愛助

一真米壺石貳斗

十月朔日受取食ス 太左衛門江渡

一真米壺石

但米四表預リ

十月朔日受取食 太左衛門江渡

一同壺石

帳

十一月六日入

一真米貳石

高

十一月六日入

一同五舛壺合壺夕四才

十一

十一月六日

一同貳舛五合

代箋三百七拾五文受取

一出米壺斗四舛七合

久保八郎次殿の入

一同三舛六合

濱田権助殿の入

一同三合

山元四郎太殿の入

橋口七左衛門印

受取加治木出納蔵

真米壺斗四舛 くりの之 善右衛門

申十月廿九日 国分郷士

新納宗之助印

山本覺右衛門印

橋口七左衛門

受取濱之市出納蔵

真米六斗九舛三合 米永之 有 助

申十月廿一日 国分郷士

中村徳之助印

大迫源之丞印

出米合壺石壺斗七舛七合

受取加治木出納蔵

くりの之 真米九合 金左衛門

申十月廿五日 国分郷士

新納宗之助印

山本覺右衛門

門永作

一真米壺石貳斗六舛

内六斗六舛 定納入

残而六斗 申十二月卅日受取 手前受取分

肥後市郎太殿

一 出来式斗四舛八合式夕式才

野口割

但高帳掛肥後新藏殿方江差越差入候、

門付永作六舛蒔

一 真米壹石式斗

宮内

栢山伊右衛門殿

内六斗六舛三合定納入

残而五斗三舛七合手前受取分

右同七舛蒔

一同壹石四斗

右同人

内六斗六舛式合定納入

残而七斗三舛八合手前受取分

一同壹石式斗式舛

右同人

内六斗六舛式合定納入

残而五斗五舛八合

寅年破損二付

内壹斗三舛八合手前受取分

二行合壹石四斗壹舛三合手前受取分

酉三月十九日受取

屋敷

一 真米六斗申十二月十五日受取 服部庄次郎殿

外三舛六合三夕七才 丑秋分 庄七郎殿方

式斗 卯秋分 同人

幾壹貫五百文 寅秋分 同人

壹石三斗七舛九夕三才子秋分同人

三斗 亥秋出来替米分 同人

式斗 未秋分 庄次郎殿方

内四舛五合四夕五才申十二月十五日入

庄次郎殿

右庄七郎殿不足ハ、外借用分壹緒ニ受取切ニ而相濟

候、申十二月晦日

屋敷明地

一 真米式斗五舛

肥後伊三太殿

内六舛十月十二日鶴田庄太郎殿入

壹斗四舛十一月十四日江口休八殿入

五舛十二月廿九日伊三太殿入

十二月廿八日受取

一同三舛八合三夕七才

坂本簾左衛門殿

一 真米 壹斗三舛

小野小四郎

一同 壹斗五舛三合六夕式才

右同人

一同 八斗

右同人

三行合 壹石八舛三合六夕式才申十二月晦日受取

一同 壹斗九舛

肥後喜右衛門殿下人
金左衛門

代 貳三貫貳百三拾文
壹石二付拾七貫文直成

外二 壹貫貳百拾文丑秋分

真米 壹斗九舛未秋分

代 貳貳貫七百五拾五文

一 真米 壹斗九舛

肥後喜右衛門殿下人
孫三

外二 壹斗八舛 壹合八夕式才子秋分 金左衛門受取合

貳七百貳拾四文午秋分

壹斗九舛卯秋分

壹斗七舛六合四夕辰秋分

貳四百七拾貳文午秋分

上小川村之内浮免

栗原上田七畦廿四步

一 真米 壹石四斗七舛

自作

上川原上田五畦

一同 九斗貳舛

上小川村之
休助

右 老行休助方龍王田上納拙者ノ遣シ分ニ差引相濟

也、

城下中田六畦廿貳步

一同 九斗五舛

自作

古柳田中田壹畦拾三步

一同 壹斗八舛

川添下田四畦八步

内 貳拾步山内吉左衛門殿方

一 真米 四斗貳舛

自作

内 七舛吉左衛門殿方江遣ス分

牛渡瀬下々田壹畦拾貳步

一同 壹斗貳舛

上小川村之
萬次郎

塩入川原下田貳畦拾步拘地

一同壺斗八舛

右同人

式行合三斗

但萬次郎田上納ニ差引相濟也、

有下川原上畠式畦拾六步

一真米三斗六舛

自作

野間田中畠式畦拾五步

一同三斗

自作

宇都山畑壺畦拾七步

一同壺斗三舛

自作

北法楽寺下々田六畦四步

内式畦三步楠元氏方

一同五斗

自作

内壺斗七舛式合楠元藤五郎殿江遣シ分

實地上納左之通

常念寺下々田式舛蒔御藏入

一真米三斗式舛

地主向花村之

次郎左衛門

古屋敷畠壺塚半御藏入

一同式斗三舛

地主松木村之
小右衛門

宮畠三塚御藏入

一同四斗式舛

右同人

式行合

龍王田三舛蒔所入

一真米六斗

地主上小川村之
萬次郎

内三斗 牛渡瀬下々田、塩入川原拘地下田

萬次郎作人ニ付差引

三斗、十月廿四日林伊左衛門殿方江遣ス

ノ本行相濟也、

宮畠式塚半

一同三斗六舛

地主松木村之
金右衛門

右御藏江上納いたし相濟也、

龍王田八舛蒔年前受取

一同壺石八斗四舛

地主上小川村之
休助

但式合乘

内九斗式舛 上川原田上納ニ差引

式斗 上村門ノ入

七斗式舁 拙者方々遺ス、九月

ノ三行相済也

但式合乘ニシテ返米受取十二月晦日

合壹石五斗九舁六夕六才拂

一同三舁 替米

秋山庄右衛門殿

出米拂座

但式合乘ニシテ返米受取十二月廿四日

一出米三舁

鎌田新角殿

但返米式合乘リニシテ受取十月廿五日

出米入座

一同五舁七合 庄屋浮免過

林伊左衛門殿

一出米壹斗四舁七合

石塚八郎次殿

一同四斗三舁 有村門過

新橋治左衛門殿

一同三舁六合

濱田権助殿

一同貳舁 松木村入藏替

山内吉左衛門殿

一同三合

山元四郎太殿

一同貳斗五舁

山内甚助殿

一同壹斗八舁九合

石塚七左衛門殿

内壹斗四舁松木村入藏替係ニ貸ス

ノ三斗七舁五合

壹斗壹舁受取

一同貳舁壹合六夕六才 替米

山内吉左衛門殿

覚

一同六舁貳合 替米

久木田平左衛門殿

一真米四斗七舁貳合

高帳掛受取三通分

返米式合乘ニシテ受取申十二月十七日

一同四斗六舁壹合

加治木出物藏受取四通分

一出米四斗貳舁 替米

牧元用助殿

一赤米四斗貳舁六合

右同藏受取壹通分

但式合乘ニシテ返米受取十二月晦日

一真米壹石壹斗八舁

福山出物藏受取壹通分

一同三斗 替米

曾山市左衛門殿

一同三石八斗三舁五合

山ヶ野金山藏受取拾三通分

一同三石六斗三舛

濱之市出物藏受取七通分

代淺拾六貫文受取

ノ拾石四合

外三斗七舛五合 石塚八郎次殿、濱田権助殿・山元

十一月六日貸ス

藤崎利三次

四郎太殿・石塚七左衛門殿ノ入

代淺拾七貫文受取 十二月卅日

式斗四舛八合式夕式才 野口割ノ入

十一月八日

惣合拾石七斗式舛七合式夕式才

一同四斗

曾山喜次郎殿

内九石三合壹才 定出米 入役米込

但壹石二付拾五貫文直成

壹石五斗九舛六夕六才 八人江拂

代淺六貫文受取

三舛 秋山庄右衛門殿相拂

十一月八日

残而三合五夕五才過

一先米四斗

曾山休八殿

米賣留

代淺五貫四百五拾四文

内四貫拾式文受取

九月廿四日貸ス

残而壹貫四百拾式文、日用賃ニ差引相濟候事、

一納米六斗

藤崎利三次

表ニシテ三表 拾三貫五百文直成

十一月十一日

久木田善次郎殿

代淺八貫百文受 十月廿八日受取

代淺九貫文受取

十月九日貸ス

一先米壹斗

伊集院助四郎殿

一同壹石

立山盛右衛門

代淺壹貫貳百文受取

申十一月三日貸ス

一納米五石

立山盛右衛門

代淺八拾七貫五百文受取

十二月卅日

(表紙)

文化三年寅八月

知行名寄目錄

本田安左衛門

知行名寄目錄

岩戸口上屋敷^{十四間}廿二間
芎反八步大豆式表芎斗式升芎合

上屋敷——芎畦廿式步⑨余地

源右衛門

大豆芎斗四升七才

右本田藤左衛門方へ直

白落中屋敷^{十間}廿一間
七畦大豆芎表

中屋敷——式畦

有馬平八

大豆芎斗

道錫口

中屋敷五間 式畦廿步

余地

大豆壺斗七升四合

權左衛門

同所下屋敷十二間六畦六斗九升

下屋敷 壹畦

大豆壺升五合

本田次郎兵衛

右式行卯二月吉永親兵衛方江

(直ス)

妻屋口中屋敷十七間 壹反四畦廿式步大豆式表壺斗壹升

中屋敷 四畦廿九步

池田源兵衛

大豆式斗六升七合

松永村

永迫下屋敷十二間半 式反大豆式表

下屋敷 五畦

天辰長左衛門

大豆壺斗七升五合

右田改正二付馬場新助方へ

岩戸口

下屋敷七間半 六畦廿三歩

余地 三七

内三畦拾壹歩大豆壺斗三升五合五斗

大豆式斗七升壹合

右内書之通本田仲左衛門方へ 亥年直ス

一柴竹山十間式畦

右同 同人

雉子牟田

上畠十四間半 式畦八歩

大豆壺斗三升七合

休右衛門

桂松

上畠五間半 三畦廿歩

大豆式斗七合

安左衛門

雉子牟田

下田十二間半 七畦 せ町七

粗三表壺升

喜早右衛門

嶋田彦八仕立模合

岩戸口上畠九間 五畦三歩大豆三斗壺升三合

上畠 廿五歩

大豆五升三合

喜平太

御供田

上田十間

六畦廿歩

粗四表三斗四升

休太郎

くりす田下田八間 八畦八歩粗四表七升廿町十

下田 七畦廿壹歩

粗三表三斗式升壺合五斗

源右衛門

八反田中田十九間 壹反壹畦拾式步粗七表式斗七升

中田 五畦廿壹歩

粗三表三斗壺升

仲藏

右西牟田新衛門方へ

雉子牟田下々田十四間半 八畦拾九歩粗三表壺斗三升

下々田 壹畦廿六歩

粗式斗五升五合

次郎助

掛熊上田十三間
老反拾一步
初七表式斗式升せ町五

金助

平松上畠十二間
四畦大豆式斗四升
上畠 式畦

傳兵衛

九畦三步

初六表式斗三

四合五夕八才

大豆式斗式升

かはら田

せ町十一

中田四間半
五畦拾貳步

初三表式斗

源右衛門

右浅谷三左衛門方へ
かいの木下々畠十一間
六畦七步大豆式斗七升式合
下々畠 四畦七步

大豆式斗式升六合六夕九才
理右衛門

廣庭中田十三間
七畦拾貳步
初四表式斗二升せ町七

金四郎

合田畠屋敷九反五畦式步

右式行本田仲左衛門方へ

田方五反八畦式步

花牟礼中田九間半
三間
初七表式斗七表九升廿町五

中田 五畦七步

与七

畠方式反三畦
屋敷式反四畦式步

須川

せ町七

下田十一間
木畦廿九步

長次郎

合初大豆四拾表式斗式升七夕才
主拾五表主斗式升木合四才
武拾九表斗主升木夕主才
武拾八表式斗九升式合木夕主才

初主表式斗主升

右式行

慶応二年寅四月嶋田十郎方江直ス

□□□□□

初三拾五表八升四合九夕五才

大豆五表式升五合七夕六才

基右衛門

黒田

下々田十間半
拾五步

初主升

右式行池田庄右衛門方江末年直ス

樋渡下田十間半
三畦拾五步
初式表廿町二

下田 初畦拾六步

初三斗五合四夕六才

源右衛門

高拾四石木斗九升八合木夕木才
五斗六升九合四夕九才
五斗九升式合四夕五才
拾石六斗四合八夕式才
四斗式合九夕式才
三斗七升六合七才

右者今度重久村御檢地、文化二^丑十二月御奉行衆伊藤
嘉右衛門殿直御竿門割二付、如本令支配候、以上、

細山田十左衛門[㊦]

文化三年寅八月

川越盛右衛門[㊦]

小川喜兵衛[㊦]

本田安左衛門殿

十二 検地名寄帳

薩摩藩の総検地は、石田三成の文禄検地（二五九四）を始めとし、江戸時代に入り薩摩藩では慶長、寛永、万治、享保年間に四回の内検（大御支配）を行っている。その後は、必要に応じ臨時に小規模の検地を行ったと思われる。国分地方に残る検地名寄帳からもそれをうかがい知ることができる。

昭和四十八年の国分郷土誌編さん時に収集した検地帳の中には散逸したものもある。また残存している検地帳の多くは、欠落や破損があり虫食い等もあつて判読し難い。本資料編には、新発見の史料を含めた保存のよい四点を掲載する。

(一) 隅州曾於郡小村町屋敷御検地帳

本検地帳は、寛永九〇十年の内検によつて作成された検地帳と思われる。これは川内市高城町の上床家所蔵のものであるが、この表紙に上床主税助の署名があり、上床家に代々伝えられてきた古文書のひとつと分かる。

「小村」は、国分市広瀬の古名で、昭和二十九年に広瀬と改名された。ここは、錦江湾に注ぐ旧広瀬川河口の右岸に位置する浦町であつた。広瀬川の河口は船留まりとなり、琉球方面へ往来する外洋船も出入していた。ここ小村町屋敷の人々は、これら舟運に従事する船主や水夫として携わつていた。

寛永の内検（一六三二〜三）後、広瀬川は河道を大きく替える川筋直し（一六六二〜六）が行われているので、その後の小村屋敷は大きく変化したと思われる。

この史料は、川内市郷土史編さん委員会の木場武則氏より提供を受けたものである。

(二) 隅州曾於郡国分川内村御検地名寄帳

この検地名寄帳は、国分郷川内村の西田門のもので、国分市川内の西田家に伝わる古文書のひとつである。

川内村は、国分平野の東部を南流する検校川下流の右岸に位置し、河岸段丘の低い台地が広がった一隅にある。この付近は、奈良時代の条里制の遺構が周辺に残り、古くから開発されてきたところである。

本史料は西田家親族の徳重順子氏が所蔵している。

住所 鹿児島市鴨池新町二六―二一五〇一

(三) 隅州曾於郡・桑原郡国分福島村御検地名寄帳

福島村は小村の北側にあり、広瀬川下流の右岸に面していた。川筋直し（一六六二―六）以後、広瀬川と手籠川の二大河川の川跡が新田として開発された。

西中蘭門の門地は、この川跡の各地に散在し曾於郡と桑原郡の二郡にまたがっている。

本史料は、国分市松木町三九―三四、西中蘭俊一氏が所蔵している。

(四) 国分上小川上村門名寄帳

この検地帳に記載される門地は、国分郷麓の南部に点在する。国分煙草の名産地である竜王や砂走はこの門地にあるが、煙草耕作は郷土の特権であったので、この門地での耕作はなかったものと思われる。

この史料は、市立郷土館蔵となっているが、出所の記録が残っていない。

(表紙)

寛永拾年
酉癸

下々町

隅州曾於郡小村町屋敷御検地帳

三月拾三日

上床主 税助
新納仲左衛門尉

中屋敷^{十八間}一段三畝^{廿四歩} 時老斗九升三合 八十歳
大豆三俵六升八合 但なへぼう源兵衛尉
七十五歳 女房

一 男女式人

馬 老疋

曾木衆中宿借
神田寛左衛門尉殿

一 柿 式本 粃式升

一 桑 拾本 苗木

一 梅 老本

十二 検地名寄帳

新荒
下屋敷廿貳間七畦拾歩

蔦耆斗三合
大豆耆俵一升
明村 太郎左先

中屋敷八貳間五畦廿六歩

蔦八升二合
大豆耆俵五升五合
平右衛門尉後家

下屋敷九貳間六畝十八歩

蔦九升貳合
大豆耆俵九升
源左衛門尉

一馬 三疋

一柿 耆本杓一升

四十八歳
女房

廿二歳
子惣吉

廿歳
女房

廿五歳
下人

卅五歳
下女

七十五歳
名頭之母之

五十五歳
名子母之

蔦九升八合

五十歳

大豆耆俵一斗一升
市左衛門尉
右中存坊内衆

中屋敷拾貳間七畝

一馬 貳疋

一柿 耆本杓一升

四十八歳
女房

拾貳歳
女子

中屋敷十三間七畝

蔦九升八合
大豆耆俵二升

中屋敷八間三畦十四歩

蔦四升八合
大豆貳斗八升

一馬 一疋

一なし 一本

五十五歳
女房

廿四歳
男子

五十三歳
名子三右衛門尉

五十歳
女房

中屋敷八間五畝廿六歩

蔦八升貳合
大豆耆俵一斗三升

中屋敷七間五畦拾八歩

蔦七升八合
大豆耆俵一斗

一馬 貳疋

一馬 耆疋

廿八歳
名子惣左衛門尉

廿九歳
女房

廿一歳
右下女

对馬介当作

五十二歳
弥右衛門尉

明村
当作理左衛門尉

四十歳

志摩之丞

三十五歳
女房

五十六歳
下人

下屋敷^{六間}廿四間四畦廿四步
蔦六升三合

大豆三斗貳升

四十五歳

同下人

三十五歳

下女

四十二歳

彦兵衛尉

一馬 壹疋

一しゅろ 壹本

三十九歳

女房

十一歳

女子

五十八歳

下人

蔦壹斗七升

中屋敷^{十四間}一段貳畝四步

大豆二俵二斗九升

六十五歳

助左衛門尉

一桑 三本苗木

六十二歳

女房

廿五歳

子拾介

名子九郎左衛門尉

六拾八歳

女房

三拾二歳

子市介

六十七歳

名子助六

六十二歳

女房

七拾八歳

おは

山とめやしき

下屋敷^{十一間}八畦貳步

蔦壹斗一升三合 大右衛門尉先

大豆壹俵一斗八升

明村

下々屋敷^{九間}四畦十五步

蔦六升三合

大豆二斗七升

右者在郷二入

一茶 五拾目^{初七合}

下屋敷^{十四間}七畝

蔦九升八合

大豆壹俵一斗一升二合

国分衆中
当作淡路守

古荒

下々屋敷^{十四間}二畦拾步

蔦三升三合

大豆三升九合

明屋敷
七十二歳

下屋敷^{七間}二畦廿四步

大豆壹斗八升五合

千右衛門尉

一馬 壹疋

六拾歳

女房

一漆 壹本^{初一升}

四十歳

子甚助

三十四歳

女房

十六歳

女子

一しゅろ 壹本

一柿 貳本^{初貳升}

古荒

下々屋敷^{十六間}二畦十二步

蔦三升三合

明やしき

一漆 壹本^{初一升}

一馬 貳疋

五十式歲
女房

一小竹 壹束

四ツ
むすめ
四拾六歲

一桑 貳本 捌二升

五十式歲
女房
名子弓左衛門尉
四拾八歲

一しゅろ 貳本

名子弥市
四拾七歲

一しゅろ 壹本

廿五歲
女房

一しゅろ 四本

女房

一小竹 壹束

廿四歲
子弥兵衛尉
女房

下屋敷 十四間 四畦 廿步

蔭六升五合

東光院

下屋敷 拾一間 十六間

蔭八升 貳合

六十五歲
女房
源右衛門尉

下屋敷

蔭三升七合

大穴地大興寺
主計助

一馬 貳疋

六十五歲
女房

一馬 壹疋

一小竹 壹束

一柿 壹本 捌一升

三拾五歲
子源太郎

古荒
下々屋敷 十六間 貳畦

蔭二升七合

西市之丞先
明村

一桑 八本 捌八升

三拾歲
女房

下々屋敷 十六間 貳畦

蔭二升七合

三拾一歲
休左衛門尉

一しゅろ 貳本

一小竹 壹束

下々屋敷 十八間 四畦 廿四步

蔭二升七合

三拾一歲
休左衛門尉

一橙々 貳本

一小竹 壹束

下々屋敷 十八間 四畦 廿四步

蔭二升七合

三拾一歲
休左衛門尉

下屋敷 十二間 七畦 六步

蔭壹斗 壹合

六拾五歲
藤左衛門尉

一馬 三疋

蔭二升七合

三十式歲
女房

一馬 三疋

六拾五歲
女房

一しゅろ 四本

蔭二升七合

六ツ
男子

一茶 六拾め

三拾歲
子休三郎

一しゅろ 四本

蔭二升七合

廿五歲
下人

一桑 四本 捌四升

廿六歲
女房

一しゅろ 四本

蔭二升七合

四十九歲
下女

十二 檢地名寄帳

右名子
下々屋敷十四間 菟畦十歩 蔦壹升九合 七十八歳
親百五郎毫

七十五歳
女房
五十八歳
下人

古荒
下々屋敷十二間 三畦十二歩 四郎左衛門尉先 明村

下屋敷十六間 八畦十六歩 蔦一斗一升九合 四十八歳
二介

一馬 貳疋

四十歳
女房

十三歳
男子

名子助太郎 四十二歳
四十歳
女房

五ツ
むすめ

中屋敷廿二間 一段五畦十式歩 蔦二斗一升五合 三拾歳
太郎介
大豆三俵二斗

廿四歳
女房

一馬 三疋

一柿 菟本初一升

一小竹 貳束

七ツ
男子
七拾歳
親善左衛門尉

六拾四歳
女房

六十七歳
名子助四郎

六十三歳
女房

四十一歳
子助次郎

六十歳
下女

八十歳

名子次郎太郎

五郎兵衛尉先
明村

古荒
下々屋敷八間 二畦廿分

下々屋敷十八間 三畦十八歩

下屋敷八間 二畦四歩 蔦三升七合 五拾五歳
金介
大豆壹斗四升一合

一馬 壹疋

五十三歳
女房

十三歳
男子

名子利介 廿六歳

廿一歳
女房

名子後家 四十歳

書文古

古荒

下屋敷十四間三畦廿二分

古荒

下々屋敷十六間五畦拾歩

市右衛門尉先

明村

米五郎先

明村

五十歳

女房

七十三歳

名子弥七

七十五歳

同 徳五郎

七十八歳

は、

蒔一斗

明村

中屋敷九間七畦六歩

大豆壹俵三升三合

当作徳右衛門尉

蒔七升五合

五十四歳

安右衛門尉

中屋敷八間五畦拾歩

大豆壹俵八升

五十歳

女房

五ツ

男子

三拾歳

子徳右衛門尉

廿八歳

女房

六十歳

市兵衛尉

六十三歳

女房

川上伊与七殿へ身を売り候也

蒔三升三合

源六左衛門尉

大豆壹斗五升七合

蒔四升二合

喜左衛門尉先

明村

大豆二斗四升三合

蒔式升三合

国分

御舟藏地

大豆壹斗

下々屋敷十四間七畦十四歩

古荒

右同

中屋敷拾間六畦廿六

蒔九升五合

明村

一橙々 壹本

一しゅろ 壹本

中屋敷拾間四畦拾歩

蒔六升八合

大豆壹俵

五十歳

女房

四十歳

善太夫尉

蒔七升八合

下屋敷十六間五畦拾歩

大豆壹俵

四十歳

女房

一馬 壹疋

十二 検地名寄帳

一しゆろ 壹本
一桑 壹本 枳一升

拾老歳
男子
西ノ七月六日死四十五歳
名子千吉(抹消)
三十五歳
後家一人
七十三歳

下屋敷^{八間}三畦廿式歩
時五升式合
大豆二斗五升

典左衛門尉

一柿 壹本 枳一升

六十九歳
女房

一栗ノ木 壹本

一橙々 壹本

一しゆろ 壹本

時九升三合

六十七歳
部当

下屋敷^{拾間}六畦廿歩

大豆壹俵九升

喜右衛門尉

一馬 貳疋

五十五歳
女房

一桑 貳本 枳二升

一しゆろ 壹本

一橙々 壹本

下屋敷^{拾間}四畦廿歩

時二升五合

八十三歳

大豆三斗八合

市左衛門尉後家

古荒
下々屋敷^{十六間}二畦廿四歩

新左衛門尉先
明村

下屋敷^{卅間}貳反

時二斗八升

当作 明村
次郎太郎

下屋敷^{十二間}六畦廿四歩

大豆三俵二斗二升
時九升五合

源左衛門尉先
後家

大豆壹俵壹斗

一しゆろ 壹本

中屋敷^{十四間}壹段二畦四歩

時一斗七升

国分

御飯屋

大豆二俵二斗八升

一九年母 壹本

一梨子木 壹本

一しゆろ 壹本

合屋敷貳町八反一畦五歩

内在郷やしき二ツ竈

大豆五拾六俵一斗二升

一男 七十四人

一女 六十八人

一馬 四十五疋

一柿 十本 枳一斗

一桑 十九本 枳壹斗九升

一茶 八十目 枳壹升一合二勺

一しゆろ 廿四本

一九年母 壹本

一九年母 壹本 一なし 壹本

一小竹 八束 一桑苗 十二本

一梅 二本 一橙々 五本

合上木粗三斗一合二勺

一敷網 下々 壹帖者

町

右網二付舟

一丸木舟 貳艘者

一丸木舟 壹艘者

一丸木舟 壹艘者

一丸木舟 壹艘者

一同舟 壹艘者

一同舟 壹艘者

合船数 六艘者

一敷網 下々 壹帖者

右網二付舟

一丸木舟 壹艘者

町ノ
太助

助四郎

町ノ
百五郎 毫

同
源三郎

同
三郎次郎

町

助左衛門尉

一同舟 壹艘者

一同舟 壹艘者

一貳枚帆 壹艘者

一浮ノ舟 壹艘者

一同舟 壹艘者

合舟数 六艘者

一六端帆 あきない舟 壹艘者

一三枚帆 同

一貳枚帆 同 壹艘者

寛永十年二月廿八日二作申候、あきない舟

同 一四枚帆 壹艘者

寛永十年三月廿七日三貫申候 同 右者新造船楠皆木

一五枚帆 同 右者松ノ古舟

合船数 七艘者

あきない船

算者

小田原 豊前守④
秋永与八兵衛尉

九郎左衛門尉

安右衛門尉

彦兵衛尉

源左衛門尉

淡路介

あきない舟

舟□ (親カ)
淡路介

同 休右衛門尉

同 金介

同 利左衛門尉

同 弥平次

大 諸介

寛永拾年癸酉三月十三日

筆者	稲垣 对馬 介④
筆者	橋口猪右衛門尉(花押)
筆者	牧田兵部左衛門尉(花押)
筆者	金藤休左衛門尉④
筆者	相甲将左衛門尉
筆者	永田 大藏 介(花押)
筆者	山本五兵衛尉④
筆者	小田原民部左衛門尉④
筆者	田島勝左衛門尉④
筆者	同 名 源 吉④
筆者	荒武四右衛門尉
筆者	有馬清右衛門尉
筆者	上床主税助④
筆者	新納仲左衛門尉④

(表紙)

文化五年辰五月四日

隅州 噲唎郡 御検地名寄帳

川内村

西田門名頭 喜八

西田門男四人
女三人

牛式足
馬式足

中屋敷十四間半 九畦六歩

大豆沓表三斗沓升

喜八 七式

一茶三拾目

粃四合式夕

一柴竹沓束

名頭

一當四拾九才 喜八

一同拾貳才

名頭子

金十

一同八才 右同娘 まつ亀

一同七拾四才

右同親

金右衛門

一同六拾三才

妻

一同四拾五才

名子

仁右衛門

中屋敷十二間

五畦六步

仁右衛門
六六九六

東段

上田七間
上田十八間半
四畦拾步

粗三表式斗四升
上納五斗三升九合

庄藏
廿九七九

同所

上田十一間半
上田十二間
四畦拾八步

粗三表三斗式升
上納五斗七升三合

同人
廿九七九

三反田

上田八間
上田廿四間
九畦式步

粗七表式斗五升
上納壹表壹斗式升八合

長次郎
廿九六九

不動田下田十間
廿六間

七反拾步
粗三表三斗四升
廿町四

孝左衛門
十九

下田
三畦廿步

粗壹表三斗四升五合
上納式斗九升壹合

勘四郎
八壹九

井料

下々田九間
廿五間
七畦拾五步

粗壹表三斗三升
上納式斗八升四合

勘四郎
八壹九

か々見田

上田七間半
上田四十間
壹反壹畦

粗式表
上納壹石壹斗七升

伊右衛門
廿五四

鐘田

中田十五間半
壹反廿三歩

粗六表壹斗九升
上納九斗五升七合

大右衛門
廿壹二

京田

中田十四間
十五間
七畦

粗四表壹斗六升
上納六斗五升式合

廿式三

見婦り

下田六間
廿間
四畦

粗式表八升
上納三斗式升六合

金太郎
十五口

露重

下田二間半
十一間
廿八歩

粗壹斗式升
上納五升

彦右衛門
十式八

野付

下田二間半
十六間
壹畦拾歩

粗壹斗八升
上納七升六合

松藏
十三半

七石

下田十二間
廿間
八畦

粗三表九升
上納四斗七升四合

政右衛門
十四二

石坂

下田八間半
廿間
式畦八歩

粗壹斗六升
上納六升七合

仙太郎
七〇四

十二 檢地名寄帳

上川原 中田十間半 七畦拾五歩 赤 初四表耆斗九升 上納六斗六升五合	井料 下田九間 十五間 四畦拾五歩 赤 初式表式升 上納三斗耆合	前川原 中田十三間 十七間半 七畦拾八歩 初四表式斗耆升 上納六斗七升三合	川原田 下田四間 十一間 耆畦拾四歩 初式斗三升 上納九升六合	上川原下畠十一間 廿五間半 耆反廿五歩 大豆耆表三斗	東段中畠五間 十五間半 式畦拾五歩 大豆耆斗八升式合	中畠 耆畦九歩 大豆九升七合	見婦下畠八間半 十間 式畦廿五歩 大豆九升耆合	下畠 耆畦拾式歩 大豆四升五合	上川原下畠十間 廿六間 八畦廿歩 大豆斗七升七合	下畠 耆畦五歩 大豆六升九合	吉之丞 廿二 大豆九升	宮上下畠九間 廿一 六畦九歩 大豆式斗七升耆合	下畠 式畦三歩 大豆九升	坂上 下畠六間 十七間 三畦拾式歩 大豆耆斗式合	前畑 下畠十間 十五間 耆畦廿歩 大豆五升八合	平原 下畠八間 廿三間 六畦四歩 大豆耆斗五升九合	堂か尾 山畑五間 廿一間 五畦五歩 大豆耆斗三合	山畑 廿八間 式畦廿四歩 大豆五升六合	東原 下畠十間 十五間 耆畦廿歩 大豆四升式合	東原 下畠十一間 廿二間 八畦式歩 大豆式斗耆升	堂か尾 山畑八間 十六間 四畦八歩 大豆八升五合	權之丞 四三	萬左衛門 三	源五兵衛 三四	藤四郎 式六	金太郎 式	仙太郎 式	勘助 式	長次郎 式六	庄藏 式
---	--	--	--	-------------------------------------	-------------------------------------	----------------------	----------------------------------	-----------------------	-----------------------------------	----------------------	-------------------	----------------------------------	--------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	-----------	-----------	------------	-----------	----------	----------	---------	-----------	---------

古文書

平原

山畑七間
十四間

三畦八歩

大豆六升五合

満五郎
壺九八

女式人

合牛馬四疋

あら道下畠十一間
廿一間七畦廿一步 大豆貳斗三升壹合

下畠

七畦拾歩

大豆貳斗貳升

彦右衛門
三

馬貳疋

牛貳疋

合田畠屋敷壺町六反三畦貳歩

田方九反五畦拾六歩

畠方五反三畦四歩

屋敷壺反四畦拾貳歩

合粃大豆六拾四表六升五合貳夕

粃五拾六表三斗壺升五合

赤粃拾三表四升

大豆七表九升六合

上木粃四合貳夕

高貳拾三石四斗壺合貳夕五才

一茶三拾目

一柴竹壺束

合男女六人

男四人

文化十二年多四月

隅州 桑原 国分 郡御 検地名寄帳

福嶋村

西中蘭門

名頭 平助

一同貳拾四歳

子 平太郎 娘

一同拾五歳

娘 ひか松 名頭弟 助太郎

一同九歳

名子 霧亀

一同三拾七歳

妻 助太郎

一同三拾七歳

名子 萬太郎 娘

一同三拾歳

右同娘 妻

一當七歳

右同親 福亀

一同三歳

妻 いち

一同七拾歳

萬助

一同六拾貳歳

妻

中屋敷九間 四畦六歩

大豆三斗壹升三合

萬太郎

一茶拾五匁

粃貳合壹匁

曾小川

上田二間半

四畦八歩

粃三表貳斗貳升

彦太郎

宮前

上田十間

六畦五歩

せ町三

金太郎

中屋敷十二間半 七畦拾五歩

大豆壹表貳斗壹升四合 平助

一茶三拾目

粃四合貳匁

横枕

下田三間半

三畦八歩

粃壹表貳斗六升

半之丞

一柴竹三束

名頭

一當四拾六歳

平助

一同四十九歳

妻

古川

上田十間

九畦廿五歩

粃七表壹斗九升

清四郎

川原

中田十二間半

八畦六歩

せ町二

粃五表式斗式升

同人

大鳥池下々田廿五間

式反四畦五歩

粃拾壹表壹斗六升

せ町二

半之丞

中川原

上田十二間半

五畦拾三歩

せ町二

粃四表式斗七升

清太郎

中川原

中田二間半

拾八歩

せ町一

粃壹斗五升

惣右衛門

大鳥池

下田廿六間

六畦

せ町一

粃三表壹斗七升

半之丞

中川原

上田十間

壹畦

せ町一

粃三斗

利右衛門

西古川

下々田七間半

壹反

せ町二

粃四表壹斗六升

傳七

水立下田十六間

廿三間

壹反式畦八歩

粃木表式斗式升

せ町二

仲太郎

本川下田

廿四間

壹反拾歩

せ町六

粃四表壹斗五合

萬四郎

桑田

上畠四間半

三畦拾四歩

せ町一

大豆三斗三升六合

彦太郎

中川原

下田九間

七畦拾五歩

せ町二

粃四表九升

鉄太郎

横枕

下々畠八間

四畦拾式歩

せ町一

大豆壹斗式升四合

清八

福瀬川原

下々田十四間

壹畦廿式歩

せ町一

粃三斗

同人

木下上畠七間

廿六間半

八畦拾六歩

大豆二表七斗八合

善左衛門

中川原

中田廿六間

壹反五畦拾八歩

せ町六

粃五表式斗

金助

中川原上畠

八間半

壹反式畦六歩

大豆二表七升九合

宇右衛門

江ノ口

下々田十間

九畦拾歩

せ町二

粃三表壹斗四升

次兵衛

砂ヶ町上畠

九間

六畦拾八歩

大豆壹表壹斗八升四合

傳七

水流上畠^{十二間}十六間六畦拾貳步大豆壹表斗四升三合
上畠 三畦六步

大豆貳斗四升六合

金四郎

合粃大豆七拾三表貳斗七升四合
粃六拾貳表貳斗五升

五社堀下々畠^{十二間半}廿六間半壹反廿五步大豆三斗四合
下々畠 五畦拾三步

大豆壹斗五升貳合

清太郎

赤粃七表三斗

大豆拾壹表壹升七合七勺

土取窪

山畑^{十五間半}十八間半 九畦八步

大豆壹斗五升貳合

半助

高貳拾六石九斗

立野下畠^{十三間}五十間貳反壹畦廿步大豆貳表三斗三升四合
下畠 四畦拾步

大豆貳斗七合

傳次郎

一茶四拾五匁

一柴竹四束

福瀬川原上畠^{八間半}廿二間半八畦廿步大豆壹表三斗三升貳合
上畠 四畦拾四步

大豆四斗四升四合

庄之助

合男女拾貳人

男五人

土取窪下畠^{十一間半}廿六間半九畦廿九步大豆貳斗五升
下畠 五畦

大豆壹斗四升

勘太郎

女七人

合 馬壹疋

砂ヶ町上畠^{七間}廿一間四畦廿七步大豆壹表四升七合
上畠 廿七步

大豆七升貳合七勺

清太郎

合田畠屋敷壹町六反八畦九步

田方壹町四畦拾五步

畠方五反貳畦三步

屋敷壹反壹畦廿壹步

(表紙)

安政五年午五月

国分上小川村上村門名寄帳

名頭

次郎

札国分郷土通

上村門男四人
女武人 牛卷足
馬卷足

名頭

上屋敷十一間半
七畦廿歩

大豆表式斗七舛合
次郎

一柴竹三束

鎌田曾右衛門

一當四拾歳名頭次郎

一同四拾三歳 妻

一當式

右衛門

一同拾式歳嘉

右同子

右同娘

一同五歳

くり

一同式拾歳

名子

次郎助

中田 四間
廿五間

三畦拾歩

粗式表式斗式舛

長次郎

市町

上田 十間
十九間半

畦町一

六畦拾五歩
粗六表八舛

傳助

栗原

上田 十二間
十四間

畦町一

五畦廿八歩
粗五表式斗八舛

□

榎川原

上田 十一間
廿四間半

畦町一

九畦
粗□表式斗八舛

新太

鎌田曾右衛門

龍

上田 十二間
十八間七畦六歩

畦町一

新之丞
粗六表式斗七舛

五畦拾六歩門付

米卷斗式舛三合七
鎌田曾右衛門

樋渡

上田 十一間
廿間半七畦拾六歩

畦町一

粗六表□□□□ 同人

鎌田曾右衛門

堀切

上田 九間半
十一間半

畦町一

粗式表三舛

新□

北法楽寺

中田 八間半
廿八間

畦町四

九畦廿四歩
粗六表式斗式舛

萬次

坂上中田 十二間半

中田 十二間半

畦町一

九畦五歩粗

助左衛門

粗式表式斗七舛七合四夕

十二 検地名寄帳

阿□坪 畦町五

下田 四十二間 五畦拾八歩 長次郎

赤粃三表壹升

上川原

下田 十六間 畦町一 伊右衛門

式畦四歩 赤粃壹表壹斗壹升

上柏木

下々田 五間 七畦廿五歩 半右衛門

赤粃三表式斗八升

牛渡瀬

下々田 廿九間 半 畦町二 休助

六畦拾四歩 赤粃式表三斗四升

鎌田曾右衛門

下山り 間八歩 次郎

下々田 四十間 六畦

赤粃式表三斗式升

鎌田曾右衛門

中田 五十間 六畦廿式歩 粃四表式斗壹升 畦町五 藤五郎

五畦三歩 粃三表壹斗七升 四合式勺

下田

六番下田 四間半 七畦廿四歩 粃四表壹斗四升 畦町六 源蔵

西丸 上畠 八間 三畦拾四歩

大豆壹表六升八合 源兵衛

鎌田曾右衛門 屋敷方 上畠 八間半 三畦廿壹歩 甚右衛門

上畠 十三間 三畦廿壹歩 大豆壹表七合

山元

上畠 十間 式畦 順吉

大豆壹斗八升四合

東山元

鎌田曾右衛門 上畠 五間半 三畦九歩 平右衛門

上畠 十八間 三畦九歩 大豆三斗三升四合

砂走中畠 三間半

中畠 廿間 式畦拾歩 大豆壹斗四升九合 新太郎

大豆

下畠 十三間 八畦拾式歩 左衛門

大豆壹斗式升八合

麦田

下畠 六間 三畦廿一歩 次右衛門

大豆壹表六升三合

平原下々畠 十間 三畦廿五歩 大豆壹斗壹升三合 源兵衛

下々畠 十一間 壹畦廿七歩 大豆五升六合

高田小字都山畑 十三間 六畦拾五歩 大豆三升八合

山畑 八畦五歩 大豆壹升三合

龍王上畠 四間半 四畦式歩 大豆壹表九升三合

上畠

上畠 廿七間 八畦壹歩 彦左衛門

古 文 書

鎌田曾右衛門

山元
下々畠八間半

式畦拾六歩
大豆六升三合

休左衛門

本地中畠^{五間半}
廿一間三畦廿六歩大豆式斗八舛

中畠 廿五歩

金

大豆

合田畠屋敷 畦廿八歩

田方九反 畦

畠方三反 壹畦壹歩

屋敷七畦廿歩

合粃大豆七拾五表八升式合八勺

粃六拾六表三斗式升五合

赤粃 拾三表三斗四升

(拾六表壹斗五升四合式勺)

大豆八表 斗 升 合

高 石四斗三升

合男女六人

男四人

女式人

合牛馬式疋

牛壹疋
馬壹疋

十三 宗門改帳

(一) キリシタン宗門改帳

キリスト教宗門改帳関係の史料は極めて少ない。その中でわずかながら曾於郡清水郷の鬼利支丹宗門改帳が国分市立国分郷土館に三部所蔵されている。

宝永五年（一七〇八）は、イタリア人宣教師シドツチが密かに屋久島に渡り捕らえられている。清水郷の宝永五年の宗門改めはそれと関係があるのだろうか。いづれにしても、貴重な史料と思われる。

- 1 宝永元年（一七〇四）の鬼利支丹宗門改帳断簡
- 2 宝永五年（一七〇八）の鬼利支丹宗門改帳断簡
- 3 年号不明の鬼利支丹宗門改帳断簡

(二) 山内家宗門手札内改帳

国分郷有力郷士の山内家には各種の古文書が残されている。その中に宗門手札内改帳が三部伝えられている。本史料は、国分市中央一丁目二四の三一、山内久実氏より国分市立図書館に寄贈されたものである。

(三) 人別内改帳

これも山内家文書のひとつである。明治五年の壬申戸籍作成の前段階に当たる調査と思われる。

- 1 明治三年午五月、山内甚右衛門ほか五名
- 2 明治三年午五月、久木田助右衛門ほか六名

(表紙)

宝永元年 申 月 日

鬼利支丹宗門改帳

清水

(前欠)

合人数三拾壹人

内貳人ハ末年御改以後生子

一家内五人

大鳥やしき

小兵衛 印

一家内五人

外園やしき

慶右衛門 印

一家内三人

榎丸やしき

半右衛門 印

一家内八人

瀬戸口やしき

小左衛門 印

内壹人ハ生子

一家内五人

大正やしき

善左衛門

内壹人ハ生子

合人数貳拾六人

内貳人ハ末年御改以後生子

(紙切れ)

合人数三拾九人

内壹人ハ未ノ年御改以後生子

外五人ハ他所出

壹人ハ死者

一家内拾六人

田邊門

徳五郎 印

一家内拾四人

松元やしき

松次郎 印

内貳人ハ未ノ年御改以後生子

東中堀やしき

甚助 印

一家内四人

一家内五人

梅木やしき

松右衛門 印

合人数三拾七人

内式人ハ末ノ年御改已後生子

外三人ハ末ノ年御改已後他所出

(紙切レル)

外壹人ハ末年御改已後死者

高列やしき

一家内七人

(紙切レル)

利兵衛印

家内五人

外壹人ハ死者

合人数三拾壹人

内壹人ハ末年御改已後生子

外壹人ハ右同断死者

(紙切レル)

一家内拾三人

一家内七人

内壹人ハ生子

(後欠ク)

下飯牟礼門

後二郎印

上飯牟礼門

為右衛門印

紙蘭やしき

一家内三人

正左衛門印

西小城やしき

一家内九人

安右衛門印

福留やしき

一家内拾人

休之丞印

内式人ハ生子

(表紙)

宝永五年子七月十七日

鬼利支丹宗門改帳留

隅州曾於郡
清水

(前欠)

一人數千四百九人

衆中

百三拾四家内

内貳家内ハ亥年御改以

後家部立申候、

内三拾三人ハ亥年御改以後生子

外三人ハ亥年御改以後他所出人

貳拾人ハ亥年御改以後死者

一人數三拾人

社家

貳家内

内壹人ハ亥年御改以後生子

外壹人ハ亥年御改以後死人

一人數貳拾三人

寺院

(紙切れ)

一人數拾五人

御中間

壹家内

一人數三拾貳人

家来中宿

五家内

外壹人ハ亥年御改以後死者

座向

一人數五人

壹家内

一人數千百壹人

在郷五ヶ村

百貳拾四家内

内拾九人ハ亥年御改以後生子

外五人ハ亥年御改以後死者

惣合人数貳千七百拾人

内五拾三人ハ亥年御改以後生子

貳人ハ亥年御改以後他所出人

十三 宗門改帳

外三人ハ亥年御改以後他所出人

三拾貳人亥年御改以後死者

右者、従前々鬼理支丹宗門御大禁之旨被 仰渡置候二付、

清水中如例年之相改申候処二、不審成者無之候、依之帳

面二銘々印形為仕、慥二見届之、右帳面私共手前二召置

申候、御用之節ハ早速差上申候、仍如斯二御座候、以上、

寶永五年子七月十七日

清水横目

亀沢源太左衛門 ㊦

右同

井上清左衛門 ㊦

(紙切レル)

(前欠)

一家内四人

平やしき

権兵衛 ㊦

一家内六人

税所やしき

市左衛門 ㊦

一家内六人

小城やしき

三郎左衛門 ㊦

合人数三拾人

一家内拾貳人

久志蘭やしき

長兵衛 ㊦

一家内拾五人

外三人ハ死者

一家内四人

(紙切レル)

一家内貳人

一家内五人

内貳人ハ生子并入人

一家内五人

合人数拾八人

内貳人ハ生子并入人

一家内貳人

(紙切レル)

一家内拾貳人

合人数四拾三人

外壹人ハ死者

小蘭やしき

次郎左衛門 ㊦

前床やしき

助左衛門 ㊦

迫田屋敷

善介 ㊦

五領屋敷

松介 ㊦

室屋敷

源右衛門 ㊦

山下屋敷名頭女子

千代 ㊦

宇都屋敷

次郎左衛門 ㊦

一家内九人

蔵元屋しき

源蔵[㊦]

一家内七人

徳田吉右衛門[㊦]

一家内五人

大茂屋しき

新次郎[㊦]

一家内六人

宮田勘左衛門[㊦]

一家内六人

久保田屋しき

市右衛門[㊦]

一家内十四人

徳田吉兵衛[㊦]

合人数式拾人

(紙切レル)

一家内五人

南迫屋しき

太郎兵衛[㊦]

一家内拾貳人

富田十左衛門[㊦]

一家内五人

柿木田屋敷

清兵衛[㊦]

一家内拾三人

末原平左衛門[㊦]

一家内五人

西屋敷

蔵右衛門[㊦]

一家内八人

稲元又右衛門[㊦]

一家内六人

山元屋しき

大蔵[㊦]

一家内拾貳人

中条左近[㊦]

合人数式拾三人

一家内五人

郡田屋敷

次郎右衛門[㊦]

内芻人ハ生子

山下藤左衛門[㊦]

一家内九人

勝吉屋しき

安右衛門[㊦]

(後欠ク)

(紙切レル)

一家内拾芻人

(紙切レル)

惣合人数千三百五人

衆中百三拾家内

内 三拾四人ハ辰年御改以後生子

外 拾八人ハ辰年御改以後他所出人并死者

右家内不殘遂^(全)識儀候処二、鬼利支丹宗門耆人も無御座、五人與中互二吟味之上、判形仕候儀見届申候、

衆中與頭

濱田市左衛門^印

右同

平岩走太左衛門^印

噯

安田七右衛門^印

右同

久松清左衛門^印

右同

鶴丸助右衛門^印

鬼利支丹宗門御改
御奉行所

(紙切レル)

(前欠)

姫城村

上権現屋敷

助次郎^印

権現門

次郎右衛門^印

角門

善右衛門^印

十三 宗門改帳

一家内七人

一家内七人

一家内三人

一家内七人

一家内五人

合人数貳拾九人

一家内八人

外耆人死

一家内拾八人

一家内四人

一家内五人

外耆人ハ死

合人数三拾五人

外四人ハ申年御改以後死去

(前欠之)(前頁トハ別)

丑ノ年御改以後生子

外耆人ハ丑ノ年御改以後死去

惣合人数貳百八拾貳人

大蘭屋敷

与三兵衛^印

岡屋敷

鶴右衛門^印

阿多石屋敷

善兵衛^印

高吉屋敷

七左衛門^印

下高吉屋敷

次兵衛^印

飯田門

蔵右衛門^印

内七人ハ 丑ノ年御改以後生子
外五人ハ 丑ノ年御改以後死去

一家内七人

阿多石門

姫城村

一家内五人

阿多石門名頭

源八[㊦]

一家内六人

飯田門

善兵衛[㊦]

一同四人

飯田門名頭

休兵衛[㊦]

一家内拾六人

高吉門

三右衛門[㊦]

一同七人

高吉門名頭

喜右衛門[㊦]

一家内四人

下高吉門

七左衛門[㊦]

合人数貳拾人

(後欠之)

合人数三拾三人

田邊門

次兵衛[㊦]

(前欠之)

一家内拾五人

内七人ハ丑ノ年御改以後生子

德五郎[㊦]

一家内八人

萩尾門名頭

源太左[㊦]

一家内拾貳人

(以下欠之)

松元屋敷之

松次郎[㊦]

一同拾人

柴門名頭

次右衛門[㊦]

(前欠之)

姫城村

一同三人

堀ノ内門右同

半左衛門[㊦]

一同拾人

森山門右同

甚右衛門

十三 宗門改帳

内 壱人去御改以後生子

合人数三十人

内 壱人去御改以後生子

一家内四人

末吉門名頭

清八[㊤]

一家内六人

寺田やしき

正之介[㊤]

一同八人

徳丸門右同

次五右衛門[㊤]

内 壱人御改以後生子

合人数三十人

吉田門右同

造右衛門[㊤]

内 三人ハ末ノ年御改以後生子

外 五人ハ末ノ年御改以後死

一同五人

満田門右同

甚左衛門[㊤]

一家内七人

妙法寺やしき

五兵衛[㊤]

一同八人

米丸門右同

休右衛門

一家内五人

小城やしき

對馬[㊤]

一同三人

合人数廿七人

内 壱人去御改以後生子

内 壱人ハ生子

新原やしき

新右衛門[㊤]

(以下欠ク)

一家内拾人

下新原やしき

新兵衛[㊤]

(前欠ク)

一家内六人

新園やしき

仲兵衛[㊤]

内 (以下欠ク)

一家内三人

(前欠之)

一家内拾貳人

一家内八人

一家内拾七人

外壹人ハ死者

一家内貳拾三人

右人数七拾八人

外貳人ハ寅年御改已後死者

郡田村

一家内貳拾四人

一家内四人

一家内拾人

上ノ

甚兵衛[㊦]

李右衛門[㊦]

堂階屋敷

諸右衛門[㊦]

堂園屋敷

伊右衛門[㊦]

永田屋敷

市左衛門[㊦]

小口蘭屋敷

次郎左衛門[㊦]

辻屋敷

正右衛門[㊦]

一家内拾三人

外壹人ハ死者

一家内貳人

右人数五拾三人

外壹人ハ死者

(以下欠之)

(以前欠之)
右家内不殘遂詮儀候処ニ、鬼理支丹宗壹人茂無御座候、
與中吟味之^(上カ)□判形仕申候、

弟子丸村

一家内拾壹人

内壹人ハ生子

一家内八人

一家内六人

野添屋敷

吉兵衛[㊦]

藏原屋敷

長拾郎[㊦]

市野丸屋敷

主計[㊦]

峯崎屋敷

助右衛門[㊦]

五領屋敷

三郎左衛門[㊦]

十三 宗門改帳

一家内拾貳人

西法師田屋敷

善五郎 ㊦

一家内六人

本町屋敷

蔵之允 ㊦

合人数四拾三人

内𡔷人八生子

一家内拾七人

宇都屋敷

休 ㊦

一家内九人

外𡔷人八死者
(以下欠之)

弟子丸屋敷

新介 ㊦

内生子𡔷人

一家内𡔷人

紙園屋敷

五左衛門 ㊦

一家内八人

西小城屋敷

安右衛門 ㊦

一家内拾𡔷人

石踊屋敷

関左衛門 ㊦

内生子𡔷人

下飯牟礼門

次郎介 ㊦

一家内拾貳人

上飯牟礼門

五右衛門 ㊦

一家内五人

外二死者𡔷人

合人数三拾七人

内生子𡔷人

外死者𡔷人

(以前欠之)

一家内拾六人

石踊屋敷

吉兵衛 ㊦

一家内四人

外園屋敷

慶右衛門 ㊦

内生子𡔷人

合人数貳拾人

一家内六人

蓮花寺屋敷

佐介 ㊦

一家内八人

堀之内門

宇左衛門 ㊦

(以下欠ク)

(以前欠ク)
一家内三人

井上善兵衛㊦

外𦵏人ハ申年御改以後、曾於郡衆中江養子参由付、

相除申候ニ付他所出、

合人数拾八人

内𦵏人申年御改以後、曾於郡衆中江養子参候

ニ付他所出、

一家内七人

木佐木與八㊦

内𦵏人申年御改以後生子

外四人木佐木藤五郎別立申候ニ付相除申候、

一家内九人

濱田宇右衛門㊦

一家内八人

谷口甚右衛門㊦

内𦵏人申年御改以後生子

一家内八人

宮田源右衛門㊦

(以下欠ク)

宮田源助㊦

(以前欠ク)

山路村

一家内貳拾人

前之園屋敷

嘉左衛門㊦

一家内拾𦵏人

上園屋敷

甚兵衛㊦

一家内七人

脇之園やしき

本右衛門㊦

一家内拾六人

堂階やしき

諸兵衛㊦

内𦵏人ハ未ノ年御改已後生子

堂園やしき

伊右衛門㊦

一家内貳拾三人

内𦵏人ハ未ノ年御改已後生子

惣合人数七拾七人

内貳人ハ未ノ年御改已後生子

郡田村

永田門

一家内貳拾三人

慶右衛門㊦

一家内四人

小□園屋敷

次郎左衛門㊦

(以下欠ク)

(以前欠ク)

川原村

一家内拾三人

上萩屋敷

松右衛門^印

一家内拾人

下萩屋敷

孫兵衛^印

一家内拾貳人

口輪野屋敷

作右衛門^印

一家内六人

上之園屋敷

五右衛門^印

一家内拾人

市野之屋敷

与七兵衛^印

合人数五拾壹人

中間屋敷之

半左衛門^印

一家内貳拾四人

内壹人ハ丑ノ年御改以後生子

外壹人ハ丑ノ年御改以後死者

一家内貳人

下川原屋敷ノ

彦右衛門^印

内壹人ハ丑ノ年御改以後生子

外貳人ハ丑ノ年御改以後死者

一家内拾五人

柴田屋敷之

吉左衛門^印

一家内拾六人

下炭床屋敷之

惣兵衛^印

一家内七人

上炭床屋敷之

与三衛門^印

合人数六拾四人

内貳人ハ丑ノ年御改以後生子

三人ハ丑ノ年御改以後死者

一家内貳拾壹人

東芦谷屋敷之

伊兵衛^印

内壹人ハ丑ノ年御改以後生子

西芦谷屋敷之

段右衛門^印

一家内貳拾貳人

瀬戸口屋敷之

新右衛門^印

一家内拾五人

庄や

..... (コノ間脱落アリ)

古文書

一家内九人

外𡔷人死者

一同八人

一同九人

一同廿式人

合人数四拾八人

外𡔷人死者

一家内拾四人

一同四人

一同拾三人

一同九人

合人数四拾人

東芦谷之

金右衛門^印

蔵元之

甚五左衛門^印

瀬戸口之

長左衛門^印

西芦谷之

三五郎^印

蔵原之

助之丞^印

中嶋之

清兵衛^印

宮園之

李兵衛^印

東た之

新助^印

内𡔷人去御改已後生女

外𡔷人右同死男

一家内四人

一同八人

一同式人

一同三人

合人数廿三人

内𡔷人去御改已後生女

外𡔷人右同死男

一家内三人

一同七人

一同五人

一同五人

合人数式拾人

一家内三人

内𡔷人去御改已後生男

一同五人

泊八郎右衛門^印

松永五左衛門^印

牧 善兵衛^印

前田與八左衛門^印

紙屋八郎右衛門^印

前田庄右衛門^印

兒玉休左衛門^印

前田權右衛門^印

野間源九郎^印

野間源藏^印

十三 宗門改帳

一家内四人

一家内拾人

内耆人ハ生子

一家内六人

一家内八人

一家内七人

合人数三拾五人

内耆人ハ去御改已後生男

(コノ間一ページ分文字不明)

一家内八人

一家内七人

一家内式人

合人数四拾三人

外耆人ハ死者

北中城やしき

徳左衛門[㊦]

堀田やしき

郷兵衛[㊦]

森山やしき

千左衛門[㊦]

北園屋敷

才右衛門[㊦]

西中城やしき

千次郎[㊦]

永園屋敷

仁左衛門[㊦]

室園屋敷

彦左衛門[㊦]

本馬場屋敷

蔵右衛門[㊦]

一家内三人

(コノ間脱落)

一家内八人

内耆人ハ生子

一家内八人

内耆人ハ生子

一家内式人

一家内五人

一家内八人

(コノ間トジチガイ)

一家内廿人

一家内七人

一家内四人

一家内拾人

合人数四拾耆人

本町屋敷

正兵衛[㊦]

諸

宮園やしき

五慶やしき

源

前田やしき

新左衛門[㊦]

加川屋敷

五郎左衛門[㊦]

指宿與右衛門

使古川弥兵衛[㊦]

橋口形部左衛門

使紙屋源兵衛[㊦]

山田作右衛門

使中村字右衛門[㊦]

山田弥八左衛門

使同人[㊦]

一家内拾弐人

赤塚分右衛門[㊦]

一同四人

谷口喜十[㊦]

一家内拾人

塩川千助[㊦]

一同四人

中村相左衛門[㊦]

一家内拾人

大岩八左衛門[㊦]

一同六人

桜井権四郎[㊦]

一家内拾弐人

江口源右衛門[㊦]

外 壱人去御改已後死男

一家内拾壱人

神崎与兵衛[㊦]

一同五人

大田源四郎[㊦]

内 壱人ハ生子

合人数廿八人

外 壱人ハ死去

外 壱人去御改已後死男

合人数五拾五人

(コノ間脱落アリ)

一家内五人

木佐木源助[㊦]

一同五人

有馬半兵衛[㊦]

一同四人

有馬半六[㊦]

一同壱人

荒田太郎左衛門[㊦]

合人数四拾弐人

内 壱人去御改已後生男

外 壱人右同死男

壱人右同死女

一家内九人

橋元源左衛門[㊦]

嘉永五年子三月

宗門手札内改帳

山内甚右衛門

山内吉右衛門

山元助右衛門

和田小右衛門

有馬平八

時衆宗

山内甚右衛門

右者祖父山内三左衛門年被寄候ニ付、嫡孫甚右衛門江家督之願御免被仰付候、御地頭所證文有之、

時衆宗

祖父隠居
山内三左衛門

右同

三左衛門
妻

一拾壹才

右同

甚右衛門下人 本三左衛門下人
矢平太子
茂平次

一五拾三才 右同

合男女五人

男貳人 下男壹人

女壹人 下女壹人

時衆宗

山内吉左衛門

右者所郷士山内三左衛門三男ニ而候処、別立之願御免被仰付、御地頭所證文并三左衛門證文有之、

時衆宗

吉左衛門
妻

右同

吉左衛門
娘

右同

吉左衛門嫡子
山内吉二郎

生子 時衆宗

吉左衛門
娘

右者直子別条無御座候、

合男女五人

男貳人

女貳人

生女壹人

茂平次 本矢平太妻
母

禪宗

山元助右衛門

右同

助右衛門
妻

右同

助右衛門
山元孫右衛門

禪宗

助右衛門二男
山元武右衛門

合男女四人

男三人

女一人

禪宗

和田小右衛門

右同

小右衛門二弟
和田助市

右同

小右衛門三弟 小太郎
和田小平太

右同

小右衛門
母

合男女四人

男三人

女一人

禪宗

有馬平八

右者親有馬半次郎相果、嫡子平八江繼目被仰付候、

禪宗

平八 本半次郎妻
母

合男女三人

男一人

女二人

右者此節宗門手札御改二付、内改仕候様委曲被仰渡趣

承知仕、私共與中差出互二詮儀仕相改申候処、御法違

又者御法度之宗旨差向無御座、且亦生子其外入除等二

付、改二相洩候者一人茂無御座候、若隱置脇方々露顯

仕候ハ、何様二茂可被仰付候、此段申上候、以上、

子三月

有馬平八印

和田小右衛門 同

山元助右衛門 同

山内吉左衛門 同

山内甚右衛門 同

国分宗門手札

御改所

安政六年未五月

一錢拾六文
同四文 新家札し
五家札らげ代

宗門手札内改帳

山内甚右衛門

山内吉左衛門

山元助右衛門

山元武右衛門

和田小右衛門

有馬平太

時衆宗

山内甚右衛門

右同

甚右衛門
妻

右者所郷土山崎佐左衛門嫡子山崎佐右衛門娘為縁與入
来、家督山崎佐右衛門證文有之、

生子 右同

甚右衛門
娘

生子 右同

甚右衛門嫡子
山内孝右衛門

右式人直子別条無御座候、

時衆宗

甚右衛門祖父隠居

山内三左衛門

一拾八才

右同

甚右衛門下人 本名茂平次

弥平太

一六拾才

右同

弥平太

母

合男女七人

男式人

下男壹人

女壹人

下女壹人

生男壹人

生女壹人

時衆宗

山内吉左衛門

右同

吉左衛門
妻

右同

吉左衛門
娘

右同

吉左衛門嫡子
山内吉二郎

右同

吉左衛門
娘

合男女五人

男貳人

女三人

禪宗

山元助右衛門

右同

助右衛門
妻

右同

助右衛門嫡子
山元孫右衛門

禪宗

孫右衛門
妻

右者所郷士濱田七郎右衛門娘為縁與入來、七郎右衛門

證文有之、

生子 右同

孫右衛門嫡子
山元新助

右直子別条無御座候、

合男女五人

男貳人

女貳人

生男壹人

禪宗

山元武右衛門

右者所郷士山元助右衛門二男二而候處、別立之願御免被仰付、御地頭證文并助右衛門證文有之、

合男壹人

禪宗

和田小右衛門

右同

小右衛門二弟
和田助市

右同

助市
妻

右者所郷士飯牟礼庄右衛門妹為縁與入來、庄右衛門證文有之、

生子 右同

助市嫡子
和田十助

右直子別条無御座候、

合男女五人

男貳人

女貳人

生男壹人

禪宗

小右衛門
母

禪宗

有馬平八

国分宗門手札

右同

平八
母

御改所

合男女式人

男老

女老

是の奥清書別冊二相調候

年号月日

與中名前

銘書

所出并死人帳

所出

禪宗

和田小右衛門三弟

和田小太郎

右者此節宗門手札御改二付、内改仕候様委曲被仰渡趣承知仕、私共與中差寄互二詮儀仕家内相改申候処、御法違又者御法度之宗旨差向無御座、且亦生子其外入除等二付改二相洩候者老人も無御座候、若隱置脇方の露顯仕候ハ、何様二而茂御法様次第、可被仰付候、以上、

右者所郷土和田助左衛門直子無之、養子成之願御免被仰付相除申候、助左衛門證文有之、

合男老

死人

未五月

有馬平八

時衆宗

右未正月相果申候、

合女老

山内甚右衛門祖父隠居
山内三左衛門
妻

和田小右衛門

山元武右衛門

山元助右衛門

山内吉左衛門

山内甚右衛門

(表紙)

慶應二年寅五月

宗門手札内改帳

山内甚右衛門

山内吉左衛門

和田小右衛門

有馬半次郎

時衆宗

山内甚右衛門

右同

甚右衛門
妻

右同

甚右衛門
娘

右同

甚右衛門嫡子
山内孝右衛門

生子
右同

甚右衛門
娘

生子 右同

甚右衛門二男

山内弓二

生子 時衆宗

甚右衛門三男

山内甚太夫

右三人直子別条無御座候、

一式拾五才 右同

甚右衛門下人
弥平太

一六拾七才 右同

弥平太
母

合男女九人

男貳人 下男壹人

女貳人 下女壹人

生男貳人

生女壹人

時衆宗

山内吉左衛門

右同

吉左衛門
妻

右同

吉左衛門嫡子
山内吉二郎

右同

吉左衛門
娘

合男女四人

男貳人

女貳人

禪宗

和田小右衛門

右同

小右衛門
妻

右者敷根衆中猿渡權五郎姉為縁與入來、敷根噺證文有

(朱書)

之、「二而候処、同所衆中猿渡權次郎大叔父亡猿渡七

左衛門方へ致縁與、去ル未札御改之節妻札申受、以後

離別二而弟方江致帰參居為縁與入來、敷根噺證文御座

候、

小右衛門養子

禪宗

和田七右衛門

(朱書)「和田小右衛門直子無御座」

右者敷根衆中猿渡權次郎大叔父亡猿渡七左衛門嫡子二

(朱書)

而候処、「和田小右衛門直子無之」養子成之願御免被

仰付、御地頭證文并敷根噺證文御座候、

生子 右同

小右衛門
娘

生子 右同

小右衛門二男
和田七兵衛

(朱書)「右貳人直子別条無御座候」

禪宗

小右衛門二弟
和田助市

右同

助市
妻

右同

助市嫡子
和田十助

合男女八人

男四人

女貳人

生男壹人

生女壹人

禪宗

有馬半次郎

右者所衆中木藤半蔵二男二而候処、有馬平八「直子無

(朱書)

之」繼目養子成之願御免被仰付、御地頭證文并家督木

藤休右衛門證文有之、

合男壹人

右者此節宗門手札御改二付、内改仕候様委曲被仰渡趣
承知仕、私共與中差寄互二詮儀仕家内相改申候処、御

法違又者御法度之宗旨曾而無御座、且又生子其外入除
等二付、改二相洩候者老人も無御座候、若隱置脇方
露顯仕候ハ、何様ニも御法様次第可被仰付候、以上、

寅五月

有馬半次郎

和田小右衛門

山内吉左衛門

山内甚右衛門

国分宗門手札

御改所

是々奥清書別冊二相調候

年号月日

與中名前

銘書

所出并他人死人帳

所出

時衆宗

山内吉左衛門
娘

右者所衆中山崎清左衛門方江為縁與相除申候、

合女老入

死人

右同

右者申十二月相果申候、

禪宗

和田小右衛門
母

右者申六月相果申候、

右同

有馬平八

右者亥六月相果申候、

平八

母

右者申十二月相果申候、

合男女四人

男式人

女式人

他入

敷根衆中
猿渡權次郎大叔父亡
猿渡七左衛門嫡子

猿渡七右衛門

山内甚右衛門祖父隱居

山内三左衛門

右者所衆中和田小右衛門直子無之、養子成之願御免被仰付入来、敷根曖證文有之、

敷根衆中
猿渡權次郎大叔父亡
猿渡七左衛門
妻

右者所衆中和田小右衛門方江為縁與入来、敷根曖證文有之、

合男女式人

男老入

女老入

右者此節宗門手札御改二付内改仕候處、所出・他入・

死人右之通御座候間、此段申上候、以上、

子五月

有馬半次郎

和田小右衛門

山内吉左衛門

山内甚右衛門

国分宗門手札

御改所

(表紙)

明治三年午五月

人別内改帳

山内甚右衛門

山内吉左衛門

和田七右衛門

有馬半次郎

野村清太

和田助市

當

一年三拾九才

山内甚右衛門

一同三拾八才

甚右衛門
妻

一同拾六才

甚右衛門
娘

一同拾四才

甚右衛門嫡子
山内孝右衛門

一同拾貳才

甚右衛門
娘

當
一年九才

甚右衛門二男

山内弓二

一同六才

甚右衛門三男

山内甚太夫

一同貳拾九才

甚右衛門下人

弥平太

一同七拾壹才

弥平太

母

合男女九人

男四人

女三人

下男壹人

下女壹人

當
一年五拾四才

山内吉左衛門

一同五拾九才

吉左衛門

妻

當
一年貳拾八才

吉左衛門嫡子本名喜次郎

山内真七

一同貳拾五才

吉左衛門

娘

合男女四人

男貳人

女貳人

一年三拾六才

和田七右衛門

右者養父和田小右衛門相果、七右衛門江繼目御免被仰付、御地頭證文御座候、

(コノ一枚破損ニテ残り原本欠ク)

男貳人

女貳人

一年七拾才

和田助市

右者、所士族和田七右衛門叔父ニ而候処、別立之願御免被仰付、御地頭證文并七右衛門證文御座候、

一同六拾壹才

助市

妻

一年貳拾貳才

助市嫡子

和田十助

合男女三人

男貳人

女壹人

(コノ間脱アリカ)

一當年式拾五才

合男老

有馬半次郎

内六ツ士族

老ツ下人

一年三拾九才

野々村清太

一同三拾四才

清太
妻

一同拾五才

清太嫡子
野々村清太郎

一同八才

清太
娘

一同三才

静太二男
野々村清蔵

合男女五人

男貳人

女貳人

生男老

合家部七ツ

内六ツ士族

老ツ下人

合戸数七ツ

国府人別

御改所

午五月

有馬半次郎

和田助市

和田七右衛門

野々村清太

山内吉左衛門

山内甚右衛門

右考、此節人別御改之内改仕候様委曲被仰渡趣承知

仕、私共與中差寄互ニ詮議仕、家内相改申候處、御法

違又者御法度宗旨曾而無御座、且又生子其外入除等ニ

付、改ニ相洩候者老人も無御座候、若隱置脇方より

露頭仕候ハ、何編ニも御法様次第可被仰付候、以上、

是より奥清書別冊ニ相調候、

銘書

死人帳
年月日
与中名前

死人

和田小右衛門

右巳四月相果申候、

合男老入

右者、此節人別御改二付内改仕候処、死人右之通御座候間、此段申上候、以上、

午五月

有馬半次郎

和田助市

和田七右衛門

山内吉左衛門

山内甚右衛門

国府人別

御改所

(表紙)

明治三年午五月

人別内改帳

久木田助右衛門

久木田平左衛門

松下金蔵

松下庄次郎

松下庄八

鮫嶋次右衛門

堀切喜之丞

一當年貳拾九才

久木田助右衛門

一同貳拾六才

助右衛門
妻

一同四才 生子

助右衛門嫡子
久木田佐藤次

右直子別条無御座候、

一同七拾八才

助右衛門
祖母

合男女四人

十三 宗門改帳

男壹人

女貳人

生男壹人

一當年四拾九才

久木田平左衛門

一同四拾貳才

平左衛門
妻

一同貳拾壹才

平左衛門嫡子
久木田平右衛門

一同拾五才

平左衛門二男
久木田良左衛門

一同拾才

平左衛門
娘

合男女五人

男三人

女貳人

一當年六拾五才

松下金藏

一同三拾四才

金藏嫡子
松下金左衛門

一同三拾壹才

金左衛門
妻

一同拾壹才

金左衛門
娘

一同九才

金左衛門嫡子
松下孝左衛門

一同四才 生子

金左衛門
娘

右直子別条無御座候、

合男女六人

男三人

女貳人

生女壹人

一同三拾才

松下庄次郎

右者所士族松下金藏二男二而候処、別立之願御免被仰付、御地頭證文并金藏證文御座候、

合男壹人

一當年五拾八才

松下庄八

右者所士族松下金藏弟二而候処、別立之願御免被仰付、御地頭證文并金藏證文有之、

一同四拾九才

庄八
妻

一同貳拾九才

庄八嫡子

松下庄太郎

合男女三人

男貳人

女壹人

一當年四拾三才

鮫嶋次右衛門

右者父鮫嶋次左衛門相果、嫡子次右衛門へ継目被仰付、御地頭證文御座候、

一同三拾貳才

次右衛門妻

右者敷根士族川崎惣四郎娘二而候処、同所士族池田源左衛門方へ致縁與、去ル寅人別御改之節妻二取入置以後離別二而、親元へ致帰参居、為縁與入来、敷根隊長證文御座候、

一當年四才

生子

次右衛門嫡子

鮫嶋次郎左衛門

右直子別条無御座候、

一同七拾五才

次右衛門母 本次左衛門妻

合男女四人

男壹人

女貳人

生男壹人

一當年五拾才

堀切喜之丞

一同四拾五才

喜之丞妻

一貳拾五才

喜之丞嫡子 堀切彦次郎

一同貳拾五才

彦次郎妻

右者所士族山下紋次郎娘為縁與入来、紋次郎證文有之、

一同拾貳才

喜之丞娘

一同拾壹才

喜之丞二男 堀切武助

一同六拾八才

喜之丞養母

合男女七人

男三人

女四人

合士族家部七ツ

十三 宗門改帳

合戸数七ツ

右者此節人別御改二付、内改仕候様御觸流を以被仰渡趣承知仕、私共與中差寄互ニ詮儀仕内改仕候処、御法度之儀曾而無御座候、且又生子其外入除等二付改ニ相洩候者、并御法度之宗旨老人も無御座候、万一隱置脇方々露顯仕候ハ、何様ニも御法様次第可被仰付、依而内改帳如斯御座候、以上、

午五月

堀切喜之丞

鯨嶋次右衛門

松下庄次郎

松下金藏

久木田平左衛門

久木田助右衛門

国府人別

御改所

是々奥別冊ニ清書相調候

銘書
年号月日
他出并死人帳
與中名前

他出

當年式拾毫才

松下庄八
娘

右者數根士族安楽伴助方へ為縁與相除申候、

合女老人

死人

鯨嶋次左衛門

右巳三月相果申候、

合男老人

右者此節人別御改二付内改仕候処、他出・死人右之通御座候間、此段申上候、

午五月

堀切喜之丞

鯨嶋次右衛門

松下庄八

松下庄次郎

松下金藏

久木田平左衛門

久木田助右衛門

国府人別

御改所

十四 日記類

「御姫様御下ニ付御供日記」

国分市中央一丁目 牧元みどり氏蔵

齊彬公の御女子御下に付、御供の国分郷土牧元実應が江戸出立の文久二年（一八六二）十月二十九日から、鹿府着の翌三年（一八六三）一月二十二日まで八十余日の東海道、中国、九州路の厳寒の雪中徒歩の旅について、宿泊、道中行程、天候、出来事などを詳細に記している。

「明治八年日記」

国分市中央二丁目 秋山房枝氏所蔵

明治八年一月一日より同年十二月三十一日まで秋山清賢が記録したもので、年中行事、役所の仕事、個人の生活等多面にわたっている。明治初期の地方行政の実際を知る手掛かりとなる貴重な資料である。

（表紙）

文久二年戊十月廿九日

御姫様御下ニ付御供日記

牧元能庵

十月廿九日

一御姫様江戸御出立十月廿九日、御供揃朝六ツ時、御立之儀ハ五ツ時分被遊御座候、品川御昼飯、御泊宿川崎、道法二里半程、

十一月朔日

一川崎より御出立、朝御供揃六ツ時、御立之儀ハ五ツ時被遊御座候、御昼飯保土谷、御泊宿藤沢、道法五里、かしわ屋次郎兵衛所宿、

同 二日

一 藤沢より御出立、御供揃六ツ時、御立之儀ハ五ツ時被遊御座候、御昼飯大磯、御泊宿小田原、道法八里半、

同 三日

一 小田原より御出立、朝御供揃朝六ツ時、御立之儀ハ五ツ〔時被遊御座候〕、御昼飯箱根入口、御泊宿箱根野

町、其夜雪降り五〇〇

同 四日

一 箱根野町より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿三嶋、其日雪雨降り、道法八里程、

同 五日

一 三嶋より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯原、御泊宿吉原、其日晴天、道法七里半、

同 六日

一 吉原より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半〔由井〕被遊御座候、御昼飯由ひ、御泊宿江尻、其日晴天、道

法七里程、

同 七日

一 江尻より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯〔駒子〕丸子、御泊宿藤枝、其日晴天、道法八里程、

同 八日

一 藤枝より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯〔金谷〕かなや、御泊宿掛川、其日晴天、道法六里半程、

同 九日

一 掛川より御出立、朝七ツ時御供揃、御立出之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯見附、御泊宿濱松、其日晴天、道法七里程、

同 十日

一 濱松より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時被遊御座候、御昼飯〔新居〕あらひ、御泊宿白須賀、其日晴天、道法六里半程、

同 十一日

一 白須賀より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ

時被遊御座候、御昼飯吉田、御泊宿赤坂、其日晴天、道法八里程、

同 十二日

一 赤坂より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時

半被遊御座候、御昼飯岡崎、御泊宿ちりう、(池鯉附)其日晴天、道法七里程、

同 十三日

一 ちりうより御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ

時被遊御座候、御昼飯なるみ、(鳴海)御泊宿宮、其日晴天、

佐屋廻りニ而道法八里程、

同 十四日

一 宮より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ時被

遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿久わな、(桑名)其日晴天、道法、

同 十五日

一 久わなより御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ

時被遊御座候、御昼飯四日市、其所より伊勢路ニ而罷

行、御泊宿かんべ、(神戸)其日半天、道法、

同 十六日

一 かんべより御出立、朝七ツ半時御供揃、御立之儀ハ六

ツ時半被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿津、其日

半天、道法、

同 十七日

一 津より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ時被

遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿松坂、其日晴天、

道法、

同 十八日

一 松坂より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ時

被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿山田、其日外宮

ニ者御参詣被遊御座候、

同 十九日

一 外宮より朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ時、内宮ニ

御参詣、其日二見浦ニ御見物、御供とシテ差越申候、

御泊宿矢張山田ニ而被遊御座候、道法、

同 廿日

一 山田御出立、朝七ツ時半御供揃、御立之儀ハ六ツ時、

又後かへひ、御泊宿松坂、其日晴天、道法、

同 廿一日

一 松坂より御出立、朝六ツ時御供揃、御立五ツ時、本之

津御泊宿、其日晴天、道法、

同 廿二日

一 津より御出立、朝七ツ時半御供揃、御立之儀ハ六ツ

半、御昼飯無御座候、御泊宿坂下、(坂之下)其日晴天、道法、

同 廿三日

一 坂之下より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ

時、御昼飯無御座候、御泊宿水口、其日晴天、道法、

同 廿四日

一 水口より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半

被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿くさつ、(草津)其日晴

天、道法、

同 廿五日

一 くさつより御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ

被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿大津、其日石山

寺・三井寺両寺御参詣被遊御座候、晴天罷通り、道法、

同 廿六日

一 大津より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ被

遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿京都、其日雨天ニ

而罷通り、同廿七日、京都見物いたし、智恩院・清水

寺・おわの瀧・東山見物いたし、同廿八日、一條同城

・二條同城・天子之處・九條高塚・大原三美之處、同

廿九日・同晦日、両日者見物なし、十二月朔日、朝か

ら暮迄雪降り、私共其日宿屋に昼寝として罷居申候、

同二日・同三日・同四日・同五日、見物なし、同六日

之朝、御姫様京都御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀

ハ五ツ時被遊御座候、京都江中日九日之御當留、宿屋

本屋理兵衛所、

同 六日

一 京都より御出立六ツ時、御供揃之儀ハ五ツ被遊御座

候、御昼飯宇津、御泊宿伏見、其日晴天ニ而罷通り、

宇津之儀ハ茶之名物、道法、宿屋樽屋次兵衛所伏見、

同 七日

一 伏見より御出立朝六ツ時、御供揃之儀ハ五ツ被遊御座候、其處大坂迄川舟として罷居申候、舟之上道法拾里、直に大坂御屋敷之下ニ着、御姫様暮時分ニ御着、私共六ツ半時分ニ着、御宿之儀ハ御屋敷詰、賄方ハ外方河内屋仕出、

同 八日

一 於大坂、御姫様住吉大明神御参詣之儀者、船として御通行被遊御座候、私共迄船として御供、御昼飯住吉ニ而御賄被下、誠ニ難有次第、其處大明神之内、忠久公御出生被成候處有之、戻リニ着、天下寺ト申處有之、御姫様御入、段々置物御拜見被遊候、御屋敷ニ着暮時分ニ着、御昼飯御賄之儀ハ住吉町徳藏申所、大坂江中三日之御當留、私共御城見物いたし、誠ニ珍敷御座候、

同 十一日

一 大坂より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半被遊御座候、中国路御供、御昼飯無御座候、御泊宿西

之宮、其日晴天ニ而罷通り、宿元御着之儀ハ暮時分ニ罷成、道法六里、

同 十二日

一 西之宮より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿兵庫、其日晴天ニ而罷通り、道法五里、

同 十三日

一 兵庫より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿播摩之國大蔵谷、其日晴天ニ而罷通り、道法四里半、宿元江七ツ時分ニ着、紺屋安右衛門所、

同 十四日

一 大蔵谷より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ被遊御座候、御昼飯無御座候、御泊宿加吉川、其日晴天ニ而罷通り、道法五里、宿屋江七ツ時分ニ着、揚屋佐一郎、播摩、

同 十五日

一 加小川より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ

御通行被遊御座候、御昼飯姫路、其日段々御見物被遊候、高砂尾松・相祭ひ松・己の征石室・□殿・天満宮ニ御参仕、其處ニ勘猩々之植松二代目罷行申候被仰聞、誠ニ宜敷松、御宿賦ハ三里、段々御見物ニ付道御廻リニ付八里半程、宿元江暮時分ニ着、頭屋渡助所、播摩、

同 十六日

一姫路より御出立、七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御昼飯御泊宿宇根、其日御見物之處無御座候、雨天ニ而罷通り、道法八里半、宿元江暮時分ニ着、播磨宇根之町壺屋與太夫所、

同 十七日

一字根より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿形神、備前之國、其日晴天ニ而罷通り、道法七里半、横屋利助所、

同 十八日

一形神より朝七ツ半時御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿備前之岡山、御城ハ其日雪雨降り

罷通り、道法六里、宿元江七ツ時分ニ付、藤屋作吉郎所、晴天ニ而罷通り、

同 十九日

一岡山より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿備中川邊之郷かち屋與太郎所、其日晴天ニ而罷通り、道法六里半、宿元江七ツ時分ニ着、

同 廿日

一備中より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿備中七日市十七瀬川角力取所、其日晴天ニ而罷通り、道法六里半、宿元江七ツ過ニ着、

同 廿一日

一七日市より御出立、御灯煉引ニ付八ツ半時御供揃、御立之儀ハ七ツ時御通行被遊御座候、御泊宿備後阿寄様(尾之通)領分小野道米屋喜兵衛所、其日晴天ニ而罷通り、道法八里半、宿元江暮時分ニ着、

同 廿二日

一小野路より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿本口、其處之家老朝之字根城之儀ハ、小坂之城ニわたり秀吉公のおつき被置候となん、宿屋影屋伴兵衛所、

同 廿三日

一本口より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ御通行被遊御座候、御泊宿下ヶ州四日市、道法六里半、其日晴天、宿元七ツ半時二着、池田屋喜助所、

同 廿四日

一四日市より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿下ヶ州廣嶋中町住吉屋嘉兵衛所、道法六里半、其日晴天、宿元江七ツ半時分二着、

同 廿五日

一廣嶋より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ御灯煉御用御通行被遊御座候、御泊宿下ヶ州欽輪、其日宮嶋江御参詣被遊御座候、私共御供欽さ川湊より船乗出宮嶋迄四里、誠二能き所ニ而御座候、鹿第一人馴置候、

其外猿大く千重敷之御堂ニ遊置候、宮嶋より船乗出欽輪湊迄二里、其處御泊宿、新屋常吉所、

同 廿六日

一欽輪より御出立、朝七ツ半御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿防州欽賀、其日雨天、道法六里半、宿屋江七ツ時二着、防州欽賀相延屋佐助所、

同 廿七日

一玖阿より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ御灯煉御用御通行被遊御座候、御泊宿防州徳山、其日雨天、道法七里、宿元江六ツ時分二着、中屋六蔵所、

同 廿八日

一徳山より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ御灯煉御通行被遊御座候、御泊宿長州宮市、道法八里、其日晴天ニ而罷通り、宮市御本陣御姫様御着七ツ時、守衛方人数江御酒被仰付誠ニ難有、就ハ矢張り其處ニ御當留、文久三年亥正月二日、〇ツ時御出立、晴天ニ而罷通り、宿元小郡秋元屋渡、〇郎所、道法四里、

同 三十一日

一小郡より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ御灯煉御用御通行被遊御座候、御泊宿長州吉田布袋吉兵衛所、道法七里、宿元江七ツ半時分ニ御着、

同 四日

一吉田より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ時御通行被遊御座候、御泊宿長州下之関、其日小倉迄御渡之筋御座候共、風吹出申候儀ニ付下之関御本陣江御着、私共嶋屋伊兵衛所、其日朝雪降り通痰、先々無事ニ罷通り、道法五里、

同 五日

一下之関より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ御通行被遊御座候、船之上沓里、大里申處江着、濱道二里合三里、九州小倉ニ御着、御姫様御本陣江御入、私共宿屋掃屋茂兵衛所、

同 六日

一小倉より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿九州木屋瀬、道法六里半、其日晴天、木屋瀬傳兵衛所、

同 七日

一木屋之瀬より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、昼飯筑前之、御泊宿青柳、道法八里、其日晴天ニ而罷通候、宿元江暮時分ニ着、其處源海^(玄)なた、誠ニ西之果ニ而御座候、宿屋亭主惣市所、

同 八日

一青柳より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御昼飯はかた御泊宿、宰府天神御参詣被遊御座候、其日雨天ニ而罷通り、宿屋富田屋太七所、暮時分ニ着、筑前、

同 九日

一宰府より御出立、朝五ツ時御供揃、御立之儀ハ四ツ御通行被遊御座候、御泊宿山家、^(山鹿)其日晴天ニ而罷通り、道法二里、宿屋亭主武六所、八ツ時分ニ着、筑前、

同 十日

一山家より御出立、朝七ツ半御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿肥後之府中、其日晴天、道法六里、宿屋亭主かしわ屋作四郎所、七ツ半時分着、

同 十一日

一府中より御出立、朝七ツ半御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿^(肥後)筑後瀨高、^(牟田丸)無田屋常右衛門所、其日晴天、道法六里半、宿元江七ツ半時分二着、

同 十二日

一瀨高より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿肥後之小松屋只八所、其日晴天、道法八里、宿元江暮時分着、

同 十三日

一高瀨より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿肥後川尻草津屋安次郎所、其日晴天、道法八里、當所宿元江暮時分二着、

同 十四日

一川尻より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿肥後小川菊屋庄次郎所、其日晴天、道法六里、當所御宿元江暮時分二着、

同 十五日

一小川より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ御

通行被遊御座候、御泊宿肥後日啼子、^(日奈久)菊屋弥兵衛所、其日晴天、道法七里、當所御宿元江暮時分二着、

同 十六日

一日奈久より御出立、朝七ツ半御供揃、御立之儀ハ六ツ御通行被遊御座候、御泊宿肥後佐敷酒屋利三右衛門所、其日晴天、道法六里、當所御宿元江暮時分二着、

同 十七日

一佐敷より御出立、朝七ツ時御立之儀ハ、御灯煉御用御通行被遊御座候、御泊宿御国出水窪田六左衛門殿所、其日半天、道法九里半、御宿元江暮時分二着、

同 十八日

一出水より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ六ツ半御通行被遊御座候、御泊宿阿久根本町彦右衛門所、其日雨風強御座候得共、皆々無事二罷通り、道法六里、宿元江七ツ半時分二着、

同 十九日

一阿久根より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ五ツ御通行被遊御座候、御泊宿向田田中源次郎所、其日曇

日、道法八里、御宿元江六ツ過ニ着、

同 廿日

一向田より御出立、朝七ツ時御供揃、御立之儀ハ七ツ半御通行被遊御座候、御泊宿伊集院松崎六左衛門殿所、其日晴天、道法八里、御宿元江七ツ半過着、廿一日迄御姫様御風邪ニ而、一日御當留被遊御座候、御供人数も矢張り同断ニ而御座候、

同 廿二日

一伊集院より御出立、朝六ツ時御供揃、御立之儀ハ四ツ御通行被遊御座候、御昼飯横井、鹿兒嶋水神坂行七ツ半迄しばらく御休、御二丸御入之時者六ツ前ニ罷成候、私共二丸御門入、奥之御門迄御供、誠ニ難有次第、鹿兒嶋西田町・千石馬場之人多く御座候、此日記置候、

一金子六兩貳步壹朱ト小錢百八拾三文、江戸御下ニ付御賦銀、戌十月廿九日御立、

一金子七兩貳部貳朱ト小錢四拾六文、大坂於御屋敷ニ賦

銀被仰付、戌十二月九日、

一金子貳兩三步壹朱ト小錢貳百七拾八文ハ、大坂ニ而日

重銀被仰付、十二月九日、

二行合金子拾兩壹部三朱ト小錢三百貳拾四文、御賦銀日重銀、

一金子壹兩壹部壹朱ト小錢貳百五拾七文、京都於御屋敷ニ日重銀被仰付、十一月晦日、

一金子貳朱金一切ト大錢一枚、御姫様白須賀御宿ニ而御酒料として被仰付、十一月一日、

一金子貳朱一切大錢一枚小錢二文、同御酒料として津ニ而被仰付、十一月廿一日、

一同式朱一切ト大錢一枚小錢四文、御酒料として中国薩摩国大藏谷御宿ニ而被仰付、十二月十六日、

一金子壹兩、御酒料として中国形井ニ而被仰付、十二月十七日、

一同式朱一切、御酒代として被仰付、文久三年亥正月二日、

一同式朱一切、御酒代として被仰付、正月五日、小倉ニ

而、

一同貳部貳朱、日重として被仰付、正月十日、筑後府中

二而、

惣合金子、貳拾兩壹部壹朱

小錢、壹貫四百二文

(表紙)

九年一月ニ移ル 陰曆甲戌十一月廿四日ヨリ

乙亥十二月四日迄

明治八年日誌

一月一日ヨリ
十二月卅一日迄

源朝臣清賢

庶事記第六ヨリ繼ク、

明治八年乙亥一月一日晴天、陰曆十一月廿四日

一今日真孝村在勤、秋山七郎殿頼、畠方下作入込并畠代
銀戌年分諸ざつ用割込方、役所宿いたし、

二日晴天

七郎殿頼昨日之通り、并戸籍取調、但甲戌年分余程出
入等差引なり、

三日晴天

今日毎之通り七郎殿頼ミ、

一朝濱之市年行司所ニ行て、加治木々墓石三組便々取寄
方頼置候事、代錢とシテ金三円頼置候、但式組左衛門
殿方、

一東京・横須賀・横濱・神戸邊筑波艦乗付、小原武二殿
方へ書状屯通差出したり、

壹月四日晴天

一今日真孝村滞在昨日之通り、

一波戸之土手、先達而住吉村之者ども大根下しニ付、石

垣并常磐數踏あらし、当人ども昨日日本之通致修膳、今

日用相掛衆見分ニ被差越候事、

一松下助一殿、駅通ニ被来候而後致出役、嘉右衛門殿錢

揃へ候事、

五日晴天

一今日真孝村滞在、昨日之通り、拙者ニハ七郎殿相頼置

候而昼々帰り、氏神祭・祖霊祭・水火之神祭等いた

し、客人少々有、

六日晴天

一朝鮫嶋助二殿所ニ行て、役所頼置住吉村ニ行、仲之

丞出會、損地并受代等召置割付、夫々取納入金差引等
致し、

七日晴天

一今日役所出席、當番相請取候事、

一出納方より御用錢利足三拾九貫文、今日相納いたし置
候事、

一後太次右衛門殿・市兵衛殿・仲右衛門殿・半七殿、拙

宅江出會、

八日晴天

陰曆十二月一日

一今日當番之故ニ役所出席、

一今日家内出納算別改正候事、

一錢貳百貳拾壹貫六百八拾四文、野村源七殿と半分ツ、

所出納方々受入頭錢五百貫文、委細ハ庶事記ニ有、

亥一月九日くもり

一當番之故役所出席、

一先達加治木へ頼置候墓石、相違之誤濱之市々由來候ニ

付、七左衛門殿加治木へ被差越候事、

一 錢四拾毫貫五百貳拾九文、源七殿・七助殿・拙者にて

十三日雨天

調木并杉木建方いたし、代銀とシテ勝手方へ相納候事、

一 今日副戸長之状持ばん、見次村之三次郎代り同村之太郎代り合いたし、

十日晴天

一 當番之故役所出席、横川出藏^主加治木津畑御^主津辺夫

百人諸村へ手當いたし、

一 国分五ヶ在部下り高取しらべ、區長方へ差出し相成たり、

一 蔵々現収納前取しらべ、検査役方へ同断、

十一日小雨

一 當番之故役所出席、村々浮免しらべ并戸籍しらべアリ、

十二日晴天

一 今日當番故昨日同断、今日同役衆へ御用談申出し候而、粟代銀日延其外諸事請合、并在役御用村々へ申渡候、状持ばん并身売奉公ども貸錢取究候事、後八右衛門殿・休五郎殿・仲右衛門殿・金兵衛殿・庄七殿拙宅

ニ出會、

一 今朝濱之市森社年頭赤塚清兵衛・松田半次郎拙宅ニ来り、小教院建付方ニ付、諸入價差出として、村々楮買入願出候、

入願出候、

一 鹿兒嶋士族有川小太郎殿拙宅ニ来り、杵悪木建方之一条被申候事、尤諸村へ惡木しらべ之儀申渡したる段申置候、

一 當番之故ニ役所出席、戸長市成弥助殿・右同牧元用助、戸長寄安樂万治殿、如斯今日第一支廳より被仰付候事、村々へ布告いたし候、

一 今日日秀神社三百年回御祭、来一月十五日也、諸人参詣候様致布告、

一 錢六拾貫文、先達出縣旅費并印鑑代とシテ受取候、後要蔵・八右衛門・万治・新右衛門・助二・庄左衛門・仲右衛門・庄七・喜之丞・市兵衛・宗太郎等、其外拙宅ニ出會、

亥一月十四日晴天

一 當番之故役所出席、戸籍并馬調有、又兩町四ヶ浦之極

貧者ども取調可差出旨申渡し、

一粟代銀過當之直段ニ付、区長衆ノ異論可有ハ至急可申
出旨到来候付、今日戸長方ニ而願書取仕建、服部良之
助殿當而濱之市ノ遣ス、

一金壹円ニ付、十錢拾貫文替之布告有、右ハ是迄金壹円
ニ付拾錢拾貳貫五百文相場ニ而候処、右通改正相成
候、但シ是迄十錢壹里、新錢ニシテ拾貳貫五百文拾六
錢壹里拾貳貫文なれども、此節ノ錢壹里拾貫文拾六錢
壹里九貫壹百文相場ニ相替たり、其外布告アリ、

一今日真孝村浮免大豆取納いたし、

亥 一月十五日晴天

一當番之故役所出席、藏々取納等ニ而出席少し、

十六日雨天

一今日者當ばん牧元安藏殿へ次渡し、後安藏殿処ニ出會、

十七日はれ

一今日真孝村ニ行藏出勤、見次村・真孝村ニ而取納有、

大豆少々入、後役所へ帰り候処、頭痛不快ニ付帰宅、

今晚附床、

亥 一月十八日晴天

一今日不快之故終日着床葉保養いたし、弟庄次郎儀も足
痛ニ而、先達而病床いたし、下人新左衛門儀も少シ
火ノ痛塩梅ニ而草臥居候、是ハ步行ニ不善候、嫡子・
正孫も先達而不快之様子ニ見得候、家内悉く一所ニ
たれ込相成たり、

十九日晴天

一今日拙者ニハ少し快く相成候故致床離、又代りて妹の
り頭痛梅塩^(ママ)ニ而着床いたしたり、

一今日前之源七どの頼入、城山之木伐いたし、

一新左衛門親父来り、

一濱之市町役来り、諸出来納免ル年行司金次郎、同人後
庄右衛門并真孝村之次左衛門、今役御用ニ依而来り、

一水無川原之小濱十太郎来り、弟奉公ニ頼度段被申候、
依而拙宅ニ奉公之筋ニ相究候、かり錢四百貫文内貳百
貫文爰ニ而かり、残貳百貫文春ニ當りてかり被成賦、

扶持錢之儀未究置候而、先ニ而世間并ニ而可究筈、則
祝として今日暮方ニ右十太郎弟勘助同列被来候、別紙

証文有、爰にて錢貳百貳拾五貫五百文相渡し候事、

亥一月廿日晴天

一今日真孝村二行、尤收納日限今日限ニ付、催促きびしく仕候、并藏勤大豆取納等有之、村々少々者米取納有之、仲之丞・静太・權之丞殿・喜之丞殿出會イタシ、戸長山内甚右衛門殿・拙者ニハ役所二行てとまり、

亥一月廿一日晴天

一今日真孝村滞在、粟代銀取そろへ并藏勤權之丞殿出會、今日迄ハ持込取納有之、

廿二日晴天

一今日真孝村滞在、平、今日も小濱甚助来り相勤候、

廿三日晴天

一今日同断、平、名主喜兵衛娘、小觸之伊右衛門へ婚礼之祝有、

廿四日晴天

一今日朝打立帰宅、出役所二年中わり有之出席、真孝村之十右衛門ハ詰、金之助ハ用有下役さふ用割願、金藏八年中わり方とシテ列来り候、同役出席数人也、今日

暮ニ至て様々相済候、

一今日新左衛門休俗とシテ真孝村二行、

亥一月廿五日晴天

一今日家内出納改正候事、

一役所出席、免米拂切手作方ニ付、損地・休地・受代・見掛相渡、部下り等之高取りしらべ方、太次右衛門・市兵衛等出會也、後早、

廿六日もり

一朝師走之引拂帳面繰いたし、

一役所出席、拂切米取しらべ方、今日迄ハ不相済候、

廿七日晴天

一今日役所出席、破免拂切手形申請帳取仕建方相済候、後要藏所出會、八右衛門・静太・權之丞其外数人、

亥一月廿八日晴天

一今日窮迫者取調方とシテ、濱之市も真孝村・野久美田村之様二行、戸長山内甚右衛門殿、同役久木田八右衛門殿、今日終日也、

廿九日雪雨寒し

一 今日真孝藏付村々引結方とシテ、真孝村二行、要藏・
 静太・權之丞・仲之丞出會、村取納米算計、半物壺ヶ
 付^付ニ出る賦也、

三十日はれ

一 今日拙宅ニたゝみ傳左衛門相頼候、中ゑ之表かえいた
 し、

一 福嶋村^ゝ上小川村へ行、取納引拂いたし、上小川村之
 内不足米貳斗三舛六合四夕之儀、代銀三百貫文立ニ而
 究置候、

一 見次村之返代并定代相拂候事、庶事記ニ有、
 一 真孝村之伊右衛門来り、濱之市年行司来り、
 亥二月三十一日晴天

一 今日真孝村二行、役所ニ而免本銀催促、名主共出會、
 平、

亥二月一日晴天

一 同村滞在、朝赤塚源太左衛門殿見舞二行、并片野坂殿
 今日罷帰候、

一 濱之市年行司^ゝ、免本銀半方を貸シ被給との願有、

一 濱之市新田さふ用諸々へ割付いたし、

二日晴天

一 今日於見次村ニ宮内原新田諸さふ用錢わり有、次席八
 右衛門・權之丞等出會、

三日晴天

一 今日真孝村ニ而、藏仕出錢わり有、東馬場之伊右衛門
 所、静太・權之丞・仲之丞出會、

一 朝之間駈所ニ行、

亥二月四日晴天

一 今日真孝村ニ而免本銀催促、
 一 錢貳貫貳百拾四文濱之市町役へ差出し、
 一 諸拂いたし、夜更ル迄、

五日晴天

一 今朝真孝村^ゝ歸り、家内諸拂いたし、
 一 濱之市武右衛門来り、弟武兵衛嫁證文一条也、
 一 服部兵衛門家出火有、諸人統合候、正午時分也、
 一 暫く役所出席、出火之届申出候、後在宅家内諸拂、
 一 後真孝村ニ詰同道、申下刻^ゝ真孝村二行、村中年中入

拂并免本方銀等致シ、終夜不寢し夜明る、

亥二月六日風雪天 陰曆乙亥正月元日

いまだ風俗旧弊ニなつミ、朝政不行レして、旧曆を以諸人新年祝いたし、新□之年取有、今日曇之中目雪降ニ而甚寒し、

一今朝五ツ時過真孝村江歸り、前岡夜起して今日草臥休息いたし、小二郎・鉄太郎・嘉次郎・鉄兵衛等来り、

七日晴天少し風 旧正月二日

一今日旧曆ニ依り於役所ニ座初有之出席、其後近所親類中年頭廻いたし、

一下人共江ぞりぢき取入与へ、代錢、

八日晴天 旧三日

一今日朝井尻次右衛門来り、大野原畠江左用いたし、別帳ニ有、

一明免本銀取納方ニ付縣之賦ニ而、今日ハ打立、真孝村ニ行、同座ニ而藏付分ニ付免本銀取揃へ方、權之丞・静太出會、今日金子札丈ケ取揃へ、現錢之儀ハ村々ハ陸路夜越之賦、

亥二月九日晴天

一今日鶏明真孝村ハ打立、陸路當朝同村之作与喜三次引列、正午之時分ニ着県、四藏付同役出會候事、

十日小雨天

一今日租稅課エ引付作方とシテ仲之丞同道行不相調候、午後金藏エ現錢送方いたし、同用之者共エ願置候、

十一日晴天 休日也

一今日朝正副戸長俸禄代方とシテ、脇岡彦左衛門所ニ見舞いたし、尤今日休日之故ニ買物等いたし休息、平、一今日同役取計ニ而、問屋亭主ハ新年祝とシテ酒差出し、

亥二月十二日晴天

一今日国分四藏粟代銀丈候而相濟候、上納苦勞料として一藏ニ付錢八貫文ツ、出候、受取ニ相成候ハ真孝甚兵衛、左之通、

記 已上 汾陽中二印

金七百拾九円五拾錢 錢三千八百貳貫六百貳拾文

金ニシテ三百八拾円貳拾壹

錢貳り

受取六百拾四貫六拾四文之内

代受取三百貫五拾貳文証

先とシテ三百貳拾貳貫四五文

先知ハ三円四拾貳錢貳り貳毛貳糸

国分郷諸在

納人秋山多郎

一右者去戌秋国分与真孝畠畠受取代金右之通相及候間、

汾陽より租税課差越相届候間、可然旨出納課_亥二月廿

一日伺錢相受取候也、

外 金藏相拂役小倉喜之助印外三人、

亥二月十三日雪天

一今日朝廳ニ出、出納課ニ而官用いたし、午前十二時相

濟、夫_レ買物等いたし後休息、肥後_一兵衛・山元角助

今日帰郷、

十四日晴曇

一今日陸路帰郷、前原仲之丞・石塚七郎次・鯨嶋助二・

徳持幸藏・佐々原喜兵衛同道ニ而、處々ニ休息して午

後七時着宅休息、

十五日晴れ曇

一今日役所出席、帰郷之届申置候、役所之儀、少教院建

付方者彼方へ差向ケ相成、半分ハ郷校ニ取添へ相成ル

賦ニ付、郷役所之儀ハ旧郡治所ニ引直シ相成、昨日_レ

着座ニ而候、尤此當り役所地面ニ而候也、當番岩城太

次右衛門其外出席、平、夜聖林寺座主来り、正中参、

一今日弟彦次郎木房湯治ニ行、

亥二月十六日雪天 旧正月十一日

一今日真孝村ニ行、戸長安樂万治殿、同副小原一兵衛殿

出會、孝養有者聞合方、同村之伊太郎并亀太郎方へ聞

合相成候、午後相濟候後帰り、

十七日晴天

一今日役所出席、當番市兵衛、平、

一昼_レ松下殿・前原氏と本町出張、海江田宅右衛門所ニ

行、陸運会社之規則更ニ改正いたし、年行司之耆人ニ

達し、稼人方之者ども拾人取立改正向相達候事、

十八日くもり

今日陸運会社之一条二付、小村出張所二行、松下氏并新川二行て仲之丞出會、小村之儀も人馬改正出シ、手数料未進催促申渡候、新川ニ茂同斷、夫々濱之市駅遞二行、松元新助・渡邊嘉兵衛出會いたし、勘定宿之条申渡候、

亥二月十九日雨天

今日役所出席、座揚り本町出張会社二行、稼人等之者ども、福嶋助左衛門・町之貞太郎等都合拾三人江主取申付、右人数てハ一ヶ月二付五拾貫文ツ、被納候様、左候而拾三人之外、或ハ裏業方ニ而、間ニ駄ちん取等之儀者、右人数之内ハ手数料取揃之上ニ相納候様、手続申渡候、

廿日くもり雨 旧正月十五日

今日真孝村二行高究也、門々百姓呼寄、新高江三人有之、為致吟味候処、米高割出し之處ニ相究り候、其通聞届候事、
一真孝蔵取拂役方へ行て、免本銀渡し置候、
一駅遞所二行て、御勘定宿之条取究候事、

亥二月廿一日くもり 旧正月十六日

今日役所御用談之訳出来候ニ付出席、少教院建付方ニ付、村々椿并死牛馬皮買圓メ方之一条也、
今日家内之女共、濱之市ハ小嶋廻二行、ばん新左衛門同列、

今日名主・小觸之御請とシテ、當番市兵衛処出會、

廿二日晴風

今日朝小濱十兵衛來り、錢借一条也、
一役所出席、平、
一古鋸壺刃小濱十太郎方ニ遣候、
今日役所ハ宇都之池ニ見賦見分とシテ行、尤邪宗□料用とシテ堀調方有之筈也、後ニハ肥後市兵衛所二行、真孝村之内休左衛門并手村受込ニ而者、淡難之儀ニ付、諸具丈割之所願出形行書置申候、

廿三日晴天 旧正月十八日 馬乗アリ、

今日役所出席、當番市兵衛、尤宇都之池端江小觸・町役御用ニ而、真乘法師現立之訳并ふり・歟作調方等相渡候、今日旧十八日ニ而早く引取、平、

一 波戸田ざふ用錢木藤半助渡し、

亥二月廿四日晴天

一 今日轉売船明方として川田村二行、戸長牧元用助殿・安樂万治殿・市来弥助殿、同役三嶋彦左衛門殿・曾山市右衛門殿立會候而鞠問いたし、式拾人餘申出候、今晚川田村泊り、

廿五日くもり

一 今日早天同列下井村ニ轉宿、同村船明方いたし、并に掛良之助殿・船右衛門殿出會いたし、昼過小村ニ轉宿同村船明、今晚小村とまり、

廿六日雨天

一 今日小村より濱村ニ宿移り、一列用助殿・弥助殿・万治殿、同役ニハ庄左衛門・市兵衛・良之助・仲之丞出會、濱村船明儀昼時分相濟、夫より先引取相成候、川田村・下井村・小村ニハ逃亡之者有之候而、いまだ首尾ニハ不相成候事、

一 今日暫く濱之市ニ行て帰り、

廿七日くもり

一 今日役所出席、宇都之池坪々を以村々江割付いたし候、現立或ハ受等有之故を以也、

一 此比ニ至り、米屋ニハ粟引取不売出、職人不自由之至候条、又正中屋中ニハ甚少くなし、是以風味聞有、戸長方七人・同役五人出會有、宿葉屋之海江田所也、

廿八日晴天

一 今日役所出席、平、

一 宇都之池掘有、宇都之邊人々より受ニ相成候、

一 濱之市年行司入札ニ而、取調入札相濟、森平左衛門持参ニ而來候、山内仲兵衛・渡邊伊右衛門兩人ニ而候也、

亥三月壹日晴天 旧正月廿四日

一 朝楠元藤市殿所ニ行て、前之餘地貰受候ハ井尻次右衛門居住之跡也、

一 區長吉川源兵衛殿、本町桐原源助殿処ニ夕部差入有、今朝見舞ニ行、即正午時分踊之様出立有、

一 役所出席、平、

一 今日於拙宅ニ愛宕講いたし、有馬善助・山元庄一・伊地知伴一・本田用左衛門出會、

二日曇天雨

一今日朝梅北十左衛門殿来り、拙者俸禄米之内式表被届
とシテ買入度被申出候付、六斗四升之受取とシテ、代
銭貳百貳拾四貫文即座ニ受取、福嶋村へ仕入之筋ニ
而、細井四郎治殿方へ問合いたし、拾壱石二付三百五
拾貫文直成ニ而候、

一小濱甚助殿銭百四貫文かし、是ハ先達而壱円十壱銭ニ
済し、右之代八貫文差引、都合百五拾貫文ニ相成候、

一今日真孝村二行、先達而高究之首尾等いたし泊り、

亥三月三日くもり雨

一今日真孝村滞在、取納・出入清さんいたし、平、

一町之役々共来り、粟代銀半方丈ハ下渡し被下との願ニ
候処、差引支直し六ヶ敷故、両三日可待との訳相達置

たり、

一用夫取調并在町牛馬取しらべいたし、

四日晴天

一今日陸運觸道ぶしん為致候事、拙者ニハ取納出入清さ

ん、郵便局二行、掛相等書方いたし、

五日晴天 旧正月廿八日

一今日取納出入清さん、平、夜かへり、

亥三月六日くもり

一今日役所出席、濱之市町役并目明し等之代金申付置候
事、

一永野村七助殿所二行、

七日雨天

一今日真孝藏惣決さんいたし、出役戸長壮一郎殿、同役
ニハ静太・勝之丞殿・仲之丞・喜之丞、出納丈ハ皆済
相成候得ども、勘定相決之一件二付、相拂為證文差出
候覚書分ハ相残候、後真孝村役所ニ而出會、夜とま
り、

八日くもり 旧二月朔日

一今朝真孝村へ歸り、

一大の殿壱ツ代銭五拾貫文、小濱十太郎肝煎ニ而、永段
川原へ買入、

一今日役所出席、後三嶋彦左衛門殿所二行、要藏殿・入
来良之助・休五郎殿也、

亥三月九日晴天

一今朝濱之市年行司来り、米屋之願ニ御立米貳貫七百文ニ而ハ、本方ハ高買入候ニ付迷惑之處申出、并濱之市ハ是迄貳貫八百文ニ而賣出し来候由、其通之願申出候、

一役所出席、右米屋之一条申出候、夫ハ大平陣山開願も申出たり、後早々かへり、平、

十日晴天

一今日在宅、林之甚左衛門来り、先達而申候福山ハ郷替之事也、

十一日雨天

一今日朝本町安右衛門来り、貳拾壹社之一条也、

一今日大平ノ陣島開願出候処見分ニ被差越候、戸長傳太郎殿、同役ハ市右衛門、拙者ニも差出候、正中拾貳盃・とふ壹箱取入持越候、源七殿・七助殿・壮助殿後先なば江行、正中会有て帰ル、

亥三月十三日くもり

一今朝濱之市森武右衛門来り、弟武兵衛稼証文差出し、

一役所出席、當番彦左衛門殿、平、

十四日くもり

一今日真孝村ニ行、戌年分請錢出入算用いたし、名主共出會、

十五日間ニ小雨

一今日同村滞在、中連寺跡島見掛等いたし、森喜右衛門船出入さん用有、

一今日七ツ過田邊市助殿・豎山宗右衛門殿御普請方とシテ差入有之、龍太郎所ニ而夜正中會、

十六日雨天

一真孝村滞在、濱之市御新田諸く割有、仲之丞并半七出會、田邊屋旅宿ニ而、真孝・住吉兩村之名主・下役共出會、後正中會、

亥三月十七日晴天

一今日ハ休左衛門井手ふしん有之、田邊氏并宗右衛門出張終日也、明日永濱出張之手當等いたし、野村静太殿来り、

十八日晴天 旧二月十一日彼岸之入

一今日永濱出張、田邊氏并静太・宗右衛門 仲之丞・松

元新助、濱之市を金次郎・休助・甚太郎・甚左衛門・

弥兵衛、拙者共ハ船を差越し、後田邊殿・同役村田九

介殿出會、幸藏同断、後小濱村へ行酒宴始りて、夜二

入て帰り諸所二寄、夜弥兵衛宅二泊、

十九日晴天

一今日早朝真孝村へ帰り木房湯二行、夫へ後姫城村之踊

見二行て帰り、平、

亥三月廿日晴天

一今日役所出席、當番良之助殿、正午時分を府中村之用

夫改方二行、村掛同役数人出會、後帰り、

廿一日くもり小雨 ひがん之中日

一今日濱之市・真孝村宗社熊野・鑰嶋両社之、是年之御

祭有之差越、祠掌市来弥二郎・津曲七兵衛・三宅十郎

加治木善奉殿等也、両社首尾能相濟、夜三宅十郎殿処

二とまり、市来氏も同断、

廿二日雨天後止

一今日真孝村滞在、平、

廿三日晴天

一今日昨日之通、後當村之いせ講有之、掛之甚助処二行

名主共出會、後帰宅いたし、

亥三月廿四父晴天

一今日役所出席、靱藏并駅所地借錢之一条申出置たり、

後平、

廿五日晴天

一今日宮内原母溝御普請有之、出役戸長傳太郎殿、同役

二ハ要藏・権之丞・市郎右衛門・喜之丞等也、木房湯

之元二行、夫へ後小田村在宿二行て、帰り正中會有、

野村源四郎殿・永作四郎太也、

廿六日雨天

一ねふと之病二付、今日在宅休息、

廿七日はれ

一今日役所出席、後肥後市兵衛処二出會、夫へ後安楽万

治殿処二行、

亥三月廿八日雨天

一今日役所出席、當番良之助、外二要藏・静太・市兵衛

等出席也、地籍編纂序二、田畠新竿、損休地・畠地受代、旧穢多・慶賀并耕地成坪々新竿調査とシテ、土岐少属・有川其外三等出仕、去ル廿三日加治木へ差入有之、一昨廿六日肥後市兵衛其外服部喜之助殿見舞とシテ被差越候、依而今日村々名主御用申渡シ、相調之一条觸渡し有、後平、

廿九日晴天

一今日濱之市年行司次渡有之差越し、町役共出會并二前原仲之丞・山崎静太等也、夜山口金次郎所ニ泊り、

三十日曇天

一今日朝濱之市へ帰り役所出席候処、正副区長衆濱之市差入之段、又候濱之市二行、戸長中村壮一郎殿・牧元用助殿、同役前原仲之丞殿、昼時分へ稍待而、後七ツ過兩人差入有之、吉川家ニハ森嘉兵衛所、同所ニ而酒會アリ、後戸長兩人衆罷帰候、拙者真孝村泊り、西俣氏ハ堀之内伊太郎所也、

亥三月三十一日間々雨風

一今日区長衆所ニ出勤、夜同所ニ而酒會、馬場長左衛門

殿来り、町役共出たり、大根并煙草外等頼有、都而都合いたし、夜役所泊り、

亥四月壹日晴天 夕部ハ雪降テ嶽々白シ

一今朝あさ船へ正副区長衆并馬場氏出立有、見舞別レ致シ、夫へ真孝村滞在、畠地見掛并新竿願帳面仕建いたし、後七ツ過帰り、仲兵衛殿見舞ニ来り、平、後平、

亥四月二日曇

一今日役所出席、

一先達而へ状持ばん新左衛門親新太病床ニ相着候処、去ル三月廿九日相果、新左衛門儀其前以へ療養方とシテ差越候、其間村中寄番ニ而相勤居候、今日迄も未だ不相帰候、岩切宗太郎殿母種子殿も同日被相果候、今朝悔見舞いたし、

三日晴天

一今日真孝村二行、重連寺跡江桑植付方いたし、山口雄藏殿被勤候、老反程植付相濟候、富之隈山ニハ山口氏折角植付方有之、

四日晴天

一今日宮内原母溝口掛片蓋并枝取下し方とシテ狐岡ニ相勤候、見賦夫輕候て波戸脇山ニハ少し相殘候、後野口村ニ而正中會あり、宗右衛門・半七・市郎右衛門・拙者、中村七兵衛も列行、野口村より後府中村ふしん方ニ行、檢者村田幸助殿、戸長松下氏、其外用相掛衆出會、

亥四月五日曇小雨

一今日役所出席、當番小原一兵衛、托鉢勸財之者送出し之一条今日布告有、明日申渡之賦、後一兵衛殿所ニ出會アリ、喜之助・土吉・幸藏等也、

六日晴天 旧三月朔日

一今日役所出席、後當番一兵衛所ニ出會、權之丞・喜之丞等也、後牧元用助殿・肥後市郎右衛門殿被來候、平、今日名主・年行司等御用有之、托鉢勸財共送出し一条也、濱之市より平左衛門殿來、米之一条并區長衆差入之者、入替々來出し、

一真孝村より小嶋山支配之願申出、願書相認山内甚右衛門殿方へ差出したリ、

亥四月七日晴天

一今日真孝藏ニ俵ぐり并八拾七文ツ、拂出し方有之、出席戸長牧元用助殿、晝後相濟、夫より川尻へ行、後帰り當番一兵衛殿方へ行、昨日之手當申置候、後平、

八日雨天 旧三月三日之節句也

一今日役所出席平、後鯨嶋助二殿所ニ節句祝二行、

九日雨天

一今日在宅無事、秋山喜右衛門殿所等二行平、野村源五左衛門殿所ニ錢三貫六百元、鯨嶋助二殿所ニとふ六丁初ひな祝ニ付進上いたし、

十日曇

一今日役所出席、服部休五郎殿所ニ後出會有、平、

亥四月十一日晴天

一今日役所出席、後太次右衛門殿・市右衛門殿・市兵衛殿・矢右衛門殿・仲右衛門殿・新右衛門殿ニ而木房湯二行、正中會各いたし、後府中村ニ寄方有、拙ハ新右衛門殿と帰り同人家ニよる、

十二日晴天

一家村一藏殿夕部賞典米願とシテ出縣有、錢三貫文今朝同人宅江為持置候、

一今日宮内原ニ搗掛并搗掛片ふた埋立也、戸長有馬休藏殿、同役伊右衛門・權之丞・要藏・半七・宗右衛門・仲之丞也、木房湯二行、後在宿、見次村之鉄太郎所出會、檢者田邊市助殿も昨日帰旅有、今日被勤候、

十三日晴天

一今日役所出席、當番一兵衛殿、平、永作受代願之一条戸長方へ申出、

一家内ニハ屋ねふき、喜兵衛・次右衛門・休兵衛頼入、下之後并ニ妻、厩之両妻ふき方いたし、賃錢老人ニ付四貫五百文ツ、拂、かせ人利右衛門殿・小太郎也、

亥四月十四日くもり雨

一今日役所出席、當番一兵衛、外数人、平、

一後永野村源七殿来正中会、後七右衛門殿所二行、

十五日くもり 旧三月十日

一今日濱之市陸運会社二行、前原仲之丞出會、船持共へ申渡し候、但五拾六貫文之船を、譬へば二度之時ハ、

一度は四拾貫文ニ而相究候、四拾貫文之ならし之場也、後濱之市町役どもと十日祝いたし醉而帰る、

十六日晴天

一今日濱之市御新田戸ハキ打立有之、出會戸長牧元用助殿、同役前原仲之丞殿出會、今日迄ハ大工不揃候、一今日熊野神社方、神武天皇遥拜有之、三宅十郎出會、夜真孝村之役所ニ泊り、

亥四月十七日晴天

一朝真孝村が帰り役所出席、平、後踊取締方二行、權之十・幸藏等也、今日忠臣藏之六七九段有、

十八日晴天

一昨日真黒しひ壱根取入、百斤之處貳拾七貫文替也、

一賞典米一条願方有、昨晚宮原雄藏所出會也、

一役所出席、當番白井四郎殿、同席数人有、服部吉之助外二五人、下井村踊取締ニ被行たり、拙者共ハ五六人小田口町二行、後岩城太次右衛門所ニ出會、

十九日晴天

一今日濱之市御新田戸掛有之、差越戸長有馬休藏殿、同

役仲之丞、并二水神祭迄有之、祠掌三宅十郎殿出會、座元真孝村之伊右衛門殿也、夜泊り、

亥四月廿日 旧三月十五日

一今日濱之市船改有之、戸長松下助一殿、同役徳持幸蔵殿・前原仲之丞殿出勤、并永濱浦と式ヶ所當所二取寄改方有之、両所之役目共出頭、改方首尾能相濟候、築出し之宿也、夜真孝村二行て泊り、

一今日家内とも踊二被行たり、

廿一日晴天 夕部雨ふり

一今朝暫く年行司処二行て、帰り役所出席、後唐仁町躍二行、

一濱之市船札并二帳面持参二而来り候、番弥兵衛也、

一今日郵便村数取調べ差出したり、

亥四月廿二日晴天

一今日役所出席、濱之市船改帳并船札役所二差出置ナリ、外衆踊見二被行、拙者二ハ帰り、平、

廿三日晴天

一今日役所出席、當番白井太郎、平、後唐仁町踊二行、

要蔵・静太等也、

廿四日晴天

一今日役所出席、昨日之通平、後拙宅ニ出會、要蔵・助二・市兵衛・喜兵衛・仲右衛門・喜之丞・真七等也、正中會有、

廿五日晴天

一今日役所出席、彦左衛門・仲之丞ニて、四ヶ浦船改帳首尾合仕建方いたし、後唐仁町之踊二行、平、尤踊之儀者今日迄相演候、

亥四月廿六日晴天 夕方雨

一今日役所出席、朝有馬氏・松下氏江船改帳印取いたし、帳面式冊今晚出縣賦之三嶋彦左衛門殿印取頼遣候、一濱之市町役ども来り、山元曾太郎衆中免願一条吟味之訳届申出候、依而其訳戸長方へ申出たり、

一船改之儀、濱村へ送遣し、

廿七日晴 朝立雨 夕部雨降

一今日小村陸運出張所へ松下氏・前原氏出會、人馬等之一条吟味いたし方法相付候、後有川吉蔵所ニ而正中會

アリ、

廿八日晴天

一今日鹿兒嶋神宮獻幣使とシテ、田畑權參事殿・川上大
 屬殿・鎌田縣掌殿宮内江差入有之、見舞とシテ差越候
 處、宮内社務所も宿等手當ニ相成候故空く歸る、中途
 ニ而戸長中村壯一郎殿ニ逢ふ也、夫拙子ニハ役所ニ出
 て、歸り、後平、夜三嶋□次郎所ニ行、
 一夜女ども拙宅ニ而十二夜町^待アリ、

亥四月廿九日晴天

一波戸田種子蒔いたし、尤波戸ニ植付ル分、
 一役所出席、後昼末濱之市へ正中風味嗜ニ行、八右衛門
 ・庄七・市右衛門・仲之丞出會、石切之吉太郎所也、
 夜大嶋氏ニ行て泊り、小村之儀も同断ニ而、牧元要藏
 殿被差越、麓町之儀者有之賦候處、仁礼權太郎殿差入
 ニ而相止相成候、尤是ハ警察局掛ニ而、諸所ニ出張所
 建付相成候由、

三十日晴天

一今日役所出席いたし候處、昼後新町村・内村へ正中風

味聞とシテ行、休五郎・宗右衛門・拙者也、後木房之
 庄右衛門所にて正中會有、

亥五月壹日晴天

一今日役所出席、後本町踊見ニ行、今日も始りニ而有之
 候、

二日晴天

一今日早朝日當山ニ行、牧元要藏殿同道也、土岐少屬殿
 ・等外三番出仕有川源藏殿・筆算掛大迫郷左衛門殿、
 蒔見古川辰次郎殿・池之上武二殿、竿取安樂市郎殿、
 右旅宿ニ行帳面等差出し見舞いたし置たり、

一後役所出席、後本町踊見ニ行て早く歸る、在番、

三日晴天

一土岐少屬殿其外蒔見・筆算・竿取衆、今日差入有之、
 拙者早朝打立、湯之元迄差越、戸長川村金藏殿、同役
 牧元要藏殿・服部權之丞殿出會、内村・見次村・内山
 田村毛御見分有、畠地・見掛地・休地并新竿等有之、
 相済次第内山田村泊り、

亥五月四日晴天

一 今日小田村始り二而、野久美田村・小濱村迄御見分、
畠作并新竿、塩濱竿入等有之、後野久美田村泊り、久
木田八右衛門殿出會、

五日晴天

一 今日野久美田・真孝之田、旧穢多地御竿入有之、兩地
之分ハ存寄ニ相成、夫ハ真孝村・野口村・見次村之儀
并新町村御見分有之、畠地并休地等有之、真孝村之干
□溝下御竿入有之、後新町村泊り、

亥五月六日後雨 旧四月壹日

一 今日新町村打立二而、上小川村迄御見分有之、同村泊
り、右御見分昼相濟、後帳面彦帳立、夜大風雨に候て
要藏同道帰ル、

七日小雨

一 今日土岐殿其外蒔見筆さん、清水川原村之様出立有
之、

一 今日小村二行、御新田大縄場新竿入願ニ付、帳面取仕
建方、三嶋彦左衛門出會、後踊見方二行、要藏等来り、

八日曇 旧四月四日

一 今日真孝村ニおひて宮内原水神祭有之、出席戸長山内
甚右衛門殿、同役要藏・仲之丞・権之丞・喜之丞、用
水掛宗右衛門・半七殿、

亥五月九日晴天

一 今日曾於郡小川与兵衛殿相果候付差越候、当所よりハ
叔父治右衛門殿・おばため殿・母さま列而見舞ニ行、
そふ式迄居りテ夜二入て帰る、當年六十八歳ニ而終
ル、小川八郎右衛門、

一 役所方江ハ忌中申出置候、

十日晴天

一 今日在宅休息、家内諏訪水流茶取有、平、

十一日晴天

一 今日真孝村之茶取有、家内ハ五人、外ニ□・鉄
太郎・もととの・ふゆとの、四人かせ人也、

一 拙者ニハ忌中故休息、平、甚助母来り粃種かり行、
一 茶真孝村之内旧重連寺跡・金藏院跡ニ過分有之、遅き
ニ帰り、

亥五月十二日晴天

一賞典米之一儀加世田より伺出候処、天下一般被執行、

此節者御下渡しニ相違無之との御内意ニ而、荒田五兵衛

衛之廻達今日到来候、尤近日御布告相成賦候由、

一役所出席、昼前より小村踊ニ行、同列市右衛門、夫より後

土岐少属殿所ニ行正中会也、夜帰り、

一今日嶋人秋山与左衛門殿来り、佐和説同列宮源志式人

列して来り、喜右衛門殿所ニ泊まり、

一家内終日茶いり、

十三日雨天 旧四月八日

一今日在宿、大嶋之佐和説・宮源志、當所一門親類中見

舞いたし、弟庄二案内、今日拙宅ニ滞在、夜正中会アリ、

歌三味線アリ、馳走壺通差出し、

一秋山与左衛門之末嫡流基俊良儀、等外一等出仕にて毎

日庶務課ニ出勤、隙なくして不相来候、此人行居所大

嶋飯屋本名瀬方ニ而、甚強家なるよし、佐和説儀同所

笠利方手花部村居住、間切横目同格、同格宮源志儀在所

龍郷村成と云、

亥五月十四日はれ

一今日朝飯仕廻、五ツ時分嶋人出立アリ、此方一門并系

圖等書付相渡し、平、

一親類中煙草并進物類ニ而、濱之市便ニ頼遣たり、

一午前時分より打立、小村御新田御竿入方ニ行、戸長休蔵

殿、同役良之助殿・市兵衛殿・彦左衛門殿也、小波戸

之島等御竿入有、後所宿清四郎所ニ泊り、

一西山下いな目竿入有、

亥五月十五日晴天

一今日小村在勤、山之口八反目御竿入、早朝より打立有

之、会所之前迄相済候、昼迄ニ而取止、土岐氏望ニ依

而、角力取共取寄、大王貴山ニ而角力地取有之、出見

之松・富士川其外強き物共、敷ねにも同役より取よせ、

随分之角力ニ相成候、面白し、夜者土岐殿所ニ而正中

会、拙者ニ草臥而吞事不能して居たり、

十六日晴天

一小村出勤、今日波戸ニハ毘沙門之前より東山之下迄、懇

地之分御竿入、程能相済候、夫より手わり塩濱式竿御竿

相済、政右衛門・拙者□□也、尤七ツ時分相済候故、

夫の帳面首尾有、

一此節小村御新田御竿入之儀、墾地之分とシテ各八百目
限、并ニ小波戸・有川はつ御竿入有之、餘程々よき御
竿ニ而、延畦と云ハ容易ニ無之、引入脇ニ而、掛ハ極
上拾老稀ニシテ、下ハ三ツ也、六七八之掛なし、前与
交代ニ比すれば多分下り目ニ而、拙者が所持西山之下
もハツ掛り、誠ニ難有御高究ニ而、諸人悦あへる事限
なし、

一今日朝之打立ニ、新川尻宅地御竿入有之、七八竿出水
山□□居宅邊に住吉藏之脇邊なり、

一今晚土岐殿所々差越し、少し不快ニ而早く帰り、

亥五月十七日晴天

一今日帳面首尾届迄相済候、夫々稍休息してハツ半時分
敷ね湊仕候様御立有之、拙者并市兵衛殿本町永作之所
迄行、是交代ニ相成候夫暇出して別れ、踊之所ニ行、
後帰り服部休五郎殿所ニ寄て帰る、

亥五月十八日晴天

一今日在宅休息、平、

十九日雨天

一今日役所出席、諸出銭割有、
一縣廳庶務課より正副戸長之内耆人、御用ニ付至急出頭候
様申来候ニ付、拙者其役ニ相當り候事、
一今晚濱之市船より出帆、後雨止、仲兵衛・休助殿思案橋
ニ而出會、

廿日晴天

一今日早天之前濱ニ着帆、問屋ニ着、直ニ煙草等持参し
て大嶋問屋ニ行、俊良殿留主也、右之甥殿江煙草等頼
置、夫の縣廳ニ出御用ヲ聞とシテ庶務課ニ出、前より願
之賞典禄可被下由承知いたし、達書写承知名前差出
し、帰り佐和説方へ行、暫く咄少々馳走ニ預り問屋ニ
帰る、昼後七ツ過より上大嶋之問屋基俊良殿所ニ行、旁
之馳走ニ預り、夜ニ入て帰り、

亥五月廿一日晴天

一今日朝坂本敬介殿同道、区长吉川家ニ行、賞典禄之一
条御礼申上置候、夫の少々買入物とシテ、昼飯より打立
濱之市より帰帆、風少くして夜ニ入て着、駅所ニ而正中

會いたし、よふて帰り九ツ過なり、

廿二日晴天

一今日役所出席、庶務課御用之一条届申出置候、夫々諸首尾之届申出たり、後小村之踊二行、相済次第庄左衛門所による、盛んニ酒にて帰り、

亥五月廿三日雨天

一今日初役所出席して、昼前々向花村二行、地籍編纂取調方とシテ太次右衛門方二行、市兵衛・彦左衛門・喜之助出會、同村田畑道路・溝渠・堤塘・墳墓・神地等取調いたし、後正中会して帰る、

廿四日晴天

一今日地籍調として新町村二行、静太・権之丞・四郎次出會、調方相済候、夜かへり、

廿五日晴天

一今日昨日同断ニ而見次村二行、権之丞・喜之丞・静太出會、高日之内ニ相済候、後帰り、

亥五月廿六日晴天

一今日地籍調とシテ内村二行、静太・権之丞・要蔵出

會、官社・神地・山岳・原野・荒蕪地等取調之上、帳面相除、夜かえり、平、

廿七日晴天

一今日昨日同断ニ付、内山田村二行、静太・権之丞・要蔵・仲右衛門出會、例之手数取調方相済候、後かへり、

廿八日晴後小雨

一今日先日之通ニ付、小田村二行、要蔵・静太・仲右衛門出會、七兵衛殿・八右衛門殿も出會候、今日出仕相済泊、

一野久見田村之儀も小田村ニ而取調方いたし、両村相済候、縄引等之儀者八間ニ而相取調候也、

亥五月廿九日雨後止

一今日毎之通ニして小濱村二行、要蔵・静太・仲右衛門・幸蔵出會、手分けとして縄引等いたし、同村済候付今晚泊り、

三十日晴天 後小雨少々

一小濱村々打立、真孝村・住吉村両村縄引竿入済之上、住吉村宿ニ而帳面首尾等いたし、要蔵・仲右衛門・静

太・仲之丞、夜かへり、

三十一日

一今日役所出席、川東地籍調之儀者一昨日相済候由、要蔵・静太等出席、地籍帳首尾方いたし、平、

亥六月老日晴天

一今日役所出席、地籍帳首尾合、平、

二日小雨 旧四月廿八日

一今日役所出席、地籍方受持首尾合相済候、平、

一租税課出仕、山方廻勤として岩城平七殿、昨日内村ニ差入有之、郷校方并田地御普請方山見分とシテ差入也、

三日雨天

一今日部一山間引伐之願書下ケ方とシテ、陸路出縣いたし、終日雨天ニ而、七ツ時分間屋ニ着、同宿山口伴左衛門・有馬良性院殿等候也、平、
一四ツ時分打立、重富諸所ニ休息也、

亥六月四日晴天

一今日□縣、四ツ後縣廳ニ出、間引伐願書前田弥七殿ニ依而免許取下ケ帰ル、

一基俊良殿對面として大嶋間屋ニ行、出廳留主也、亭主

ニ礼信告頼て帰ル、尤明日鹿兒嶋丸ノ下嶋之由、依而先達而之御礼ノ嶋下り第一保養折角元氣之處申出たり、

一山内甚之丞殿上京之賦ニ而、今日出縣有、

一七ツ時分上荷船ノ小村ニ暮昏ニ着、仲左衛門・良性等也、夜ニ入て帰り、

五日晴天

一今日早朝川内村之小四郎来り、間伐之一条儀共も願置願書取下ケ之處尋ニ来り、依而右書付為持てかへし、拙者が山を頼置申出之事、

一今日在宿、昼ノ源七殿同道川田村山方ニ行、今晚渡せの宿也、租税課出仕岩城平七殿所ニ而正中會、夜泊り源七殿も同断、

亥六月六日晴天

一今日山方渡瀬ノ平山ニ宿移有之、源七殿ハ罷帰候、拙子共ニハ銅山之波江野所ニ行、昼迄酒会して後野平ニ下りて、其後帰り、平、

七日晴天後雨

一今日役所出席、平、昨年大根作塚數并代錢何程之訳、
真孝村・濱之市と居ニ来り、後無事、
一後家内城戸つら取繕いたし、後雨甚し、

亥六月八日大雨天 旧五月五日

一夕部ヨリ大雨にして、今日ニ至て猶甚し、居ル者ハ戸
外ニ出る事不能、行者ハ傘を覆ふ事不能、依而終日在
戸、今日濱之市取締方ニ行賦之處、大雨にして、昼後
打立出たれとも、岩城氏等ニ會候て、久木田八左衛門
所ニ初□祝として寄、酔ふて帰る、

九日曇 鹿児島神宮御田

一今日役所出席、昼前々真孝村休左衛門、井手破損所有
之、見賦とシテ行、川村金藏殿・中村半七殿出會、後
濱之市御田參詣取締ニ行、森二右衛門所ニ而町役ども
出會アリ、後帰り、

亥六月十日晴天

一今日なば之部一山間引伐検査有之、租税課出仕岩城平
七殿上小川村ニ滞在、依而早朝拙者彼所ニ差越、案内

して窪田清右衛門殿所ニ来ル、源七・七右衛門出會、
松三百八拾本・雜木皆拂ニ而建方相成候、馳走とシテ
正中等差出候、戸長有馬傳太郎殿・別当山市右衛門殿
・徳持甚兵衛殿、其外山番衆也、昼飯差出候て地走
有、拙者ニハ手無て小村之松山ニ行、夫々濱之市ニ
寄、小田村泊り也、良之助殿出會せられ、

十一日雨天

一今日小田村御見分済之上、野久美田村本田十郎殿間引
伐検査有之、昼飯過小濱村ニ轉行、同所検査済之上泊
り也、傳太郎殿・市成幸藏・良之助外々山留等也、
一田地方山并郷持方山検査有之、石塚順吉殿・今吉左衛
門殿も立會有之、

一今日々休左衛門井手普請取付有之由、

亥六月十二日はれ

一今日小濱村々帰り、真孝村休左衛門井手普請ニ行、戸
長牧元用助殿・用水掛中村半七殿出會也、此破限大破
にして、東西二ヶ所坪百五六拾坪ニ至り、□小所多々
有之、兩二三日も掛るべし、夜帰り、

十三日雨天

一今日休左衛門井手普請詰、役々昨日之通、立夫四百人也、依而大抵濟掛り候、夜泊り、大里之喜次郎所也、

十四日雨天

一今日休左衛門井手、昨日之通立夫三百人ニ而、川東之手當相成候処、大雨にして水出、住吉村丈立込候ニ付、西面江者のひ候、

一終夜之大雨ニ依而、東面築立候丈東川へり洗流し、是迄之仕事いたづらに相成、残多事ニ候、依而又今日見賦いたし、流十八間幅三間深さ沓間半宗築方ざふし、柵之通土手成土持入、本之通仕調答賦當候事、一今日正中會有之、早く帰り三人同道也、

亥六月十五日曇

一今日役所出席、濱之市郷校地井山元勘兵衛等やしき、沽券税地願書取仕建候、今晚岩城太次右衛門殿・牧元要藏殿・肥後市兵衛殿、地籍井地券方御用ニ而、出縣之便に頼遣したり、

一休左衛門井手普請手當申出置候、貳百人手當相成た

り、

亥六月十六日間々小雨

一今日真孝村ニ行、休左衛門井手御普請詰也、戸長川村氏、用水掛中村半七出會、夜同村ニ泊ル、

一豊民会社掛札ヲ書、渡邊嘉右衛門・中村八郎次出頭ス、

十七日間ニ小雨後風吹

一休左衛門井手普請立夫六百人助□之賦、出役同断ニ而拙者ニハ頼置、柵建方ニ出勤、検査役永江市内殿井ニ三島武右衛門殿兩人ニ而、小田村ニ差入見分有之、柵方掛野村静太殿・服部喜之助殿付役也、昼迄真孝村相濟、住吉村も相濟之上同村泊り、尤此節柵建皆拂ニ相成候、残小木も無之候、

亥六月十八日はれ

一今日柵建方住吉村出立ニ而、福嶋村より松木村井野口村迄見分相濟、同村泊り有り、拙者ニハ帰り、尤建方之儀一ヶ村限ニ而手分有之、福嶋村ニて昼飯なり、

一柵伐間等之儀、沓本ニ付五百文ツ、四尺廻以下式掛、六尺廻以下三掛、以上四掛ニ而木賦有之、

十九日曇後雨

一 今日正副區長衆、見次村ヨリ濱之市ニ御差入之由告来り、依而暫ク役所出席して、此旨も申置候而、濱之市ニ行見舞いたし、曳倒シ綱引方いたし、今晚同所ニ泊り、

亥六月廿日雨天

一 今日濱之市在勤、區長衆所ニ出席、戸長川村金藏殿被勤候、今日迄も雨天ニ依而出船無之、船待有終日、夜金藏殿と帰り、

廿一日雨天

一 今日役所出席、當番久木田八右衛門殿、無事、
一 家内今日波戸田植有、

廿二日雨天後はれ

一 今日役所出席、太次右衛門・要藏・市兵衛昨日帰郷、今日も出席、當番太次右衛門今日も受取、後喜右衛門殿所ニ出會いたし、
一 波戸田植付今日相濟候、

亥六月廿三日はれ

一 今日役所出席、船一件御布告書抜いたし、當番岩城太次右衛門殿、平、後肥後市兵衛所ニ出會、要藏・休五郎・喜之助等拾貳人也、

一 田植今日迄相濟候、依而今日田植祝いたし、波戸田六反、濱之市三反、龍王五升時也、

廿四日曇雨

一 今日役所出席、船改一条ニ付、租税課を御用之儀有之、先日肥後市兵衛出縣之序ニ罷出候得ども、課取込ニ而首尾不相成、故ニ今日濱之市夜船を出縣之賦、黄昏を打立濱之市ニ行、雨ふりて出船無之、同所泊り、

亥六月廿五日雨後はれ

一 今日四ツ時分濱之市小船を出帆、小原庄七殿同船にて昼過前之濱ニ着帆いたし、直ニ上濱問屋ニ休息、平、

廿六日晴

一 今日廳ハ休暇也、朝庄七殿同道區長吉川家ニ行、并ニ西俣氏ニ行、此節洪水ニ付破損所并先達而見賦相成候普請艮下ケ方一条申置候、後休日之故無事、問屋ニ休
ミ、

廿七日晴天

一今日縣廳二出、船一条之御用承知いたし、内外大小船之稅則書写方いたし、細々い字ニシテ甚以埒不明、依而今日ハ不相濟候、

一昼縣廳が帰り、夫が角力見ニ行、見物人多人ニシテ閑あへり、甚以暑ニ堪兼、早く帰り休息、

亥六月廿八日晴天

一今日縣廳二出、船規則書写方相濟候、夫が界紙相渡候、并ニ規則之一条ニ付段々相渡し有之、委細ニ承知いたし帰ル、尤船規則之儀者一般之事ニシテ、夜日中も其通不取計候而者不便由、并鑑札等之儀も相尋候、相渡旨被達候、

一後休息、庄七八角力ニ被行候事、

廿九日晴

一今日朝肱岡彦左衛門殿所ニ行、最早出廳留主也、依而縣廳二出で、逢ふて正副戸長俸禄手形之一条相尋候處、右八九月ニ不成候而者不出来との沙汰也、

一今日石塚順吉・中村兼蔵来り、二人口之一条也、

一今日濱之市中村八右衛門殿船来り、昼船が帰り、庄七同船也、七ツ半時分濱之市ニ着、直ニ上陸して仲兵衛方ニ行、休助出會、正中会して夜かへり、

亥六月三拾日晴天

一今日役所出席、當番太次右衛門、其外数拾人出席也、一船改規則其外承知之趣申出候、并戸長衆方へ規則書并案紙・界紙等差出し候、委細申出候處、明日浦々に御用を以御達し相成賦候、後平、

一小人甚助、先廿八日が水無川原ニ行末帰らず候、

亥七月壹日晴天

一今日役所出席、船一条ニ付浦々が御用之者共出頭有之、委細御達相成候、右御規則・船税并界紙等之儀、達し方有、

一昼後濱村之助兵衛不埒之聞へ有之、聞合方として行、市右衛門・市兵衛・市郎右衛門・仲之丞出會也、盜等之聞得ニ依而走り込、家財改有之、夫が助兵衛責問有之、

一濱之市山元けさ太郎免牢有之、封解ニ行夜帰り、

七月二日晴天

一今日役所出席、三島氏等出會して、船之一条取究方、明日も浦々廻勤ニ相成賦也、戸長方迄拾三名之賦、

三日晴天 旧六月朔日

一今日小村差入ニ而船規則取究方、戸長中村壮一郎殿、

同役彦左衛門殿・仲之丞殿出會、右規則書写方いた

し、小村も帰り、

一濱之市六月堂祭也、

七月四日小々雨

一今日濱村差入有之、濱之市ニ行、同所泊り、尤両浦大

抵相済候、

七月五日晴天

一今日濱之市滞在、船鑑札申受方願書并三ヶ条之伺方等

取りしらべ方、山元伊助出縣之賦、戸長松下助二殿、

同役例之通、

六日晴天

一役所出席、船一条届申出置候、並帳面等差出し、後野

口村ニ不埒者聞合方として行、戸長寄万治殿、同役喜

之助・一兵衛・拙者也、静次・助兵衛盜之咎ニ聞合方有之、右ハ空説也、野口村ニ歳拾三才ニ相成ニ、長左衛門と云小賢キ者アリ、此者野村方斎殿所ニ被宿、相廻レたる時之申立ニ、自分之躰しのぎを以云々之之悪虚ヲ吐たるなるべし、

七月七日雨天

一今日役所出席、昨日野口村之件々形行申出置たり、

一後牧元用助殿屋しき踏出方とシテ行、市右衛門・市兵

衛等也、後用助殿宅ニ而出會有、良之助・一兵衛・静

太等也、即皆醉ふ、

八日曇

一今日役所出席、當番市右衛門、後牧元要蔵所ニ而正中

會、宗右衛門・七郎・真七等也、役所諸事平、

亥七月九日晴天

一役所出席、村町名主・町役御用有之、二番茶取之禁止

一条達し方有、濱之市山内仲兵衛来り、先達而伺置候

船一条、乗組無之而者鑑札不相渡との次第、依而乗

組書ノセ、又仲兵衛ニ渡し、并ニ仲兵衛積荷改銀持来

候、米之一条模合之条ニ申候、

一松永之鉄来り、波戸田打ちん相拂候、

十日晴天

一今日家内波戸田沓番草搔ニ行、

一小村御新田之御竿入雑用錢を木藤半助ニ渡ス、拾四貫
三百四拾八文也、

七月十一日晴天

一今日役所出席、昼々見次村・内村・内山田村三ヶ在之
植付・草搔再見有差越候、静太・権之丞等出會也、見
次村宿、酔後帰ル、川東二者小村与下井村迄ナリ、下
井村宿、

一西侯氏の大根種之頼申来候、依而濱之市申遣し候、
一本町之清右衛門賞典米願一条、書付相認方いたし候、

十二日晴天

一今日小田村・野久美田村・小濱村三ヶ在、田地草搔再
見有差越、拙子ニハ小田村ヨリ帰り、外衆小濱村宿、
一こも四俵中封入百助ニ渡し、今日受取方ニ来り、金八
百文受取置申候、

亥七月十三日晴天

一今日役所出席、濱之市甚太郎船税・鑑札持参候、

一だん草一ツ小濱村へ頼遣し、

十四日晴天

一今日真孝村ニ行、杵代銀割付方とシテ米賦いたし、外
方廻り序ニ休左衛門井手・新田取水井山内仲兵衛水
車、水見分有、後仲之丞并住吉之彦右衛門・當村名主
共出會、草搔再見割方アリ、

十五日晴天 旧六月十三日

一今日真孝村の船一件ニ付小村ニ行、仲之丞同道也、在
宿御新田会所也、戸長有馬傳太郎殿、掛り三嶋彦左衛
門殿出會也、積荷目録取仕立并鑑札共船頭ニ渡し、規
則大略被渡候、

一今日小村之大己貴六月堂也、諸人諸所より入来候付、甚
以賑也、其所ニ而酒会也、後傳太郎殿同道帰り、

七月十六日晴天 旧六月十四日

一今日少し不快ニ而休息、在宿平、

十七日晴天 本町祇園

一今日役所出席、當番市兵衛、外二數人出席、後祇園取締とシテ本町傳助所二行、要蔵・市兵衛等也、無事に
して帰る、

一米代百四貫文、野村七四郎入、

十八日晴天

一今日役所出席、無事、後市兵衛所ニ出會有、太次右衛門・休五郎・半七・右衛門七・仲左衛門等也、

亥七月十九日晴天

一今日役所出席、當番市兵衛、平、

一小教院開講、今日明日迄有之賦、宮内神官并縣下中教院講官并伶人等數人差入有之、各郷正副戸長等も出席也、拙子ニハ不出、

廿日晴天 旧六月十八日

一今日役所出席、無事、後小教院ニ出る、戸長中村壯一郎殿・中村金蔵殿、副戸長太次右衛門殿・市兵衛殿等、并清水・敷根・踊正副戸長各出席也、

一今日小教院大祭ニ而、三雲氏齋主也、夫々説教瀬川大講義、并両人都合三人して有之、諸人群集して拝聞

也、後神官・地方衆一同祝酒有之、殊之外他人数也、^(多)

七月廿一日晴天

一今日真孝村二田人普請ニ行、日相違ニ而無之、宿場ニ行而昼過帰ル、平、

廿二日晴天

一今日国分諸在年至祈願トシテ、田多神社ニ参詣有、副戸長殘餘程無之、正中多分ニシテ帰ル、并座主掛宮内社江茂参詣有、

廿三日晴天

一今日役所出席、當番市兵衛、其外出席、平、
一家内折角栗植等有、尤外方田草取并栗植晴々也

亥七月廿四日晴天

一今日在宿、家内諸事、平、

廿五日晴天

一今日役所出席、無事、
一麓小路見分有り、

一真孝村之田人普請并山拂等有、拙者も差越筈之処、少シ足痛ニ而行越候也、

一家内波戸田草取、

廿六日晴天 旧六月廿四日

一今日役所出席、平、

一本田勇左衛門宅ニおひて愛宕講有之、出席、善助・庄

一・仲一也、

廿七日晴天

一今日少し草臥レ休息ス、

一下人甚助先達而ダ三拾日餘病氣ニ而、水無川原ニ差越

居候故、今日弟差越候処、いまだいふさひ塩梅ニ而、

不快段聞届候、

亥七月廿八日晴天

一今日濱之市駅所ニ行、仲之丞・嘉右衛門・新助出會い

たし、規則少々違犯之者有之、取糺方、夜かへり、

廿九日間々雨

一今日役所出席、夫ノ房左衛門殿同道ニ而、濱之市四ヶ

浦わりニ行、仲之丞并町浦ども出會有、相良勘兵衛殿

涼ミとして被来候、夜かへり、

亥七月三十日晴天

一今日暫く役所出席して、真孝村ニ行、検査相良勘兵衛

殿、草搔再見として差入見舞なり、大里之喜八所にし

て名主共出頭、夜役所ニとまり、

亥八月一日晴天 後大夕立

一今日朝相良氏見次村へ轉宿有、拙者ニハ帰り役所出

席、當番要蔵受取、

一今日太鞍踊り被有之、後祝として牧元要蔵所ニ行、拾

五六人也、太醉して帰ル、

二日晴天

一今日濱之市ニ行、駅前ニ而仲之丞出合、内村湯之元并

宮内小村等之稼人馬一条吟味有之、後正中会、酔後酒

や之金左衛門所ニ泊り、

八月三日晴天

一今朝濱之市ノ帰り役所出席、當番要蔵、平、

一朝龍王田草取ニ出る、

四日晴天

一朝砂走栗クケリニ出る、

一今日役所出席、先日學務課管員巡廻ニ而、区長衆ニ茂

御差入相成、當分日當山湯ニ滞在、依之諸取しらへ事有之、夫ハ正副戸長名前、郷校師員・生徒名前、八升壺合員數、其實錢悉諸金仕向場、国分惣人員、就学人員、右高等、其外諸事之取調、可差出様被仰渡、當座へ茂其しらべ方之かせいたし、

亥八月五日晴天

一今日中之馬場きざ普請ニ出、服部休五郎殿同勤四ヶ所取調、小田村・福嶋村等も夫立也、祝田門橋掛、服部門同断、

一後在宿桐原源助所ニ岩城氏其外数人出會、

六日晴天

一今日役所出席、當番要藏、平、後本町旅人問屋ニ拔首芝居見物ニ行、弥しき物也、夫も要藏殿所出會、静太・八右衛門等也、

七日晴天 旧七夕之節句

一今日役所出席、平、

一だん草□小濱村ニ頼置候処、今日届、式拾五貫文、

一旧七夕之故、小子ども川跡火抑有、見物ニ行、過分之

□火數有之、面白し、

八月八日晴天

一今日在宅、煙草もき等いたし、私事平、後粟クケリニ出ル、久木田新左衛門、先達而も不快ニ而未帰、甚不仕舞也、

九日晴天

一今日役所出席、朝煙草跡草クケリニ出る、役所ニハ密事、

一濱之市山元袈裟太郎、縣下相除賦候処、今日迄在籍成り、

一後水無川原小濱甚助所ニ行、未不快ニ而婦丈無之候、但シぞふさひ塩梅ニシテ、少シハはれ居候由、

十日晴天

一今日役所出席、平、後粟くけりニ出る、

一小濱甚助少シ快方ニ而、今日暮方ニ兄十太郎引列返り来り、

八月十一日晴天

一今日暫ク役所出席、中村い百助今日新酒賣出し願出届

申出置候、後濱之市駅所ニ行、仲之丞・新助・嘉右衛

門ニ立會、後野村静太并濱之市年行司等出會、夫々醉

ふテ帰り、

十二日晴天

一今日在宿、平、粟くけりニ出る、

十三日晴天

一今日役所出席、朝之間農ニ出ル、

一役所出席之儀、一昨十一日ヨリ、与合ヲ以廻り出席相

究り、五人或ハ六人ツ、二而、六日目毎ニ出席廻來賦

二候、則六日入としテ、一ヶ月ニハ五日ツ、出席日有

之、拙子与合左之通、

八月十七日

服部喜之助 服部休五郎

八月廿三日

秋山多郎 秋山七郎

八月廿九日

山元壮助 肥後市郎右衛門

以來右ニ照準シ、中五日ヲ置テ、其日ヨリ七日目ニ

ハ、出席廻來賦也、

一今日後、於拙宅ニ當番寄有之、要藏・土吉・良之助・

幸藏・仲右衛門・新右衛門・喜兵衛・喜之丞等也、酒

充分ニ出ル、

亥八月十四日晴天

一今日朝農方へ出、夫々上之七郎宅江太鞍踊見物之佐敷

作方有之、出勤亥太郎・喜之丞等也、後平、

十五日晴天 旧七月十五日 盆也

一今日在宿、旧盆之故ニ家族休息有、

八月十六日曇 旧七月十六日

一今日旧例ニ依り太鞍踊有、川西□順番、小田村

・内山田村・野久美田村・住吉村・小濱村・真孝村

也、見物多人ニシテ、甚賑やか也、拙宅ニハ真孝村之

者共大取込也、

一役々ハ上之七郎殿庭ニ佐敷出来ニ而出張有之、後酒會

有、

十七日晴

一今日役所出席ニ而候処、頼置候而濱之市郵便局ニ行、

東京本館新聞紙定價

一壹枚 三錢 一壹ヶ月前金七拾錢

一半ヶ年 同三円廿五錢 一壹ヶ年 同五円五拾錢

但大小休暇ニ不拘、一ノ日ニ休、

遠国遞送ノ分ハ、此外ニ郵便税ヲ出スベシ、

一郵便局ニシテ仲之丞出會、取替錢等之一条取究置候、

一夫々住吉村ニ行、太次右衛門・静太・真七出會、後濱之市築出しへ行、将棋差等有、真孝村之在役出會、夫々助右衛門并喜右衛門所ニ寄、後役所帰リ、

八月十八日晴天

一今日在宿、ふつかれ塩梅ニ而休息致シ、終日平、

十九日はれ

一今日役所出席、明日雨乞可仕段祠掌中より申出相成、其通吟味相決し候而、今晚より御通夜ニ而明日御祭有之賦、拙者ニハ□不快ニ而頼置たり、

一午後四時比三宅十郎来リ、

廿日雨天後曇

一今日在宿、家内諸事、平、

八月廿一日晴天

一旧徳持庵江御墓取建相成、□江正副戸長・祠官掌其外諸人参詣有之、多人数ニ而御座候、尤先達而家扶折

田正介殿家從新納良介殿差入相成、當所掛戸長有馬休

藏殿・山内甚右衛門殿、同列山元角助殿・鮫島助二殿

出勤ニ而、石切共縣下より拾餘人、石切頭等差入ニ而相

調給り居候処、一昨日方迄首尾相成、是ハ徳持庵ニハ

龍伯公御骨所、測竜院ニ御ひら様并金剛寺・遠寿寺相

調ニ而、各所祭祠有之、正午時分ニ至て角力ども来

て、御墓前ニ而土俵入有之、午後四時より仮屋角ニ而角

力有之、見物人多々にして、同六時ニ止ム、

一徳持庵幣帛物多分なり、依之正副戸長家扶諸所ニ而出

會、開方有之、

亥八月廿二日晴天少曇

一今日秋山七郎頼、真孝村ニ取納帳取とシテ行、役所ニ

而名主共出會、書出し取杯いたし、後平なり、

廿三日晴夕立

一今日真孝村役所滞在、取納帳作方終日、後伊右衛門所

ニ而新立も合有之出會、座主山元喜左衛門殿、其外名

主共出會有、大醉して臥居候処、夜半比ニ至り騒動之

声聞得、依而差越候処、納屋町貞次郎所ニ出火到来、

厩ニ火付燃上り類火ニ及んとす、其間二人多く集り、龍吐水數十被寄、水澤山にして、三更之時分ニ至り様々取静メタリ、夫より中村八郎次所に出會、仲之丞・七郎・静左衛門等也、年行司・町役共相會して酒會、夜明て止ム、夫々拙者ハ同所ニ正午時分迄醉寝したり、

亥八月廿四父晴天 少々夕立

一今日朝八郎次所ニ醉寝して、正午時分役所ニ歸り候處、牧元用助・服部權之丞殿出會有、濱之市町役之届ニ依り、今度之出火は盜人之放火ニ聞へ候故、取締向嚴重可為致段ニ而、年行司へ申遣し、築出し彦左衛門所ニ出會、諸事申渡し、夫々黄昏迄酒會、其後濱之一兵衛所ニ模合有之、權之丞も同道差越し、大醉して役所ニ歸り泊り、

廿五日晴天

一今日七郎頼、役所ニ於て取納帳作方終日、後喜次郎所に於て、小次郎仕立も合有之、名主共出會いたし、三宅十郎夜かへり、

亥八月廿六日晴天

一今日宮内原母溝落引草拂有之、出役有馬休藏殿、其外用水掛、村掛副戸長正寄出會ニ而、宿ハ内山田村之周右衛門所也、うなき等少々取レ居、後よふて濱之市よからす所ニ泊り、

一真孝村ニハ七郎頼、取納帳作り、

廿七日晴天

一今日真孝村役所ニ而帳面仕、七郎同シ、後波戸落引草拂、各田見掛迄有之、戸長牧元用助殿、其外用水掛・副戸長等出會有、 村々等出會也、後役所ニ歸り、

亥八月廿八日晴天

一今日諸所藏見賦有之、戸長川村金藏殿、其外同役出會、熊太郎所也、并藏間數取杯いたし、藏付名主共も出會有、夜金藏殿・喜之丞同道ニてかへり、

廿九日晴天

一今日役所出席、當番喜之助、其外高帳掛并出米人数等出席也、昨日藏普請見賦之切手等出し、無事、

三十日雨天

一今日見掛内見とシテ、戸長牧元用助殿、同役岩城太次
右衛門殿・服部権之丞殿同村差入ニ而見分、内山田村
泊り也、

三十一日間々雨

一今日昨日之通、早朝小田村差入ニ而、野久美・小田・
小濱村迄見分、小濱泊り、

亥九月壹日間々雨

一今日昼迄滞在して、昼飯仕舞出立、永濱へ差越し瀬引
いたし、第五字比船ニ乗て濱之市ニ着、築出し之彦左
衛門所ニ而町役ども出會、夜庄次郎所ニ泊り、

二日間々小雨

一今日船入場ヲ立切魚取いたし、三字比々正中會有、夜
真孝村役所ニ行て泊り、

三日間々雨

一今日朝真孝村を帰り役所出會、今日も當番受取候、先
當番服部喜之助殿ヨリ也、後拙宅ニ出會、喜右衛門・
市兵衛・八右衛門・太郎・四郎等也、

亥九月四日晴天

一今日當番出席、同役村掛惣人数へ御用詰を云て、一村
一小区毎ニ廣狹反別取調方方法談し合ひ、明日も三手
二分レ廻村之賦也、

一布告之趣、郷内戸数・人口・反別廣狹概略、正副戸長
・掛等之訳、俸給等之訳也、

一後在宿、平、

五日晴天

一今日役所出席、要蔵・半七、小松原御普請願とシテ今
晚出縣、助二小松原絵圖面取とシテ同所ニ被差越、絵
圖頼遣したり、

一今日も役所土蔵普請取付有之、掛り服部休五郎・久木
田八右衛門・川村喜之丞へ被仰付たり、戸長掛り安楽
万治殿也、

九月六日晴天

一今日役所出席、土蔵屋地引等有、小村之清次郎雀五百
四拾七羽取差出し、又四百羽位ハ下井村ニ差出したり
と云ふ、後拙宅ニ出會、

七日雨天

一今日役所出席、硝石方錢取揃へ方催促有、平、

八日晴天

一今日同断、戸数・人口・廣狹反別帳面仕立有、宮内濱殿御行幸手當有、

亥九月九日

一今日役所出席、喜右衛門・静太等出會、土蔵普請方八右衛門酒出とふ也、

一朝濱之市芝甚三郎来り、卯吉之帳面返納并生子書出し候也、平、

十日はれ

一今日役所出席、市兵衛・仲左衛門・休五郎・八右衛門・喜之助・四郎等也、宮内神御幸夫手當等有、後拙宅二出會、万治殿も會ス、後醉して安樂氏二行、

十一日晴天

一今日役所出席、土蔵普請方手斧立祝有、役所ニ於テス、拙子ニ者濱之市進達所詰松下氏も可差越之間合来り、依而午後五時打立行、出縣遞送所會計長淵邊八郎

次殿焼印押文并積金取揃へとシテ差入、積金尤有謾無之故、どふかと手段不致候而不叶候而相談有之儀二候、松下氏と傳之丞殿も出會也、今晚石切殿家二泊り、當番之儀者七郎へ頼置たり、

九月十二日晴天

一今日正午濱之市も歸り、役所出席當番受取候、要藏昨日歸郷二而、今日出席有之、

十三日晴天

一今日役所出席、要藏・一兵衛・四郎等也、藏方普請二而、大工多人相掛り段々也、後拙宅二出會、良之助殿も来り候、

一宮内神宮御幸二付、夫手當等有、

亥九月十四日晴天 旧八月十五日

一今日本町たゞミヤ、林少右衛門・桐原源助御用ニ来り、海陸近邊所藏物取扱人へ書付相渡し、

一濱村之彦兵衛御用ニ来り、草木うせ之一条達す、井外渡も同断、

一今日役所出席、昼も當番久木田八右衛門ニ頼置候而、

濱之市神宮濱殿御祭二行、花火等有、許多之參詣人ニ而甚以賑也、喜右衛門・静太・宗右衛門・市兵衛等出會、夜築出し殿所ニとまり、

十五日晴天

一今日喜右衛門其外同道正午ニ歸り、夫々拙者役所出席當ばん受取候、今日諸在名主御用、出夫方刻限を背き遅く罷出候故、一統早く罷出候様申渡候、

一土藏方昨日より地堅固ツキ有、

亥九月十六日晴天

一今日役所出席、當番鮫嶋助二二次渡し、

一伊勢内侍屋敷餘地、上小川村之者ども、濱田定二殿・

濱田七郎右衛門殿方江壳渡し候段相聞得、否らさる地面ニ付、今朝戸長川村氏、同役要蔵差越、銘々踏錢有所方江被納相成賦也、

一御内屋しき、旧知事公より永作願之書、障礙有無之段召

来り候処、何ぞ差支無之、併御墓守給料之餘りハ、所方へ可被下段申出相成たり、

一神宮御幸ニ付、御神酒社務所より被給、今日開方有之、

正副戸長出會也、後壯一郎殿所ニ行、

十七日晴天

一遞送所一条ニ付小村二行、川村金藏殿・松下助一殿・三嶋彦左衛門殿出會、并小村ニ盜者多き段相聞得、尤肥後半がせがれ、殆とあからさまニ盜方致段聞合相成たり、

亥九月十八日晴天

一今日長助・金四も合一条ニ付、真孝村二行、助右衛門所ニ而取調方、夜かへり、

十九日晴天

一今日役所出席、當ばん助二、土藏ふしん方有、

廿日晴天 旧彼岸之入り

一今日八右衛門殿同道、野久美田村へ取納帳作とシテ行、當年新免之一条有、今晚泊り、

廿一日晴天

一野久美田村滞在、取納帳作今日相済、八右衛門殿同道歸り諸所ニ寄、小田村・内山田村役所々々ニ寄、正中ニ酔ふ而歸り、

亥九月廿二日晴天

一今日役所出席、平、

廿三日晴天 旧彼岸之中日

一在宿

一正午當番の問合到来、

一今日者於濱之市ニ、本田少宮司・瀬川祢宜・鈴木権祢
宜・染川権祢宜四人して、説教有之段可致出役旨ニ
付、直ニ打立差越候、當地祠掌衆出役有、聴聞人数多
し、同役服部喜之助出會、濱之市泊り、

廿四日晴天

一今日濱之市滞在、小島之弁天宮祭祀有之、戸長衆中村
氏・有馬氏・川村氏・牧元氏・松下氏・祠掌市成氏・
三宅氏・津曲氏・菊野氏等出會、夜かへり、

九月廿五日晴天

一朝坂□敬介殿来り候、賞典米當月被下候賦ニ而、先達
而荒田省助殿差越、出納課へ差越候処、先達を被下向
ニ而候処、昨晚家村一蔵出縣、拙子ニも差越吳との
事候間其通承入置候、

一今日役所出席、今晚出縣之船夫手當頼置候、新竿等之
一条御用受合候、

一夕方濱之市船ヨリ出縣之賦ニ而、同所ニ差越、年行司
等出會、曳綱之所ニ行、夫を彦右衛門船ニ乗、順風出
帆、酒等持越候、

廿六日くもり

一今日早朝問屋ニ揚り、太次右衛門・省助・一蔵等滞
在、今日座方休日ニ而、後区長吉川家ニ行、賞祿之一
条頼置候、後正中會有、

九月廿七日晴天

一今日四ツ時分、太次右衛門殿同道縣廳ニ出、新竿帳・
地券帳等下ケ歸り、新竿帳之儀者府中村丈ケ下り、外
ハいまだとシテ不出来ニ而、地券帳ハ悪き廉有之、依
而下りたり、

一荒田省助・伊地知傳右衛門等、今日歸り有、
一後醉、後敷根問屋ニ行、戸長池田吉兵衛、副戸長菊野
与右衛門与出會ス、正中□□ル、昼一蔵と遊ニ行た
り、

廿八日晴天

一 今朝一藏同道吉川家二行、賞禄之一条何分不相分、依而出納課ニ伺ヒ、被給候様頼置たり、夫ヨリ帰り掛蒲生問屋ニ行、諸事終り合候而帰り、

一 四ツ後縣廳ニ出、區長衆ニ見得候處、昨日出納課者能首尾ニ相成、庶務課ニ差出し相成たる由、下り次第二何分相分らん欵と、

一 昼ノ黒川作兵衛・国生熊助・一藏・拙者、蒲生夫卒兩人引列、賞禄關係出納課出仕郡元村之長田直八殿所ニ行、右之一条尋問候處、十月十日ニ者丈夫渡方出来、其外委細承知候、夫ノ郡元之長助其外諸所ニ寄て帰り、夜酒會、喜右衛門・一藏其外、

亥九月廿九日曇 旧九月朔日

一 今朝野瀬弥九郎殿所ニ行、ふすま押之繪頼置候、但し一藏同道也、夫ノ人力車ニ而帰り、

一 今日一藏与兩人陸路帰り、尤昨日長田氏ニ而承知之通、来月十日方之故是ヲ待も餘計之事故問屋滞在、諸首尾之上昼ノ打立、太次右衛門・彦右衛門等と川尻船

ニ乗らんとす、順風如何と思ひ、午後三時比ノ打立陸路ス、重富ニ休息、夫ノ野久美田村久木田太郎助殿所迄来て泊り、

九月三十日雨天

一 今日一藏与野久美田村ノ帰り、小田村等ニ寄候而、正午時分帰宿、荒田省助来り、後平、

一 真孝村之十右衛門殿に寄ル、詰ニ来候由、

亥十月壹日大 雨天

一 今朝林藤治郎江煙草売、左之通、

一 門前屋敷四拾貳斤 正味ニシテ三拾三斤半八掛、

此代錢三百拾八貫貳百六拾八文

壹斤ニ付九貫五百文ツ、

一 砂走四拾三斤 正味ニシテ三拾四斤四匁

此掛錢四百拾貳貫八百文 壹斤ニ付拾貳貫文ツ、

右者、代錢之儀、當月末ニ相受取賦也、

一 今日役所出席、帰郷之届申出候、賞典米事情モ申置たり、後花火見物とシテ向花村之前ニ行、良之助・市兵衛等也、昼夜八十餘ツ、都合百六七十有之、見物人

過分也、 度之花火ハ龍伯公御墓御取立ニ付寄進花火也、後醉帰ル、

亥十月二日晴天

一今日遞送一条に付小村ニ行、松下氏・仲之丞等出會、是ハ數根同役より掛合之趣有之、小村有戸川之儀者數根之屬地ニ而、九月四日より出張海陸遞送所免許ニ付、可取建段船人馬之者ニ其段申渡し吳との事ニ付、小村之儀者少津之方国分屬地ニ而取扱可致段、取究いたし、敷根方江も形行申進越置候、

三日雨天

一今朝小教院荒田省助殿所ニ行、賞典之一条書付等遣し、一濱之市ニ行、遞送所廻人馬之一条、先達而混雜有之候由、方法取究方并霧嶋參詣籤取も有之、助一殿・仲之丞殿出會、

一収納検査役佐々木伊兵衛殿、真孝村ニ差入有之、是ニ出役、畠地見掛地内見等有、後正中等出し、夜かへり、

四日晴天

一今日役所出席、賞典之事件有、後川路江踊見ニ行、奥

州安達ヶ原之段也、夫ヨリ當番小原一兵衛所ニ行テ帰り、

五日晴天

一今日朝家村一藏来り、賞典之事件也、一役所出席、太次右衛門・仲右衛門・當番一兵衛、其外数人也、後川路之踊ニ行、

六日小雨後はれ

一今日役所出席、

一朝家村一藏所ニ行、明七日一所ニ出縣之賦候處、拙者二者博覧会煙草持參出縣賦ニ付、今日差越賦ニ付、其訳申述置候、

一役所ニ而煙草箱入付、拙宅江持来り候、

一船濱之市ニ手當相成候、今晚順風ニ而出帆、山口小右衛門・岩城熊五郎同船也、山内甚平等問屋詰也、

十月七日晴天

一今日晚七ツ時間屋ニ揚り、

一縣廳ニ出候處、座席普請移方等有之、大混雜ニ而何事も不出来候、

一 昼後御用煙草土師吉兵衛殿處ニ致持參候處、旅回留主ニ而、山田貞助殿所ニ行、是も留主也、伊集院篤殿所ニ行、明日上京之賦由ニ付取込也、夫々横山弥兵衛殿所ニ行、留主也、土岐藤左衛門殿所ニ行、煙草之一条委細頼置たり、

八日晴天

一 今日煙草持參ニ而縣廳ニ出候處、勸業方ニ可差出段致承知、同所ニ差出し候處、過不足之誤有之代錢不相下、依之煙草ハ同所ニ頼置、過分之所ハ国分之様申越したり、

一 昼時分、蒲生大脇桃玄・瀬之口孝之丞・黒川作兵衛・山之内覺四郎問屋ニ来り、黒川・山之内此方一藏と同人列して、郡元之長田直八殿所ニ行、賞典事件委細尋問候處、明日於縣廳ニ明細書等可写段承知いたし、宜頼置候、

一 後桑幡氏・荒田氏・家村氏等出會、
一 煙草拾斤者、代錢六拾貫文、

右前田弥七殿へ買渡し、

一 區長吉川家ニ行、先達而々度々之御礼申述置候、カツヲ之ふし進上いたし、夫々縣廳ニ出、出納課ニ而、長田直八殿より明細并手形留寫し帰り、

一 松木村之欠落者伊助入籍伺、縣掌ニ差出候處、文鉢わるくして受付不相成、依而帰り仕直し出廳候處、西俣氏被罷帰、事不相調してかへり、

一 岩城平七殿へ郷校山之上納金員数尋候處、未相定して帰り、夫々暫く出て、印鑑等頼置候、甚之丞殿・傳太郎殿、

一 蒲生問屋ニ行、一藏・省助三人列也、酒会有、彼方大脇氏・瀬之口氏・黒川氏・山之内氏四人也、

亥十月十日

一 今日蒲生と一所ニ金藏ニ出、賞典祿石代金相受取候、尤銘々□□有之、老入前四拾老円拾八錢九リツ、国分惣高式千五百拾式円五拾式錢九リ也、

一 縣廳ニ出、徳之嶋問屋帰候處相分り候、夫々諸買物ニ出る、一藏・省助と列也、

一 後ウナキ屋ニ行、例之三人列也、帰り掛裏山問屋ニ

寄、高橋源平等出會、

十一日晴天

一今日早朝一歳・省助ハ陸路帰り、
一服部庄次郎殿船ハ煙草不足之處取扱持参して来り、
一今日休日之故、勸業方も何事も不出來、
一西俣氏江煙草持参して行、賞典之御礼也、

十月十二日晴天

一今日勸業方ニ行、跡ハ持越し之煙草差出し、受取書一紙ニ取仕建差出し候處、受取方相成、夫ハ縣廳ニ出、前田矢七殿ヘ引合、煙草之代相受取候、
一後無事ニシテ休息、正中會有、

十三日晴天

一今日四ツ時勸業方ニ出候處、今日迄も代金不相下候ニ付、右者三嶋氏江頼置候而、帰郷之打立いたし、尤右ハ巨細頼置候、
一小村之龍助船ハ帰郷、七ツ時分ハ出帆、風少くして夜之四ツ時分有屋川ニ着、夫ハ帰宅、荷物等多分預ケ置
歸り、

十四日晴天

一今日役所出席、出縣之条々、一々届申出置候、
一荷物相届、銘々江配當いたし、
一昼ハ真孝村・住吉村之□□見分ニ行、市兵衛・仲右衛門・仲之丞出會、後真孝村泊り、
一真孝村之いせ講有之出席、住吉村ハ溝下見掛方有、

亥十月十五日晴天

一今日朝真孝より帰り役所出席、戸長方ハ御用有之候處、此說酒焼酎規則一条ニ付出縣被申付候、并賞典米御請之御礼、家禄等金給之一条也、濱之市ハ出縣之賦、

一役所より帰り、打立方今日、先出縣之さん用いたし、家村一蔵来り、荒田省助来り、各諸用事也、中村半七殿同斷、
一黄昏ニ濱之市ニ行、在宿ニ休息して出帆、鳥丸藤兵衛・大嶋宗右衛門正中屋之供とシテ行、濱之市ニ而正中屋共出頭有、

十月十六日晴天

一 今日早朝問屋ニ揚り、夫々區長之宅ニ行、焼酎屋税之条々尋問候、

一地券并廳米金給之一条尋問候、

一 昼後藤兵衛・宗右衛門引列、後迫之山元定順殿処ニ行、同人事酒類税則之掛ニ而、差越候処留主ニ而、事不調候、

一夜問屋ニ而、藤兵衛・宗右衛門出會、

十月十七日晴天 旧九月十九日

一 早朝兩人引列山元氏ニ行、税法条々巨細尋問候処、随分有、夫々區長之宅ニ行、巨細願置候、

一出納課御用之儀有之罷出候処、小村之御拝借之事件承知候、依而帰り三嶋氏へも形行申遣候、

一同課へ賞典祿御札印形帳差出し置候、後藤兵衛・宗右衛門と松風亭ニ行、酔帰、

十八日晴天

一 今日早朝藤兵衛等引列、後迫之山元氏ニ行、最早出勤留主也、

一 夫々縣廳ニ而山元氏ニ逢ひ、酒類石数取調差出し置

候、引付鑑札拾軒分、金百円相渡り候、

一 夫々船聞合候処、老艘も不見得、

一 後藤兵衛・宗右衛門問屋ニ出會、濱田屋々二牒小叶取寄酒会醉ス、

十月十九日晴天

一 今朝千石雄蔵夫卒引列来り、賞典祿願之一条也、夫卒源四郎・伊助、區長之宅ニ引列行、委細願置候、夫々縣廳ニ出、區長方出頭候処、縣下夫卒賞典之儀ハ、縣廳内草取夫之名を以支給候由、夫分錢を以縣下同様被仰付度旨可申出段被仰候、

一 戸長寄安樂万治殿代り坂本敬介殿相調相成候処、戸長寄之名目規則ニ無之、副戸長茂戸長寄當然之儀ニ付、副戸長を以テ右戸長寄ニ可差立段被仰候、

一 昼々黒川作左衛門・宮原雄蔵同道、小田権八殿所ニ御礼ニ行、

廿日晴天

一 藤兵衛・宗右衛門儀、今日昼船々帰帆、

一 今朝清右衛門来り、問役場之書付貰ひ、東郷氏ニ差出

し候も次書有之段承来り候ニ付、願書相調遣し、夫
婦方之仕舞いたし、旅籠之儀先十四日ハ十八日昼迄ハ
焼酎やヨリ拂、昨晚ヨ今日迄ハ夫卒之方ハ拂ニ相成
候、

一昼濱之市船ハ順風ニ而帰帆、雄蔵并夫卒共も同船、

一今晚濱之市焼酎屋共ハだりやめ出し、堀之内伊右衛門
所ニ泊り、

十月廿一日晴天

一今日早朝帰宅、役所出席、帰郷之届申出候、當ばん戸
長山内甚右衛門殿、副ハ山元用助殿、後川路之踊見ニ
行、

一小村御新田大縄場□□、土岐少属殿御竿入相成候処、
地租改正第八條ニ依り取消被仰付候、

廿二日晴天

一今日役所出席、難破船一条御布告写取、四ヶ浦_ニ流
布、

一夫卒賞祿願書取仕建方いたし、明細帳等も出来たり、

一今日山元庄一殿所ニ而愛宕講有之、出席、善助・勇左

衛門・仲一等、會例之通、

十月廿三日晴天

一今日役所出席、夫卒之賞祿願書取仕建、清右衛門ニ渡
し、

一地券之一条吟味有、

一今日八右衛門殿と相入を以、賞典方之祝同役中へ差出
し、要蔵・休五郎・七郎次・幸蔵・市兵衛・市郎右衛
門・喜之丞・市右衛門・助二・覚助・安樂萬治殿も被
来候、都合拾四人也、酒たけ□□ニ及ぶ、

廿四日晴天

一今日在宿、賞典方祝親類中江致ス賦ニ付、諸都合方い
たし、

一真孝村之詰新左衛門来り、

一夕方ハ近所親類入来被給候、夫ハ喜右衛門殿・源七殿
・利右衛門殿・其外数人也、宜敷祝有之候、大醉ニ及
也、

亥十月廿五日雨天

一今日在宿休息、夕部之醉ニ足を違わし不自由、

一今日家嫡正孫生、同祝いたし、

一今日者平、

廿六日晴天

一今日真孝村取納帳作とシテ行、名主共出會、

一船一条二付、幸藏・仲之丞と昼より年行司出會、調べ之下地いたし候処、不可解之廉有之、一先伺之上取調候筋二而、今晚山元伊助を以為伺候、夜役所二泊り、

廿七日晴天

一今日終日、真孝村役所二而取納帳作方、名主ども出

會、後金四郎仕立も合、座元徳永門休左衛門所二差越候而出席致シ、後役所泊り、大醉也、

但是ハ前後二相成たり、此模合座より差入者廿六日にして、船一条ハ其明ル廿七日也、帳面ヨゴシニ成候故、態と書直サス、

十月廿八日晴後小雨

一今日役所二而、終日取納帳作二而、名主共出會、平、

廿九日晴天 旧十月朔日

一今日より濱之市祭礼ニシテ市立盛ナリ、此真孝も祭礼

也、

一熊野神社祭式アリ、是ニ出役、戸長松下助一殿、祠掌市成氏・菊野氏・津曲氏・三宅等出會、祭相濟次第助一殿同道、市中締二行、爰ニハ戸長有馬傳太郎殿、副ハ牧元要藏・肥後市郎右衛門殿、其外小村之普請方火防掛宅間弥平左衛門殿、用水掛弥右衛門・宗右衛門・休左衛門等も押入居たり、然処、石切等列被来候処ニ邪广ヲ□シ、左細之事件アリ、夜帰り、

亥十月卅日晴天

一今日早朝打立真孝村二行、佐々木伊兵衛殿、夕部遅方ニ金之丞殿ニ差入有之見舞いたし、夫より同道諸見物ニ行、尤生態人女との角力、見鐘芝居、生人形等之見セ物有、賑々敷事也、後佐々木殿と一所ニ市中締方ニ行、今日ハ戸長有馬傳太郎殿、川村金藏殿、副ハ鮫嶋助二殿・服部喜之助殿也、宿ハ石切吉太郎所、後同所ニ泊り、

三十一日晴天

一今日市中仕舞有、宿ハ中村清兵衛所、曾山市右衛門・

豎山新右衛門兩人來り、夜同所ニ泊り、今日戸長ハ差支之由ニ而不來候、

亥十一月一日晴天

一今日真孝村・住吉村・濱之市・濱村など之牛馬改有之、昼宿ハくろ共之金次郎所、戸長有馬傳太郎殿、副ハ牧要藏・久木田八右衛門・仲之丞出會、正中會有、夜真孝役所泊り、

二日晴天

一今日於濱之市ニ船帳取仕建方有之、戸長松下助二殿、副ハ幸藏・仲之丞出會、其外町役四ヶ浦出會取調方有、夜築出しニ泊り、助一殿同し、

三日晴天

一今日早朝助一殿同道歸り、夫ハ役所出席、船帳清書いたし、後出藏方助二宅江祝有之、今日之出席正副戸長并大工等も押寄、酒会有り、酔ニ及んで歸り、

亥十一月四日晴天

一今日役所出席、德持幸藏殿と船帳取仕建相濟、戸長松下氏印鑑ニ而、今晚濱之市船ヨリ誰か出縣差出之賦也、

五日晴天

一今日於新町村ニ米割有之、戸長山内甚右衛門殿、副戸長八九名出會、割方有之、十一月十五月初受取ニ而、一月廿日迄ニ皆納之賦也、拙者・佐々木氏ニハ襲山之様轉宿ニ而出席無之、

六日晴天

一今日真孝村へ收納帳作ニ行、同村滞在、

七日晴天

一今日昨日同斷、收納帳方大抵相濟候ニ付、去戌年粟代銀一条引捌方差引有不相立、横折沓帳書写方也、

亥十一月八日晴天

一今日真孝村滞在、濱之市御新田銀掛見賦有之、住吉村出會、戸長有馬傳太郎殿并仲之丞、後真孝村ニ泊り、一今晚午後十二時比住吉村ニ出火有、伊三次ナル者之家也、馬屋ハ起り、長日照ニ而煙氣ニ相成、川嵐吹掛忽然とシテ焼亡ス、類焼なし、拙者ニも相統候、戸長山内甚右衛門・中村壮一郎、副戸長鮫嶋助二・服部權之丞・野村静太・前田仲之丞・秋山七郎・小原彦七・山

内真七等懸付候、尤厩より出火之儀うたがわしき儀二候、以上、

九日 十日 十一日各晴天

一真孝村滞在、去戌年粟代銀帳取仕建方、未だ不相済候、
一真孝蔵初收納、此十二日より有、權之十・仲之丞出會、
東馬場の伊右衛門所、戸長安樂万治殿夜帰り、

亥十一月十三日晴天 旧十月十六日

一今日役所出席、川尻之千鳥川より馬祈念角力願出候、馬
持より村々念を以書調二而、取企筋吟味相成たり、

一當秋見掛地檢見立免許相成たり、諸在へ申渡し有、

一地引帳編集之儀、明日より向花村取付之賦也、

一本田勇左衛門母、山田喜右衛門母、先日相果悔二行、

十四日晴天

一今日真孝蔵付取納二行、後帰り、休蔵・喜之丞出役也、

十五日晴天

一今日真孝蔵二行、万治・喜之丞出役、後真孝村役所二
而收納祝、名主共出會、夜帰り、

亥十一月十六日晴天

一今日真孝村滞在、畠地見掛地檢見立いたし、夜泊り、

十七日雨

一今日早朝真孝村より帰り、在宅、平、

十八日晴天

一今日役所出席、府中村之拘地出米、去酉年分未進催促
有之、尤近在中仮屋守殿宅二而、二三年分被納催促有
之候由、

十九日晴天

一今日朝煙草代二ヶ月分利掛て、藤次郎方へ受取方二出
候、

一今日向花之地踏二行、戸長川村金蔵、副戸長牧元要蔵

・曾山市右衛門出會、坪々順番二地引帳取仕建方、自

作地漸々竿、秣場・墓原等残区踏付方也、上川窪より龍

昌寺下迄踏付候、

亥十一月廿日晴天

一今日昨日同断、龍昌寺下始り二而、三ヶ月并常念寺通
迄、

廿一日晴天

一今日昨日同断、常念寺後始り二而、本町入口田□并天神坊向老前がねす原迄、

廿二日晴天

一今日昨日同断、がねす原も真孝川原流合迄并川跡町之頭迄、

十一日廿三日晴天

一今日中嶋打立、川跡永作松永川原相済、本町二入、

廿四日晴天

一今日本町林甚助所始り二而、中之馬場二出、山内甚右衛門殿所迄、服部休五郎殿も今日も手傳有、要蔵殿ハ昼も親病氣二而被帰候、

廿五日晴天

一今日肥後市兵衛殿江手當相成候処、上小川村之取納帳宅帳一条ニ付被頼たり、今日東馬場之邊、鍛冶屋馬場・西馬場・久保邊迄、市兵衛代理山元用右衛門出會有、

廿六日晴天

一今日拙者ニハ濱之市船方事務、租税課出仕川野権左衛門殿差入有之、戸長松下助一殿、副前原仲之丞・徳持

幸蔵殿出會也、取扱方并云渡し等有り、後松木之下川原二角力見二行、夫も帰り、

一向花村之地引方ハ、肥後市兵衛江頼置たり、

亥十一月廿七日晴天

一朝久木田八右衛門殿高調帳持て来り、違目仕有之、

一向花村之地踏二行、川跡永作中也、牧元傳助・中村半

七等拘地踏いたし、夫も角力見二行、金蔵・休五郎・

市兵衛等也、

廿八日晴天

一今朝津曲矢七来り、福嶋之祭之事件也、

一向花村之地踏二行、川跡相済、村中屋地等迄も相済候、

廿九日雨天

一昨夜之正中二而足痛到来候付、向花村之方頼置候、今

日休息、

十一月三十日晴天

一今日在宿、家内唐芋取アリ、

一真孝村之畠地銀ニて用いたし、

十二月壹日晴天

一 今日役所出席、地租改正取調掛被仰付候ニ付、種々談合いたし、同掛ニハ牧元要藏・秋山七郎・肥後市兵衛・山元角助也、向花村之儀者先日相濟候ニ付、明日も新町村ニ地踏取付相成賦ニ候、

一 當秋方見分衆伊東喜之助殿、昨日下井村へ差入ニ而、今日も見分有之賦、

一 役所ニハ高帳取しらべ方精々有之、

二日晴雨時雨也

一 今日在宿、真孝村之去戌畠地帳取しらべ方、

一 作与立替有、次渡帳持参して来候、役所ハ引取相成候、跡賦之由、

亥十二月三日晴雨時雨也

一 今日在宿、真孝村之畠帳同断、昨日之通今日あられ交りにして甚寒し、

四日晴天

一 今日昨日之通、夜肥後市兵衛所ニ行、

五日晴天

一 今日見掛方ニ行、新町村が成立ニ而、御内屋敷新竿入

有之、夫も見次村・野口村・真孝村ニ見分、野久美田村夕ニ御見分ニ而、同村ニ泊り、租税課十五等出仕伊東喜之助殿、筆さん市来永山甚五左衛門殿、蒔見蒲生本村助右衛門殿、□□串木野吉田幸吉殿、竿取市来中村軍二殿、戸長牧元用助殿、副服部喜之助殿・野村静太・権之丞殿・市右衛門殿、其外出會、夜野久美田村ニ泊り、

六日晴天

一 今日早朝野久美田村が帰り、喜之丞同道也、福嶋村ニ

而入米受取用有之、右ハ喜之丞ニ頼置候、

一 真孝村之畠地帳取しらべ方、先日之通也、

七日曇

一 今日在宿、畠帳之一条先日之通、出役詰利左衛門寄、

八日曇

一 今日昨日之通、

一朝真孝村之名主喜太郎・助右衛門来り、川村氏ニ見舞之由、又村二才廃止ニ付、村校取建之段申出候、清水作揚り米之一条申出候、

九日晴天

一 今日昨日之通、

一米掛模合座七右衛門殿所ニ而いたし、弟之庄次郎受取方ニ罷出候、諸都合向者七右衛門殿ニ談シ合之上、可取計旨申置候、□米三石七斗之内、小以菰石式斗五舁八合七斗引、残米式石四斗四升壹合三夕受取前と相成、此日引合等有、現受取高ハ七斗六合三夕也、
一家内等ハ鉄太郎頼、龍王之田麦植有、

亥十二月十日晴天

一 今日在宿先日之通也、今日迄大概相片付候、

十一日晴天

一 今日役所出席、當番臼井六郎、其外休五郎・喜之助・

市右衛門等出席、

一 鯨嶋助二殿二ヶ年満期ニ而交代、市来宗太郎上井村掛出役ニ成、宗太郎代り鎌田源兵衛殿新入也、岩城太次右衛門先達而病死、跡役安樂仲右衛門、仲右衛門代り役ハ岩城仲之助也、役所ニハ當分平、地踏ハ府中村也、

亥十二月十二日晴天

一 今日府中村ニ地踏ニ行、戸長川村氏、副ハ七郎・覺助・拙者也、今日迄府中村ニ出張ニ相成候、後揚リニ小八所ニ寄、大醉ス、

十三日晴天 旧十一月十六日

一 今日家内氏ッ神先祖霊、其外諸神新嘗祭有、祠掌差支ニ而今日迄ハ入来なし、真孝村之作与共来リ、

一 今日家内規則改正、先ッ第一祖先霊崇敬、氏ッ神同断、土産神同断、家内安穩、第二大醉・大酒・醉後之荒事・醉後強働・拔刀嚴禁之条、誓約書ヲ壁書ニイタシタリ、

一 終日在宿也、

十四日晴天

一 今日真孝村ニ取納引捌ニ行、名主ども出會有、畠地之事申聞セ候、

亥十二月十五日晴天

一 今日同村滞在昨日之通、けふハ真孝西方限鑰嶋氏与新嘗靈祭有、

十六日晴天

一今日同村滞在昨日之通、平、

一上小川村ニ而受取用有、

十七日晴天

一今日役所御用談之儀到来ニ付、帰り出席、社寺境内
反別取調之一条也、

亥十二月十八日風雨

一今日役所出席、問屋夫請米渡方有之、中馬文藏殿等
也、後丸山伊助所ニ而祝酒有、正副戸長・觸役等出
會、

十九日曇間ニ雪雨

一夕部四方大雪降りて白壁の如し、初雪也、

一社寺境内外取調方とシテ、今日新町村出會ニ而、東西

両手ニわかれ、戸長牧元用助殿西ニ、有馬休藏殿西

ニ、副ハ牧元要藏殿・肥後市兵衛殿東ニ、并絵図取と

シテ喜之助殿、西ハ野村静太殿・拙者、絵図取とシテ

服部喜右衛門殿、其外村毎ニ祠掌衆出會、今日小田村

ニ泊り、

亥十二月廿日曇

一今日小田村ニ打立、野久美田村・小濱村・真孝村・住
よし村迄相済候、社寺地境内外反別、周廻標示相建還
候事、住吉村ニ歸宅、

廿一日曇

一今日役所出席、庄屋浮免揚り米之一条、紙相付置候、
一 小野傳太郎・同周兵衛、縣下山下寿吉ニ借金有之候
処、訴訟相成、聴訟課ニ、病氣之處相糺し可申出との
事ニ而、戸長松下氏、医師久木田玄春同道立會見分相
成たり、

一 蒲生黒川作左衛門方ニ賞祿之一条問合来り、當年分以
而渡之處、何分伺不出との一条也、

廿二日晴天

一今日社寺地取調とシテ、川内村・上井村ニ行、戸長ハ
有馬休藏殿、副ハ市兵衛・市右衛門・喜之助・宗太郎
也、稻富神社・宇豆峯神社・諏訪神社各祠掌衆出會アリ、

廿三日晴天

一今日役所出席、社寺境内外しらべ首尾下地いたし、

廿四日晴天

一今日役所出席、去亥年分雀過不足相立、代銀割付いたし、小村之濱出分五百七拾七羽相納候處、割込ニ相成候、

一今日川西山等ニ見掛有、八右衛門・要藏等出勤也、

亥十二月廿五日晴天

一今日役所出席、川跡大橋之脇破損所取繕ニ而、見賦ニ

行、戸長山内甚右衛門殿、副ハ要藏・拙者也、

一肥後市兵衛出縣有、

一賞祿之一条ニ付、朝山内新右衛門殿所ニ行、

廿六日晴天

一今日役所出席、今晚出縣ニ付、船夫手當申出置候、

一出納方々借錢利足、拙者方并源七殿・治右衛門殿方、

都合百六拾六貫文首尾いたし置たり、

一黄昏ニ新右衛門殿同道濱之市へ下り、今晚夜明ニ出帆

いたし、夜明て前之濱ニ着船、外ニ中馬文藏殿・佐々

木喜兵衛殿・服部孝左衛門殿同船也、順風よろし、此

節者賞典祿手形之一条、碑ノ祝之一条、其外段々也、

亥十二月廿七日雨天

一早朝上陸、蒲生問屋ニ行、大脇・拙者・瀬之口孝之丞等也、今日迄ニ聞合承候、夫々縣廳ニ出、西俣氏ニ頼候而、賞典米御下儀何様之處伺候處、所務米・俸祿同様、五部五厘之通り、代銀ニ而御渡之由、一月ニ相成候へ者可相渡との由承候、夫々帰り、

廿八日曇

一今日早朝永田権八殿所ニ行、相尋候處、現米ニ而渡之由ニ候、

一縣廳ニ出、賞典祿掛り手形作り山口小左衛門殿と申、同人宅ハ南照院也之由承候、

一買物等ニ出る、

一午後五時比々牛問屋ニ行、喜兵衛・稻靜杯と同道有、

亥十二月廿九日晴天

一今日朝田之浦ニ行、出軍碑之銘之一条、委細聞合候、

石切方々大抵寸尺左之通頼置たり、

一石碑高サ五尺
幅式尺五寸 壱重地盤

一石燈爐用 高サ四尺五寸位

此執料式百貫文

又外ニ、彫字一字ニ付、四銅或ハ五銅欸也、

一今日四時比川尻船ニ乗、前之濱出帆、喜兵衛殿等と同船ス、黄昏ニ小村万が水□ニ帰帆ス、夫々上陸して帰宅、荷物モ今晚届ク、

亥十二月三十日クモリ

一今日役所ニ出席、帰郷之届申出置候、

三十一日晴天 旧十二月四日

一免本銀直成立来り候ニ付、七郎殿頼ミ真孝村ニ行、去戌年代銀過不さん用并當亥年代銀掛付いたし、

證文

會所下

一田三反五畝④

西山下三割目

一同九畝廿式步④

右者、此節借銀質物ニ而、現金ニ而返済難成御座候ニ

付、私方江永代相請取申候儀別条無御座候間、別紙之通私名面江御直被下度奉頼候、以上、

慶應四年

辰正月廿八日

石塚仲右衛門④

證拠人

中村源右衛門④

小村

御新田方掛

御役々衆中

十五 軍 役

「奥羽征伐ニ付出軍日記」は国分市中央五丁目 有馬利秋氏所有で、同氏の祖父有馬助八從軍の日記である。

慶應四年（一八六八）七月二十二日奥羽征伐（戊辰戦争）出兵を命ぜられ、国分半隊四〇人鹿府に出、天保山にて訓練、八月二日愈々出船、同十八日新潟を経て秋田城下着、二十二日戦場着、それより一か月後の九月二十八日までの戦闘の記録である。

「西南戦争薩軍上申書」は、明治十年（一八七七）の西南戦争で戦犯として収容された人たちの上申書である。

「鹿児島県史料・西南戦争」並びに東京大学史料編纂所の「懲役人筆記東京府（市ヶ谷）」の中より、国分関係者の分をまとめたものである。なお、両書にない七名については、小寺鉄之助編纂の昭和四十二年六月発行「西南の役薩軍口供書」から記載した。

（表紙）

慶應四年辰八月二日

奥羽征伐ニ付出軍日記

薩陽國府藩士有馬助八

慶應四年戊辰七月廿日出兵被仰付、申之下刻ヨリ打立、早鐘・大炮ニ而役所ニ相添国府半隊四十人、黄昏ニ出立て濱之市ヨリ夜船ニ乗テ鹿府ニ着、奥原氏陣宿いたす、訓練式ハ天保山ニ而玉打等^{ママ（弾丸）}有之候
一辰八月二日限ニ出船之賦、陸軍所ニ相添候処、逆風横雨ニ依而船ニ乗付えず、又奥原氏ニ滞在候而、三日英船ニ乗テ黄昏ニ走立、
一同五日、風吹立、荒風小雨、夜ニ入て難船ニ及び千辛

万苦ニいたる。明ル六日、肥前国平戸之大島ニ掛リ船上陸いたし、一夜滞在して、明ル七日、又本之英船ニ乗込で走立、八日通船、九日申ノ下刻、越前国敦賀ニ着、直ニ上陸いたし宿陣いたす時ニ夜入ル、

十日曇天

一今日敦賀ニ滞在いたす、時ニ生卵^{ナマ}打食ひ候処、アタリテ腹之痛ミ出合、誠ニ難儀いたし候事、

八月十一日くもり小雨

一今日申ノ刻比、敦賀を立て、又モトノ英船ニ乗て、黄昏ニ走立、順風吉、

十二日小雨

一今日、通船初ハ順風吉、後に船荒くなりて、夜ニ入て雨餘テ又モ難儀ニ及ぶ、

十三日小雨

一矢張通船、暁キ方ニ越後之新潟ニ着船、夜入て上陸いたス、四更比ニ様々兵糧遣ひ、

十四日晴天

一今日早朝行軍して新潟之市中をすぐる後休息、

十五日晴天

一今日新潟ニ滞在いたす、いまだどの筋きわまらず、町家ハ誠によろしき所也、

十六日雨天

一今日申下刻出立し、令アリて則出立、軍艦出羽国之イガン丸ト言ニ乗、今宵ハ出船なし、

辰八月十七日小雨

一今日船中にて出航なし、後黄昏ニ走立て、今宵ハ矢張通船、

十八日同天

一今日巳ノ刻、出羽国秋田領之土崎と言所ニ着船アリ、直ニ上陸暫立宿して昼飯アリ、又立て秋田之城下ニ着、正太寺と言ニ陣宿、

十九日同天

一今日早天ニ秋田之城下久保田を立て、同境と言所ニ行、一久保田ニ而、九條様御前にて礼式アリ、三里にして、戸島にて昼飯有、時ニ七ツ半、又四里にして様々夜九ツ時分境ニこそ着にけり、今日之道は千辛万苦といふ

べし

廿日くもり

一今日鶏鳴境を出立て三里にして刈和野ト言所ニ着、即
爰ニ宿陣、夜大雷大雨震動ス、

廿一日小雨

一今日早天、刈和野を立て、神宮寺と言所ニ着、道のり
二里半、即休息いたす、

辰八月廿八日くもり

一今日昼過比、仙北郡神宮寺を立て一里計をふんで、あ
かつきに松倉山ト言所ニ着、爰ニ大河あり、玉川ト
言、賊徒川向へに屯集するの由、爰ニ臺場アリ、堅メ
方いたす、

一松倉ノ山中ニ小屋掛して住む、

一玉川之渡り壺丁余も有之べきか、

廿三日同天

十五 軍
一今日臺場替番堅メかた、巳ノ下刻比進撃ニ相成、玉川
ヲ渡て攻入り方、
一山形ノ賊徒三四十人モ有之候わん、杉山之中ニ籠りし

と打合候処、二三合ニもおよばず、散々に逃去けり、
依テ家々に火を掛けて、又川原ニ引取て勤り、

一味方五番隊ニハ手負・戦死なし、大勝利にして賊の死
者四人ナリトきく、内^マ内人ハ宗隊長安田鉄之助と言者
死たり、納行色々書状等有之、少シモ疑ふ所なし、

一川原にて昼飯して、又繰出して四屋と言所ニひかへ居
る賊徒と打合候処、賊ハ大場ニかまへ、味方ハ田の中
ニ而走り打ニ打方、やゝ打てども賊徒引かず、ゑい
く声にて打掛り候処、脇より横矢を打けるに、賊た
まらず逃去ケリ、依之火の手を揚げり、

一味方之手負小隊長東郷四郎衛・野村壮助・山下次郎左
衛門・梅北十右衛門、蒲生之瀬之口覚右衛門都合五人
也、戦死^マ死人なし、外之隊ハしらす、

一又川原ニ引取て休息いたす、

八月廿四日晴天

一今日又川原を引取て、本之松倉山之大場^(臺カ)を堅メかた、
一御城下隊并ニ番兵隊、夕部夜戦にて敗軍之由有之、
一夫卒小村之太吉・同源太郎夕部之夜戦ニまぎれ入、源

太郎ハ手負重手、太吉ハ死生ハしらずやにけり、

廿五日晴天

一今日巳ノ刻比繰出しニ相成、玉川を渡て四屋迄行候処

何事なくして又引取、

廿六日晴天

一今日松倉之臺場堅メ方、替りく勤候事、

辰八月廿七日くもり

一今日矢張臺場番

一後昼過神宮寺ニ堅メニ行方有之候事、一分隊ツゝ替り

く行方有之、

廿八日晴天

一今日ハ又松倉ニ帰て臺場勤メ、当分無事、

廿九日曇天

一今日鶏鳴、松倉を打立て、玉川の頭の建石と言所ニ臺

場堅メニ行方有之候、国府一分隊・蒲生一分隊合半隊

ニ而候事、

一半隊長能勢弥九郎・監軍白尾彦助・小頭安樂伊右衛門

晦日くもり小雨

一今日此建石にて大場堅メ替りがわり勤め方有之候事、

一立石之山中ニ小屋掛して野陣仕候事、

辰九月朔日風雨天

一今日矢張臺場勤め

一今日雨風しんまきして誠に寒き事ニ御座候、

一大場ハ登り四五丁も有之候わんか、高き岡の上ニ築き

あり候を、替りがわり勤候事ニ御座候、

九月二日晴天

一今日昼時分此建石の大場引取ニ相成、秋田藩替て此所

を勤む故ニ、我々共ハ又本の松倉山ニ帰る、

三日雨天

一今日又松倉の臺場勤め

一けふハ雪雨ふりていよくさむし、

四日曇天

一今日矢張大場堅め方、後雪雨ふりて寒き事いふべから

す、

五日晴天

一今日、昨日同断、何の変事も無之候事、

六日晴天

一今日臺場勤め、矢張昨日同斷、

一官軍の合言葉等有之候

一いち○木竹○月影○火か日○梅景

辰九月七日

一今日矢張大場勤め、何の珍事も無之候、

一四屋に賊徒大場を築たる之由有之、又四屋之辺ニ毎日

太鼓を打音聞へ候、何事と言事をしらす、

一明日賊徒ヨリ進撃いたす之筈にて、此松倉ニ又重て臺

場築有之候事、

八月晴天

一今日壹場詰、愈嚴重なる事ニ御座候処、此夜半時分、

当島刈和野辺へ賊兵為打入由、依而国府三番分隊・蒲

生菰番分隊、シメ式分隊さし向られ、残式分心少ク茂

臺場弥嚴重に相堅、終夜不寝事、はるかに炮声之音相

響候、

同九日雪風

今日当嶋刈和野ヲ賊兵遮切たるに依而、臺場堅ハ弥嚴重

に相堅め可居事、若此隊ヨリ神宮^{ママ}司方ふせき方とシテさ

し向らるかも難計候間、其用意致置べく段承候、折角指

揮相待居候事、

十日半疊日

今日筑前新城之戦ひ有之、味方も餘り勝利は不相聞、何

れ敵ヲ放る事ハ薩長肥なくてハ不相叶相考罷居候事、

十一日

一今日炮聞刈和野辺へ夥敷相聞へ、毎之通臺場堅^虫

居候、今晚暁ヨリ密^{ママ}又敵陣^{脱カ}江攻入べく候ニ付、其用意

可致段承知仕待構居候、

十二日

一今日未明ヨリ臺場出兵敵之不知様刈和野方へ出張之ダ

ン承り、氣立道すがら勇々數咄共いたし、いさみ切て

打越ス、中途ニ而神宮寺本陣も皆惣勢カブダテマテ引

場之段承り、アヤナクモ悪道ヲ元ノ臺場江引返し、

皆々氣落して、しばし休ミ居候処、惣勢引揚ケニ相成

候へく、我々半隊ニ而ハ難ふせぎ候ニ付、引上ケ之段

承り、又々五里計有之極難場なる山路ヲ雨天ニカブノ

タテマデ罷越、ヤ、力もヲトロヘ難儀ナリ、既に夜入
時分陸着なヲ、雨強クふり出し、此処も他藩餘多入
込なれば宿ツカヘ渋雜也、よふくに宿ヲかりしばし
相休ミ居候処又々其夜曉比元ノ松倉江一分タイヨリ五
人ツ、繰候様承知いたし、拙者と荒田吉之助殿・加世
田源五右衛門殿・藤山喜八殿・野村半兵衛殿大斥候ニ
而出兵也、

十三日雨天

今日未明ヨリ右人数出兵、悪道ナガラモ足輕ク進ミ、遊
撃隊・五番隊・拾五番隊、三小隊二十人ツ、出兵、賊兵
松倉取切候半ト相考居候ニ付、松倉手前ニ而兩式三度此
人数之内ヨリ斥候ヲ出し、松倉ヘ罷返リ、此時必死ト決
定いたし居候処、案外松倉敵者人も不相見、乍併一里半
計リ有之神宮寺江賊兵餘多渡り居候、右人数之内より繰
廻しニ而、式人ツ、ジウンダ致シ居候処、跡ヨリ繰出
したる隊、晩方松倉ヘ相差一所又相円リ、終夜不寝嚴重
ニ相堅候事、

同十四日雨天

一日賊方相打掛り候段聞得居候所、直ニ新田溝水ヘか
めとシテ百姓者人賊方ヨリ遣し候処、我々察るニ者此
溝の水をかさめ候ハ、敵方之邪摩^{マヤ}相成^{マヤ}取有之、彼百姓
遣したるか^{マヤ}と相考、水上のけ口罷越引添して倍々水を
相かさめ、折角臺場相固め候事、

十五日雨天、雪まじり

一日も矢張臺場詰也、刈和野辺之進撃^虫勝利得候
旨承り大悦罷居候、

十六日

一日刈和野、戸嶋戦争に敵方相弱ミ、神宮寺惣勢引た
る由承り、松倉大勢ヲ見ん為に、中途まで繰出候事、

十七日

一日矢張臺場也

十八日

一右同断之事

十九日晚大曲迄繰^{マヤ}出脱^カ之段、四番遊撃隊ヨリ承候事、

一日松倉臺場ニ者懸念無之候ニ付、大曲迄繰出しニ相
成候処、此所も掛通しニ而儀舞寺言所まで矢張久々振

りに夜着共仕候ハヽ、相応之料理廻し、旁々松倉ヨリ押而国許之祭礼を催し、各咄共仕候事、

廿日曇天

一今日新莊辺江賊兵落集、五六百人罷居候由承候、此湯

ザハ迄出張也

廿一日同廿二日 湯沢滞陣也

廿三日

一今日行軍ニ而院内着陣也

廿四日雨天

一今日行軍繰出し哦々たりし院内峠音に聞ヨリも増して

難場也、乃[田]峠ト言此間有、金山と言所迄也、

廿五日半日雪

一今日明六ツ繰出し、赤坂峠を越て新城、城下八町程手

前、荒小屋村に宿る也

同廿六日雪雨

今日滞在之賊ニ而御座候処、七ツ時分ヨリ行軍繰出し、

悪路ヲ凡五里之道のりも、三里夜入、中々闇夜明松ハな

し難儀也、よふく四ツ時分中渡着陣也、

同廿七日

今日六ツ時繰しママ(出脱)、古口迄昼飯時分着、直ニ川船いたし、

添舟ニ而清川口迄、夕時分着、寺陣也、

廿八日

未明繰出し、庄内城行軍(以下破損)

役

軍

十五

(表紙)

懲役人筆記・東京府

明治十一年西南事件ニ而

東京市ヶ谷江懲役相成候

人員簿

国分

三年 種子田則勝

一年 市成弥助

二年 野村源右エ門

同 外山金次郎

同 坂元敬輔

同 菊野健助

同 久木田幸兵衛

同 徳持幸蔵

同 松下助市

一年 服部権之丞

同 宮原良助

「細山田十兵衛」

戦地景況書

明治十年四月七日同縣ノ中山甚五兵衛吉田郷ニ募兵トシテ出張ノヨシ我襲山郷戸長ヨリ通知アリ余其募リニ応シ直ニ翌八日吉田郷ニ出張ス中山モ其地ニ居リ翌九日隊ノ編制アリ凡百名ヲ以テ一小隊ト為ス余遊軍十一番ノ小隊長トナル翌十日吉田ヲ発シ人吉ニ到リ同月廿日迄宿陣ス翌日江代エ転陣廿一日尾前村エ至リ廿二日矢部ニ着キ其地ヲ守衛ス同廿八日遊軍隊ヲ廃シ其兵ヲ振武隊ニ編入ア

襲山

三年 古川源助 一年 荒田藤五郎

同 細山田十兵衛 同 島田十七郎

二年 久保田助次郎 同 小川善太郎

同 久木元直吉 同 高橋玄平(源)

一年 本田藤左エ門 同 松元勇左エ門

同 前田稲助 同 外山善太郎

同 細山田重雄 高橋新介

リ余振武ノ四番給養トナル同廿九日ヨリ矢部ヲ出立鹿兒島ニ引揚五月四日麿ノ伊敷村ニ至ル六月廿四日マテ宿陣ス其頃ヨリ其方面ノ戦皆利アラス我隊モ廿五日ヨリ所々ニ引揚陣所極リナシ六月三十日ノ頃山口郷ニ於テ遂ニ官軍ニ取包マレ其日ニ降伏セリ

鹿兒島縣襲山郷

明治十一年二月

細山田 十兵衛

「久保田助次郎」

明治十年四月八日県庁之達ニヨリ襲山郷出発飯野江到着夫ヨリ隊号拾番遊軍ト相定私小隊長心得被申付熊本県下廣村江同四月中旬比到着直ニ兩三日防戦イタシ手負三四名有之其晩淺二十二時比ヨリ同所木山江引揚其所ニテ又屯戦イタシ味方相敗シ戦死手負 三名ナリ夫ヨリ人吉迄引揚隊号常山二番中隊ト改ニ相成夫ヨリ本營之命ヲ得人吉之内宮蘭江番兵イタシ旧三月二十三日晩松尾坂ト申処江凡百五拾名計ニテ夜打イタシ其節味方勝利ト相見え左候テ許之宮蘭江帰陣、四五日纏テ敵ヨリ進撃又味方敗

軍シ竹之川迄引揚夫ヨリ太平^{頭地}○他人吉市中迄之内三戦計イタシ終ニ度々敗軍又人吉迄引揚我兵又人吉ヨリ同牛之村ト申処江張出シ其節敵屯里余リ追払当日戦争後味方相敗シ戦死手負四五名ナリ夫ヨリ又大木場迄退キ旧五月中旬比敵ヨリ又進撃当日戦争故ニ戦死手負兩三名ナリ後又味方敗軍シ夫ヨリ飯野野尻紙屋迄之内数多戦争イタシ候得共皆々敗軍シ時ニ中隊長八木兼作茂銃丸胸ニ当リテ即死ナリ並ニ小隊長郡山誠治ニテ茂死タリケリ四五日ヲ經テ敵官軍ト覚悟イタシ早々高岡之内八代ト申処之官軍本營江旧六月廿一日死出降伏之段願出直ニ御聞取有之左候テ高岡町警視裁判江相廻リ其節自宅謹慎被申付程有直ニ旧七月三日私宅江相歸リ夫ヨリ帰隊不致候也

鹿兒島県下襲山郷

第拾三大区壹番小区百五番地

久保田助次郎

「久木元直吉」

戦地景況之概略

明治十年二月上旬西郷隆盛等中原尚雄等云々ノ事件政府へ諮問ノ爲上京ノ際日兵隊隨行余ハ五番大隊貳番小隊村田三介隊ニ編入セラレ二月十七日鹿児島ヲ発西目街道ヨリシ出水米ノ津ニ艦^ぎシ二十一日松橋ニ着ス即夜川尻^{うし}ニ抵リ黎明該地出發熊本城下安政橋ノ辺ニ抵リ突然伏兵起リ城内ヨリ大砲ヲ発シ頻ニ我丘ヲ抑制ス隊長三介勢ヒ不可止ヲ察シ督貴攻戰午ニ至テ植木ニ官ノ援兵到ルヲ聞キ直チニ馳セテ迎戰ス我兵官兵ノ不意ニ出テ官兵狼狽^{ろうばい}然リト雖トモ敵大勢ニシテ潮ノ湧カ如ク来ル一旦我隊苦戰スルノ処応援隊続ヒテ互ニ接戰勇進官軍支ユル能ハス連隊旗ヲキ井ニ兵伏屍骸ヲ棄テ走ル我隊等進ンテ植木ニ乗取茲ニ守防スル二月廿四日山鹿進軍我隊応援タリ既山鹿ニ抵レハ官軍鍋田橋ノ邊ニ拒戰ス我隊長先鋒隊散布激戰スル中ヲ制列ヲ以テ進ミ先鋒ヨリ挺進シ令ヲ下シテ我隊ヲ散布シ勇往激戰大ニ勝利ヲ得テ腹切坂迄追跡シ若干ノ銃器彈藥ヲ分捕ス薄暮山鹿ニ退軍爾茲ニ防戰ス三月三日南ノ間進撃ノ事アリ山鹿ノ軍ヲ二分シーツハ本道ヨリ一ツ

ハ間道ヨリ進ム我隊等五中隊ヲ以テ間道ヨリ進ム平山ニ抵テ官軍拒戰午前八時頃ヨリ午ヲ廻ツテ激戰山嶺溪谷ヲ上下シ遂ニ之ヲ走ラセ進ンテ中町村ニ泊シ翌日山鹿本道進撃一旦之ヲ擊破シ腹切坂辺迄進戰ノ処報知ノモノ誤伝シテ本道軍總テ山鹿ニ引揚タリ間道ハ又進ンテ岩村ニ戰ヒ大勝ヲ得レトモ一路進ミ難ク察シ又山鹿ニ引揚翌日軍ヲ鍋田原ニ移シ築壘拒戰ス同十二日官軍鍋田ヲ襲フ物擊テ之ヲ走ラス深ク進マハ伏ニ陥ラン事ヲ恐レテ鍋田ニ退守須臾^{しゅゑん}ニシテ又官軍返撃勢前ニ倍シ殆ント破竹ノ如シ爰ニ於テ奮激突戰時ヲ移シテ我軍苦戰隊長村田三介憤然起テ拔刀衆ヲ勵マシ挺身敵ヲ討タント進ム処ニ豈斗ヤ銃丸ニ当テ斃ルル我兵猶憤闘夜半ニ到テ官軍退ク十五日又官軍襲来前日我探偵之ヲ搜知スルニ依テ我隊壘ヲ嚴ニシ予メ之カ備ヘツ爲シ敵ノ近クヲ待ツ既ニ迫ツテ壘ヲ隔僅ニ三四間我兵百銃齊シク放ツヤ否ヤ直チニ拔刀接戰敵數十ヲ斃シテ大ニ之ヲ走ラス爾後鍋田ニ襲来スト雖トモ緩々砲擊スル而已此時伊地知彌平中隊長トナル同二十一日官軍又襲来午ニ到テ植木ヨリ援兵乞ヒ来リ山鹿ヨリ配兵故

ニ兵員少シテ難守總軍一旦鳥巢拒戦ニ坐シ即日軍ヲ引テ田島ニ一泊翌日鳥巢ニ抵リ直チニ相生村ニ進軍茲ニ拒守スル二日又転シテ限府ニ抵ル我隊新町街道ヲ守ル飢肥隊梨木坂ヲ守リ其他六中隊猶菊地ノ社ノ辺リヨリ処々ニ拒守一日限府ノ山手ニ官軍来ル我軍ノ戦不利続テ我寄ル新町街道ニ懸ル激戦数刻則チ我右半隊并南東直ニ隊ト合シテ間道ヲ廻リ敵ヲ横撃ス我左半隊モ與ニ進ンテ大ニ之を走ラセ勢ヒニ乘シ尾撃スル里許此日我隊長伊地知彌平戦死其他二三名アリ村田經綱隊長トナル又三四日ヲ経テ官軍襲来終日劇戦簿暮敵退ク又翌日襲来之ヨリ連戦三日官軍頻ニ加兵既ニ四方ヲ圍繞スルノ勢ヒアリ我軍彈藥乏シク且衆寡不敵ヲ察シ四月九日頃途ヲ赤星街道ニ取り竹迫ニ退軍一二日拒守又牟礼村ニ抵ル于時ニ御船破レテ永山彌一等命ヲ授ルヲ聞ク之ニ応援ノ命アリ爰ヲ發シテ大津街道ヨリ下牟田ニ抵ル此時鹿兒島ヨリ新兵矢部ニ着スト雖トモ飯田山ノ要地官兵ノ有トナリ此地ニ達スル能ハス故ニ我本營五中隊ノ兵ヲ發シテ飯田山ニ向カハシム我隊正面ノ先鋒タリ一旦之ヲ撃破スト雖トモ官軍ノ援兵我背

後ニ出テ我隊苦戦遂ニ木山ニ退リ今日兩軍死傷相当四月十五日御船進軍敵在ラサルカ故ニ爰ニ拒守翌日侯兵来ヲ戦ヲ挑ム我軍撃テ之ヲ走ラス二十日官軍大率三面ヨリ一時攻撃シ来レリ此兩翼彈藥乏シク遂ニ敗北木山ノ我軍モ不利共ニ矢部ニ合ス是ヨリ隆盛等策ヲ変シ胡麻山ヲ越江代人吉ニ衆ヲ纏ム我隊馬見原ヲ經人々糧ヲ齊ラシ椎葉山ヲ越ヘ江代ニ至ル此時既ニ奇兵十四番中隊ト号ス夫ヨリ奇兵隊ハ豊後地ニ向フニ依テ湯山渡川山陰ヲ經美々津ニ抵ル兩日滯留夫ヨリ疾行三日ニシテ五月十四日竹田ニ抵ル爰ニ於テ大斥侯ヲ大分県下鶴崎ニ出シテ大分ノ敵情ヲ探ル既ニ官軍上陸ノ涯ニシテ僅ニ戦ヲ為シ歸リ報ス翌日官軍竹田ノ近市玉来ノアタリノ江良原ニ来ル我兵迎戦地形險ニシテ戦フニ不便故ニ薄暮竹田ニ退キ城ノ外廓ニ守兵我隊崩岩ヲ守ル奇兵十一番隊八幡山ヲ守ル同廿三日八幡山敗ル廿四日味爽敵忍ンテ我隊ノ守場ニ来リ吶喊我レニ迫ル我隊狼狽殆ント守リ矢セントス其時我半隊長石塚伊太夫分隊長木場休之丞等激戦シテ之ニ死ス大ニ不意ヲ衝カレテ我隊負傷三十余名ニ及翌日又會稽ノ恥ヲ雪カン

ト十一番ト約シ喇叭ノ相図ニ共ニ敵柵ニ乗ラント我隊ニ
 手ニ分配一ツハ本道一ツハ間道ヨリ敵背ニ出ント喇叭ノ
 響ヤ忽チ進ンテ本道ニ抵レハ配兵ニ議論ヲ生シ猶不^{うごかす}叟^{さう}遂
 ニ天明僅ニ敵柵ニ迫ルト雖ハ敵逆茂木ヲ引敵重侵ス可カ
 ラス又退テ旧柵ヲ守ル爾後連戦同二十九日各所我軍不利
 遂ニ竹田ヲ引テ小野市上津小野ニ退ク我隊^(族)旗返シヲ守ル
 此際三重市ヲ進撃シテ夜入テ進ム能ハス又旗返^(族)シヲ守翌
 日官軍旗返ニ襲来我隊ノ左翼山手ニ迫ル防戦甚烈シ両軍
 相距ル僅七八間昼夜激戦我隊益々勇奮旧六月十五日俄然
 味方憤戦ヲ初ム既ニ敵二町許ヲ退ク其時不計モ銃丸ニ当
 リ延岡病院ニ赴キ療養ス夫ヨリ高岡病院ニ送ラレ医師ノ
 免ヲ得一旦帰郷七月十二日雷撃本營ヨリ雷撃六番中隊半
 隊長ニ命セラル荒襲山進撃再度ニ及ヒ勝敗不^{うごかす}叟^{さう}シテ上庄
 内ニ退ク夫ヨリ同二十二日行進隊ノ応援トシテ岩川ニ赴
 ク該地敗北末吉ニ退ク末吉并ニ都ノ城敗レテ三俣ニ引揚
 板屋ヲ經日州清武ニ拒戦又敗レテ宮崎ニ抵ル同所敗レ佐
 土原ニ退キ又敗レテ高鍋ニ抵ル此地ノ敗スルヤ余官兵ニ
 取囲マレ出ル能ハス山間ヲ忍ンテ一旦帰郷其後襲山警視

ニ於テ帰順

鹿児島県襲山郷

久木元直吉

「本田藤左エ門」

明治十年旧二月十四日鹿児島発程旧三月廿六日熊本縣下
 岩井坂交戦ノ際左手ニ銃創ヲ負ヒ于後切斷シ屢病院ヲ転
 セシニヨリ戦状ヲ詳ニセス

右之通形行謹テ上申仕候也

明治十一年四月

鹿児島縣

本田 藤左エ門

「前田稻介」

十年二月十五日第四大隊七番小隊へ編入セラレ鹿児島出
 発大口街道ヲ經テ本月廿二日熊本県下ニ到着直ニ戦爭相
 来翌日未明植木へ出張同所ヨリ木之葉へ出張応援ヲナシ
 午后六時迄激戦味方大勝利銃器彈藥等分捕許多ナリ廿四
 日同所出發山鹿へ出張廿七日未明官軍ヨリ進撃午后二時

迄戰爭終ニ官軍ヲ擊破シ追撃一里余官軍ノ死骸百数十名アリ分捕許多ナリ又山家迄引取二日帰在夫ヨリ岩村へ進撃戰爭一昼夜終ニ味方敗軍トナリ又山鹿へ退陣即日田原へ応援ノ為出張セリ夫ヨリ廿八日余防戦互ニ勝敗有リ其内銃創ヲ負川尻病院へ入院全快之上又出軍旧六月三日庄内ノ内高野ニテ帰隊雷撃六番中隊右小隊出入セラレ庄内ノ内アラソト云所ニテ味方進撃勝敗ナシト雖兵ヲ高野ニ引取夫ヨリ岩川へ進撃戰爭味方敗軍ニ依テ飢肥へ引揚同所之内清武ニテ官軍ヨリ進軍又敗シテ宮崎迄引退ク夫ヨリ亦官軍進撃敗レテ佐土原へ退陣同所ニテ戰爭味方敗軍ニ依テ高鍋迄引揚又官軍進撃之処味方敗軍其折官軍ニ取巻レ間道ヲ經テ帰宅直ニ降伏仕候也

雷撃六番中隊右小隊
分隊長

前田稻介

「細山田重雄」

明治十年二月中旬西郷隆盛等ノ上京に従ヒ一番大隊二番小隊々長川上要一ノ兵士トナリ同十五日鹿児島免足西目

本道ヲ通行同廿一日熊本縣下川尻駅ニ致着翌廿二日各隊同所ヲ発シ午前七時熊本ニ着スルヤ否ヤ開戦トナリ我隊ハ城外段山ノ正面ニ出テ攻撃戦闘争烈シ此時隊長川上深手ヲ負ヒ其他負傷許多ナリ翌廿三日出町口ヲ守ル時ニ我隊三十余名ヲ以テ城後ヲ攻ムルト雖利無シ依テ本隊ニ帰ル同廿六日高瀬表エ出張ス時ニ新納静一我小隊長トナル二十七日午前六時本道ヨリ進軍川ヲ隔テ激戦ス此時篠原国幹村田新八軍令ヲナス我隊ハ半隊ヲ分テ川下ヲ渡リ敵ノ横面ニ突出シ屢戦闘スト雖利ナシ依之篠原退兵ノ令ヲ出セリ依テ午后五時橋本迄引揚タリ時ニ我隊ノ戦死弑名ナリ続ヒテ江倉へ引揚二十八日曉同所ヲ発シ川下へ出張ス即日令ヲ受テ田原坂へ出テ守備ヲナス然ルニ三月三日官軍来襲吉次峠ヲ攻ム我隊外ニ壹小隊出張應援ヲナス翌四日未明又敵ヨリ来ツテ本道ノ左翼山手へ掛リ戦争甚シ時ニ味方憤激抜刀接戦終ニ官軍ヲ破ル敵ノ死骸六十余名味方ハ篠原国幹を初メ我隊ノ死傷三十余名ニ及フ其各隊ノ負傷甚不少タニ及ンテ木留へ引揚其後原倉へ三十余日滞陣セリ其間田原へ應援トシテ交モ出張交戦屢ニシテ

五ニ勝敗アリ或日接戦憤闘大ニ官軍ニ擊破シ敵兵三十余名打取我隊ノ分補銃器彈藥数千発ナリ又数日ニシテ味々取へ出テ應援ヲナス味方利アラス半隊長加世田矢八郎負傷ス其余死傷若干ナリ乃退ヒテ原倉ヲ守ル其后三月十三日頃各隊ノ変制アリ新納静一郎中隊長長谷場清藏小隊長タリ時ニ官軍我守場ヲ犯ス事数回ナリト雖堅ク防戦毎ニ之ヲ退ク其后四月五六日頃官軍原倉ヨリ吉次峠各所へ大挙来攻于時我隊少ク戦ヒ遂ニ敗走三ノ嶽迄退陣セリ此ニ守禦数日ニシテ四月十五日比總軍引揚ノ令アリ午后一時守ヲ撤テ間道ヲ經テ退ク続ヒテ官軍尾撃ス我隊且戦且退キ木山ニ至ル翌二十七日長峯ニ出張台場ヲ築キ防禦ヲナス其間四五日ニシテ官軍各所へ進撃ヲナス我隊ハ長峯本道右翼ニ出テ防戦数刻ニ及ヒ遂に味方敗走ス小隊長長谷場清藏半隊長深川喜納深手ヲ負フ時ニ味方應援ヲナス依又返戦憤撃抜刀接戦大ニ官軍ヲ破ル続ヒテ追撃スル事凡数町ナリ官軍ノ死骸三十余銃器十二三挺ヲ得タリ日夜亦退陣ノ報ヲ得テ各隊順次木山ニ引揚タリ翌日同所上ノ原へ我隊外二三中隊見張ヲ出シ守備ス午后十時官軍ヨリ進

撃暫ク防戦スト雖遂ニ味方ノ敗トナリ守場ヲ引ク官軍尾撃一里余我隊川原坂ノ上ニ集合シ兵員ヲ糾合スルニ死亡許多ナリ翌日矢部ニ至ル即日山手ノ方へ應援トシテ出張ス此時各隊変制アツテ我隊ハ行進ニ番中隊左小隊トナリ新納静一中隊長タリ三日ヲ經テ矢部ヲ引拂ヒ同二十五日尾前へ一泊ス翌日江代へ到着時ニ官軍鹿兒島へ侵入之報ヲ得我隊ハ鹿兒島ニ発向人吉真幸吉田溝辺竹山等へ宿泊シ五月五日鹿兒島川上村へ到着直ニ番兵ヲナス滞陣兩三日ニシテ同所雀ヶ宮へ転陣防戦十日余ニシテ更ニ熊本縣下人吉ノ内頭地口へ出張應援ヲナス是ニ四五日防禦ヲナス然ルニ官軍進撃ノ報聞ヲ得テ又應援トシテ出張ス時ニ味方敗走スルヲ見ルト雖援兵憤戦突入スルヲ以テ遂ニ官軍ヲ破リ本ノ守場ヲ乗取此ニ四五日帶陣又官軍進軍味方敗走人吉迄引揚官軍続ヒテ尾撃ス其翌日味方進撃抜刀接戦二十四名ヲ打取其余銃器彈藥等分捕許多ナリ其翌日亦官軍来襲暫防戦スト雖遂ニ味方敗軍シテ大木場迄退陣セリ此ニ滞留十余日又官軍進撃ナリ我隊ハ左翼ノ山上へ應援ノ為出張セリ時ニ味方一旦敗スト雖我隊ノ應援ニ依

取巻レ遂ニ降伏ス

旧壱番大隊式番小隊

后行進式番中隊左小隊

分隊長

細山田 重雄

『荒田藤五郎』

テ又官軍ヲ擊破セリ是戰ニ半隊長伊藤源五戰死ス其餘負傷若干ナリ翌日本道ノ味方敗軍ニ依テ鹿児島縣下飯野迄引退ク此ニ三十余日滯陣ス其間互ニ防戦ノミ夫ヨリ須木口ヘ進撃大ニ官軍ヲ敗ル然又飯野迄退陣ス然ルニ又官軍進撃暫ク防戦スト雖味方ノ敗軍ニ依テ野尻迄引揚タリ此ニ四五日滯陣其時味方進撃兩日共ニ勝敗アリ夫ヨリ又同所紙屋迄退陣ス此ニ守禦兩三日我隊ハ右翼ノ山手ニ守禦ヲ構フ然ルニ官軍進撃戰爭屢ニシテ本道ノ味方又敗軍ニ依リ我隊ハ高岡ノ内掠ノ原ニ出テ二三日滯陣ス続ヒテ官軍進撃又味方敗走ス此ニオイテ佐土原迄引取同所川下ニ守禦ヲナス此ニテ防戦兩日然ルニ川上ノ味方敗走ニ依テ我隊モ又美々津迄退陣ス六七日退陣屢戰爭スト雖美々津ノ川上ニ在ル味方敗シテ官軍新町ニ突出セリト報知ヲ得テ延岡本道ヨリ退陣スト雖官軍ニ道ヲ遮ラシ左翼ノ山手ヲ伝ツテ延岡ニ達スル事ヲ得タリ同所ニオヒテ暫戰爭味方ノ敗ニヨリ同所ノ内富ヘ引揚守禦ス此時豊後口ノ各隊總引揚トナリ進撃スト雖遂ニ味方ノ敗軍トナリ永江村迄退ケリ続ヒテ官軍ノ攻撃トナリ味方敗軍ノ時官軍ノ為ニ

十年四月八日東襲山出發同九日飯野へ着直ニ十番遊軍隊ニ編入セラレ翌日人吉迄進軍江代ニ着其翌日尾前ニ着夫ヨリ矢部ニ至リ又木山に出張二日帰在武之宮へ出張同所広木村ニオイテ防戦四昼夜ニ当ル其夜十二時木山迄引揚翌日矢部亦人吉之内宮園へ退陣是ニテ常山ニ番中隊右小隊へ変製セラレ旧三月廿七日官軍進撃相手戰爭又味方敗軍ニ依テ竹之川迄退陣夫ヨリ三方尾へ引揚十余日帰留其内官軍進撃味方敗ス依テ人吉迄引取旧四月十九日人吉之内油野へ出張官軍進撃味方敗軍ニ依大木場へ引取旧五月一日官軍進撃戰爭二日終ニ敗軍ト来リ其后紙屋戰爭之折官軍之為ニ取巻レ同月四日帰宅同十四日降伏仕候也

旧十番遊軍隊

本隊長 荒田藤五郎

「島田十七郎」

明治十年三月廿八日襲山ヲ発シ大口ニ赴キ当所ニ於テ第十大隊四番小隊へ編入サレ小隊長神崎某ノ兵士トナリ人吉表へ出軍大瀬ニ出張四日番兵ヲ為ス我隊三十余名ヲ分チ八千代之内藤本へ出張凡二昼夜番兵タリ時ニ味方進撃我隊ハ本道ヨリ攻撃屢戦争大ニ官軍ヲ破リ追撃芟里半余ニシテ八代ニ至ル其后防戦五六日然ルニ官軍進撃大ニ戦ヒ遂ニ味方敗軍トナリ木ノ瀬迄退陣当所ニ在陣両三日又告村へ転陣其時各隊ノ編制ニヨリ我隊ハ鵬翼六番中隊小隊トナリ鎌田清之丞中隊長タリ又佐伯ニ出張三日滞留守禦ス時ニ官軍我隊へ攻来リ激戦甚シ我隊苦戦敗走スト雖返戦憤闘官軍ヲ破リ本ノ守場ヲ奪フ又四五日滞陣ノ后人吉之内右屋敷へ出張四日在陣屢應援タリ其后人吉ノ近傍へ移陣ス時ニ官軍進撃戦争数刻味方拔刀接戦官軍ヲ破ル翌日人吉ニ在ル味方敗軍ノ報ニ依リ兵ヲ大塚ニ引揚滯

留十余日又兵ヲ引揚大口ニ出張ス此ニ在ル事五日屢應援ヲナシ戦争再三互ニ勝敗アリ大口敗軍ノ后湯之尾へ引揚番兵一昼夜続ヒテ吉松へ引取防戦ス夫ヨリ加久藤へ引取四五日防禦官軍進撃味方防戦スト雖支フ能ハス遂ニ敗軍高原ニ退陣ス此ニ守禦五六日又官軍来襲我軍ニ当ル甚烈シ我軍敗シテ庄内ノ内野々三谷迄退陣ス五六日守壘を構エ后高原へ進撃我隊ハ本道ヨリ進ンテ官軍ニ迫ル官軍遂ニ敗シテ隊ヲ乱シ逃走ス官軍百余名ヲ打取銃器彈藥若干ヲ得タリ時ニ官軍返戦我隊ニ当ル勢ヒ甚盛ナリ遂ニ味方敗シテ庄内ニ歸リ両三日防禦又高城ニ退陣一昼夜在陣宮崎ニ引取防守ス然ルニ官軍進撃屢戦争遂ニ味方敗シテ佐土原ニ引取二日滞陣又戦争数刻ニシテ敗軍美々津ニ至ル此ニ在陣八日余リ又官軍攻撃味方敗走ノ時官軍ノ為ニ取巻レ潜ニ帰宅宅直ニ降伏

旧十番大隊四番小隊

后鵬翼六番中隊左小隊

分隊長

島田 十七郎

「小川善太郎」

十月旧二月十二日襲山出発大口へ着第九大隊八番小隊へ編入セラレ同所出軍人吉ヲ経テ八代へ出張小川口ヨリ味方進撃激戦数刻終ニ官軍ヲ破リ追撃妙見山ニ至ル夫ヨリ八代迄進撃味方大勝利后官軍返戦味方敗軍ニ依テ桜馬場迄引揚官軍尚進軍相手其夜来又敗軍ニテ木ノ瀬迄引取数日ニシテ亦八代ノ内小川口へ出張守禦ヲナス帰在四五日旧二月廿九日ニ当ル夫ヨリ又木ノ瀬迄引取又佐伯迄退陣三十日位帰在ノ処官軍進撃相手戦争初官軍ニ破ラルルト雖返戦又官軍ヲ破ル即ノ日引揚夫ヨリ人吉江引帰夫ヨリ大木場へ出張又官軍ノ進撃味方敗軍ニ依テ官軍ヨリ進撃ナリ依テ飯野上江村へ引揚三十日余帰在夫ヨリ野尻蜜柑山迄引取守禦ヲナス又引揚雨ヶ谷ヲ守ル其時又官軍進入戦敗之后同所紙屋迄引取又戦争終ニ敗シ官軍ニ取巻レ旧六月廿四日帰宅直ニ降伏仕

小川善太郎

「高橋源平」

明治十年二月十五日第一大隊三番小隊ニ加入セラレ鹿児島県下ヲ発シ同廿一日熊本県川尻駅ニ到着ス時ニ鎮兵我先鋒ニ砲発シ既ニ開戦ノ状アルヲ聞翌廿二日未明同駅ヲ発シ熊本県下ニ到着スルニ遂ニ戦争トナリ我隊ハ熊本隊後ヨリ攻戦遂ニ段山ヲ乗取ル連戦三昼夜我隊ノ死傷数名ナリ同廿七日暮高瀬ニ進軍我隊其他三四小隊憤激接戦大ニ官軍ヲ破ル依之官軍本營及米庫等ヲ放火シテ逃走ス時ニ我隊ノ死傷若干ナリ続ヒテ官軍ヲ尾撃スル事半里計其時官軍返戦我軍ヲ悩マスト雖味方ノ応接ニ依リ官軍ヲ退ク其時官軍死骸余ヨタアリ又銃器許多ヲ得タリ時ニ官軍取テ返シ我軍ニ当ル甚烈シ故ニ我隊ノ死傷ヲ揚ルニ暇ナク退ヒテ飯倉ニ至リ宿陣ス同廿八日未明我隊高瀬之内ニ出張スルニ敵ノ進撃スルニ会ス暫ク防戦夫ヨリ原倉ニ退キ番兵ス是ニ留ル凡一週敵来リ攻ム接戦已ニ正午ニ及フ時篠原村田一小隊ヲ率ヒ来援ス我兵憤戦官軍ヲ破ルト雖又返戦我軍ニ迫ルニ依リ原倉ニ退ク午后三時頃我背面ヨリ来攻ス我軍大ニ潰走ス死傷若干ニシテ吉次峠ニ退ク

官軍追撃來り攻ム夜ニ及ンテ戦止ム廿八日四小隊熊本ヨリ來援ス我諸軍勢ヲ得テ進撃ス我隊ハ砲隊ト合シ正面ヨリ拔刀進撃大ニ戦フ官軍抗キ兼遂ニ敗走ス我軍追撃原倉ニ至ル昼夜連戦官軍ノ死傷數シレス我隊將篠原國幹戦死ス其他死傷甚少カラス我隊ノ死傷七十余名ニ及ヘリ同十三日那智山進軍ニ依リ我半隊応援トナリ那智山ノ左翼ヨリ進ニテ奮戦スト雖利アラヌ又原倉ニ帰ル時ニ我隊ノ死傷六名ナリ、同十七日官軍未明ヨリ來り攻ム我軍山手ノ一方破ル、ニヨリ官軍我背面ヲ衝ントス我軍退ヒテ吉次峠ヲ守ル同廿四日未明ヨリ官軍大挙來り攻ム我軍間道ヲ經テ官軍ノ横ニ突出シ拔刀接戦大ニ官軍ヲ破ル銃四十余挺彈藥五万余ヲ分捕ス其日官軍再ヒ我軍ヲ來犯ス然リト雖我兵前策ヲ用ヒ間道ヨリ進ミ横撃之ヲ走ラス我隊ノ死傷六名ナリ于時我隊ノ殘兵纔ニ三十六名ナリ同廿七日頃官軍又大挙吉次峠ヲ攻ム我兵殊死激戦ス時二人吉隊ノ守場ヲ撃破シ左右ヨリ狹撃スルニ会フ故ニ我兵止ヲ得ス木留街道ヲ退ク官軍尾撃ス其時我軍辺田野ヨリ山手ニ引揚タリ翌日午前八時官軍大挙來り襲フニヨリ我軍等シク狙

撃ス官軍抗キ兼遂ニ敗走ス同廿八日頃未明官軍攻撃潛ニ我壘ニ來り詐ツテ味方ト稱ス我兵之ヲ悟リ一同発砲ス即場ニ四五ヲ斃ス官軍復敗走ス銃器彈藥若干ヲ分捕ス我隊死傷五名ナリ暫ニシテ官軍又來り攻ム我兵之ヲ防ク時ニ味方和田某隊來援スルニ依リ我兵直ニ衝撃之ヲ破ル、四月上旬頃官軍來り襲フ我兵援接戦ス其時大迫某隊応援ヲ為ス是ニオヒテ我軍大ニ振フ夫ヨリ連戦敵大砲ヲ以テ我壘攻ム勝敗死傷相当四月十五日川尻ニ在ル我軍敗軍ノ報アリ依之長峯其他各所ニ転シ又矢部ニ至ル此ニ於テ各隊ノ編制ニヨリ我隊ハ行進三番中隊右小隊トナル其后鹿兒島ヘ出張之折銃創ヲ負ヒ帰宅全快之上更ニ帰隊雷撃九番中隊右小隊ヘ加入セラレ財部坂ヘ応援タリ互ニ勝敗アリテ時旧曆六月三日ナリ、同七日味方進撃我隊ハ又応援ヲ為ス味方勝利官軍敗走ス同九日猪ノ子石ヘ我隊二十名ヲ分テ斥候ニ出張セリ味方進撃接戦ス午時ナル頃我本隊応援ニ來レリ午后六時迄防戦スト雖我軍彈藥既ニ乏敷ヲ以止ヲ得ス退陣ス其路甚艱難ナルヲ以直ニ退キ難ク我隊二十名ヲ以殿戦シ漸ク嶮ヲ超ルヲ得雖然我二十名ハ四名

ヲ打レ殘兵ハ官軍ノ為ニ前路ヲ避ラレ本隊ニ会スルヲ得
ス益官軍ニ取巻レ終ニ捕縛セラレ国分在陣山形參軍ノ本
營ニ至リ遂ニ降伏

旧第一大隊三番小隊

后雷擊九番中隊右小隊

分隊長 高橋 源平

「松元勇左衛門」

明治十年二月十四日西郷隆盛等ニ從ヒ第二番大隊九番小
隊ニ編入セラレ小隊長伊集院權右エ門兵士トナリ鹿児島
縣下ヲ発シ同廿一日熊本縣下川尻ニ至ル翌日同所ヲ発シ
直ニ縣下ニ至ル時ニ開戦トナリ我隊ハ日向崎ニ出テ攻戰
一日翌廿三日縣下ヲ発シ木ノ葉ヘ出張即日味方進擊我隊
ハ應援ノ為右翼ヨリ攻撃屢官軍ヲ破リ夜ニ及ンテ植木ニ
引揚翼日熊本ヘ至ル同廿五日迄滞陣廿六日曉更ニ木ノ葉
ヘ出張高瀬ニ進軍即日官軍來襲互ニ砲戰數刻勝敗不決即
夜又植木ニ引取一日滞在又木ノ葉ニ出三日滞在時ニ官軍
進擊味方敗軍ニヨリ田原迄退陣此ニ滞在四日余同所ニ守

壘ヲ構フ時ニ官軍進擊屢戰爭我隊憤激抜刀接戰大ニ官軍
ヲ破リ大勝利ヲ得此時予ハ銃創ヲ負病院ヘ入院旧五月廿
三日鹿児島縣下踊郷ニテ帰隊正義壱番中隊左小隊ヘ加入
セラル大久保ニ守壘ヲ構フノ処官軍進擊屢防戰スト雖遂
ニ味方敗軍高野ニ退陣又官軍進擊又敗走ス時銃創破血ニ
依戰地ニ出ス延岡ノ内永江村ニテ降伏

正義壱番中隊左小隊

分隊長

松元 勇左衛門

「高橋新介」

明治十年四月八日縣庁ノ召募ニヨリ清水ヲ発シ飯野ニ至
リ本營ノ令ニヨリ熊本縣下人吉ニ出張ス当所ニ於テ第十
番大隊八番小隊々長神崎新介兵士トナリ同十二日人吉ヲ
発シ小野口ヘ出張四十余日番兵タリ時ニ官軍進擊味方防
戰三晝夜其翌日遂ニ味方敗シテ御舟ニ退陣ス此ヨリ先各
隊ノ編制ニヨリ我隊ハ鵬翼五番中隊小隊ニ編入セラレ当
所ニ在陣一夜又兵ヲ引テ人吉ノ内戸ノ原ニ出張二週間余

守壘ヲ構ヘテ番兵ヲ為ス又人吉ニ出テ守禦ス翌日官軍進
撃激戦甚シ我隊斥候モ又挑戦味方敗軍ニヨリ大木場ニ退
ク十余日在陣官軍ノ進撃ニヨリ兩日防戦スト雖遂ニ味方
苦戦負傷若干依之鹿兒島縣下飯野ニ退陣セリ一泊又小林
ニ退陣味方再三進撃官軍ヲ破リ飯野ノ内春田村ヲ守ル十
余日留滞防戦昼夜又吉松ニ出張味方進撃勝敗決セス在ル
一週間余又飯野ノ内白鳥ニ出テ兩日戦争翌日味方敗軍同
所ノ内六観音ヘ引退官軍尾撃屢防戦スト雖又撃破セラレ
敗走スルノ時官軍ニ囲マレ本隊ニ達スル能ハス潜ニ山中
ヲ経テ旧六月二日帰宅国分警視分署ニ於テ降伏

鵬翼五番中隊右小隊

分隊長

高橋 新介

「種子田則勝」

十年二月十三日第七大隊六番小隊兵士ニ編入セラレ国分
発足大口街道ヲ経テ熊本縣ニ川尻ヘ到着二日帰留廿二日
未明当地ヲ発シ日向下着談山ノ正面ニ設ケテ戦争終日其

后四五リ過テ白浜ヘ出張帰陣中本營護兵被申付向下二本
木町ヘ三十日余帰在総軍引揚て相人吉ニ至リ本地ニオヒ
テ砲第二番隊ニ編入サレ小隊長トナリ神ノ瀬ヘ出張四五
日守禦ヲナススト雖戦ヲ致サス終ニ病根ヲ生シ人吉病院ヘ
入院続ヒテ帰県夫ヨリ出軍不仕候ニ付戦地之情状全ク相
不知申候也

鹿兒島県

十一年二月

第六拾大区小廿七区

種子田則勝

「野村源右エ門」

明治十年二月西郷隆盛等ノ上京ニ從ヒ武番大隊六番小隊
隊長林一郎給養トナリ同十四日国分発足加治木ヘ到着本
營別府晋介随行シテ大口街道ヲ経テ同十八日熊本県下日
奈久ニ至ル翌十九日同所出發小川ニ着スルノ途中豈圖ラ
ン熊本県下兵火ノ為ニ焼失スルヲ聞此ニオヒテ衆大ニ驚
キ始テ開戦ノ状ヲ知ル依之各隊守備ニ成事甚嚴重ナリ翌
廿日川尻駅ニ到着即夜鎮台ノ兵川尻ノ近傍ニ来リ我二番

大隊九番小隊ノ巡兵ニ出会シ忽チ砲撃ス雖然味方ノ巡兵ハ未砲発ノ令ヲ受サルヲ以テ只鎮兵ヲ捕ヘ銃器彈藥ヲ奪フノミ廿一日滯留其翌廿二日未明同駅ヲ発シ午前七時熊本ニ着スルヤ否ヤ戰爭トナリ我隊ハ花岡山ヲ越エテ段山ノ正面ニ出テ攻戰甚烈シ夜ニ入兵ヲ引揚戸坂村ニ宿陣ス其日我隊ノ戰死老名分隊長市成弥助銃創ヲ負其余負傷五六名翌廿三日未明城後ニ出テ終日攻戰スト雖勝敗ナシ當日我隊ノ負傷三名其夜又戸坂ニ引揚翌廿四日二本樹町ニ輾陣此ニ在陣三四日其間番兵タリ廿七八日頃同所ヲ発シ白浜ニ出張シ海陸ヲ守禦ス在陣凡ソ廿日余然ルニ木留本營ノ令ニヨリ田原ヘ出張シ応援ヲナス然ニ滯陣三四日其時本道ノ砲聲甚烈敷忽我隊ノ後面ニ當ツテ砲聲尚盛ンニシテ味方動揺スルヲ見ル暫クニシテ各隊引揚ノ報ニ依リ我隊ハ問道ヨリミドリ町ヲ經テ鳥ノ巢ヨリ鹿ノ子木ヘ出テ四五日滯陣其間鳥ノ巢ヘ出張壘ヲ築キ守禦ヲ構ヘ又鹿ノ子木ヘ出テ宿陣其時我隊半隊ハ木留分隊ハ植木ニ出張各壘ヲ築キ防戰十余日ニシテ四月十五日比各隊引揚ノ令ニヨリ鹿ノ子木ニテ隊ヲ合せ即日木留ニ着翌日又馬場楠

村ヘ輾陣兩日滯留十九日頃又上辛川村ヘ出張即日壘ヲ築キ未終ハラサルニ我官軍ノ斥候七八名我台場ニ近ク其間数十歩ナリ我隊直ニ砲發三名を斃ス続ヒテ拔刀追撃二名ヲ打取ル其時分捕銃器七挺彈藥數百發ナリ暫クニシテ官兵大砲ヲ發シ我台場ヲ打事數十發ナリ即夜十二時頃又退陣ノ令ニ依リ午前三時頃同所出發矢部ニ至ル又田尾野ニ出張兩日滯陣ナリ于時旧曆三月十一日ナリ其夜十二時又退兵ノ令有ツテ午前三時頃同所出發馬見原胡摩山等ヲ經テ江代ニ着ス此二十余日滯陣其間各隊ノ編製に依リ我隊ハ正義四番中隊左小隊トナリ林一郎中隊長タリ又同所ヲ發シ人吉ニ至リ辺見十郎太ノ指揮ニ依リ其翌日人吉ヲ發行シテ田野ニ着ス然ルニ官軍大口ヘ侵入ノ報ニ依リ各隊ノ軍配一決シ我隊ハ大口方面ヘ進軍トナリ其翌日發足シテ大口ノ内木ノ内ヘ着ス即日守禦ヲ構フ午后三時青山ノ本營ヨリ急報來リ明曉總進撃ノ令ヲ達セリ其夜高隈岡ノ山上ヘ番兵ヲ出シ翌日午前六時各軍進ニテ官軍ニ相當ル我隊ハ牛尾村ヲ經テ右翼ノ山上ニ攻撃激戰ス數刻ニシテ本道ノ味方憤激突戰遂ニ官軍ヲ破ル我隊モ亦山上ノ敵ヲ破

ツテ追撃山野ノ内石小路ニ至ル其時我隊ノ戦死名手負
 二三名ナリ即日ノ分捕雑品数十駄ニ及フ夜ニ入ツテ当所
 ニ宿陣ス翌日午前七時又進撃大ニ官軍ヲ破リ尾撃数里遂
 ニ水俣ノ内深川ニ至ル此ニテ官軍止戦ス味方モ又本道且
 左右翼ニ守場ヲ構ヘ激戦数ヶ所ナリ我隊ハ左翼ノ丘上ニ
 登ツテ應援ヲナス午后四時頃我四番中隊行進十一番中隊
 ト谷川ヲ渡リ敵ノ横面ニ出テ屢官軍ヲ悩マス依之官軍防
 キ兼大半引退ケリ然ルニ我後面ニ当リ忽チ砲聲烈シク聞
 ヘテ我隊ニ迫ル依之俄ニ守場ヲ構ヘテ憤戦スルニ官軍尚
 迫ル其間纔ニ数歩ニ過ス時ニ我隊ノ死傷七八名ナリ時既
 ニ暮ニ及ンテ共ニ戦ヲ止ム我隊ハ又谷川ヲ渡リ本ノ守場
 ニ帰ル此ニ滞陣三四日ニシテ右翼ニ出塁ヲ築キ一日防禦
 ス其翌日官軍久木野ニ進軍スルニ依リ又該地ニ赴ク其翌
 日総進撃我隊ハ本道ノ左翼山上ニ出ツ其時官軍上木場ニ
 アリ数塁ヲ築キ我軍ヲ防ク依之右翼ノ味方山上ヨリ進ン
 テ奮闘頻ニ逼ル午后一時頃官軍防キ兼遂ニ塁ヲ撤テ逃走
 ス味方等シク起ツテ尾撃数町ナリ我隊ハ本道ヲ進ミ塁ヲ
 奪フテ防戦ス其時官軍ノ死骸十余名アリ味方モ又死傷数

名ナリ此ニ防戦四五日或日未明右翼ノ山嶺ヘ官軍潜ニ来
 襲味方ノ不意ヲ打テ大ニ激戦スト雖味方要害ニ依リ防戦
 スルヲ以テ官軍利アラス遂ニ退ケリ二三日ヲ経テ官軍大
 挙又山嶺ヲ傳フテ攻撃甚急ナリ味方暫ノ防戦スト雖衆寡
 敵シ難ク終ニ敗軍トナリ数町引退ケリ此ニオヒテ我隊モ
 本道ヲ守ル事能ハス三町余兵ヲ引テ又防戦ヲ為ス其時本
 營辺見十郎太乱軍ヲ集メ自カラ進ム其驍勇ニ励マサレ各
 隊返戦奮闘大ニ官軍ヲ破リ始ノ所塁ヲ乗取ル官軍ノ死骸
 三十四五名アリ我隊ノ負傷六七名ナリ又四五日防戦ス或
 夜半官軍ノ各隊卒等に虚発ヲ放ツテ我軍ヲ驚カス其後二
 三日ヲ経テ官軍ヨリ進撃闘争数刻或ハ退キ或ハ進ミ午后
 四時頃ニ至リ逐ニ味方敗走官軍尾撃数町ニ及フ我隊ハ久
 木野ニ出テ又祝小路ニ至リ宿陣ス翌日塁ヲ築キ守禦二日
 然ルニ水俣本道石坂ノ戦ヒ味方敗軍ノ報ニヨリ我隊半隊
 ヲ分ツテ忽チニ該地ニ出張スト雖戦止ムニヨリ宿陣ス翌
 日仁礼新左エ門ノ指揮ニヨリ塁ヲ築キ守防ヲ構フノ処官
 軍亥ノ嶽ヨリ大挙襲来各隊ノ塁ヲ突ク我隊ハ大境ヲ守ツ
 テ接戦奮闘数刻ニ及フ時ニ官軍我隊ノ横面ニ突出シテ烈

シク攻撃ス且左翼ニ有ル味方敗シテ官軍我後面ニ出ルニ依リ守ヲ撤テ退キ且戦ヒ漸ク味方ニ達スルヲ得時ニ味方本道ニ止戦大ニ振フ又祝小路ニアル味方来ツテ横撃シ屢官軍ヲ追撃ス暫ニシテ又官軍返戦接刀接戦各隊ニ迫ルニ依リ遂ニ味方ノ敗軍トナリ山野迄引揚タリ時ニ我隊ノ負傷十余名ナリ翌日石小路ニ守禦ヲ構ス滞陣一週位ニシテ官軍進撃我壘ニ迫ル午前六時ヨリ午后四時頃ニ至ル迄接戦甚烈シ其時辺見来ツテ自ラ指揮シ大ニ衆ヲ励マス我小隊長前田弥一郎手ヲ負其余死傷十余名ナリ時ニ本道ノ味方撃破セラレ敗走スルニ依リ我隊モ又退ヒテ大口ノ内木ノ内ニ至リ又本道ニ出テ返戦ス其時官軍川ヲ隔テ我隊ヲ横撃ス依之我隊川ヲ渡リ進撃直チニ抜刀接戦大ニ官軍ヲ破リ追撃五六町生捕壱名五六名ヲ斃ス銃器彈藥許多ヲ分捕ス其他生捕十余名分捕許多各隊ニ得タリ我隊ハ辺見ノ指揮ニ依リ郡山村ニ守壘ヲ構フ于時旧曆五月三四月ナリ其時官軍大砲ヲ発シ三方ヨリ我軍ヲ打事終日ナリ同十日未明官軍両ヲ犯シ我隊ノ右翼高隈山ニ在ル熊本隊ノ守場ヲ攻撃シ烈戦数刻官軍尚迫リ遂ニ熊本隊ヲ破ツテ追撃ス

我隊モ又兵ヲ引大口ニ至ル味方ノ諸軍散乱守備不全此ニ於テ辺見十郎太雷激敗兵ヲ励マス衆ニ先ツテ進ム我隊ハ半隊ヲ分ツテ本道ヨリ進ミ直チニ抜刀官軍ニ迫ル忽三名ヲ斃シ尚進ム事八町余雖然右翼ノ味方未進マサルヲ以テ暫止戦ス其時両足ニ銃創ヲ負則清水病院ニ入院シ其間十余日ニシテ官軍我國分ニ進入ニヨリ暫ク難ヲ避ケテ山中へ潜居シ其后旧六月廿四日頃遂ニ降伏仕此也

旧式番大隊六番小队

后正義四番中队左小队

半隊長

野村源右工門

「坂本敬介」

維時明治十年二月西郷隆盛等政府エ諮問ノ事件有之随行スル者衆多既ニ出京ノ際ニ當リ第七大隊壱番小队ノ隊長ニ編入トナリ同月十四日第十二時期シ壱番六番九番拾壱番小队相共ニ郷里ヲ発程午後四時比加治木郷ニ到着則之ヲ本営ニ報ス別府某戒曰此事件ヤ途上聊カ輕拳動揺

莫ル可シ同十五日第六大隊ヲ合シ連隊トナリ午前六時加
 治木ヲ一途ニ出発シテ横川本道ニ赴テ第七大隊之儀ハ児
 玉某ノ指揮ニ従フ也同廿日熊本縣川尻駅ニ到着未前ヨリ
 熊本市街放火アリ烟煙空ヲ蔽ヒ瞬間焦土ノ景況ヲ瞻望ス
 同廿一日台兵ヲ押出暗ニ乗テ我ヲ襲撃是ヨリテ戦端ノ基
 ニ至ト云フ翌廿二日進軍ノ令有午前三時川尻駅ヲ伝発疾
 行我先ニト超過而進ム時ヲ移サス城ニ薄リ攻撃烈數砲声
 天地ニ響轟シ死士憤戦時刻ヲ過ルト雖城壘堅壁ニシテ陷
 ル能ハス午後四時比兵ヲ収メテ高麗門趾ニ寨ヲ起テ守ル
 同廿三日早天県庁ノ一方ニ進突攻戦須臾終ニ破ル克ハサ
 ルヲ察テ舊寨ニ還ル此固守スル旬余旧二月廿五日新曆月日の
詳ナラス
 城ノ外郭段山ニ進入四小隊余ヲ以相持ス此地ヤ甚不要地
 ニシテ糧食彈藥等ハ日ヲ忍ヒ夜ヲ以傳ヒ城上ヨリ大小銃
 ヲ俯射スル飛丸兩注ノ如防禦連戦迭ニ死傷アリ実ニ持久
 スルニ艱ムしばしば屢官軍進撃ヲ促シ二十八日午後三時比城中
 ヨリ突出我軍ノ背後ニ逼リ奮戦暫時ニシテ味方潰走ス此
 時ニ至リ死傷又多シ我隊ハ近傍ノ島崎村ニ於テ潰兵ヲ纏
 メ此ニ戍兵ス幾ナラスシテ日奈久海中ニ候艦出沒スルノ

飛報到来依テ速ニ兵ヲ出テ海岸防禦ナス可キノ令ヲ受三
 月一日我一小隊外ニ黒江豊彦中摩某ノ二小隊ト合シ間日
 ニ熊本ヲ発シ翌二日黄昏比日奈久駅ニ抵リ市街稍騒然タ
 リ即チ一商人ヲ招キ頃日軍艦港入スルヤ否ヲ問フ五日以
 前洋中往復スルニ見而已ト云フ依之戍兵ヲ置交番スル三
 四日豈図軍艦七隻夜ニ乗テ入港未明ニ上陸天明ヲ以來撃
 スルノ形勢ヲ告ク直ニ出張之ヲ目撃スルニ果テ然リ遂ニ
 配兵シ提ニ伏シ或ハ山ニ登セ防戦ス艦ヨリ礮彈ヲ発シ官
 軍衆多ニシテ一瞬ノ内ニ迫ル衆寡敵セサルハ実ニ此ノ時
 也味方ノ兵ヲ山手ニ揚ケ八代本道ニ赴ント欲彼ノ八代口
 ハ官兵最上陸道路梗テ不通ノ急報アリ故ニ山手ノ間道ニ
 依リ小川駅ニ出タリ即チ戦象ヲ窺ヒ宮之原ノ敵ニ当リ奮
 戦數々終ニ勝利ヲ得テ追撃ス又ハ追踏セラレ互ニ勝敗決
 シ後ニ官軍大挙シテ宮ノ原小川等ノ両所大ニ戦フ味方利
 アラスシテ兵ヲ松橋ニ退ク諸処ノ要地ニ拠テ之ヲ邀撃連
 戦勝敗死傷迭ニコレアリ官軍松橋之本道ヨリ進軍味方要
 処ヲ敗ラレテ惣軍ヲ川尻ニ引退翌黎明ニ官軍ヲ宇都ニ襲
 フ之ヲ破ラスシテ退軍ス緑川ノ塘堤ニ寨ヲ置宇都ノ官兵

諸処ニ分配スルト聞テ我兵緑川ノ上流ニ守ヲ移シ川ヲ夾
テ中摩定助隊ト相守同廿三日比宇都ノ敵ヲ進撃勝ヲ得ス
シテ舊寨ニ還ル同廿六日官兵進撃ヲ催シ犬塚ニ有ル熊本
兵ヲ襲テ一面ニ仰射ス我カ半隊ヲ以援軍スト雖早陷テ及
ハス官軍勢熾ニシテ川ノ浅深ヲ問ハス鼓躁テ等ク渡ル我
兵復支エ難シ止ヲ得スシテ中之瀬迄退軍川ノ塘ニ從ヒ寨
ヲ築キ或ハ橋ヲ落テ扼守同廿九日川尻方面及ヒ木辺ノ渡
等皆敗ラル所トナリ官軍向背ヨリ攻撃ニ至テ御舟之道
路全ク梗ル御舟ノ味方接戦砲声烈ヲナス我軍所在ノ戦無
利ニシテ山鹿植木等ニ至リ総軍ヲ木山ニ引揚可キノ報ヲ
得同日暮方ニ木山ニ到ル市街戸主ナル者一人モアラス一
タノ糧食等ニ甚苦ム我兵八木山ヲ距ル里許田原村ニ守ヲ
置同三月五日比我兵一小隊長野某隊ヲ合シ大津口ノ戦ニ
援軍ス兵ヲ官道ノ傍ニ伏セテ相持ス石川某カ兵固ヨリ此
ニ守ル夜半ニ至リ総軍ヲ収テ矢部ニ退陣ス可キノ令ヲ受
守ヲ撤テ矢部ニ引是ニ於テ我兵ハ奇兵二十壱番小隊ト改
称アリ淹留スル三日余矢部ヲ距ル三里許ニシテ駒返シノ
間道ニ出張兩三日ヲ歷適馬見原ニ退陣ス可キノ飛報夜半

ニ來リ夜ヲ日ニ繼キ馬見原ニ出ル事ヲ得相尋テ胡摩山越
ノ嶮阪ヲ経同十四日比人吉ノ湯山ニ到着セリ此ニ次ル一
週間ヲ過ク是ヨリ奇兵大隊惣軍ヲシテ日向地ニ向フトノ
令ヲ傳エ我兵モ從行シ同廿六日富高新町ニ次ス四月二日
延岡ニ着陣此時堀國治我隊ノ監軍トナリ海岸守防ヲ方財
村ニ設ケ我一小隊等ヲ以更守スル句余專ヲ延岡ノ不虞ニ
備ト云然ル処三田井口ヨリ苦戦ノ報ヲ告援軍トシテ同十
五日三田井口大楠村ニ操出固ヨリノ守兵三中隊ニ過ス同
村ノ土田地徑請知ナル者ヲシテ山間ノ險岨官兵多寡ヲ探
偵セシム土夫曰是ヨリ三田井口ヲ距ル事三里余敵多カラ
ス然ト雖確證ヲ得ス本道ハ勿論山間ノ險要ニ拠リ相守ル
互ニ斥候ヲ出テ虚実ヲ窺ヒ或日官軍ノ斥候ニ出逢ヒ砲撃
ス官兵不抗テ逃走ス屢斥候ヲ出テ迎撃セント欲トモ終ニ
果タス五月上旬豊後ニ在ル味方連日ノ戦利アラス官軍勢
ヲ振ヒ重岡赤松嶺ノ要害ヲ拔キ兵威益々恢張スルノ報知
飛來依テ此ノ守ヲ佐土原等ノ各隊ニ譲リ小濱某隊ト同行
シテ五月十一日延岡ニ到ル一日休ス是ニ於テ執印甚介隊
ト合併一中隊トナス堀國治中隊長トナリ翌十二日午前六

時延岡ヲ発シテ豊後地ニ向フ熊田駅二次ス十四日午後三時兵ヲ整各隊ヲ四方ニ配兵シ官軍ノ処ヲ衝ノ策略ナリト我兵ハ小濱某益田某等ノ隊ト俱ニ夜ニ乘シ赤松ノ間道ヲ潜行ス翌日午前七時ヲ期シ切込谷ヨリ進軍陣ヶ塚ニ進突頃刻ノ間ニ数ヶ所ノ寨ヲ乘取り重岡傍近迄迫リ大勝利ヲ得テ勢頗ル愉快午後四時比雨霧野ヲ蔽テ咫尺ヲ弁セス官軍援兵踵キ来リ險ニ掘テ乱射ス我軍彈藥殆竭之稍逡巡ノ色アリ殊ニ月ハ三竿ニ傾キ何ノ処ニ掘テ守防ストモ便ナキ議ヲ決シ兵ヲ鎧ニ引退ク明日官軍近ク寄来互ニ防禦ス

廿三日^{ひそか}窃ニ守ヲ撤テ赤松嶺ニ引退重柵ヲ結ヒ甚敵ニシテ容易ニ攻難シ数々斥候ヲ出景況ヲ窺ト雖山岩險峻ニシテ進撃スルニ難シ六月十四日曉天亦切込谷ヨリ進軍終日戦鬪勝敗決セズ暮ニ及鎧ニ退キ寨ヲ築キ敵ニシテ相持スル事茲ニ久シ七月六日比諸処ノ官軍延岡地ニ進入原野ニ填咽^{くんと}没道ニ絡繹タリ其勢実ニ支エ難シ味方十ノ七八圍繞セラレ日々阻喪^{そくさう}シ苦戦甘カラス豊後方面ノ兵ヲ収メテ延岡ノ官兵ヲ進撃ス可キノ急報アリ其暮方ニ守兵ヲ揚テ熊田ノ本營ニ集合スニ於テ飯ヲ傳ヒ直ニ延岡ニ向フ翌七

日第八時比着陣本營ニ到リ進軍ノ令ヲ受テ迅速佐敷野ニ進軍戦鬪スル事時ヲ移ス午後四時比味方敗績此ノ時ニ至リ銃創ヲ受テ長井村ニ引入療養ス同九日第一旅団ニ降ヲ乞テ帰順ス八月上浣ニ至リ延岡臨事支病院ニ送ラル也

鹿児島県管下大隅国噲嗹郡

第六十大区五小区国分郷

坂本敬介

明治十一年

寅四月

「久木田孝兵衛

菊野健助」

戦地之形状

今般中原直雄等陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺セント為ルノ儀ニ付隆盛等上京旧兵隊随行ニヨリ我等二名第二ノ六番小隊ニ編入セラレ二月十四日出発同廿日熊本県川尻駅ニ

到着セシ処熊本鎮台ニ於テハ城下ヲ焼払ヒ防戦ノ用意ヲ
ナシ川尻駅迄其斥候隊寄来リテ我九番小隊ニ発炮スルニ
依テ応炮セシテ台兵伍長某ヲ生捕此由ヲ川尻ニ報知セ
シニ我本営ヨリ戦装ヲ為サシメ翌廿一日滞陣廿三日午前
第三時ヨリ熊本城ヲ攻ントテ別府晋介ニ大隊ヲ率ヒ川尻
ヲ発向ス晋介曰各小隊ヲ以テ城ノ前後ニ配布シ五発ヲ限
リ伐込ノ令ヲ下ス我六番小隊ハ花岡山ヲ乗越ヘ城ノ背面
ヨリ進入セント攻撃スレトモ城壘堅フシテ校事能ハス遂
ニ晩ニ至テ隣村ヘ^{村名不詳}引揚廿三日未明ヨリ攻戦スレトモ
不破廿四日午前七時ヨリ序下ヘ進入シテ番兵ヲ張ル廿六
日白浜ヘ軍艦来テ炮発スルノ報知アリ午後五時ヨリ白浜
ヘ発向ス茲ニ於テ軍艦ヨリ発炮シ端船ヨリ上陸セントス
ル事数度ナリト雖トモ海岸防禦嚴ナルカ故上陸スルヲ得
ス三月十七日頃田原坂ヘ応援シ交戦スル三日ニシテ勝敗
分ラス同廿日比引揚ノ報知アリ御馬下迄引揚廿一日鳥ノ
巢ニ赴キ番兵ス同廿九日比城兵突出ノ懸念アリ之レカ為
メ出町街道エ台築キ転守ス四月二日比鳥ノ巢ニアル味方
苦戦終ニ敗走シタルニヨリ馳テ応援シ奮激進撃官軍遂ニ

不利シテ退散ス機ニ乗シ追撃シテ鳥ノ巢ニ至リ戦ヲ交ル
事二昼夜ニシテ勝敗不分五日比植木エ援軍シ戦^{たげなわ}酣ニシ
テ川尻敗軍ノ報知アリ下辛川ヘ転陣セシ処官軍斥候隊ヲ
以テ候^{うかが}フニヨリ直ニ台場ヲ構ヘ交戦シ勝敗不分十日比
御船口敗軍ノ報アリ矢部馬見原ヲ經テ求磨郡湯之前ニ引
揚、^{此時隊号編製アリテ正義四番中隊トナル}休隊ス五月一日比山野街道江味方戦
備ナキヲ以官軍大口郷迄進入ス邊見十郎太六中隊及熊本
隊ヲ指揮シ防戦ノ為メニ進発ス其翌日曉霧ニ乗シ邊見令
ヲ伝ヘ三面ヨリ進撃ス午前六時ヨリ十二時ニ至頗ル苦戦
大ヒニ劇^マ戦シ終ニ官軍動揺忽チ衝其中堅依テ官軍本営ヲ
揚ルニ暇ナク散乱シタリ此時銃器彈藥許多ノ分捕アリ、
翌二日未明ヨリ追撃毎戦大勝大ヒニ追跡シテ水俣ニ至リ
深川ニ宿陣ス其翌日官軍襲来戦フ事四昼夜ニシテ勝敗不
分故ニ官軍道ヲ久木野転シ進入ス於茲三中隊ヲ遣リ餘兵
ハ^{矢張深川ハヲ堅守ス}戦ヲ交ル事三昼夜ニシテ終ニ大勝ヲ得台場八
九ヲ乗取り守兵スル一周間其後官軍襲来戦ヒ不利シテ半
里位引退茲於テ逆撃戦終ニ大勝ヲ得テ旧壘ヲ後シテ守
兵ス然処大境ノ味方敗レテ援ヲ乞フニ依リ速ニ発向シ

縦横ヨリ等ク狹撃ス依之官軍僻易猪ノ嶽ニ走ル其翌日官軍襲来防戦ノ最中彈藥尽キ県内山野郷迄退陣ス其翌日官軍復襲来防戦甚タ勤ムト雖トモ遂ニ彈竭キ大口郷ニ引揚シ処官軍機ニ乗シ追撃シタルニヨリ大口川原ニ於テ取テ返シ戦フタリ官軍大小炮ヲ雨注スルニ邊見眼ヲ怒ラシ衆ヲ督シテ先登衆拔刀挺前敢テ後ル者ナシ直ニ敵中ニ駆込奮闘ス官軍其勢ヒニ駆立ラレ右往左往ニ散乱ス此時銃器彈藥軍馬等ヲ分捕ス故ニ郡山村草木原ヘ塁ヲ構ヘ戍兵ス其後官軍進入交戦スレトモ彈乏ク湯之尾郷迄引揚ル此時孝兵衛隊長トナリハ半隊長トナリ本道ヘ塁ヲ築キ戍兵スル五日戦フ事一日ニシテ勝敗不決テ時本城郷ノ味方敗軍ノ報アリ半里バカリ退ク爰ニ於ヒテ戦争一日半彈藥竭キタルニ依リ横川郷ニ退キ暫ラク防戦踊郷ヘ退軍シ塁ヲ構ヘ防戦ノ用意ヲナセシ処国分郷ノ味方敗軍ノ報知アリ背後ヲ絶レン事ヲ恐レテ襲山郷大久保ニ引揚休兵ス其翌日我軍侵晨大ヒニ進撃奮戦官軍支ル能ハスシテ終ニ潰乱機ニ乗シ大ヒニ追撃シテ彈藥等ヲ許多分捕ス然処同所豊後坂ノ味方敗軍ニテ財部郷之内桐原迄引揚其翌日曉天味方ヨリ進撃スレトモ敗勝

分ラズ故ニ旧台ヘ引揚戍兵ス其後莊内郷ノ内陣ケ平ヘ転陣彈藥尽キ飯二鉄玉ヲ以テスト雖トモ其玉輕フシテ常ニ利アラズ都之城山之口郷等ヲ經テ肤肥ノ清嶽陣ス茲ニテ戦争スル事一日互ニ勝敗アリ又彈藥竭キ宮崎佐土原等ヲ經テ美々津迄引退キ茲ニ於テ我軍糧乏ク進退窮迫衆必死劇戦スル事一値日爰ニ於テ勢盡力窮テ我軍多ハ官軍ニ降ル

鹿児島県第六拾大区

大隅国贈吟郡国分郷

久木田孝兵衛

菊野 健助

明治十一年三月

「松下助一」

戦地ノ景況

明治十年四月六日警部谷川某ノ達ニ依リ同十日出発十八日日向椎葉山口到着セシ処本營阿多莊五郎ヨリ半隊長申付ラレ遊軍十五番隊トナリ同所日添村ヘ台場ヲ築キ堅

守ス五月十二日比官軍午前八時進軍ニテ交戦スル六時間ニシテ弾乏ク尾八重迄退軍ナリ五月十五日頃湯山へ引揚番兵ス廿日岩野村へ出張其翌廿一日味方ヨリ進撃イタシ勝利ニテ追跡ノ折彈藥尽キ終ニ敗走シテ米良ノ西八重迄退軍台場ヲ構へ番兵ス六月十日頃同所横谷へ味方ヨリ進撃スレトモ勝利不決故右西八重迄引揚戍兵ス同廿四日左半隊上米良へ出張塁ヲ構番兵ス七月二三日頃西八重ニアル味方敗軍ニテ小川迄引退防守ス七月十二三日頃米良ノ小川ニテ千城四番中隊ト編製アリ此時石塚七十郎中隊長トナリ余ハ小隊長ヘ編入セラレタリ同十七八日頃官軍ヨリ進撃スト雖トモ味方防戦劇シク終ニ官軍無利シテ敗走シタリ同廿三日米良ノ高山両提峠ヲ攻撃セントテ阿多莊五郎ノ指令アリニ中隊ハ正面ヨリ進撃シ余カ隊及三中隊ハ間道ヨリ敵ノ背後ニ出テ奮戦シタルニヨリ官軍狼狽ス勢ニ乗シ三ノ台場迄進撃スト雖トモ官軍応援益盛ン終ニ我軍彈尽キ同所越ノ尾迄退軍ノ上同所銀鏡村へ二中隊出張塁ヲ構へ番兵ス八月九日美々津迄引揚ノ報知アルニヨリ退軍ノ途中官軍ニ前後ヲ絶レ彈尽キ糧竭キ進退爰ニ窮ル故ニ山中ノ間道ヨリ帰郷ス

鹿児島県第六大区

大隅国曾志郡国分郷

松下 助一

明治十一年三月

「宮原良助」

戦地之景情

明治十年二月陸軍大将西郷隆盛等中原以下ノ儀ニ付政府へ尋問ノ筋有之近日上京旧兵隊隨行ニヨリ余ハ先鋒第二ノ一番小隊エ編入サレタリ此時押伍中付ラレ同十四日出発廿日熊本県川尻駅ニ到着セシ処熊本城ニ於テハ市街ヲ焼払ヒ防戦ノ用意ヲ為タルニヨリ我隊ヨリモ各所ニ番兵ヲ配布セシニ豈図ンヤ斥候隊寄来リテ九番小隊ニ発砲シタルニ付直チニ駈込台兵伍長ヲ生捕此由ヲ川尻駅ニ報知シタルニヨリ速ニ本營ヨリ戦争ヲ為サシメタリ其翌廿一日滞陣廿二日午前第三時川尻ヲ出発ス城下ノ高麗門跡ヨリ進軍

攻撃ニ及候得共城壘堅固ニシテ城不陥故引退高麗門跡へ
番兵ス其翌廿三日午前八時庁下へ進入攻撃スレトモ勝敗
不分仍て高麗門跡迄引揚戍兵スル句余ニシテ三月九日段
山へ進入堅守ス同十一日午後二時官軍進撃交戦スル二日
ニシテ互ヒニ勝敗アリ翌十二日午後三時比味方無利終ニ
敗走ス島崎村ニ於テ兵ヲ集メテ茲ニ番兵ス同十五日日奈
久沖へ候艦出沒スルノ報知アリ同日熊本出発翌日日奈久
へ着陣則ヨリ海岸防禦ノ為メ守兵兩三日ヲ経候処豈図ン
軍艦七艘夜中着港未明ニ山手ノ嶮ニ伏居候処八代口モ官
兵上陸ノ報知アリ夫故間道ヨリ下川内村ヲ経小川へ出テ
宮ノ原官軍ニ当ル未タ勝敗不分内足痛ニテ川尻へ入院ス
旬余ヲ経テ松橋ノ戦最中帰隊シ暫ク交戦ニテ未タ勝敗不
分ト雖トモ彈藥尽キテ退軍ス四月一日宇土ノ官兵ニ進撃
スレトモ利アラスシテ川尻川迄引退川上高田へ台場ヲ築
キ戍兵ス同六日又々宇土ノ官軍ニ進撃勝敗不分故本ノ高
田台場へ引揚同九日犬塚ニアル味方敗軍ニ付中之瀬迄引
揚台ヲ構へ堅ク相守リ同十二日川尻惣敗軍ニテ木山へ退
ク翌日大津ノ味方ニ声援トシテ出張諸所ノ戦利アラスシ

テ廿一日矢部へ引揚奇兵廿一番小隊トナリ夫レヨリ馬見
原ヲ過キ人吉ノ湯山へ廿七日出ル五月九日日向表富高新
町へ出発ス同十四日延岡へ着陣方財村へ出張交番スル句
余ニシテ同廿七日三田井口大楠村へ繰出ス<sup>此時監事ノ長代理
達ニ付分隊トナリ</sup>
六月廿一日延岡へ引取廿四日未明豊後口赤松嶺伐込谷ヨ
リ陣ヶ塚迄進撃大勝利ニテ数ヶ所ノ台場ヲ乗取夕方二兵
ヲ集メ鎧迄退陣壘ヲ構へ柵ヲ引戍兵迭ヒニ相持ス故ニ味
方ヨリ進軍イタセトモ勝敗不分七月三日官兵台場ヲ引去
ルヲ以テ追帰シテ戍兵ス同廿四日又々伐込谷ヨリ陣ヶ家
迄進軍終日劇戦勝敗ナキ故旧台へ退キ番兵スル事三十有
余日ニシテ八月十四日ノ夜延岡口へ進軍無利シテ永江村
へ退同十八日帰順ス

鹿児島県第六十太区

大隅国喺郡国分郷

宮原 良助

明治十一年三月

「市成弥助」

戦地之形況

明治十年二月西郷隆盛外二名中原等ノ云々ニ付政府エ尋問ノ筋有之不日上京旧兵隊隨行ニヨリ余ハ先鋒第二ノ六番小隊分隊長トナリ区長別府晋介ヨリ申付ラル同十四日出発ス廿日熊本県川尻ノ駅ニ到着セシノ処豈図ン熊本鎮台ニ於テハ台下ノ市街ヲ焼払ヒ已ニ防戦ノ用意ヲ為シタルニヨリ我隊ヨリモ各所ニ番兵ヲ配布セシニ斥候隊寄来リテ我ニ番大隊ノ九番小隊番兵処エ発砲ス然レトモ我隊ヨリ応砲セスシテ直チニ駆込台兵ノ伍長某ヲ生捕外数拾名ハ銃台ヲ以テ打倒スモアリ川ニ追込溺死スルモアリテ散乱スルニヨリ猶追跡ノ処川ノ向岸ナルニ中隊ノ伏兵ハ是勢ヒニ恐怖セシヤ不戦シテ敗走シタリ依テ銃器喇叭等ヲ分捕シ此由ヲ川尻駅ニ報知セシニ我本営ヨリ腕印シヲ渡シ戦装ヲ為サシメニ番大隊ヲ以テ川尻守備ヲ嚴ニシ遂ニ開戦ノ場合ニ立至レリ其翌廿一日官軍高橋ヨリ上陸スルノ報知アリ中島健彦、別府九郎、重久勇七等第二大隊ノ内三四小隊先鋒第一大隊ノ内五小隊ヲ率ヒ防禦ノ為メニ川尻ヲ出発

ス翌廿二日曉第三時熊本城ヲ攻撃セントテ越山休藏第壹番大隊ノ余兵ヲ率ヒ児玉強之介第二番大隊ヲ率ヒ別府晋介之レカ連隊長トナリ発向ス別府令ヲ傳ヘ各小隊ヲ以テ城ノ前後ニ配布シ等シク攻掛ル我六番小隊ハ隊長林一郎ガ指揮ニテ花岡山ヲ乗越ヘ城ノ背面江出テ攻撃スル事午前第六時ヨリ十二時ニ及フト虫トモ守リ固フシテ破レス我隊益奮激シ城中ヘ進入セント劇戦シタリ余ハ此時大砲ノ破烈弾ニテ二瘡ヲ蒙リ傷甚氣絶頃有ヲ蘇故ニ入院シテ療養ス其後ノ情況詳ナラス

鹿児島県第六大区

大隅国曾志郡国分郷

市成 弥助

明治十一年二月

「外山金次郎」

明治十年旧二月廿四日県庁之召募ニヨリ国分ヲ発シ熊

本県人吉ニ至ル当所ニ於テ給養トナリ熊本二本木迄至ル未隊号定ラス旧三月一日川上彦市ニ從ヒ安政橋ノ上流ニ戦フ翌日木山ニ退陣同七日官軍進撃我隊防戦川上戦死ス翌日矢部ニ退陣ス同十三日頃江代ニ引揚ク時ニ各隊ノ編

制ニヨリ我隊ハ正義六番中隊左小隊ト為リ数日滞在鹿児島

島県下坂本ニ出軍旧四月二日鏡山ヘ味方進撃戦争数刻遂

ニ官軍ヲ破リ弾薬式千余ヲ分捕追撃大ニ勝利ヲ得午后二

時又坂本迄引取其后旧五月十五日大楠ヘ出張ス時ニ官軍

進撃味方防戦甚嚴重官軍ヲ破リ銃器若干ヲ得同十八日又

官軍進撃味方防戦官軍退陣戦止ハ我隊ノ負傷四名同廿一

日曉官軍進撃ノ我軍防戦死傷四五名午后二時遂ニ味方ノ

敗軍トナリ荒平迄退陣ス数日ニシテ椿原ヘ出張守塁ヲ構

フ旧六月廿八日頃官軍進撃我軍防戦午后七時ニ及ンテ味

方敗シ塁ヲ撤テ曾木村ヘ退陣ス七月一日頃清水ヘ出張同

三日又官軍来襲屢挑戦スト雖午后三時遇隊ニ味方敗軍ノ

后延岡ニ退陣ス当所ノ城跡ニ出張翌日官軍進撃味方防戦

午前八時味方敗軍富ヘ引退キ旧七月五日味方進撃屢戦争

スト雖又敗走ス永江村ニ至リ同九日猪ノ嶽ニ出張戦争屢

ナリ夫ヨリ官軍ノ固ヲ破リ鹿児島迄ノ間凡六七戦毎戦勝利同廿五日頃一本松ヘ出張同六日頃官軍進撃激戦三昼夜遂ニ味方敗軍トナリ官軍ノ為ニ取巻レ旧八月四日潜ニ帰宅直ニ国分警視分署ニ於テ降伏

正義六番中隊左小隊

半隊長心得

外山金次郎

「徳持幸蔵」

戦地ノ形況

先般西郷陸軍大將外二名政府ヘ尋問ノ為メ上京旧兵隊随
行ニ付不日出発スヘキ旨別府晋介達ニ任セ以為ク確乎タ
ル西郷等名儀判然タラスンハ動ク可ラスト是ニ於テ傍觀
スルニ忍ヒス先鋒第二ノ六番小隊ニ編入セラレ隊長林一
郎ニ属シ大隊長児玉強之介ナリ明治十年二月十四日出発
此時別府晋介ヨリ押伍申付ラル同廿日熊本県川尻駅ニ着
豈図ン鎮台ニ於テハ防禦ノ用意ヲ為シ且市街ヲ焼拂ヒ故

ニ我各隊ヨリモ又番兵ヲ諸方ニ設置スルニ台兵ノ斥候隊
我二番大隊九番小隊ニ寄来リ発砲ス然レトモ應スルニ銃
ヲ用ヒス直チニ馳入官ノ伍長某ヲ生捕或ハ銃台ヲ以テ打
伏其餘悉ク退散ノ報知ヲ本營ニ告是以兵端ヲ不開ハアル
ヘカラス速ニ戦装之指令アリ同廿一日滞陣翌廿二日熊本
城ニ進軍午前第三時川尻ヲ出発花岡山ヲ乗越ヘ城ノ背後
ニ廻リ攻撃シテ段山ニ至リ終日劇戦同廿三日午前第六時
頃ニ及ンテ復大小銃ヲ以テ四方ヨリ攻撃スト雖トモ城中
ノ守益嚴ナリ之ニ依テ機ヲ兩陣ニ決スル能ハス同廿四日
午前第七時ヨリ麾下ニ引揚成兵スル三日同廿六日別府晋
介令シテ曰ク白濱ヘ軍艦致来ノ報知ニヨリ第二大隊ノ六
七二小隊ヲ遣スヘシト午後第三^マ字出發彼地ニ着熊本ヨリ
三里餘也七番小隊ハ川内ヲ守リ我六番小隊ハ白濱エ至リ
陸ニハ塁ヲ築キ海岸ニハ伏兵ヲ以テ堅守ス海軍透ヲ候ヒ
上陸セント欲是ニ依テ防禦スルヤ速ニ沖ニ退艦シ砲ヲ川
内ニ放チ民屋ヲ焼失スル廿餘軒是ニ於テ豫シメ火防ヲ設
ケテ而シテ村民ヲ保護シ滞陣スル廿余日三月十七日田原
坂ニ至リ塁ヲ守戦スル三日ニシテ勝敗不分ト雖トモ此

地烈戦アリシ所ニシテ官兵田畝ニ体ヲ併セ死スルモノ拳
テ数フヘカラス是時ニ當ツテ本道甚苦戦終ニ味方敗軍ノ
報知アリ間道ヲ經美登里町ヲ過キ御馬下村ニ至リ形勢ヲ
本營中島ニ告ク係ル所ニ官兵勢ヒニ乘シテ植木向坂ニ追
撃爰ニ於テ余聞ク貴島中嶋等各隊ヲ以テ正面ニ臨ミ劇戦
ス其砲聲ヲ聞ヤ味方ノ應援向坂ニ至リ横撃ノ後抜刀血戦
スルニ官軍破レテ植木ニ走ル或ハ戦死スルモノ数百名然
ルニ我隊及九番小隊鳥ノ巢ニ至リ塁ヲ構ヘ守ル事十餘日
或日本營中島来テ曰是地ヲ隣隊ニ譲リ二小隊共ニ植木街
道ヲ守ルヘキノ令ヲ下ス直チニ彼地ニ至リ徳王村ニ宿陣
ス時ニ双方ノ砲聲恰モ雷ノ如シ中島令シテ曰是植木熊本
ノ中央ニシテ要地ナリ故ニ若シ双方ノ官兵破来ラハ必粉
骨碎身ノ戦ヲ為シテ此地ヲ以テ墳墓ノ地タラサルヲ得ン
ヤ茲ニ於テ奮然トシテ能守リ暫アリテ八代ノ戦危急ノ報
知アリ故ニ九番小隊援兵ニ出ルニヨリ佐土原隊ヲ合シ猶
堅守スル事十余日然ルニ予備ナルヲ以テ又鳥ノ巢ニアル
味方苦戦ノ報知ニヨリ右半隊ヲ應援ニ出スト雖トモ其景
況不詳余ハ左半隊ニテ木留ノ應援ニ抵リ激戦シテ勝敗ヲ

分タス又徳王村ニ帰ル四月上旬頃植木ノ戦危急ニ迫ルト
 報知ノ達ルヤ速ニ至ルニ壘隔僅カ数十歩ニシテ互ニ罵詈
 嘲嘲ノ声甚喧譟劇戦ヲ移ト雖トモ勝敗ヲ分タス嗚呼如何
 セン時ナル哉命ナル哉川尻ノ我軍敗シテ城廓及外廓ノ戦
 線ヲ守ル事ヲ得ス本營ノ報告ニ依テ四月十五日頃午前第
 七時ヨリ下辛川ニ転陣壘ヲ川堤ニ築ク官軍モ亦川向ニ来
 リ高堤ニ台場ヲ築キ頻ニ砲彈ヲ放チ且斥候隊ヲ以テ我壘
 ヲ候フニヨリ之レト戦フテ勝利ヲ得四月中旬頃御船敗軍
 ノ報知ニヨリ午後第三字出発矢部ニ引揚新藤村ニ滞陣二
 日ニシテ又田尾野村ニ移リ壘ヲ構ヘ戍兵ス同下旬比大風
 雨ヲ厭ハス兵士ヲシテ三日ノ糧ヲ齎シ以テ馬見原ヲ過人
 吉湯ノ前村ニ退陣ス茲ニ於テ隊ヲ改メ正義四番中隊トナ
 リ此時林一郎中隊長トナリ大山誠一右小隊長トナリ前田
 矢一左小隊長トナル是ニ休隊スル事十余日豈凶官軍鹿兒
 島県下山野郷ヲ襲フニ因テ進軍ノ報知アリ五月初旬頃大
 口郷木ノ内村ニ進発シ潜カニ山野ノ事情ヲ探偵シ某翌日
 曉霧ニ乗シ邊見十郎太六中隊ヲ率ヒ協同隊ト共ニ進撃ス
 嗚呼盛ルカナ其號令嚴肅ニシテ軍ニ私ナシ士卒ト甘苦ヲ

同シテ齒掠ヲ禁シ戦フ毎ニ先登是ニ於テ薩肥ノ各隊感服
 シ晨ヲ侵シ進撃セントス故ニ隊伍ヲ整ヘ山野ヲ夾ンテ進
 入ノ時官軍要地ニ壘ヲ構ヘ午後四字ニ至ル迄防戦スト雖
 トモ不意ヲ撃レテ動揺ス之レヲ見テ迭ヒニ先ヲ争ヒ進撃
 セシ処輻重ヲ揚ルニ暇アラス散乱シ水俣ニ走故ニ薩兵大
 ニ勝利ヲ得テ山野ニ宿陣ス其翌日水俣ニ迫ラント午前第
 六字ヨリ深川ヘ進軍ノ際官兵本道或ハ南北ノ要害ニ台ヲ
 構ヘ砲発ス邊見其砲聲ヲ聞哉速ニ馬上ヲリ駈来リ大音ニ
 呼ハリ諸方ニ軍配ス之レニヨツテ我隊外三中隊南壁ニ上
 リ戦争スト雖トモ不利ヲ量リ又二手ニ分レテ我隊及行進
 隊溪間ヲ涉リ險山ニ登ツテ横撃ス官軍之レニ悩ンテ引退
 ク官兵又我背後ニ迫ル故ニ進撃拔刀血戦シテ日既ニ西山
 ニ落旦路險ヲ以テ等ク進ム事能ハス相共ニ旧壘ニ引揚戍
 兵ス係ル所ニ深川ノ北丘ニアル味方又苦戦ナリ是故ニ我
 右小隊ヲ出シ激戦スレトモ利アラス終ニ敗レテ兵ヲ深川
 ニ纏ム時ニ我ニ命スルニ右小隊ノ分隊長ヲ以テス五月十
 六日官軍兵ヲ久木野ニ廻ハス是以テ邊見我隊及式中隊ヲ
 率ヒ午後第三時進発彼地ニ着直チニ邊見地利ヲ見軍略ヲ

定メ探偵ヲ出テ虚実ヲ得同十六日午前第七時進撃スト雖
トモ官軍要害ニ依リ防戦シテ銃丸殆ント霰レノ如故ニ進
入スル能ハス対戦ノ際余銃創ヲ蒙リ入院ス仍テ其後ノ情
況不詳

鹿兒島縣大隅国分郷

明治十一年三月

徳持 幸藏

(表紙)

鹿兒島県史料(西南戦争)第二巻より

国分

石塚七十郎

中村源蔵

宮原元右衛門

林 一郎

小原武七

服部喜寿

牧元助太郎

襲山

山田甚右衛門

荒田彦七

服部良之助

最勝寺精一郎

岩切甚太夫

最勝寺半次郎

山内孝左衛門

清水

敷根

萬膳正藏

前原胤二

木佐木平

稻元 静

安田東一

石塚七十郎上申書

私儀

兼テ私学校エハ入校不致候処、明治十年丑四月八日区長ヨリ出発可致旨被相達、隊組仕候節小隊長ト成、半隊長松下助一、分隊長川村金藏、兵士八拾八名引列発足、鹿兒島内尾前賊本営阿多壯五郎エ届出候処、遊軍拾五番隊被申付、向山可相固承知致シ相守居候処、五月廿一日五家口ヨリ午前八時頃官軍襲来戦争致シ候処、賊敗走ニテ午後二時頃尾八重迄引揚候、戦死四名、手負三名有之候、

一五月廿二日ヨリ尾八重エ台場ヲ築キ相守居候処、同月廿九日頃官軍双方ヨリ責奇候向キニテ、早々可引揚旨

報知有之、直様湯山エ引揚候、

一五月三十日ヨリ湯山エ台場ヲ築キ相守居候処、六月十日頃江代相破レ候ニ付岩野エ引揚候様報知即引退申

(水上村)

(水上村)

候、

一六月十一日頃岩野エ官軍相見得候ニ付小隊ニテ午前

(西都市)

八時ヨリ進撃候処、賊敗走ニテ米良西八重迄引揚候、

戦死一名、手負二名有之候、

一六月十二日ヨリ横野エ配兵可致旨承、直様差越六日程

(西米良村)

相守居候処、木浦ト申所エ可差越段申来差越申候、

一六月十八日ヨリ木浦エ台場ヲ築キ十五日程相守居候処

賊本営西八重相守居候処、七月五日頃横谷エ官軍台場

ヲ築キ相固メ居候ニ付、九時頃賊ヨリ進撃候得共勝敗

不相分、本ノ西八重エ引揚矢張相固メ居候処、七月十日頃官軍襲来戦争致シ候処、賊敗走ニテ米良旧城下小

(西米良村)

川迄引退申候、

一七月十一日ヨリ小川相守居候処、干城四番中隊ト改隊

相成候折、中隊長ト成り、右小隊松下助一エ被命、半

隊長前原孫左衛門、分隊長山元當藏、左小隊長乙守宗

雄、半隊長津崎英七ニテ候、

一七月十九日頃小川之内雨包峠^(天)エ官軍台場ヲ築キ相固居

候ニ付、賊八中隊ニテ午前六時頃双方ヨリ進撃候処、

直ニ官軍ヲ追落シ互ニ相戦賊敗走ニテ、右ノ台場ヲ被

守返小川迄引退候処、無間責来及戦争ニ賊敗走ニテ午

後八時頃腰野^(西米良村)エ引退候、

一七月廿日ヨリ腰野^(越野尾)相固メ居候処、同廿三日銀鏡^(西都市)エ差越

相守候様申来リ差越相守居候処、官軍襲来候ニ付、前

非悔悟改心致シ其場ヲ脱、兵士六名召列八月十八日帰

県仕、所分署エ帰順書差出降伏仕候処、自宅謹慎被仰

付罷在候処、分署ヨリ御用ニ付罷出候処、鹿兒島警視

所エ可被差廻段承知仕護送相成候処、檻倉へ入檻相成

候、然処九月一日長崎之様被差廻、十月廿二日同所於

裁判ニ三年懲役ノ命ヲ蒙リ候、此段形行御届申上候、

以上、

國分郷

鹿兒島県下第六拾大区四小区

明治十一年二月

石塚七十郎

宮原元右衛門上申書

昨十年二月十五日^(加治木編成、兒玉強之助隊長)第七番大隊六番小隊兵士ニ編入セラレ

同日出發シ、熊本県下川尻へ同十九日着陣シ、同廿二日

曉天ヨリ熊本城へ攻撃、二日余ニシテ勝敗決セス、夫ヨ

リ^(植木町)田原坂へ進軍シ此処ニテ防戦スル事六日、夫ヨリ鳥栖^(西合志町)

へ応援トシテ至リ大ニ勝利ヲ得ル、又植木ニ於テ防戦十

二三日余ニシテ逐ニ川尻口敗走ニ及ヒ、拾壱繼橋へ引揚

ケ滞陣ノ時キ、官兵ノ斥候兵ト出会セリ、逐ニ四名ヲ斬

ル、夫ヨリ矢部並二人吉へ引揚ケ、此処ニ於テ編制ア

リ、正義四番中隊ト改名セリ、夫ヨリ牛山郷^(大口市)山野へ進撃

ノ処大ニ勝利ヲ得テ深川^(水俣市)迄追ヒ退ケ、同所並ニ久木野^(水俣市)へ

防戦三十余日、時ニ官兵大挙シテ襲来リ遂ニ敵軍ニ及

ヒ、山野へ退キ防戦二日余ニシテ高隈敗走大口へ退キ、

同日抜刀ニテ切込ミ候処大ニ勝利ヲ得テ彈藥並ニ銃器多

数ヲ取ル、夫ヨリ湯ノ尾^(菱刈町)へ退キ防戦ノ時キ、本城敗軍ニ

及ヒ踊並ニ財部・庄内・山ノ口・船引^(牧園町)引揚ケ、此地敗戦

ノ際輕創ヲ被リ、夫ヨリ佐土原、美々津へ退キ、遂ニ延

岡長井村ニ於テ帰順仕候也、
(北川町)

鹿兒島県下國分郷第六大区

四小区六十番地

十一年三月

宮原元右衛門

小原武七上申書

明治十年二月十五日二番大隊九番小隊鹿兒島ヲ発スルヤ
(加治木進発、兒玉強之助大隊長、本田元瑞小隊長)

之レカ嚮導タリ、即チ大口ヲ越ヘ日奈久ニ出テ川尻ニ抵
(八代市)

ル、我聯隊長別府晉介兵ヲ部署シ各所ニ哨兵ヲ張ル、我
(六、七番連合大隊長)

小隊川尻ノ河ニ沿ヒ哨兵に備フ、此日午後八時ノ比ヒ鎮

台ノ先鋒凡一中隊来リ我兵ヲ銃射ス、撃テ之ヲ走ラス、

追撃、戎器ヲ奪ヒ及ヒ伍長一人ヲ擒ス、是ニ於テ台城攻

撃ノ衆議決シ廿二日午前三時ノ比城ヲ囲ム、我小隊城ノ

西北面藤崎八幡祠ノ方面ヨリ進撃ス、城兵砲銃齊ク目下

ニ乱射ス、我兵仰射頗ル苦ミ連戦三昼夜即チ別隊ト代
(玉名町)

リ、二本樹ニ休兵ス、廿六日高瀬ニ赴ク、官軍高瀬河ヲ
(玉東町)

夾ミ激戦ス、我レ地利ヲ失フ故ニ退キ、木葉ノ要地ニ壘
(玉東町)

ヲ築キ成ル、明日昧爽官兵来リ攻ム、我兵敗走シ田原坂

ヲ扼シ禦ク、三月二日官軍大挙シ攻ム、我隊捍キ昼夜連

闘ス句余、互ニ勝敗アリ、時ニ会ス別隊敗ル故ニ我隊

亦向坂ニ退ク、是ニ於テ短兵接戦ヲ議ス、衆憤躍格闘屢
(植木町)

敵ヲ苦マス、一日敵之中堅ヲ衝ク、敵魄褫レ氣沮ミ兵仗

ヲ棄テ人馬相踏ミ遁レ走ル、此戦ヤ大ニ勝利ヲ得器械ヲ

獲ル頗ル多シ、敵ノ死屍ヲ檢スルニ二百二十余名ニ及ヘ

リ、而テ又軋シテ八代方面ノ敵ニ備フ可キ之令アリ、即

チ進ミ三十町橋ニ軍シ防戦ス、然モ彈藥乏キヲ如何トモ

スル無ク、遂ニ敗レ川尻駅ニ退ク、利有ラス御舟ニ屯
(御船町)

ス、方ニ官軍来リ攻ム、防戦時ヲ移ス、復敗レ南田代ニ
(御船町)

退キ散卒ヲ収メ守ル、已ニ敵ノ巡查隊来リ攻ム酷タ急ナ

リ、我兵善ク戦フ、我又兵ヲ伏セ機ニ投シ短兵ヲ揮ヒ唎

喊敵軍ヲ挫ク、大ニ潰ヘ走ル、敵兵斃ル、者百三十余

名、我隊機ニ乗シ進ミ御舟ヲ取ル一日払曉大軍ヲ帥ヒ来

リ伐ツ、彈丸雨ノ如ク砲声天地ニ震フ、我隊大敗シ死傷

亦多シ、此時二当リ木山ノ守兵敗績シ全軍遂ニ矢部ニ退
(益城町)

キ、戦ヒ利アラス胡摩山ヲ越ヘ江代ニ退ク、夫レヨリ又
(球磨郡水上村)

再ヒ胡摩山ヲ扼ス、爰ニ日有リ、尾前方線敗績シ我運搬
(椎葉村)

ノ途已ニ絶塞セントスルヲ以テ奥ノ邑ニ退テ之レヲ守
 ル、而シテ本部ノ令ヲ受ケ急ニ三田井方面に赴キ七山(諸塚村)ニ
 至ル、是ニ於テ又遽ニ黒肥地(多良木町)ニ赴援ス可キノ報アリ、即
 チ之レニ馳ス、米良小川(西米良村)ニ抵ル、時ニ黒肥地ノ軍敗レ已
 ニ此ニ拠ルノ后チナリ、因テ議ヲ決シ兵ヲ分テ守備ヲ嚴
 ニス、我曹上米良ノ嶮岨ニ拠テ守ル、而シテ後チ佐土原
 隊ト代リ、人吉(多良木町)ノ上槻木ニ赴キ援ス、我軍已ニ敗走スル
 ニ会ス、我隊援ケ即チ之レヲ復ス、中隊長本田元端之レ
 ニ死ス、官軍ノ死スル者凡五十余名ニシテ我兵又振フ、
 而モ我彈藥尽ルヲ以テ追撃スル能ハス、即チ地藏嶺(多良木町)ノ嶮
 ヲ扼守ス、事三旬ニ及ヘリ、一日進軍官軍ノ壘ヲ攻メ官
 軍半線破レ、半線ハ地形太タ高クシテ遂ニ之レヲ抜ク事
 能ハス、或日官軍大霧ノ朝ニ乘シ来リ襲フ、我隊大ニ潰
 ヘ走り凡里許ニシテ止リ防ク、因テ對壘愛ニ久シ、時ニ
 飯野(えびの市)ノ戍兵敗走ノ報至ル、故ニ退キ日向ノ内山ニ屯シ、
 又進テ野尻ノ要地ヲ扼シ、銃戰三日殺傷相当我遂敗レ綾
 郷ニ退ク、時ニ我戰線ノ一方敗走ス、腹背皆敵兵トナ
 ル、我隊大ニ苦ミ漸ク遁レ、佐上原ニ出テ旧城ノ本道ヲ

守ル、官軍即チ米良山之戍兵ヲ敗リ進軍攻撃ス、我兵大
 ニ潰走殺傷亡數、美々川ニ退キ陣ス、是ニ於テ前非ヲ悔
 ヒ八月八日軍門ニ降ル、

明治十一年五月

鹿兒島見大隅国贈郡向花邑

六拾大區

小原武七

牧元助太郎上申書

鹿兒島県下第六十大區

大隅国四小区曾於郡

國分郷向花村六番地居住旧士族

當時懲役囚

牧元助太郎

私儀

明治十年四月十七日戸長役所ヨリ御用有之早速罷出候
 処、国難ニ付出張可致旨巡查ヨリ達シノ由戸長ヨリ被申
 付候ニ付、不得止十三名同列シ、同月十九日國分ヲ発足

シ吉田ニ到リ一泊シ、翌日飯野(えびの市)ニ一泊、廿一日熊本県
 下人吉ニ到リ本営ニ届申出候処、暫時可差控旨命ア
 ルニ依リ市中ニ休兵スル事三日、然ルニ吉田(吉田町)・加治木・
 清水(国分市)・敷根(全上)・國分合兵シテ九十四名十二之十番小隊トナ
 リ、私隊長トナリ、大野村(大野町)エ可繰出之令アリ、然ルニ無
 銃ニテハ心本ナク候故銃器請取度旨申出候処、大野ニ到
 レハ本営モ有之銃器モ有之由申サレ候、同廿四日大野ニ
 到リ届申出候処、此近辺ニ宿シ巡邏可致旨被申候、翌日
 才木村(吉北町)エ可差越令アリ、未明ニ発足才木村ニ至リ三日滯
 留致候処、九之八番隊ト合隊シ鵬翼四番中隊ト改称ス、
 其日私儀小隊長ヲ被免給養トナリ、其日ヨリ三日メニ戦
 争アリ、給養方ハ永澤村(吉北町)ニ宿ス、其ヨリ十日余リ滯在、
 大野・札幌敗レニ付才木村モ曳揚ケニ成リ、白石村(吉北町)ニ至
 リエビラセニテ一戦アリ、給養方ハ白石ニ宿ス、其夜毎
 床ヘ曳揚ケ滯陣スル事十日余リ、其内戦争アリ、然ル処
 人吉敗ニ付大畑(入吉市)エ曳揚ケ滯陣十日余リ、五月廿五日頃一
 戦アリ、苦戦ニテ飯野(えびの市)ニ曳揚ケ滯陣スル事廿日余、其
 内戦争二度アリ、給養方ハ上江村(えびの市)ニ宿陣シ、三度目ニ加

久藤本町方敗レニ付野尻(三ヶ野山、野尻町)三神山ニ曳揚ケ三日滯陣一戦ア
 リ、苦戦ニテ同所天ヶ谷(野尻町)ヘ曳揚ケ滯陣スル事十日余リ、
 一戦アリ、給養ハ今別府村(野尻町)ヘ宿ス、苦戦ニテ紙屋ニ曳揚
 ケ給養ハ高岡浦(高岡町)之名村ニ宿シ候処、其日三方ヨリ取囲マ
 レ猿川山(云川山、高岡町)ニ逃入、山中ヲ忍ンテ八月一日帰郷致シ、同シ
 八日警視所ヘ自首帰順セリ、

山内甚右衛門上申書

明治十年丑二月政府之内命ヲ蒙リ、中原尚雄其外二十余
 名致帰県、西郷隆盛等ヲ暗殺之一条露頭いたし候ニ付、
 政府エ尋問之為メ上京之筈候間、随行ニて出立之仕舞方
 仕候様、副区長越山休藏(六番大隊長)より相達候ニ付、同月十四日宿
 許発足仕、同廿日比肥後国川尻エ着キ、同廿日熊本城エ
 相掛戦争仕、同廿五六日比高瀬川ニて終日相戦ひ木之葉(玉東町)
 迄引揚相守リ居候処、廿八九日比官軍ヨリ進撃ニて戦争
 仕候処、外隊之方ヨリ相破れ、夫故田原坂迄各隊引揚、
 翌早朝ヨリ昼夜之戦争、其内幾日とも不取覚、第七番大
 隊(兄玉強之助隊)拾壹番小隊(山内孝左衛門小隊長)ヨリ応援ヲ乞ひ候ニ付、半隊引列差越相戦

ひ、官軍間近く進入ニ付一日ニ三度程切込、双方戦死・

手負多ク有之、銃器・彈藥等分捕、翌夕方我守り場エ罷
 歸り相戦申候処、三月十五六日比ニも候哉、本道守場之
 隊ヨリ相破れ、官軍ヨリ跡ヲ被取切、夫故各隊引退キ申
 候、同月御船両度之戦争、一度ハ小勢ニて被取囲、一度
 ハ各隊之中央ヨリ相破れ敗軍、同下旬比南田代^(御船町)相守居候
 処、官軍ヨリ進撃ニて相戦、我隊ヨリ横矢ヲ入追散シ銃
 器・彈藥等分捕、私隊初発ハ第七番大隊九番小隊^(本田元瑞小隊長)四月
 比正義八番中隊ト隊銘相変リ申候、六月中旬比上附木^{上榎木、多良本町}エ
 致進撃、官兵ヲ追散シ廿日余り相守居申候処、霧深キ朝
 官兵ヨリ不意ヲ被討、敗軍ニて引退キ、七月須木^(須木村)其外綾
 ・佐土原辺之戦争彈藥尽果、終ニ及敗軍ニ、延岡迄引退
 キ、七月中旬比中隊長被申付候、八月十日於延岡ニ降伏
 仕候間、此段申上候也、

明治十一年二月

旧土族 山内甚右衛門

鹿兒島県大隅国曾於郡第六大区
 五小区國分郷向花村住居

服部良之介・中村源藏連署上申書

私儀

^(加治木発連合大隊)
 第二大隊九番小隊分隊長トナリ、十年二月十四日鹿兒島
 県國分郷ヲ出發シ、同二十日熊本県川尻駅ニ着ス、即地
 形ヲ見廻リ諸所へ番兵ス、然ルニ其夜二時頃自分守口へ
 砲発スル者アリ、直ニ突出搜索スルニ半隊長山内甚右衛
 門引連レタル兵共一人ヲ生捕ル、時ニ残シ者ハ悉ク逃ケ
 去リ、二名ハ大川ニ溺死ス、此ニ針打銃二十二挺分捕ア
 リ、右生捕ハ本營ニ引渡シ糾問ニ及ヒ候処鎮台ノ伍長ニ
 テ川尻駅ニ放火セント二中隊押寄せケレトモ、遂ニ本意
 ヲ不達旨申出候由、

一十年二月廿一日本營ヨリ明日ハ未明ヨリ熊本城へ総軍
 可押寄ト指令アリ、翌廿二日午前二時頃ヨリ川尻駅ヲ
 発シ、自分隊ハ華岡山ヲ越へ城ノ裏手ニ出テ段山口へ
 狙撃ス、大隊長別府督介指揮ヲナシ、第二大隊九番小
 隊長本田元瑞・押伍中村源藏・服部權之丞・服部雄介
 等進テ段山ニ到リ^{此ニ服部、雄介重創}、半隊長山内甚右衛門并自
 分儀隊ヲ率テ川中或ハ畠ヲ楯ニシ相戦フ、此ニ伍長本

田省之助重創、兵士本田泰之介戦死ス、連戦スルコト三昼夜、然ルニ城ニ登リ式十間程之所へ近寄り攻入ント、大隊長別府指揮シ奪激シケレトモ、銃烈烈ク遂ニ攻入ルコト能ハス、始ヨリ味方ノ総軍該城ノ四方ヲ囲ト雖トモ、城内ニ駆込ム者少シ、時ニ交代ノ兵来リ代ツテ自分隊ハ二本木へ転陣休兵ス、

一 同月廿七日午后五時頃別府督介ヨリ高瀬之官軍ヲ可進

(玉名市)

撃スト指令アリ、即斥候ヲ出シ夜ヲ日ニ繼テ翌廿八日午后七時頃高瀬ニ着ス、味方ノ勢ハ五百余名地理不明ニシテ官軍ノ守ル所モ不相分本道ヲ進ミシニ、思モ寄ラス官軍高瀬川ノ堤ニ兵ヲ伏セ居、突然味方ノ軍ニ横撃ス、依テ二間余ノ深溝ニ飛込ミ川之堤ニ兵ヲ廻シ、互ニ川ヲ隔テ砲戦スルニ、川上ノ方ヨリ官軍橋ヲ渡リ横撃セントス、然ルニ味方ノ兵ヲ又川上ノ方へ五六町進セ終日戦フト雖トモ勝敗不決、此ニ味方死傷数十名、午后八時比互ニ兵ヲ曳揚ケ、自分隊ハ植木ニ到リ宿陣ス、

一 三月一日頃木ノ葉本道ヨリ三四町、左翼ニ台場ヲ築キ

(玉東町)

此ニ守兵ス、然ルニ同三日頃ナラン官軍襲来、未明ヨリ午后三時頃迄互ニ砲戦スルニ、本道ノ味方敗軍ノ様子ニ付斥候ヲ出シ実地ヲ見ルニ、味方ノ兵ハ引揚ケ敵地トナリ、故ニ自分隊モ田原ニ曳揚候、此ニ死傷二名アリ、

一 三月四日頃大隊長ノ指揮ヲ受ケ、田原本道ヨリ左翼三

町程ノ所へ要所有之、此ニ台場ヲ築キ守兵ス、時ニ官軍襲来、大砲・小銃ヲ発シ進撃スルコト甚タ烈シ、

此時山鹿口味方ノ勝利毎日報知有之、同廿九日モ田原ニ於テ終日銃戦、味方ヨリ官軍ヲ横撃シテ十六名ヲ斃ス、然ルニ自分隊安樂助ハ深手ヲ負フ、左翼ニハ吉次越へ、右翼ニハ山鹿口ニ至リ数十里味方ノ兵ヲ構

(玉東町)

へ、諸所ニ合戦最中、大砲・小銃ノ音山岳モ崩ル、カ如シ、翌日モ亦同所ニ於テ互ニ激戦、大小砲丸雨ノ如シ、一ツノ砲丸味方ノ台場ヲ貫キ、本田助次郎頭ヲ討レ即死ス、外ニ牧元小次郎・外山傳太郎戦死、其外自分隊死傷数十名アリ、敵味方龍虎ノ奮戦、死骸ヲ乗り越へ乗り越へ進ンテ戦ヒ、夜ハ台場枕ニシテ搜リノ銃

ヲ発シ、昼ハ未明ヨリ十九日ノ連戦砲声止時ナシ、足下ノ死骸モ顧ミス一步退カハ首ヲ刎ント大ニ奮激シ相戦フニ、左ノ方面五六町ヲ隔テ十一番小隊長山内孝左衛門構ヘタリ、今日苦戦ニ付自分隊ニ応援ヲ乞フ、九番半隊長山内甚右衛門・教導小原武二・押伍中村源藏・服部權之丞ヲ始メ左半隊ヲ以テ走セ向フ、実ニ以テ苦戦ナリ、味方ノ諸隊此日抜刀ヲ以テ三ケ度駆込ミ官軍ヲ斃スコト七拾余名ト聞ヘタリ、大隊長兒玉強之介手負、其代リ中島健彦大隊長ト成リ指揮ス、半隊長石塚順吉真先ニ進ミ奮戦シ深手ヲ負ヒ死ス、木場貞治深手ヲ負ヒ、而シテ数日激戦ナリシガ尚又十一番小隊ヨリ援兵ヲ乞フ、自分右半隊ヲ召シ連レ走セ向ヒシニ最早一ヶ所ノ台場ハ敵エ取ラレ、実ニ以テ苦戦ト打見ヘタリ、則チ兵ヲ左ノ方面ニ廻シ奮戦数刻ニ及ヒケル処ニ、味方ノ隊長ト打見ヘテ五人連レ来リ、今形ニテハ勝負不決、此隊ヨリ切込ミ敵ヲ追ヒ散ラサレヨト申サレケルニヨリ、自分答テ曰、先達テ一日二三ケ度切込ミ、拙者少モ臆スル儀ハ有ラネトモ、今日ノ儀ハ先日

ノ駆込ミニ敵其機ヲ察シ謀ヲ構ヘ、前ニ五百余名ヲ以テ戦ハセ、後ノ土台ニ千余ノ兵ヲ伏セ左ノ山ニモ千余名ノ伏兵有リト見ヘタリ、夫レニ駆込ミ候テハ味方却テ敗軍ト成リ、一隊敗スレハ夫ニ氣ヲ吞レ惣敗走ニ及ブモ難計、無謀ノ軍ハ拙者ハ不致、此方下知ニ及バス、面々ノ持場御下知可有之、拙者ガ見込ヲ以テ敗レハ致スマシト答ヘケレハ、人々申サレケルハ、伏兵有ルヲ不知トテ承伏有之、其事ヲ知ラサル若者共ハ早切込ント必死メケルヲ、伏兵有リ駆込ハ無用ナリト申ケル折節、左ノ方面三町程隔テ味方小高キ岡ニ陣ヲ取リシガ報知ニ来リ、今日切込ミハ無用ナリ、官軍伏兵幾重モ構ヘ、駆込ノ我ヲ取巻ント待居ル様子相見ヘタリトノ事ナリケレハ、諸隊ヘ右ノ形勢フレ廻シ、激戦時ヲ移シケルニ、漸々一ツノ台場ヲ乗リ返シ、其夜二時頃官軍其場ヲ曳揚ケシニヨリ、応援ハ是迄ナリト九番小工帰隊シケレハ戦争最中ナリ、又四方ヘ兵ヲ配リ奮戦ス、労カレ兵ハ小家ニ入り目ヲ休メントシケルニ、大砲・小銃家ヲツラヌキ、家内ニテ手負数度ニシ

テ七八名ニ及ヘリ、然ルニ左ノ方面七八町隔テ味方敗
 レ官軍植木ノ方ヘ進撃、味方銃打掛レトモアトヲモ不
 見シテ押シ行ナリト報知有リ、其儀ナラバ此方ヨリ官
 軍ノ後ロヲ取切り討ベキト走セ向ヒシニ、味方ハ曳
 揚ゲ敵後ロヨリ取巻タリ、サラハ爰ニ踏ミ止リ小勢ヲ
 以テ苦戦、無詮右之山間道ニ兵ヲ引廻シ、官軍之先ニ
 出テ防クベシト評議シテ、案内ハ不知鳥ノ巢^(西合志町)ヘ出テ拾
 余里ヲ廻リ、植木本道^(北都町)鹿ノ子木ト申所ノ此方エ夜半過
 頃着ス、此日無飯ニテ是ニテ兵糧ヲツカヒ、大隊長中
 島健彦方ヘ届申出候処、健彦曰、田原敗レ残念至極ニ
 候ヘトモ、向坂^(植木町)ト申処ヘ踏ミ止リ奮激シテ戦ヒシガ、
 味方左右ヨリ山谷ヲ伝ヒ官軍ノ後ロニ出テ、大ニ声ヲ
 発シ一度ニ切込ミ大勝利ヲ得、官軍ヲ二百拾余名ヲ斃
 ス、敵植木ニ兵ヲ曳テ合戦最中ナリ、先ツ暫時休兵致
 スヘシト指令御座候事、

一三月二十八日中島健彦曰、宇都口^(宇土市)ヘ応援之報知有リ向
 フベキト指令ニ依、夜ヲ日ニ繼テ宇都口本營ヘ届申出
 候処、又御舟^(御船町)ヘ応援スベキトノ事ナリ、彼ノ地ヘ差向

ヒ御舟口本營ヘ届出テ要地ヲ相守ル、四月十二日官軍
 味明ヨリ押シ寄奮戦ス、自分守場ヨリ三町余山ヲ下リ
 敵ヲ目之下ニ近寄、撃ントテ進ミ行ク処ニ、後ノ山上
 味方ノ陣ヨリ銃丸雨ノ如シ、爰ニ進ムハ先刻其元ヘ報
 知ノ通り官軍ノ横ヲ打ントテ進撃之味方ナリト大音ヲ
 揚レトモ弥増ニ銃打掛ケタリ、不思議ニ怪ミ斥候ヲ出
 シ見ルニ、最早後之山ハ敵ニ取ラレタリ、山ヲ伝ヒ本
 ノ台場ヘ兵ヲ曳揚ケ、午前六時頃ヨリ午後二時頃迄相
 戦フ処ニ、左ノ方面拾五六町ヲ隔テ竹ヶ迫ノ味方敗
 レ、官軍追撃スルヲ爰ニ踏留メ、二時間程奮戦致シケ
 ルニ、教導小原武二走セ来リ五六町右之方面ニ当リ我
 軍相敗レ、味方本道ヘ四五町モ曳揚タリト申スニ依リ
 木山^(益城町)ヘ曳揚申候、味方大ニ斃レ自分小隊手負三名御座
 候、

一四月十三日南田代^(御船町)ハ鹿兒島県通路要地ナリ、可相守旨
 桐野氏ヨリ指令アリ、三百余名差越、地形ニヨツテ陣
 ヲ取ルニ同十四日官軍押寄せタリ、味方散隊ニシテ自
 分隊ハ正面ニ進撃、午前十時頃ヨリ午后四時迄戦ヒケ

ルニ、伍長久木田助右衛門・中村半助ヲ始トシテ官軍ノ横ヲ進撃シテ十余名ヲ斃ス、是ニ依テ官軍敗走味方追撃、銃等分捕ス、味方手負六名ナリ、

一 四月十七日報知アリ、御舟ヲ味方ヨリ乗リカヘシ候ニ付、明日進撃ニ付テハ南田代口諸隊モ評議有之、又御舟口ヘ差向ヒシニ翌日未明官軍押寄せ、自分隊ハ後ノ山ヘ登リ相戦ヒケルニ、味方散々ニ敗走シ戦死・手負數知レス、又木山ヘ曳揚ケタリ、川尻口モ破レ二本木ノ大本營引揚ニ相成リ又田尾野村^(田小野 矢部町)ヘ引揚タリ、是ニテ自分隊第二大隊九番小隊ヲ正義八番小隊ト隊名ヲ替ヘ、振武・行進其外數十ノ隊名アリ、同廿五日田尾野村引揚、椎葉山^(椎葉村)之嶮路ヲ經テ護摩山ノ峠嶮地ヲ守ルコト數十日、此時豊後口ヨリ人吉口・鹿兒島・市成^(輝北町)・^(全上)百引其外八十里程ノ大合戦ナリ、護摩山ニ於テ新兵ヲ合シ正義八番中隊トナリ、中隊長本田元瑞、小隊長山内甚右衛門・町田幸造、半隊長服部良之介・川崎市二、分隊長小原武七等ニ申付ラル、

一同廿七日大隊長高城七之丞ヨリ米良口ヘ応援可致トノ

事ニテ、二十余里ノ嶮山ヲ經テ上米良^(西米良村)ヘ援兵ス、甚タ嶮地ニシテ二里余ノ山ヲ登リ、湯山峠^(球磨郡水上村)ノ要道ヲ百余名ニテ相守ル、官軍ノ斥候ト見ヘテ十三名来レリ、即兵ヲ伏セケルニ官軍飛足ニ退キケルヲ追討シケレトモ、^{ママ}墓々シキ事ナク案内一名ヲ生捕ル、

一 六月十一日米良口本營鮫島元ヨリ鹿兒島^(上槻木、多良木町)県上附木ヘ応援可致トノ儀ニテ八里余ノ嶮路ヲ越ヘ、午后五時頃上附木ニ着スルニ味方一人モ見ヘザルヲ怪ミ、里人ニ事ノ子細ヲ問フ、里人曰、官軍進撃スルニ味方小勢ニシテ敗走相成リ、故ニ官軍其山ニ有リト間近ク指教ヘケルニヨリ、又官軍ハ何程ノ兵ト問フ、千余兵ト答ヘタリ、自分百余名ニテハ日モ西山ニ傾キ勝利無覺東トテ早々引揚ケ、山ノ一小家ニ立寄、糧米モ無之、大雨ニ濡レテ其夜十時頃宿陣ス、翌日本堂ヘ形勢申出ケルニ、明日ハ地藏越^(多良木町槻木)ヘ取返スヘキト云フ、時ニ其夜斥候ヲ出スニ走セ帰リ、官軍ハ相見ヘサル段申出ル故ニ、伏セ兵有ラン用心シテ進ムヘシトテ、敗兵ヲ集メ肥後^(中津大四郎隊長)ノ龍口隊三十余名ト合シ昧明ヨリ進撃スルニ、官軍台

場ヲ構ヘテ固守ス、中隊長本田元瑞奮激シテ真先キニ進ム、外二本田清七郎ヲ始トシテ数十名早ク切込ント走セ入ル所ニ、右ノ元瑞銃丸ニ中リ即死ス、清七郎深手ヲ負フ、兩名ヲ曳揚クルニ又清七郎ニ銃丸中ツテ即死ス、即兵ヲ分チ右ニ廻シ官軍ノ横ヲ討ニ官軍少々退ク、又官軍不意ニ出テ味方之横ヲ討ツ、面ヲ向クヘキ様ナク兵ヲ左山之凹ナルヲ廻シ又官軍ノ横ニ出テ奮戦ス、遂ニ官軍敗走シケレトモ地形悪シク追撃スルコト不叶、左山之地形ニ拠リテ相戦ヒケルニ勝敗不決、時ニ此場ヲ四五町曳揚散々ニ敗走ノ跡ヲ見スベシ、然ラハ官軍謀ニ乗テ追来ルヘシ、其時向之山嶮地ニ兵ヲ伏セ一度ニ起ラハ勝利ヲ可得トテ曳揚タリ、案ノ如ク官兵追来ヲ伏兵一度ニ起リ進撃スレトモ官軍少モ驚カス相戦、却テ味方負色ニ見エケルニヨリ、押伍鎌田記左衛門ヲ始トシテ右之方小岡ニ兵ヲ分ケ官軍ノ横ヲ討チ、是ヲ一足引ハ首ヲ刎ヌベキト大音ニ走セ廻リ激戦スルニ、官軍大ニ斃レ敗走ス、味方勝ニ乘リ追撃シテ勝利ヲ得、地藏越ヘ・華堅〔花立、湯前町〕ヲ始トシテハツノ守口乘返

ス、午后六時比ナリ、此地ヲ相守ル、味方戦死六名、手負拾六名、官軍之戦死貳拾八名内三名ハ隊長ト相見ヘ候由、附木村之平民死骸ヲ引揚候旨申出候、

一此ノ上附木ニ於テ中村源藏本営ヨリ分隊長代理申付ラル、官軍高山ノ諸所ニ陣ヲ取レリ、味方ヨリ四五町隔タリ、地藏越ヘ其外八ヶ所ヘ味明ヨリ味方一度ニ進撃ス、花堅口ニハ岩切與平次、分隊長服部權之丞・中村源藏、押伍鎌田記左衛門、中隊長有馬勇介ヲ始トシテ百余名激戦数刻ニシテ官軍ノ台場壱ヶ所乘リ取りタリ、龍口隊モ是ニ奮戦シテ小隊長戦死、地藏越ハ花堅山ヨリ一里半程隔テタリ、此方面ニハ小隊長町田幸造・服部良之助、半隊長川崎市次・岩切甚太夫ヲ先トシ百余進撃、一隊ハ正面、二隊ハ左右ヘ分レ山ヲ登リ兩方ヨリ敵之横ヲ討ツ、豈ニ計ラン哉、官軍ノ台場四方〔圖アリ、後記ス〕ニシテ少モ斃ル色見エス、味方川崎市次外二名手負、戦死一人、其夜八時頃相曳ニ戦ヲ止ム、是ヲ守兵スルコト数十日、八ヶ度進撃ニ及ヒケレトモ勝負不決ル故、番兵等固ク致セシニ是地藏

越へ高山ニシテ、或夜天頻ニ雨フル、霧深フシテ人面モ見分ケザルニ乗シ、午前四時頃左ノ方面ヨリ官軍不意ニ押寄せタリ、味方防キ兼ね二十間余曳テ防キ戦フ、是ニ味方僅カ兵士二十二名ヲ中ニ包ミ、官軍三百余名ト見ヘテ左右ヨリ味方ノ横ヲ討ツ、半里余ヲ隔テタル味方ヘ応援ヲ乞ヒケレトモ彼所モ戦ヒ最中ニテ援兵不叶、午前十時頃迄戦ヒケルニ彈藥窮乏ス、去ラハ切込ヘシトテ地形ヲ見ルニ、岩山地形悪シク駆込ム事不叶、半里余曳揚ケ地形ニ依テ守兵ス、戦死手負一人モ無之、外ハケ所之味方モ曳揚ケ、死傷数名御座候、(楓木多良木町)一附木越ノ間ニモ当隊ノ内一分隊ヲ分遣ス、之ニハ分隊長代理中村源藏指揮官タリ、然ルニ当日ハ外隊持場ヘ官兵進撃ノ処、皆不利ニシテ曳揚ケ半里計リノ要所ニ守兵シ在ルニ付、其地ニ在ル一分隊モ速ニ曳揚ケ本隊ニ合併スベキ旨本隊ヨリ報知有ルニ付、直チニ曳揚ケ本隊ニ合ス、

一同七月十三日本營ヨリ指令者、須木郷内山へ曳揚高山(須木町)龍野越之嶮地ヲ守兵斥候無怠、四五日過テ、官軍夜中

山ヲ登リシヤ、未明不意ニ進撃、味方曳テ踏留リ四時間余戦ヒ味方敗セントスル処ニ、小隊長種田榮四郎正義七番右小隊ヲ引連レ、奮激シテ応援ス、一時間之内ニ又旧ノ守場ヲ抜ク、敵味方戦死多数、官軍小高き嶮地ニ構ヘ双方一足モ不曳、是ニテ三昼夜相戦フ、何ツ可果ツトモ見ヘサリシニ、左之方面ニ当リ二里余ヲ隔テ味方百余名ニテ守兵ノ処ニ官軍大勢押寄せ相戦フ、夫レニ陣ヲ並ヘテ四五町隔テ味方五拾余名ニテ守兵ス、豈計ンヤ、官軍不意ニ小林之方面ヨリ大勢ヲ以テ進撃、暫時相戦フ処ニ、味方之小勢ヲ取巻横撃ニ依リ味方敗走、七八町曳テ地形ニ依テ守兵ス、自分爰ニ応援、午後二時比官軍又進撃、自分曰、地形ヲ見ルニ敵必定左右ヨリ横撃スル坎、後ロヲ取切ンモ難計、其手配可致、種田榮四郎同意シテ兵ヲ分ントスル処ニ、何ツ之間ニカ廻リケン、官軍後之山ヨリモ進撃シテ味方敗走、式町余退テ構ヘタリ、官軍モ午后六時比曳揚ル、是内山ニ於テ自分小隊長申付ラレ候、其夜十二時比本營ノ指令ニ依リ綾郷へ曳揚タリ、官軍押寄せ四時間

余戦ヒ味方彈藥窮乏敗走半里程曳テ又敗走、佐土原ニ
曳揚大川畑ニ^(佐土原町)二台場ヲ築ク、官軍未明ヨリ進撃五時間程
戦ヒケルニ味方敗走ス、左翼之種田榮四郎奮戦シ踏留
リケレトモ、敵ニ取巻レ惣敗軍トナリ日州耳津ニ^(美々津、日向市)曳揚
申候、

一同八月七日耳津海辺川畑ヲ守兵ス、官軍進撃、敵味方
大砲・小銃ヲ以テ大川ヲ隔テ七日程連戦勝負不決、本
營ノ指令ニヨリ新町^(日向)ヘ差向フ、最早味方惣敗軍ト成リ
新町ヘ入ルコト不叶、官軍四方八面ヨリ押寄せ取巻ク
ニヨリ、敵ニ駆込ミ戦死セント云モ有、一方ヲ討破リ
味方ニ応セント云モ有、即チ一方ヲ討破ラント進ム処
ニ、官軍前後ヨリ進撃左右ヨリモ横撃如何トモスヘキ
様ナク、同列三拾余名四方之山ヘ散乱ス、是ニ於テ三
昼夜無飯ニテ、是彼所之山ニ隠レ窮苦仕居、誠ニ以テ
始終ヲ悔シ、山下村ト申処官軍ノ本營ヘ罷出、同八
月十四日帰順自首仕候、前後五拾六ヶ戦也、因テ前頭
ハ恐縮之至リ御座候ヘ共、戦場之形状唯一己之大略上
申仕候也、

但中村源藏儀モ同隊ニテ戦場之形状同様御座候間、
乍恐連名ヲ以テ上申仕候、

鹿兒島國分郷住

當時新潟県懲役囚



明治十一年二月

右同

中村源藏

服部良之介

林 一郎・服部喜壽連署上申書

私儀

^(加治木発進七番大隊見玉強之助隊長)
第二大隊六番小隊隊長トナリ、

十年二月十四日鹿兒島県

ヲ出発シ、同廿日熊本県川尻駅ニ着陣ス、同二十二日未

明ヨリ総軍当駅ヲ発シ熊本ヘ進軍、自分隊ハ華岡山ヲ越

シテ城ノ後面ニ出ル、齊シク進テ溝渠ニ配兵ス、時ニ総

軍該城ノ四方ヲ囲ミ互ニ奮戦銃丸雨注、此地城ヲ隔タル

コト僅ニ壹町、四面田地ニシテ彈藥、兵糧ノ運輸ニ困難

ス、然ルニ夜ニ乗シテ兵ヲ山下ニ曳揚ケ、位地ヲ定メ此

ニ守兵ス^{此二自分隊死、傷四名ナリ}、同二十四日本營ヨリ報知アリ、隊

ヲ率テ二本木ヘ転陣、午后六時頃春日口ニ到リ外隊ニ代

テ此ニ守兵ス、翌二十五日午前八時頃城内ノ官兵襲来砲戰暫時ニシテ官兵退ク、午后六時頃他ノ隊ニ譲リテ復二本木ニ転陣、翌二十六日本營ヨリ隊名ヲ替ヘ七番大隊ノ六番小隊トナリ、午后四時頃川内白濱(河内町)ノ沖ヘ軍艦漂泊ニ付、迅速彼地海岸防禦トシテ出張候様本營ノ指令アリ、直ニ発シテ白濱ニ着ス、当地防禦ノ日数十八日ヲ亘ル、三月十七日木留本營ヨリ報知アリ、隊ヲ率テ田原口(植木町)豐岡ニ到ル、二番大隊(村田新八隊長)ノ六番小隊ニ代テ自分小隊ヲ豐岡・富岡(植木町)ノ二ヶ所ニ分チ、此ニ昼夜守兵ス、同二十日ナラシ未明ヨリ雨頻ニ降ル、官軍雨ニ乗シテ大ニ寄せ来リ、互ニ激戦砲声烈ク遂ニ味方敗走ノ報知アリ、右翼ノ各隊(味取、植木町)挙テミトリ(地名ナリ)ニ曳揚ケ、当地ヲ発シ自分隊ハ鳥ノ巢ニ到リ、午后九時頃四方寄村ヘ着陣、同二十二日頃鳥ノ巢方面ヘ繰出シ台場数ヶ所ニ築キ此ニ守兵ス、同二十九日鹿ノ子木本營ヨリ報知アリ守場ハ外隊ヘ譲リ直ニ隊ヲ率テ右ノ本營ニ到ル、然ルニ熊本ヨリ植木通行ノ本道中間ノ大久保要所ニ付、佐土原ノ壱小隊并ニ七番大隊ノ九番小隊ト合シ後軍ニ備ヘ候様指揮ヲ受ケ、即兵ヲ発

シテ大久保ニ到リ台場ヲ築テ此ニ守ル、翌三十日木留方面ヨリ応援ヲ乞フ、半隊長一分隊ヲ率テ直ニ突出ス(此ニ自分隊、重創者名)、四月六日頃鳥ノ巢方面ノ味方敗軍致シ又応援ヲ乞フ、即自分半隊ヲ率テ鳥ノ巢ヘ到ル時ニ各隊一同奮激抜刀ニテ進モアリ、亦ハ銃ヲ発シテ進ム者モアリ、官軍敗走死骸夥シク追撃スルコト十余町、此ニ位地ヲ定テ二昼夜防戦ス(此ニ自分隊、負傷二名)、同八日頃復旧大久保ヘ半隊ヲ曳揚ケ休兵ス、翌日植木方面ヨリ又応援ノ報知アリ、自分一分隊ヲ率テ味方ノ戦地ニ到リ、此ニ昼夜連戦中同方面櫻原トカ云所ノ味方苦戦ニ付、後軍大久保ノ半隊ヲ速ニ繰出候様本營ノ報知アリ、然ルニ其場ノ分隊ハ押伍ニ譲リ直ニ大久保ニ到リ、半隊ヲ率テ櫻原ヘ突進ス、然ルニ味方ノ勢ヒ猖獗、官兵挫ケタルノ色アリ、故ニ俵数百ヲ以台場ヲ築キ固守連戦五日ヲ経タリ(此ニ味方、死傷九名)、同十五日頃川尻方面ノ味方敗北、官軍追撃スルノ報知アリ、木留・植木・鳥ノ巢其外各方面曳揚、自分隊木留・植木両所ヘ応援トシテ出張ノ二分隊モ大久保ニ於テ相纏メ、永峰ニ退テ上辛川村ヘ到リ、川ヲ前面ニシテ天神ノ瀬ト云川ノ

堤塘竹藪ノ中ニ隠シ台場ヲ築テ此ニ守兵ス、同十九日頃
 官軍ノ斥候ナラン十七八名正面ニ来リ、然ルニ左半隊ハ
 台場ニ伏セ置キ、右半隊ハ左翼ノ方二十間位モ隔テ横撃
 ノ為メ竹林ニ伏セ、自分ニハ左半隊ノ位地ニ到リ潜伏ノ
 処、既ニ天神ノ迄ヲ央ハ渡ル時ニ斉シク声ヲ発シ頻ニ銃
 ヲ放チ、壱名ハ川中ヘ斃レ二名ハ田地ニ斃ル、余ハ菜畑
 ニ逃入ル時ニ川ヲ渡リ、抜刀ニテ畑ヲ搜シテ壱名ヲ斃ス
 ニ悉ク逃去リ、此ニ針打銃四挺・彈藥五百発余・要具四
 ツ分捕ス、午后十一時頃御舟方面ノ味方大ニ敗走、既官
 軍^(益城町)木山辺迄襲来ノ報知アリ、翌二十日頃未明ヨリ総軍ヲ
 曳揚ケ、矢部ニ到リ馬見原^(蘇陽町)ニ出テ椎葉山ノ嶮嶮ヲ踏ミ、
 江代^(水上村)ニ出テ、湯之前村^(湯前町)ニ到リ此ニ休兵ス、時ニ中隊ノ編
 製アリ本營ノ指令ヲ受テ中隊長トナリ、五月十二日頃人
 吉本營ヨリ報知アリ、当地ヲ発シ人吉ニ到ル、然ルニ翌
 日午前五時頃ヨリ人吉ヲ発シ、^(矢部町)田小野村ニ到リ此ニ哨兵
 ス、翌日当地ノ各隊曳揚、鹿兒島県大口市^(大口市)郷小木原ヘ転
 陣、然ルニ官軍山野郷ヘ屯集ニ付、同十六日頃午前七時
 ヨリ味方ノ総軍一同進撃、自分隊ハ右翼ヨリ突出シ互ニ

銃ヲ発シテ戦フト雖トモ、官軍牢フシテ急ニ不能抜コ
 ト、時間ヲ移シテ遂ニ官軍敗走ス、因テ彈藥數函并ニ厚
 毛布・外套等分捕夥シク、追撃スルコト二里余、此ニ官
 兵ノ死骸多シ^{自分隊死傷、三名アリ}、翌日曉天ヨリ又進軍熊本県深川^(水俣市)
 へ到ル、時ニ官軍本道并左右ノ要所ニ拠リ固守ス、味方
 魁ノ隊ハ防戦最中ニテ苦戦ノ容タナリ、直ニ自分隊ハ左
 翼正義壱番中隊ノ戦地ニ到リ、然処官軍ノ銃丸烈シク不
 能支コトノ勢ヒナリ、故ニ行進一小隊并自分中隊ヲ率テ
 澗水ヲ涉リ、高二登リテ地形ヲ見ルニ、前面ハ巖石ニシ
 テ官兵襲フノ憂ナシ、背後ハ広野ニ松林アリ後ロヲ衝ク
 ノ憂甚多シ、行進隊々長ト位地ヲ定メ番兵ヲ張り、即兵
 ヲ進メテ官軍ノ右側ニ繞リ、突然横撃スルニ官軍頗ル紛
 擾ノ色アリ、時ニ午后五時頃ナラン、偶然背後ニ砲声烈
 シク聞ヘ、因テ隊長ト談テ曰、嚮ノ番兵誤テ味方ヲ討ツ
 ノ形容ナリ、五六名斉シク突進二十間位ノ地ニ到リ、其
 方ハ誤ツテ味方ニ銃ヲ放ツニ無之哉、手旗ヲ振リテ喚キ
 掛候、然処味方ナリト答テ速ニ十間程進ミ来リテ直ニ銃
 ヲ発ス、時ニ始テ官兵ノ様子ヲ知り、即松林ニ駆込ミ

隊ノ位地ニ到リ、形状ヲ告ケ方向ヲ替ヘ互ニ激戦此二分隊死傷十三名

アリ、遂ニ味方不利ニシテ散乱トナリ、退クニ巖石嶮

岨ニシテ樹木ヲ攀チ落ル者壹二間或ハ三間、壹名ノ死骸

曳揚カタシ、適勿首致ト雖トモ既ニ日没シテ黑夜ニ至

ル、殊ニ巖間ニシテ遂ニ刎首モ捨テ退ク、翌日午前六時

頃兵ヲ纏メ正義壹番隊ノ左翼ニ位地ヲ定メ守兵ス、午前

八時頃右小隊ハ隊長率テ深川本道ニ到リ此ニ守兵ス、翌

午前七時頃右翼山中ノ味方苦戦ニシテ応援ヲ乞フ、直ニ

分隊長一分隊ヲ率テ到ル此二分隊分隊長、濱田七太郎戦死、暫時ニシテ本

道ニモ亦官兵襲来、互ニ砲戦一時間モ過キテ官兵退ク

此二分隊、死傷六名、午后三時頃右応援ノ分隊曳揚本道ニ来リ、此

二三昼夜守兵ス、然ルニ当方面ヨリ人吉ニ通融スル久木

野村ノ脈道ヲ断テ官軍固守ス、時ニ五月廿三日頃ナラ

ン、速カニ彼地ヘ繰出シ候様本営ヨリ報知アリ、即隊ヲ

率テ久木野村ヘ到ル、是時味方ノ各隊モ追々繰込ミ翌日

午前七時頃ヨリ進撃、自分隊ハ左翼ヨリ進テ本道ニ到レ

ハ官軍要地数ヶ所ニ台場ヲ築キ固守ス、味方ノ総軍銃ヲ

発シ互ニ烈戦時刻ヲ移シテ勝敗決セス、午后六時頃ニ至

リ味方一同奮激突出シ、遂ニ官軍敗走、台場ヲ奪フテ味

方ノ軍ヲ構ヘ、銃器・彈藥分捕夥シ此二分隊、死傷十一名、時ニ自分

左小隊ハ本道ニ防戦ス、右小隊ハ山神ト云（大口市）聳ヘタル山徑

一筋アル頂キニ台場ヲ築キ此ニ守兵ス、同廿九日頃未明

ヨリ官兵突然声ヲ発シテ来襲フ、互ニ銃ヲ放ツテ戦フト

雖トモ遂ニ味方敗走、山ノ半腹ニ退ク此二分隊半隊長服部、喜之丞外ニ壹名戦死

然ル処午后五時頃味方ノ総軍旧地ヲ復セント烈シク戦

フ、官兵辟易シテ敗走ス、直ニ味方ノ総軍進テ旧地ニ到

リ防戦数日此二服部喜寿、半隊長トナリ、時ニ六月十三日頃ナラン、官軍

大ニ寄セ来リ勢ヒ烈ク遂ニ味方敗北此二分隊、死傷五名、各隊岩井

河内ニ曳揚ケ此ニ守兵ス、同十八日頃猪ノ嶽方面ノ味方

敗軍ニテ応援ノ報知アリ、半隊ヲ率テ大境ニ到レハ既ニ

官軍曳退テ味方ノ軍モ亦兵ヲ纏メ台場ヲ築クノ央ナリ、

自分隊ハ半隊長ニ譲リ岩井河内ノ本隊ニ帰ル、翌日午前

六時頃官軍復タ大境ニ襲来、味方不利ニシテ五町位退キ

タル報知アリ、然ルニ当地ノ各隊曳揚ケ、大境味方ノ戦

地ニ到リ攻撃スルコト甚急ナリ、官軍敗走ス、追撃スル

コト僅ニ七八町、時ニ官兵要地ニ拠リ固守ス、互ニ砲戦

稍々三時間遂ニ又味方敗走シテ山野郷(大口市)ニ退ク、自分隊ハ

右翼ノ山手ニ守兵ス、自分隊ハ右翼ノ山手ニ守兵ス、同

廿六日頃未明ヨリ自分隊ノ正面ニ官軍来襲フ、互ニ銃ヲ

発シ烈戦ノ処此二自分隊
負傷二名、末タ勝敗決セサルニ左翼ノ味方

敗軍ノ報知アリ、各隊曳揚ケ自分隊ハ本道ニ出ル、然ル

ニ官兵左翼ノ方川向ニ寄セ来リ、時ニ味方齊シク川ヲ涉

リ拔刀声ヲ発シテ駆込ミ、官兵二名ヲ斃シ追撃スルコト

十四五町、銃五挺・彈藥二千五百発余分捕アリ、時ニ其

場ハ外隊ヘ譲リ置キ大口郷ノ内西水流村ヘ到リ此ニ守兵

ス、是時七月一日ナラン、未明ヨリ官軍大ニ寄セ来リ互

ニ砲戦烈ク此二自分隊
死傷四名、然ルニ右翼ノ味方敗走ノ報知ア

リ、総軍退テ湯之尾郷ニ到リ、自分隊ハ段山ヘ位地ヲ定

メ台場ヲ築テ此ニ守兵ス、同六日頃本道ヘ繰出シ候様報

知アリ、是ノ地ハ他ノ隊ヘ譲リ直ニ隊ヲ率テ本道ニ到リ

守兵ス、翌日曾木郷方面ノ味方敗走、追々応援繰出シ戦

フト雖トモ遂ニ味方敗軍、湯之尾郷方面ノ各隊モ曳揚、

時ニ本道ノ正面ニモ亦官兵襲来、銃ヲ発スルコト頻ナリ

此二自分隊
死傷三名、然ルニ自分隊ハ漸ク曳揚、本城郷街道迄一里

位退テ守兵ス、午前九時頃又来リ襲フ、防戦スルコト一

昼夜、翌日未明ヨリ戦ヒ烈シク味方殆ント敗レント欲

ス、然ルニ声ヲ発シテ兵ヲ進メ激戦之処、正面ハ勿論左

右ノ山手ヨリ官兵横撃、銃丸雨ノ如シ、実ニ苦戦ナリ、

応援ヲ乞フト雖トモ応スル兵ナシ、午前十時頃ナラン右

翼ノ味方敗走シ、因テ総軍ヲ栗野郷小田村迄引揚タレト

モ官兵追撃シ遂ニ不能支コト、又横川郷迄退キ本道ニ砲

台ヲ築キ、銃隊ハ左右ノ山手ニ防戦ス、午后五時頃ニ至

リ又寄セ来リ、暫時ハ防戦スレトモ味方彈藥全ク尽キテ

止ヲ得ス踊郷芦谷村迄曳揚此ニ守兵ス此二自分隊
負傷九名、同十二

日頃加治木郷方面ノ味方敗走シテ國分郷ヘ退キ、新川ヲ

隔テ防戦ノ報知アリ、是ノ時当方面ノ各隊ヲ以横撃ノ賦

ニテ、午后六時頃本營ノ指揮アリ、一時隊ヲ離レテ襲山

郷松永村ヘ到ルニ、國分方面ノ味方既ニ數根郷迄退キタ

ル確証ヲ得タリ、因テ帰陣セント欲スルニ又本營ヨリモ

其報知アリ、翌十三日午前十時頃踊郷ヘ帰着ス、時ニ

國分郷辺ヘ屯在ノ官軍横撃スル憂アリ、当方面ノ各隊

(大窪、霧島町)大久保村ヘ曳揚ケノ央ニテ、即歩行ヲ替ヘ大久保ニ到リ

休兵ス、翌十四日頃未明ヨリ位地ヲ定テ守兵ス、午前七時頃官兵襲来、豊後坂ノ戦ヒ烈シク味方死傷多シ、午后一時頃味方敗走官軍追撃、正面ノ味方横撃セラレ総軍狷石へ退ク、同十六日頃莊内郷(都城市)高野村へ曳揚ケ此ニ守兵ス、翌日財部郷赤坂へ官軍寄せ来リ要地ニ拠ルノ報知アリ、自分中隊ヲ率テ大川原村へ転陣、熊本ノ五中隊ト此ニ守兵ス、翌十八日頃高野方面ノ味方各隊率テ当地ニ来リ進撃ニ及ヒ、自分隊ハ正面ノ本道ヨリ進テ互ニ砲戦耐ニシテ、午后一時頃ナラン自分一小隊ヲ率テ右翼ノ山手ニ進ミ、頻ニ銃ヲ放ツト雖トモ官兵要所ヨリ瞰撃スルコト甚シ、戦ヒ終日ニシテ勝敗決セス、遂ニ暗夜ニ乗シテ味方ノ総軍ヲ曳揚ケ、自分隊ハ旧地ヲ守ル、然ルニ同廿日頃官軍ノ斥候ナラン二十名位正面ニ来リ暫時応戦ノ処遂ニ官兵退ク此ニ自分隊、重創甚名、時ニ当地ハ地理宜シカラス、熊本隊ハ十三町位退ク、自分隊モ同シク桐原村へ退テ溪壑ヲ隔テ要害ノ地ニ守兵ス、午后二時頃官軍一中隊位正面ヨリ襲来防戦ノ央、右側ヨリ官兵三十名位来リ横撃ス、故ニ自分壱分隊ヲ問道ヨリ官兵ノ背後ニ廻シ突然横撃ス

ルニ、官兵敗走追撃スルコト僅ニ五町余、因テ正面ノ官軍モ亦悉ク退ク、同二十二日頃官軍財部郷(都城市)通山辺へ襲来ニ付、高野方面ノ味方莊内郷へ曳揚タル報知アリ、直ニ自分隊モ退テ莊内溝之口へ守兵ス、翌二十五日頃曉ヨリ官軍大ニ攻メ来リ暫時防戦スレトモ遂ニ右翼ノ味方敗走シ此ニ自分隊、戦死甚名、各隊曳揚ケ都之城ニ到ルニ、諸道ノ味方一円敗走不能支コト、山之口郷(清武町)ヲ經テ清武ニ退キ此ニ守兵ス、同二十八日ナラン午前八時頃官軍寄せ来リ防戦スルコト十時間、遂ニ彈藥尽テ本道ノ味方敗走ス、故ニ総軍宮崎ニ曳揚ケ川ヲ隔テ、守兵ス、八月一日頃高岡方面ノ味方敗北ノ報知アリ、然ルニ当地ノ各隊不戦シテ退ク、時ニ彈藥窮乏兵勢挫ケ走ルコト数里ニシテ佐土原ニ曳揚ケ、此ニ亦川ヲ隔テ、守兵ス、同五日頃官軍大ニ寄せ来リ、右翼ノ味方敗軍ニシテ総軍美々津ニ曳揚ケ、各隊位地ヲ定メ川ヲ隔テ、守兵ス、同八日頃ニ至リ山蔭村ト云所へ官軍襲来、互ニ激戦スルコト数時間、遂ニ味方敗走、官兵富高新町迄突出タル報知アリ、直ニ延岡旧城下(日向市)ニ趣カント宇毛村へ到ルニ、最早官兵繰込ミ居候ニ付、

山中ニ忍入り日暮テ夜ニ乗シ間道ヨリ切出ントスルニ、味方僅ニシテ縛セラル者アリ、或ハ切出タル者モアリ、時ニ官軍四方ヲ囲ミ地理不明ニシテ狼狽スルニ路ヲ迷ヒ、味方ノ軍ニ出ルコト不能ニ依リ山中ニ潜伏スルコト一週間、夜ニ忍テ人家ヲ尋ネ食ヲ乞コト再度ナリ、夫レヨリ延岡・高鍋・佐土原辺ノ村落又ハ山中ノ人家等へ潜宿スルコト数十日、遂ニ九月十九日國分郷警視分署へ出頭帰順ス、今茲ニ本年一月二十八日第四号、御達奉承知候、然ルニ曩ノ暴発其事情戦地ノ形状顛末等詳悉不仕故ニ願クハ彼は反对シ、文辞抵触スル所恕シ給ハンコトヲ、因テ概略上申仕候也、

但服部喜壽儀始ヨリ同隊ニテ戦地ノ次第相替儀無之、因テ連名ニテ上申仕候、

鹿兒島県國分郷住

當時新潟県懲役囚

服部喜壽

右同

明治十一年二月

林 一郎

岩切甚太夫上申書

(晋介)

私郷区長別府新助ニ候処、兼テ私学校エ入校之旨郷内エ毎度説諭有之、依テ自分儀ハ旧子十二月廿七日入校仕候

処、旧丑正月西郷隆盛尋問之筋有之、上京之由ニ付、私

学校之者共一統上京之儀ニ相成、旧正月二日七番大隊九

番小隊兵士エ編入仕、大隊長ハ別府新助、自分小隊長ハ

本田玄瑞ニて同日繰出、同月十日肥後熊本城エ午前九時

頃着候処、双方砲発最中、依テ自分隊モ砲発ニ及、同日

ハ打合而已シテ自分隊ハ同所二本木町エ引取、同所右城

番兵日数十五日仕、同月廿五日頃田原坂山手エ出張致シ

同所台場ヲ固メ、折々砲発而已致シ同所ニ一周間計罷在

候処、田原坂本道ニてハ昼夜ノ戦有之候得共、双方勝敗

ハ存不申、然処二月六日未明田原坂本道相破レ、依テ自

分隊ハ鳥ノ巢村エ引揚番兵罷在候処、同月十七日川尻応

援トシテ可能越ノ報知ニ付、同所エ罷越同所川筋番兵罷

在此番兵病院
為メ番兵也候処、川尻ヨリ二里計先ニ小川ト申所ニ戦争

有之候処、同所相破レ候ニ付、右病院俄ニ木山(益城町)と申処エ

引揚相成候処、同所ヨリ三里計先御船ト申処亦破レ、依

て正月廿七日夜中俄ニ右病院矢部と申処エ引揚ケ、自分隊ハ病院警衛隊ノ為メ其時々附添、同廿八日ヨリ自分隊矢部本道ヲ日数十六日計番兵ス、同三月十三日味方各隊一統人吉エ引揚ト相成候処、同所ニおひて自分隊正義隊名八番中隊ト隊号相成、中隊長本田玄瑞、小隊長町田幸藏、半隊長川崎一二ナリ、同月十七日ヨリ延岡之内（椎葉村）胡摩山エ右屯中隊罷越、日数四十日計番兵罷在候処、人吉破レ依て自分隊ハ薩摩国須木郷ト申処エ引取其郷拾里計有之也罷在候所、追々同郷エ官軍繰込ニ相成、六月十一日ヨリ十三日迄同郷之内字内山ト申処ニて敵數双方相戦、終ニ味方大敗軍ト相成、味方三中隊トモ散々相成、自分儀ハ夜中同国之内綏ト申処エ曳取候処、自分隊分隊長・押伍トモ何レエ行散リ候哉、小隊長并兵士拾九名ト相成、半隊長川崎一二手負、依て欠員之間自分エ右一二代リ小隊長ヨリ仮ニ申付候ニ付、暫時モ難相勤旨申候処、本營エ届出候迄相勤候様被申付、無是非六月十四日ヨリ同廿日迄相勤、美々津本營エ届申出候処、正義八番・九番合隊被申付、其節自分儀ハ元之兵士トナリ同所ニ番兵罷在候

処、同所又々相破レ候際、味方延岡本營ヨリ引揚之報知

有之候得共、何分官軍四方ヨリ取囲ミ、依て同所ニテ官軍エ降伏いたし、七月十五日帰宅仕、直ニ警視出張所ニ於テ帰順仕候付、外景況之儀一切存不申、此段申上候也、

鹿兒島県國分郷

明治十一年二月十五日

岩切甚太夫

山内孝左衛門上申書

私儀

私学校ハ王ヲ尊ヒ民ヲ憐ム之意ヲ研窮スル之趣意也ト承リ入校罷在申候処、作十年一月警視庁警部中原尚雄其他數名大警視川路利良之内命ヲ以テ、陸軍大將西郷隆盛ヲ暗殺セントスルノ密謀発覚イタシ、隆盛始陸軍少將桐野利秋・篠原國幹政府ヘ尋問之筋有之上京之段、其時県令大山綱良ヨリ公然布達モ有之、依之途中護衛ノ為メ私学校人員都テ随行致ベシトノ事ニテ、名義モ相立候儀ト心得其意ニ応シ、第七番大隊拾壹番小隊長申付ラレ、二月

十四日國分郷ヨリ四小隊一時ニ繰出シ加治木郷へ一泊、

翌十五日午前六時比同所へ二大隊相揃ヒ加治木郷一大隊・山田郷・帖佐郷・溝辺郷・國分郷四ヶ郷人員合シテ一大隊トナレリ

別府晉介此式大隊ヲ引率シ、大口筋ヲ通り二月十九日熊本県下小川駅へ着セシニ、熊本城下ニ

当リ火烟天ニ漲ル、其夜同駅へ一泊翌廿日川尻駅へ着シ

各隊番兵致居シニ我隊ハ、非番也外隊番兵先キヘ鎮台兵数十名押

寄せ彼ノ方ヨリ発砲イタシ、鎮台兵一名生捕モアリ、然

ルニ翌廿一日追々各隊当駅へ着セシニ弥実戦之決定相成

候段別府晉介ヨリ達アリテ、各袖印等相付ケ実戦ノ用意

ヲナシ、翌廿二日午前三時比各隊一同川尻ヲ発シ熊本城

へ進撃終日戦争、翌廿三日迎町へ引揚ケ諸隊番兵交代等

イタシ滞陣之處、廿八日比ニテモ候哉高瀬口ヨリ官軍襲

(玉名市)

来之報知有之出張可致トノ事ニテ、午後六時比新橋へ各

隊相揃ヒ進軍相成、翌日午前八時比高瀬へ着シ即チヨリ

終日戦争我隊死傷五六名アリ、暮時分戦ヒ相止ミ其夜難

(玉東町)

鳴ヨリ植木町へ引揚ケ、暫時休兵之處、翌日亦々木之葉

へ出張致スベシトテ直ニ彼之地へ移陣、各隊台場ヲ築キ

守リ居シニ早天官軍多勢押寄せ日不取算一戦ニ及シニ利ナク

シテ田原へ引揚ケ、翌日同所へ各隊守リヲ付ケ居ケル

ニ、三月七日比ニテモ候哉官軍襲来我持場終ニ相敗レ、

三町位隊ヲ引キ守リヲ定メテ戦ケル處、我隊已ニ危ク見

ヘシニ第七番大隊九番小隊半隊長山内甚右衛門ナル者半

隊ヲ率ヒテ応援ヲナシ、大隊長児玉強之介ニモ自ラ拔刀

指揮シテ一同切り入りシニ元ノ台場ヲ守リ返セシニ、再

ビ官軍進撃シ来レドモ前ノ如ク切り入りシニ銃器数十挺

分捕モアリテ無難持場堅固ナリ、此戦ヒ二大隊長児玉強

之介重傷官軍ノ死骸數名打捨アリ其後連日之戦争其内苦戦不少、我隊

半隊長石塚順吉・押伍秋山多郎重傷追テ病院ニテ死ス押伍野村壯

介戦死其他兵士數拾名死傷アリ、然ルニ三月十四日早天

外隊ノ台場相敗レ我隊モ官軍之裏切ヲ避ケンガ為メ四五

町位モ引退キ、守リヲ定メ双方発砲頻ナリケルニ、無程

喇叭相図ニテ諸隊一同刀ヲ振テ切入リ二町位モ突キ入り

シニ、右ノ肩ニ銃創ヲ受ケ重傷ニテ進ム事能ハス、直ニ

(益城町)

川尻病院へ送ラレ療養致居ルニ、四月一日比病院木山へ

(蘇陽町)

引揚相成十日余リ滞院、然ルニ亦々矢部、馬見原等へ引

揚ケ、私儀ハ重傷之事故日向路ヲ通り、四月廿六日帰宿

療養罷在候処、創口ハ癒ヘケレドモ右手之屈伸相叶ハス、故ニ本隊へ着歸隊難叶七月五日比宿元ヲ発シ財部ヨリ三俣^(三股町)へ出テ彈藥製作方へ入り滞留之処、都之城打敗レ夫レヨリ山之口ヲ通り宮崎へ出テ、追々敗軍ニテ延岡迄引揚ケ終ニ官軍ニ取囲マレ、是迄官軍ニ抵抗仕候儀ヲ始テ悔悟奉恐入降状仕候、然ル処宮崎警視出張所へ御差廻シ相成、八月廿三日自宅謹慎申付ラレ同月廿五日帰宿謹慎罷在申候処、九月廿四日國分警視分署ヨリ御呼出ニテ同日加治木郷へ御差廻シ相成、同所警視出張所并臨時裁判出張所ニ於イテ御取調之上、十月五日比長崎へ御廻送十月十二日九州臨時裁判所ニ於テ、除族之上懲役三年申付ラレ候事、

右之外可奉申上見聞之儀無御座候也、

鹿兒島県下第六大区五小区

拾番地國分郷向花村居住

士族山内惣兵衛長男

在石川県下越中富山懲役場

明治十一年二月

山内孝左衛門

荒田彦七上申書

明治十年旧二月十四日第七番大隊四番小隊兵士イ編入、^(三月廿八日)

同廿三日大口郷出發、同廿九日八代口へ進撃、奮戦格闘^(四月十二日)

六日ニ至ル、終ニ敗レ退キ、佐伯ニ於テ鵬翼六番中隊右^(才木カ、芦北町)

小隊分隊長トナリ、同所ニテ戦ヒ大ニ利ヲ得タリ、夫ヨリ求摩ノ内尻屋ニ番兵、^(椎屋カ、球磨村)

夫ヨリ宮崎敗戦ノ節帰郷仕候也、

鹿兒島県下襲山郷

第六十三区一小区

明治十一年第三月

荒田彦七

最勝寺精一郎上申書

明治十年二月十六日三番大隊三番小隊ニテ鹿兒島発足、^(永山弥一郎隊長)

同廿二日熊本県下へ着ス、旧二月十二日植木へ進軍奮戦

銃創ヲ被リ、川尻病院へ入り、旧三月五日帰県、同五月^(兒玉軍次中隊長)

廿四日本隊へ帰り、正義一番中隊半隊長トナリ、日州門

川敗戦ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下襲山郷

第六十三大区二小区十四番地

明治十一年第三月

最勝寺精一郎

負、都ノ城病院へ入り、同旧六月十八日帰郷仕候也、

鹿兒島県下清水郷

第六拾二大区一小区

最勝寺半次郎上申書

(二月十五日(村田新八隊長))

昨十年旧正月三日第二大隊九番小隊兵卒ニテ同日鹿兒島

発程、同九日熊本県下川尻町ニ着シ、同十日攻撃、同十

六日田原坂激戦、夫ヨリ城ヲ囲ミ守ル、同三月一日ニ至

(西無田、熊本市東部)

リ西牟田ニ於テ健闘銃創ヲ蒙リ、木山町病院へ入り、同

十日帰郷、五月廿四日帰隊、正義隊一番中隊右小隊半隊

長トナリ、延岡敗軍ノ際帰県、七月廿一日自首帰順仕候

也、

鹿兒島県下襲山郷

第六十三大区二小区五十七番地

明治十一年三月

最勝寺半次郎

明治十一年三月

萬膳正藏

稻元 靜上申書

私儀

(一行分脱)

(えびの市)

吉田郷巡查被申付候間、明日発足可致旨申聞、右吉田郷

(えびの市)

途中飯野郷ニ中山甚五兵衛ナル者罷在候間届出候様被申

(盛高)

(四月八日)

付、旧二月廿五日出立飯野郷エ罷越、右甚五兵衛エ届出

候処、肥後国熊本迄出兵致旨被申付、出兵之儀ハ難致段

(法)

申答候処、甚五兵衛申聞ニハ、国難ニ当リ断者ハ、軍方

(四月十日)

ニ処スル旨申聞候付、無是非旧二月廿七日出立、肥後国

(四月十七日)

矢部エ三月四日罷越候処、直ト人吉エ罷越旨被申付、同

(四月廿一日)

八日右人吉エ着候処、途中昆雜ニ及私(健)仮リニ左小隊長ト

ナリ振武十三番中隊エ編入、大隊長中嶋建彦・中隊長松

下助四郎ナリ、同十日比ニも候哉、俄ニ自分中隊薩摩エ

萬膳正藏上申書

(四月六日)

明治十年旧二月廿三日栗野郷ニ於テ振武十三番中隊右小

(柳北町)

隊半隊長トナリ、鹿兒島小野村番兵、百引郷ニ於テ手

出張被談則繰出シ、同月廿二日薩摩国小野エ着、翌廿三

(鹿児島市)

日鹿児島下荒田ト申所エ繰出候処官軍ヨリ進撃ト相成、

双方共一戦及候処、味方苦戦ト相成、依テ同国中迫村ト

申処エ引揚、旧五月十三日迄同所ニ番兵罷在、同十四日

(六月廿三日)

鹿児島敗軍ニ付振武隊ハ不残同国蒲生郷エ引揚ケ、翌十

五日加治木郷内山田村ト申処エ罷越、翌日同国ノ内百引

(輝北町)

郷ニ官軍隊滞陣罷在候ニ付、味方ヨリ午前八時比進撃致

シ候処味方大勝利、官軍則死多有之、此戦ハ四時間計ニ

テ、同日午後七時頃同所出立、同国上荘内郷迄罷越、旧

(郡城市)

六月十日頃迄滞陣罷在、六月十二日比同国高崎郷ニテ味

方ヨリ官軍エ進撃候処、味方苦戦則死等多有之、同十四

(財部)

日高部郷之内通山ニテ官軍ヨリ進撃ト相成候処、味方大

敗軍ト相成、依テ自分ハ帰宅仕國分出張署エ帰順仕候儀

ニテ、外戦地ノ景況一切存不申候也、

鹿児島県清水郷弟子丸村

明治十一年二月十五日

稻元 靜

木佐木平上申書

明治十年旧二月十六日大口郷ニ於テ第十大隊八番小隊半
隊長トナリ、同所廿三日発程、同廿九日八代口へ進撃、
即チ手負ニ付求摩人吉病院へ入り、同旧三月十四日帰郷
自首仕候也、

鹿児島県第六十二大区一小区

第十番地

明治十一年第三月

木佐木平

安田東一上申書

私儀

私学校へ入校不仕居候得共、昨十年三月廿一日戸長ヨリ

(えびの市)

吉田方限り巡查募リ申来候ニ付、飯野マデ差越中山甚五

(えびの市)

兵衛へ届出候様相達シ申候ニ付、同所へ差越右中山へ之

本營
詰也
届出候処、肥後地へ出軍可致ト相達、十三番遊軍分

隊長ノ場申付ラレ、肥後国矢部マデ差越候処、私学校人

員モ引揚之折ニテ同所ヨリ直ニ引返シ、求摩人吉へ引揚

ケ居タルニ、鹿児島へ繰出スベキ旨承知致シ鹿児島之内

小野村ト申所へ滞陣、振武十三番ト隊名改マリ陣ケ岡ヲ

守り居シニ、武之岡敗軍ニ及ヒシヨリ各隊引揚相成ル途
 中ニテ右小隊長心得申付ラレ、末吉郷マデ引揚ケ、夫レ
 ヨリ大崎或ハ高崎ヘ進軍シケレドモ兩度共敗軍、庄内郷
 (山田町)
 山田村ト申ス処ヘ引揚^{七月廿三日}通リ山街道ヲ守り居シニ、
 七月廿四日未明官軍進撃シ来リ午前九時比終ニ敗崩、我
 隊散乱シ官兵ニ四面ヲ取巻カレ、夜ニ入り山路ヲ越ヘテ
 帰宿、八月上旬國分警視分署ヘ自首帰順仕自宅謹慎申付
 ラレ、堅ク相守り居申候処、九月十四日同署ヨリ御呼出
 シ相成、加治木并鹿兒島警視出張処ヘ御差廻相成、十月
 五日比長崎ヘ御廻送ニテ、十月十二日九州臨時裁判所ニ
 オイテ、除族之上懲役二年申付ラレ候事、
 右之外申上ベキ見聞之儀無御座候也、

鹿兒島第六十二大区

(國分市)

清水郷居住士族安田貢長男

在石川県越中富山懲役場

明治十一年二月

安田東一

前原胤二上申書

(二月十七日) (池上四郎隊長)

明治十年旧正月五日五番大隊九番小隊ニテ鹿兒島県発
 程、同十日熊本県下ヘ着ス、翌十一日木之葉^(玉東町)ヘ進撃勝利
 ニテ其日黄昏ニ及植木迄引揚、同十三日山鹿ヘ進軍同所
 ヘ兩三日番兵致シ、同十六日同所ニ於テ戦争勝利ナリ、
 同十八日吉次峠并平田野村^(玉東町)ヘ番兵、夫ヨリ矢部諸所ヘ転
 陣シ、旧三月廿九日鹿兒島県下吉野村帶迫ヘ赴キ、旧四
 月十日ヨリ雀ヶ宮^(鹿兒島市吉野)ヘ番兵致シ、旧五月十二日同所ニ於テ
 戦争ス、大ニ勝利ヲ得続テ番兵イタシ居候処、翌十三日
 再同所ニ於テ進撃ノ央手負致シ、伊迫村病院ヘ五日位入
 室ノ上帰郷、旧六月中旬帰順仕候也、

鹿兒島縣敷根郷

第六十一番大区三小区拾三番地

明治十一年第五月

前原胤二

小寺鉄之助編

西南の役薩軍口供書

吉川弘文館 刊行

国分関係者 七名

服部権之丞

坂本勇之助

川村栄蔵

中村栄蔵

小川與平次

永野新助

万膳栄助

鹿児島県下国分郷(国分市)
士族

服部権之丞
四十五年

一自分儀、本年二月十六日西郷隆盛ノ逆意ニ與シ七大隊
(番) 九小隊押伍トナリ、熊本県下其他処々ニ於テ官兵ニ抗
敵シ、八月六日正義八番中隊右小隊ノ分隊長トナリ
又々官兵ニ抗敵シ、延岡ニ於テ兵卒ト偽リ帰順願出候
処、免罪被申渡、帰宅罷在候処、偽リ申立候段悔悟更
ニ自首仕候事。

右之通相違不申上候。以上

明治十年十月五日

服部権之丞

鹿児島県大隅国国府郷
向花村士族

坂本勇之助

三十五年七ヶ月

一自分義本年二月初旬、少警部中原尚雄等西郷隆盛等ヲ

暗殺セント謀リシニヨリ、右始末政府へ尋問ノ為メ隆盛上京ニ付、自分モ随行可致ト決心シ第七番大隊一小隊兵卒ニ編入、同月十五日加治木郷出発、同廿一日肥後国熊本ニ至リ籠城ノ官兵ヲ攻撃シ、爾来各地ニ転戦、同六月中延岡ニテ奇兵二十一番中隊ノ分隊長ニ挙ゲラレ、其後豊後口ニ出張シ切り込ミ谷ニテ抗戦拒守罷在候内、日向地ノ身方潰敗ノ報ヲ聞キ同所引揚ゲ、同八月十八日遂ニ永井村ニテ官軍ニ降状仕候事。

右之通相違不申上候。以上

明治十年十月八日

坂本勇之助

鹿児島県大隅国分郷
上小川村土族

川村金蔵
三十七年八月

一自分義西郷隆盛応援シテ出兵可致旨、本年四月十日同県警部谷川某ヨリ戸長所ニ於テ申付ラレ、兵卒夫卒百一名ト俱々仮二分隊長心得ニテ出立、同県飯野^{いの}（宮崎諸県）ニテ中山甚五兵衛（中山盛高）ヨリ分隊長申付ラ

レ人吉ニ到リ候処、大前^{（日州椎葉山尾前）}ニ出張スベキ旨本営ノ達ヲ受ケ立越シ、同所ニテ隊称号遊軍十五番ト相成、五月中大前ニ於テ部下ヲ率ヒ官軍ニ及抗敵、其節負傷シ帰郷ノ後七月中派出警部ニ自首仕、謹慎中呼出サレ鹿児島ニテ入檻シ、同所出張九州臨時裁判所ニテ御糾問ノ上、猶当所へ被差廻候事。

右之通相違不申上候。以上

明治十年十月十六日

川村金蔵

鹿児島県下大隅国嚙嚙郡
国分郷福島村
土族壮一郎長男

中村栄蔵
三十三年八月

一自分儀本年二月西郷隆盛等暴発ノ際、副区長越山休蔵^{（口供前出）}ヨリ御用ノ旨ヲ以テ役場ニ呼出サレ、西郷等ノ上京スルニ随行スベキ旨達シ受ケ第七大隊一番小隊半隊長申付ラレ、同十五日出発ノ末熊本開戦ノ折柄官兵ニ抗戦ニ及ビ、五六日間番兵中病氣相発シ一旦病院ニ入り、五月一二日帰宅養生ノ後、七月廿六日国分警

視分署へ帰順自首仕候事。

右之通相違不申上候。以上

明治十年十月十七日

中村 栄 蔵

鹿児島県大隅国豊山郷
重久村土族

伊左衛門長男

小川 與 兵 次

四十一年七ヶ月

一自分儀西郷隆盛肥後表開戦後、本県派出ノ巡查ヨリ出

兵申付ラレ、同郷士族四十名俱々各刀ヲ帶シ人吉ニ罷

越候処、同処ニテ遊軍十番隊八番小隊ノ分隊長心得申

付ラレ、即日大野口^{行程ハ里計リ}へ^(ママ)転^マ処相成、同処於テ本隊

ヲ廃シ鵬翼五番小隊ニ合併シ、自分ハ同隊ノ給養方ト

ナリ処々官軍ニ及抗敵、美々津敗走ノ後帰郷致居候

処、八月中鹿児島警視出張所ヨリ拘引ノ上入檻申付ラ

レ中、九月一日賊徒襲来ノ際解放サレ帰郷ノ上、始末

柄其筋へ届出候処、捕縛相成候事。

右之通相違不申上候。以上

明治十年十月九日

小川 與 平 次

鹿児島県大隅国曾根郡
清水郷弟子丸村(国分市)

土族新左衛門長男

永 野 新 助

三十年四ヶ月

(緑)

一自分義本年五月六日戸長若松縁ヨリ出兵スベキ旨申付

ラレ、横川本営ニ到リ五郷隊分隊長申付ラレ、桂四郎^(ママ)

(桂久武^{前出})等ノ本営ニ番兵ノミ相勤処々転陣、遂ニ日

州都ノ城ニ於テ味方敗走ノ節逃帰リ、八月十二日国分

警視分署へ自首仕候処、自宅謹慎被申付候事。

右之通違不申上候。以上

明治十年十月九日

永 野 新 助

鹿児島県大隅国曾根郡
清水郷弟子丸村
土族兵左衛門一男

万 膳 栄 助

三十六年二ヶ月

一自分義、本年四月八日戸長若松縁ノ申付ナル趣ヲ以テ

土族触役^{ふれやく}ヨリ、吉田表^(日州)へ巡查召募相成ルニ付罷出候様

申聞ラレ、吉田ヲ経、飯野ニ到リ候処、何ゾ料^{はか}ラン肥

後地ニ出兵スベキ旨中山甚五兵衛（中山盛高口供別掲）ナルモノヨ
リ申付ラレ、不得已遊軍十三番隊兵士トナリ、爾後処々
ニ出兵、後、分隊長トナリ官軍ニ抗戦ノ末日州荒神山敗
戦ノ節帰宅シ、八月十四日国分警視分署へ自首仕候処、
自宅謹慎被申付候事。

右之通相違不申上候。以上

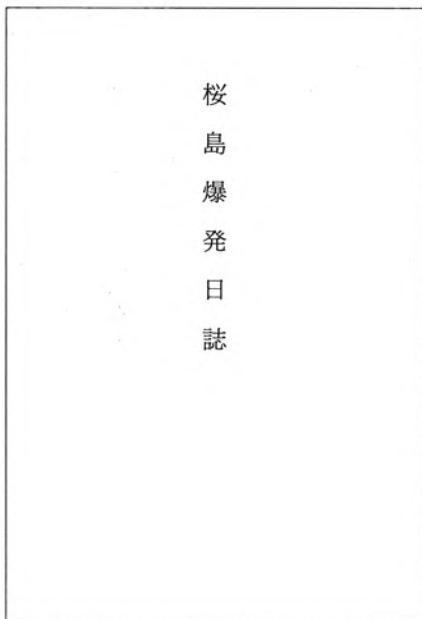
明治十年十月九日

万 膳 栄 助

十六 桜島爆発日誌

(表紙)

桜島爆発日誌



国分市中央三丁目 有馬ヨリ子氏所蔵

中の馬場に住んでいた同氏の祖父有馬栄十郎氏の手記で、大正三年一月十二日桜島爆発の当日より、同年三月四日迄の様子が克明に記されている。

桜島爆発日誌

一、大正三年甲寅一月十二日午前十時やま稍前、桜島爆破鳴動甚し、人民騒じようす。黒煙瞬時にして天を掩ひ西風の為漸次垂水、牛根、鹿屋、志布志、百引、都城方向にタナビキ忽ちにして天日暗し、地よる晨と家動き断続的鳴動止まず。

一、午後三時半頃、在鹿兒島高等女学校の二女等に危険の有無を問合はす。同時当警察署に至り鹿兒島市及桜島の景況を問ふ。

曰く、

(降九)

麿市海岸は隆石あり。県庁より市民に避難の令を伝へたり。桜島の爆破個処は三ヶ処よりす。鹿屋、志布志十数里に渉る桜島東方の地区は、降灰雪の如し、重富加治木、浜の市、其北方沿岸には桜島よりの避難民老若男女群をなし、惨として憐れむべきもの有と、

一、午後三時四十分頃には鳴動甚しく黒煙漸く天を掩ひ西風変して西南風と為り、四時三十分頃には東南風となり、降灰殊に甚しく、屋上地上皆白色を帯ぶ。

一、午後三時四十分頃、在慶二女等危険の為、校長の命に依り帰宅す。

一、午後六時頃に至り、鳴動爆破連続一層激烈の為家屋大に動揺す。

一、七時比、国分人民多くは屋外に起居するもの多く、荷物等の運搬者多し、之れ津浪と大地震の襲来を恐れてなり。

一、午後九時半頃、当地人民皆火を消し、屋内に居るもの少く、そうじよう恐怖甚しきを以て警察署に至り情報を確認む（途中降灰の為衣服皆雪の如くなり、目は灰（開）の為明けられず）

曰く、

鳴動は何時止むも測らざるも津浪の恐れはあらざるべし、との通知聞き出し。

慶市とは電話不通なり、ただ国分停車場と浜の市、福山方面都城方面のみ通信し得るのみ。

午後二時迄の桜島死傷者一〇四名皆収容し得たるも次後の情況更に不明なりと。

一、十時半頃鳴動又甚しく家も激戦に似たり。

一、四時すぎ、両親及家族は寝に就かしめ、予自ら不寝番す。（之れより先隠居両親及下婢等の危険を豫防して一処に起居せしむ）

一、十三日午前〇時、最も激甚なる鳴動を生ず。

実に天柱くだけ地軸折るとは此事ならんか。宛かも其音響刻一刻襲ひ来るが如く、ただ鳴動の響のみにて、宇宙何物をも鳴り能はず、家屋の左右前後の振動は甚しからざるも、戸障子ガラスの類ガタガタ響きつつ真に形容すべからず只だ左右前後の振動甚しからざる為吾人の住居安全を保ち不安の念を除く事を得るなり。村内各家皆火を消さしめ、消防夫は時々巡らし、辻々には提灯を点し不審番す。

一、午前〇時十五分稍々激甚を感じたるも鳴動依然たり
一、午前一時比迄は稍々激げしからざるも、鳴動止まず稀れに激しき音あり。

一、同一時すぎより漸次激げしくなる模様、此頃妻と交代にて寝につけり、此頃鳴動はげし。

一、同三時半比目醒めたるに激動中也。七時迄入寝。

一、七時半比、力ある激動数回起り、急激的連続の鳴動絶へず。

一、八時五十分より激甚となる。

十二日午前十時より午後三時比迄の間は時々天日を見る。之れ風のふきまわしに依り噴煙の或は西、或は東、其方向定まらざるによる。

午後漸く風の方向定らず、風なきが如く満天煙に掩はれ、夜に入るも一層甚しく。

十三日曉来満天灰の為に太陽を没し、宛かも雪中日光を見る能はさるの景況にさも似たり。越後地方の降雪に仍佛し屋上地上灰の為め寸餘雪白となる為に日光を見る能はさるも、白灰の為世間一带に明かるし。

十二日夜より十三日昼に涉り気温あたたかく無風なり。

一、同五時半頃より鳴動の丁子^{ちようし}是迄と異なり大凡そ三十秒位づつ間断的に鳴る。是迄の鳴動は間断なく連続的にゴ—とと打続きたるも、今は例へば約三十秒時間ゴ—と鳴り暫く止みて約三十秒とだへ、逐次この如く

す。甚響音一層激甚なり、此如きこと凡そ三、四十分間にして稍緩慢となり、又た音響も前如く激しからず。

本日午後四時頃鹿兒島保安課長国分警察署に來り曰く。

東京中央气象台より去る九日鹿兒島湾内に大爆破のある事を察し、博士三名今回の爆発以前に來歴、目下三博士は各方面に実施研究中也、博士の談に今回の鳴動爆破は中心よりのものにあらざる如く、単に表面部のみのものならんとの事や、と。

本日午前十一時警察署に至る□人民恐怖今に国分地方は暗黒となるべしとて、皆々老幼男女相携へ或は荷物を負ひ或は馬に負ひ、続々絡繹絶ゆるなり。

又、文次來り清水に避難しては如何と云へるも以て、先づ其暗黒云々は抛るべき報知しありしものか、又は単に人民恐怖の風評より生したるものなるやを確めんとて也。

來署中の者、市成国分村長、清水村々長、勝目女学校

長、西国分村長其他なりき 署長に確報ありしやをきくに、何等抛るべきものなしとのことに付、甚しくさわぐに及ばざるを以て、文次及其家族の避難は留止^{とど}めたり。

十三日中に来宅のものの清水有馬純盛、国分松下俊房、全伊地知重保其他なり。

十三日正午頃時々微弱なる雷鳴も加はりしが、午後六時四十分頃強き雷鳴及電光を見る。十二日夜は隠居の両親及下婢本宅に休みたるも、十三日夜は隠居に休み、妻及二女秀子を隠居に休ましめたり。

他は本宅に休む。

一、十三日午後八時二十分頃 鳴動響音は強からざるも雷鳴時々激げしく降灰し、降砂は変じて小石となり。瓦屋上の響きに依りて確知する事を得、即ち是れまでのパラ／＼が瓦ブキの屋根はカチ／＼と響き、砂及小石を混したるものを降せり。

小石は二、三十分間にて止みたるが如し、雷鳴も同断一、同午後九時比に至り鳴動の響音激しからざるも、戸

障子の振動は依然たり。鳴動の響きは遠く聞ゆるの感あり、乃ち激烈ならず。

一、同午後十時頃より雨と灰と混して降る鳴動の響き烈しからず。

一、同十時三十分頃よりは是迄稍々蒸したりし空氣も漸く乾燥清潔の氣味にて心持よし。

同四十五分頃は鳴動もなく、戸障子もさわがしからず予は比時より入寝す。この間遠く微弱なる鳴動と建物の振動あり。

一、同午前六時風向転換西風となれり、為に本朝天日を見、氣色快復す。満目荒れすさみ樹木生籬^{いけだま}皆積灰の雨に逢ひ、或は幣^{マタ}れ、或は折れ至る処の道路皆左右の樹木生籬等の為往来を防げられ何とも言われぬ有様なり。本朝に至る迄、灰と砂小石等の地上に積むもの五寸以上にして地層かくするに至。

一、同正午頃より鳴動又た激げしくなるも、本日は風向西より東へ向ひたる為め、桜島北方各村落は単に鳴動を聞くのみ、鳴動亦た微弱なり然れども風の為め樹上

屋上に積もれる灰を吹き落し、室外の往来意に任せず
当地人民の他に避難せるもの漸く帰宅する者多し。

予の一家及親類は避難せず、却つて皆と有りては仕合
なり。

一、午後一時頃より鳴動激烈を極むるも、当地方は左程
感ぜず、風下の垂水、牛根、鹿屋、志布志方向の各村
落は宛かも昨日における国分地方の如くなるべし。

一、当地方は各戸或は室内の掃除、家の周囲植木等の取
片^{かたづけ}をなすものあり。未だ避難せるものにして帰宅せさ
るものあり。

一、午後二時半頃には鳴動殆んど止みたり。四時十分頃
又微鳴あり。

一、午後七時十分頃に鳴動有り。止み天亦た晴朗、月は
将さに新城山の城頂に出てんとす気景爽快世間蕭とし
て声なし、別世界の如し。

予町内を巡視するに点燈の家稍少 蓋し避難者未だ帰
宅せざるものなるべし。

一、十五日西北風快晴

国分地方は西北風の為、砂煙の内に葬らるるを免る。
各戸家の内外、田畑麦作及菜園草樹等の積灰の打落し
にせわし、鳴動稍々穏かとなるも桜島以東の各村落は
黒煙中に葬られつつあり。

一、此夜国分附近より桜島を眺むれば、頂きの西（最初
の爆発口）方は大なる火口らしく絶へず噴出す。

東方には五ヶ所には五ヶ処に盛に火焰を出す。其壯觀
名状すべからず見物人非常に多し。

一、十六日西風快晴。

前日の如く各戸非常に多忙を極め、行人皆頭髮衣服に
灰を頂く。之れ樹木尾上より時に風の灰を吹き下すに
よる。

女等がいそがしそうなまくり髪
爰許^{こゝもと}かと埋まりし麦をほじり出

十五日より鹿児島新聞の号外配達せらる。

いままでは新聞も何も交通遮断有り。暗黒界なりき。

一、食もの野菜等何れも困難を極む。今後尚ほ一層甚し
からん。豈に野菜のみならんや。桜島を中心とせる十

数里の各村落は皆同一の悲境に陥り、穀物の欠乏今後
思いやらる。

一、十六日の夜月高く中天にあり。快晴寒気を覚え桜島
現れ全く鎮静の姿。

一、十七日午前三時比に至るも尚ほ 静かにして噴火の
模様なし。

同午前六時頃より又々鳴動を始む。然し乍^{ながら}激甚なら
ず。

一、同午前十一時半比より西南風となり、北部沿岸漸く
黒煙にとざされ、正午比には、国分附近又曇晴稍憂う
べき形勢となれり、鳴動連続的となる。

一、此日越後村松町知人田沢及び千葉習志の第十三聯隊
堅山光雄及大阪伊地知虎熊より見舞状来る。直に回礼
状出す。清水有馬喜兵衛見舞はる。

一、此夜尚連続的鳴動あるも、風向西南風の為国分附近
は凌き易し、敷根福山方面に吹き流せり。

十八日晴西風、鳴動止まず連続的にして稍激甚なり。

昨日上井フミ石一本二、五〇錢にて二本全済す。

マス石共五、五〇錢を可とす。

同日正午以後断続的鳴動あり。夕刻稍鎮静せしも、夜
中鳴動止まず。伊次郎見舞に来る。

十九日曇爆発噴火の煙にて塞^{ふさ}さる。鳴動止まず。

昨日石塚正治、坂本泰明より見舞状来る。

本日終日降灰。

二十日晴西風、昨日降灰のため本日は西風のため灰を吹
き散らす事甚し、鳴動稍鎮静、夜に入り殆んど鎮静
す。

夜間快晴星サン然。

二女等午後五時下り汽車より帰校す。

二十一日快晴無風、気色好し。

桜島噴火するも鳴動せず。

中村彌助より見舞状及新聞送来。

八代将校団長より一同を代表して見舞状到来。

二十二日曇、鳴動微にして地震あり。降灰多少、夜に至
り止まず。

○石工へ拾貳円を渡す。以前よりの十五円と累計して

式拾七円渡ずみとす。

○ 迫田山元次助薪ワリ、半日

是迄の二日半と併せ、三日分一円五十銭、アト一日分（五十銭）残り

一、午後八時比より鳴動奇異の調子となり噴火口拡大したるためか宛かも汽船のその如く聲疎大にしてドードー……ドウ……と連続しつつ爆発当時の如く激げしき大砲の発時する如き音はなくなれり。

二十三日（金）曇、鳴動は朝に至るも止まず。

其音昨夜と異りド——と一連の疎放なる鳴動となす。

但し遠く時々激げしくド——ンと鳴る事あり。

午前八時二十分比の景況なり。

二十四日（土）午前六時比大鳴動あり、後ち微動常の如し、風向辰巳よりす。降灰あり。午後二時、八代聯隊区指令官家永直太郎氏管内見舞より来宅す。

午後二時四十分大爆発す。是迄なき大鳴動は蓋し新噴火口破烈せしにあらさるか。

廿五日（日）曇後晴西風。

夜来鳴動止まず。午後六時比に至り鳴動止むも噴煙依然たり。

春山原山林視察のため午後より巡視す。樹木格別の損害なきも、桧及杉の苗木、稍降灰のため圧せられあり。

然し乍差したることなし。

鍋窪より上納米の由持参。

二十六日（月）快晴無風鳴動、午前十時比激しき爆音ありしも其後極めて静穏なり。

二十七日（火）東北風、後晴。

鳴動なし。

二十八日晴、水、寅、急激なる一発の鳴動あり。

二十九日快晴、木、卯、静かなり。

三十日快晴、金、辰、静かなり。

西山盛之助へ返事出す。

三十一日土、快晴、無風

二月一日（日）快晴、石垣全部すみ

午後九時半時分鳴動あり。

二日快晴。

三日快晴無風。

四日、午前五時半比より鳴動稍強く響けり。

午前十時比ツシーンと大なる響あり。朝来鳴動連続す。

又、朝来一天飛灰のため太陽を掩ふ。午後一時半比又々ツシーンと大爆音あり。此夜終夜鳴動甚しく安眠出来ず。暖気あり。

五日木、降灰のため太陽見へず。鳴動は朝に至るも尚止まず。

六日金、晴、鳴動鎮静、月明、午前三時比地震あり稍鳴動す。

七日土、曇、朝来稍々鳴動す。

土主会にて田畑の降灰を取除く事を決議し一般に村長より通知あり。

午前十二時比激烈なる爆発一聲あり。宛も大砲の如し。

午後降灰霧に似たり太陽を没す。

八日(日)夜来風あり雨。

九日月、寅、曇、風吹く。

十日、快晴鳴動なし。

十一日快晴、鎮静、学校にて式終て撃剣会。

十二日晴、夜間鳴動あり。

十三日快晴、朝来静肅、鳴動なし。

本田栄十郎誕生日祝、墓参。

十四日快晴、静肅なり、毎日継続的に噴煙はあり。

中村弥助へ書状出ス。二十二日以後に返事あるべし：

朱書。

比夜激しき鳴動ツドーン一発。

十五日曇降灰のためなり、夜来微鳴あり、午前十時半比強鳴一発ツドーン、終日鳴動激げし、午後六時半比より

降雨至る。

十六日晴、鳴動絶へず。

十七日晴、鳴動絶へず、降灰、午前四時比一発ツドーン。

十八日曇、降灰風あり、終日雨降る。

十九日曇、午後十時半激動ゾドーン。

二十日金雨、役場より勲記受領、直に請書を出す。

末吉種子田より来翰。

二十一日曇、微雨、鳴撃なし、壮丁検診あり注意をよぶ

夜午前二時と同四時にゾドーン

中村弥助より返事あり。

二十二日(日)曇微雨、夜間撃鳴連続す、午前四時頃大

鳴動一発あり。

二十三日(月)午後晴、夜種子田来宅す。

二十四日(火)晴、午後四時発、降灰。

ツル子病氣のために出魔。

二十五日(水)ツル子をつれて帰宅す。

舎監長及友達へ出翰、午後八時山内医師に受診。

二十六日(木)外泊願を診断書と共に送る。

二十七日(金)快晴。

二十八日(土)曇雨。

三月一日(日)曇雨、母出魔す、堅山及浜田生より来

翰。

祖母上北辰宮に参詣

二日曇雨、熊吉より入り分廿五円五十銭。

◎全済

三日火、晴。

◎拾五円下女へ渡す。

父へ取替十円也。

四日、迫田の畑降灰除去。

五日、井戸石掘上げ、終日人夫三名頼む。

六日、降灰除去全済、金、曇降灰あり夜雨。

タマ菜植付、此夜大雨且風あり。

七日(土)晴、迫田の甘藷掘上げ。

八日(日)